

転生したらバンビエツ
タだったんだが？

アマネ009

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それ以上でも、以下でもない。

※タグに「掲示板形式」とありますが、掲示板形式なのはサブタイが「転生バンビ版 BLEACHの掲示板」となっている物だけです。

※アニメ三期以降の内容次第では、「霊王宮への侵攻が始まったんだが？」以降の話の内容が変わる可能性があります。

目次

	ゾンビになんてなりたくないんだが？	2
	死神代行篇	
	気が付いたら一護の師匠になっていたんだが？	9
	何故か夜一と手合わせをすることになったんだが？	17
	何故か雨竜が訪ねて来たんだが？	
26	メノスグランデが現れたんだが？	
36		
	ルキアが尸魂界に連行されたんだが？	
	雨竜にも修行をつける事にしたんだが	48
	？	
	尸魂界篇	
	尸魂界へと突入するんだが？	65
	尸魂界へと突入したんだが？	74
	思わぬ相手と戦う事になったんだが？	
	再び隊長格と遭遇したんだが？	83
93		
103	【Side 雨竜】 雨竜 vs マユリ	

	正解を習得するための修行を開始した んだが？	115
	またもや隊長格と出会ってしまった んだが？	124
	【Side 一護】 一護 VS 白哉	134
	【Side 一護】 一護 VS 白哉②	144
	藍染との邂逅なんだが？	154
	ようやく現世に帰れるんだが？	162
幕間		
過去の一幕		171

	転生バンビ版 BLEACH の掲示板 破面・出現篇	179
	新たな日々の始まりなんだが？	193
	とある人物と戦う事になってしまっ たんだが？	203
	破面が襲来したんだが？	211
	再び破面が攻めて来たんだが？	219
	謎の破面まであらわれたんだが？	228
	【Side 一護】 一護 vs ホワイ ト	

総隊長からの呼び出しを受けたんだが

?

248

またもや謎の破面と戦う事になったん

だが？

257

幕間②

過去的一幕②

265

虚圏突入篇

虚圏へと突入するんだが？

272

ピカ口達から逃げる事になったんだが

？

280

それぞれの戦いが始まるんだが？

またもや謎の破面(二人目)が出て来た

んだが？

297

【Side一護】一護 vs グリム

ジョー

306

【Side一護】一護 vs グリム

ジョー②

314

【Side恋次&雨竜】恋次&雨竜 vs

sザエルアポロ

325

またもやヌルと戦う事になったのだが

？

335

ようやく一護と合流できたんだが？

ようやく尸魂界からの援軍が到着した

んだが？

351

剣八vsノイトラ&マユリvsザエル

アポロ

361

剣八vsノイトラ&マユリvsザエル

アポロ②

372

ヌルとの戦いは四度目なんだが？

384

【Side一護】一護vsウルキオラ

393

バンビエッタvsヌル&一護vsウル

キオラ

402

【Side一護】一護vsウルキオラ

②

412

幕間③

過去的一幕③

423

転生バンビ版BLEACHの掲示板②

431

転生バンビ版BLEACHの掲示板③

448

空座町決戦篇

空座町への侵攻が始まったんだが？

460

空座町への侵攻が始まったんだが？②

469

空座町への侵攻が始まったんだが？③

481

白哉&剣八vsヤミー&卯ノ花vsア

ルトウロ

492

ようやく現世へと戻ってこれたんだが

?

501

またもや東仙と戦う事になったんだが

?

510

そろそろ終わりが見えて来たんだが?

いよいよ藍染と戦うんだが? | 518

白哉&剣八vsヤミー&卯ノ花vsア | 526

ルトウロ②

534

最後の月牙天衝なんだが? | 544

幕間④

転生バンビ版BLEACHの掲示板④

554

転生バンビ版BLEACHの掲示板⑤

572

一護と恋次の再戦なんだが? | 588

千年血戦に向けて準備をするんだが? | 597

過去の一幕④ | 605

千年血戦篇

千年血戦が幕を明けるんだが? | 614

614

千年血戦が幕を明けたんだが? | 624

624

千年血戦が幕を明けたんだが？②

635

一時侵攻が終わったんだが？――

645

二次侵攻に向けて準備をするんだが？

654

第二次侵攻が始まるんだが？――

663

第二次侵攻が始まったんだが？

674

第二次侵攻が始まったんだが？②

685

霊王宮への侵攻が始まったんだが？

695

霊王宮への侵攻が始まったんだが？②

霊王宮が新世界城にされたんだが？

704

713

霊王宮が新世界城にされたんだが？②

722

霊王宮が新世界城にされたんだが？③

729

霊王宮が新世界城にされたんだが？④

737

霊王宮が新世界城にされたんだが？⑤

747

いよいよ最後の戦いが始まるんだが？

757

いよいよ最後の戦いが始まるんだが？

② | 766

いよいよ最後の戦いが始まるんだが？

③ | 775

いよいよ最後の戦いが始まるんだが？

④ | 784

最後の戦いが終わるんだが？

千年血戦の後なんだが？

Can't Fear Your Own

n World

大戦直後の話なんだが？

大戦直後の話なんだが？

大戦直後の話なんだが？

番外編

カカオソサエティなんだが？ | 840

カカオソサエティなんだが？ ②

848

カカオソサエティなんだが？ ③

855

カカオソサエティなんだが？ ④

863

カカオソサエティなんだが？ ⑤

871

カカオソサエティなんだが？ ⑥

879

831

823

813

ゾンビになんてなりたくないんだが？

彼女の名前はバンビエッタ・バスターバイン。いや、正確に言うところの肉体の名前がそうなのであって、彼女自身の名前は別にある。

しかしその本名は忘れて久しいし、別に気に留めるほどでもない。というよりも、思い出そうとしても記憶が霞のようにおぼろげで何も思い出せない。

前世で死んでバンビエッタに憑依したのか、それとも転生したのかは分からないが、とにかく今の彼女にとつては自分がバンビエッタであることだけが事実だった。

重要なのはこのままだとゾンビにされてしまう事である。今が原作のどの当たりなのかは分からないが、このまま何もしなければ千年血戦編の際に狛村左陣に敗北した後、ジジことジゼル・ジュエルによってゾンビにされてしまうのだ。

そこまで知っているのなら、今のうちに鍛えておいて逆に狛村を殺せばゾンビは回避できるのではないだろうか。

そう思った彼女ではあったが、そもそも彼女自身「見えざる帝国」の滅却師勢より、瀕霊廷の死神勢の方が推しが多いのである。

と言う事は、ここから何とかして逃げ出すの一択に限られる。

おなじ女性滅却師の「リルトット・ランパード、ミニーニヤ・マカロン、キャンディス・キヤットニップ、ジゼル・ジユエル（こいつは厳密には女性じゃないが）の4人を率いて「バンビーズ」と名乗っていた。

しかし、実際にはバンビエツタが勝手にリーダーを気取っていただけで、他の4人からは軽んじられている。つまり、此処から逃げ出すにあたって何の気兼ねも無いのであった。

原作を良く知っている者なら分かるだろうけど、この見えざる帝国は漚靈廷の影の中に靈子による空間なのだ。たとえ見えざる帝国の外に出たとしてもそこは漚靈廷。

そんな所からどうやって逃げるのかと言えば、それはすごく簡単な事で、見えざる帝国特有の影を使った移動術で逃げ出せばいいだけの事だった。

そして、結果を言うのならば、思いのほか上手くいった。

アズギアロ・イーバーンとか言う、千年血戦編で一護と一番最初に戦った破面アランカルの滅却師は、直接空座町に来ていたようなので、もしやと考えて向かってみたが、予想通りだった。

この「BLEACH」の主人公である黒崎一護の住む空座町は設定上虚の出現率が高く、任務で死神が空座町に訪れるというのは結構あるらしい。

なので予想が外れていた場合、その死神の影を使って空座町まで来るつもりだった。

さて、空座町に来たのは良いが、この後をどうするかを考えなければならぬだろう。一旦瀧靈廷に出ていけば、あるいは時間を確認できたのかもしれないが、直接空座町に来てしまったため、一先ずは時間の確認をするところからは始めなければならなかった。

それに、時間が分からない原因の一つとして、バンビエツタ自身の見た目が本編の物と変わらないのも、判断を鈍らせている要因の一つとなっている。

まず、一番最初に確認したのは「浦原商店」の有無だ。この商店があると言う事は少なくとも浦原喜助が現世に追放されているため、過去編より後になる。

次に確認したのが一護の存在だ。どうやら一護は既に生まれているようで、それに加え母親である真咲の存在も確認できた。

つまり、本編開始から九年前の聖アウスヴェーレン別の前なのだろう。

しかし、時間が分かったところで今後どうするかは未だに決めあぐねている。うかつに動いて変な事をすれば藍染に目を付けられかねないし、こっちは勝手に逃げ出して来た身なので、今後どうなるかも分からない。

ぱつと思ひ浮かんだ案としては、浦原喜助と手を結ぶことだけど、果たしてそんなに上手くいくのだろうか。しかし、このまま何もしないでどうにもならないので、一先ず行動に移してみる事にした。

「おや、お客さんっすか」

口ではそう言っているが、多分こちらが滅却師なのは霊圧から察しがついているだろう。でも、ここで下手に出るわけにはいかない。

なんせ、相手はあの浦原喜助なのだ。油断したらすぐに足元をすくわれてしまう。

「アンタに用事があつて来たのよ元十二番隊長、そして技術開発局創設者にして初代局長の浦原喜助さん」

今ので表情一つ変えないのは流石浦原喜助と言ったところだろう。どこの誰とも知れない奴がいきなり現れて、自分の名前や肩書を喋ったら普通は驚くはずだ。だが、一切動揺していない。

しかし表情は変えていないものの、バンビエッタを観察はしているようだ。

「……………用件はなんスか?」

「情報を色々とあげるから、その代わりに手を貸してちょうだい……………そうね、アタシの事は……………BB、一先ずBBって呼んで」

情報を餌にし、まるで釣りの様に浦原の興味を引いてみようとするが、浦原と言う男がそう簡単に尻尾を掴ませるような男でないのは良く知っている。だが、必要以上に喋ってボロを出すわけにはいかないのです、必要最低限の会話に留めておく。

それに、藍染に情報が渡らないとも限らない。バンビエッタ・バスターバインと名乗

らなかったのは、何処からどう言う風に見えざる帝国に情報が伝わってしまうか分からないからだ。

「一先ずここは滅却師である真咲と、石田雨竜の母親である片桐叶絵の力が失われるという事くらいなら伝えてもいいだろう。」

「一先ず……適当に服を用意してくれろ？」

本編で着ていた白い軍服の様なものじゃなくて普通の服ではあったが、それでも向こうの服はいつまでも着ている気にはなれなくて、用意してもらった服に着替えた。

ジーンズにパーカーと言うシンプルな服装になったが、これで少しは動きやすくなるだろう。

それからある程度の時間が経った。聖別が行われる日は1996年の6月17日だと明記されているため、一先ずその日になるまでは修行したり、あの手この手でこちらから情報を引き出そうとする浦原を適当にあしらったりしていた。

そして、いよいよその時が来たが、とある事が引つかかっていた。それは、バンビエツタ自身も聖別の対象になるのではないかという事だ。

(……なる様にしかならないと思うけど、果たしてどうなる事か)

本編だったら向こうに居るままなので何の問題もないだろうが、此処では逃走した身である。むしろ何も無いのがおかしい位だ。

あれこれ考えている間があるならばさつきと現場に向かってしまおうとしたが、件の現場が何処にあるのか分からない。

大きな川の川縁で起こったというのは分かるし、その川が何処を流れているのかは把握していた。しかし具体的にその川の何処で起きたのが分からなかった。

そして、何とかたどり着いた時には既に真咲は血まみれの状態で倒れていた。

この時には聖別は行われているのだろう、滅却師としての力を失ってしまった真咲はこのままグランドフィッシュャーに殺されてしまう、そう言うストーリーだ。

「アレ？もしかして何ともなつて……ない？」

どう言う訳か逃げ出した身であるはずの自分の力は失われていないようだ。

真咲の生死はここからでは確認できないが、アレではもう助からないだろう。本編ではこの後グランドフィッシュャーは消えたとなっていたが、どうにも消える様子はなく、今にも一護は襲われそうになっていた。

「流石にそれはマズいつての……!!」

聖文字なんて貰っていないので爆撃は当然使えるわけがなく、滅却師完聖体も

使えるわけが無い。

使えるのは動血装と静血装という二つの血装だけという、クソ雑魚状態である。

だが、それでも動血装の状態で指先から霊子を弾丸のように打ち出す、ガンド擬きで

も十分にグランドフィッシャーを吹っ飛ばす程度の事は出来た。吹っ飛ばしたグランドフィッシャーと一護の間に割って入ると、グランドフィッシャーはそのまま何処かへと消えてしまった。

動かなくなつた母親の傍で呆然とする一護を見て、バンビエツタは胸が締め付けられるような感覚に陥つた。

彼女自身はまだこの世界をただの物語としてみていたが、実際はそうじゃない。その世界は現実としてそこにあるし、皆ちゃんとここで生を受けて生きてきたのだ。

それを他人事の様を考え、物語上の都合として、たとえ間に合つたとしても見殺しにするつもりだった自分自身に、吐き気がしたのだった。

死神代行篇

気が付いたら一護の師匠になっていたんだが？

滅却師の伝承に封じられた王、つまりユーハバツハの事を謳ったものがある。確かそれは、900年を経て鼓動を取り戻し、90年を経て理知を取り戻し、9年を経て力を取り戻し、9日間を以て世界を取り戻す。そんな感じの内容だったはずだ。

ユーハバツハが死神に敗れ1000年前の1002年の事だ。鼓動を取り戻すのに900年と言う事は、ユーハバツハが目覚めたのは1902年、そして1992年に理知を取り戻し、それから9年後の2001年には力を取り戻していることになる。

本編では2004年の兵主部一兵衛との戦いの時によく力の9年が終わったよ
うなことを言っている。だが、それは正直まだどうでもいい事である。

ユーグラム・ハッシュユヴァルトとバズビーことバザード・ブラックの二人の過去の話
はいつの事なのか？恐らくだが、その回想に出て来るユーハバツハの顔からすると、1
000年前の話なのだろう。

一方で恐^{ザラッ}怖^{ユイ}の聖文字を授かったエス・ノトの回想に出て来るユーハバツハの顔は現
在の物と変わっていない。つまり1992年以降の聖別の話になるのだろう。

じゃあバンビエツタが聖文字を授かったのはいつなのか？逃げ出したのが1992年の聖別が行われる少し前だ。

その時点で授かっていなかったと言う事は、エス・ノトと同じ聖別が行われた後のだろう。少なくともここではそうなっているようだ。

それはさておき、時が流れるのはあつという間の事で、今現在は2002年となった。流石にクソ雑魚状態のままでは行かなかったので、様々な修行をしてきた。

死神や滅却師に限らず、霊力を持つ全ての魂魄は「鎖結」と「魄睡」という器官を備えている。魄睡が霊力の発生源で、鎖結がブースター、つまり霊力の出力を司る器官になっている。

それを直接鍛える事は出来ないのかと考え浦原に相談してみた結果、この二つの器官に負荷をかけるような器具が出来上がった。自ら実験につきあった甲斐もあってか、かかる負荷を調節できる中々良いものに仕上がったのではないだろうか。

そして次に霊子の性質変化だ。NARTOに出て来た五大性質変化を思い浮かべれば何をしているのか分かりやすいだろう。お陰で霊子を打ち込んだものが爆弾になるまではならずとも、着弾したら爆発するくらいにはすることが出来た。

もしかしたら、バズビーの灼熱サ・ヒートやキャンデイスの雷サ・サンダーと似たようなことも出来るようになるかもしれない。

もういくつか思いついたことはあるが、それらは未だに方法が確立していないので今は省いておこう。しかし、浦原から見ても面白い試みだと思つたのか、積極的に手伝つてくれているので、もうすぐ確立しそうではある。

そんな修行をして今現在何をしているのかと言うと、何故か一護に、自分も使うようにと前もって作つてもらつていた「勉強部屋」にて稽古をつけていた。

「そんな甘つちよろい血装でなにをしようつてのかしら、実戦だつたらとつくに死んでるわ」

「痛ッ……ちつとは手加減してくれてもいいんじやねえか」

動血装状態の拳で殴り飛ばされた一護、静血装を使つて防御はしているようだが、お世辞にも使いこなせてるとは言えないだろう。

そもそも何故こんな事になったかと言うと、それは9年前のあの日の事だ。グランドフィッシャーが姿を消した後、真咲の霊圧が消えた事に不安を覚えた一心が少ししてから駆け付けたのだ。

その時に伝えたことは、その場所で何が起こつたのか、それと自分が滅却師である事、流石に一護が今後どうなるかを言う訳にはいかなないので、将来虚に襲われる可能性があるというような事を、それとなく伝えておいた。

一心が浦原と面識がある事も分かつていたので、何かあつたら浦原商店を訪ねるよう

に言ったところ、なんやかんやで一護の稽古をすることになってしまったのだ。

しかし、そうは言っても一護に教えたのは今は血装だけだった。下手に色々な物を教えて死神になりませんでした、なんてことになっては困るからだ。

「さ、今日はもうお終いにするわ」

「いや、俺はまだやれるぜ」

「そういう事はもう少しくらい血装を上手く扱えるようになってから言いなさいよ」

何度も動血装状態の拳を受けたからか、一護はあちこち傷だらけになっていた。ポロポロになった一護を帰すと、そこへ浦原がやって来た。

いつも通りのニコニコ顔だが、その裏にある感情の機微を感じ取れる程度にはバンビエツタも付き合いがあった。

「予定通り……って感じっスか」

「何度も言ってるけど、予定にはなかったわよこんな事」

そもそも一護に稽古をつけるなんてことは全くなかった事だ。

それでもこうして稽古をつけている理由としては、一護の妹たちを守りたいという覚悟が大半ではあるが、なんやかんや浦原に言いくるめられてしまったのと、今この時点で滅却師の力を使えたら、将来どうなるのかという好奇心からというものもある。

「さて、ちょうどいい所に来てもらったところだし、アレの完成の為にも少し付き合っ

もらうわよ」

「またっスか……アタシの卍解はそう言うのに向いてないって何度も言ってるんですけどね」

そして更に時は進み、2002年の5月となった。日付は不明であるが、ルキアから一護へ死神の力が譲渡される時が来た。

しかしそれ以外にも一つ起こさなければならぬイベントがある。それが何かと言ううと、崩玉についてだ。

ルキアが一護に死神の力を譲渡した後に、浦原によって義骸を貸し与えられている。もしかしたらその義骸に崩玉が埋め込まれていた可能性がある。

だが、藍染の台詞「僕がその事を突き詰めた時、君は現世で行方不明になった後だった」と言う台詞と、詳しいタイミングは明記されていない事もあり、確定的な事は言えなかった。

それに加え、作者自身も秘密ですと言った後に、その秘密が明かされることも無かつたので、結局分からずじまいのままなのだ。

「さて……そろそろ時間ね」

現世に見知らぬ霊圧が一つ増えた所から、恐らくルキアが空座町に来たのだろう。前

までは霊圧の探知などからつきしでヤミー・リヤルゴ並みのレベルであったが、その時から比べると段違いに上達しているだろう。

死神の力を譲渡し終わったのか、一護の霊圧が垂れ流し状態となったようだ。その垂れ流しとなった霊圧を頼りに二人の下へとたどり着くと、二人は複数の虚に囲まれていた。

原作では一体しかいなかったはずなのに、見る限りでは虚は6体程いるようだ。しかし、てつきり一護の家で起こっている事かと思つたら、全く別の場所で起こっている事だった。

今回の出来事は完全に予想外だと言つていいだろう。一護一人であるならばあるいは6体全て倒せるかもしれないが、死神の力を失つたルキアを守りながら戦うとなつたら話は別だ。

「ねえ、アレつてもう出来てたわよね」

「ああアレっスか、まあ……出来てると言えば出来てますね」

そう言つて浦原から受け取つたのは、一本の刀だ。

バンビエツタが本編でも剣を振り回していたが、何故刀の形にしたのかと言うと、ただ単純に刀の方が好みだったからだ。

現状、この刀はタダの切れ味のいい刀でしかないが、今後これにもちよつとした機能

も追加するつもりでいる。

だが、目の前にいる虚達程度であるならば、このままでも何の問題もないだろう。

飛廉脚を使い、二人の周囲にいた虚達を一気に斬る。剣術のけの字もないような斬撃ではあつたが、たかが虚程度を斬るのには何の問題もなかった。

それと、滅却師故に尸魂界ソウル・ソサエティに送ることも出来ずに消滅させてしまうが、事態が事態故に大目に見て欲しいと考えていた。

「師匠……それに浦原さんまで、何でここに？」

「まあ用があるのは……」

ルキアの方に視線をやると、突然現れた二人組に何が何だか状況を把握できずに困惑しているようだった。

そんなルキアの様子を見て、浦原は説明を始める。

「そちらの死神さんはどうやらお困りのようっスねえ。義骸でもお貸ししましょうか？」

その後一護は家へと帰り、ルキアの方は浦原商店にて義骸を受け取る。こうして「BLEACH」の物語は本格的に始動を開始した。

自身という転生者の介入によって、物語の内容がどう変わってしまうのか、それは分からない。

だが、元の世界に戻れないのであれば、この世界で生き、戦っていく覚悟を改めて決めるのであった。

何故か夜一と手合わせをすることになったんだが？

バンビエッタとして転生して9年、転生する前の記憶がほとんど無く、バンビエッタとしての記憶の方が強い故か、話すときにはバンビエッタと同じような話し方になってしまう。

それどころか考え事をする時ですら無意識にバンビエッタの口調になっており、精神が肉体に引つ張られてるのを実感している。

それに、前世ではどうだったか忘れてしまったが、なんだか若干怒りっぽくなったような気もする。

自身が男か女だったのかも定かではなく、強いて覚えている事と言えば、何かしらの事故や病気で死んでしまったという事くらいだ。

しかし、そんな事よりも考えなければならぬ事があつた。それは、虚が何故複数体も現れたのかだ。

その理由を考えた結果、藍染のとある台詞が思い浮かんだ。一護に対して「君が生まれた時から君のことを知っている」とか言う気持ち悪い台詞を言っていたことから、恐らく一護が滅却師の能力の一部を使っていることは既に知られているかもしれない。

だとするならば一護の力を試すために虚を追加したのか、あるいは……

(あたしの力を見るために虚を追加したのか……)

後者であるのなら、あの時見せたのが飛廉脚を使ったただの斬撃だけなのは正解だろう。

必要以上に力を見せれば、それを危険視されて警戒をされてしまう可能性がある。特に藍染の場合は、何を考えているかよく分からない部分があるので、油断だけはしないようにしなければならない。

「それで、貴様達はいったい何者なのだ？」

浦原商店まで連れられ、治療を受けたルキアが先ほどから疑問に思っていたことを口にした。

いきなり目の前に知らない二人が現れて、助けられた事に関しては感謝しているが、状況が全く読めない状態なので、流石にルキアとしても聞きたいところであろう。

「死神さん等を相手に商売するってだけの、ただのしがない商人つすよ。そんな事より、さつきお貸しした義骸の話なんですが……」

浦原が言うには、死神としての力を全て失っている状態では普通の義骸では回復は見込めないとの事だった。

勿論ルキアはその言葉をうのみにはしなかったが、他に何か案があるのかと問われ

ば、そんなものは無いとしか言えないのが現状であった。

勿論それはタダではいかなかった。しかし浦原の提案を受ければ無料で貸し出すとの事だ。そして、その提案の内容は死神が請け負う「現世への駐在任務」と変わらな
いものであった。

「勿論うちのBBサンもサポートに入りますんで、それに……」

そう言った浦原の視線はもう一人の女性、バンビエッタの方に向けられていた。

まるで「その方が貴女にとつても都合が良いでしょう」とでも言わんばかりであると、
バンビエッタはその視線からそう感じ取っていた。

確かにバンビエッタは、ルキアや一護の傍についているのは都合がいいと考えていた
が、それと同時に藍染に自分の情報が渡ってしまう事も懸念していた。

それを逆手に取り、ありもしないような情報を流してやろうかとも考えたが、藍染は
そんな事に引つかかるような人物ではないので、あまり適当に動くことは出来ないだろ
う。

しかし、浦原なら上手くやるかもしれないと考え、此処は敢えて浦原の考えに乗る事
にした。

「……仕方ないわね、あたしも手伝うって言えばいいんでしょ？」

ふと、そこでまだルキアに自己紹介を済ませていない事を思い出た。

「あたしの事はBBって呼んで。ああ、先に言っておくけど私は滅却師よ」

「……滅却師？」

当然、ルキアはこの時点では滅却師の存在を知らない。

本編では石田雨竜が登場した際、ルキアは浦原に滅却師とは何なのかを聞きに行っていたが、その時は200年前に滅んだことと、滅却師が虚を殺す理由を「仲間の仇」と言うように話していた。

浦原が十二番隊の隊長になったのが1892年だったとすると、1000年前の戦争は知らない可能性はある。

だが20年前の「ホワイト」関連の出来事を考えると、滅却師の耐性には気付いている可能性もあった。しかし、浦原なら知っていても敢えて説明しないと言う事も十分に考えられるので、一概には言えないが。

一先ず、原作でも浦原が説明したのと同じような事を説明する。そして、一呼吸置き
……

「ま、実際は滅んでなんかいないけどね。空座町にもアタシ以外に二人滅却師が居るみたいだしね。それにそもそも滅却師が虚を殺す理由は、ただ単純に虚に対する耐性が全くないからよ」

そもそも人間や死神には、虚に対する抗体が魂魄の中に存在するため、虚化しても魂

魄を保つことができる。

だが滅却師の場合は虚化はおろか、虚の存在自体が魂魄を破壊して確実に死亡するため、世界の均衡が崩れることになっても殺さざるを得なかつたのだ。

他にも当たり障りのない範囲内で滅却師について説明すると……

「……そういう事っすか」

浦原がそう呟いた。おそらく今の説明を聞き、滅却師は何処かに隠れ潜んでおり、バンビエツタはそこから来たのだと推測したのだろう。

次の日、原作通りルキアは無事に空座第一高等学校1年への転入生となった。

どうやら浦原が色々と手を回していたようで、僅か一日足らずでスムーズに転入手続きを済ませてしまうとは、流石浦原と言ったところだろうか。

因みにバンビエツタの方も転入できるようにしようかと提案を受けていたが、それは丁重に断られていた。

そして今、そんなバンビエツタが何をしているのかと言うと、いつも通りの修行であつた。

石田雨竜が言っていた事であるが、霊子兵装は大気に遍在する霊気を自らの霊力でコーティングすることで具現化しているそうだ。

しかし、今やっていることはそんなことなどではなく。

ハイリツヒ・ボーゲン
神聖 弓の形を別の物に変

える事だった。矢を放つことが出来れば、必ずしも弓の形である必要はなく、原作でも銃やガトリングを使っている者も居たくらいだ。

一先ず銃の形にする事には成功したが、何故銃の形にしたのかと言われると、刀と銃を使つて戦うのはおしやれなものではないかと思つたからであつた。

「やつておるようじゃな」

突然背後から話しかけられたので振り返つてみると、そこにいたのは夜一だった。

原作の今この時点では、ジン太も雨も猫姿の夜一の姿すら見ていないようではあつたが、バンビエツタの存在がどう作用したのか、もう既に人の姿をさらしているのだった。

「なんか用なの？」

バンビエツタは、自分で聞いておいて嫌な予感しかしていなかつた。

夜一ともそこそこの付き合いになるので、彼女が一体何を企んでいるかも何となく想像はついていたからだ。

「うむ、もうそろそろ手合わせをしてもいいころかと思つての」

やはり想像していた通りの展開になりそうだった。

そもそも、夜一と初めて会つたのは数年前の事であり、その時からやたらと興味を持たれていたが、まさか何度も手合わせすることになるとは思つてもみなかつた。

そもそも夜一は滅茶苦茶強いので、その手合わせは今のところ全てバンビエツタの敗

北と言う結果で終わっている。

だが、当然前に手合わせした時よりも強くなっているし、そろそろ一回ぐらいは勝っておきたいと考え、手合わせを受ける事にした。

「じゃあいつも通り、このコインが地面に落下すると同時に開始して事でいいわね」バンビエツタがコインを弾き、そしてそれが地面に落下すると同時に夜一の姿が一瞬のうちに消え失せた。瞬歩である。

普通の相手であれば、この時点で勝敗は決してしまうだろう。しかし、バンビエツタもただ漫然と修行していた訳ではない。

(やっぱり、滅茶苦茶速い……!?)

強い衝撃を受け吹っ飛ばされる。そのまま地面へと叩きつけられそうになったが、何とか受け身を取ることができた。

近距離戦ではバンビエツタは不利なので、飛廉脚を使って何とか距離をとろうと試みるが、やはり夜一の瞬歩の方が上であった。少し距離を離れたと思っても次の瞬間には接近されているのだ。

何時でも遠距離攻撃を仕掛けられるように神聖弓(銃)は出している状態であるが、夜一は上手く射線に入らぬように移動しながら、高速で接近してくるので、矢を放つタイミングは全くないような状態だった。

だが、前回よりは大分夜一の速度についていけているようではあった。それに、少しずつではあるが、飛廉脚の精度も上がってきている。

そしてこちらも少しづつではあるが、夜一の速度に慣れてきたため、一か八かカウンターを狙ってみる事にした。

刀に大気中の霊気と自らの霊力を流し込み、次に夜一が来るであろう場所を予測して刀を振った。

「おっと」

当然夜一にそのカウンターが当たる事はなかったが、思いがけずに飛んで行った霊力の斬撃が巨大な岩に着弾すると、大爆発を起こしてその巨大な岩を消し飛ばした。

意図せず月牙天衝に似た技を出してしまったが、これはこれで精度を上げれば必殺技として使えるのではないかとバンビエツタは考えた。

「今のが直撃していたら、いくら儂でも危なかったのう」

そう言いながら夜一がバンビエツタの前に姿を現す。どうやら完全に避けられたわけではなかったようで、夜一の服の一部が切れており、そこから血が流れていた。

だが、夜一はそんな事など気にしていないかのように、笑みを浮かべてバンビエツタを見つめてくる。

「ふむ、どうやらおぬしも成長しているようじゃな」

「ま、これくらいはできるようになっておかないとね」

「そうか、ならばもう少し本気を出しても大丈夫そうじゃの」

「はあ?! 流石にこれ以上は勘弁なんですけど!!」

夜一の言葉に、バンビエッタは全力で拒否する。しかし、夜一はそんな事を聞いてくれるはずもなく、バンビエッタに向かって再び攻撃を仕掛けてきた。

結局その後、バンビエッタはまた夜一に敗北してしまい、手合わせは終了となった。

何故か雨竜が訪ねて来たんだが？

空座町に来てからそこその時間が経った。

偶に見えざる帝国で過ごしていた時の記憶を夢に見るが、よく見るのはバンビーズとの事だ。かなり前からつるんでいて、共に行動することが多かったが、今思えば結構ぞんざいに扱われていたと思う。

食べ物基本的にはリルトットに持っていかれてるし、その上ナチュラルに暴言を吐いて来る。キャンデイスも同じくらい口が悪く、ジゼルは物凄くアレだった。しかしミニーニヤだけは他の者と比べると比較的真面だったかもしれない。

それはさて置きドン・観音寺の話がついこの前起こったので、もうそろそろ雨竜が動き出す頃合いだと思ふ。

いつも通りバンビエツタは勉強部屋に籠っていると、浦原がやってきた。

「BBさん、ちよつといっすか？」

そう言った浦原の手にはブレスレットの様なものが握られていた。

浦原が作った物のテストは基本的にバンビエツタが行っており、今回も例にもれずバンビエツタはブレスレットを受け取ると、早速腕に装着した。

「これは何なのよ」

「それはまあ……後のお楽しみって事で」

浦原は意味ありげに笑うだけで答えようとせず、それどころかそのまま部屋を出て行ってしまった。

しかし浦原が無意味な物を作る訳がなかったのも、一先ずそのままつけておくことにし、再び修行をすることにした。

そしてその日の夜、一護とルキアは虚を退治するため、伝令神機を手にとある場所へ向かっていた。

「結局！何処にも虚はいなかったじゃねえか！昼間も！そして今度も！」

「うるさい！さっさと体に戻れ！」

「そもそも途中で反応が消えてんだ！どっか故障してんじやねえのか!？」

伝令神機に入った指令書に従ってその場所へ向かったが、結局虚を見つけることは出来ず、ただただ時間を無駄にしただけだった。

一護は伝令神機の故障を疑っているようだったが、ルキアは「そんなハズがなからう！」と反論する。

「仲間割れかい？みつともないな」

突然背後から声をかけられ、二人は同時に振り返る。そこには眼鏡を掛けた男が立っていた。

その男は、石田雨竜。滅却師であり、黒崎一護のクラスメイトでもある。

「こんばんは。黒崎君、朽木さん」

「……誰だお前、変な格好してんな、神父か？」

「君は霊が見えるんだよね？」

「な……何言ってるんだ!?! そんなもん見えるわけが……」

一護は目の前の男の発言を咄嗟に否定しようとしたが、途中で言葉を止めてしまう。

なぜなら、一護は虚の出現を感じたからだ。場所はここからそれほど離れていない場所だったため、直ぐに駆けつけることができる。

「虚が来た……」

「虚が来たみてえだぞー!」

一護と同様に、雨竜も虚の出現を察知していたようで、一護の一言を聞くと、すぐにその場から走り出した。

そしてそれから僅かに遅れるようにして伝令神機が鳴り響く。

「ほ………本当に来た! 指令だ!!」

「……少しはやるようだね、でも」

雨竜は霊子兵装の弓を出現させると、それに矢をつがえることなく引き絞った。弓に霊子が収束していくと同時に、霊圧が上昇していく。

瞬間、矢が放たれた。その矢は一直線に飛んでいき虚へと突き刺さる。

「反応が消えた……消えた……!」

「な……まさかお前も滅却師なのか!」

一護はその男に向かって叫んだ。するとその男は少しだけ驚いたような顔をする。

雨竜は、まさか一護が滅却師の存在を知っているとは思わなかったのだ。

「へえ……滅却師の事を知っているとはね。僕は石田雨竜、君の言う通り滅却師さ」

そう言つて眼鏡を押し上げ、不敵に笑つた。一護は雨竜と名乗るその男をじつと見つめた。

一護の視線に気づいたのか、雨竜は表情を一変させ、鋭い目つきで一護を睨む。

「お前も滅却師なら、師匠の……BB、本名は知らねえんだけどよ……」

「待て、今なんて言つた……滅却師の師匠だと……?」

一護の発した“師匠”という言葉を聞き、今まで冷静だった雨竜の雰囲気が大きく変わった。

そして、雨竜には一護の言っている事が理解できなかつた。滅却師は死神によつて滅ぼされている、その理由は滅却師が虚を完全に消滅させてしまい、世界のバランスが崩

れるからだ。

よしんば自分以外に生き残りが居たとしても、その滅却師は死神に強い恨みを持つているはずでは？と考えたからだ。

「……そのBBって人の所に案内してくれないか、会ってみたい」

雨竜は一護の師匠であるというBBという滅却師が、一体何を考えているのか話を聞かなければならないと思った。

そして次の日、雨竜は一護の案内で浦原商店にやってきていた。店の中に入ると、浦原がいつも通りの笑顔を浮かべながら出て来た。

一護は「相変わらず胡散臭いな」と、内心思っていたが、雨竜に早く用件を言うように促した。

「おや、黒崎さんに朽木さんじゃないっすか、そちらの方は？」

「僕は石田雨竜、ここに居るBBと名乗る滅却師に用があつてきた」

「……なるほど、少々お待ちください」

浦原はそういうと奥に入っていった。暫く待っていると、バンビエツタが奥から出てきた。

バンビエツタは、まさか一護が雨竜を連れて来るとは思っておらず、少しばかり驚い

ていた。

「あたしがBBだけど……一体何の用なの？」

「貴方が何故死神の……黒崎君の師匠なんかをしているのか聞きたい」

するとバンビエツタは、溜息をつくとも面倒くさそうな表情をした。

何とも面倒な事をしてくれたものだと思つたが、起きてしまった事はしょうがないと諦め、とりあえず店の中に入るよう二人を促した。

「……まあいいわ、付いて来なさい」

そう言つて店の奥へと歩いていく。その後ろを二人はついていった。

二人が連れられた場所は、バンビエツタが修行の場として使っているいつもの部屋だった。一護も何度か此処で修行をしたことがあるので、この場所についてはよく知っている。

部屋というよりは、もはや荒れた庭のような場所と言つたほうがしっくりくるだろう。

「それで、確か何故死神の師匠をしてるかだったわよね」

バンビエツタはそれに対して何と答えるべきか迷つた。浦原に言いくるめられたのもあるが、大半が自分の好奇心からだ。

特に大した理由も無いし、何か大きな目的があるわけでもない。

「……別に大した理由はないわね」

「大した理由が……無い？」

当然それでは雨竜は納得しないだろう。

石田宗弦、雨竜の祖父であり師匠でもある滅却師は、雨竜に人を憎んだり、人を嫌ったりだとか言う類の事を一切教えていないし、雨竜も200年前の滅亡の話は只の昔話でしかないと言っている。

しかし、目の前で祖父が虚との戦いで死んだ時、死神が来たのは祖父が死んでから一時間も後だったという。それ故雨竜は死神に滅却師の力を証明しなければならないと考えていた。

そしてバンビエツタは、雨竜が自分に話を聞きに来た理由は、そこにあるのではないかと考えていた。

「……まあいいわ、とりあえずアンタの力を見せてみなさい」

「……それは、話を聞きたかったら僕に戦えということか？」

「まあ、そう言う事よ。ほら、さっさと構えなさい」

そう言われて雨竜は霊子兵装を構えた。それに対してバンビエツタは、まるでどこからでもかかって来いと言わんばかりの態度だ。

雨竜は霊子兵装の弓を引き絞り矢を放った。その矢は真っ直ぐバンビエツタ目掛け

て飛んで行くが、その矢にたいしてバンビエツタは軽く右手を振った。それだけで矢は簡単にかき消されてしまった。

「今のが全力つてわけじゃないでしょ？ さあ、どんどん撃つて来なさい」

「言われずとも……！」

雨竜は再び矢を放つ、今度は連射で矢を連続で放ち、それをバンビエツタに放つていく。

しかし、その場からバンビエツタは一切動くことなく、それを全て拳だけで弾き飛ばした。

雨竜は驚愕した。まさかあれ程の量の矢を素手で弾かれてしまうなどと思っていなかったからだ。

するとバンビエツタは一護の方を向き、言った。

「一護、アンタも一緒にかかってきなさい」

「は?! 何で俺まで……」

「いいから、さっさとしなさい!」

一護は釈然としない顔をしながらも斬魄刀を構え、そのまま雨竜の所へと向かって行った。

雨竜は一瞬嫌な顔を浮かべたが、すぐに真剣な表情に戻った。

「つー訳で、一緒に戦う事になったけど、よろしくな」

「……仕方がないか」

一護と雨竜は協力してバンビエッタに立ち向かった。雨竜がバンビエッタに向かって矢を放ち、それに合わせる形で一護が攻撃を仕掛ける。

バンビエッタは矢を手でかき消すと、そのまま一護の斬魄刀を片手で受け止めてしまった。そしてそのまま一護を雨竜のところまで投げ飛ばした。

「うお!？」

一護は何とか体勢を立て直すと、雨竜が一護に対して疑問を投げた。

「君の師匠と言うが、一体何者なんだ……」

「俺だってよく知らねえんだよ、お前も滅却師ならなんか知ってんじやねえかって思っただけだよ。その様子だとなんも知らないみてえだな」

「そもそも、僕以外の滅却師が生き残っていること自体知らなかったんだぞ」

「来ないんならこっちから行くわよ!」

いつの間にかバンビエッタの手には刀が握られていた。そしてそのまま二人に向かって斬りかかってきた。一護はそれを斬魄刀で受け止めたが、あまりの衝撃に地面が陥没した。

雨竜が矢を撃つが、今度はそれを回避し、左手に銃を出現させると雨竜に向けて連射

した。雨竜はそれを咄嗟に回避したが、少しでも被弾してしまった。

「相変わらず馬鹿力すぎんだろ……!」

一護が再び斬りかかるが、バンビエツタはその斬撃を躲したり受け流しつつ、一護が雨竜の射線上に入るように移動を繰り返す。

「黒崎!!もう少し考えて移動しろ!!邪魔になっている!!」

「そんな事言ったってよ……!!」

「……まあ、こんなものよね。それじゃあそろそろ終わりにするわよ」

そういうとバンビエツタは刀から霊圧の斬撃を一護目掛けて飛ばした。一護はその斬撃を受け止めきれず、そのまま吹き飛ばされてしまう。

そして次に飛廉脚で雨竜の背後に回り込むと頭に銃を突きつけ、あつという間に勝敗が決してしまうのだった。

メノスグランデが現れたんだが？

「チエックメイトね」

雨竜は霊子兵装を解除すると、両手を上げて降参した。雨竜が降参したのを確認したバンビエツタは、銃を消して刀を鞘へと納める。

そして吹っ飛ばされていった一護がこちらに戻ってくるのを待つと、二人に対して言った。

「さて、今の戦いで何が悪かったのかくらいは分かるでしょ？」

「……」

何も言わない一護達を見て、バンビエツタは溜息をついてしまう。

まず、第一に連携がまるで取れていないのだ。しかし、これは突然互いの事を知らぬ二人が、いきなり組まされて戦わされたのでどうしようもなかった部分もあつただろう。

そして、一護が雨竜の射線に入る様に誘導され過ぎたことも原因の一つだ。そうなれば当然雨竜は攻撃出来なくなってしまう。

一護は一護で自分の動きに意識を取られ過ぎていて、雨竜を気にかけることが出来て

いなかった。

結果、バンビエッタに良いように遊ばれていただけだった。

「はあ……まあいいわ。アンタ達、もう帰りなさい」

「待った、戦ったんだから話を聞かせてもらおうよ」

「ああそうだったわね……さっきの質問の答えだけど、それは今後の為よ」

「今後……?」

「さあ、答えたんだからもう帰りなさい。これ以上質問は受け付けないわ」

「待て！ 貴方は何処から来て、一体何者なんだ!? 貴方以外にも滅却師は生き残っているのか!？」

「質問は受け付けないって言ったでしょ? さあさあ帰った帰った!」

そう言つてバンビエッタは、雨竜の背中を押して強制的に帰らせようとした。だが雨竜はまだ納得していないようで、中々帰ろうとはしなかったが、結局バンビエッタに無理やり追い返されてしまった。

三人が帰つて行つたのを確認出来たバンビエッタは、再び店の中へと戻つて行く。

「……全く、余計な事をしてくれるわね一護も。それにしてもあたしも大分……」

「おや、もういいんですか?」

バンビエッタの後ろにいつの間にか浦原が立っていた。何時もの事ながら、いきなり

背後から現れるものだから、毎回驚かされてしまう。

軽く舌打ちをしながら返事をしたが、浦原は相変わらずニヤけ面を浮かべている。

「まあね。一護の奴が雨竜を連れてくるのは予想してなかったけど……」

「そうっスか？アタシは黒崎サンが石田サンを連れてきてもおかしくはないと思ってたんっスガ」

そう言われてバンビエツタは少し考え込んでしまう。だが、確かにその通りかもしれない。なかつた。一護にはバンビエツタが自分が滅却師であることを言っているが、それ以上の事は言っていない。

雨竜が滅却師だと知った一護は、同じく滅却師であるバンビエツタの事を聞くつもりだったのだろうが、当然雨竜はバンビエツタの事を知る訳がないだろう。

それ故、雨竜もバンビエツタの事を知りたくて浦原商店まで来たのかもしれないと考えていた。

「あ……」

「どうしました？」

本来なら雨竜は虚をおびき寄せる撒き餌を使って、どちらが虚を多く倒せるかという勝負を一護に仕掛けていて、それに乗じて藍染は^{メノスグランデ}大虚をけしかけるはずだが、その勝負自体が無くなってしまっていた。

しかし藍染の事だから、一護の死神としての力を目覚めさせるために、必ず何かを仕掛けてくるのは間違いないだろう。

そして次の日。その予想通り空座町に大量の虚が現れた。

「どうなつてんだよこの数！いくら何でも多すぎんだろ!？」

「分からぬ、だがこんな大量の虚が出現するなどあり得ぬことだ……!」

一護とルキアは二人で街中を駆け回っていた。駆け回りながら虚を次々と倒して行ったが、一向に数が減らなかつた。

一体何が起こっているのか、何故いきなりこれほどの数の虚が出現し始めたのか、全く理由が分からない状況だったが、今はとにかく目の前にいる虚を倒す事に集中している。

「くそっ! いったい何が起こつてるんだよ……!」

「あの建物を見ろ!」

ルキアが指差したのは、とある廃屋の屋上だつた。そこには雨竜の姿があり、雨竜も虚達に矢を撃つて応戦していたが、やはり数が減らない事に苛立つているようだつた。

次々と矢を撃つていき、虚を滅していくが、それでも尚無数の虚が現れる光景に、流石に動揺を隠せなくなつていた。

「石田!!」

「黒崎!?! どうしてここに……いや、そんな事よりも一体何が起こっているんだコレは……!?!」

「俺にも分かんねえよ……そつちこそ何か知らねえのかよ」

「……僕はあの時、君と勝負をするために虚をおびき寄せせる撒き餌を使おうと思つていた」

「何!?! それじゃお前が……!」

「まあ、結局使うことなんて無かつたけれどね。だけど、使つたとしてもここまで虚が集まる程の物じゃなかつたはずだ」

そう言いながらも雨竜は弓を構え、虚を射抜いていく。一護も斬魄刀を振るつて虚を斬つて行くが、やはりどれだけ三人が虚を倒しても、虚は次々と現れる。

「とにかく今は虚をどうにかするしかない」

「そうだな。まずはコイツらを片付けるしかねえな」

一方で浦原商店では、井上織姫と茶渡泰虎が浦原と話していた。

井上と茶渡の二人は、死神とか虚とかの話いきなりされても、すぐに信じられるはずもなかつたが、それを気にすることなく浦原は話を続けていた。

「まあそんな訳で、お二人の力はキミ達本来の力なんですよ」

「あたし達の……？」

「……力が？」

二人が首を傾げていると、浦原はニツコリ笑って二人に言った。そんな様子を見てバンビエツタは少し考えるような仕草をして、チラリと横目で二人を見た。

バンビエツタは、二人の力は完現術だと知ってはいたが、それは今は言わないでも良いかと思つたらしく、何も言うことはしなかった。

それよりも今は、やらなければならない事がある為、浦原に視線を向けた。そしてタイミングよく鉄斎が戸を開けて入って来た。

「店長『空門』が収斂を始めました」

「準備は……？」

「万端」

「ならさつさと行きましょ。そこの二人もついて来てもらおうわよ」

一護達三人は、今もなお虚と戦い続けていた。だが、虚の数は一向に減らず、むしろ増え続けているようにも見えた。

「……いつらどんだけいるんだよ……！」

「破道の四！白雷！！」

ルキアも鬼道を放って攻撃をしているが、数も多く打てず、威力も弱いためあまり効果が無かった。

この義骸に籠って二ヶ月経っているが、まるで力が戻っていない事にルキアは焦りを感じていた。

雨竜も矢を放ち続け、なんとか虚を倒してはいるが、明らかに疲労の色が見え始めていた。

「石田！大丈夫か!？」

「別に、君に心配されるほどじゃない。それに君の力を借りなくたって、僕一人で十分だ」

「んな事言ってる場合かよー」

一護は斬魄刀を振るいながら虚を斬り裂き続けるが、一向に虚は減らない。このまま戦い続けたところで、いずれ体力切れになるのは目に見えていた。

その時、一護達は何かを感じた。虚が一斉に同じ方向に向かって移動し始めたのだ。そちらと見ると、空のヒビが一箇所に集まっており、どうやら虚はそこを指して行っているようだった。

周囲の虚達の様子もおかしくなり始め、まるで天を仰ぎ見るかのように、空を見つめ、

何かに祈るかのようにしている。

空のヒビが急激に広がり始め、その中から巨大な影が現れた。それは虚のような姿をしていたが、その大きさは今まで戦ってきたどの虚よりも巨大だった。

現れた虚を見て、一護と雨竜は驚愕した表情を浮かべ、思わず声を上げた。

「何だよアレ……!? デカいなんてもんじゃねえぞ！ アレも虚なのか!？」

「馬鹿な……メノスだと?……まさか、こんな事はあり得ぬ……！ 我々が敵うような相手ではないぞ……!」

ルキアも動揺を隠しきれずにいたが、それも当然だろ。

ルキアはメノスグランデなど教本の挿絵で見たことがあるだけだが、並みの虚を遥かに凌駕するほどの巨体と、それに見合う程の強さを持ち合わせている虚であると知っていたからだ。

雨竜が叫ぶ。確かに、あのレベルの虚と戦うにはこちらも相応の力が必要なはず。だが今の状態では到底無理な話だった。

「くそっ……!」

一護は斬魄刀を握り締めながら歯噛みする。

だが、ここで諦めるわけにもいかないと思つた時、周囲の虚達が次々と吹き飛ばされていき、その奥から誰かが歩いて来る音が聞こえてきた。

一護は振り返ると、そこには浦原商店の面々が立っていた。

「皆さーん！助けに来てあげましたよ〜」

「浦原さん！それに師匠まで、何でここに……？」

浦原商店の面々によって周囲の虚達が次々と倒されていっていた。

織姫は盾舜六花を使い、泰虎は完現術で変化させた腕を振るって虚を薙ぎ倒す。そんな中バンビエツタは一護の前に立つと、肩に手を置いた。

「周りの雑魚共はあたし達が引き受けるから、アンタはその間にあのデカいのをやりなさい」

「はあ!?それなら師匠がやった方が……」

「つべこべ言っていないでさっさと行け！早く行かないとぶっ飛ばすわよ!?!」

「……ッ!」

そう言われて、一護は渋々納得してそのままメノスグランデに向かって走り出した。

一先ず原作通り、一護にはメノスグランデを撃退してもらわなければ困るからだ。

だが、そんな様子を見てルキアはバンビエツタに声をかけた。

「な……!!?何故一護を!?!アレは一護が真面に相手に出来るような……」

「アンタは黙って見てなさい」

「しかし……!」

ルキアは納得していない様で食い下がろうとしたが、そこへ浦原がやって来て、縛道によって動きを封じられた。

ルキアは必死に抵抗するが、完全に身動きが取れなくなってしまった。

「すみませんねえ。でも、これは必要な戦いなんですよ」

そもそもバンビエツタが一護を大虚の下へ向かわせたのはまだ理由がある。

一つは原作通り死神の力を目覚めさせるため、そしてもう一つは、今のあの一護がどれくらい戦えるかを確かめる為だ。

まだ一護は始解すら会得出来ていない。だが血装を教えるにはいるので、原作よりも多少は強い状態になっている。

一護は斬魄刀を構えると、大虚に向かって走り出した。そして大虚の足に一撃を叩き込んだ。だが、その攻撃は弾かれてしまい、逆に吹き飛ばされてしまう。

「ぐあつ……！」

一護はそのまま地面を転がりながらもすぐに立ち上がった。斬魄刀を握る手に力を入れ、改めて構え直す。

あの程度の威力の攻撃では傷をつける事が出来ない。そもそもあの巨体で暴れられてしまえば、近づくことさえ難しいだろう。

「……何だよ、この硬さは……!? どうすりゃいいんだ……」

その時一護は、昨日の修行の時にバンビエッタが刀から霊圧の斬撃を飛ばしていたことを思い出した。

一か八か試してみるしかないで一護は思うと、斬魄刀に霊力を集め始めた。すると、斬魄刀から凄まじい量の霊力が噴き出し始めた。

「うおっ……っ!？」

あまりの霊圧に一護は驚きつつも、斬魄刀に意識を集中させた。そして動血装を使った状態で全力で振り抜いた。

そして斬撃が放たれると、その斬撃は巨大な三日月の刃となって大虚に向かって飛んでいった。その斬撃は大虚に傷を負わせることに成功した。だが、それでも致命打にはならない。

「駄目か……っ!？」

その時、大虚の霊圧が急速に高まり始めた。大虚の口元に光が集まっていき、次の瞬間には虚閃が発射された。今度は静血装を使ってそれを受け止めると、そのまま押し返そうとした。

すると一護の霊圧が急激に上昇し、虚閃を弾き返し、そのまま大虚に斬撃を喰らわせた。

それを見たバンビエッタはニヤリと笑みを浮かべ、そしてその光景を見ていたルキア

は驚愕した表情を浮かべていた。

「はあ……はあ……ど、どうだ……？」

虚閃を跳ね返した事に驚いたが、それ以上に自分の放った斬撃で斬った部分が再生する様子がない。

すると、二度の斬撃を受けた大虚は、空間の裂け目に吸い込まれていくように消えていくのだった。

ルキアが尸魂界に連行されたんだが？

そして次の日。大虚が出て来たと言う事は、そろそろ尸魂界から朽木白哉と阿散井恋次が空座町に来ると言う事である。

確かに一護は現時点でも原作よりは強いであろうが、それでも隊長格である白哉には勝てないだろう。

とは言えど、バンビエツタは何もするつもりはなかった。理由はいたって簡単で、原作通りルキアが尸魂界に帰ってもらわねばならないからだ。

「まあ、今はコツチに集中しないとね」

「ほお、これは一体何をしておるのじゃ？」

バンビエツタは突然聞こえてきた声に驚いて振り向くと、そこには夜一が立っていた。そしてその隣には浦原も居る。

一先ず作業を中断して、二人に向き直った。

すると、夜一はバンビエツタが作業に使っていたタンクやらメーターのついた機械を興味深そうに見ていた。

「相変わらず面白い事を考えるのう」

「……ああ、なるほど。もう来たのね」

「その通りっス。黒崎サンの方はアタシが何とかするとして、BBサンはどうするんスか？」

「……そうね」

バンビエツタ自身がどうするのか。正直あまり原作に影響を与えない様に立ち回りつつ、原作の流れに乗って行く必要があると考えていた。

だが、今この時点でこの場所にバンビエツタ自体がいる事が既におかしいのだ。

腕を組み何かを考えているバンビエツタだったが、一先ずは目先の事から片付ける事にした。

「様子は見に行くけれど、ちょっと思いついたことがあるから、私はそつちをやることにするわ」

「分かりました。では、お先に失礼させてもらいますよ」

浦原はそのまま部屋から出て行ったようだが、何故かまだ夜一が部屋に残ったままだ。

嫌な予感がしつつも、バンビエツタは声を掛けた。

「それで、アンタは何しに来たの？まさかとは思うけど、また手合わせとか言わないでしょうね」

「安心せい、儂もそう暇ではないからの」

「なら良いんだけど……」

バンビエツタは一息つくくと再び機械の前に座り込み、作業を再開した。夜一はそれを暫く眺めていたが、やがて踵を返してどこかへと消えてしまった。

それからしばらくして、バンビエツタは作業を中断して外に出ることにした。目的は勿論、一護の様子を見る為だ。

戦闘の様子を遠くから眺めていた浦原の隣に並び立ち、その様子を見た。

「どんな感じよ」

「副隊長クラス相手に善戦してますねえ。しかも戦いの最中に成長しているように見えますし」

副隊長である恋次を相手に一護は善戦していた。だがしかし、まだ甘い部分があり一撃で決めることが出来ずにいた。

そして何度目かの打ち合いをしている最中に、ついにその均衡が崩れた。恋次の斬撃により体勢が不安定になった所を一護は逃さずに渾身の一撃を放ち、恋次は吹き飛ばされてしまった。

一護はそこへ追撃を仕掛けようとした時だった。一護の斬魄刀の刀身がいきなり消えた。いや正確には折られたのだ、白哉の手によって。

「流石に隊長格相手は無理よね」

案の定一護は白哉の速さに対応できず、鎖結と魄睡を的確に貫かれてしまいその場に倒れ伏した。

そしてルキアは原作通り、人間へ死神の力を譲渡とした罪人として尸魂界へ連行されていった。

「さて、一護の奴を回収して戻りましょう」

一護を回収し、浦原商店へと戻る。一護の治療をしてしばらくした後……

「黒崎殿が目を覚ましましたぞ!!」

一護の悲鳴にやや遅れて、鉄斎の声が響いた。起きて早々眼前に髭親父の顔があったら誰だつて驚くだろう。

しかも同じ布団の中だとなれば尚更だろう。

「ホラホラ駄目でしょ黒崎サン、傷はまだふさがっちゃいないんだ」

「浦原さんに……師匠……そうか、ここは浦原商店か」

「先に行っておくけど雨竜の奴なら帰ったわよ、血は出てたけど大した傷じゃなかったみたいだし」

雨竜はその場で傷を治療し、そのまま帰ってしまった。一応雨竜にも此処で休むように言ったのだが、彼は首を横に振った。

『お気遣いありがとうございます。それより黒崎をよろしくお願いします……朽木さんを救えるのは彼だけなので』

それだけ言い残して雨竜は去っていた。一護はため息をつくど、ゆつくりと体を起こした。その様子を見ながら、バンビエツタが口を開いた。

「で、アンタはどうするつもりなの？」

「どうするって……ルキアは尸魂界に帰っちまったんだぞ!? どうやって尸魂界まで追いかけるってんだ!? それに、あの時アンタ達も近くまで来てたはずだ!! なのにどうして……!!」

「アンタ、まさか今後もあたし頼りでどうにかするつもりじゃないでしょうね? アタシだって絶対にアンタの近くににいるわけじゃないのよ?」

「ツ……それは」

「それに尸魂界に行く方法がない訳じゃない。そうよね、喜助」

「ええ、その通りっス」

浦原は一護の方を見ながら笑みを浮かべていた。

一先ず原作通り、一護には後々尸魂界にルキアを救出しに行ってもらわなければならぬからだ。

「どうやるんだ!? どうしたら行ける!? 教えてくれ!!」

鬼気迫る勢いで詰め寄る一護を、浦原は手で制すると話を続けた。

先ずは一護には十日間、浦原商店で修行をしてみよう。そして始解を会得して貰わなければ、何の意味もなくなってしまう。

「そんな暇ねーだろー！ルキアは尸魂界でいつ殺されるか分からない状態なんだぞ！そんな事やってる場合じゃねーんだよ！少しでも早く……」

「アンタ馬鹿なの？そのまま行っても死ぬだけだつてんでしようが。今のアンタが尸魂界に行っても何の役にも立たないどころか足手まといになるだけよ」

布団から起き上がるようにする一護だったが、バンビエッタによつて押し戻されてしまった。

バンビエッタの言葉は正論であり、一護は反論できなかつたのだ。

「……刑の執行までは一ヶ月の猶予期間があります。向こうへの門を開くのに七日間、そして尸魂界に到着してから十三日間、十分間に合う」

「十日間で俺は……強くなれるのか？」

「勿論、キミが朽木さんを心から救いたいと願うなら。想う力は鉄より強い、半端な覚悟はドブに捨てましょ……アタシと十日間の殺し合い、できますか？」

浦原は真剣な表情で一護を見つめる。一護は目を閉じて、自分の胸に手を当てた。そして数秒後、目を開いて浦原の方を見た。

そして視線を外すことなく真つ直ぐ見据え、やがてしつかりとした口調で答えた。

「しようがねえ！ やつてやろうじゃねえか！」

「そんじゃ、まずは傷を治しましょう。この薬を一時間ごとに一錠飲んでください、夜までには傷も殆ど治りますよ」

渡された薬を見て顔をしかめる一護。そのラベルにはドクロマークが書かれており、薬と言うよりは毒にしか見えなかったからだ。

一護は浦原に薬のことを問いたしたが、笑って誤魔化すばかりであった。

結局一護はバンビエッタに押し切られて、渋々と飲まざるを得なくなってしまった。「それまでは学校に行つてらっしゃい、終業式でしょ？ 今日はい」

そして夕方になり、再び一護が浦原商店を訪れた。一護の体は、浦原に言われた通りほぼ完全に回復していた。

その後一護が向かった先は、浦原商店であった。既に浦原が外で待っていたようであり、すぐに話しかけて来る。

「親御サンには断つてきましたか？」

「ああ、友達ん家に泊まるって言ってきた」

「なんか……処女の外泊の言い訳みたいっすね……」

「殺すぞ……!」

浦原からのくだらない冗談にイラツとした一護であったが、今はそんな事を気にしている場合ではない。

そのまま二人は、浦原商店の中へと入っていった。浦原の後に続き、何度か訪れた事のある地下の勉強部屋へと案内された一護。

ふと周囲を見回してみると、師匠であるバンビエッタの姿が見えない事に気が付いた。

「そう言えば師匠はいねえのか?」

「BBサンなら別の用事で出かけてるっスよ」

「……そうか。まあいいさ、時間がねえんだろ? さっさと始めようぜ、アンタの言う「修行」って奴をよ」

「良い心がけっスねえ……そんじや望み通り、さっさと始めましょうか」

こうして一護の、十日間に及ぶ修行が始まったのだった。

雨竜にも修行をつける事にしたんだが？

一方その頃、雨竜は山へと修行をしに来ていた。

誰も来ないであろう山奥へと入り、近場に滝のある開けた場所にたどり着くと、その近くに腰を下ろした。

「よし、此処ならだれにも邪魔されずに修業に集中できるだろう……」

一先ず雨竜は、祖父から受け継いだ物を使って修行を開始しようと考えていた。なので、周りに人がいない方が何かと都合が良かったのだ。

だが、いざ修行を開始しようとした瞬間、背後から誰かの声が聞こえてきた。

「あー！ いたいたー！！ おーい！！ 雨竜くん！！」

突然聞こえてきたその声に、驚いた様子で振り返る雨竜。

すると山道を織姫、泰虎、そしてバンビエツタの三人がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

それに加え何故か黒猫までも一緒にいるので、それに驚いていると、何故この場所に来たのかを織姫が説明し始めた。

「……レツスン？」

「そう！尸魂界に行くにはレッスンを受けるって言われて、どうせなら石田君も誘おうと思つて」

「そうか……いや、君たちの霊力が急激に高まつてるのは感じていたけどね……まさかそんな形で話が進んでいたとは……」

「……それで、どうする」

茶渡に問われ、少し考える雨竜。レッスン、つまり修行をするのだろうか、いったい誰が修行をつけてくれるのかは聞いていなかった。

心当たりがあるとすればBB、つまりバンビエッタくらいであったが、そもそも彼女は一護の師匠であり、そちらの事で忙しくなるのではないかと考えたのだ。

「……師は？一体誰の指導を受けるんだい？」

そう言いながらもバンビエッタの方をチラリと見る。念のために確認をしておいた方が良いと思つたが、当の本人は首を横に振つていた。

やはり彼女ではないようだったが、ならば誰が講師をやるのか不思議に思つた。

「あたしは……」

「濃じゃよ」

バンビエッタが答える前に、夜一が答えた。

「な、何なんだこいつは!？」

雨竜が驚くのも無理はないだろう。今の夜一は猫の姿をしており、知らないものからすれば猫が喋っているようにしか見えないからだ。

しかし、織姫も泰虎もその正体を知っている訳では無いので、ただ「猫」としか認識していないので、雨竜は思わず頭を抱えたくなっていた。

唯一この場で正体を知っているバンビエツタは「まあ、そうなるか」と内心思いながら、とりあえず何も言わずに黙っている事にした。

「見りや分かるよそんな事！僕が言ってるのはどうして猫が喋ってるのかって聞いているんだよ！」

「何よ猫が喋ったくらいで、今はそんなことどうでも良いでしょ。アンタはレッスンを受けるのか、それとも断るのか、どっちなの？」

「……せっかくだけど遠慮しておく、僕は一人でやりたいんだ。それに僕は朽木さんを助けに行く気なんてないよ」

その言葉にバンビエツタは「そんなこと言っておいて結局来るくせに」と思ったが口には出さなかった。

その後夜一は泰虎、織姫と共にこの場を去っていくがバンビエツタだけはこの場に残った。雨竜には怪訝な顔をされたが、それでも彼女はその場に残ることを譲らなかった。

「……何故帰らないんです?」

「あたしは元々アンタに修行をさせるために来たのよ。それこそアンタが尸魂界に行く行かないに拘わらずね」

雨竜としても、自らを滅却師と名乗るバンビエッタの事をあまり信用しているわけではなかった。だが、自らと一護の二人掛かりだったにもかかわらず、手も足も出ずに瞬殺されたことを考えると、彼女の実力は本物なのだ。

だからこそ分らない事があつた。そこまでの実力があるのなら、何故修行をつけるなどと言う回りくどい方法を取ろうとするのか。わざわざそんな事をするくらいなら、バンビエッタ達がルキアを助けに行つた方が早いのではないのだろうか。

「……こつちにも事情つてもんがあんのよ」

本来ならバンビエッタは、ここに居る存在ではないのだ。ゾンビになりたくないという一心で見えざる帝国から逃げ、そして空座町にたどり着いた。

基本的には原作通りに事を進めようと考えていたが、それよりも自身の好奇心の方が勝つたため、一護の修行を付けている。つまり雨竜の修行をつけるのも、自身の好奇心を満たすためである。

それに浦原は追放された身なので、そもそも尸魂界に行くことが出来ないのだ。

しかし、そんな事を正直に言う訳にもいかないので、適当に誤魔化しておく。

「けど僕の修行は、誰にも……」

雨竜の抱えている箱を、バンビエツタが一瞬にして奪い取る。

中に入っているのは散霊手套である。本当の名前は苦難ライデンハントの手袋と言い、かつて雨竜の祖父である宗弦が見えざる帝国から持ち出したものとされている。

「な……!?返せ！それは僕にとって大切なものだ！」

確かに祖父から受け継いだものなのならば大切なものだろう。これは、靈子を高レベルで拡散させる力を持つ手袋であり、これを着けて七日七夜弓を成す事が出来れば、滅却師としてより高みに近づくことができるとされている。

しかしそうになると、収束能力が散霊手套無しでは制御できなくなってしまう、散霊手套を外すと靈子集束レベルが爆発的に向上し、並みの者では使用できる代物ではなくなってしまう。そのため、よほど才能のある者でなければ、滅却師の力を失ってしまう事になるのだ。

しかし外すことで滅却師最終形態クインシー・レットシユテイーへなる事が出来る。この状態だと、大気中に偏在する靈子のみならず、靈子で構成された物すら分解して自身の武器として再構築する事ができるようになる。

だが、それは所詮滅却師完聖体クインシー・フォルシユテンテイツヒの下位互換でしかない。

「返してほしければ、奪い取ってみなさい」

「ちっ……！」

雨竜は舌打ちしながらも、飛廉脚を使って一気にバンビエツタとの距離を詰める。だがバンビエツタも同様に距離を取りながら、雨竜の攻撃を避けていく。

雨竜はバンビエツタを追いかけながらも、次々と矢を放つていくが、バンビエツタは全て避けるか撃ち落としてしまう。

以前戦った時も速かったが、その時よりも明らかに速くなっていると感じる雨竜。実際その通りで、バンビエツタは飛廉脚の他にも、自分で編み出した血装ブルート・シユネリヒカイト「速血装」を使って、自らの速度を上げていた。

そんな事をしばらく続けていると、雨竜の体力が限界を迎えたのか動きが鈍くなり始める。

「まあこんなところかしらね……」

「こんな事を続けて何になるんだ」

「一先ずアンタには血装を教えておくわ、他のは……アンタの頑張り次第かしら」

「血装……だつて？」

やはりと言うべきか、雨竜は血装を知らないようであった。しかしやり方を教えると、雨竜も滅却師の故か動血装と静血装の二つをあっという間に扱えるようになった。

そしてそれから数日、バンビエツタによる雨竜への指導は続いた。

指導とはいっても、やっていることは単純なもので、ただ一対一で戦い続けるというものだけであった。

「そろそろ頃合いかしら……」

「何がだ……？」

「もう一つ、アンタに見せておくものがあつてね。アンタがやろうとしていた事の完成形……と言つたところかしら」

それは当然滅却師完聖体の事であり、死神で言うならば卍解と言つたところだろうか。

バンビエツタ自身もこれを使えるようになったのはつい最近の事で、浦原と夜一の協力があつて何とか完成させる事が出来たのだ。

とは言つても、本来なら聖文字を与えられなければ完聖体は使えないので、正式な完聖体ではないのだ。だが、それでも十分すぎる程の力を秘めているのだ。

だが、バンビエツタは滅却師完聖体を雨竜に教える気はなかつた。教えても問題はないのだから、教えたところで今の雨竜では使いこなすことは出来ないであろう。

それに、仮に使えたとしても、マユリ戦で万が一があつてはこまるからだ。

あのマッドサイエンティストがそう簡単にくたばるようなことは無いだろうが、もしそうなつてしまった場合、後々大変な事にしかならない。

とは言えど、滅却師最終形態すら使えないというのはそれはそれで支障がでてくる。なので、一先ず原作通りになるよう、現時点の雨竜でも扱える程度にまで調整した完聖体を会得させることにしたのだ。

そして、雨竜との修行を開始して一週間が経過した。

なんとか調整を加えた完聖体を雨竜に習得させ、残りの期間は自由に修行させることにし、バンビエッタは一護の方へと向かっていった。

一護の方もひと段落付いたようであり、既に死神化と斬月の始解を済ませているようだったが、少しだけ気になる事が一つあった。

「ちよつと一護、その斬魄刀……」

柄も鏢も無いのは変わらないが、刀身の側面、中央の部分に白いラインが入っていた。「なんだよ師匠、斬月がどうかしたのかよ」

斬月という名前も変わらないようだが、原作にはない白いラインがどうしても気になつてしまつていた。

恐らくバンビエッタ、もとい転生者の介入により変化が生じたのだろうが、その変化が何によるものなのかまでは分からない。

だがその事を考えていても答えは出ないので、一先ずは気にしないでおく事にした。

(まあ、とりあえず様子を見ましようか)

そんなふうを考えつつ、修行を再開することにする。

そしてそれから更に時間は経過し、遂に8月となった。一護も浦原商店での修行を終え、浦原が尸魂界への門を開く準備を整える間、その間は普通の夏休みを送る事になった。

尸魂界篇

尸魂界へと突入するんだが？

一護や織姫達がい思い思いの夏休みを過ごし、そして遂にルキアを救出するために尸魂界へと向かう時が来た。

まるでダイイングメッセージの様な呼び出し文を受けた一行は、急いで浦原商店へと向かった。

そこには、浦原がすでに準備を開始している最中だった。

「……さて、いよいよね」

「おや、BBさんも行くんですか？」

「ええ、私にも色々と事情があるからね。それに尸魂界に行ってみたいと思っていたし」
ただ単に尸魂界に行ってみたいという気持ちが大半ではあるが、今の状態の一護と雨竜は、既に原作とは少し変わっているため、それがどう作用するのも把握しておく必要がある。

変化が起きたら起きたで構わないが、今後に響く程の改変が起きるのは流石に困るので、念には念をとった感じだろう。

「そうそう、前に渡した腕輪なんですけど、返してもらえますか？」

「ああ、そう言えばそんなのもあったわね」

そう言つてバンビエツタは着けていた腕輪を浦原に返す。

これが一体何なのかと言う説明は受けていないが、彼は意味のない事をする様な人物では無いので、何かしらの意味があるとと言う事だけは分かる。

そしてしばらくして、ようやく準備が完了した浦原が「穿開門」を開き、それを潜つて断崖へ飛び立つ。

無事断崖を通り抜け、一護達は尸魂界へと辿りつき、丹坊と市丸ギンとの邂逅を経て、志波空鶴の家へと向かった。

そして花鶴大砲を使って空から瀨霊廷へと侵入し、原作通り一護達は散り散りとなつて行動を開始した。

「さて、どう行動したものかしら……」

散り散りとなった後、バンビエツタは一人で行動している。

此処からどう動くかはまだ決めかねているが、少なくとも原作に大幅に影響してしまふような事だけは避けたい。

例えば、後々敵になるからと言つて東仙要を殺害したり、あるいは逆に藍染達に協力を申し出たりする、などと言つた事はやるべきではないだろう。

(まあ、そんな事する気もないけど)

しかし、だからと言って何もしないのでは尸魂界に来た意味が無い。

何より、漫画やアニメでよく見た場所に来たということ自体に多少テンションが上がっていたので、この機会を逃すわけにはいかないのだ。

何だかんだ言つて、一度死んで生まれ変わってもオタク気質と言うものは治らないものなのだ。

「居たぞー！こつちだ!!」

バンビエツタを発見した一般の死神達がゾロゾロと現れ、こちらに向かってくる。

数えるのも億劫になる程の死神達が現れ、バンビエツタに対して斬魄刀を向ける。その様子にバンビエツタは溜息をつく。

「二人相手に大勢でなんて、情けない奴等ね……」

モブ死神が幾ら集まろうが、バンビエツタには大した脅威ではない。

一気に蹴散らしてさっさと移動しようと思ったその時。一人の死神が列を割って現れた。

「ここは俺にやらせてくれ、こんな奴俺一人でも十分過ぎる程だ」

もじやもじやした髪型のモブ死神が、バンビエツタを見てニヤリと笑いながら自信満々に言った。

一体何処からそんな自信が出てくるのか分からないが、見るからに弱そうに見える。斬魄刀を鞘から抜き放ち、バンビエツタと向き合う。見た目だけで判断するのは良くないと思うが、それでも実力がある様には全く見えない。

「行くぞ！ 吼え立てろ！ 狼……ッ!?」

「遅い!!!」

どうやら始解をしていたようだが、それよりも速くバンビエツタは男の懐に入り込み、蹴りを腹に入れる。

すると、その一撃で男は吹き飛ばされ、白目を剥いて気絶した。死なない様に手加減をしたのは確かだが、まさか蹴り一発でダウンしてしまうとは思わなかった。

バンビエツタは他の死神たちへと視線を向ける。一瞬、死神たちは後ずさりするが、それでも戦意を失っているわけではないらしく、今度は複数人で攻めてきた。

「うおおおお!! やれええ!! 数でおせええ!!」

「面倒ね……」

バンビエツタは溜め息混じりに呟くと、頭上に霊子の弾丸を無数に浮かべ、雨の様に降らせた。

着弾した瞬間に爆発が連続で起こり、次々と周りにいた死神達を吹き飛ばして戦闘不能にしていく。

死なない程度に威力を抑えてあるので、死んではいないだろうが、暫くは動けないだろう。

「……さて、これで静かになったかな」

辺りを見渡してみると、もう既に立っている死神は殆どいなかった。やはりモブ程度ではバンビエツタの相手にはならない様だ。

もつと大勢居た様な気がしたが、もしかしたら逃げた死神も居るのかもしれない。

それならばそれで良い。別に見えざる帝国の滅却師達とは違って、死神を殺す理由はバンビエツタには無い。わざわざ追いかけてまで戦う必要などどこにもないのだ。

「そうだ……」

バンビエツタは何かを思い出したかの様な声を上げると、倒れている死神達の方へと近付き、一人一人を調べ始めた。

そして、自分と同じくらいの背丈の死神を見つけると、その死神の死覇装を剥ぎ取ってバンビエツタは嬉しそうな笑みを浮かべる。

「いやー、やっぱ本物は違うわね。コスプレ用なんかとはダンチよ」

そんな独り言を言いつつ、バンビエツタは奪った死神の衣装を身に纏う。本物の死覇装なので、気分が高揚してくるのを感じる。

別にバレないために着用したのではなく、ただ単に自分が着たいと言う気持ちしかな

いと言つても過言ではない。

此処に鏡があれば良かったが、生憎と無いため自分の姿を確認することは出来ない。「さて、そろそろ移動を……ん？」

するとその時、轟音と共に空へと三日月状の斬撃が放たれたのが見えた。それは紛れもなく一護の月牙天衝であり、遠くからでも確認が出来た。

原作では月牙天衝をちゃんと放てるようになるのはまだ先であるが、此処では既にその段階に達しているらしい。

ひとまず、一護が居るであろう方向は確認できたので、バンビエツタはどうするかを考え始めた。

(さて、合流するべきか……それとも別の方向へ行くか)

一護と合流する事は簡単ではあるが、問題はその後だ。

合流した後共に行動するにしても、再び別行動を取るにしても、どちらにせよ今後に大きく影響が出る可能性が極めて高い。

少し考えた結果、一旦様子を窺おうと思ひ、バンビエツタはそのままその場から離れる事にした。

だが少し移動したところで、叫び声の様な物が聞こえてきた。

「うおおおおおおお!!」

「うっさー!この声……あの馬鹿ね!」

聞き覚えのある声だった。というか、それは紛れもなく岩鷲の叫び声であった。

正直岩鷲なんかほつといても良いのでは?とも思ったが、やはり何かあつては困るので仕方なくそちらに向かうことにした。

「何で俺だけ!!追いかけ回されなきゃなんねえんだよおおお!!」

声の方へと向かつてみると、そこには案の定岩鷲の姿があつた。死神達に罵詈雑言を吐かれながら追い回されて、必死に逃げ回っている様だ。

すると、岩鷲はバンビエツタの姿を視認すると、手を振つて助けを呼ぼうとした。

「おーおい!えつと……BB!?……BBだよな!?助けてくれええ!!」

バンビエツタが死覇装を身に纏つているので、一瞬誰か分からなかつたが、直ぐに理解することが出来たらしい。

普通ならここで一護と岩鷲が再び合流することになるが、どうやら一護はまだ別の場所にいるらしく、近くにその姿は無かつた。

「仕方ないわね……ちよつと試してみたいこともあるし……」

バンビエツタは手に雷を纏わせると、それを一気に死神たちの群れに向かつて放つた。

閃光が死神達の視界を白く染め上げ、死神達は悲鳴を上げながら感電して倒れてい

く。

「疑似サンダーボルト……まあまあね」

キャンデイスの技を真似てみたバンビエッタだったが、意外にも上手くいったことに満足げに笑う。

まだまだ改良の余地はあるだろうが、とりあえずは良い感じの技にはなっているだろう。

すると、岩鷲がバンビエッタの方へと駆け寄って来た。

「あああ、あぶ、あぶ、危ねーじゃねえか!!俺まで感電するところだったじゃねえか!!」
「あぶあぶうっさいわね……まあいいじゃない、助かったんだし……それよりほら、後ろ」

バンビエッタが指差す方向を見ると、その先にはまた別の死神達が走ってくるのが見えた。

やはりここは死神達の本拠地ともあってか、次から次に死神がやって来るようだ。

「やべえ!まだ追ってきてたのか!!」

「アンタはさっさとどっか行きなさい、巻き込まれても知らないわよ」

そう言つてバンビエッタは死神達を迎え撃つ様に構えると、足を地面へと踏み込んだ。すると、炎が吹き上がって死神達を飲み込んでいく。

加減はしているので焼け死ぬことは無いだろうが、かなりの熱量なので戦闘不能にするには十分な威力であった。

「ふうん……疑似ヒートも問題なさそうね」

今度はバズビーの技を真似てみたが、此方も上手くいつている様で問題は無いだろう。

まだまだ試してみたいことはあるが、これ以上やると間違ひなく殺してしまうので、今はこれくらいにしておいた方が良くもしいれない。

「さて……ん？」

周囲を見回す、まだ立っている死神が居るかどうか一確かめ終わると、何処からか破壊音が聞こえてくる。

何かがぶつかっている様な音であったが、徐々にこちらに近づいてきているように思えた。

一先ず何が来てもいい様に構えていると、然壁が吹き飛んで泰虎が飛び出して来た。

「む……BBか」

「ああ、良いところに。その間抜け面は任せたわよ」

「だ、誰が間抜け面だって!？」

泰虎に岩鷲を押し付けると、バンビエッタは再び移動をし始めるのだった。

尸魂界へと突入したんだが？

「うわあ……ほどけた草履結び直している内においてかれちゃったけど、現場って何処だろう」

一人の死神がキョロキョロと周囲を見渡しながら、そんな独り言を呟く。

背には四の数字が刻まれた風呂敷を背負っており、四番隊であることが見て取れた。

小突けばそれだけで倒れてしまいそうな弱弱い見た目をしており、とてもではないが戦闘向きではないように見える。

実際その通りであり、彼は護廷十三隊の四番隊に所属している救護班の一員だ。

「いたつ!?、ごめんな……さ……い？」

前方不注意だったせいとか、何者かとぶつかってしまったので、謝ろうと顔を上げたところで動きを止める。

というのも、そこに居たのは死覇装を身に纏った一人の女性であった。

だが死覇装を身に纏ってはいるものの、何となく死神とは雰囲気が違う気がしたのだ。

何故そう思うのかは分からないが、何となく違うと感じていた。

一体誰なのかと思っていると、向こうは彼を知っているようで、少し驚いた表情を浮かべていた。

「あ、あの……もしかして、貴女も例の旅禍じゃ……ないですよね……？」

「あら、ちようどいい所に。ちよつと面貸しなさい」

「え？え？ちよ?!?ああああああ〜?!」

四番隊の隊員である山田花太郎を無理やりに引っ張っていくと、バンビエツタはそのままとある場所へと向かって行くのであった。

四番隊は怪我人などが出た場合に治療をするのが仕事だけあって、医療器具や薬などが充実しており、当然だが薬品棚なども完備されている。

そんな隊の一人である彼を何故連れてきたのかと言うと、それは先ほどから嫌な予感がしていたからだ。

(一護の霊圧、いきなり馬鹿みたいに増えたと思つたら消えてるし……これ絶対なんかあつたわよね)

先ほどまで一護の霊圧と、それとぶつかり合うもう一つの凶悪な霊圧を感じていたが、天に放たれた二度目の月牙天衝を見た後、それが突然消えてしまったのだ。

恐らくその凶悪な霊圧の持ち主は更木剣八なのだろうが、本来なら一護と剣八がやりあうのは先の話であり、この時点で戦い始めるのはあり得ないはずなのだ。

いくら一護が原作より強くなっているとはいえど、あの剣八を相手にして無事で済むとは到底思えない。

「ちよ、ちよつとまっつてください……!! 一体どこに連れて行く気なんですか!？」

「うっさいわねえ! 黙ってついて来なさい!! ブツ飛ばすわよ!？」

「ひえ!？」

バンビエツタが怒鳴りつけると、花太郎は情けない悲鳴を上げて怯えた様子を見せる。

その態度に多少苛立ちを覚えながらも、バンビエツタは足を止めずにそのまま目的地へと向かう。

すると、そこには血まみれになって倒れている一護と剣八の姿が見えた。

剣八の傍には草鹿やちるの姿があり、倒れている剣八を抱え起こしているようだった。

「あれ、もしかしていつちーの仲間?」

「い、いえ……僕は」

「まあそんなところ……そんなことよりほら、ちやちやつと一護の怪我を治しなさい」

有無を言わずにそう言うのと、花太郎は慌てて一護の方へ駆け寄った。

そして一護の状態を確認すると、特に腹部の傷が酷いのが分かり、すぐに治療に取り

掛かる。

一護自身の治癒力の高さもあつてか、徐々に塞がってきてはいたが、それでも重傷であることに変わりにはなかつた。

ふとバンビエツタは剣八等の方を見るが、既に立ち去った後の様であり、その姿を見つけることは出来なかつた。

「治療するのはいいけど、どっかに隠れるなりしないと見つかるわね……」

「……そ、それなら良いところがあります」

一護が目覚めると、そこは地下水道だつた。

花太郎の話では、此処は瀋霊廷の全域に張り巡らされているらしく、基本的に何処にも行けるようにできているらしい。

この地下水道の事は死神なら誰でも知っているが、その複雑さ故に誰も構造を把握してはいないらしい。

だが、唯一四番隊だけが完全に構造を把握しており、迷わずに移動することができるという。

「なあ、どうして俺達に此処までしてくれるんだ？俺達は敵だぜ？なのに白い塔に行きたがつてるってだけで……どうして理由も聞かずに案内してくれるんだよ？」

「貴女たちの事は……ルキアさんから聞いていましたから。黒崎一護さん、どうかルキアさんを助けてください」

花太郎が頭を下げて頼み込む。その姿を見て、一護は何とも言えない気持ちになった。

彼の言葉が嘘でないことは、その目を見ていれば分かる。だが、それにしても何故そこまで自分たちに協力的なのか、その理由までは分からなかった。

だが、一護としては断る理由はない。元々ルキアを助けるためにここまで来たのだ。

「ほら、くつちゃべってないでさっさと案内しなさいよね！」

「は、はい!!」

バンビエツタにせかされる形で、花太郎は慌てて移動を開始する。

しばらくすると梯子のようなものが見えてきて、それを花太郎が上っていく。

そして外に誰もいないことを確認すると、二人もその後が続いて外に出た。

「流石に塔の真下までは繋がっていないんですけど……ほら、あれが懺罪宮です」

花太郎が指さした先には、大きな建物が聳え立っていた。

建物の外見は、他の建物よりも一回り大きくなっており、まるで城のように見える。そして、そこへ向かうための階段が伸びていて、その手前には恋次が立っているのが

見えた。

「よお、久しぶりだな……俺の顔を覚えているか？」

「阿散井……恋次！」

一護がその名を呼ぶと、恋次は口元に笑みを浮かべた。

現世では何とか恋次に善戦したものの、結局は白哉の手によって瞬殺されてしまった。

だが、今の一護はあの時とは違う。浦原との修行を経て、斬魄刀の始解をも会得して、あの時より遥かに強くなっているのだ。

すると、恋次を見た花太郎は体を震わせて怯えた表情を見せた。

一般隊士と副隊長では霊圧の格が違い過ぎるので、仕方がないと言えばそれまでなのだが。

「一護、ちやちやつと終わらせなさいよね。こんな所で時間食ってられないんだから」

「ああ……分かつてるよ」

「は……!? え、ええ? な、何を言ってる……?」

花太郎は困惑していた。目の前にいるこの女が、何を言っているのか理解できなかつたからだ。

副隊長である恋次に対して一護一人で戦えと言い、あまつさえさっさと終わらせろと

まで言い放った。

一護がどれだけ強くなったのか知らない花太郎にとって、それは正気の沙汰とは思えなかった。

しかし、当の本人である一護は特に気にしていないようで、斬月を構えて戦闘態勢に入った。

「行くぞ、そこをどいてもらうぜ……！」

「いいぜ、来いよ！力づくは嫌いじゃねえだろ！」

そしてぶつかり合う一護と恋次ではあったが、結果としては一護の圧勝と言っているだろう。

辛勝とは言えど、あの剣八との戦いを制した実力は本物であり、いまさら副隊長如きが相手になるわけもない。

そして……

「黒崎……！！恥を承知でテメエに頼む……！！ルキアを……ルキアを助けてくれ……！！」

「ああ……」

一護にそう頼むと、恋次はその場に倒れこんでしまった。

どうやら体力の限界が来たらしく、そのまま意識を失ってしまふ。

そんな恋次の姿を見て、一護はどこか複雑な気分になった。今まで敵対してきた相手

に頭を下げるなど、屈辱以外の何物でもないはずだ。

だが、それでも彼は自分に頭を下げた。それだけルキアを助けたいということなんだろうと、一護は思う。

「……」

「一護……?」

よく見ると、腹部に巻かれた包帯には血が滲んでいて、腹部の傷が開いたのだと分かった。

治療を施したとはいえど、それはあくまで応急処置にしか過ぎなかったので、傷が完全に治ったわけではないのだ。

そのまま一護も倒れこんでしまい、再び花太郎が治療を始めようとしたその時、複数の死神がこちらへと近づいてくるのが分かった。

「誰か来るわね……」

そんな時、バンビエツタが呟く。

複数人の死神がここへ近づいて来ているようだ。このタイミングで来る死神と言えば、吉良イヅル他モブ死神が数名であるが。

霊圧の感じからすると、隊長クラスの者も居るようだ。

「アンタ、一護を連れて行ってくれるかしら?」

「え？あ、はい……分かりましたけど、貴女はどうするんですか？」

「まあ……足止めといったところかしらね」

バンビエツタがそう言うと、花太郎は一護を担いでこの場から離れて行った。

一護達が立ち去ると同時に、複数の死神が現れる。そして現れた死神を見て、バンビエツタは驚きを隠せない。

何故ならば……

思わぬ相手と戦う事になったんだが？

「一人か……このような少女を斬るのは気が引けるが、仕方あるまい」

「恨みはないが、平和のためにはやむを得ないか」

（東仙要に狛村左陣……!?何でこんなところにいんのよ……!!）

そこには東仙と狛村の二人が立っていたからだ。本来ならこの二人を相手にするのは剣八のハズだが、何故ここに現れたのだろうか。

一応バンビエツタは死覇装を着ているが、隊長格ともなると誤魔化せるような相手ではないだろう。

モブ死神が、恋次を連れて去っていくと改めて二人がバンビエツタに視線を向ける。

「隊長格が二人ね……まあいいわ。さつきと始めましょ」

まさかこんな所で隊長格を二人相手にすることになるとは思っていなかったが、バンビエツタは何年も元隊長二人を相手に修行をしてきた。

それに尸魂界に来てからは、雑魚ばかり相手にしていたのもあって、少し暴れ足りないと思っていたのだ。

前世と比べると、大分性格に変化が出たなどバンビエツタは改めて実感する。まるで

肉体に引っ張られて、精神が変な方向に変化したのではないかとすら思った。

「悪いが手加減は出来ぬぞ……！」

まず動いたのは、狛村だ。斬魄刀『天譴』の能力で、自身の攻撃を巨大化させる事ができる。

巨大な刀がバンビエッタに振り下ろされるが、それを難なく回避した。

しかし、その攻撃は囷に過ぎず、本命は東仙の方であった。

「遅いわね……！」

「そうはさせない。鈴虫二式『紅飛蝗』」

東仙がそう言った瞬間、無数の刃が周囲に出現し、一斉にバンビエッタに向かって襲い掛かる。

だが、バンビエッタは霊子の弾丸を数多に発射して全て相殺した。

凄まじい爆発が辺りを包み込み、砂埃が舞う。

「それで終わりって訳じゃないでしょ？」

「まさか紅飛蝗が相殺されるとは……」

まさか自分の技が防がれるとは思ってもいなかったのか、東仙は目を見開く。だが、すぐに気持ちを切り替えて次の行動に移る。

紅飛蝗を相殺された事によって、より警戒しなければならぬ相手になったと。

東仙の斬撃を受け止めたバンビエツタの隙を突き、狛村が再び攻撃を仕掛ける。その巨体に似合わない程の素早さで斬撃を繰り出していくが、バンビエツタはそれを軽々と避けていた。

(どうしようかしら、東仙を相手にあまり力を見せすぎるわけにも行かないし……)

東仙は藍染の仲間であるので、なるべく力を見せたくないというのがバンビエツタの考えだった。

だが、隊長格二人を相手に手を抜いた状態で戦うというのは難しい。特に狛村は攻撃力に特化しているのです、下手に手を抜いてしまうと致命傷になりかねない。

「仕方ないわね……少しくらいなら！」簡単に倒れたりしないよね！」

右手に炎を纏わせ、思い切り振る事によって広範囲に炎をまき散らす。だが、二人の目の前に巨大な手が出現して炎を防いだ。

攻撃にも防御にも応用できる優秀な能力だと、バンビエツタは思う。
「その程度の炎では儂等を倒す事はできぬぞ」

確かに総隊長の流刃若火と比べると火力不足は否めないだろうが、それでも十分な火力は出せているはずだ。

それをいとも簡単に防ぐというのだから、やはり隊長格ともなると相当な実力者であると再認識させられる。

「鈴虫三式『黒蜚蟻』」

（何その技?! 知らないんだけど!）

バンビエッタの足元から無数の刃が飛び出して来る。原作では使っていない技に多少驚いたが、それでも対応できない程ではない。

迫りくる無数の刃に対して、バンビエッタは全方位に電撃を放出して全ての刃を破壊した。

「あれを防ぐか……いよいよ厄介だな」

知らない技を使ってこれられると、いやが上にもこの世界が現実として存在していると、バンビエッタは改めて認識させられる。

これ以上知らない技を使われ無いうちに、早々に決着をつけた方が良さそうだと判断した。

だが、それは二人も同じだったようだ。

「狛村、卍解を使う……下がっていてくれ」

「……分かった」

東仙がそう言うのと狛村は卍解の能力の範囲外まで下がり、代わりに東仙が前に出る。

卍解を使わねば勝てないと判断されたのなら、それでこそ長年修行を続けた甲斐があるというもの。

「正解、『鈴虫終式・閻魔蟋蟀』」

瞬間、辺り一面がドーム状の結界に包まれた。

鈴虫終式・閻魔蟋蟀の能力は、この空間内にいる者の、視覚、嗅覚、聴覚、霊圧感知能力を完全に遮断する事だ。

（知ってはいたけれど……実際に喰らうとヤバイわねコレ……）

この能力から逃れるには、鈴虫本体を握らなければどうしようもない。改めて、こんな状況下で勝った剣八の化け物具合を実感する。

触感は生きているので、剣八は自分の体に刀が突き刺さった瞬間を狙ってカウンターを繰り出して東仙を倒したのだが、そんな事をするつもりもないし、それよりもっと良い方法が有る。

「そんなもん、辺り一面全部吹き飛ばせば良いだけでしょうが!!」

耳が聞こえていないのでちゃんと喋ったかは分からないが、とにかくバンビエツタは全方位に爆破属性の霊圧を放出させる。

見えもしないし聞こえないので、周囲がどうなっているのかは分からないが、感覚が戻ってくるまで全方位爆撃を続ける。

「はあっ……はあっ……ば、馬鹿な……」

「まさか……までやるとは……」

ようやく感覚が戻ってくると、辺り一面は爆撃によって完全に更地になっていた。

バンビエッタの爆撃は卍解の範囲外に退避していた狛村にまで及んでおり、頭にかぶっていた兜が破壊されて素顔を晒している。

バンビエッタの近くに居た東仙にいたっては、立っているのもやっとの状態だ。

「こんな目の見えない奴とワンちゃんまで隊長やつてんの？随分と人手不足なのね、尸魂界って」

原作で言った物とはちよつと違うが、千年血戦でバンビエッタが狛村に対して言った事と同じ様な事を言い放つと、東仙は苦笑いを浮かべる。

東仙は藍染から目の前の少女の事は聞かされており、実際にその実力を確かめてくるように言われていたのだが、予想をはるかに上回る実力を秘めていた。

「下がれ東仙、後は儂がやる」

「済まない……任せたよ」

「卍解！『黒縄天譴明王』」

東仙の代わりに狛村が前に出てきて卍解を発動すると、巨大な鎧武者が姿を現す。

黒縄天譴明王はその圧倒的なまでの巨体と怪力によって敵を粉碎する卍解であり、他の卍解と比べると非常に分かりやすいシンプルな性能をしている。

単純な力勝負ならば間違いなく最強の部類なのだが、その巨大さ故に小回りが利か

ず、速さで翻弄してしまえば大した脅威にはならない。

「……デカけりやいいつてもんじゃ無いのよ?」

「ほぎくな!」

バンビエッタの挑発に乗った訳ではないだろうが、狛村は巨大な拳を振り下ろす。

それに連動して明王の腕も振り下ろされ、巨大な刀がバンビエッタ目掛けて迫るが、それを難なく避ける。

鎧を脱ぎ捨てた「断鎧繩衣」ならまだしも、この程度の速度ではバンビエッタを捉える事は出来ない。

「欠伸が出そうな程すつとろいわねえ……こんなんであたしを捕まえようなんて笑っちゃうわ!」

「むう……!」

素早い動きで翻弄され、狛村は思わず声を上げる。攻撃を当てる事さえできれば間違はなく倒せる相手だが、当てる事ができない。

だがそれよりも、疑問に思う事が一つ有った。

あれ程の霊圧を有しているのなら、先程の炎はもつと火力があつてもおかしくは無い。それなのに、あれだけしか火力が無かったという事に違和感を覚える。

それにあまり向こうから攻めてくる様な素ぶりが無いのも、狛村は気になっていた。

何が何でもこちらを倒しに来ているのであれば、もつと積極的に仕掛けてきては良いはず。

それが無いという事は、何かしらの目的が有るはずだ。

「一体何を企んでいる……お主は」

「……おかしいと思つた事は無いの？」

「おかしいだと……？ 一体、何の話だ」

「朽木ルキアの処刑、いくら何でも早急すぎるとは思わなかつたの？」

そう言われてみれば、確かにそう感じたのも事実だった。

幾らルキアが重罪人とは言えど、こうも話がトントン拍子に進むものだろうか、豹村も思つた事がある。

だが、それは上が決めた事であり、自分が口出しできる問題ではないと思つていた。

だが、一度考え出すと様々な疑問が浮かび上がってきてしまい、冷静に思考する事ができなくなってしまう。

(何かが裏で動いているのか……？ しかし、この少女は何を知っている？)

バンビエツタの言っている言葉の意味は分かるが、それが真実なのかは分からない。

そして、本当にルキアの件について関わっているのかどうかも分からない。

分からない事だらけで頭がこんがらがってしまいそうになるが、それでも何とか整理

していく。

バンビエッタの言う通り、ルキアの処刑の決定はあまりにも早く、それでいてスムーズに進み過ぎている様に感じる。

「疑問に思う事があるんなら、見逃してくれないかしらね？」

「……」

狛村は返事を返さないが、その表情は険しくなっていた。

此処で見逃しては総隊長への義理を果たす事はできないが、かといって此処で斬ってしまう事が本当に正しいのかも分からない。

狛村を突き動かす原動力は総隊長への恩義であり、総隊長が死が是であると言え、その通りに従うつもりでいた。

迷いながら戦うなど言語道断ではあるが、思考を放棄する訳にもいかない。

バンビエッタの言うていたとおり、不可解な点が多過ぎるのだ。

「どうやら迷っているみたいね」

「狛村………此処は引こう、彼女の言う通り私も疑問に思わなかった訳ではないからね」

「東仙………ううむ」

東仙程正義と秩序を貴ぶ男が、引くとまで言い出した事で狛村は更に頭を悩ませる事になってしまった。

東仙の心情は分からなくもないが、このまま何もしないというのは如何なものかと思う部分もある。

それに、バンビエツタが嘘をついたりして、闇雲に尸魂界中を混乱させるような真似をする者では無いという事も、目を見れば分かってしまう。

「……農らは何も見なかった、何も起きていない。これでよいか……」

「ああ……濟まない」

東仙としても、彼女の実力を知れた以上はもう十分だと思っている。

これ以上の戦闘は互いに無駄な消耗をしてしまうだけなので、早々に藍染に報告しに行った方が良く考えたのだ。

そして、今後彼女をどうするべきかを検討した方が、藍染にとっても有益な結果になるだろうとも考えていた。

狛村が正解を解くと、バンビエツタはそのまま懺罪宮の方へと向かって行くのだった。

この戦いを、四番隊の隊長である卯ノ花烈が見ていたと知らずに……

再び隊長格と遭遇したんだが？

一足先に懺罪宮の方へと向かった一護と花太郎を、追いかけるようにして走っていくバンビエツタだったが、その途中でふと何者かが近づいてくるのが分かった。

誰かが来る霊圧と殺気を感じたバンビエツタは立ち止まると、自分の霊圧を上げて身構える。

すると、何者かが勢いよく斬魄刀を振り下ろして攻撃してきた。

「あつぶな……!?!いきなり斬りかかってくるなんてどういうつもりよ!」

「これは異な事をおっしゃいますね……貴女は滅却師であり、それもユーハバツハと関係が有る筈でしょう。ならば、何故斬られないと思ったのですか?」

突然斬りかかって来たのは卯ノ花であった。

だが、物腰の柔らかかさなど皆無で有無を言わさぬ迫力を感じ、卯ノ花烈としてではなく、卯ノ花八千流として此処に来たのだと理解した。

何故このタイミングで彼女が来るのかは一瞬理解できなかったが、思い返してみれば同じ四番隊の花太郎を拉致しているの、来るのは当然の結果とも言える。

それに彼女は初代剣八であり、初代護廷十三隊総隊長でもある。千年前にはユーハ

バッハ率いる滅却師達と戦っており、滅却師達を撤退に追い込んだ事もある実力者だ。そんなユーハバッハと関係があるかも知れない人物が現れば、彼女としては放っておく事は出来ないだろう。

「ちよ、ちよつと……！人の話を……！聞きなさいっての……！」

「問答は無用です」

そう言うと、卯ノ花はバンビエッタに向けて瞬歩で急接近してくる。

バンビエッタは咄嗟に刀で防ぐが、卯ノ花の猛攻に圧倒されてしまい、一歩ずつ後退していく。

凄まじい速度と剣圧で攻め立てられ、バンビエッタは反撃どころか防御で手一杯になつてしまう。

静血装から速血装に切り替えるような余裕すらなく、静血装ではない状態で斬撃を受けたらただでは済まないであろう。

「確かにあたしは滅却師だけど……！ユーハバッハの部下つてのは昔の話だし、今は……」

何とか攻撃を防ぎつつ弁明を試みるが、聞く耳持たずといった感じで、更に激しい攻撃を繰り返してくる。

バンビエッタは何とか応戦しているが、このままでは本当に殺されてしまうかもしれ

ないと思い始めていた。

炎と雷撃を織り交ぜつつ攻撃を繰り返すが、悉く交わされてしまう上に、逆にカウンターまで貰ってしまいそうになるのだった。

「今は逃亡中の身だつて……！聞いてるわけ……！あんな……部下を使い捨ての駒扱いする所なんか……居られないっつーの！」

バンビエツタは殺されない様に必死に食らいついていくが、それでも押されている事に違いはない。

初代剣八を名乗り、護廷とは名ばかりの殺戮集団の隊長の一人を相手にしているのだ、当たり前といえれば当たり前の話である。

「昔の話……と言う事は、今は違うのですか？」

「そうだつて言つてんでしょ……！今は無関係なんだから……！！」

ようやく卯ノ花の攻撃の手が止まり、バンビエツタは息を整えながら答える。

彼女がまだユーハバツハと関係があるならば、先の戦いで手加減などせずに東仙と狛村の二人を葬っていたハズなのだ。

そして彼女と戦闘をしたという一般死神達もまた、皆怪我こそしていたものの死傷者は一人もいなかった筈なのである。

そう卯ノ花は考えたようであり、一時的に攻撃の手を止めたのだった。

「では一つ聞きますが……この尸魂界に來た理由は？尸魂界に害を為すつもりなのか、それとも他に何かがあるのか……」

「一護がルキアを助けるのを手伝ってるだけよ……」

「何故彼女を助けようとするのですか、貴女と彼女はほぼ無関係と言っても良い程の間柄でしょう？」

「確かにほんの少しの間しか一緒にはいなかったけど……別に、助けるのに理由なんて要らないわ」

卯ノ花の問いかけに対し、バンビエッタは肩をすくめつつ答えた。

卯ノ花としても、バンビエッタの言葉に嘘は無いと感じたのか、一度考え込むような素振りを見せる。

あの敵対するもの全てを殺し、部下すら使い捨てるユーハバツハの配下とは思えない発言だからだろうか。

しかし、それでもバンビエッタを完全には信用する事が出来ないようで、断する事無くいつでも攻撃を仕掛けられるように刀を構えたままである。

「助けるのを手伝っているといいましたが……つまり、助けること自体は貴方の目的ではないのでしょうか。貴方自身の目的は何なのです？」

「も、目的って言われても……そんなもん特に無いし……まあ、当分は死なないことが目

標かしら……」

バンビエツタは顎に手を当てながら、困った様な表情を浮かべる。

ジゼルにゾンビにされる未来が嫌で逃げ出して来たが、それさえ回避できればいいし、後は死にさえしななければ問題は無いと考えていた。

そうなることややはり目的は生き延びる事であり、それをそのまま口にする、卯ノ花は目を細めつつ問いかけてきた。

「成程……この尸魂界に害をなす気は無いのですね？」

「まあ……そういう事になるわね」

何だかややこしくなってきたが、とりあえずバンビエツタは瀨霊廷に被害を及ぼすつもりは無く、あくまで一護の手助けをしているだけという事を伝えると、卯ノ花烈は少し考える仕草を見せた後、ゆっくりと斬魄刀を下ろす。

しかし、それで納得してくれたかどうかは怪しい所だが、特に追及してくる様子も無いので、バンビエツタは何も言わずに沈黙する事にした。

「それでは最後にもう一つ。かの者達は今何処にいますか？」

「……さつきも言っただけど、こっちは逃亡者なの。迂闊な事は言えないわ」

卯ノ花の言うかの者達とは十中八九、千年前に初代護廷十三隊によって返り討ちにされた滅却師達の事だろう。

当然のことながら居場所を知ってはいるが、果たしてそれを言ってしまったても良いものか悩む。

「そうですか……こちらとしても処刑の件は調べてみる必要があると思っていましたし……ここは一旦引かせてもらいましょう。ですが、次に会った時はまた敵同士です。こちらとしても体裁と言うものが有りますので」

「……ん」

卯ノ花がその場を去ろうとした時、バンビエツタは地面を、それも影になっている個所を指差して告げた。

何故そのような事をするかと言えば、見えざる帝国は瀋靈廷の影の中に靈子による空間を作る事で、千年もの間隠れ潜んで来たからである。

だが、そんな事は知らない卯ノ花からすれば、バンビエツタが何をしているのかまるで分からなかった。

「悪いけどこれ以上は無理よ。これでも譲歩しているんだから」

それだけを言うと、バンビエツタは会話を打ち切って踵を返す。

卯ノ花もそれ以上は何も追及して来なかったので、此方の事情をくみ取ってくれたのだとバンビエツタはそう思う事にした。

そしてようやく懺罪宮、その四深牢へ向かう橋へと辿り着いたその時には、既に白哉と一護が戦っているようであった。

応急処置しかしていない腹部の傷が再び開いてしまったらしく、血が滲んで包帯が赤く染まっている。

「ぐうっ……！」

「まだ意識があるとは大したものだが、その傷ではそう長くは戦えまい。次で終わりとしよう」

再び千本桜が一護を飲み込むべく襲いかかってくるが、その前にバンビエツタが割り込んで一護の代わりにそれを受け止める。

そして夜一同様に割り込んで来たので、二人掛かりで千本桜を弾き飛ばしてみせた。それにより、一護にそれが届くことは無くなった。

「四楓院夜一……久しく見ぬ顔だ。行方を晦ませて百余年……死んだものとはばかり思っていたが」

するとそこに、花太郎がルキアを四深牢から連れ出して来ていた。

それに加えて橋の向こうからは浮竹十四郎までもが駆けつけてくるのが見え、一護の顔を見た途端に驚いたような表情を浮かべていた。

それもそのはずだろう、一護の顔は浮竹のよく知るとある男に似過ぎていたからだ。

「黒崎!?!それに浮竹隊長まで!」

「浮竹、貴様までどう言うつもりだ?」

白哉の問い掛けに、浮竹は少し困ったように眉根を寄せて見せる。

だがすぐ気を取り直して、今はそんな事を気にしている場合ではないと口を開いた。
まずは白哉を止めなければ、話にもならないと考えたからであろう。

「おいおい、こんな所で斬魄刀の解放なんて一級禁止事項のハズだろう。いくら旅禍を追いかけては言ってもやりすぎだぞ」

「戦時特例だ、斬魄刀の解放は許可されている」

そしてルキアもまた、この状況に困惑を隠せない様子だった。

来てはならないと言ったハズなのに、追って来るなど言ったハズなのに、それにもかかわらず一護達はこうして現れた。

しかしいくら一護が強くなったと言えど、相手は白哉である。しかも白哉の正解の前には、流石の一護でも勝ち目など無いのは明らかであった。

「何だよ、ここまで来て今更帰れって言うんじゃないやねえだろーな」

「そんなにもボロボロの身体で、一体何を言っているのだ」

「うるせえ、俺はお前を引きずってでも現世に帰るぜ。こっから先、てめえの意見は全部却下だ!分かったかボケ!」

ルキアの心配をよそに、一護は斬月を構え直す。だが、腹部に巻かれた包帯には血が滲んでいて、立っているだけでもやつとの状態なのは誰の目から見ても明らか事だった。

それに相手は隊長格二人、此方にも元隊長格である夜一がいるとは言えど、どこまで信用できるのかルキアには分からない。

そして、浮竹が乱暴的な事をしないとはいえど、やはり一護達の味方になるとは限らない。

「はいはい、さっさとここから逃げるわよ……夜一」

「急かすなBB、分かっておるわ」

バンビエツタが夜一にそう言った瞬間、夜一は一護の腹部へと貫手を突き刺し、内臓に直接薬を投与する。

一瞬にして意識を失い、崩れ落ちる一護だったが、その身体は地面につく前に夜一に抱き留められた。

これで一護は、あと数時間は目を覚まさない事だろう。

バンビエツタと夜一の二人が居るならば、間違いなく白哉と浮竹二人相手にルキアを奪還する事が出来るだろうが、それでは一護が卍解を習得するタイミングを逃してしまつて意味がない。

それに加えて東仙との会敵により、バンビエツタは自分が藍染に監視されている事を知ってしまった以上、これ以上むやみに力をひけらかす事は避けたいと考えていた。

「治させると思うか？ここから逃げられるとは思わぬことだ」

「ふうん……それはどうかしらね。夜一、先に行つて」

そう言いながら、バンビエツタは一護を指差す。

すると一護を脇に抱えた夜一は、そのまま瞬歩でその場から姿を消した。

その光景を見て、白哉すぐさま瞬歩を使い追いかけようとするが、それを阻んだのはバンビエツタだった。

白哉の瞬歩の速度に付いてこれるのは尸魂界の中でもほんの一握りしかいないが、バンビエツタは滅却師の技である飛廉脚に加え、独自で編み出した速血装を起動させる事によって、とてつもない速度を実現させていた。

「それじゃ、三日後にまた会いましょう。それまでは休戦にさせてもらうわね」

そして白哉が振り返った時には既に、そこには誰も居なかったのだった。

【Side 雨竜】 雨竜 vs マユリ

一方その頃、雨竜と織姫はとうとうとは十二番隊の隊長である涅マユリと戦闘を繰り広げていた。

既に織姫は遠くへと逃げた後なのでここには居ないが、マユリが追いかけて実験台としようとするのを雨竜が阻止する為に立ち向かっているという状況だ。

そして今、雨竜は足殺地蔵から繰り出される斬撃を受け止めるのに精一杯で反撃にまで手が出せずにいた。

（くっ……あの斬魄刀の能力はなんだ？それが分からない以上、迂闊に血装を切り替えるのは危険か）

「妙な技を使うじゃないか……私の足殺地蔵をこうまで防いだのはキミが初めてだよ」

一見生身に見えるが、雨竜の体に刃が通らなくなったのがどういう理屈なのかを考察し始め、その思考回路は加速していく。

よく見ると皮膚の表面に青い紋様のようなものが浮かんでいて、それが何らかの効果を発揮しているのは明白であった。

（皮膚に靈子を直接固定する事で防御力を上げているのか……？いや、あの紋様の形状

からして、血管に靈子を流し込んでいると見るべきかネ)

このわずかな短期間で答えにたどり着いて見せたのは、流星はマッドサイエンティストと言わなければならないか。

後はそれに合わせた毒を調査してしまえば、血装など簡単に突破することだって可能になるだろう。

(ふむ……刃が通らないのであれば、別の方法を使うだけだよ)

「な、何を……!?!」

するとマユリは、先程囮として使われたネムの足を掴んで持ち上げると、それを雨竜に向かって投げつけたのだ。

既に足殺地蔵で斬られている為、四肢を動かす事のできない状態であり抵抗も出来ない状態で、ただ迫り来る少女の体を雨竜は受け止める事しか出来なかった。

勢い良くネムがぶつかった衝撃によって、二人とも地面に転がっていき、そして隙を逃す訳もなく、マユリは再び雨竜の眼前に姿を現した。

「斬撃が通らない相手に、何の対抗策もしていない程私は愚かではないヨ」

そう言つて足殺地蔵の根元にある顔の様な部分を雨竜の顔に向けると、口の所からガスの様なものが噴き出して彼の視界を奪った。

しかしそれに動揺することなく彼は冷静さを保ちつつ、ネムを抱えて後方へ跳躍し

た。

そしてすぐに距離を取って目隠しをする様な形で抱き締めていた彼女を解放すると、再び弓を構えて矢を放つ体勢に入った。

「敵であっても傷ついた女性には情けを掛けるという訳か……けど、そんな悠長な事をしているのかネ？」

「何だと……？」

マユリの言葉の意味を理解しかねる雨竜だったが、直後にその言葉の真意を理解する事となった。

それは、雨竜の体が突然言うことを聞かなくなってしまう、まるで何かに拘束されているかのように硬直してしまったのだ。

足だけではなく腕までも動かすことが出来なくなり、雨竜の動きは完全に封じられてしまったのである。

「効き目が出るまでにほんの少しだけ時間が掛かるのが欠点だが……これでもう君は四肢を動かす事ができなくなるのだヨ」

「くっ……！ 一体お前は何をしたんだ！」

今のガスは足殺地蔵の能力と全く同じ効果を持つようであり、脳から四肢を動かすという信号だけを断ち切るものだと思切丁寧に説明してくれた。

つまり今の雨竜は、完全に動けない状態にされて何もできなくなってしまったのだ。そしてマユリは、雨竜を研究すべくネムに持ち帰らせようと考え、地面に横たわるネムの下へと近寄って行く。

「……うああ、お前もこいつで斬ったから動けないんだったか……この役立たずが!!」
涅ネムの頭部を踏みつけ、何度も蹴りを入れるマユリに対して、雨竜は歯を食いしばりながら睨みつけることしか出来なかった。

雨竜にとってネムは敵であるが、何もそこまでする必要は無いのではないかと思ったのだ。

「止めろ……!!そいつはお前の部下なんじゃなかったのか!？」

「しつこいネ君も……!私が私の所有物をどうしようが勝手だろう」

「な、何……?？」

「それともアレか?敵だろうと傷ついた者には手をさし伸ばすのが君らの好きな滅却師の誇りって奴なのかネ?まったく、君達滅却師はそろいもそろってそれしか言えないのかネ」

マユリの言葉の意味が分からずに、困惑した表情を浮かべる雨竜だったが、それでもかまわずマユリは話をつづけていく。

マユリは滅却師を研究しつくしたと豪語し、精神と肉体にあらゆる刺激をくわえ、そ

の反応を観察し続けた。

生きたまま頭蓋に穴をあけたり、心臓をえぐり出してみたりと、様々な実験を行ったらしい。

「うるさいんだよどいつもこいつも!」滅却師の誇りにかけて「しか言えないのかね君たちは!!まったく理解に苦しむよ。そんなものが何の役に立つと言うんだネ? 気休めにもならないヨ」

「この……! 狂人が……!」

「誉め言葉として受け取っておくよ。それと、私の苦労話はまだこれからだよ」

そして次にマユリが語ったのは、一番最近研究をした滅却師の事だった。

それはどうやら老人であつたらしく、最後の最後まで弟子か孫の名前を叫び続けたそうだ。

それを聞いて雨竜はもしやと思つたが、マユリが見せてきた写真で確信する。

「弟子の名前は何と言つたかナ? ああ、いかんネ……研究を終えたモノには興味が無いから、名前なんて——」

その瞬間、雨竜の霊圧が爆発的に膨れ上がる。

今までの比ではないその霊圧に、マユリは思わず振り返り、そして驚愕に目を見開いた。

四肢の動かせぬはずの雨竜が何故か立ち上がっており、その背には羽根のようにも見える光の帯が二本出現している。

滅却師は研究しつくしたと思っていたが、こんな事象は見たことが無いと、マユリは興味深げに雨竜を眺めた。

「弟子の名前は石田雨竜……そしてその人は石田宗弦。僕の師であり……実の祖父だった人さ」

「ほお……そんな事よりその変化はなにかネ？今までの研究体には見られなかった現象だよ」

「……滅却師の誇りにかけて、お前を殺す」

「……ホウ」

動けなくなった雨竜がなぜ動けるのか、その理由は直ぐに分かった。

〈乱装天傀〉これは、無数の糸状により合わせた霊子の糸を、体の動かぬ箇所接続して無理矢理に動かすという技である。

それはマユリも知っている事だが、あの背後にある二つの光の帯が何なのかは、全く分からなかった。

「良いネエ……やはり君は興味深い、是が非でも生かして連れ帰るとしよう」

雨竜には祖父から言われた事が有る。「守りたいものが違えば、おのずと正義も違つ

てくる」と。

そして「いずれ自らが守りたいものが何なのか分かる時が来る」とも。

だが、今の雨竜には本当に守りたいものが何なのか分からないでいた。

(けれど、許してはいけないものだけは分かっているつもりです)

「な……!?何だ……それは!?」

マユリは驚きの声を上げた。

何故ならば、雨竜の背中に突如出現した光の帯の様な物へと、霊子が収束して行く光景を目の当たりにしているからだ。

尸魂界の構造物は全て霊子によって形作られているが、その結合すらも破壊して霊子を吸収させる雨竜の技に、マユリは戦慄を覚える。

「もはや霊子の収束などではない、これはいわば……霊子の隷属……!人間に許された力の領域を超えているヨ……!!」

今雨竜が行っている技は、バンビエッタから教えられた完聖体だ。

本来なら雨竜は滅却師最終形態を習得するのだが、それを使えば滅却師としての力を全て失う事になる。

だが完聖体であれば、力を失うことなく最終形態以上の力を発揮することが出来るのだ。

しかし、今の雨竜の完聖体はまだ完全な物では無く、本来の半分以下の力でしかなかった。

それは何故なのか、理由は至極単純な事であり、それ以上の力を発揮してしまえば雨竜の体が持たなくなってしまうからである。

（想像以上だヨ……！滅却師の研究などとうにし尽くしたと思っていたが、そんなものは自惚れに過ぎなかったネ！まだこんな力が隠されていたとは……！）

「覚悟はいいか……外道……！」

雨竜の背にある光の帯から霊子が手へと移動し、その手に矢となって形成されていく。

それと同時に皮膚の様子が青から赤へと変色していつて、左腕全体へと広がっていく。

そして弓を引き絞ると、雨竜は矢を放つ。

（迅い……！）

辛うじて回避に成功したものの、その速度と威力にマユリは舌を巻く。

雨竜の放った矢はマユリの右肩をかすめ、その傷口から血が流れ出た。

そして、その時には既に雨竜はマユリの頭上へと移動しており、第二射が放たれていた。

それはもはや砲撃と呼ぶに相応しい一撃であり、着弾すると同時に青い爆炎が吹き荒れる。

「泣いて詫びろ。そして二度と僕の前に現れるな。そうすればここで見逃してやる。断れば……次は今の倍以上の力で撃つ」

「はっ……は、ぐう……！ ず、凶に乗るなよ小僧……！ 滅却師風情がふざけた真似をしてくれたネ！」

左腕は完全に消し飛び、左目も潰れたがマユリは生きていた。その表情は怒りに歪み、その目からは憤怒の色が見える。

肩口からは血が噴き出しているが、そんな事は気にせずマユリは雨竜を睨み付けた。

「よかろう……ならばこちらもそれ相応の力で相手になってやろうじゃないかね……！」

「何だと……？」

「正解」

その言葉と共に、足殺地蔵の刀身が歪な形に変形していく。

まるで肉塊が膨張するように変化していき、やがてその形は人の頭部を持った芋虫の様な姿へと変貌していった。

『金色正殺地蔵』これで君の命運も尽きたヨ」

金色正殺地蔵は、マユリの血から作られた致死毒を霧状にし、半径百間の範囲にまき散らす事が出来る。

当然そんな事をすればマユリ自身も巻き込まれることになるが、自らの血から作り出した毒で死ぬような事は無い。

「君の様な逸材を研究体と出来ないのは残念だが、致し方ない」

「悪いが……僕は死なない。致死量をまき散らす前に、お前ごと撃ち殺す」

「ならばやって見給えヨ!!」

金色正殺地蔵の巨体が雨竜に迫る。地面を砕き、壁を破砕しながら突進してくるその様は、さながら巨大な砲弾である。

雨竜はそれに対して弓を構え、矢をつがえて引き絞り、そして放つ。

そしてそれが金色正殺地蔵へと直撃すると、先程の比では無い程の青炎が吹き上がり、爆発音が鳴り響いた。

霊子で形作られた尸魂界の建造物を、まるで焼いて溶かしているかのように燃え盛っている。

やがて煙が晴れて行くと、胴体に大きな風穴が開いたマユリの姿が有った。息も荒く、立っているのもやっとといった様子だ。

金色正殺地蔵の方も半分以上が消し飛んでおり、完全に機能停止している事が見て取れる。

「……この……滅却師風情があ!!」

刀身が半分以上砕け散ってしまった斬魄刀を振り上げ、そのまま自らの喉へと突き刺した。

その行動に雨竜は驚きの表情を浮かべ、警戒を強める。

すると、マユリの体は液体となつて飛び散つて行き、床一面に広がる。

(斬つた物を液体にする能力……！自分が逃げるために、こんな能力を手元に残しておいたのか……！)

『無駄だよ、この状態の私はどんな攻撃も出来ない代わりに、一切の攻撃を受け付けない』

咄嗟に弓を構えた所で、マユリの声が聞こえてくる。

数日間はその状態から戻る事が出来ない様だが、どうやらこのまま逃げてしまおうという腹積もりらしい。

もう既に雨竜の体には毒が回り始めており、後数分もしない内に死ぬだろう。

『さようなら滅却師。多少面倒な事にはなつたが、私は生きて君は死ぬ。その結末に変わりはないんだヨ』

そして、その言葉を最後にマユリは姿を消した。
だがその後、ネムによって雨竜は解毒薬を投与され、再び懺罪宮を目指して走り出す
のだった。

卍解を習得するための修行を開始したんだが？

そして、懺罪宮から逃げ去って行った一護達はと言うと、卍解を習得するための修行を行っていた。

だがこの場所に逃げて来た当初、一護は不満を漏らしていた。

それは何故かと言えば、自分だけが連れ帰られてしまい、花太郎やルキアは置き去りにされてしまったからだ。

バンビエッタと夜一の二人が居れば、間違いなく二人も連れ帰る事が可能だったはずなのに、何故それをしなかったのだろうか？と。

しかし……

「アంతはまだ他人頼りでいるつもりなの？」

というバンビエッタの言葉により、一護は考えを改めた。

一護がこれと言われるのは二度目であり、自らより遥かに強いであろうバンビエッタの事を、心のどこかでは未だに頼りにしている自分に気が付き、心底情けないと感じたのだ。

だからこそ、今度こそは自分で考えて行動すると決め、卍解の修行へと臨んだのだ。

「立て一護。まだまだこんなものでは終わらぬぞ」

「構わん……そいつが自分で立てぬのなら。無理やりにも引きずり起こしてやるまでだ」

「オツサン……！」

自らを斬月と名乗った男と何度も斬り結びながら、一護は徐々にその動きに慣れていくのを感じていた。

最初は全く対応できなかった斬撃も、今ではギリギリではあるが反応する事が出来る。

既に一護が手にした斬魄刀は五十程へし折られているが、それでもなお戦いは続いていた。

恐るべき早さで成長していく一護に、夜一は内心で舌を巻きつつ、その成長速度を喜んでいた。

だが、斬月を具象化させるための転身体を起動させておくのもそろそろ限界であり、次の瞬間には斬月は只の人形へと戻ってしまった。

「……ふう。……までじゃな」

「……あ、ああ」

いきなり只の人形に戻ってしまったので、若干拍子抜けしている一護ではあったが、

気が付いてみればかなり疲労が溜まっている事に気が付く。

一日目の修行はこれで終了と言う事になり、後は体を休める事となった。

そして……

「いい!? その目隠し外したらぶっ殺すからね!!」

バンビエツタは一護の目を覆い隠す様に、包帯をグルグル巻きにしており、その姿を眺めながら夜一は苦笑いを浮かべていた。

今現在、三人は温泉に浸かっているのだが、当然裸である。

本当ならバンビエツタは入るつもりは無かったが、強制的に夜一に剥かれて入る事になってしまったのだ。

しかし、その夜一は猫の姿に変身してから温泉に浸かっている為、バンビエツタとしては腹立たしい事この上ない。

「な、なあ……ここってあそこに似てるよな。ほら、浦原商店の地下の「勉強部屋」
「まあ、そうじゃろうな……あそこは此処を真似て作ったものじゃからな」

この場所は双極の丘の地下深くに作られており、かなり広大な空間になっている。

浦原と夜一の二人でこっそり作ったそうだが、こんな広大な空間をこっそりと作る事が出来たのかと思うと、一護は何とも言えない気分になった。

そしてようやく、夜一から浦原の正体に関しても話を聞くことが叶い、一護は改めて

驚愕する事になる。

「おかしいとは思ってたんだ。尸魂界にはやたら詳しいし、斬魄刀は持ってるし、こつちの連中には名前を聞いただけで顔色を変える奴まで居た！教えてくれ……アイツは一体何なんだ？」

「まったくしょうがない……ここまで来て教えぬわけにも行くまい。奴は……護廷十三隊の先代の十二番隊の隊長であり、技術開発局の創設者にして、初代局長を務めた男じゃ」

その言葉を聞いて、一護は納得がいった。それならばあの知識量も、異常なまでの戦闘力も全て説明がつくからだ。

だが、そうなるると一つ疑問が浮かんできた。そんな凄まじい人物が何故現世に居て、浦原商店とか言う店を開いているのかと。

「儂としては、それを最初から知っておったBB……お主の方が不思議でならぬのじゃが……」

「企業秘密って言ったじゃない。あたしの事には探りを入れない……けど、その代わりにこちらからは情報を提供する。それがこの取引の内容だったはずだけど？」

「そうじゃったな……」

一護としても、師匠であるバンビエッタの存在は謎に包まれており、知りたい事は山

ほどある。

決して本名を名乗らず、未だにBBという呼び名で通している事も、何か理由があるのだろうと考えていた。

自分が何故滅却師の技を使えるのかも教えてもらっていないし、色々と有耶無耶にされたままの事が多すぎるのだ。

だが、今はそれよりも卍解を習得する事が最優先であり、その点に関して言えばバンビエツタも協力的だった。

「ふう……そろそろ上がってもいいか？俺もう結構汗かいてるんだけど」

ずっと浸かりっぱなしだったせいで、すっかり体が火照ってしまっていた一護は、そう言つて二人に許可を求めた。

そして顔を手で拭つた瞬間、意図せず目隠しの包帯が解けて視界が開けてしまった。

「ま、待つてくれ師匠！別にわざとじゃ……」

「うっさいボケ!!死ねエ!!!」

咄嗟に目を閉じようとするものの時既に遅く、一護はバンビエツタの怒声と共に、顔面に拳が叩き込まれて吹き飛ばされてしまう。

そして、そのまま意識を失つてしまうのであった。

卍解習得のための修行は順調に進んでおり、一日目は斬月との修行で終わった。

そして二日目も変わらず斬月との修行を行っていたが、突如として爆発音と共に何か落下してくるのが見えた。

それは恋次であり、どうやら集中して修行ができる場所を探してこの場所にたどり着いたらしい。

「時間がないって……そりやどういう意味だよ」

「そうだな……てめえには教えておいてやる。ルキアの処刑時刻が変更になった」

「……何だと？」

「新しい処刑時刻は……明日の正午だ」

尸魂界に来てから夜一が集めた情報によると、ルキアの処刑猶予期間は25日となっていた。

そして、断崖を通り抜ける時に時間軸が若干ずれたことにより、この三日間の修行を行っても八日程猶予があったはずなのだ。

しかし、ルキアの処刑が明日に変更されたことにより、修行する時間が今日という一日だけに減ってしまったのだ。

「明日じゃと……う？それではとても卍解なぞ……！」

間に合わない、そう夜一は思った。

だがバンビエツタは、後一日しかなかろうと一護が卍解を習得できると知っているの
で、焦る様子もなく平然としていた。

とは言えど、ここまで割と予想外の事が起きているので、正直不安がないわけではな
い。

なので、念には念を入れるために……

「……だったらあたしも相手にしてもらおうわ。斬月と私の二人掛かり……これでどう
？」

「上等だぜ……出来なかつた時の事なんて知つた事じゃねえ。処刑が明日になつたつて
んなら……今日中に片付けりゃいいだけの話だ!!」

こうして、急遽バンビエツタと斬月の二人を相手にしなければならなくなつた一護
は、今までよりも激しい戦いを強いられる事になつた。

バンビエツタへの攻撃は禁じられ、一護は斬月へのみ攻撃を行う事が許されている。

だが、当然バンビエツタは一護へと攻撃してくるので、いかに上手くバンビエツタの
攻撃を避けながら、斬月に攻撃をするかがポイントとなる。

遠距離からバンビエツタが霊子の弾丸を打ち込み、斬月は一護へと斬りかかつてく
る。

遠近のバランスが取れた相手に対し、一護は苦戦を強いられた。

そして、時間だけが経過していき……

「じゃあ……俺は行くぜ」

「ああ……」

恋次は卍解を習得することができたようだが、一護は未だに習得できていない。

恋次としても、本当に一護が卍解までたどり着けるのか半信半疑であり、このままでは処刑の時間に間に合わないかもしれない。

だが、一護は諦めることなく修行を続けていた。斬月が幾人にも分身をし、既に一対十程に増えている。

「言っておくが……刻限が迫っているからと言って手を抜いてやるつもりはないぞ」

「はっ！あたりめーだそんなもん！さっさと来いよ！」

斬月の言葉に対して、一護は余裕を持つて答えてみせる。その言葉を聞いた斬月達は一斉に動き出し、一護を取り囲むようにして攻撃を仕掛けてきた。

四方八方からの同時攻撃であったが、なんとか冷静に対処して全ての攻撃を受け流すことに成功する。

その後も次々と斬月達が斬りかかって来るが、一人一人確実に捌き、時には反撃を繰り出す。

（さてと……あたしは念の為に外の様子を見に行くとしますか）

バンビエッタは一護との修行を切り上げると、そのまま地上へと出て行った。

バンビエッタはいなくなつたが、一護はひたすらに斬月との戦いに没頭し、卍解習得に向けて集中力を高めていった。

またもや隊長格と出会ってしまったんだが？

地上へと出たバンビエッタではあったが、この後どうするべきかを迷っていた。

一先ず思いつくのは、四番隊の救護詰所の地下救護牢に捕まっている泰虎、雨竜、岩鷲と合流することくらいだが、それには大きな問題が一つある。

どう言う訳かその場所には、織姫とやちるを背負った剣八が来ることになっているので、下手したら剣八と鉢合わせてしまう事になるのだ。

剣八がバンビエッタを知った可能性は低いが、それでも0でない限り安心は出来ない。

あんな戦闘狂に戦いを挑まれるなんて、たまったもんじやないとバンビエッタは思う。

だが……

「で……どうなんだ織姫ちゃんよ。結局一護の野郎は生きてんのか？」

雨竜と別れた後、織姫は十一番隊の隊士である男と共に十一番隊の隊舎までやって来ていた。

途中でやちるに見つかり、そのまま一緒に付いて来たというわけなのだが、織姫とし

ては雨竜が無事なのかが気になっていた。

「え……う・えつと、そこまではちよつと……よく分かんないですけど」

一角からの質問に、困り顔を浮かべながらも答える織姫。それを聞いて、一角は頭を掻きながら溜息をつく。

そもそも、一護とは突入の際に離れ離れになったきりであり、それ以降連絡も取れていないのでどうしているのかまるで分からないのだ。

「くだらねえ事聞くな一角。生きてるさ……奴は生きてて、まだ強くなろうとしてやがる」

そう答えたのは剣八であり、一戦交えただけであの男が只で死ぬハズがないことを理解していた。

だからこそ一護が生きていることは確信し、それどころかさらに強くなつて戻つてくるであろうことも予測できた。

そんな剣八の言葉を聞き、一角は納得したような表情を見せる。

一角もまた、一護と戦っているので分かるのだ。あれほどの強さを持つ者が、簡単にくたばるはずがないということが。

「それよりも隊長……聞きましたか？何でも隊長格二人を退けた旅禍がいるそうですよ？」

弓親が、噂でそんな様な事を聞いたことがあるのを思い出し、話題を変える。それは、バンビエツタが狛村と東仙の二人と戦った時の事だろう。

東仙と狛村の二人は卍解を使用しており、更にはバンビエツタは周囲を破壊しつくす程の爆撃を行っているのだから当然知られても可笑しくは無い。

しかも、その場面を卯ノ花にまで見られているのだから、余計だ。

だが実際には、具体的に誰が誰に負けたのか仔細までは知られていないようであり、その辺りが謎となる。

彼女が総隊長に報告したのならもつと具体的な内容になっているはずだ。しかし、何故このように曖昧な表現にとどまっているのか。

なんにせよ、剣八の耳に届いてしまった時点でバンビエツタにとっては不幸以外の何物でもないが。

「面白れえ……一護との再戦も楽しみだったが、そいつと殺し合ってみんのも楽しそうじゃねえか……」

弓親の話を聞いた剣八は、口元を吊り上げ凶悪な笑みを浮かべる。

この男は強さというものに関して異常なまでの執着心を持っている。故に戦いが好きであり、強者と戦うことを喜びとしている。

一護との戦いは、まさに剣八にとって至福の時間であったし、それ以上に強い相手が

現れるのであれば、剣八としては喜ばしい限りだ。

「行くぞお前等……一護とそいつどつちでもいい、俺と殺り合えんならそれでいいんだからよ」

剣八はそう言い残すと、さっさと十一番隊の隊舎から出て行ってしまふ。

それに続いて四人も隊舎を出て、そのまま瀨霊廷内を走り抜ける。

これが、約数時間前の出来事だ。

そして今、バンビエッタは四番隊の救護詰所の地下救護牢を目指して走っていた。

だが、具体的な場所までは不明なので、適当に走り回っても見つかるかどうか怪しい。

そして、死覇装を着ているとはいえど、既に顔もバレているので、その辺で死神に聞いて回るというのも無しである。

どうしたものかと考えていると、遠くから複数の足音が聞こえてきた。

「あ、BBさくくん！おーい！こっちだよー！」

「ん？織姫……って、ゲエ!？」

バンビエッタの姿を見つけた織姫が、元氣よく手を振りながら近づいてくる。

近づいてくるのだが、なんと剣八の背に乗っていた。

そしてバンビエッタの存在に気が付いた剣八は、ニヤリと笑って立ち止まる。

どうやら本能で気が付いてしまったようだ。「この女が隊長二人を退けた奴だ」という事に。

「へえ…… temeエが隊長二人を相手にして生き残った旅禍か」

「うげ……最悪」

剣八の言葉にバンビエツタは思わず眩き、後ろに居る仲間たちに目を向ける。

原作同様に、現世から来た組は全員揃っているので一安心しつつ、この場をどう切り抜けようかと考える。

「じゃあ剣ちゃん！あたしたちはいつちーを探しに行くからねー！ばいばいー！」

「おう、お前等も早く行け……邪魔になるだけだ」

やちるは剣八の背中から飛び降りると、他の者達と共にその場から去って行った。

織姫や雨竜はバンビエツタの事を気にかけていたが、この場に残られても巻き込まない自信が無かったので、やちる等と共に一護の搜索に向かうように言っておいた。

これで、とりあえずは目の前の敵に集中しなればいけなくなつたわけだが、こんな戦う相手が強ければ強い程自らも強くなるという狂戦士なんかとは戦いたくないというのがバンビエツタの本音だったりする。

因みに涅マユリというマッドサイエンティストも、下手に手を出すとんでもない実験台にされかねないので、同様にかかわりたくない相手の一人だ。

「さて、邪魔な奴らも居なくなつたんだ……さっさと始めようぜ？」

劍八はそう言うと同時に、斬魄刀の切っ先をバンビエツタの方へと向ける。

始解である〈野晒〉も会得しておらず、物語もまだ序盤の段階なので、劍八も然程強いわけではない。

劍八は常に強い相手との戦いを望むが故に、本能的に敵に合わせて霊圧に枷をかけて実力を調節して戦っているのだ。

「来ねえってんなら……こっちから行くぜ！」

「ちよ……待ちなさいよ！」

バンビエツタが止める間もなく、劍八は一瞬にして間合いを詰めると、振り下ろした刃を返し横薙ぎに払う。

それをバンビエツタが後方に跳んで回避し、ついでに炎を薙ぎ払うように放つて牽制する。

だが、劍八はそれを斬魄刀で切り払うと、今度はバンビエツタの頭上から斬りかかってきた。

咄嗟に刀を抜いて受け流すと、劍八の斬魄刀はそのまま地面へと叩きつけられ、床を碎き割つて破片を周囲に撒き散らす。

「おいおい……隊長を二人退けた力はこんなもんじゃねえだろ！」

「うるさいわねえーだから何だつてのよ!!」

剣八はそのまま斬魄刀を振り上げて追撃しようとするが、バンビエツタはそれを刀で受け止めつつ、そのまま後方に跳躍して距離を取る。

ついでに爆破属性の弾丸を数発放つが、剣八はその全てを切り裂いた。

しかし、切り裂いた事によってそのまま爆発を喰らうことになった剣八は、爆炎に飲まれて姿が見えなくなる。

「多少は効いたぜ……だが、こんなもんじゃ眠気覚ましにしかならねえぞー!」

そう言いながら煙の中から飛び出してきた剣八は、そのままバンビエツタに襲い掛かる。

幾度となく刀がぶつかり合い、火花を散らせながらも、互いに一步も譲らない攻防を繰り返す。

(手加減してる場合じゃないって分かってるけど……!)

今現在、バンビエツタは東仙と狛村を退けた時と同じ力で、剣八と戦っている。

だが剣八もまた、原作ではその二人を圧倒して見せたほどの実力者であり、その強さは確かなものだ。

一護と同じように、剣八の調整が間に合わない程力を一気に上げてしまえばいいのだが、藍染に監視されていると分かっている以上、そんな事は出来ない。

「いいぜえ!! 楽しいなあ! もつと楽しませてくれよ!!」
「うっさいつってんのよ!! こっちは微塵も楽しくないわ!!」

剣八は心底愉快そうな笑みを浮かべているが、バンビエツタは必死の形相で戦い続けている。

このままでは埒が明かないと考えたバンビエツタは、静血装から速血装に切り替えて、さらに加速する事にした。

そしてそのまま飛廉脚を発動させて、高速で移動しつつ雷撃を放っていく。

剣八はそれに反応できず、まともに食らってしまう。

「しゃらくせえ! 小細工なんざ通用しねえんだよ!!」

何度も雷撃が直撃しているにもかかわらず、剣八は平然としており、それどころかバンビエツタに向かって突っ込んで来た。

速血装と飛廉脚を使っている以上、速さはこちらの方が上だが、ダメージを与えるにはもつと力を上げるか、動血装を使わないと駄目だろう。

「そこかあ!!」

「はあ……!?!」

高速で移動しているはずのバンビエツタの目の前に、いつの間にか剣八が居た事に驚き、思わず声を上げてしまう。

だが、既に剣八の刃は目の前に迫っており、咄嗟に身を捻って回避する。

どうやら本能でバンビエツタの動きを予測していたらしく、追いつけないなら先回りして仕留めれば良いと判断したようだ。

一旦距離を取ろうと後ろに下がると、剣八は追ってくることなくその場に止まった。

「どうした……かかってこいよ、次は確実に斬ってやるぜ？」

「（これ以上時間を掛けるわけにはいかないか）仕方ないわね……少しだけ本気出してあげるわ……」

少し前に何処からか感じた雨竜の急激な霊圧上昇から、雨竜が未完成の滅却師完聖体を使用したことは間違いないだろう。

ならば、自分も多少使っても差し支えは無いのでは？と判断したバンビエツタは、霊圧を高めていく。

「なんだ、ようやく本気で戦う気になったのかよ。さつきまでの戦いはお遊びだったって訳だな……面白れえじゃねえか！」

「一瞬で終わらせてあげるから、覚悟……ん？」

滅却師完聖体を使おうとしたところで、何処からか霊圧の急激な上昇を感じたバンビエツタは、そちらに視線を向ける。

このタイミングで起きる出来事と言えば、ルキアの処刑が実行されはじめている頃だ

ろう。

バンビエツタが居る場所からは遠く離れているため、直接確認することはできないが、間違いなく何らかの動きがあるはずだ。

原作通りに事が運ぶなら、間違いなく処刑は阻止されるはずだが、何かの間違いが起こつて処刑が執行されてしまつては困る。

「あなたの相手はまた今度!!こんな事してる場合じゃないのよ!!」

「逃げんのか……!?!逃がすわけがねえだろ!」

バンビエツタが踵を返して駆け出すのを見て、剣八もすぐさまその後を追うが、その時にはもうバンビエツタの姿は見えなくなっていた。

完全に見失ってしまった剣八だったが、このまま双極の丘へと向かえば、必ずバンビエツタに会えるはず。

そう考えて、剣八もそのまま双極の丘へと向かつて走り出したのだった。

【Side一護】 一護VS白哉

そしてバンビエッタが双極の丘へとたどり着くころには、既に双極の磔架が破壊されており、一護がルキアを救出した所であった。

一護はルキアを横抱きにして抱えており、それを見ていたバンビエッタは安堵のため息をつく。

「師匠！いい所に来たじゃねえか！」

「お、おい一護貴様一体何を……!?!」

ルキアが一護に一体何をするつもりなのか問い詰めようとするが、一護は何も言わずにルキアを掴んでいる腕を振り上げていく。

何をするかに気が付いたルキアは慌てて止めさせようとするが、時すでに遅く、一護はそのままルキアをバンビエッタの方へと全力で投げつけた。

「あああああああああああ?!?!」

「何であたしに!?!」

バンビエッタは咄嗟に飛んできたルキアを抱き留め、なんとか落とさずに済んだ。

いきなり人を投げつけるという暴挙に出た一護に対して文句を言うために顔を上げ

ようとすると、周囲を死神達に取り囲んでいる事に気が付く。

一般隊士が大半のようだが、その中には一番隊副隊長である雀部長次郎忠息、二番隊副隊長の大前田希千代、そして四番隊副隊長の虎徹勇音も居た。

(ふうん……原作だと一護に瞬殺された面々ね。さて……どうしましょうかね?)

正直、一般隊士や副隊長ならバンビエッタ一人で十分対処できるが、数が多いのが多少面倒くさい。

すると、そんな一般隊士を蹴散らしてこちらに近づいてくる者が居た。

それは恋次であり、彼もルキアを助けるために駆けつけたのだ。

「へい恋次!!パス!!」

「お、お主まで……!?!」

「な、何してんだテメエ!?!」

一護のみならず、バンビエッタにまで投げられてしまい、ルキアは困惑の声を上げる。

恋次もそれには驚いたようで、思わず声を上げてしまったが、今はそれどころでは無い。早くルキアを連れてこの場から離脱しなければ、死神達にルキアを奪還されてしまう。

そして案の定、バンビエッタの周囲に居た死神達は、ルキアを抱える恋次へと狙いを変え、一斉に襲いかかってきた。

だがその瞬間、辺り一面に雷撃が迸り、襲い掛かろうとしていた死神達は薙ぎ払われ、吹き飛ばされる。

「さっさと行けつての！邪魔だから!!」

「お、おう……！誰だか知らねえが、恩に着るぜ……!」

どうやらバンビエッタが援護してくれたらしく、その隙に恋次はルキアを抱えながらその場から離脱した。

だがそれを白哉が見逃すわけがなく、すぐに恋次を斬り伏せるべく、一瞬にして間合いを詰めてくる。

そして振り下ろされた斬撃に対し、それを一護が受け止めた。

「見えてるって言ったろ……朽木白哉!」

恋次がルキアを連れて離れていくのを視界の端で確認した一護は、目の前の白哉へと意識を集中させる。

千本桜を斬月で受け止めたまま、鏢迫り合いをしている状態で、互いに睨み合った。

「何故だ……何故貴様は、何度もルキアを助けようとするのだ」

「こつちが聞きてえよ。アンタはルキアの兄貴だろ？ だったら何で助けようとしねえんだ」

「下らぬ問いだ……その答えを貴様が知ったところで、到底理解できぬだろう」

一護の問いに対して、白哉は冷たく言い放つ。

確かに一護はルキアの家族事情などは詳しく知らないため、彼が言うようにその言葉の意味を理解する事は出来ない。

しかしそれでも、出会ってほんの僅かの付き合いしかないルキアのためにここまで動く事が出来る一護が、何も思わないはずがない。

「これ以上の問答は無用……行くぞ……!」

そう言つて白哉が霊圧を爆発させると、それに一護も反応して霊圧を開放する。

互いの霊圧同士がぶつかり合い、まるで大気が震えて振動しているかのような錯覚に陥るほど、周囲の空間が軋んでいく。

そして二人同時に距離を取り、互いに刀を構えた。

「……もはや私のとるべき道は一つ。黒崎一護、貴様を斬る……そしてルキアをもう一度、今度は自らの手で処刑する」

「させねえさ……その為にここまで来たんだ」

白哉の言葉に対して、一護は不敵な笑みを浮かべつつ返答するが、それが気に障ったのか、白哉は眉間にしわを寄せた。

そのまま二人は駆け出し、刃を交えていく。凄まじい速度で互いに攻防を繰り返す。一撃でも喰らえば致命傷になるような攻撃が交わされていた。

衝撃波があたり一面に発生し、地面が砕かれて砂煙が巻き起こるが、二人の戦いは止まらない。

「成程……瞬歩までは完全に会得したようだが……」

「暢気に俺の力を分析してる場合か？ 斬るんじゃないのかよ、俺の事をよ」

一護が呟いた通り、白哉は戦いながらも冷静に一護の実力を測っていた。

瞬歩を使いこなしている時点でその成長ぶりには目を見張るものがあるが、それでも斬り捨てる以外には選択肢は無い。

だが一護もそんな事は百も承知であり、白哉の斬撃を避けながら、逆にカウンターを仕掛ける。

しかしそれは白哉として想定済みであり、簡単に反撃を許すつもりはない。

「出せよ卍解……！ テメエの力の全てを叩き潰して、ルキアの処刑なんてくだらねえ真似を止めさせてやる……！ 」

「……………戯れ言を。散れ『千本桜』」

無数の花弁が舞い上がり、一斉に一護に向かって襲いかかってくるが、一護は斬月へと霊力を込めていく。

それと同時に斬月の白いラインが赤く染まっていき、やがて染まり切ると同時に月牙天衝を放った。

今までの月牙天衝とは比較にならない程の威力を秘めており、千本桜を相殺してもなお地を切り裂いて周囲に亀裂を走らせる程であった。

「出せってんだろ、卍解をよ……!!俺は絶対にお前を倒すぜ!!」

「良いだろう……私の卍解、その目に強く刻むがいい……」

白哉が千本桜を手放すと、それはゆっくりと地面に落下していき、吸い込まれるように消えてしまう。

そのかわりに白哉の背後から無数の刀身が浮かび上がっていき、列をなすその光景に一護は思わず息を飲む。

「卍解『千本桜景厳』」

そして、その刀身の全てが刃の花弁へと姿を変え、一斉に一護へ襲い掛かる。

まるで一護を取り囲むかのように広がった花弁の群れに、一護は慌ててその場から離れようとするが、一足遅かった。

数億にも及ぶ刃の花弁、それによる死角のない全方位攻撃が、一護を瞬く間に飲み込んでいく。

「くそっ……卍解相手に、始解だけで勝とうなんて舐めた話だよな」

「……その口ぶり。まるで貴様も卍解へと至ったように聞こえるが……口には気を付けることだ」

「ああ……だつたら見せてやるぜ。俺の言葉が信じられなくても、その目で見りや信じろしかねえだろうからな」

一護はそう言い放つと、手にしていた斬月に霊圧を込め始める。

卍解とは、死神の最終奥義であり、それを会得できるものはごく僅かな存在のみとされている。

白哉にしてみれば、それを死神ですらなかつた一護が使える訳がないという気持ちがあり、その表情は険しい。

だが一護から放たれる霊圧の量が尋常ではなく、やがて斬月が眩い光を放ち始めた。

「卍解!!」

「……っ!!」

やがて斬月から凄まじい霊圧が溢れ出し、閃光のように周囲を包み込む。

砂塵が舞い上がり、地面が砕けて辺り一帯に衝撃が走るが、それでも一護の姿が見えず、白哉は警戒心を強めていた。

光が収まり、砂塵が風に飛ばされていくと、そこに立っていたのは宣言通り卍解を発動させた一護。

『天墜穿月』

「なんだ……それは?」

一護の手に握られているそれを見て、白哉は初めて見るそれに眉間のしわを深くした。

それは刀ではなく弓の形をしており、死神ではなく滅却師の様に見えるからだ。

一護の手に携えられている黒い弓は、霊子の塊で形成されているかのようで、時折揺らめいては光の粒のような物が散っていた。

「戯けた事を……そのような卍解で私に勝つつもりか？笑わせるな」

白哉は吐き捨てるように言うと、再び刃の花弁を一護に向けて放った。

先程と同じように全方向からの攻撃であるが、一護は高速で移動しては矢を放って千本桜の全てを消滅させていく。

一度に無数の黒い矢が放たれ、千本桜の刃を次々と吹き飛ばして破壊していった。

（師匠が言っていたな……「月牙は滅却師で言う所の神聖滅矢のようなもの、必殺技として考えずにもっと小技の様に連発できるようにしろ」って）

一護はかつて、バンビエッタに言われた言葉を思い出しながら攻撃を続ける。

一護の放つ矢は、連発できるように調整した月牙天衝であり、千本桜を射抜いては確実に数を減らしていた。

しかし白哉とて黙ってやられるつもりは無く、千本桜を操作しながら斬撃の一閃を一護に向かって振り下ろす。

「何故私ごと射貫かぬのか……余裕のつもりか？ 傲りは身を滅ぼすぞ」

そう言つて再び刃の花卉を一護に向かわせるが、それを一護は避け、矢で吹き飛ばして防ぐ。

そしてそのまま一瞬にして白哉の懐に飛び込むと、霊子の弓を刀へと変化させて斬りかかった。

だが、千本桜の花卉によって阻まれてしまい、その隙を狙つて一護の頭上から大量の刃が降り注ぐ。

一護はそれを素早く移動して回避するが、その動きに合わせて千本桜も追ってきた。

(何だこの速力は……千本桜が追いきれぬだと……!?)

一護の動きを計算に入れて操作しているにもかかわらず、千本桜が千本桜に追いつけないという事態が起こり、白哉は内心驚愕する。

だが、手掌で操作をすることにより、その刃の速度は二倍以上にも跳ね上がっており、すぐに一護に捉える事が出来た。

しかし、その全てを刃に変化させた天墜穿月で斬り落とされる様を見て、白哉は更に目を見開く。

「莫迦な……全てを叩き落としたというのか……!」

「言つたよな、奇跡は一度だつて……だつたら二度目はなんだ？」

いつの間にか白哉の背後に回っていた一護は、天墜穿月を振り上げている。

その瞬間まで気付けなかった自分に驚きながらも、白哉はすぐに迎撃しようと千本桜を操作するが、それよりも先に一護の腕が動いた。

「そうか……卍解としての戦力をその身に全て凝縮することで、卍解最大戦力での超高速戦闘を可能にしたと言う訳か」

刃の花弁で天墜穿月の一撃を防いだ白哉だったが、その刃は右肩をかすめて血を流させる。

矮小な卍解だと侮り、驕っていたのは自分であったと、白哉は一護に対する認識を改める。

この僅かな期間で卍解まで至り、そして自分の攻撃を全て捌くほどの技量を持っているのだ。

「ならばその力ごと……貴様の全てを押しつぶしてくれろ！」

白哉の霊圧が膨れ上がったと思った直後、一護は背後に殺気を感じてその場から飛び退く。

すると、今までいた花弁だった千本桜の刃がどンドン集まっていき、無数の白い刀が周囲を取り囲むようにして展開されていた。

【Side一護】 一護VS白哉②

『殲景・千本桜景厳』

凄まじい数の白い刀が列を成している様は、まるで白い壁が動いているような光景である。

その全てが一斉に襲い掛かってくるような事もなく、二人の周囲を浮かんでいるだけだが、それでも十分な脅威と言えた。

一護はその状況を見て苦々しい表情を浮かべると、即座に天墜穿月に霊圧を込め始める。

「この千本の刃の葬列が貴様を一度に襲う事は無い。この殲景は、私が必ず自らの手で斬ると誓った者にのみ見せる姿だ」

「……そりゃあ光栄なことって」

そして白哉の手に白い刀が一振り握られ、それを見た一護もまた黒い弓を構えて集中した。

一護が無数の矢を放つと、白哉はそれを全て叩き落としながら一護に肉薄する。

斬りかかってきた白哉の刃を、一護は刀に変化させて受け止めると、真っ白い刃と

真つ黒い刃が激突して刃り一面に衝撃波が撒き散らされた。

そして高速での斬撃の応酬が繰り広げられ、二人の戦いは一気に加速していった。

(迅ええ……！殲景つてのになつてから更に速度が増してやがる。けど、俺もまだ速度を……)

そう思つた瞬間には、すでに白い刃が眼前に迫つて来ており、一護はそれを咄嗟に静血装へと切り替える事で辛うじて防ぐ。

咄嗟に切り替えることが出来ていなければ、首を斬られていたであろう斬撃だった。

しかし、白哉の攻撃はまだ終わらない。そのまま一護の背後から、刃を振り下ろしてきた。

「この刃が通らぬとはな……」

「くそ……静血装でも防ぎきれねえのか！」

先程とは違い完全に直撃してしまったその白い刃は、一護の腕に食い込んで止まる。

一護は腕に刺さっている刃を引き抜こうとしたが、それが動く前に白哉は刃を引き抜き、そのまま追撃を仕掛けて来た。

一護はそれを避けようとするが、白哉が刃を振るう方が早い。

刃は一護の肩口を切り裂き、そこから血が噴き出す。

「どうした……随分と動きが鈍くなっているではないか、黒崎一護」

「そうか？俺にはまだあんたの剣は止まって見えるくらいだけだな」

白哉の挑発に対して、一護は強がりです返すが、白哉の言う通り、確かに一護の動きは鈍くなっており、白哉の刃を避けるので精一杯だ。

それは、決して殲景を使っている白哉の速度が上がっているからではない。殲景はバラバラの刃を刀の姿に圧縮することによって爆発的に殺傷能力を高めるだけの物であり、決してスピードを上げられるものではないからだ。

ならば何故一護は白哉の攻撃を避けられなくなっているのか。

「俺のスピードが落ちてるって……そう言いてえのか」

一護の体は自らの卍解の力に耐え切れず、すでに限界を迎えようとしていた。

そもそも卍解は長い時間をかけて習得する物であり、そしてそれを完全に自ら物とするために更に修練を積む必要がある。

だが、一護はたった二日で卍解を習得して、自らに馴染ませる事もなくそのまま戦闘に赴いている。

つまり、本来であれば既に体が悲鳴を上げてもおかしくはない状態なのだ。そんな状態で、一護は天墜穿月という卍解の力を制御しきれはるはずもない。

「終わりだ、黒崎一護」

（くそ……動けよ……あと少しでいいから……動いてくれ……!!何のために此処まで

来たと思つてんだ……!」

白哉の刃が迫る中、一護は必死に体を動かそうとするが、もうその体に自由は無くなつていた。

そして刃が一護の首に迫り、まさに一閃されようとしたその時……

「言つたじゃねえか……てめえが死んだら困るんだつてよ。そんな力まで使つておいて何死にそうになつてんだよ」

「何者だ……貴様」

「何者だ……?名前なんか……ねえよ!」

動けぬはずの一護が突如として動きだし、白哉の刃を手で受け止めて見せた。

それだけでも驚愕に値する事ではあるが、それよりも白哉が驚いたのは、一護の顔に虚の様な面が張り付いていたことだ。

そして、白哉が何かを言うよりも早く、一護は刃を振るつて白哉を一閃した。

その一撃によつて白哉は胸を斬られてしまい、血が噴き出してはいるようだが、咄嗟に背後へと飛び退いて致命傷を避けたようだ。

「やつぱりテメエは下手糞だな一護!俺が本当の力の使い方つて奴を見せてやるぜ!」

すると、一護の周囲に黒い矢が無数に展開されていき、次の瞬間には矢が一斉に放たれ、白哉に襲い掛かった。

まるで豪雨のように降り注ぐ矢の雨に、白哉は殲景の刃を一斉に振るって防御する。本来なら、この戦いにおいてその刃は一斉に振るうような事はしないつもりだったが、そうでもしなければ防げぬほどの攻撃だったのだ。

そして一護も自ら刃を振り上げ、白哉に向かって行く。

無数の白い刃と黒い矢が飛び交い、まるで嵐のような光景が広がるが、その中で白哉は冷静に思考を巡らせていた。

「この霊圧の感触……その仮面……貴様、虚か……!」

「さあな……そんな事をためえが知る必要はねえよ!」

先程までの一護は虚空から矢を出すことなどせず、いちいち刀と矢を切り替えて使っていた。

しかし、今の一護は矢を雨の様に射出し、尚且つ手にした刀からは月牙天衝を放っている。

先程とはまるで別次元の攻撃の密度に、白哉も徐々に追い詰められていく。

「おせえ……遅すぎるぜ朽木白哉!!」

「な、何だと……!?!」

前方から月牙天衝が迫って来るだけではなく、既に頭上からも矢が降って来ており、白哉は再び殲景の刃を一斉に振るって防ぎ始める。

だが、一護は背後からも月牙天衝を放ち、前後左右、そして上とあらゆる方向から白哉に襲い掛かってくる。

そして、白哉はその包囲網から抜け出す事が出来ず、遂に一護の斬撃をその身に受けてしまった。

「はっはー!! テメエはこれで……」

そう言いかけた瞬間、一護の腕が自らの仮面に触れた。そしてそれを勢いよく引き剥がすと、仮面はバラバラに碎け散って消えていく。

黒く染まっていた瞳も元通りになっていき、一護は自分の手を見つめながら呟いた。

「悪りーな……邪魔が入っちゃまってよ……さあ、仕切り直しといこーぜ」

そこには、いつも通りの黒崎一護の姿があった。

先ほどまでの姿と力で戦っていたら、間違いなく一護が勝利していただろう。しかし、そうはせずに一護は普段の状態に戻ってしまった。

つまり、あの状態で白哉に勝とうとも、それは一護の本意では無いという事なのだろうか。

「……良かろう。今の姿が何だったのかは問うまい」

最早お互いに刀を何度も振るう程の力は残っていないだろう。白哉も先ほどの一護の攻撃でかなりのダメージを受けているはずだ。

それに殲景の刃の大半が砕かれてしまつて、もはや機能しているとは言いがたいだろう。

互いに血を流し、ボロボロの状態で向かい合う二人。

白哉は既に構えすら取らず、ただ立っているだけであり、一護も剣を構える事もせず、自然体で佇んでいる。

「最後に……もう一回だけ聞いていいか？なんでアンタは……ルキアを助けようとしなかった」

「兄が私を倒せたら……その問いに答えることにしよう」

そう白哉が言った直後、白哉へと千本桜の花弁が集まっていき、まるで翼の様に広がっていく。

手にしている白い刀にもそれは広がっていき、翼と刀が一体となった姿へと変貌していく。

『終景・白帝剣』これで終いとすると、黒崎一護」

「はは……凄えな。悪いけど俺は、そんなすげー技はねえぞ？」

白哉が使った千本桜の刃を束ねた様な技に、一護は思わず苦笑してしまう。

このまま遠距離から矢を放ち続けられれば勝てるだろうが、果たしてそれは勝つたと言えるのだろうか？一護はそんな疑問を感じていた。

そして弓では無く刀を構え、その刃に全霊の霊圧を込めていく。すると白哉もそれに応える様に霊圧を高めていった。

互いに最後の一撃をぶつける為に同時に地を蹴った瞬間、辺りに爆風が巻き起こり、二人は一瞬にして距離を詰め合った。

二人の斬撃がぶつかり合い、周囲に衝撃波が広がり、砂塵を舞い上げては地を捲り上げていく。

それは、一瞬の出来事であったが、二人がぶつかったその場所には巨大なクレーターが出来上がっていた。

そして互いに背を向けて立つ二人だったが、次の瞬間、一護の肩から胸にかけて血が噴き出てしまう。

(まだだ……倒れる訳にはいかねえ……!)

白哉の方も胸から血を噴出し、思わず膝をついてしまいそうになるが、それでも白哉は耐えてみせる。

お互い既に立っているのもままならぬ状態ではあるが、先に崩れ落ちた方が負けなのだ。

だが、白哉が静かに語り始めた事で、一護はそちらに意識を向ける。

「知りたがっていたな……私がルキアを殺す理由を」

一護は答えない。無言で耳を傾け続ける。

罪あるものは裁かれねばならない、刑が決定されれば処されねばならない、それが掟ならば尚更である。

例えそれが肉親だろうが、友人であろうが、恋人であろうが、掟に比すれば例外はない。

何故ならば、朽木家は四大貴族の一つであり、全ての死神の規範であらねばならず、秩序を守る立場にあるからだ。

「故に……我らが掟を守らずして、何とすべきか」

「やっぱり俺には分かんねえや……俺がアンタの立場だったとしても、やっぱり俺は掟と戦うと思うぜ……」

一護の言葉に、白哉は今は亡き海燕の姿を重ねて思い出す。

彼が生きているならば、一護と同じようにルキアを助けるために掟と戦おうとしただろう。

そして同時に理解した。一護の敵は最初から白哉ではなく、尸魂界の掟であった事に。

その奔放さが猶更海燕を彷彿とさせ、白哉は静かに目を閉じて呟く。

「私は最早ルキアを追わぬ……この勝負、兄の勝ちだ」

「勝った……？勝ったぞ……！俺の……勝ちだ!!」

一護が勝利宣言をした瞬間、一護はそのまま地面に倒れ込んでしまいそうになっていく。

だが、織姫が咄嗟に駆け寄って抱きかかえようとしたが、そのまま頭部をぶつけて悶絶してしまった。

雨竜や泰虎も一護の方へと向かって行くと、皆の無事な姿を見て一護は一安心するのだった。

藍染との邂逅なんだが？

一方で、恋次と共にルキアを連れて逃げている最中のバンビエツタは、向こう側から東仙が近づいてくる姿を捉えた。

流れでは、このまま恋次とルキアは双匣の丘へと強制転送されるはずなのだが、何故か東仙はその二人では無くてバンビエツタの方を見ている。

その手には二種類の布が握られており、その内の一つ彼女の方へと投げつけてきたのだ。

「何これ……!?う、動けないんだけど!?!」

「即席で造ったものだからね。少しの間だけだが、それで君の動きは封じさせて貰ったよ」

バンビエツタの動きを封じた布はかなり強固なものであり、生半可な力では完全に破る事は不可能に近い代物だ。

即席と言っていたが、いつの間にかこんなものを用意していたのかと疑問を抱く程で、藍染の手際の良さに感嘆せざるを得ない。

そして、バンビエツタが完全に動けなくなつたのを確認すると、もう一つの布を恋次

とルキアの周囲へと展開していった。

それは東仙とその二人を瞬く間に飲み込み、布が消えると同時に三人の姿も消えてしまった。

「こんな物まで用意してるなんて……!」

しばらくの間はその布で完全に拘束されてしまい、ジタバタと地面の上を転がることしか出来ない。

だが、しばらくすると徐々に拘束力が弱まっていったので、急いでその布から抜け出していく。

(ん……これは天挺空羅ね)

ようやく布から抜け出したところで、勇音が天挺空羅を発動し、藍染が四十六室を全滅させたという報せを受けた。

これによって尸魂界中に藍染が叛逆者であるとい事が知れ渡り、ルキアの処刑を仕組んだのも彼だという事も明らかになった。

バンビエッタとしては、なるべく藍染とは会いたくなかったが、不測の事態に備えて再び双匣へと戻って行くのだった。

一方で双匣の丘では既に恋次と一護、そして粕村までもが藍染によって倒されてし

まっている状況であった。

既に崩玉はルキアの中から抜き取られてしまっているようであり、今は白哉が庇うようにしてルキアを抱えて座っている。

だが一護との戦闘の後であり、その上市丸ギンの神鎗によって受けた傷が深く、血が滲みだしては滴り落ちていく。

そして藍染は、白哉ごとルキアを斬殺すべく刀を振り下ろしていく。

「そうはさせないってのよー！」

「……これはまた。随分と懐かしい顔だな」

バンビエッタと夜一、そして碎蜂によつて藍染が繰り出そうとしている攻撃は食い止められ、刀を首へと突き付けて動きを封じられた。

だが、そんな状況でも尚余裕な態度を見せる藍染に、三人は油断せずに睨んでいく。

「動くな。筋一本でも動かせば……」

「即座に首を切り裂く」

夜一と碎蜂の警告を受けても一切態度を変えない事無く、口元には笑みすら浮かべている藍染。

この状況で何一つ焦燥していないのは、やはり藍染の力の高さ故だろう。

「……君がBB君という滅却師だね？初めまして。君の事は以前から知っていたが、こ

うして直接会うのは初めてかな？」

「気やすく話しかけないでくれる？こっちは別にあんたとなんて会いたくなんて無かったんだから」

「君も彼も滅却師だろう？なのに何故死神の味方をするのかな」

「そんな事はあんたには関係ないでしょ」

「そうか……けれど僕にはばかり気を取られるわけにもいかないと思うけどね」

そう藍染が呟いた瞬間、突然巨大な音と共に何かがちらに近付いてくるのが見えた。

それは瀨霊廷の門を守護する巨人達であり、それが三体も迫ってきている。

だが、いずれ空鶴と匣丹坊が援軍として駆けつけてくれるので、その巨人たちは二人に任せてしまっても問題ないだろう。

「終わりじや藍染……もはや貴様に逃げ場はないぞ」

ギンも松本乱菊によって捕まっており、更には藍染を囲むようにして隊長と副隊長らがこの場に集まっている。

傍から見たら完全に詰みの状態に思えるだろうが、それでも藍染は一切動揺した様子も無く、それどころか笑ってさえ見せた。

「……ッ!?二人共離れろ!!」

夜一がそう叫ぶと、咄嗟に飛びのいてその場から離れる。すると次の瞬間、上空から光の柱が藍染達三人を包み込むようにして降り注いだ。

それは大虚が使う反膜であり、同族を助ける際に使用する物であった。これによつて光の中は外部とは隔絶されてしまい、完全に手を出す事が出来ない様にされてしまったのだ。

空には穴から大虚の大群が顔を覗かせており、その全てが藍染を見ている。

やがて、その三人は刳り抜かれた地面ごと空中へと浮かんでいき、その穴へと徐々に近づいていった。

「降りてこい東仙!! 貴公はなぜ死神になった!? 亡き友の為、己の正義を貫く為では無かったのか!? 貴公の正義は何処へ消え失せた!!」

「言つたはずだ狛村。私の目に映るのは、もっとも血に染まぬ道だけだ。私の歩む道、それこそが正義なのだ」

空へと浮かび行く東仙に対し、狛村が叫び声を上げるが、その言葉に対して東仙はただ淡々とした口調で言葉を返していた。

東仙は狛村の事を昔から知っているし、彼がどれだけ真つ直ぐな人物なのかは誰よりも理解しているつもりだ。

だが、それでも己の信念に基づいての行動は誰にも止めさせはしない。例え相手が自

分の友だったとしても。

「地に堕ちたな……藍染！」

「傲りが過ぎるぞ浮竹……最初から誰も天に立つてなどはない。君も、僕も、神でさえも。だが……これからは私が天に立つ」

浮竹の言葉に対し、藍染は薄っすらと笑みを浮かべながらそう答えていた。

そして藍染は最後に一度振り返ると、今度はバンビエッタの方へと視線を向けた。

一体何をするつもりだと身構えていると、藍染はゆつくりと口を開けていく。

「君は実に興味深い存在だったよ。もし機会があれば、また会おう……もつとも、それまで君が生きていければの話だね」

そう告げたかと思うと、藍染達は完全に穴の中へと消え去ってしまった。

藍染が去ってからすぐに、重傷を負ったものの治療がすぐに開始されていく。

特に狛村と白哉、恋次と一護の状態は深刻であり、その四人が優先して回復させられることになった。

一護には織姫の治療があるので、そちらに関しては特に問題なく進んで行くが、問題はそれよりも狛村であった。

「儂の事は良い……他の者の治療を先にしてやってくれ」

「無茶ですよ狛村隊長!!」

必死な表情でそう訴えかける隊員だったが、それを聞いてもなお狛村は首を縦に振らうとはしなかった。

だが、やがて到着した卯ノ花によって無理矢理に治療を受けさせられてしまうのだった。

その光景を見ながらも、バンビエツタは一人考え事をしており、最後に藍染の言った言葉について考えていた。

(どういう意味?それまで君が生きていればって……アイツ一体何をしてくるつてのよ)

その真意を読み解く事は出来ず、何とも言えない気持ちを抱えながらも、藍染の言葉を頭の中から追い払うのであった。

だが藍染の事なので、十分に警戒しておかなければならないだろう。

そんな事を考えつつも、とりあえず今は負傷者の回復を待とうと、一護達の下へ戻ろうとした時、背後から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ようやく見つけたぜえ……一体何がどうなってんだか分からねえが、続きと行こうぜ」
やつと剣八が双匣へと到着したらしく、戦いを急かすようにそう言い放つのであった。

何せバンビエッタとの戦闘は途中で中断されて終わってしまったので、不完全燃焼もいいところなのだ。

だが、それに対してバンビエッタは呆れたような顔のままため息をつくばかりである。

すると、そんな剣八に対して卯ノ花がゆっくりと近づいていく。

「貴方は一体何処で何をしていたのですか？……今はそんな状況では無いという事が分からない訳ではないでしょう」

「ああ？うるせえぞ……こっちはもう我慢の限界だつてんだよ」

「……」

「……チツ、分かったよ。おい！テメエとの殺し合いはまた今度だ！今度こそ逃げるんじゃないぞぞ！」

どうしてもバンビエッタとの再戦をしたかった剣八ではあったが、卯ノ花の無言の圧力を感じて渋々ながらも引き下がる事にした。

だが、それでもまだその目は諦めてはおらず、絶対に殺し合いをやってやるといった感情が込められていた。

この場での戦闘は避けられたバンビエッタではあるが、後に絶対に行われるであろうその戦闘を思い浮かべて溜息をつきながら、再び一護たちと合流するのであった。

ようやく現世に帰れるんだが？

それから数日が経過し、一護等現世組は尸魂界に留まって傷を癒していた。

藍染の反乱が発覚し、何時藍染等が攻めて来るのか、今度はどのようにして攻撃をしてくるのか、それらの対策を練るために瀟靈廷中が慌ただしくなっていたのだ。

そんな中、バンビエツタは再戦を望む剣八に追い回されたり、一角からも手合わせを頼まれたりしながら日々を過ごしており、他の面子も思い思いの生活を送っていた。

そんなこんなで現在は碎蜂に呼び出されて睨まれている最中であり、その碎蜂の視線は明らかに怒りを含んでいる。

「貴様あ……夜一様を呼び捨てにするどころか親し気に会話をするとはい……！ 一体貴様は夜一様の何なのだ!?!」

「いやいやいや、そんな事言われても……ただ現世で一緒に修行したり……」

「一緒に修行だと……!?!」

「あーもう!! 面倒くさいわねアンタ!!」

夜一を敬愛している碎蜂にとって、バンビエツタが夜一と一緒に居たという事実だけで既に許せないのに、更には呼び捨てまでしているとすれば、その心中は穏やかではな

い。

親しげに話したり共に修行したりという事は、少なくとも気を許しているという証拠であり、それだけで碎蜂は気が狂いそうな程に苛立っていた。

「よし決めた、貴様を殺す」

「あんた二番隊の隊長でしょ!?短絡的すぎじゃない!」

思わず斬魄刀を始解させようとする碎蜂だったが、ここで夜一が止めに入る。

流石にこんな所で問題を起こすのは不味いと、冷静に諭すように碎蜂を説得して行く。

敬愛する夜一に説得されてしまえば、碎蜂も渋々引き下がるしかない。

「はあ……碎蜂、お主も少し落ち着け。BBも悪かったのう、こやつは少々頭が固いところがあるんじゃない」

「ま、別に気にしちゃいけないけどね」

あいかわらず睨みつけて来る碎蜂に、バンビエツタは肩をすくめながら答える。

この状態で一緒に温泉にも入りましたなどと言ったら、怒り狂って暴れ出すに違いないので、余計な事を言うつもりはなかった。

だが、夜一はそんな事はお構いなしとばかりに言葉を続ける。

「まあ、BBとは裸の付き合いもした仲じゃがな」

「なっ……!!? 貴様あ!!!」

「ちよ、何で余計な事を言ってるのよ!?!」

瞬歩まで使って全力で追いかけて回してくる碎蜂に対し、バンビエツタも全力で逃げ回る。

それを眺めつつ、夜一は笑みを浮かべていた。わざと言ったとしか思えないようなタイミングでの発言だったが、これはこれで面白いと思つての事だ。

バンビエツタとしては、殺意丸出しの碎蜂が全力で追いかけて来るのは何も面白くないので、夜一に対しては怒りしか湧いて来ない。

あれから数時間に亘って地獄の鬼ごっこが繰り広げられる事になったが、始解である〈雀蜂〉まで解放しているのを見るに本気で殺そうと考えているらしい。

だが、既に追つてこないところを見れば、恐らく夜一が宥めてくれたのだろう。

「ふう………まったく、最初っから余計な事なんて言うなっつーの……!」

漸く撒いたところで一息つき、今は瀨霊廷を見て回っている。

今頃一護は十一番隊の隊舎に入り浸って、修行したり剣八に追いかけて回されたりしている筈だ。

そして自分と言えば、こうして瀨霊廷を散歩する毎日。別に何か目的があつて歩いて

いる訳ではないが、暇なのでこうして適当にぶらついているだけだ。

思い返してみれば、一護の卍解が形状どころか名称まで変わっているのも不思議な話だろう。

聞いた話では、弓と刀の形を切り替えながら戦うスタイルだったようだが、そもそも武器を霊子で形作っているというのも、死神ではなく滅却師のようだと感じてしまう。

だが、千年血戦で一護が生粋の滅却師であるキルゲと戦った際には、霊圧の中の記憶が呼び覚まされてしまい、滅却師としての力を発動させていた。

短期間で滅却師としての力が目覚めるのならば、同じく生粋の滅却師であるバンビエツタと長きに亘って修行を重ねた場合どうなるのか、そんな事は考えるまでもなく明白だった。

（あたしが一護に修行をつけすぎたせいよねえ……）

バンビエツタ自身もその自覚はあったが、もう既に起きてしまった事に何を言っても仕方がない。

そんな事を考えつつ歩いていると、ある人物の姿を見つけて立ち止まる。

それは斬魄刀を振るって鍛錬をしている恋次であり、一先ずバンビエツタは声を掛けてみる事にした。

「精が出るわね」

「あ？……ああ、確かあんたは……えーっと」

「BB、一先ずはそう呼んで頂戴。で、何をやってるの？」

そう言えば、恋次と共にルキアを連れて逃げたりなどはしたが、ちゃんとした自己紹介もしていなかった事を思い出す。

とは言え本名を名乗るつもりはまだないので、一先ずはBBと名乗る事しておく。

「あん時は世話になったな、礼を言わせてくれ」

「気にしないでいいわよ、元からルキアを助けるために来たんだから」

恋次はあの時のお陰もあって、特にバンビエッタを疑う様子はない。

藍染の一件の後に現世組、尸魂界から旅禍と呼ばれている一行は客人として迎え入れられ、現在は怪我の治療を行っている。

一週間も経てばすっかり傷も癒えて動けるようになっていたので、各々が自分のすべき事を始めるために動き出しているのだ。

「そう言えばあんた、一護の師匠だって言ってたな」

「ええ、それがどうかしたの？」

「少しだけでいい、俺と手合わせしてくれねえか？」

恋次は、現世では始解すら会得していない一護に追い詰められ、始解を会得した後は圧倒されてしまうという屈辱的な敗北を喫した。

そんな一護の師匠ならば、いったいどれほどの強さを秘めているのか興味が沸き、是非とも戦ってみたかと思っただのである。

「さ、どつからでもかかって来てなさいよ」

「……なら遠慮なく行かせてもらおうぜ!!」

バンビエッタと恋次の手合わせは、約一時間に及んだ。

何度も打ち負かされ、その度に恋次は立ち上がり、喰らいつくように戦い続けるが、卍解を使っても手も足も出ない程実力に差が開いているせいもあり、恋次に勝ち目などありはしなかった。

それでも諦めずに挑み続けてくる恋次に感心しながら、バンビエッタは恋次との模擬戦を楽しんでいた。

「はあ……はあ……クソツッ！ 狒狒王蛇尾丸でもダメなのかよ……!」

「まあ、その名前って本当の名前じゃないしねえ」

「なっ……!?! どういう事だよ、それ……本当の名前じゃないってどういう事だ……?」

思わず口を滑らして本音を漏らしてしまったバンビエッタは、慌てて誤魔化すように咳払いをする。

だが、別にある程度なら説明してしまっても問題ないと思いき直し、改めて恋次へと向き直った。

しかし、完全に説明してしまつては恋次の為にならないので、ある程度濁して説明する事にした。

「あなたの斬魄刀、蛇尾丸が具象化した時の姿はどんな姿だった？」

「……？そりや、猿の姿をして……尻尾が蛇みてえな姿だったが」

「そうね……狒狒王蛇尾丸の狒狒は猿の事。なのに卍解の見た目は巨大な蛇……これつてどう言う事なのかしらね？」

「まさか……!？」

どうやら気付いたようだ。恋次の卍解は、本来の形ではない事を。

それが判明するのは本来なら千年血戦の時なのだが、別に今判明させてしまつても構わないだろう。

あとは恋次自身が自分で答えに辿り着くのだが、この様子なら破面編になるころには、本当の卍解である〈双王蛇尾丸〉を使えるようになるかもしれない。

「手合わせは少しだけつつつたが……もうちつとだけ続けてくれねえか？せめて切っ掛けが掴めるまででいい……頼む……!」

「……仕方ないわね、付き合つてあげるわ」

恋次としては、このままでは終われないという気持ちがあるのだろう。

バンビエッタとしても、まだ卍解を完全に使いこなせるようになっていない恋次が、

少しでも強くなってくれるのであれば歓迎したいところだ。

それから何時間にも亘って恋次はバンビエツタから稽古をつけてもらったが、滅却師完聖体まで使い始めたバンビエツタに何度も打ちのめされてしまう事に。

だがそれでも何度も立ち上がるので、多少は蛇尾丸に認められても良いのではないだろうか。

「ふう〜……流石に疲れて来たわね……そろそろ終わりにしようかしら」

「はあ……はあ……つ、疲れてきたって……お前……息一つ……乱してねえじゃねえかよ……」

あれからもう数時間が経過しているが、未だにバンビエツタには掠り傷すら与えられていない。

疲労困憊の恋次に対し、バンビエツタは汗の一つもかいていなかった。

だが、恋次としても有益な修行になったと感じており、何かを掴んだような感覚があったのだ。

「……一護の野郎に伝えておいてくれ……次は俺が勝つってな」

「ふうん……まあいいわ、伝えておいてあげる」

それから更に数日後一護達現世組は、正式な穿界門の前に集まり、現世へと帰る準備を始めていた。

既に霊子変換機も組み込まれているので、これを通れば現世へと帰れるようになって
いる。

そして一護が浮竹から代行証を受け取ると、尸魂界に残ると決めたルキアを置いて現
世へと戻って行くのだった。

幕間

過去的一幕

それは、まだ彼女が前世での記憶が完全に戻る前の事であった。

見えざる帝国には宮殿が存在する。その宮殿にはユーハバツハより聖文字を与えられし精鋭達、星十字騎士団に選ばれた者だけが居住することを許されていた。

それとは別に、聖文字は与えられていないものの、星十字騎士団候補として集められた者が居住する為の区画も存在する。

見えざる帝国に徴兵されてからと言うものの、その候補者用の区画での生活が続いているのだが、バンビエッタにとっては退屈な日々の連続だった。

「はあく……いつになったら戦争が始まるのかしらね……あたしはまだ星十字騎士団に選ばれてないけど、アタシの実力なら時間の問題でしょ」

バンビエッタは己の力を過信していたが、確かに彼女は強い。滅却師としての戦闘能力は、バンビーズの中では一番高いと自負している。

しかし、だからと言って他の滅却師よりも上かと言えばそういう訳でもなく、バンビエッタよりも強い者はそれなりにいる。

そんな彼女だが、何故戦うのかと問われれば、敵が全滅すれば自分が死ぬ可能性が減ると考えているからであった。

(まあいいわ……それよりこのスイーツ、リルの奴に見つかる前に食べちゃわないとね)
実は、バンビエツタは密かにスイーツを手に入れるために部屋を抜け出していたのだ。しかもそれは、リルトットには内緒である。

彼女が甘い物を好んで食べることを知っていたので、そんな彼女に見つかったら強奪される可能性が非常に高いからだ。

既に何度も奪われた過去が有るので、流石に同じ轍を踏むような真似はしない。

バンビエツタの使っている部屋には今は誰もいないので、今なら誰にも邪魔されずにゆっくり味わう事が出来る。

そして、そのお目当ての物を見つけたので、急いで自分の部屋に戻ろうとしていたのだが……

「部屋には誰もいない。今のうち……」

「おいクソビッチ、なんか美味しそうな匂いがするな」

「リル……!!?アンタいつの間にここに!?!」

背後から聞こえて来た声に反応して振り返ると、そこにはバンビエツタと同じバンビエツタのメンバーであるリルトットが立っていた。

「どうやら彼女の鼻は、バンビエッタの手元にある菓子の香りを感じ取ったらしい。ちよつとそれよこせ」

「はあ!?!何でアンタに渡さなきゃなんないのよ!!バンビエッタのリーダーはあたしよ!?!あ・た・し!アンタの言う事なんか聞く理由が無いわ!」

「はいはい分かった分かった、リーダー様。どうかその美味しそうなスイーツをオレにも分けてくださいーい(棒)」

リルトットは、バンビエッタに向かって表情一つ変えずにお願いをしてきた。

しかし、バンビエッタはリルトットにリーダー様と呼ばれた事に気を良くしてしまつたようで、棒読みの方までは気を回せなかつたようだ。

「そこまで言うなら……まあ、分けてあげなくもないけど?」

「隙あり……!」

「ああ!?!何して……!?!ちよつと!何処に行くつもりよ!!」

「相変わらずチョロすぎんだろ。お陰で楽に盗れた。それじゃ、オレはこれで失礼するぜ」

バンビエッタの手にあつた菓子を素早く掠め取ると、リルトットは悠々と立ち去つてしまつた。

まさかの事態に、バンビエッタは呆然とした様子でその場に佇んでいる。

そしてようやく我に返った彼女は、慌ててリルトットの後を追いかけ始めた。

「あいつく!!どこ行つたの!」

バンビエツタはリルトットを探して城内を走り回つたが、この広い城の中で一人を見つけるのは非常に困難だ。

しかし、このまま諦める訳にもいかない。今度こそ奪われた物を取り返し、上下関係と言ふものを再認識させなければ。

そう決意して、更に走り回っていると、目の前の角を曲がってきた人物とぶつかりそうになった。

「あつぶな……!? って、ジジじゃない……アンタ今までどこ行つてたのよ」

「んく……?別に、その辺ブラついてただけけど?」

「あつそ……それよりも、どこかでリルの奴見かけなかった?あの馬鹿、またあたしのスイーツ持つて逃げて……って、なんでアタシの匂い嗅いでんの!」

バンビエツタは、自分の身体をクンカクンカと嗅ぎまくっているジジの奇行に驚いてしまう。

しかし、そんなバンビエツタの反応など気にせず、今度はバンビエツタの胸に顔を埋めてスンスンと匂いを嗅ぐ。

「相変わらずいい匂いだねえ……」

「離れなさいっての……！いい加減にしなさいよ……！この……！」

バンビエツタは何か引き剥がそうとするが、ジゼルの力は意外に強くてなかなか離れてくれなかった。

こうしている間にもリルトットに全てスイーツを食べつくされてしまうと思うと、焦りばかりが募っていく。

すると、そこに声をかけてくる人物が居た。

「そんな所で何盛ってんのよ。発情期なわけ？邪魔になるからナカでやれっての」

「んなわけないでしょうがキャンデイー！っていうか、見てたんなら助けなさいよ……！」

そこに現れたのは、バンビーズのメンバーの一人であるキャンデイスだった。彼女は、バンビエツタに抱き着いているジゼルを見て笑いを堪えている。

すると匂いを嗅ぎ飽きたのか、ジゼルはようやくバンビエツタから離れてくれた。

「いい加減にしなさいよ、アンタら……！って言うか、何処ほつつき歩いてたのよ」

「その辺で男でもつまみ食いしてたんじゃないの？キャンデイちゃんはそのうちの大好きだもんね」

「ああ!?!誰がいつそんな事したっての!?!」

「……」

「どこ見てんだよジジ！こつちを見ろっての！こつちを！」

バンビーズの面々は基本的にバンビエツタを軽んじて扱っており、リーダーとは思っていない。

だが、それでも戦闘能力に関してはバンビエツタが一番上なので、彼女の言う事は一応聞いている。

内心で彼女らがどう思っているのか知る由もないバンビエツタは、今日もまたいつもの通りの生活を送っている。

「はあ……もういい部屋に戻る。それで、アンタ達は どうするわけ？ またどっか行くの？」

「別に？ この城する事なすぎ過ぎて退屈だし、部屋に戻って寝ての方がマシだわ」

「バンビちゃんに戻るなら戻ろうかな」

キャンデイスとジゼルは、バンビエツタと一緒に自分達の部屋へと戻って行った。

すると、そこにはミニーニヤが戻ってきており、その手には何かを大事そうに抱えていた。

「あら、皆戻って来たのね。これ、皆で食べようと思つて持つて来たの。どうかしら」

「気が利くじゃない。それじゃあ、いただきましょうか」

「じゃあボクは……これを貰おうつと」

「へえ、色々あるのね。こんなモン一体何処から仕入れて来たんだか……ま、何でもいい

わ。アタシはこれにするけど……」

「それじゃあ、紅茶を淹れておくわね」

リルトットにスイーツを奪われて苛立っていたが、ミニーニヤが色々とお菓子を買ってきた事で機嫌が良くなった。

各々が好きな物を選んでいると、ミニーニヤは紅茶を人数分用意してくれた。全員にカップを配り終わると、彼女は部屋の中央にあるテーブルまで歩いて行き、その上にお菓子を並べていく。

あざとい所はあるが、このバンビーズ中で一番真面かもしれないのはミニーニヤだと
言われてたりもするくらいだ。

「ん……う？なんだ、ミニーも持って来てたのか……ならそっちも貰おうかな」

「はあ!? アンタはさつきアタシのを全部食ったでしょうが! アンタの分はあるわけ無いっての!」

いつの間にやらリルトットも部屋に戻って来て、ちゃっかりとミニーニヤが買ってきてくれたものに手を付けようとしていた。

先程、リルトットにスイーツを全て食べられてしまった事を思い出し、バンビエツタは怒りの表情を浮かべる。

「暴れんならソトでやってくんない? 埃が舞うからさ」

「聞いてないと思うよ、バンビちゃん……バカだから目の前の事しか見えないんだよね」
リルトットの態度に腹を立てたバンビエツタは、思わず霊圧を解放しそうになったが、それではスイーツも紅茶も吹き飛ばす事になって勿体ないと気付いた。

ここは冷静に対処しようと深呼吸をして気持ちを落ち着けると、今はリルトットを無視して目の前の物を食べる事にした。

そしてバンビーズは全員でお茶会を始め、決して穏やかとは言い難いが、それでも楽しい一時を過ごすのであった。

転生バンビ版BLEACHの掲示板

278：名無しの死神

それで、結局B Bちゃんの正体ってなんなの？

279：名無しの死神

情報が少なすぎるから何とも言えないけど、未来から来たんじゃないかって言う噂は出てるぞ

280：名無しの死神

未来から来たってのは良いんだけど、それでなんで一護の師匠なんかやってるわけ？

281：名無しの死神

確かに。本名すら不明でかなり謎が多い人物だよね……今のところ滅却師って事と浦原商店に住んでいるって事しか分からないし

282：名無しの死神

何で浦原商店に居るのか、何時頃から居るのかってのは分かってたっけ？

283：名無しの死神

詳しくは分かってない。ただ、一護が幼少のころから師匠してたっばいから、それに前から居るのは間違いなさそうだが

浦原商店に居る理由については、よく分からん

284：名無しの死神

そもそも滅却師自体がよく分からんしな……

285：名無しの死神

浦原は200年前に滅んだくとは言ってるけど、BBちゃんいわく実際は滅んでないっばいし

286：名無しの死神

確か滅却師は虚の耐性が全く無くて、虚の存在自体が猛毒だからって理由で虚ぶつ殺

しまくってるんだっけか

それで、虚をむやみにやたら殺されると世界の均衡が崩れるからって理由で死神は滅却師を滅ぼしたとか

287：名無しの死神

でも、それだと滅却師のBBちゃんが死神である浦原に手を貸している理由がわからないのよね

288：名無しの死神

そこら辺の情報も知りたいところだけど、どうにもハッキリとしなさすぎてモヤツとするわ……

289：名無しの死神

確かに。裏でなんかやってますよー的な事は書かれてるけど、基本一護がメインだからそこまで詳しくは書かれないのよね

290：名無しの死神

滅却師は石田雨竜も出てきたけれど、そいつもBBの事については何も知らないっぽいしな。

んで、なんで一護の師匠なんかやってるわけ？の話に戻るけど、結局本人は「大した理由はない」とか言ってはぐらかしたじゃん

291：名無しの死神

それで、次の回で「今後の為」って答えたから、未来から来た説が出てきたわけだし

292：名無しの死神

そうそう、その上今後起きる出来事を知っているようなそぶりを見せてるから未来人説が更に濃厚になった

293：名無しの死神

つまり一護の師匠をやっているのは未来で何かがあったから……？

294：名無しの死神

言うて未来で何があったんやって話なんやけど……まあ、その辺りはおいおい判明し

てくやろしなあ

295：名無しの死神

つて言うかさ、BBが雨竜に血装やらを教えている所で思ったんだけど、何で一護は死神なのに滅却師の能力使えてんの？

296：名無しの死神

滅却師のBBちゃんが長年師匠してたからじゃね？

297：名無しの死神

それよりも気になったんだけど、この作品のヒロインってBBなの？ルキアなの？織姫なの？

298：名無しの死神

>>297

それは誰もが思う疑問だよなあー!!!

300：名無しの死神

>>>297

BBちゃん以外ありえないんだよお！俺の心が！！そう叫んでいるう！！

301：名無しの死神

>>>299

てめえの心の叫びなんて知ったこつちやねえ。俺は織姫推しなんだが異論は許さん。

302：名無しの死神

はい！先生質問です！ルキアがヒロインじゃ駄目なんですか！！！！

304：名無しの死神 確かに。

雨ちゃんじゃ駄目なんですか？

305：名無しの死神

>>>304

ロリコンが出たぞ！捕まえろ！！

765：名無しの死神

尸魂界に突入したわけですが、一護強くなったな。

766：名無しの死神

>>765

それな。元々副隊長クラスとは互角だったし、一角と弓親の二人を相手にしても余裕あったもんな。

まあ、隊長格には瞬殺されてたけど、修行後の一護は隊長格も倒しちゃったし。

767：名無しの死神

剣八の所か。剣八って斬月を真面に喰らっても無傷だったし、月牙も片手で弾き飛ばすとか言うとんでもないことやってたよね。

まあ、なんやかんや倒せたから良かったけど。

768：名無しの死神

その後合流したBBちゃんが死覇装を着てた件に付いて。

769：名無しの死神

>>768

それな。何でわざわざ着替えたんやろな。

まあ、可愛かったからどうでもええんやけど。

名無しの死神

誰か、瞬殺された恋次の話もしてさしあげろよ……

771：名無しの死神

だって、仕方ないじゃん。隊長格を倒した一護に勝てるわけが無かったでしょ。

821：名無しの死神

BBちゃん。隊長格二人を相手に余裕で立ち回る。

822：名無しの死神

今までロクな戦闘描写無かったけど、BBちゃん強いよね

823：名無しの死神

浦原と夜一と修行してますよ、的な事は書かれてたけど、浦原と夜一がどのくらい強いのか不明だから、実際のどの程度のものなのかいまいち分からなかったからな……

824：名無しの死神

東仙の卍解があらゆる感覚を封じるとか言われた時は「!?」ってなったけど、それをゴリ押しで突破しちゃうBBちゃんにも「!?」ってなったわ……

825：名無しの死神

>>824

全方位爆撃で辺り一面更地にしちゃうんだもんな

826：名無しの死神

BBも剣八と戦ったわけだけどき、剣八一護と戦った時より強くなってるね？

827：名無しの死神

>>826

ワイトもそう思いました。

言うて剣八は一護に負けてるし、BBちゃん一護の師匠してるし隊長格二人を圧倒したんだから余裕っしょ。

とか思ってたら普通に接戦になってたもんなあー

828：名無しの死神

でも、あの後BBちゃん完聖体発動させるつもりだったし、発動させてたら普通に勝ってたと思うぞ

829：名無しの死神

確かに。雨竜の完聖体がマユリを圧倒する程だったんだから、それ教えたBBちゃん
の完聖体が弱い訳が無いよな

102：名無しの死神

一護が卍解を習得したけどさあ、普通に弓使ってた草死神やなくて完全に滅却師やんけ

103：名無しの死神

刀と弓を使い分けて戦うことが出来るっぽいし、別に何の問題も無いっしょ。名前もカッコいいし、見た目も良いから俺的にはアリかな。

104：名無しの死神

超スピードで動いて遠距離からの射撃で翻弄するのは理にかなってるとは思う。

それに、近づかれたとしても刀に変形させれば対応できるわけだし、使い勝手が良過ぎる卍解だと思う。

105：名無しの死神

仮面が出た後、体に乗っ取られたみたいに動き出してたけど、あれは何だったのだろうか……

106：名無しの死神

前に死神の力を取り戻すときに虚になりかけてたから、その時に何かあったんじゃね？

107：名無しの死神

っていうか、仮面が出た後は刀状態でも矢を放ってたし、とんでもない弾幕は作り出す……

とんだ弾幕クソゲーが始まって草生えるわwww

108：名無しの死神

白哉の周囲を高速で移動しながら矢を放ちまくって、おまけに月牙で挟み込んで行くとか言う鬼畜の所業。

109：名無しの死神

>>107

草に草を生やすんじゃねえよハゲ!!

でも、白哉も白哉で剣の弾幕で相殺してたからな

110：名無しの死神

「この千本の刃の葬列が貴様を一度に襲う事は無い」って言ってたくせに、次の瞬間には弾幕の様に射出してるから……普通に嘘つきやがってよお

111：名無しの死神

それって出来ないって訳じゃなくて「この千本の刃の葬列が一度に貴様を襲うことは（可能だが、貴様との戦いでは敢えてやら）無い」って事だったんでしょ。

仮面一護が予想以上に強すぎたから使わざるを得なくなった……的な感だと思っけど。

112：名無しの死神

それよりも藍染やばない？ 恋次や一護は瞬殺するわ、白哉と狛村も瞬殺しちゃうし、後あの黒棺のカッコ良さよ。

113：名無しの死神

B Bちゃんに「君の事は以前から知っていた」とか言ってたけど……アレ何？ B B

ちゃんのストーカーか何かなん？

114：名無しの死神

そういうえば、東仙と狛村の二人がBBと戦った時、東仙やけにあっさり引き下がるな
と思つてたけど、あれつて藍染に報告しに行つたからなのか……

115：名無しの死神

おいおいお前等そんな真面目な話してよお……BBちゃんの入浴シーンの話をなん
でしやがらねえんだあ？

116：名無しの死神

グギギギギギ!!イチゴ……!!BBチャンノラタイミタ!!コロスウ!!!

117：名無しの死神

>>115

>>116 みたいな野郎が出るからなんだよなあ……

破面・出現篇

新たな日々の始まりなんだが？

尸魂界から帰って来てから数日後、バンビエツタは尸魂界での出来事を思い返していた。

あの時警戒していたのは藍染の動向だったが、それと同時に見えざる帝国の動向にも注意を向けていたのだ。

そしてそれは杞憂に終わったのだが、それはそれでバンビエツタにとっては不気味さを際立たせる結果となった。

時期が来るまで出る事ができないのかとも考えたが、そうだとしたらバンビエツタが外に出られた理由に説明がつかない。

ならば、滅却師が一人逃げた程度ならば差支えは無いと、そう判断されて何もしてこないのか。

考えても分からない以上、今はとりあえず目の前の事に集中すべきだと意識を変え

る。「ご利用ありがとうございます」

修行をしたりとかそういう事はせずに、普通にアルバイトをしていたのだった。かと言って全く修行しない訳でもなく、時間を縫っては新たな技を開発したりもしているのだ。

ともかく、何故バンビエツタがバイト等しているのかと問われれば、それはオシヤレの為である。しかし、浦原商店の手伝いでも給料は出るのだが、生活費程度にしかならない。

千年血戦編でもナツクルヴァールが「オシヤレかどうか」と言っていたように、せつかくバンビエツタと言う美少女になったのだから、着る服にだって気を使わなければ勿体無いというもの。

ならばいつその事、自分で稼いで買えばいいのでは？という考えに至ったわけである。

「えーつと……次の場所は？……あら、結構近いわね」

自転車漕ぎながら、バンビエツタは次の目的地を確認していく。

現在バンビエツタは、あの何でも屋であるへうなぎ屋で働いているのだ。

原作ではうなぎ屋の登場は死神代行消失編からなのだが、バンビエツタはそんな事お構いなしにうなぎ屋でバイトをし始めたのであった。

うなぎ屋と言う名前からか、鰻を扱っていると勘違いして電話をしてくる客が多いの

が悩みどころらしいが、それでも一応は繁盛してはいる。

ペットの世話を代行したり、家の掃除を代行したり、料理を作つてあげたりと、依頼内容も様々である。

そんなこんなで今日も色々な仕事をこなし、再び自転車をこいでうなぎ屋まで戻る。

「ああ、帰つて来たかBB。お疲れさん」

「はあく……疲れたわあ……あのエロ親父、目つきが厭らしいつたりやありやしないんだから……！」

「そんな奴は容赦なくぶちのめしちまいな、そしたら少しはすつきりするだろうさ」

「客商売してんだから、流石にそこまではしないわよ……」

元のバンビエッタだったらぶちのめすどころか問答無用で殺してしまうくらいはしたかもしれないが、今のバンビエッタの中身は別人だ。

なので、いくら相手が厭らしい視線を向けてきたとしても、手を出すような真似はしなかった。

「何にせよ……あんたみたいなの可愛い子が働いてくれるおかげで、依頼が増えて助かつてるんだけどね」

確かにバンビエッタは見た目だけは文句無しに可愛かったりする。これは自画自賛ではなく、中身が別人故の客観的に見た感想である。

ともあれ彼女が美女と言うもあつてか、それ目当てで依頼をしてくる輩も多数いた。因みにうなぎ屋の店主は〈鰻屋育美〉と言うのだが、美人ではあるが男勝りな性格をしていて、バンビエツタとは気が合うようだった。

それに、BBと言う偽名を使って本名を名乗っても居ないにもかかわらず、それでもバイトとして雇ってくれたのだから、バンビエツタとしても感謝しているのだ。

「じゃあ、あたしはもう上がるわね……」

「ごんちわーつす！あ、BBさん！今日も美人っスね！」

するとそこに現れたのは、なんともチャラそうな若い青年だった。

原作では一護からは水色とか吾呼とか呼ばれていた気もするが、実際は何だったのかはバンビエツタも忘れてしまっていて思い出せない。

一護達と同じ学校に通っていて、そこそこチャライ奴だった。そうバンビエツタは思い返してみるが、やはり名前が出てこなかった。

何にしても、この青年はうなぎ屋にはバンビエツタ目当てで通っているらしく、こうして顔を合わせる度に話しかけてくるのだ。

「はいはい、ドーも。あんたも相変わらず元気ねえ」

「当たり前じゃないッスか！こうしてBBさんと会えたんスから！」

（なんて言うか……脳内がお花畑って感じよね。脳味噌の代わりにスポンジでも詰まっ

てんじゃないの?)

そんな失礼な事を思われているなど露知らず、チャラ男はいつものようにバンビエッタと雑談を試みる。

だがバンビエッタはというと、チャラ男の会話を完全に無視して、さつさと着替えて店を出て行ってしまった。

そのまま自転車を漕いで浦原商店に帰り着くと、浦原が出迎えてくれる。

「おかえりなさいBBさん。いやあ、精が出ますねえ」

「嫌味かしらそれは……そう思うんならもうちよつと金払い良くして欲しいわ」

「すいませんねえ。なんせウチもギリギリなもんでして……」

浦原商店は駄菓子屋なのだが、今時駄菓子屋で買い物をするのは少数だろう。しかしそれでも、子供相手の商売と言う事で、売り上げ自体はそれなりにあるのだ。

しかし駄菓子屋と言うのは表向きの顔であり、現世にいる死神に対して霊的商品などを売っているのが本職である。

なので、あまり贅沢は言えないのだが、バンビエッタとしてはもう少しだけ給料を増やして欲しいと思っている。

「まあいいわ……あたしはやる事があるし。いつもの場所に居るから、用が済んだら来て頂戴」

「そうツスカ。ではまた後ほど」

そう言ってバンビエツタはいつもの勉強部屋へと降りて行き、そこに設置されたタンクと機材を起動させる。

そのタンクには尸魂界で集めた死神達の霊子が込められており、その霊子を媒体にしてバンビエツタはあるものを作ろうと試みる。

当然その中には一護の霊子も入っている為、混じっている虚の霊子を抽出しなければ、猛毒としてしか機能しないのであった。

「……よし、これでOKっと」

バンビエツタが作ろうとしている物、それは零番隊の一人である曳舟桐生が作り出した義魂を作り出す事だ。

これは、自らとは全く別の霊圧を体内に取り入れる事により、自らの力の階層を上げると言うもので、これによってバンビエツタも更に強くなろうと考えたわけである。

尸魂界に向かう以前、一護が大虚との初戦闘を終えた直後から作り始めてはいたのだが、ようやく形になってきたので、そろそろ試してみようと思ったのだった。

「ようやく完成したわね。さて、上手くいくといいんだけど……」

完成したのは、丸い丸薬のようなもの。

これを飲み込むだけで、さらなる力が手に入るといふ代物なのだが、これは当然本来

の物よりも遥かに劣化したものだ。

「んん……まっずう………！ってか、何で味がすんのもコレ……」

不味いと言いつつも、バンビエツタはしつかりと全部を飲み込んだ。

これで多少は力を底上げすることが出来るだろうが、本来の目的は死神の属性を手に入れる為だ。

とは言っても、斬魄刀で始解したり卍解したりとかが出来るようになると言う事もなく、ただ単に虚への耐性を身に着けるだけである。

それでも、虚の侵食＝死である滅却師にとってはかなり重要な事であると言える。そして、バンビエツタはもう一つの作業に取り掛かる。

(これを地面に刺して……っつと)

バンビエツタが取り出したのは、楔の様なものであった。それを複数用意すると、バンビエツタはそれらを地面へと打ち込んでいく。

五本程打ち込み終わると、それらから光の線が延びていく。やがてそれらは、結界のように広がっていった。

結界が展開されたのを確認すると、楔を引き抜いていき、今度は楔同士の間隔を広げつつ地面に突き刺して行く。

それを何度も繰り返し、どの距離まで間隔を開けたら結界が機能しなくなるのかを確

認していった。

(ふうん……まあ、こんなもんで十分でしょ)

ある程度の距離を測り終わると、バンビエッタは一息つく。

かなりの距離が開いてしまうと機能しなくなってしまうようだが、それでも許容範囲と言えるであろう。

そして次に、バンビエッタは血装を発動させた。

(動と静……それぞれのシステムが独立しているからって、同時には使用できないって言うってだけ)

今現在、動血装を発動させているバンビエッタの右腕には赤い模様が浮かび上がっている。そして静血装に切り替えると、その模様は青へと変わった。

霊子を血管に流し込むことによって発動して、色が変わるのだが、それならなぜ血管の様にグネグネした模様ではなく、回路図のような模様なのか。

だが、今考えるべきはそこではなく、どうすれば同時に発動できるのかと言う事だ。

(せっかくあたしオリジナルの速血装も編み出したんだし、それも組み合わせさせてやってみましょうかねえ)

一先ず動と静、その両方を同時に発動させてみようかと試みたが、まるで反応を示さなかった。

ならばと、更に力を籠めるかのように靈子を注ぎ込んでみたが、やがて痛みが走り始めたので即座に止める。

これ以上無理にやれば、逆に身体に異常をきたしてしまうかもしれない。そう判断して、バンビエツタは諦めることにした。

そもそも、まだ試していない事も沢山あるのだ。同時使用はまた今度にして、別の事を試してみようと決めた。

(さて、次は外殻プレート・ヴェーネ・アンハート静血装ね)

外殻静血装は、体外に血液を排出することでバリアのようなものを作り出す能力である。

ユーハバツハが使用した能力であるが、この時地面にも血装の模様が浮かんでいた。つまり、それができるならば物質にも血装を纏わせることが出来るのではないかと考えたのだ。

既に外殻静血装は使えるので、それを自らの刀に対して発動させてみる。すると、刀身に青い模様が浮き上がった。

そして今度は動に切り替えると、青い模様は赤へと変わる。

(これくらいなら簡単ね。後は、何か斬るものは……)

そう思っただけを見回すと、大きな岩がまだいくつか残っているのが目に入った。

早速それに狙いを定めて、バンビエツタは刀を振りかぶると、思い切り振り下ろす。すると、刃の軌跡に沿って衝撃波が発生し、巨大な岩が真っ二つに割れてしまった。

(岩程度じゃ話にならないわね……この程度なら、普通の斬魄刀でも出来るわよ)

只の岩ではなく、もっと硬度のあるものでなければ実験にならないと判断したバンビエツタは、次の標的を探すことにした。

だが、生憎とこの場所にはそんな都合のいいものが転がっている筈もなく、仕方なく今日の所はここまでとし、その場を後にするのであった。

とある人物と戦う事になってしまったんだが？

翌日、バンビエツタは今日もバイトをこなして帰路についていた。

ある程度の衣服が買えたら辞めようかとも考えていたし、店長からは「暇なときに来るくらいで大丈夫」と言われてもいる。

だからと言って、ある程度稼げたらいきなりやめるといいうのもどうかと思うので、やはりしばらくの間は続けていこうと考えていた。

すると、進路を立ち塞ぐようにしてメガネを掛けたスーツ姿の男が立っているのが見える。

「お前がBBか……」

「誰よアンタ」

いきなり現れた男に対し、バンビエツタは怪しげなものを見るような目を向けながら尋ねた。

目の前の男は石田竜弦であり、雨竜の父である男だ。当然それは知っている事だが、余計な不審感を与えないようにバンビエツタはあえて知らないフリをした。

「何故雨竜に修行を施した……お前の目的は一体なんだ？」

「……」

「答えないか……まあ、予想通りではある」

質問に対する返答が返ってこないの、雨竜の父は腕を組むと嘆息した。

しかし、バンビエツタからすればどうして自分の行動がバレているのか分からなかったの、黙り込んだままでいるしかなかった。

それに何で竜弦がわざわざバンビエツタに話しかけてきたのか、その意図も全く掴めなかった。

「見えざる帝国の者なのだろうか？ならば、お前の目的がなんだろうと見過ごすわけにはいかない」

「はあ!?ちよ、ちよつと待ちなさいよーアンタ勘違いしてるわ!!」

完全に敵対心を抱いている相手に弁明をするというのは、中々難しいことではあったが、それでも誤解されているのを放っておく訳にはいかなかった。

バンビエツタが見えざる帝国の者なのは確かだが、既に抜け出してフリーになっているのだ。そしてその正体については誰にも明かしていない。

しかし、竜弦にとつてユーハバツハは聖別で妻を殺害した仇敵である。それ故に、その部下も倒すべき敵として考えているのは仕方のないことであった。

「大体、あたしは確かに見えざる帝国にいたけど、今は抜けてるのよ!!」

「敵の言葉を鵜呑みにする奴が何処にいる？ 私はそんなに甘くはないぞ」

問答無用とばかりに矢を連射して攻撃を仕掛けてくる竜弦だったが、バンビエツタはそれを全て避けた。

滅却師としてかなりの実力を誇っており、かなりの威力と連射力を持ち合わせているが、速血装を発動しているバンビエツタには当たらない。

バンビエツタとしては戦う理由など皆無だが、相手はそうではないらしく攻撃の手を止める気配は無かった。

「逃げ回るだけか、何故戦おうとしない？」

「戦う理由なんてないんだっての！ 少しは話を聞きなさいよー」

一方的に攻撃をしてくる相手に、バンビエツタは反論しながらひたすら逃げる。

幸い周囲には人も居なく、開けた場所であったために巻き添えを恐れずに戦えるのは救いであったが、このまま戦い続けたところでどうしようもない。

それなりに力を出して戦えば倒すこと自体は出来るだろうが、色々と面倒なことになりそうなのでなるべくそれは避けたかった。

「だから！ あたしはもう見えざる帝国とは関係が無いって、なんども……」

「ど、どういう事だ!? 何故B Bさんと竜弦がこんな所で戦っているんだ!? それに……何故滅却師の能力を……!?!」

どうやら雨竜と運悪く出くわしてしまったようで、二人の戦いを見て驚いていた。

竜弦に滅却師の能力がある事に驚きを隠せない様子のようだが、その竜弦は舌打ちをし、雨竜を睨み付ける。

雨竜の方もそれに応えるように視線を強くする。そのまましばらく沈黙が流れたが、先に口を開いたのは雨竜だった。

「滅却師の力なんてとつくに捨てたものだとはっきり……それに、見えざる帝国について……だかからお前は馬鹿なのだ。生憎と、私の力はそう簡単に消える物じゃない。そして……ソレはお前には関係のない事だ」

「関係ないだど!? そうやってあんたはいつも僕を除け者にする気なのか!？」

親子喧嘩を始めるかのように言い争いを始めた二人であるが、竜弦は「邪魔が入ったな」とだけ呟くと、そのまま姿を消してしまった。

結局誤解を解くことは出来なかったが、それでも戦闘自体は終了したのでバンビエツタもその場を後にしようとしたが、まだ何か言っていた雨竜に引き止められてしまう。「待ってくれ! もし良かったら教えてくれないか? 見えざる帝国についてというのが何なのかを、なんで竜弦と戦っていたのかを!」

「えーつと、うーん……」

正直説明するのが凄く面倒臭かったが、雨竜の眼差しがあまりにも真剣そのものだったので、バンビエツタはとりあえず説明することにした。

とは言えどあまり深く話すのは時期尚早で、あくまで掻い摘みでの説明に留めておく。

まず見えざる帝国は、雨竜の祖父であった宗弦がかつて所属していた組織の名前であり、訳あつてそこから離反して来たということを話した。

「そんな事が……だが、何故貴女がそれを知っている？もしかして……貴女もその見えざる帝国からやってきた人間だということのか？」

「ま、まあ……そうなるわね」

見えざる帝国は敵ならば容赦なく殺戮し、おなじ滅却師であれど思想が違い、ユーハバッハに反発しようものなら容赦なく肅清されてしまうような恐ろしい場所だということも語った。

そんな一部の過激な思想についていけなくなつた者達が現世へと出て、その現世に出た滅却師が死神によって滅ぼされたのが二百年前の事である。

バンビエツタと初めて会つた時も驚いていた雨竜だったが、彼女以外にもまだまだ滅却師が生きていると言う事を知ると、さすがに困惑を隠しきれなかった。

「今話せるのはこのくらいかしら……もういい？」

「ああ、だが……結局竜弦と戦った理由は何なんだ？それが分からないんだが」

「プライベートルな事まで言う訳にはいかないわよ……どうしても知りたかったら、自分の手で聞き出してみなさい」

そう告げると、バンビエツタはこれ以上の質問を拒絶するように雨竜の下を去った。

雨竜は追いかけてしようとしたが、これ以上は何も答えてはくれないだろうと判断したらしく、その場から立ち去った。

それから数日後、バンビエツタは浦原と共に開発した杭を整備をしているところだった。

これから本格的に戦うことになるのだから、いざという時に使えませんでしたなどと
言う事にならぬよう念入りに確認しておく必要がある。

その作業中に、とてつもない霊圧の高まりを感じ取ったバンビエツタは、すぐさま杭
を持ってその場所へと向かおうとした。

「浦原！ちよつと何処にいんのよ！浦原ー!!」

声をかけるが返事が無いので、仕方なくバンビエツタは一人で現場に向かう事にした。

空座町の東部にある木々の密集している場所に、凄まじい轟音と共に何かが落下してきた。

それは、顔に仮面の一部をつけたような人であり、片方が胸元に孔が空いた大男であり、もう片方は喉元に孔が空いた男であった。

大男は文句を言いながら周囲を見回しており、もう一人の方はその大男に対して「文句を言うな」と注意していた。

すると、そこへ一般人が野次馬として集まってきたが、誰もその二人を視認できていないので、突然クレーターが出来上がったようにしか見えなかった。

「チツ、何ジロジロみてやがんだテメエら、死に……」

そう言った瞬間、二人の周りに複数の杭が落下してきて、その周囲の地面に深々と突き刺さっていった。

そして、二人を取り囲むようにして結界が張られてしまい、二人の動きを完全に封じてしまった。

「なんだこりゃあ?!」

「なるほど……これは貴様が用意した物か。随分と用意が良いな女……まるで俺達が此処に来ると知っていたかのようだ」

「そりゃそうよ、だって……あ、余計な事は言わないでいいわね」

「お、おい嬢ちゃん……こんな所で演劇の練習なんか……」

「うっさい！あんた達は早くどっか行きなさい！！死にたいの!？」

まるで状況を理解していない一般人は、何も無い場所に向かって一人で喋っている（ようにしか見えない）バンビエッタに不審者を見るかのような視線を浴びせていた。

だが、バンビエッタが追い払うために霊子の弾丸を連発して威嚇射撃を行うと、流石に足元が爆発すれば慌てるようで、蜘蛛の子を散らすかのように逃げていったのだ。た。

破面が襲来したんだが？

一般人が全員逃げ去って行った事を確認すると、改めて目の前の二人を睨み付けた。

「おいウルキオラ！この女はどうなんだ!？」

「ヤミー、お前は探査神経^{ベスキス}を鍛えて自分で判断できるようになれ。そいつは要警戒人物だと聞かされていただろう」

ヤミーと呼ばれた男の方は、仮面の奥で苛立った様子を見せていたが、ウルキオラの淡々とした口調を聞く限り大人しくなった。

二人の話を聞く限りでは、どうやらバンビエツタは藍染から要警戒人物として扱われているようである。

それはさておき、この二人は破面である。それは虚から進化し続け、崩玉をもった藍染の接触により成体へと至った者達である。

つまり根が虚であるからこそ、滅却師にとつては非常に危険な存在である事は間違いない。

虚に対する抗体を作ったとはいえず、それがどの程度通用するのかはまだ未知数だし、そもそもちゃんと機能するののかも不明なのだ。

すると……

「BB……こいつらは一体？」

「チャド!? アンタは此処に近づいちゃダメ! こいつらの相手はアンタには無理!」

「中々質の良い結界を用意したようだが……その程度の結界で俺達を封じ込めたつもりなのか? くだらん」

そう言つてウルキオラは指先から虚閃^{セロ}を放つと、それはバンビエツタの展開した結界を粉々に打ち砕き、更には泰虎の右腕をも吹き飛ばしてみせた。

肩から血を噴出させ、呻き声を漏らしながら地面に倒れ込んでいき、そのまま気を失つてしまった。

「織姫! チャドをお願い!」

「え? う、うん……! 双天帰盾」

咄嗟に治癒の能力をチャドに対して使用したおかげで一命は取り留めたが、戦闘続行は可能かどうかは不明だった。

仮に続行が可能だとしても、現時点ではこの二人の破面には手も足も出ないので、治つたらそのまま逃げてもらうしか手段はないが。

とは言えど、周りに被害を出さない様に極力を抑えた状態で、この二人を相手に織姫と泰虎を逃がせるのかと問われれば、恐らく難しいと言わざるを得ないだろう。

「この女は俺がやる。ヤミー、お前はそっちのゴミを片付けておけ」
「チツ……俺がゴミ掃除かよ」

不機嫌そうな態度を見せながらも、ヤミーは泰虎を治療している織姫の方に視線を向けると、ゆつくりと近づいて行つた。

それに気づいたバンビエッタは即座に迎撃しようとしたが、それを察知するようにウルキオラが一瞬にして距離を詰めてきた。

繰り出される突きを回避しつつ、バンビエッタはヤミーの方へと目を向ける。すると、腕を振りかぶって今にも攻撃しようとしている瞬間であつた。

そして……

「悪い、遅くなつた」

振り下ろされた拳を斬月で止めた一護であつたが、そのままヤミーを弾き飛ばしてから卍解をする。

双極の丘の時にも見た卍解であつたが、その時よりも重圧を感じ、ザラザラとした霊圧を織姫は肌感じていた。

そして一護は、そのままヤミーの右腕を斬り飛ばしてみせると、ヤミーは驚いた表情を浮かべながら後退した。

破面には鋼皮イェロという強固な皮膚が備わっており、並みの攻撃は受け付けませんが、それ

にもかかわらず腕を斬り飛ばされたことが驚きなのであろう。

（バカが……だからあれ程探查神経を鍛えておけと言ったんだ。相手の力量も測らんうちに飛び出すとは）

「よそ見してる暇があんのかしら？」

そう言つてバンビエッタはウルキオラに斬りかかつていったものの、難なく回避されてしまう。

しかし、ウルキオラはこちらの事を観察するかのように見ており、攻撃を仕掛けてこようと言う素振りは最初の貫手以降見せてはいなかった。

（霊圧が低いな……いや、意図的に低く見せているのか？ 何にしても、実力を隠す必要のある何かがあるとすれば、油断できないか）

バンビエッタの能力を把握しようと、ウルキオラは彼女の戦いを観察し続けていた。

一方で、一護もまたヤミーとの戦いを続けていたが、既にヤミーは傷だらけになつてしまつていた。

この後の流れとしては、この後一護は内なる虚を抑え込むのに必死になり、その隙を狙われてヤミーの攻撃を受けてしまう。

血装すら真面に使えず、その状態でかなりの攻撃を受けてしまう事になるが、その内浦原と夜一が救援に来てくれた事で事態は収束に向かう。

だがバンビエツタが此処に来る時に、浦原は商店に居なかつたので、原作以上に遅れて来る可能性も否定はできないのだ。

「終わりだ！ぶつ潰れる!!」

「くっ……!!?」

ヤミーは一護に向かって掌を勢いよく振り下ろすが、一護との間に赤い盾の様なものが出現し、拳を防いで見せた。

その盾の正体は浦原の放った結界であり、軽薄そうな声と共に彼は現れた。

そして夜一も同様に現れたが、その手足にはバンビエツタの知らない手甲と脚甲が装備されていた。

「何だテメエ等!!間に割って入って来たって事は……ぶつ殺されても文句はねえんだよなあ!」

ヤミーが苛立った口調で叫ぶと、二人に向かって拳を振り下ろそうとしたが、次の瞬間にはまるでひっくり返ったかのように地面へと叩きつけられてしまった。

一瞬のうちに夜一によって投げ技を仕掛けられたようで、ヤミーは理解する間もなく地面に這いつくばっていた。

「一護は無事……とは言えぬようじゃな、随分と酷い有様ではないか」

そう言うとき夜一は浦原から薬を受け取って、一護の下へと向かおうとしていたが、当

然の如くヤミーが立ち上がってきた。

そして怒り心頭といった様子で、夜一に対して襲いかかったが、次の瞬間には夜一の拳がヤミーの顔面に直撃していた。

そしてヤミーが宙に浮いた瞬間、背に向かって蹴りを繰り出し、そのまま地面へと叩きつけてみせた。

よく見ると、手甲と脚甲の白かった部分が赤く染まっており、壺子を纏っているようにも見えた。

「大丈夫か一護？」

「お、俺の事より……チャドと……織姫を……」

ヤミーから一方的に殴られた際に負ったダメージは大きく、額からはかなり量の汗が流れ出ており、苦し気に呼吸を繰り返しているのが見て取れた。

そんな姿を見ているだけでも痛々しいが、織姫の傍で倒れている泰虎も心配であった。

双天帰盾のお陰で吹き飛んだ腕も元に戻りつつあるが、まだ意識がない状態で倒れていたからだ。

「あ……あがぁ!!ふ、ぶっころじでやるう!!」

先程の夜一の攻撃によって顎が殆ど吹き飛んでしまったようであり、手で口を押えな

がらヤミーは叫び散らす。

だが背骨も折れているようであり、最早まともに戦えるような状態ではないにもかかわらず、ヤミーは怒りの形相で向かってきていた。

「よせ、ヤミー。四楓院夜一と浦原喜助まで来てしまつては、今のままのお前では勝てん。それに、奴もいるのでは此方が不利だ」

「ぐ……クソが……ッ!!」

冷静に状況を分析しながらウルキオラが歩み寄ると、ヤミーは苦悶の表情を浮かべて後退る。

そしてウルキオラが解空を使って空間に穴を開けると、二人はその穴に向かって歩き出す。

「……逃げるつての?」

「お前達三人を相手にするのは、こちらとしても面倒だ。それに、そのゴミ共を守りながら俺達と戦つた場合、どちらに分があるかぐらいは判断できるだろう?」

バンビエッタの問い掛けに対し、ウルキオラは淡々とした口調で答えてみせる。

確かに彼の言う通り、一護達を守りながら戦つた場合、守り切れずに一護達を殺されてしまう可能性も否定はできなかつた。

そうこうしている内に二人の姿は完全に消えてしまい、辺りには静寂が訪れた。

「ひと段落……つてどこっすかねえ」

「ひと段落……じゃないわよ！あんた遅れてきたくせに何仕切ってるのよ！つてか夜の着けてるそれは何!？」

「まあまあ落ち着いて、それは後で説明するとして……今は黒崎サンの治療が先決でしよ?。」

確かに浦原の言う通り一護が最優先だと、バンビエツタは気を取り直して一護の方へと向かう。

そしてその一護はと言うと、どうやら限界が来たようであり、そのまま倒れこんで気絶してしまうのであった。

再び破面が攻めて来たんだが？

浦原商店へと戻って来たバンビエッタ達だったが、既に一護の治療も終えて自宅へと戻っていた。

それよりも今聞きたいことは、夜一が着けていたあの謎の装備についてである。

原作ではあんなものは身に着けていなかったし、一体いつの間に用意したのか疑問だった。

「アレはお主の血装とやらを元にして作られた物じゃない」

「少し前までBBサンには腕輪をつけてもらっていたでしょう？その時に血装のシステムを解析させてもらってたんすよね」

「ああ……あの腕輪ね。そう言えばそんな事もあったわね……」

浦原の説明を聞いて思い出したが、あの時は何の説明も無しに腕輪を渡されただけなのだ。

浦原の事だから無意味な事はしないと、そうバンビエッタは思っていたが、まさか血装を解析しているとは予想外であった。

「じゃが、まだまだ未完成でう。ホレ、ご覧のあり様じゃ」

夜一は浦原が作ったと思われる武器を手にはしているが、あちこちにヒビが入っており、次に使用したら破損してしまいそうなほどであった。

夜一の霊圧に耐え切れなかったのか、それともヤミーの鋼皮の硬さが原因なのかは不明だが、恐らく両方であろう。

「ふうん。なるほどねえ……その武器に霊子を流し込むことによつて、疑似的に血装と同じ効果を発揮させるって訳ね」

「とは言つても……ご覧の通り未完成ですし、まだこれ一つしか作れてないんですけどねえ……」

夜一が持つている武器を見つめながら、バンビエツタは興味深そうに眺めている。

原作では、夜一はヤミーを素手で殴ったりしており、それ故に手足にダメージを負つてしまうという結果に終わっていた。

しかし、この武具のお陰で夜一は傷一つない状態であり、包帯を巻いたりすることもなく平然としていた。

「しかし、破面達の外皮にあればどの強度があつたとは……ちよつとばかり見積もりが甘かつたみたいっすねえ」

「確かにのう。この武具がなかつたら、仮に瞬間すら使わん状態で打撃を喰らわせていたら、儂の手足の方が砕けていたかも知れん」

夜一の言葉を聞いた浦原は、自分の見通しが甘すぎた事を恥じるように頭を掻いてみせた。

死なないために死ぬほど準備をする浦原らしからぬミスではあったが、夜一は気にする様子も見せずに飄々とした態度を取っている。

しかしバンビエッタとしても、自身もミスをしてしまったという自覚があったためか、何も言わずに二人の話を聞いていた。

(あの杭の結界……そんなに容易く破れる程甘くはない筈なのに……)

バンビエッタが浦原と共に作った杭、それから発せられる結界はそれなりに強固なものであった。

予算との兼ね合いや、材料の良し悪しの問題もあったが、それでも簡単に破壊される程脆いものではなかったはずだ。

それにも関わらず、ウルキオラの虚閃であっさりと破壊されたという事実が、バンビエッタの心に引つかかっていたのである。

(……まさかねえ)

そして翌日の昼頃、現世に複数の霊圧が出現したので、尸魂界から破面との本格戦闘に向けて死神達が派遣されてきたのだと、バンビエッタは察した。

そして放課後になれば、一護は家で破面の説明を受けることになる。バンビエッタもそこに赴いて説明に加わろうかとも考えたが、まだ備えを万全にしていけない事と、他にもやるべき事が残っていたため、そちらに専念する事にした。

夜にもなれば独断でグリムジョーが現世に侵攻を開始してしまい、仲間と共に少しでも霊圧を持つている者を皆殺しにしようと思き出す。

グリムジョー以外は撃破されるし、東仙が来てグリムジョーも強制的に虚圏へと戻される羽目になるのであるが、バンビエッタは嫌な予感を拭えずにいた。

(ああ……何なのかしらねえ、この言いようのない不安は?)

バンビエッタは心の中でずっとモヤモヤとした気持ちを抱きながら、作業を黙々と続けていた。

そして数時間後、一旦作業を中止して外に空気を吸いに出る。すると、恋次がこちらに向かって歩いて来るのが見えてきた。

そういえば、恋次は現世に留まるにあたって浦原商店に来ていたなど、そうバンビエッタは思い返してみる。

「ん？あんたはBB。なんだ、アンタも此処にいたのか」

「ええつと、アンタは確か……デンジ？だったかしら」

「ちげえ!!恋次だ恋次!!ちゃんと自己紹介しただろ!!」

当然名前はちゃんと覚えていたが、あえて間違えて呼んでみたのだ。案の定、ツッコミを入れられて怒られてしまったが、それもまた面白いので止めようとは思わなかった。

そんな事を考えている間に、バンビエツタの隣までやって来た恋次は、腕を組みながら空を見上げる。

「浦原さんって奴は今居るのか。あんたと一緒に一護の野郎を鍛えたって話だろ？ どんな奴か気になってよ」

「アイツなら居ないわ。少し前に出て行った所だからね」

「そうか……なら帰ってくるまで此処で待たせてもらおうぜ」

実際はこの店にいるが、昼頃に尸魂界から来た死神達が到着したのを感じた時、もしここにいずれかの死神が来た場合は居留守にしてくれと言われていたので、一応そういうことにしておくことにした。

そんな事をいちいち守る必要も無いとバンビエツタは感じていたが、あとでネチネチと小言を言われても面倒なので、ここは従っておこうと思ったのであった。

「で？ 浦原の顔を見に来たって言ってたけど……それってルキアの件もあるんでしょ？」

「……ああ、どういう理由でルキアの義骸に崩玉なんてもんを隠しやがったのか、その理

由を問い質しに来てんだよ俺は」

先ほどもでの明るい表情とは打って変わり、真剣な眼差しを向けてくるバンビエツタに対して、恋次の方もまた同じように視線を返した。

恋次のルキアに対する想いは並々ならぬものであり、それをよく知っているバンビエツタだからこそ、彼の言葉が冗談でもなんでもなく本気であることは理解できた。

だが、浦原がそれを問われてやすやすと答えるとは到底考えられない。それに、仮に答えてくれたとしても、素直に納得できる内容ではないことは容易に想像がついた。

「それで……浦原の奴が帰ってくるまでどうする気なの」

「決まってるんだろ……修行だよ。ああそうだ、せつかくならちよつと俺に付き合ってくれねえか」

「私と組手しようっていうの？別に構わないけど……」

バンビエツタはニヤリと笑みを浮かべると、そのままいつもの勉強部屋まで恋次を案内することにした。

ちゃんと浦原は隠れているようで、恋次が店内に入っても現れる様子はなく、そのまま地下の修行場にまでやって来る。

尸魂界の双極の真下にあった空間と同じつくりをしていたので、恋次はここがどういう場所なのかを理解するのは容易かった。

「さて、始める前に聞いておきたいんだけど、あんたの正解はどうなったの?」

「……まだ出来てねえ。俺にまだ足りねえもんがあるのか、俺の事を認めちゃくれねえみたいだ」

「なるほどねえ……じゃあ、始めるとしますか。私の方は準備OKだし、何処からでもかかってきなさいな!」

それから数時間に及び、バンビエツタと恋次の組手は続けられた。

尸魂界から現世に戻って来る前に手合わせをした時よりも、確かに恋次は強くなっているが、それでもまだ自分には及ばないという事をバンビエツタは実感していた。

しかしそれでも、恋次は前と比べれば格段に成長していると言っても過言ではないだろう。

すると……

「この霊圧は……破面が来たみたいね」

「ツ!!間違いないみてえだな!それも複数か……何体いるってんだ……!?!」

原作ではグリムジョー達は六人で現世にやってくるのだが、バンビエツタが探知した限りでは七人の破面の霊圧を感じたのだ。

デイ・ロイ、シャウロン、エドラド、イールフォルト、ナキーム、そしてグリムジョー。

これが本来の敵である破面の名前であり、彼らこそがこれから現世を襲う者達である。

だが、残り一人は誰なのか？ それとも全員が違うメンバーなのか？ バンビエツタは一瞬でそこまで思考を巡らせたものの、考えても仕方のない事だと考えることを止め、急いで表に飛び出す。

「お前は……話に聞く要警戒人物のBBか。お前を始末すれば、功績として更なる御力を頂けるかも知れないな」

此処に来たのは原作通りイールフォルトのようだ。彼は破面の中でも最下級ギリアンクラスであり、恋次に倒されるキャラでもある。

バンビエツタが戦えば余裕をもって倒せるだろうが、そうすれば恋次の成長に繋がる事はなくなってしまうのだ。

そんな事を考えていると、もう一つ霊圧が急速接近してくることを察知した。

「が……っ!？」

大して速度があつた訳でもなかつた筈なのに、霊圧が接近して来る事も探知できていながら反応が遅れた。

バンビエツタは吹き飛ばされて壁に叩きつけられるも、その程度でどうにかなる程やわな身体をしてはいない。

多少痛みを感じる程度ではあつたが、特に気にすることなく体勢を整え、眼前でこちらを見据える人影を睨みつけた。

「何よアンタ……その姿……」

目の前に立つ何者かに、バンビエッタは思わず目を疑う。

他の破面達と同様の格好をしている故に、この何者かも破面なのだろうということは何者か想像できたが、原作に出て来たどの破面でもないことだけは確かだった。

顔には目を隠す様に仮面の一部が付いているが、それ以外には鼻も口も耳も無く、髪も無く、まるで人形のようなであり、バンビエッタは不気味さを感じずには居られなかったのだった。

謎の破面まであらわれたんだが？

一方で、虚圏では藍染が東仙からの報告を受けていた。

それは、グリムジョーが独断で現世へと侵攻を開始したという内容であり、自らが向いてグリムジョーを連れ帰ると東仙は言う。

「それともう一つ……アレも勝手に動き出したようですが、如何致しましょうか？」

「そうか……ならグリムジョーの件は君に任せるよ。それと……アレの方は好きにさせておくと良い」

藍染の言葉を聞いて、東仙は静かに頭を下げるとその場から姿を消した。

彼等の言うアレとは、現世にてバンビエッタを襲った謎の破面の事であり、他の破面とは違う異質な姿と力を持っている。

「さて、私にどんな進化を見せてくれるのかな……ヌル」

謎の破面、藍染からヌルと呼ばれているその存在は、バンビエッタと戦いを始めていた。

生物とは思えぬ奇妙な動きをしながらも、ヌルはバンビエッタの攻撃を見事に回避し

てみせる。

最初に喰らった一撃以外は大事なこと無い攻撃しか放ってこないの、すぐにも倒せそうな相手だとバンビエツタは思っていたが、何故か攻めあぐねている自分がいた。

「キモいわね……人の形をしてんなら最低限それらしい動きをしなさいよー」

「……？」

文句を言うバンビエツタだったが、それを意に介さず攻撃を仕掛けてくる。

斬魄刀を持たないヌルは、基本的に拳か脚を使って戦うスタイルなのだが、関節を無視したような動きから繰り出される打撃は非常に軌道が読みづらいものであった。

その上バンビエツタの斬撃も妙な動きで回避されてしまい、決定打を与える事が出来ない。次第に上空にまで二人は飛び上がり、そこでも戦いは続く。

「ここまで上がれば下に被害は出ないわよねー」

「……」

ヌルは口すらないので何も喋らないが、バンビエツタが言った言葉に反応したように、今までよりも素早い動作を見せる。

だが、それよりも早くバンビエツタが炎を放出。それが直撃した事でヌルは燃え上がるのだが、ヌルは自らの燃える様子を気に留める事もなく、ただ自らの手を眺めたりしていた。

「……………」

「不気味にも程があるでしょ……………何なのよ一体!？」

突然自分の身体に異変が起きた事に気が付きながらも、それでもヌルの動きに変化は見られない。

焼き尽くすつもりで放った炎はあつという間に鎮火されてしまっており、体が焼け焦げているにもかかわらず、何も感じていないかのように平然としている。

そして、ヌルはその場で手を何度も振るって見せるのだが、やはりバンビエッタにはヌルの行動の意味が分からず困惑するしかなかった。

だが、次の瞬間には腕から炎が噴出し、勢いよくバンビエッタの方へと向かっていく。

「……………」

「な……………!?こいつ……………!!」

咄嗟にバンビエッタも炎を放って相殺する事に成功はした物の、まさか同じように炎を繰り出して来るとは思いもしなかったのだ。

そしてそのまま連射するかのようになり、次々とバンビエッタに向かって炎を吐き出す。

それを速血装を使って高速で回避しつつ、一気に距離を詰めて刀を薙ぎ払ったが、それもヌルは難なく避けて再び炎をバンビエッタに向けて放つ。

それを飛廉脚で回避し、背後に回って今度は雷撃を飛ばす。

「効いてない……？いや、そんな訳がないわよね」

手応えがなかったわけではない。確かに電撃は命中し、ヌルの身体を駆け抜けた。

だが、ヌルは何事も無かったかのように平然としており、雷撃が駆け抜けたはずの体を触って確かめると、またもバンビエッタに向き直る。

炎で体が焼けたという事は、雷撃でもダメージを受けているはずなのだが、何故平然としているのかは分からない。

ヌルの外見もそうだが、この不可思議極まりない能力に関しても、バンビエッタは警戒心を高めていた。

「マジなのコイツ……!?!」

その光景を見て思わず眩きを漏らす、それと同時に嫌な予感が頭を過ぎった。

そしてそれは案的な連続中してしまったようで、ヌルの指先から雷撃が放たれ、しかもそれは一筋では無く連続して三発も放たれたのである。

「ちっ……!!」

バンビエッタも同じように雷撃を放つと、二つの力がぶつかり合って互いに消滅する。

眩い閃光が視界を埋め尽くし、バンビエッタはその隙に背後へと回り込み、炎を凝縮した熱線を背中目掛けて発射。

完全に不意打ちとなり、背中から脇腹にかけて風穴が空く。しかし、それを受けてもヌルは全く怯むこと無く振り返り、即座にバンビエッタの追撃として炎を発射しようとした。

間違はなくダメージがあるはずなのに、何故こうまで動けるのか。

疑問に思うものの、一つだけはハッキリしていることがあった。相手は戦いの中で学習して成長しているのだと。

(その上相手の技も真似してくるとか反則過ぎるでしょ……)

炎も雷撃もバンビエッタが放った攻撃であり、それを同じ攻撃方法で返されてしまった。

ならばこれ以上、この破面と戦うのは危険かもしれないと考えたバンビエッタは、早々に勝負を決めるべく行動を開始する。

一方で、一護もグリムジョーとの戦闘を始めていた。

既に一護は卍解を使って戦っているのだが、天墜穿月から放たれた矢はグリムジョーの速度を捉えることが出来ず、掠りすらしない。

逆にグリムジョーの攻撃は回避するのがやっとといった状況だった。

天墜穿月の形を刀へと変えて接近戦に持ち込みはしたものの、それすらもあっさり

避けられてしまい、それどころか腕を掴まれて投げ飛ばされてしまう始末である。

地面を勢いよく転がっていく中ですぐさま体勢を立て直すと、再び弓へと形状を変えて矢を連射する。それを軽々と避けながら、グリムジョーは一護との間合いを一足飛びで詰めてきた。

「遅えぞー！」

「ぐっ……いっ、の野郎ッ！」

爪で切り裂くかのように、横薙ぎに振るわれた腕を瞬歩で回避する。

しかしそれだけで回避出来たわけではなく、続けざまに蹴りが飛んできて、そのまま上空へと吹っ飛ばされた。

だが、ただでは終わらないとばかりに追撃に来たグリムジョーは、何度も蹴りを放つてくるが一護は何とか防いでみせた。

しかし、そのまま地面へと叩き落されてしまい、落下した衝撃によってクレーターが出来上がってしまう。

静血装があるので、そこまでダメージは負っていないが、それでも痛みは存在する。

「ガツカリさせんじゃねえぞ、死神!! 卍解で真面になったのはスピードだけか!？」

「月牙……天衝!!」

砂塵が晴れると同時に、一護はすかさず矢を射出。

凄まじい速度で飛翔していく矢は今までのどの矢よりも巨大であり、そして真っ黒に染められていた。

グリムジョーは咄嗟に腕を交差して防御姿勢を取ったが、黒い炎が爆発するかのよう
に吹き出し、グリムジョーの全身を飲み込んでしまった。

その炎は瞬く間に消え去っていき、そこには左腕と胸の部分が焼け焦がされたグリム
ジョーの姿があった。

苦悶の表情を浮かべながらも、尚も闘争心を失わない鋭い眼光で、射抜くように睨み
つけてきている。

「ク、クソが……こんな技……ウルキオラの報告にねえぞ!!」

「どうだ……? ガツカリせずには済みそうだろ?」

グリムジョーの言葉に対してそう言い返すが、一護の声色には余裕は感じられない。
無理もない。今の一撃はかなり力を込めて放ったものであり、その上内なる虚まで出
てきそうになっているのだ。

これ以上戦闘を継続すれば、確実に虚に体を乗っ取られる事になるだろう。

(どうする……後二〜三発撃つのが限界かも知んねえぞ……当たれば倒せるだろうけ
ど、もう真面に喰らってはくれねえだろうしな)

「チツ……こうなったら本気でぶっ殺してやるぜ……!! 軋れ……」

「そこまでだ、グリムジョー」

瞬間、グリムジョーの背後に突如として東仙が姿を現す。

何故こんな所に彼が居るのか、グリムジョーは即座に疑問を抱くが、それを口にしようとした瞬間に首筋に刃を突き付けられて、言葉が詰まってしまった。

「分からないのかグリムジョー……独断での現世侵攻、五体もの破面の無断動員、そしてそれらの敗死。命令違反を犯すどころかその様とは……一体何を考えているんだ？」

その声色は怒りというよりも呆れたような物だったが、その口調からは確かな怒気を感じ取る事が出来た。

霊圧の解放こそされていないものの、首筋に押し付けられた剣先から伝わる冷気に背筋が凍るような感覚を覚えつつも、グリムジョーは静かに口を開く。

「チ……分かったよ」

「虚圏へ戻るぞ、お前の処罰は藍染様が下される」

「待て！何処へ行くんだ!!勝手に攻めてきておいて勝手に帰るだ!!ふざけんな!!まだ勝負は……」

一護がそう叫んだところで、何処からともなく破面が飛んできた。

一護は知る由もないが、それは先ほどまでバンビエッタと戦っていたハズのヌルだった。

ヌルはグリムジョーが動員したわけではなく、彼が現世に攻めるに辺り、勝手について来ただけなのだ。

「……ヌルか。藍染様は好きにさせておけとおっしゃっていたが、どうやらお前も虚圏へ帰るようだな。何処で何をしていたのか分からないが、随分とボロボロじゃないか」東仙の言う通り、ヌルの体はあちこち傷だらけだった。

ヌルは東仙の一言を聞くと、耳が無いのにまるで聞こえているかのような仕草をする。言葉を理解しているかのように頷いてみせたのだ。

やがて、東仙が空間に開けた穴の中へと姿を消すと、それに続いてグリムジョーも入っていく。

「覚えておけ死神……俺の名はグリムジョー・ジャガージャック……次に会ったら、今度こそてめえを殺すぜ！」

まるで捨て台詞のようにグリムジョーは叫ぶと、そのまま消えていく。

現世に攻め込んで来た七人破面のうち五体は撃破することが出来た。だが、その五人はいずれも最下級に過ぎない。

そんな最下級を相手に、正解をして限定解除をした状態でもギリギリの勝利だったという事実が、死神達に焦燥感を抱かせる。

そしてグリムジョーに関しては、腕を焼いたとは言えど、ほぼ限界まで力を使ってお

いてそこまでしか出来なかつた。

そう一護は考えると、次の戦いに意識を向けながらも、自分の未熟さを痛感するの
だつた。

【Side一護】 一護vsホワイト

グリムジョーが東仙によって連れ戻されてしまう少し前。

高い学習能力と、相手の攻撃を真似するという特異な能力を持ったヌルは、バンビエツタと戦いを繰り返していた。

これ以上戦いを長引かせれば確実に自分が不利になると考えた彼女は、完聖体を使って一気に片を付けることにした。

「あんたがこっちの能力を真似出来ようが、流石にコレまでは出来ないでしょー!」

背中に霊子の羽が展開されると、無数の霊子の弾丸が放たれていき、それが全てヌルの方へと向かっていく。

まるで雨の様に降り注ぐ弾丸が、ヌルの体に直撃しては連続で爆発を引き起こす。

凄まじい爆炎が周囲を包み込むと、次第に炎は小さくなり、煙も晴れていった。真面に喰らえばチリも残らぬであろう一撃だったが、それを喰らってもなおヌルはそこに立っていた。

しかし、流石に今の攻撃は効いたのか、体中が焦げ付いてポロポロになっている。

「チ……ッーなら、もっと攻撃を叩き込めばいいだけの話よね!!」

次の攻撃をすべくバンビエツタは手を天に掲げると、再び霊子を収束させ始める。

そして雷撃を叩き込むべく腕を振り下ろそうとすると、突如ヌルがあらぬ方向へと顔を向け、そのまま勢いよく飛び去って行ってしまった。

あまりにも突然の出来事に呆然としてしまうバンビエツタだったが、既に振り上げってしまった腕をどうすれば良いものか分からず、辺りを見回してみる。

すると、未だにイールフォルトと戦っている恋次の姿が目に入る。

「手は出さないつもりだったけど、もうアイツでいいか……恋次!!ときなさい!!」
「いきなり何を……うおおおおお!!」

次の瞬間、イールフォルトは巨大な雷に飲まれて消滅した。

一瞬にして消し炭にされた彼は、文字通り跡形も無くなってしまっている。

先ほどまで苦戦を強いられた敵が一瞬で消し炭になってしまった光景をみて、恋次は開いた口が塞がらないといった表情を浮かべた。

「あ、危ねえじゃねえか!!危うく俺まで死ぬところだったろうが!!」

「はいはい、生きてんだから別に問題ないじゃない」

「そういう事を言ってるじゃねえよ……!」

そう文句を言いつつ、恋次は自分が苦戦を強いられた敵をあつさり倒してしまったバンビエツタを見て、改めてその実力の違いを認識するのだった。

そして翌日、バンビエツタはいつも通り浦原商店で過ごしていた。

因みに、何時までも帰らない恋次にたいして、とうとう浦原は根負けをしてしまい、恋次も中へと招き入れるようになっていた。

そして現在、朝ご飯を食べつつ、浦原に対して修行をつけるように頼んできた泰虎をどうするべきか考えていた所だ。

バンビエツタは無理を言つて浦原との修行を行っていたが、そもそも浦原はそう言うのに向いていないのだ。

そこで、恋次は浦原が質問に答えるという条件の下、泰虎の修行をつけてやる事にしたのだ。

ついでにバンビエツタもそれに便乗する形で、二人に付き合う事にしたのだった。

「……どうだ、BBから見て今の俺は」

「うーん……そうねえ……」

長時間に渡り二人と戦っているので、泰虎もかなり疲労の色が濃い。だが、相変わらずのタフさを見せつけており、決して倒れることは無かった。

だが、完現術の事はどういうものかは理解しているが、その力を持っている訳では無いので、どうと言われても返答に困るといのが本音であった。

とはいえ、泰虎の完現術はその肌を媒介とし発動する物であるという事だけは分かる。なので、それを踏まえてアドバイスをすることにした。

「あなたの能力、右腕だけじゃなくて別の場所も変化させられるんじゃない？例えば左腕とか、脚とか」

「成程……一理あるな」

完現術は、使い慣れたものや愛着のあるもの、思い入れの強いものであれば物質の形や性質そのものを変化させて具現化することが出来る。

だからこそ泰虎は、誇りを持っている自らの浅黒い肌を完現術の媒介とすることが出来たのだ。

「話はどういいか？さっさと続きをしようぜ」

「む……そうだな、頼むぞBB」

「そうね……話はここまでにして、そろそろ再開しましょうっか！」

一方で、一護は内なる虚を制御する術を手に入れるために、仮面の軍勢の下へと向かった。

平子真子や猿柿ひよ里と戦闘をするというひと悶着はあった物の、今は内なる虚との戦いを行っている最中であつた。

「てめえ……いつの間にか正解なんか覚えやがった……い！」

「決まってるんだろ！テメエと同じ時にだ……一護!!」

お互いに天墜穿月を放ち合いながら、激しい攻防を繰り広げる。

刀と弓を切り替えながら戦う一護に対し、内なる虚であるホワイトは刀のまま中空に矢を出現させると、それを無数に放つ。

それらを矢で撃ち落ち落として行くが、その間にもホワイトは接近しており、剣を振りかぶって襲い掛かってくる。

「クツ……!!」

「どうした一護!!逃げてるばかりじゃ何も変わらねえぞ!!」

どうにかホワイトの攻撃を回避しながら反撃の隙を伺うが、四方八方から矢が放たれ、その上ホワイトが天墜穿月で直接斬りかかってくる。

手数が違い過ぎる上に、戦い方がまるで違う。何故ホワイトにはこんなにも多彩な技があるのか、どうしてそんな事が出来るのか。

そう考えた所で、自分の内にいる虚と対話など出来る筈も無く、ただひたすらに回避を続ける。

「月牙天衝!!」

「しやらくせえ!!」

巨大な矢を放ったが、それはホワイトは片手で難なく弾き飛ばしてしまふ。グリムジョーの腕を傷つけたそれを、たったの片手一つで弾き飛ばされてしまい、思わず苦虫を噛み潰したような顔になる。

そしてホワイトは、そのまま矢を連射しながら一護の背後へ回る。

咄嗟に振り向くが、既にホワイトは目の前にまで来ており、横薙ぎの一閃を放つてきた。

辛うじて受け止めることは出来たが、鏑迫り合いの状態で押し込まれる。

「月牙天衝……!!」

「……ッ!?!」

すると、四方八方に巨大な矢が形成され、それが一護目掛けて飛んで来た。数十にもわたる矢が一斉に一護に向かって襲いかかり、あつという間に呑み込んで爆炎が上がる。

瞬歩で遠くまで離れたホワイトは、その爆炎が晴れて来るのを待つ。そして、ポロポロになった一護の姿を視界に収めると、その口元を僅かに歪めた。

「だから下手糞だつて言つたんだよ、一護……お前はまるで力の使い方が分かっちゃいねえ」

確かにホワイトの言う通り、一護はこの卍解を完全に理解したとは言いがたい。

「ホワイトの様に中空に矢は出せず、矢を放つためには刀から弓に変えなければならず、月牙天衝の威力もホワイトには劣る。」

今のところ一護がホワイトに勝てる要素は殆ど無いと言っても過言ではない。

「お前に卍解は使えねえよ」

「な……ッ!?!」

一瞬のうちに一護の目の前まで移動して来たホワイトは、一護の手に行っている天墜穿月を掴んだ。

すると、黒かったそれは瞬く間に白く変色していき、それと同時にチリになって消えて行った。

呆然とする一護を見て、ホワイトは鼻で笑う。

「俺の斬月が……」

「言ったらろ……俺が斬月だってな」

卍解をすれば天墜穿月と名は変わるが、それでも一護にとって斬月は斬月だった。

ホワイトが「俺が斬月だ」という台詞も理解できないが、それ以上に手から天墜穿月が消え去ってしまった事がショックだった。

これでは、どうやって戦えばいいのか分からない。

その動揺を察したのか、ホワイトは一護の頭を鷲掴みにし、そのままビルへと投げ飛

ばして叩き付ける。

「武器無くしたままなにポケットとしてやがる。相変わらずおめでたい脳みそしてやがんな」

「てめえ……!」

立ち上がりながらホワイトを睨むが、先ほどから全く歯が立たないことに一護は苛立ちを感じていた。

だが武器を出そうにも出せない状態で、一体どうやってホワイトを倒すべきなのか、そもそも自分に倒すことが出来るのか? 一護は今更のように焦燥感を抱き始めていた。

「いいか!? テメエに足りねえのは本能だ!! 敵を容赦なく叩きのめすための、理性を捨てた獣みてえな闘争心がてめえにや足らねえ!! 戦いに対する渴望がまるで感じられねえ!!」

ホワイトの言葉に、一護は何も答えられなかった。

確かに戦いの最中に自分を失うことが無いようには気を付けていたが、まさかそんなことを言われるなんて思ってもいなかった。

理性で戦い理性で敵を斬ろうとしている、そんな事まで言われてしまえば反論することなど出来ない。

「俺は御免だぜ一護……弱いてめえなんざと一緒つぶた斬られんなんでな」

「……」

次の瞬間には、ホワイトの手にしている天墜穿月が一護の腹部へと突き刺さって行く。

霊子で形成された白い刀が、深々と肉に埋もれていくのを感じながら、一護はホワイトの顔を凝視していた。

その時、自分の中で湧き上がる何かを感じた。それが何であるのかは分からない。

(剣は……渡さねえ……！)

そう思うと同時に、一護はホワイトの持つ天墜穿月へと手を伸ばした。

すると、白かったそれは瞬間に黒く染まっていき、そのままホワイトをも黒で浸食し始めた。

自分の体が塗りつぶされる光景を見たホワイトは、咄嗟に天墜穿月から手を放した後ろへ跳んだ。

だが、次の瞬間には一護はホワイトの懐へと一瞬で詰め寄り、その腹部へと天墜穿月を突き立てていた。

「ク……!? どうやられてめえにも……本能って奴がちつとばかしはあつたらしいな……」

ホワイトの白い死覇装が黒く染まって行き、それはそのまま全体に広がる。

そして全身が完全に漆黒に染まると、ホワイトはその体をゆっくりと起こし、目の前

にいる一護の顔を見つめ返した。

「しようがねえな……とりあえずはお前を認めてやるぜ。だがな……てめえに少しでも隙があれば、その時は容赦なく乗っ取ってやるからな……精々気を抜くんじゃねーぞ!？」

「んな事……てめえに言われねえでも分かかってんだよ」

やがて黒く染まったホワイトは脚からチリとなつて崩れ落ち、その姿は完全に消滅するのだった。

総隊長からの呼び出しを受けたんだが？

浦原商店の勉強部屋にて修行を行っていた恋次と泰虎だったが、今は店内で出された茶を飲みながら休憩中だ。

泰虎としてはもう少し続けても良かったのだが、ちゃんと休むことも修行の一環だという事で、渋々といった様子で承諾したのだ。

しばらく休んでいたところで、冬獅郎が商店を訪れて来た。

「BB、総隊長がお呼びだ、ついて来い」

「……総隊長がなんであたしなんかを？」

「さあな、俺はお前を呼んで来いと言われただけだ」

バンビエツタからすると、総隊長から呼ばれるという事には嫌な予感しか無かった。

総隊長である山本元柳齋重國もまた、卯ノ花同様に千年前にユーハバツハ達と戦った初代護廷十三隊の一人なのだ。

尸魂界での卯ノ花の一件がある事から、どうしてもバンビエツタは身構えざるをえない。

とは言えど、呼ばれてしまった以上は仕方ないので、バンビエツタは黙って付いて

行った。

『来たか……』

「……それで、あたしに何の用なの？」

今居るのは織姫の家なのだが、そこには顔の様なものが付いたり謎の煙を発したりする大きなモニターが設置してある。

そこに映っているのは勿論総隊長であり、その前に座るなり、すぐに要件を尋ねるのであった。

『お主に問い質したい事は山ほどあるが、それらは今は置いておく。単刀直入に訊くが、お主は空座町を守る気があるのか？』

「まあ……一護が守るってんなら協力するけど」

総隊長からすれば、ユーハバツハと関わりがあつたバンビエツタから聞きたいことは山ほどあつただろう。

しかし、今は藍染の計画を止める事を優先したいのだろう。何しろ藍染の計画を止めなければ、空座町とそれに接する大地、そして人々が丸ごと消されてしまう事になるからだ。

そして、その計画に必要な崩玉が完全に覚醒するまでは四カ月あり、決戦は冬の時期に行われる。

つまり総隊長が問いたいのは、バンビエツタがその戦いに参加し、この町を守る意思はあるかどうかということだった。

そう聞くと聞こえは良いだろうが、実際には「お前に我々と戦う意思があるならば、今は見逃す」という意味も含む、脅しにも似た質問でもあった。

「それに、あたしだって死ぬつもりは毛頭ないわよ。一応は一護の味方のつもりだし」「ならば良い。ではもう一つ、もしこの戦いが終わった時、お主はどうするつもりじゃ」「しかるべき時に向けて準備する……今はそれしか言えないわね」

それを聞いて、総隊長は小さく息を吐いた。

卯ノ花からの報告で、バンビエツタには尸魂界に敵対する意思はないという事は分かっている。

だが、あのユーハバッハから離反したところで彼女に利があるのか、総隊長はずっと疑問を持っていた。

もしかすると、彼女の中ではまだ何かを企んでいるのではないかという懸念は拭えなかったのだ。

『……分かった。今はそれで納得してやろう。残りの話はこの戦いが終わった後としようぞ』

そう言うのと、総隊長は通信を切る。バンビエツタはようやく終わったと思いつつ、安

堵の表情を浮かべたのだった。

一方で、自らの虚を制御する術を会得した一護は、虚化状態を長時間キープするための修行を開始していた。

虚化状態のひよ里を相手にしているのだが、持続時間が四秒なのと、虚化してからの初動が遅すぎる事がネックとなっていた。

「相変わらず延びんなあ。まあ、そうサラっとはいかんわな」

「……もう一度だ。まだまだ俺は強くならなきゃいけないえからな」

「つうか……何やねんオマエン卍解は。弓なんか使こうて滅却師かつちゅーねん。死神なのか滅却師なのかハッキリせえや」

平子は一護の卍解を見てそう言い放つと、一護は自らの卍解について考える。

確かに卍解となれば名称がらりと変わったたり、形状が大きく変化するのは当然の事であり、その中には飛び道具となる卍解も存在はする。

だが一護の卍解は壺子で武器を構成する物であり、それはまるで滅却師のようでもあった。

「んな事言われてもよ……俺の師匠は滅却師だし、滅却師の力つてのは教われれば使えるようになんじゃねえのか？」

「んな訳あるかいボケ！死神と滅却師はまるでちゃうんやぞ!?教わったからってホイホイ使えるかつちゅーねん!!」

「……」

「だってらなぜ死神である自分が滅却師の力を使えるのか。一護は内心そう思いながらも口には出さなかった。」

「師匠であるバンビエツタは滅却師であり、長年修行をしてきた一護だからこそ滅却師としての力を得ることが出来たのだと思っていた。」

「だが実際はそうではないとしたら、自分は一体何なのか、一護は疑問を感じずにはいられなかった。」

「しかし、それをバンビエツタに聞いたところで、彼女は正直に答えてくれるとは思えない。彼女も浦原同様に何かを隠して語らないことが多いのだ。」

「(……いや、今はそんなこと考えてる場合じゃねえ……とにかく今はこの力をコントロールできるようにしねえと)」

浦原商店へと戻って来たバンビエツタは、再び勉強部屋で恋次と泰虎の修行を再開していた。

だが、そろそろ藍染が織姫を手中に収める為ウルキオラを差し向けてくる頃合いであ

り、その陽動の為に複数の破面が攻め込んでくるのだ。

バンビエッタとしてはそのこと自体には問題を感じていない、問題なのはあの謎の破面の動きがまるで予測できないということと場所にあった。

(次にアイツが来るかどうかなんてわからないけど……警戒だけはしておくべきよね)

あの破面が何なのかまるで分らない以上、バンビエッタが今最も警戒すべきはその破面に他ならない。

とは言えど、現時点でバンビエッタがあの破面に関して知り得る事は殆ど無いに等しい。

バンビエッタが知るのとは、その見た目が人形のような事と、相手の攻撃方法を模倣する事だけだ。

どの程度まで模倣できるのかは不明であるが、これ以上成長される前に始末しなくてはならない。

「おっと、どうやら敵さんのお出ましのようですねえ。随分とお早いお着きじゃないですか」

「なに……？なら俺も行く、ここでの修行の成果を……」

「何言ってるんだ!?! テメーは力を使い過ぎてんだよ! 此処は俺が行くからテメーはじっとしてろ!」

バンビエツタと浦原は、破面達の霊圧を感知すると同時に勉強部屋の天井を見上げて、これからどうするべきかを相談した。

恋次と泰虎は長時間に渡る修行によって疲弊しきっているので、万全とは言えない状態で戦わせるわけにはいかないからだ。

恋次がそう言うのと、浦原が恋次を制して前に出る。

「それは阿散井サンも同じでしょう。ここはアタシとBBサンが行きますので、お二人は休んでください」

「何であんたが勝手に決めてんのよ……まあ、別に行くつもりだから良いけど」

そう言うのと、浦原はバンビエツタと共に空座町の北部にある森の方へと向かう。

するとそこでは、既に帰刃^{レスレクシオン}状態になっていた破面の一人であるルピ・アンテノールが、冬獅郎達四人を相手にしていた。

そして、その直ぐ傍ではヤミーが退屈そうに観戦しており、他にもワンダーワイス・マルジェラが謎の破面であるヌルと戯れて遊んでいる。

ワンダーワイスはとある能力に特化した破面であり、その上とても戦闘力も高い破面だが、その代わりに著しく知能が乏しいという欠点を持っている。

行動に一貫性がなく連帯性にも難があり、敵を目の前にしても周りを飛んでる蝶に關心を持ったりするほどだ。

「いやあー、間に合ったようですよ。よかったスねえ。もう少しでも遅れていたら危ない所でしたよ」

「……誰だよキミ」

突然現れ、いきなり触腕を切断して来た浦原に対してルピは苛立たしそうにそう呟く。

しかし浦原は飄々とした態度で自己紹介をしており、そのことが更にルピの怒りを買う要因となっていた。

そしてバンビエッタの方は、ヌルがどう動くかを警戒しているのだが、その当の本人はまるで興味がないのか、ただワンダーワイズと戯れているだけだった。

これだけを見ると、ヌルも知能に難がある様にも見えるが、前の戦闘では相手を観察するかのようなそぶりを何度も見せ、更には相手の攻撃を真似するといった芸当を見せたのだ。

それに、戦いを得て急成長していると考えられる以上、今後の脅威となる事は間違いないので、ここで潰しておきたいところではあるだろう。

すると、突如としてワンダーワイズは浦原に向かって飛びかかってきた。

「へえ……随分と変わった人がいるじゃないっすか」

そして、ヌルもバンビエッタの存在に気が付くと、まるで待っていましたと言わんば

かりに襲い掛かってくるのだった。

「またもや謎の破面と戦う事になったんだが？」

高密度の熱線を連射してくるヌルに対し、バンビエッタは即座に炎の防壁を形成して防御をする。

しかし、その壁を容易く貫通して来るほどにヌルの攻撃は強く、即座に回避をして態勢を整えなおす。

そのまま素早く完聖体を発動させ、炎の渦をヌル目掛けて解き放つ。

だが、先ほどまで浦原の方に行っていたハズのワンダーワイスが、いつの間にかその渦の軌道上へと移動していて、炎の渦に飲み込まれて行った。

「アウ〜……?」

「あいつ……まさか庇う為にこっちに来たっていうの……!?!」

ワンダーワイスの帰刃は滅火皇子エステインギルと言い、流刃若火を封じるためだけに作られた存在なのだ。

故に、この状態のワンダーワイスはいかなる炎をも無効化し、吸収して体内へと封じ込めることが可能なのである。

当然、バンビエッタの放った炎の渦は全てが無効となり、逆にワンダーワイスに取り

込まれてしまった。

「炎が効かないからって何だって言うのよ！あたしには雷もあるんだからね!!」

炎を吸収したワンダーワイスは、興味を失ったのかバンビエッタから視線を外すと、再びボーっとしているだけの状態に戻ろうとする。

バンビエッタは今がチャンスととらえ、今度は無数の稲妻を放つと、こんどはヌルがそれに雷撃を放って相殺させる。

だが、その隙を突いてバンビエッタは瞬時に間合いを詰めると、刀に雷を纏わせて斬り掛かる。

その斬撃はヌルの胴体を両断するように放たれたが、ヌルが僅かに体を逸らしたことで辛うじて避けられてしまう。

「チツッ…この前闘った時よりも動きが機敏になってる……!!やっぱりコイツの成長速度は異常よ!」

更には霊圧も最初に遭遇した時よりも上昇しており、霊圧コントロールも的確になっている。

そして、動きも洗練されてより人間らしく、より効率的に動く様になっていた。

口も耳も無いので、あの仮面の奥に目があるのかは不明だが、ヌルはバンビエッタの動きをしっかりと観察して学習しようとしているようだった。

するとヌルは両手に炎を纏わせ、それを鋭い刃の如く変化させるとバンビエッタに向けて振り下ろしてくる。

まだ動きはバンビエッタの方が速いので、これくらいの攻撃は簡単に避ける事が可能だったため、素早く背後に回って蹴りを入れる。

そして、そのまま吹き飛んで行ったヌルに対して、バンビエッタは再び雷を落として追撃をしようと試みるが……

「うぐ……な、何よこれ……!?!」

いつワンダーワイスの興味が再びバンビエッタの方に向けられてもおかしくはないので、そちらにも注意を向けつつ攻撃をしていたのだが、まるでこちらに向かってくるようなことがなかったので、少し油断をしまっていたのだ。

ワンダーワイスの肩から出た無数の腕がバンビエッタの体に巻き付き、ギリギリと締め上げる。

何とか抜け出そうとするバンビエッタだったが、ワンダーワイスはもともとの身体能力が高く、更にその帰刃状態の腕力は凄まじい。

その凄まじい腕力は、今のバンビエッタですら簡単には脱出する事が出来ない程に強力だった。

このままでは骨を砕かれかねないと考えた彼女は、仕方なく自爆覚悟で靈子の爆発を

起こすことで脱出を試みようとした。

しかしその瞬間、突如として無数の腕が離れていったと思えば、ヌルがバンビエッタの懐に飛び込んで炎剣を振るっていた。

「あぐあっ!!う、腕が……!!」

咄嗟に回避行動をとったものの、ヌルの振るった炎剣はバンビエッタの左腕を切り裂き、完全に切断することに成功していた。

そして、ヌルはそのまま彼女の左腕をキャッチすると、先ほどまでは無かった口が出現し、腕を貪り喰い始めた。

一方で浦原はヤミーの虚弾バラを受けて、地面へと叩き落とされていた。

そして追撃とばかりに。ヤミーは大笑いをしながら何度も虚弾を連射していき、地面を穴だらけにしていく。

そして、しばらく連射したところでようやく手を止めた。

「ぐははははは!!チリ一つ残らねえように、跡形もなく消し飛ばしちまったぜえ!!ん……?」

ヤミーが後ろを振り返ると、そこには冬獅郎の攻撃を受けて完全に凍結させられてしまったルピが居た。

悪態をつきながらも、そちらの方へと向かって行くヤミーだったが、その後ろから浦原が声をかけてきた。

「いやあく、こんな様じゃ藍染様におこられちゃう。って、そんな感じっすかね？」
「な……!? てめえ生きてやがったのか!? 一体どうやって……」

そう、浦原は先ほどまでヤミーの虚弾の連射を喰らって死にかけていたはずだったのだ。

しかし、それは浦原の用意した携帯用の義骸であり、ヤミーが虚弾を喰らわせていると思っていた相手は、浦原本人では無かったのである。

いつの間に入れ替わっていたのか分からない程に精巧な偽物であった為、それに気付かなかったヤミーは完全に騙されていたというわけだ。

「BBサンもピンチみたいっすからねえ。ちよつとばかり本気でいきますよ」

浦原は紅姫を前に出して構えると、霊圧を開放させていく。その霊圧の高まりと共に、浦原の霊圧が一気に上昇し、周囲の空気が震え始める。

そして浦原の背後に絡繰りのような輪が浮かび上がると、その中にも円盤の様なものが浮かび、外側の円と赤い糸でつながって行く。

更には五本の指が浦原の周りに展開されたのだが、その指の先には鋭い刃が付いており、まるで仕込み刀のようにも見えた。

「なんだそりや……それがめえの卍解ってやつか？まあいいさ。今度こそ本当に殺してやるよ！」

「卍解……とはちよつとばかり違うんすけどねえ。ま、そんな事を説明しても理解できるほど賢くはないでしょうから」

「舐めやがって……死ねエ!!!」

ヤミーが再び虚弾の連射をしてくる。先程よりも拳を素早く動かしながら、更に連射を続けてくる。

それに対して浦原はその場から動かず、只々その場に佇むのみであった。

すると、周りに展開されていた指から赤い光弾が発射されると、その光弾はヤミーの放った虚弾を全ての確に相殺させた。

「無駄ですよ……その技はアタシにはもう通用しません。残念でしたねえ」

「この野郎……!!舐め腐りやがって!!なら、直接殴り殺してやるよオ！」

ヤミーは虚弾による攻撃が防がれた事に苛立ちを覚えながらも、今度は自らの強靱な肉体による肉弾戦を挑んできた。

その巨体から繰り出される拳は、真面に喰らえば一瞬にして粉微塵になる程の威力があつたのだが、浦原はそれを避ける素振りすら見せず、その場で佇み続けていた。

すると、その拳が当たると直前でヤミーの動きは完全に止まってしまっており、そこか

ら一歩たりとも動くことが出来なくなっていた。

「いやはや……遠距離攻撃が効かなくなつたからつて、安直に接近戦に持ち込むなんて随分と浅はかな人つスねえ」

「クソが……！テメエ一体何をしやがつたんだ?!」

「その目を凝らしてよく周りを見てください。首だけは動かせるようにしてあげましたから」

ヤミーは言われた通りに目線をキョロキョロと動かして周囲を見渡すと、いつの間にか自分の体が赤い糸のようなもので雁字絡めにされていることに気がついた。

元より探査神経の劣るヤミーでは探知する事が出来ていなかったのだろう。だが仮に探知出来ていたとしても、更に裏をかいて来るのが浦原と言う男なのだが。

そして、その赤い糸が徐々に締まっていき、張り巡らされた糸はキリキリと音を鳴らしていた。

「さて……それじゃあシメと行きましょうか」

「クソがあああああ！放せ!!放しやがれええええ!!」

ヤミーが必死にもがくが、いくらもがいても脱出が出来ず、どんどん首を締め付けられていった。

そして浦原は紅姫を振りかざし、止めを刺すべくヤミーの首目掛けて刃を振った。

しかしその直後、空から反膜がヤミーを包み込むと、赤い糸は全て消滅してヤミーが解放されて宙に浮いた。

「はあ……はあ……に、任務が完了したのか……チツ！次に会ったら必ずぶつ殺してやるからな！」

そう言い残すと、ヤミーはそのまま空中に空いている穴に吸い込まれて消えて行っ
た。

それは他の破面達も同様であり、冬獅郎に凍らされていたルピヤ、バンビエツタと戦っていたワンダーワイスとヌルも姿を消してしまっていたのだった。

幕間②

過去の一幕②

見えざる帝国では、新たに星十字騎士団入りするメンバーを選定するための試験が行われていた。

この選抜戦はとても単純であり、候補者同士での殺し合い。つまりはバトルロイヤルだったのだ。

その為生き残った強者のみが星十字騎士団として、ユーハバツハから聖文字を与えられる資格を得ることが出来るのである。

(頭痛い……それに最近変な夢見るし……)

候補者の集う居住区の一室にて、バンビエッタは頭を抱えていた。

ここ数日の間、行った事も見たこともない景色や場面が脳内で繰り返し再生されるような感覚に苛まれている。

更には会った事とのない人物との会話シーンなども再生され、それが誰なのかさえわからないまま目が覚める。そんな症状に悩まされ続けていたのである。

「バンビエッタ・バスターバイン。そろそろ試験の時間だ……準備をしろ」

部屋の外から声がかかる。

この部屋にいるのはバンビエッタただ一人だけであり、他のメンバーは既に試験会場へと向かっている為ここには居ない。

試験開始時刻が迫り、そろそろ行かなければいけないのはわかっているが、身体が重く中々立ち上がることが出来ない。

「めんどくさ……はあ……まあいいわ、全員さつさとぶつ殺して帰って寝ましょ……」
ゆつくりと立ち上がり、扉へと向かう。そして、そのまま部屋を出て試験会場へと向かった。

試験会場と言っても、別に何かが設立されている訳でもなく、只々広い平原が広がっているだけだった。

そこに既に多くの参加者が集まり、今か今かと試験の開始を待ち続けている。

「ではこれより、本日の試験を開始します。これから皆さんには殺し合って貰いますが、生き残った者だけが陛下より聖文字を頂けるのです」

そう告げたのは、キルゲ・オピーという男。ユーハバツハから「J」の聖文字を与えられている星十字騎士団の一人であり、この選別試験の監督を務めている。

彼だけではなく、「B」の聖文字を与えられているハツシユヴァルトも選別試験の監督役として参加しており、彼は別の会場で受験者達の監視をしている。

現在ここに居るのは全部で三十名程で、その誰もが実力のある者達ばかりであった。
(ふうん……どうもこいつも見掛け倒しの雑魚ばかりじゃない)

その場を集められた滅却師達を見渡しながら、つまらなそうな表情でバンビエツタは思う。

皆が一様に険しい顔を浮かべているが、どれもこれも自分にとつては取るに足らない相手だと判断すると、開始の合図を待った。

やがてキルゲが開始の合図を出すと、滅却師達は滅却十字を手にとつて神聖弓を具現化させた。

「あちらこちらで神聖滅矢が飛び交い、戦いが始まった。次々と滅却師達が倒れて行き、立っている者は僅かしか残っていないかった。

「つまらないわね……よくそんな実力で候補者になれたものだわ」

そして、ようやく五人まで減ったところで試験は終了となり、生き残りの合格者には次の試験へと進む権利が与えられた。

これはまだ第一試験でしかなく、合格した滅却師達がまた同じように集められ、再び試験が行われるのだ。

それを何度か繰り返し、生き残ったほんの数人だけが星十字騎士団になれるという訳である。

(次の試験までは日があるわね……頭痛いし、さっさと戻って寝よ……)

バンビエツタは宿舎に戻り、ベッドの上に横になる。そしてすぐに意識を失ったように眠りについた。

そして翌日、お昼ごろにはバンビーズの面々が部屋に集まり、食後のティータイムを過ごしていた。

今日もまたミニーニヤが、何処から仕入れたともわからないスイーツを持参している。

「はいバンビちゃんも。紅茶も入れたから一緒にどうぞ」

「ん……あたしは別にいい。なんか今日も頭痛いし……」

「なら俺が代わりに食べてやる。ミニー、そっちのソレも俺にくれ」

「おいりル、またバンビの奴にキレられでもしたら面倒だからな。やめとけて」

「別にいいわよ食べちゃっても。残しといたってしようがないでしょ」

その言葉を聞いて、バンビーズの面々は衝撃を隠せなかった。

いつもであれば「ふぎげんな!」「ぶつ殺すぞ!」と、キレ散らかすはずのバンビエツタが、そんな簡単に了承するなんて誰が想像出来るだろうか?

(どうなってやがんだバンビの奴……前々からおかしいとは思ってたけど、今日は何時にもまましておかしいぞ)

リルトットは心の中で呟く。バンビエッタの性格をよく知る彼女にとっては、今の彼女の態度は異常な物としか思えなかった。

気に入らないことがあればすぐにキレル、気に入らない奴がいればすぐ殺す、そしてストレス解消とばかりにイケメンの男を殺す。

それがバンビエツの面々から見たバンビエツタという人物である。そんな彼女が、文句も言わずにスイーツを譲ってあげたりすれば、驚くのも無理はない。

「本当にバンビちゃんなの？まるで別人みたいだねえ」

「何言ってるのよジジ……あたしはあたし、それ以外の誰になるってのよ」

いつもの彼女は、もつと高圧的で他者を見下すような喋り方をしていたはずなのだ。リーダーである自分が絶対であり、他のメンバーが従う事は当然といった様子で話していた。

しかし今のバンビエツタからは、そういった雰囲気は一切感じられない。むしろその逆で、メンバー達に気を遣っているように見える程であった。

そしてそれから数日後、再び試験の日が訪れた。今回は前回から半分の十五人が集まって殺し合いを行い、生き残った者が次の試験に進む事になる。

開始時間まではまだ時間があるので、バンビエツは部屋で待機してその時を待つ。

「俺達はもう時間だからな、先に行つてくる」

「頑張つて来るわね」

そう言つてリルトットとミニーニヤ、そしてジゼルの三人が部屋から出て行つた。

部屋に残っているのはバンビエッタとキャンデイスの二人だけとなり、二人は会話もなく静かに待つ。

「なあバンビ、アンタ頭は大丈夫なのか？」

「ん？ ああ……頭痛の事ね。今日は別に痛くもないし、問題ないわよ」

「そ、そうなのか？ ならいいんだけど……」

バンビエッタの返答を聞き、キャンデイスは混乱した。「頭は大丈夫なのか」と言われれば「あたしの頭がイカれてるつての!？」とキレ散らかしてもおかしくはなかったからだ。

なのに今日のバンビエッタは、怒る事無く素直に質問に答えている。あまりにも不気味過ぎて、逆に怖かった。

普段と違う様子が、何か別の人格が乗り移つたのではないかと思える程に。

「ああ、それにしても試験なんて面倒ねえ……何でわざわざ殺し合ひなんかしなくちゃならないのかしら」

(マジかよ……いつもなら全員殺すとか言うくせに)

バンビエツタは相変わらぬ様子だったが、キャンデイスにとっては驚くべき変化だった。

この前までは、試験だろうと相手は皆殺しにすると言っていたのだが、今では試験にすら興味が無いという風に見える。

(コイツ本当にバンビなの？本当は偽者かなんかじゃ……)

疑ってしまうのも無理はないが、それくらい今のバンビエツタには違和感があった。

そんなこんなで時間だけが過ぎていき、やがて二人も試験会場へと足を運んだ。

「キャンディ。別々の試験会場みただけだけど、死んだりすんじゃないわよ？アンタはバンビーズの一人なんだから」

「アンタそんな事言うようなヤツじゃなかったでしょ!?調子狂うからやめてくんない!?!」

「ええ……何でキレてんのよ。別に普通でしょ、そんなぐらい」

キャンデイスが怒鳴り散らす様に言い返すと、バンビエツタは不思議そうな顔を浮かべた。わけが分からないといった様子だが、それはこっちのセリフだと言い返したくなる。

だがこれ以上問答を続けるのも疲れるため、キャンデイスは溜息をついてその場を後にしたのだった。

虚圏突入篇

虚圏へと突入するんだが？

次にバンビエツタが目を覚ました時には、そこは浦原商店の中だった。

布団から起き上がりつて体を眺めてみると、包帯が丁寧に巻かれてあったが、左腕に
関しては肘の辺りから斬り飛ばされたままである。

織姫がいれば元通りにはなるが、既に彼女は藍染の手中に収まってしまったのだから
どうしようもない。

「どうやらお目覚めみたいっすねえ。御覧のとおり左腕以外は大体治っているそうです
よ」

「大体？どういふことよ」

仮面の軍勢のハツチこと有昭田鉢玄の術で治療をされたバンビエツタだったが、傷が
完全に癒えているわけではなかったようだ。

どうにも虚に近い霊圧を持つ彼の術は、滅却師である彼女にとってにはあまり効果が発
揮されないらしく、むしろ虚に対する耐性が無ければ逆に毒となるくらいにの代物らし
い。

「後は織姫頼りになるわね……それで、一護達は？」

「黒崎サン達なら一足先に虚圏へと向かっていますよ」

「そう……じゃあ、悪いんだけどもう一回黒腔を開いてくれるかしら？ あたしも行くから」

「そんな状態で行くつもりなんスか？ と言つても……言つて聞くような人じゃないスからねえ、貴女は」

浦原は溜息を吐きながら、渋々といった感じでバンビエッタと共に勉強部屋へと降りていくと、そこにはルキアと恋次の姿も居た。

二人共一度は尸魂界へと強制的に帰還させられたが、白哉が手引きしてくれたおかげで現世へと戻ってくる事が出来たのだ。

二人共既に虚圏へと乗り込む準備を済ませており、いつでも出立できる状態であった。

「BB殿、もしかやその腕で向かうというのか？」

「まあ、そうなるわね」

「いくらアンタが強くて、片腕が無い状態で乗り込むなんて無謀過ぎるぜ」

恋次は呆れた様子でそう言ったが、バンビエッタは意に介す事無く準備を始めた。

無理をしても、何としても行きたいという彼女の強い意思を感じ取った浦原は、仕方ないと言った表情で黒腔開ける準備をし始めた。

「では皆さん、黒腔を開きますよ。よろしいですね？」

浦原がそう言うと、全員一斉にコクリと首を縦に振った。

それを確認した後に彼が黒腔を開くと、全員がその中へ入っていき、そしてそこから一気に破面達が待ち構えているであろう、虚圏を目掛けて飛び立った。

やがて彼等は破面達の待つ、灰色の砂漠が広がる荒野へと辿り着いたのであった。

「なんだ？ 辺り一面砂まみれじゃねえか」

「うむ、まずは一護達との合流を優先させるぞ」

辺り一面砂まみれであり、所々に石英の木が生えている。

この光景が何処まで続いているのかと思うと気が滅入りそうになるが、早く一護達と合流すべく一同は歩みを進めた。

「一護達は……向こうか」

ルキアが一護等の霊圧を探知すると、すぐさまその場所へと向かう。

しばらく砂漠の中を走り続けていた三人だったが、全くもって辿り着く気配がない。

まるで無限に続く砂漠の回廊の中に入り込んでしまったのではないかと錯覚してしまいう程に、何処まで行っても何も見えてこないのだ。

「おい、進んでいるように見えるか？」

「……分かん。だが、進むしかないだろう」

「そうね。一護達の霊圧はやっぱりあっちみきたいだし、進むしか無いわね」

織姫救出の為にここまで来たわけなのだが、一向に一護達へと近づいているようには思えなかった。

それでも立ち止まる訳にはいかないのです、三人とも歩き続ける。

しばらくすると、大きな宮殿のような建物が目に入ってきた。あれこそが織姫が囚われているであろう場所であり、そしておそらく藍染達や破面達が待ち受けていると思われる場所である。

そしてそこから少し離れた位置に、とてつもない砂嵐が存在しており、その砂嵐の内部分からは複数の強大な霊圧が確認できた。

恐らく相当な数の破面がその中にいるのだろうと、容易に想像が付いた。

「一護の野郎が向かってんのはどっちだ……？」

「あっちの宮殿の方でしょ、一護達の霊圧はそっちの方に感じるんだから」

恋次の言葉を受けてバンビエッタが指差すと、その方角には確かに霊圧を感じられた。ならば、このまま真っ直ぐに進むだけだ。そう考えた一同は、そのまま勢い良く砂漠

の上を走り始めた。

しかし、そこでふと何か近づいてくるのが分かった。それは虚夜宮の門番でもあるルヌガンガであり、どうやら一護達が来たのでそれを迎撃する為に出てきたようだ。

その数は二体だけであり、片や遠くで一護達の相手をしており、もう一体は三人の目の前に姿を現していた。

「二人は急いであつちに向かつてー！こっちはあたしが引き受けるからー！」

バンビエツタはルヌガンガと対峙しながら恋次とルキアに叫ぶと、二人はそれに従つてその場からすぐに離れていった。

ルヌガンガはその体の全ては砂で構成されており、斬られようが射られようがいくらかでも再生が可能なので、まともにやり合うのは愚の骨頂である。

水を弱点とするが、こんな砂漠に水などはない。だからこそ、唯一対抗手段を持つているルキアを先に一護の方へと向かわせたのだ。

そしてバンビエツタはというと、疑似ヒートや疑似サンダーボルトの様に、水属性攻撃を行うという手も使えるので、そちらの方が有利だと考えたのだ。

『侵入者は排除する』

「どうせ蟻地獄を作るとかそんなところでしょ。だけど、そんな物……って、全然違う!?!」
バンビエツタは咄嗟に砂漠を駆けると、足下の砂が盛り上がっていくのを確認する

と、それが蟻地獄の類いではない事に気付く。

これは竜巻だ。砂の柱が幾つもある上がり、バンビエツタを吹き飛ばさんと凄まじい速さで迫ってくる。

幾つもの竜巻が同時に襲って来るのだ。それに既に周囲を取り囲まれてしまっており、逃げ場はなかった。

「ちよ………こんなの聞いてないわよ!? 聞いて……あああああああ……!」

結局、バンビエツタはそのまま竜巻に飲み込まれてしまい、空中へと巻き上げられてしまった。

瓦礫や石英の木が数多に宙を飛んでおり、それらを飛廉脚によって次々と避けていくが、左腕が無い分バランスの感覚が狂ってしまい、いつものキレがない。

「痛………くはないけど、何処よ……?」護達のとこに行かないのに……」

静血装を発動させていたので、怪我などは無い。だが、砂埃だらけになった服を叩きつつ立ち上がると、辺りを見渡してみる。

どうやら宮殿の近くまで飛ばされてきたようだが、建物の周囲を砂嵐が覆っている所を見るに、織姫が囚われている方ではない宮殿に飛ばされて来てしまったらしい。

外部から見た時は分からなかったが、砂嵐はドーム状になっており、その内部は広い空間になっていた。

この砂嵐の外に出なければ皆とは合流できない為、バンビエツタはさっさと砂嵐の外へ出ようと試みる事にした。

しかし、そんな時だった。ふとバンビエツタは気配を感じて後ろを振り向いた。するとそこには、沢山の破面が姿を見せており、彼女は思わず冷や汗を流してしまう。

「ねえねえ誰か来たよ？」

「誰々？誰が来たの？」

「遊んでくれるの？遊んでくれるの？」

「アソブ……ナニスル？」

見た目だけを見るならば少年少女の様にしか見えないが、実際は彼等全員が破面だという事をバンビエツタは知っている。

彼等の名はへピカロ。個々に名前はなく、百体を超える彼等を一纏めに呼ぶ時に付けられた名称だ。彼等は常に団体で行動しており、更にへ102という十刃落ちでもあるのだ。

見た目通り頭脳も子供であり、欲望を抑えるという事を知らない。それ故に藍染から組織の一員として機能しないと判断され、十刃落ちとしての扱いを受けている。

そして、彼等が勝手に現世に行ったり等好き放題が出来ない様に、ルヌガンガの発生させる砂嵐によって閉じ込めているのだ。

(そんな所に落下するなんて……最悪！)

「何して遊ぶの？」

「鬼ごっこ？ かくれんぼ？」

「それとも殺しちゃう？」

「イイネ！ あの女の人、とつても強そうだし！」

嬉しそうにはしゃぎ出すピカロ達を見て、バンビエッタは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。

子供ゆえの無邪気さというのは恐ろしいもので、殺したいから殺すのではなく、遊んでいたら相手が死んでいた程度の感覚なのだ。

そして、ピカロ達はバンビエッタに狙いを定めると、一斉に飛び掛っていくのだった。

ピカロ達から逃げる事になったんだが？

百体以上ものピカロ達が一齐にバンビエッタに向かって走り出し、砂塵を巻き上げながら突っ込んでくる様は圧巻であった。

上空に飛んで逃げるかと考えたが、竜巻の外に出るにはかなり上まで上がる必要があるし、そこまで無事にたどり着けるかは怪しいところである。

「追いかけてっ？いいよ！僕たちすっごく速いんだから！」

「捕まえたらどうする？どうしちゃう？」

「どうしよう、どうしよう？処す？処しちゃう？」

笑顔で言い合うピカロ達を見ながらバンビエッタは、どうやって切り抜けるのかを考えていた。

度々虚閃が放たれるが、それを飛んでかわしていくが、その度に砂塵が巻き上がり視界が悪くなってしまう。

その為、ピカロ達を視認できなくなっていくが、相手もバンビエッタが見えていない状態なので、その攻撃は的外れなものばかりだ。

「見えなーい！全然見えないよー！」

「砂ばっかりで何も見えないよ?」

「どこだよ」

「何処にいるの。あつち?それともこつち?」

「Qrrrrrrrrrrrr!!」

砂埃の向こう側、つまりバンビエツタがいるであろう方向に向かってピカ口達が虚閃や虚弾をやたらめつたら乱射する。

それは基本的に明後日の方向へと向かっていくが、数百ものピカ口が一斉に虚閃を放ってきたらとんでもない事になるに違いない。

建物の中に入り〈トレス・シフラス三桁の巣〉を通じて他の建物に向かえればよいが、そもそもここはピカ口達を閉じ込めておく場所なので、何処にも通じていない可能性も高い。

今は建物の影に隠れているが、その建物も虚閃で破壊されてしまいそうな勢いだ。

そして、地響きのような音が聞こえたかと思うと、そのまま地面が崩落してしまい、バンビエツタは瓦礫と共に地下へと落下してしまった。

「踏んだり蹴つたりね……」

落ちてきた穴から出ようとも思ったが、瓦礫やらなんやらで埋まってしまっているように、とてもじゃないが出来そうにない。

どこか別の出入り口を見つけないければならぬのだろうが、ここはピカ口達のホーム

グラウンドだ。

地の利は完全に相手側にあるので、バンビエツタが見つかるのも時間の問題かもしれない。

「どこー？どこにいるのー？」

「探せー！探しだせー！」

「絶対に見つけてやるぞー！」

声はまだ遠いが、段々とこちらへ近づいてきているように感じられる。だが、バンビエツタは諦めずにその場から離れ、どうにかして出口を探そうと動き始めた。

しかし、迷路のように入り組んだ通路ばかりが続き、どう進めば良いのか見当がつかない。気が付いたら元の部屋に戻ってきていた、という事が何度もあった。

この迷路もピカロ達を閉じ込めておくための檻のようなものだろうが、彼等が外に出てしまっている時点で効果は無いに等しい。

(倒そうと思えば倒せると思うけど……倒しちゃうと後で問題になるよね……)

左腕が無かろうが、全力を出せばバンビエツタでもピカロ達を倒すことはできるはずだ。

だが、ここでピカロ達を倒してしまうと小説版の、通称〈SAWY〉で語られていた展開が変わってしまう可能性がある。

何せその物語では、ピカロ達は割と重要な役割を担って出てくるのだ。もしそんな彼等を倒したとなると、一体どういう風に話が転がっていくのか予想ができない。

もしかすると、とんでもない状況になってしまいう可能性だってある。

(そうなるよ……やっぱ倒さずに砂嵐の外に出るしかないわよね)

どうすればその方法が一番安全かを考えるのと同時に、どうやってピカロ達を撒くかも同時に考えなければならない。

しかし、そう簡単に答えが出るはずもなく、バンビエッタはただひたすら走り続けるのだった。

そして暫く走っていると、通路の向こう側からピカロ達が姿を現す。

「見つけた！見つけたー!!」

「見つけたぞー!!ここにいるぞー!!」

「皆ー!ここだよー!あそぼー!」

「遊ぶよ!遊ぶよ!遊ぼうよ!」

バンビエッタの存在に気付いたピカロ達は、嬉しそうに叫びながら彼女に向かって走ってくる。

そして、ある程度近づいた所で虚閃を乱射してくるが、それを避けつつ炎を壁の様に放って進路を塞ぐ。

だが、それで怯む様な相手ではなく、むしろはしゃいで追いかけてくる始末だ。

「あつっーい！」

「凄いなえ！こんな事できるんだあ！」

「もつと見せてよ！ねえ、見せてよ！」

虚閃を放つたピカロ達が感心したように言うが、バンビエツタはそれを無視しながら別の部屋に入る。

相変わらず白くて無機質な部屋ばかりが続いていて、進んでいるのか戻っているのか解らない状態が続いていた。

背後から迫りくるピカロ達に対し、度々電撃や炎を放つては牽制しつつ、バンビエツタは出口を探し続ける。

そしてその行動を繰り返している内に、ひときわ大きな部屋に辿り着く。そこは今まで見た部屋のどれよりも広く、そして天井も高い場所だった。

一護達が虚圏へと突入する少し前の事、藍染は東仙や市丸と共に研究室へと来ていた。

そこには様々な計器や、巨大な試験管が並んでおり、その中にヌルが閉じ込められている。

顔には口以外に何もない状態で、まるで人形のようなだったが、今では鼻や耳などの細かいパーツが付いているのが見える。

顔の形もそれなりに人間に近づいてきたようで、全体的な体つきにも変化が見られるようになってきている。

「彼女の血肉、そして霊圧を取り込んでから更に変化が早くなっているな」

「なんや、えらい変なモン作ってはるなあととは思ってりましたけど、これホンマに大丈夫なんですか？」

「刀も持たず帰刃もし得ない破面だが、その代わり驚異的な学習能力と成長速度を持っているからね」

目の前にある液体の中で漂うヌルを見ながら藍染がそう口にする、隣にいた市丸は眉を寄せた。

そもそもヌルは、ワンダーワイズよりも前に藍染が崩玉を用いて作り出した破面であり、まだ成長途上に居る存在である。

バンビエッタとの接敵により、成長度合いが加速したようだが、彼女の腕を喰った程度でここまで急激な変異を遂げるというのは、正直想定外でもあった。

(……)まで劇的な変化が望めるとはね……やはり彼女は興味深い存在だ)

「藍染様……この数値を……ご覧ください。これは……どう言う事でしょうか？」

「要、一度容器から出してくれないか？実際に見て確かめてみたいんだ」
「直ちに……」

東仙が機器を操作して容器を開くと、中の液体がドボドボと流れ出る。

そして、ヌルはそのままの勢いで床に転がり落ち、仰向けになって動きを止めてしまった。

未だに眠らされたままのヌルが動く事はないが、その腹部からとてつもない霊圧を感じられる。

「これは……なんだ？」

「なんですか？それ……えらい霊圧やないですか」

藍染がヌルの腹部を露出させると、孔の部分には白い球体のようなものが存在した。

この球体がとてつもない霊圧を発しているようだったが、それが一体なんなのかは不明だった。

形だけを見るならば崩玉のようにも見えるが、これがどのような性質を持ち、ヌルにどのような影響を与えるのかが全くわからない。

藍染はその球体へと手を伸ばしてヌルの孔から引つ張り出すと、ズルリと音を立てて球体は引きずり出され、掌の上で転がる。

「ふむ……すまないが要、これの解析も頼むよ」

「はい、直ちに解析に掛かります」

（まさかこんな物まで生み出されるとはね……本当に興味が尽きないよ、彼女という存在は）

藍染がヌルを作り出した理由、それはバンビエッタと言う未知の存在に対する興味があつたからだ。

彼女は突如として現世に現れ、浦原と接触したり一護と接触したりと様々な行動を取っている。

しかし何よりも気になるのが、まるで未来が見えているかのように行動することがしばしばあつたとい事である。

全てを知っているかのような素振りさえ見せるが、そのくせ積極的に動くことの方が稀であり、何を考えているのかまったくと言っていいほど解らない人物だ。

だからこそ藍染は彼女に興味を抱くと同時に警戒心を抱き、そしてヌルと言う破面を作り出したのだった。

それぞれの戦いが始まるんだが？

研究室を後にした藍染は、とある部屋に来ていた。

そこは窓も無く、照明も最低限しか点けられていないような部屋であり、その中央には一人の破面が佇んでいる。

髪は薄い緑色で、右側の目の下あたりから後頭部にかけて動物の上顎の様な仮面が付いており、破面特有の孔は喉元に開いている。

「それで、君は私に協力してくれる気になってくれたのかな？」

「お前が何のつもりで私の封印を解いたのかは知らないが、協力する義理など無いな」

「君の望みは死神達への復讐……とりわけ山本元柳斎重國へ対する憎しみは相当なもの筈だ」

「……良いだろう、奴らを殺せるならば手を貸そう。ただし、お前達の仲間となった訳では無いという事は覚えておけ」

彼の望みはかつて自らを封印した死神達、特に護廷十三隊の総隊長である山本元柳斎への復讐だった。

大昔に尸魂界に攻め入った彼は、その能力を以って護廷十三隊を半壊させたが、その

時に敗北して靈力を封じられた挙句に、光も闇も無い虚無の空間へと封印された。

それ以来長き時を虚無の中で過ごしてきた彼だったが、藍染が護廷十三隊から完全に離反する際に封印を解き、こうしてここに連れて来られたのだった。

「いずれ虚圏にも死神達が進め入ってくる。君にはそつちの対応をして貰う事になると思うが、構わないかい？」

「ああ、相手が死神ならば。私がこの手で始末するだけだ」

かつて彼を封印に貢献した者の大半が死亡しているが、それでも死神達に対する憎悪が消える事は無く、今もなお深く根付いている。

だからこそ死神達を完膚なきまでに叩き潰し、尸魂界を完全に壊滅させねば気が済まないのだ。

そして彼はその背に光の羽を出現させると、その場から飛び去って行ってしまった。

ピカロ達に追いかけて回され、ひととき大きな部屋に辿り着いたバンビエツタだったが、完全にピカロ達に包囲されてしまい逃げ場を失った。

奥の通路からは砂塵が舞い込んでくるのを鑑みるに、ここを抜ければ外に出られるかもしれないが、この状態のままではそれも叶わない。

だがピカロ達は、まるで「次は何を見せてくれるの？」と言わんばかりに、バンビエツ

タの行動を待っているようにも見えた。

(上手くいくか分かんないけど。アレ……試してみるか)

まずは右腕に霊子を集め、それをそのまま維持しつつ速血装を起動させる。

そして、飛廉脚を使って一気に奥の通路へと移動すると同時に、先程の部屋に向かって集めた霊子を解放した。

するとその霊子が床に炸裂すると同時に部屋全体に広がって行き、まるで牢獄の鉄格子のような形状に変化しながら霊子を固定していく。

部屋全体が牢屋の如く変化していき、全てのピカロがその中に閉じ込められてしまったのだった。

「何これー!!」

「出られないよー!?!」

「虚閃!!」

「虚弾!!虚閃!!」

ピカロ達はその霊子の檻を破壊しようとして、虚閃や虚弾を次々に放って行くが、それは全て効果が無く空しく霧散してしまうだけだった。

これはJの聖文字を持つキルゲの能力を真似たものであり、そうやすやすと破壊できるものでは断じて無い。

バンビエッタはそのまま真っ直ぐに走り続けると、ついに地上へと脱出することに成功した。

(さて、後はどうやってこの砂嵐を突破するかだけど……)

これはピカ口達を閉じ込めておくための砂嵐なので、そうやすやす突破できるものではないが、そんなことはバンビエッタも承知している。

だが突破するだけならばいくつか方法が思い浮かぶため、どの手段を取ろうかと考えているのだ。

その時、地響きと共に砂が隆起していき、この砂嵐を発生させているであろうルナガンガが姿を現した。

『侵入者は排除する』

(……こいつを消し飛ばすのが一番手っ取り早いんだけどなあ)

今のバンビエッタには、これを排除するだけの力がある。

しかしそうになると、当然ながらピカ口達も砂嵐から解放されることに繋がってしまう。

だが、将来的にはピカ口達を解放する必要が出て来るし、しばらくはあの牢を突破されるような事も無いだろうと考えて、彼女は躊躇うこと無く攻撃に移ることにした。

右手から螺旋状に火炎を放出させて威力を高めると、そのままルナガンガを包み込む

ようにして放つ。

そしてその炎が消えた時には、その姿は完全に消滅してしまっていた。

「よし、次は一護達を探さないと……！」

ルヌガンガを倒したバンビエツタは、急いで一護達との合流を図る事にしたのだった。

織姫を奪還すべく虚^{ラス・ノイチエス}夜宮へと乗り込んだ一同だったが、それぞれが別々の道を進みながら先を目指して進んでいく。

そんな中で恋次は十刃の一人である、第八エスパードであるザエルアポロ・グランツと遭遇していた。

「そんな怖い顔をしないでくれよ、僕は研究者だ。此処にいれば……」

「てめえの素性なんか聞いちゃいねえし、お喋りしに來たわけでもねえんだ。喋りたきや、俺に斬られながら勝手に喋ってやがれ」

恋次の霊圧が高まると、卍解を発動させた。

その様子を只冷静にザエルアポロが眺めており、まるでその程度の事なら問題は無いとでもと言わんばかりに余裕の笑みを浮かべる。

何故なら彼の兄であるイールフオルトに寄生させておいた録霊虫から、恋次の卍解の

情報は送られてきているので、既に対策済みだったのだ。

だが……

「卍解!! 『双王蛇尾丸』」

「……どう言う事だ? 送られてきたデータとまるで違うじゃないか……!」

送られてきたデータによれば恋次の卍解は狒狒王蛇尾丸であり、その形は巨大な骨の蛇の形をしているはずだった。

だが双王蛇尾丸と名前すら違っており、右腕には刃の付いた大蛇の骨を纏い、左腕には巨大な狒狒の腕が生えているのだ。

本来なら恋次の卍解を発動出来ない様に細工を施していたが、これではその細工は意味をなさない。

「あの役立たずが!! せめて消滅せずに死体が残っていれば、そつちから情報を引き出す事も出来たつてのに!!」

「はッ! 何をしようとしてたんだか知らねえが、このままぶつ倒させて貰うぜ!!」

恋次はそのまま一気に踏み込んで刃を振るうと、ザエルアポロは即座に距離を取って回避に専念する。

だがそのまま狒狒の腕が振るわれるのを見て、従属官達を肉壁代わりにして何とかやり過ぎすのに成功した。

従属官達はまとめて薙ぎ払われ、押し潰されて死んでいったが、ザエルアポロにとってはそんな事はどうでも良かった。

恋次の正解のデータを収集するのが目的であって、他の者の生死など彼にとつては些末な事ではない。

(チ……何で僕がこんな労働じみた事を……!!あのクズが消滅させられてなければもう少しはマシな情報が手に入ったってのに!!)

イールフォルトがバンビエッタによって消滅させられていたので、真面目なデータを回収することが叶わずに、彼は苛立ちを募らせていく。

従属官達を囷にし、壁にしながらどうか攻撃を回避している状況だったが、その従属官はザエルアポロの回復薬としても機能しているため、これ以上減らされるのは困るといった所だろうか。

「どうした!?十刃のクセに大したことねえんだなあ!!逃げてばかりじゃ俺を殺せねえぞ!!」

そう言って挑発する恋次に、ザエルアポロも怒りを覚えて霊力を開放していく。

だがそれでも逃げるだけで精一杯と言った様子で、それ程までに恋次の強さがデータを遥かに超えていたのだ。

そしてザエルアポロは、ここで戦っても無意味どころか、データを取り切る前に殺さ

れかねないと判断したようで、一旦この場を離脱する事にした。

「おせえ!!見え見えなんだよテメエの動きなんざ!!」

「がは……ッ!?!」

だが離脱しようとしたザエルアポロの目の前に突然現れた恋次は、狒狒の腕で彼を鷲掴みにすると、そのまま壁に叩きつけて動きを封じてしまう。

その凄まじい衝撃に思わず意識を失いかけたザエルアポロだったが、何とか離脱しようとは必死に抵抗する。

だがその腕の腕力は異常とも言え、彼がどれほど抵抗してもビクともしなかった。

「こいつで終いにしてやるよ……!蛇牙鉄炮!!」

その言葉と共に恋次は刃をザエルアポロのへ突き刺すと、そのまま霊子を一気に炸裂させた。

まるで巨大な蛇の頭が相手に噛み付くかのような攻撃に、その攻撃を直接受けたザエルアポロは全身を消し炭にされて完全に絶命してしまう。

そしてその攻撃を繰り出した恋次は、ようやく終わったと息を吐いて緊張を解くと、織姫を探しに向かうべくその場から去ったのであった。

「大したこと無かったな……てめえの兄貴の方がまだ強かったぜ」

恋次が去って行ったあと、ザエルアポロが倒されたことにより従属官達に動揺が走っ

ていた。

彼らにとつてみれば主人が死んだわけであり、これから先どうすればいいのかわからないからだ。

するとそんな時、一人の従属官が異様に膨れ上がったかと思うと、次の瞬間にはその肉体が破裂したように弾け飛んでしまう。

「ふう〜……念には念を入れておいて良かったよ」

はじけ飛んだ従属官の中から現れたのは本物のザエルアポロであり、その姿を見て従属官達が驚きに目を見開いていた。

今まで恋次が戦っていたのは、彼が従属官を改造して見た目と話し方だけを似せた偽者だったのだ。

最初から最後までザエルアポロは隠れており、恋次は新しい正解のデータをまんまと収集されてしまっていたのであった。

「またもや謎の破面（二人目）が出て来たんだが？」

それは少し前の事である。

織姫の居る宮殿へと繋がる階段、その前ではウルキオラが待ち構えていた。

必ず来るであろう一護のことを予想していたが、彼の目の前にやって来たのは、一護等ではなく薄い緑色の髪をした破面だった。

その姿を見たウルキオラは特に驚いた様子も無く、その相手に対して質問をする。

「お前は確か……アルトウロ・プラテアドと言ったか？何故ここにいる」

「そちらこそ、何故ここにいる。侵入者共を排除しに行かなくていいのか？」

「俺が始末すべきは黒崎一護だ。奴があの子を助けに来るのであれば、必ずここを通るだろうからな」

「ほお、その一護とやらは死神か？」

「そうだ」

「そうか。そいつが死神ならば、俺が殺すべき存在だ……い」

それだけを言うアルトウロは踵を返し、どこかへと飛び去っていった。

恐らく一護を殺害しに行ったのだらうと察しながらも、特に気にしていない様子でウ

ルキオラはその場で待機するのだった。

織姫の居る宮殿を目指して走るバンビエッタであったが、前方より何者かが向かってくる事に気づき、一旦足を止める。

それはアルトウロであり、彼は靈力を解き放ちながらバンビエッタを睨みつける。

「誰よあんた？破面みたいだけれど、一体何の用かしら？」

「これから死ぬお前に名乗っても仕方ないが……一応教えておいてやる。私はアルトウロ・プラテアド。それがお前を殺す者の名前だ」

目の前の破面はそう名乗ったが、その名前には聞き覚えがないし、見た目も見た事のない姿形をしていた。

原作にこんな破面は出てこなかったし、小説にも出てきた記憶がない。

ヌルと言う謎の破面と言い、自分の知らない破面が二人もいる状況に困惑したが、今はその事を考えている場合ではない。

「死神では無いようだが……奴らの仲間なら同じように殺すだけだ」

「あらそう。だからって簡単に殺されてやるわけないでしょうが!!」

そう言い放ったバンビエッタが地面を思い切り踏みしめると、前方にいくつもの火柱が突如として現れる。

突然現れた火柱に驚く様子を見せることなく、アルトウ口は手から黒いエネルギーの刃を形成してそれ等を切り裂いた。

そしてそのまま響転でバンビエッタの背後を取って黒い刃を振るつたが、バンビエッタはすぐさま刀に抜いて受け止める。

「つぐ、重い一撃ね……！ だけど、私の方が上よ!!」

「左腕が無いからと言つて、手加減してもらえないなどとは思ふなよ?」

二人の斬撃は互角のように思えたが、次第に力負けして来ている事に気づいたバンビエッタは一度距離を取るべく後方に飛び退いた。

それに対してアルトウ口は黒い刃から斬撃を飛ばしたが、それは一護の放つ月牙天衝と似ており、咄嗟にバンビエッタも同じように刀から霊子の斬撃を飛ばすことで相殺した。

すると黒炎が爆発したかのように周囲へと広がり、石英の木や瓦礫をまとめて吹き飛ばして消滅させた。

その威力を目の当たりにしながらも、油断無く構えるバンビエッタに対し、アルトウ口は淡々と話し始める。

「私の虚刃を相殺するとは……中々やるな」

「言ってくれるわね……!」

「だが……その程度の力ではな」

そう言つて虚刃を連続で放ち続けるアルトウロだったが、バンビエツタはそれらを飛廉脚による高速移動で回避し、熱線と雷球を放つて応戦する。

数多にばら撒かれた雷球は機雷のように空中を漂い、何かに触れては雷撃をまき散らして爆発していき、触れれば大ダメージを受ける事は免れないだろう。

だがそれらの攻撃は全て黒い刃で弾かれるか響転によつて回避されてしまい、まとも
に当たる気配が無かった。

相手の斬撃の速さと一撃の重さは凄まじい上に、こちらの攻撃を軽く往なすだけの技術も持っている為、とても強い相手だとバンビエツタは判断した。

やはり左腕が無いというハンデがかなり響いているようで、このままではいずれ押し切られるのが目に見えていた。

そこでバンビエツタは、完聖体を発動させて一気に決着をつけることに決める。

「ほお……そのような技が使えるとはな」

「悠長に喋つてる暇があるつての!？」

その言葉と同時にバンビエツタは瞬時に背後を取り、炎を纏わせた刀を振るつてアルトウロへと斬撃を繰り出したが、それに対してアルトウロは瞬時に黒い刃で防御し、同時に蹴りを繰り出してきた。

バンビエツタは飛び退きつつ熱線を連射したが、虚刃が放たれるとその矢を全て消し飛ばしながらバンビエツタへと向かう。

咄嗟に外殻静血装で体を覆って身を守ったものの、黒炎が周囲を覆って視界を遮って来たためアルトウロの姿を見失ってしまう。

「今のは迂闊だったな」

「なっ……いっ！」

外殻静血装の結界の直ぐ傍まで迫っていたアルトウロは、黒い刃を振り下ろしてそれを十字に斬りつけてきた。

するとそこから赤い光が内側に向けて伸びてきたので、すぐさま外殻静血装を解除してそれを回避した。

そしてそのまま炎の渦を放射状に解き放つと、その巨大な破壊力を持つ炎に対してアルトウロは虚刃を放って相打ちを狙うが、完聖体になる前よりもはるかに巨大かつ速度を増した炎の前に全て飲み込まれていく。

瞬く間にアルトウロは炎の渦に飲まれて行き、圧倒的な熱気が周囲の大気を揺らめかせていた。

そんな光景を見ながらもバンビエツタは油断せず次の行動へと移っていたが、炎が吹き飛ぶと同時に背から光の羽を生やしたアルトウロが姿を見せる。

「今のは少しばかり驚かされたぞ……ならば、此方も少し本気を出すとしよう」
「随分余裕じゃない。でも悪いけど私だって遊んでるわけにはいかないのよ!!」

アルトウロがそう言うのと響転で一瞬にしてバンビエッタの眼前にまで移動し、そのまま黒い刃を振り下ろす。

その攻撃を辛うじて防いだバンビエッタだったが、腹部目掛けて蹴りが飛んできてそのまま吹き飛ばされてしまう。

瓦礫に激突しながら地面を何回もバウンドしてようやく止まるのだが、そこへ更に追撃の黒い刃が迫り来ており、慌ててバンビエッタは体を捻りながら回転するように避ける。

地面が十字に斬り裂かれ、またもやそこから赤い光が立ち上るのを見たバンビエッタは、そのまま飛廉脚を使ってその場を飛びのきつつ無数の雷球を作り出して一斉に放った。

すると、黒い刃が槍のように伸びてバンビエッタを貫こうと襲い掛かる。

その刃が雷球に触れれば雷球は爆発して雷撃をまき散らすすが、それでも刃の勢いは落ちないどころか逆に加速していた。

それを刀で受け止めて逆に押し返そうとしたが、相手はそれ以上の力で押し切ろうとしており、バンビエッタの肩に少しずつ刀の刃先が食い込んで来ていた。

「ちツ……！なんて馬鹿力なのよ……!!」

静血装を使っているので貫かれることはないが、それでもこの勢いは危険だと判断したバンビエツタはそのまま受け流す様にして横に逸れて回避する。

そして速血装と飛廉脚を併用して背後へ回りこみつ、アルトウロ目掛けて刀を横薙ぎに振るうが、その途端に体が重くなって上手く動かなくなる。

よく見ればバンビエツタの足元に黒い円が出現しており、黒い電撃の様なものバチバチと音を立ててバンビエツタを苦しめており、その所為で思うように動けなくなっていた。

「な、何よ……これ!?!」

「これで終わりだ」

アルトウロはそう言い放つと同時に、手に持った黒い刃をバンビエツタに向かって振り下ろしたが、それよりも早くバンビエツタの刀から霊子の弾丸が放たれた。

それはアルトウロへと直撃すると同時に無数の青白い光となって拡散していくと、それらが次々と檻を形成してアルトウロを捕らえる。

瞬く間に形成されていく牢獄がアルトウロの動きを完全に封じると、バンビエツタは一息ついて完聖体を解いて再び元の姿に戻る。

「ちよつと危なかったけど……何とかなって良かったわ」

「何だこれは……このような物で私を封じ込めるつもりか！」

アルトウロはそう叫ぶと共に黒い刃を伸ばし、自らの力をもつて無理やりに破ろうと何度も斬りつけて破壊を試みる。

だがいくら刃で檻を斬りつけようともビクともせず、只無意味に体力を消耗するだけだった。

（マジで何なのコイツ……一応は閉じ込められたけど。もう檻はこれ以上使えないわね）

この檻はまだ完全に完成していない状態なので、結界を発生させる杭の霊子を使い、杭を使い捨てる事によって効果を発揮するのだ。

使い捨てる杭はそう何個も存在しないので、何度も何度も使えないというのが欠点である。

「また私を封印するつもりか……!!ふざけるな!!このような物、すぐに破壊して貴様を殺しに行かせてもらおうぞ!!」

アルトウロがそう言つて激昂し、その怒りのままに黒い刃を全力で振るうが、やはりその檻は簡単には破壊できないようだった。

その様子にアルトウロは悔し気に歯噛みしつつ、どうにか破壊出来ないものなのかと試行錯誤を繰り返す。

しかしどれだけ攻撃してもその檻を破壊する事は出来ず、只時間だけが過ぎていった。

だがこの檻がいつまでもつか分からない以上、今は一刻も早く先に進むべきだと判断し、バンビエッタは先を急ぐ。

そんな彼女の背後からは未だにアルトウ口の怒りの叫び声が響いていたが、それを無視してバンビエッタは駆け抜けていくのだった。

【Side一護】 一護vsグリムジョー

一方で、ようやく織姫の居る宮殿の傍までこれた一護だったが、その階段の所にはウルキオラが待ち構えており、行く手を阻むように立っていた。

それから二人は激闘を続けて行き、お互いの攻撃がぶつかり合って激しい衝撃波が生まれ、周囲にあった宮殿の床や壁が破壊されて行く。

「俺の鋼皮に傷をつけるとはな……この短期間でそれ程の力を得たか」

「結構本気出してんだけどな……ほとんど無傷じゃねえか」

一護の言葉通り、虚化しての攻撃だというのにウルキオラの体は殆どダメージを受けていなかった。

多少傷がついてはいるものの、それはほんのかすり傷程度であり、このままではギリ貧なのは目に見えている。

仮面も砕けかけており、これ以上は虚化を維持しておけない状態にまでなっていた。

「もはやその状態でいられるのも僅かだろう……諦める」

「は……ッ！誰があきらめるかよ……ッ！！てめえがエスパーダのトップだろ……？だつたらこの戦い、てめえを倒しやあ勝ったも同然じゃねえか……！！」

虚化したままの一護はそう言うのと、刃を振って斬撃を放っていくが、それは難なくウルキオラに受け止められてしまう。

刃に変化させた天墜穿月はミシミシと音を立て、今にも折れてしまいそうな状態であった。

「残念だったな……俺は第四十刃。十刃内での力の序列は、四番目だ」

「四……だと……!?!」

その言葉に一護は思わず驚愕してしまうが、それも無理はなかった。

一護よりもはるかに強いウルキオラ、てつきり一護はウルキオラが第一十刃だとばかり思っていたが、まさかの第四位という事実に驚きを隠せないでいた。

それはつまり、ウルキオラよりも強い十刃が三人もいるという事でもあるからだ。

「これで終わりだ黒崎一護……お前が、俺を斃す事はない」

(ク、クソ……こんな所で負ける訳にはいかねえんだよ!!)

ウルキオラがそう告げて手を振り上げた瞬間、一護は最後の力を振り絞るように天墜穿月を構えて攻撃に備える。

だが次の瞬間、どう言う訳かウルキオラが虚閃に飲まされてしまうと、そのまま壁際へと吹き飛ばされてしまった。

何が起きたのか全く理解できていない一護だったが、振り返って見ればそこに居たの

はグリムジョーで、彼は不機嫌そうにしながらウルキオラを睨みつけていた。

そんな彼の隣には織姫が立っており、彼女は不安そうに一護の方を見つめてくる。

「人の獲物に手を出してんじゃねえぞ……ウルキオラ！」

「……一体何のつもりだグリムジョー？その女も、俺が藍染様から預けて頂いたものだ。何故ここに連れてきた、此方に渡せ」

「断る。それと……今日はえらく喋るじゃねえかよ！」

そう言いながらグリムジョーは不敵な笑みを浮かべると、次の瞬間にはウルキオラに向かつて襲い掛かって拳を振るう。

だがウルキオラはそれに動じる事も無く、冷静に受け止めて見せたが、更にグリムジョーは虚閃を放って追撃を行った。

しかし、ウルキオラも同様に虚閃を放って相殺すると、そのまま響転で一気に背後に回って虚閃を放とうとする。

だが、それを察したグリムジョーは咄嗟に後ろに振り向き、ウルキオラが放った虚閃を受け止める。

何度も虚閃同士がぶつかり合い、やがて衝撃と爆風によつて宮殿の天井が吹き飛んでしまう。

砂埃や瓦礫が周囲を覆う中、ウルキオラはグリムジョーの霊圧を探るべく探查神経を

発動させると、すぐ傍にまで接近してきていたことに気づいて目を細めた。

「一旦テメエには退場してもらおうぜ……ウルキオラ」

ウルキオラの孔目掛けて白くて四角い物体を叩きつけると、そこから白と黒の閃光が迸り、ウルキオラの体を覆って行く。

そして光が収まった頃には、ウルキオラの姿は無くなっており、グリムジョーはその様子を見届けてから一護に視線を向けた。

これは十刃達が部下の処罰をする時の為に藍染が渡した物であり、並みの者なら半永久的に閉じ込めておけると言う代物だ。

だが、それは十刃を閉じ込める事は想定していないので、ウルキオラの場合は保つて二〜三時間と言った所だろう。

それでも十分過ぎる程に長い時間であるし、その間に一護との決着を済ませてしまえばいいのだから、それで問題ないと判断したのだ。

「そう言う訳だ、分かったらさっさと怪我を治せ女」

「……」

グリムジョーの言葉を受けた織姫だったが、彼女は何も言わずに俯いていた。

そんな織姫の態度にイラついたのか、グリムジョーは彼女の胸倉を掴むと無理矢理引き寄せた。

しかし、その手を一護が掴んで止めた事で、グリムジョーは不快そうに眉をひそめる。
「井上……治してくれ。俺の怪我と、そいつの傷も」

「何だと……？てめえに情けをかけられる覚えはねえぞ」

「俺だつてねえよ……けど、対等の条件で戦いてえんだろ？それとも……負けた時の言いわけに、その傷はとっておくか？」

一護の挑発的な言葉にグリムジョーは舌打ちを一つ鳴らす、それでも対等な条件で戦い、そして一護を完膚なきまでに叩き潰さなければ意味がないと考えていたグリムジョーは渋々了承する。

そして織姫は二人を治療し、場所を変える二人をネルと共に見送るしかなかった。

そして場所を変えて一護とグリムジョーは対峙しており、一護が天墜穿月を構えた状態にいるのに対し、グリムジョーも同じく刀を抜き放ち、その切っ先を向けていた。

お互いに準備が整った所で一護は矢を連射して攻撃を行うが、グリムジョーは虚閃を放つて矢を消滅させつつ一護に接近していく。

そのまま残りの矢も刀で弾き落としながら斬撃を繰り出そうとするが、それよりも早く一護がグリムジョーの後ろに回り込んでおり、刀を横薙ぎに振るっていた。

しかし、グリムジョーはそれを受け止めてみせる。だが、そのまま一護は一気に押し

返して月牙天衝を放つ。

「チツ……いやっぱり一筋縄じゃいかねえか……」

虚閃で相殺をしようとしたが、只の矢とは違って威力が桁違いの為、逆に虚閃がかき消されてしまい、そのままグリムジョー目掛けて直進してくる。

響転を使ってその場から移動して回避すると、そのまま一気に一護へと距離を詰めて斬りかかった。

天墜穿月を構えて攻撃を受け止め、そのまま蹴り飛ばして距離を取った後、再び矢を連射してグリムジョーを攻撃する。

「やるようになったじゃねえか黒崎一護!!それでこそ潰しがいが有るってもんだ!!」

「俺は別にお前を潰すためにたたかってるんじゃねえよ……」

「微温イ事言つてんじゃねえぞ!てめえ等は虚圏に戦いに来たんじゃねえのか!? テメエ等は死神!!俺達は虚!!負けた方は皆殺しって相場が決まってんだよオ!」

一護の呟きに対してグリムジョーは怒声を上げると、響転を使用して一気に距離を詰めつつ連続で刀を振った。

しかしそれを一護は全て防ぎ、弾き、避けてはグリムジョーへ一閃を放つ。その一撃を何とか受け止めたものの、大きく打ち上げられてしまう。

直ぐに体勢を立て直したが、一護は既に矢を放つ体勢に構えており、狙いを定めてグ

リムジョーに向けて射放つ。

「月牙……天衝!!」

「チィ……!!王虚グラン・レイ・ゼロの閃光!!」

只の虚閃では相殺できないと悟ったグリムジョーは即座に自分の指を刀で斬ると、その血を振り撒くようにして、虚閃以上の霊圧を込めた最強の一撃を放った。

この技はグリムジョーにとつて切り札の一つで、十刃のみが放つことが出来る最強の虚閃、それが王虚の閃光だ。

それは月牙天衝とぶつかり合うと大爆発を引き起こし、黒炎と爆風が吹き荒れて周囲の物を呑み込み消し去って行く。

「クソがッ……今の中でも相討ちにしかなんねーのかよ……」

「どうしたグリムジョー……てめえの力はそんなもんかよ。俺をぶつ潰すんじゃないのか?」

地面に降り立ったグリムジョーに対し、一護も天墜穿月を肩に担いで話しかけてきた。その姿にグリムジョーは自分の中で沸々と怒りが湧いてくるのを感じる。

空座町で二度戦った時はグリムジョーが優勢だったはずなのに、今では一護の方が強くなっているからだ。

虚化をさせる事も出来ないので、更にその事がグリムジョーを苛立たせる。

このまま自分が弱いと思われるのは、グリムジョーのプライドが許さなかった。

(どうなつてやがる……この強さならウルキオラの野郎にも苦戦することは無かったはずだ。まさか……あの一戦でここまで……)

目の前の一護の強さにグリムジョーは驚きを隠せないでいた。

先ほどまでウルキオラに一方的に蹂躪されていた男とは、同一人物とは思えない程に急成長しているのだ。

このままではグリムジョー自身、一護に負ける事も有り得るかもしれないと思い始めていた。

「いいぜ……だったら何が何でも本気を出させてやる……軋れ！バンテラ豹王!!」

刀の側面に指先を這わせると、そのまま引つ掻くように刀を擦り始める。

すると凄まじい衝撃と共に砂塵が舞い上がり、グリムジョーの姿を隠してしまった。

その光景を一護は警戒しながら見ていると、砂塵が晴れると同時にグリムジョーが姿を現す。

そして姿を現したグリムジョーは、体は甲殻に覆われており、髪は鬣のように長く伸び、鋭い爪と牙を持ち、まるで半獣人を思わせるような姿になっていた。

【Side一護】 一護vsグリムジョー②

帰刃をしたグリムジョーは一護を睨みつけると、凄まじい雄叫びを放たせる。

大気が震えるような響きと共に突風が辺り一帯を襲い、周囲の木々が大きく揺れ動くと、その隙を逃さずにグリムジョーが一気に駆け出した。

圧倒的なスピードによって一護の死角から攻撃を繰り出すと、一護はいくつもの柱に激突しながら吹き飛ばされてしまう。

更に響転を使って一瞬にして距離を詰めると、そのまま蹴り上げて空中へと上げさせる。

しかしそれでも一護はすぐに体勢を立て直すと天墜穿月を構えて矢を放つが、グリムジョーはそれを避けずに拳で弾いて見せて接近すると、そのまま叩きつけるように爪を振るう。

それを天墜穿月の側面で受け止めるが、あまりの威力からか一護は耐え切れなくなり、そのまま地面へと打ち付けられていった。

「どうした黒崎一護!!早く仮面を出せ!てめえの全力を見せてみやがれ!」

「良いぜ……後悔しても知らねえぞ」

グリムジョーの挑発に乗ったわけではないが、一護はそう言うど虚化をしてみせた。そして天墜穿月から矢を連射し、瞬時に刀に変えながらグリムジョーの背後へと瞬歩を使つて移動する。

そしてそのまま月牙天衝を背中に放つた。前方からは数多の矢が、背後から月牙天衝が迫り来る。

これを見たグリムジョーは上に跳躍して避けるが、既に一護は次に行う攻撃の為に動いており、グリムジョーの上空へと移動していた。

「月牙……天衝!!」

「な、何だと……ッ!?!」

咄嗟に腕を交差させて防御態勢になるグリムジョーだが、そのまま黒い斬撃と共に地面へと叩きつけられてしまう。

凄まじい量の砂塵が舞う中、一護は地面へと降り立っては静かに様子を伺っている。と、砂塵の中を突つ切つて勢いよくグリムジョーが飛び出してきて、一護の胸元目掛けて爪を突き立てて来た。

「……クソッ! まるで効いてねえのかよ!」

「どうしたグリムジョー………てめえこそ全力で来いよ。まさか帰刃してその程度なのか?」

鋼鉄すらも容易く切り裂く筈のその爪は、一護の胸板を貫くことが適わなかった。

静血装が使われた一護の皮膚は、並みの攻撃を弾き返す程の強度を誇るのだ。自分の力が全く通じない事に、グリムジョーの顔には焦りが生まれていた。

そして一護はその腕をつかむと、そのまま刃振り下ろす。それを腕に着いた刃で何とか受け止めたが、凄まじい重さの斬撃に押し負けてしまい、地面に膝を突いてしまう。グリムジョーは苦虫を潰したような顔を浮かべると、一護の脇腹目掛けて蹴りを繰り出し、体勢が崩れた隙に後方へ下がって距離を取った。

「いい加減本気を出したらどうだ、この程度の力で俺を倒せると思ってるのか?」
「ナメンじゃねえぞ黒崎一護!!」

再び雄たけびを上げると、響転を連続して使い一瞬で一護の懐に入り込む。

そしてその速度のまま爪を振るい、蹴りを繰り出し、嵐のような攻撃を繰り出すが一護は全てを防ぎ、避けてみせていた。

しかしその一護を見てもグリムジョーの怒りが収まることはない。逆に怒りは増していく一方で、次第に大振りになっていく。

そんなグリムジョーの攻撃の合間を縫って一護は天墜穿月を突き出すが、グリムジョーは間一髪のところ上で上体を下げて回避すると、そのまま回し蹴りを放った。

だが一護はその足を掴んでみせると、そのまま投げ飛ばして矢を連射して追撃する。

その矢は次々とグリムジョーに着弾すると、連続して黒炎を上げながら爆発を引き起こし、吹き飛んでは地面を転がっていく。

「いい加減お終いにしようぜ、グリムジョー。俺には勝てねえって分かったろ」

「ふざけた事抜かしてんじゃねえぞ!!俺はこんな所で……終わる訳にはいかねえんだよ!!!」

グリムジョーは叫び声を上げると、自らの霊圧を一気に高めていく。

爆発的に霊圧が上昇していき、大気が激しく震え、まるで衝撃波がまき散らされているかのようだった。

霊圧が青いオーラとして視認できるまでに高められたとき、その霊圧が腹部の孔へと収束していき、青白く光る何かを作り出している。

「破壊の豹王!!!」
バンテラ・デストルクシオン

腹部の孔には青い玉が形作られ、それが作られたと同時にグリムジョーの姿が変化を起こし始める。

体を覆っていた甲殻は剥がれ落ち、牙と爪は更に鋭さをましてより強靱なものになる。

尾は二股に分かれ、所々に点在する青い棘は炎のような印象を与え、より野性的な風貌になっていた。

「何だよ……その姿は……？」

それは帰刃を超えた帰刃であり、言うなれば今のグリムジョーは帰刃のその先の形態へと姿を変えたのだ。

ひとつ前の帰刃とは比べ物にならない霊圧の高まりを感じ取り、思わず一護は眩くように訊ねかける。

すると、グリムジョーはゆっくりと歩きながら答えた。

「デメエをぶつ殺すためだけに手に入れた力だ……！」

グリムジョーは爪を一護に向けて振るうと、青い斬撃が地を這うように走っては周囲の瓦礫を切り裂きながら一護に迫る。

天墜穿月から矢を連射して迎撃するが、矢を全てかき消しながら迫ってくるので、それを瞬歩で避ける。

しかしグリムジョーはそれを許さずに響転を使って一護の前に現れると、横薙ぎに爪を振るってきた。

一護は天墜穿月を刀に戻してから下から振り上げて防ぐが、グリムジョーその場で回転して尻尾を振るって一護を吹き飛ばす。

何とか体勢を立て直した一護だったが、尻尾から青い棘が無数に射出されて一斉に一護目掛けて襲い掛かる。

避けようにも間に合わず、一護はとつさに防御姿勢をとる事しかできず、その無数の棘は着弾した瞬間に閃光と共に凄まじい轟音を放ち、青い炎を巻き上げながら爆発していく。

「グッ……!」

「どうした……?! まだ終わりじゃねえぞ!」

静血装の防御を上回る衝撃によりダメージを負っている筈の一護なのだが、意にも介さない様子でゆつくりと立ち上がる。

そして再び天墜穿月を構えると瞬歩を使って高速で移動しながら矢を連射してグリムジョーに攻撃していくが、それらの矢を爪で弾き飛ばして無効化すると、一気に一護へと距離を詰めていく。

幾度となく刀と爪がぶつかり合い、辺りには火花と金属音が響き渡り、衝撃波となつて瓦礫や石英木々を破壊していく。

お互いに高速で移動しながら斬撃の応酬を繰り返す中、時折矢と棘が飛び交って周囲に黒い炎と青い炎が燃え広がっていく。

「こんなもんか!?! 随分と息が上がってんじやねえか!!」

「誰がどうしたって……?! これくらい何でもねえよ!」

激しい剣戟を繰り返す中、グリムジョーは一旦距離を取ると、両手の爪から青い炎

を吹き上がらせて構える。

そして高速で一護の方へと駆け出すと、一護は矢を連射するが、グリムジョーは全てを青い炎を纏った爪で弾き返しながら迫る。

それを見た一護は瞬時に刀へと変化させ、天墜穿月から月牙天衝を繰り出し迎え撃つ。ぶつかり合った二つの斬撃が衝撃波を生み出し、炎が吹き荒れて全てを破壊せんと猛威を振るう。

「しぶとい野郎だな……だが、そうでなくちゃ面白くねえ」

「そうかよ……テメエこそ大概しぶといじゃねえか」

やがてその炎が収まっていくと、一護とグリムジョーは互いに距離を取っていた。

両者ともあちらこちらに傷を負っているが、それでもまだまだ戦う気力が余っているように見える。

一護の仮面は左目の辺りが碎けており、黒く染まった瞳が露になっていることから虚化の限界に近付いている事が分かるだろう。

だが、それでも一護は余裕の表情を崩す事無く天墜穿月を構えており、グリムジョーはそんな一護に怒りを顕わにしていた。

「何だその目は……!?随分と舐めた真似しやがって!!気に喰わねえんだよ!!」

「何が気に喰わねえんだよ……人間如きに対等な顔されんのが我慢ならないってのか

「？」

「関係無え!! テメエが何だろぅがどうでもいい! 俺を舐めた奴は全部ぶつ潰すだけだ!!」

グリムジョーは再び爪を振りかざして一護に向かつていくが、一護はその攻撃を天墜穿月で受け止め、押し返しながら矢を放って反撃する。

その矢はグリムジョーの肩に着弾して黒炎を上げながら爆発するが、それに構わずに振り払われては爪を振るって青い斬撃を繰り出す。

それに対して一護は瞬歩を使うと、青い炎を掻い潜ってグリムジョーの背後に回り込み、刃を一閃させようとした。

だがその刃を受け止めると、そのまま力任せに投げ飛ばして一護を地に叩きつける。

「先ずはテメエからぶつ潰す!! 覚悟しろ、黒崎!!」

両手を前に突き出すと、両手の爪が青く輝いて青い炎が激しく燃え盛っていく。

それはどんどん勢を増していき、巨大な霊子の刃となって形成された。

合計で十本もの刃が空中に浮かび上がっており、そんな物で斬られたら瞬く間に消滅させられてしまうに違いない。

「何だよ……そりゃあ……」

デスガロン・リアマ

「豹王の炎爪これが俺の……最強の技だ!!」

あまりの熱量に周囲の空気が歪み、ジリジリと陽炎を生み出し始め、明らかにこれま
 どとは比べ物にならない強大な力の前に、一護は戦慄を覚えた。

そしてそれが一護目掛けて振り下ろされ、凄まじい勢いで迫り来る。

「月牙天衝!!」

全霊を刀に変化させた天墜穿月に注ぎ込み、それを全力で振るって放った渾身の一
 撃。

黒炎を纏った巨大な斬撃と、青い炎を身に纏った五本の霊子の刃が激突すると、ぶつ
 かり合った二人の斬撃は眩い閃光を発しつつ、凄まじい爆音が響き渡らせた。

そこから放たれる圧力によって発生した衝撃波はまるで嵐のように荒れ狂い、黒い炎
 と青い炎が爆発的な勢いで広がっていき、辺り一面の一切合切を焼き尽すかの如く暴れ
 狂う。

「終わりだ黒崎一護!! テメエはここで死ぬ!!」

「うおおおおおおお!!!」

青い炎と黒い炎が衝突する中、一護は凄まじい衝撃を受けながらも一歩も退くことな
 く前に出る。

一護の仮面はほぼ砕け散り、もはや右目の部分しか残されていない程であったが、そ
 れでも尚、全力を尽くしてグリムジョーに食らいつく。

すると次の瞬間、一護右の側頭部から突如として角が生えてきて、それにともなつて黒炎の勢が増してグリムジョーの爪を徐々に押し返し始めた。

そして五本の霊子の刃を砕いた一護は、そのままグリムジョーへと向かつて行く。

「まだだ……!!まだ終わりじゃねえ!!」

だが、まだ五本の刃が残されており、今度はそれらを振るつて一護を迎撃しようとする。

一護は天墜穿月を弓へと即座に変えながら無数の矢を放つ。それらには鎖の様なものも巻き付けられており、一護はその鎖の端を掴んでいた。

それらの矢が残り五本の霊子の刃へと着弾すると、一気に鎖が巻き付いていき、一護が一気に鎖を引っ張ると一瞬にして霊子の刃は粉々に砕け散って消滅した。

「テメエを倒して俺は先に行く!!ウルキオラも、藍染もぶつ倒す!!そして皆を……井上を連れ帰る!!だから……テメエ一人に負けてるわけにはいかねえんだよグリムジョー!!!」

遂にグリムジョーの間合いに飛び込んだ一護は、トドメの一撃と言わんばかりに刃を突き入れて行つた。

その一撃が深々と腹部に突き刺さると、グリムジョーは一護の腕を掴んで睨み付けるが、最早その腕を捻り上げる程の力は残っていないようで、グリムジョーの手がゆつく

りと力無く落ちていった。

そして、忌々しそうに「クソツ……」と呟くと、そのまま地面へと落下していくのだった。

【Side 恋次&雨竜】 恋次&雨竜 v s ザエルアポロ

一方で、ザエルアポロを倒した（実際には倒したのは偽物）恋次は、雨竜と合流を果たして織姫の居る宮殿へと移動していた。

その後ろからペツシエとドンドチャツカが付いて来ているが、この二人はまるで戦力にならないのでどっかに行ってくれればいいと思っただ。

だが二人の知らないところで破面にやられて死にました、となっても寝覚めが悪いので仕方無く同行させているに過ぎなかった。

「随分と遅かったじゃねえか、テメエがちらしてしている間に俺は十刃を一人片付けたぜ？」

「そつちこそ、随分と御大層な嘘をつくじゃないか。嘘をつくならもう少し真面な嘘をついたらどうなんだい？」

「何だとテメエ!?俺が嘘ついてるつてのokay!」

確かに雨竜は恋次が戦っている所を見ていないので、そんな風に言うのは無理は無いだろう。それにしても酷い言い草である。

だが、雨竜は恋次の霊圧の高まりは感知していたし、その様子から卍解を発動させた

のだろうという事も察する事が出来る。

しかし、それにしても相手の霊圧はさほど高くない事も感知していたので、然程強い相手では無いのだろうと考えていた。

「君が卍解をしたのは霊圧を感知していたから知っているさ。けれど、然程……」
「待て……！前方に誰かいるぞ！」

雨竜が何かを言おうとした瞬間、恋次がそれを遮るように叫んだ。

前方に視線を向けると、そこには無数の破面が居り、どれもザエルアポロの従属官であらう者達であった。

そして更に言うならば、ここは先ほど恋次がザエルアポロと戦った場所であり、先の戦闘での破壊痕がそのまま残っている。

先に進んでいたはずなのに、気が付いたら元の場所に戻って来てた、という状態に陥ってしまった恋次は思わず呆然としてしまった。

「な……!? テメエはさっき俺がぶつ倒したハズ……！何で生きていやがる!!」

「残念だったね。タネ明かしをしてやるつもりはないけれど……ともかく、僕はこの通りピンピンしてるよ」

更に、従属官達が道を開けるように次々と左右に退き、奥から歩いてきたのは紛れもなくザエルアポロ・その人であった。

それを見た恋次は斬魂刀を握る手に力が込める。さっき倒したのが偽物だと思っていない恋次にとっては、この状況自体が謎な上に理解不能なのだから。

その横では雨竜が顎に手を当てながら考え事をしていて、暫くしてから一つため息を漏らした。

「なるほど。阿散井恋次、どうやら君は彼に謀られていたみたいだね。君が倒したのは、恐らく彼の偽物だったんだろう」

「なんだ……その死神より君の方がよっぽど頭が回るようじゃないか。そう……！君がさっき必死こいて倒したのはあー！僕の偽物にしか過ぎなかったんだよ！！つまり君の眼は只の節穴と言う訳だ！！あーはっはっはっはっはあ！！」

高笑いを上げるザエルアポロの姿に、恋次は歯を食い縛った。

ザエルアポロは両手を仰々しく広げながら愉快気に言っており、腹立たしいことこの上ない。

しかし、それ以上にそんな簡単なトリックを見抜けなかった自分に怒りを覚えていた。

「生憎と……僕は君とお喋りをするためにここに来たわけじゃないんだ。そんなに喋りたければ、壁にでも話していると良いよ」

楽しげに話すザエルアポロの胸元に、いつの間にか移動していたゼーレシユナイダー

が打ち込まれており、光の刃が貫通して背中まで突き抜けた。

それにより、ザエルアポロは膝を突いて倒れこむ、と思いきや。

「クハッ！クハハハハハハッ！！馬鹿が！！君如きの矢が！！僕を！！貫いたと！！そう思ってるのかい！！」

「なッ……！！？」

「君があのお売女と戦ったという事は知っている！！その時にお前の力は全て解析済みなんだよ！！」

突き刺さったはずのゼーレシユナイダーはポロポロと砂の様に崩れ落ちていき、何事も無かったかのように平然としているザエルアポロに驚愕を隠せない雨竜。

雨竜が虚圏に来てから戦ったのは僅か二回であり、ゼーレシユナイダーも然程使ったわけではない。

そして直に見られていたわけでもないのに、それにも関わらず力を解析されて無効化されたという事に動揺が隠しきれないようだ。

「デメエは退いてろ！！アイツはもう一回俺がぶっ倒してやるよ！卍解……！！」

「出来ると思ったのか？」

霊圧を高めて卍解しようとする恋次だったが、何故か卍解を発動することが出来ず、困惑するように蛇尾丸を握り締めたまま固まってしまった。

それを見やったザエルアポロは呆れた様に額に手を当て、そのまま頭を横に振る。

人を馬鹿にするような動作だが、何が起きたか理解できていない恋次にとつてはそれどころではないだろう。

「君の卍解は一度見てるし、解析も終わってる。それなのに何の対策もしていない訳が無いだろう?」

「何だと……? 一体何をしやがった……!」

「相手に手の内を明かす程馬鹿じゃないし、説明する義理も無いんだけど……そうだね、君達を今すぐ殺すような事は無いから安心していいよ。君達には実験台になって貰うつもりだからね!」

余裕のある表情を見せるザエルアポロの言葉を聞いて雨竜は思わず身構え、恋次も蛇尾丸を構えて相手を睨み付けた。

しかし、ザエルアポロは自ら手を下すつもりはないようで、従属官達を二人へと向かわせる。

卍解を使えないとは言えどたかが従属官である為にそこまで強くは無く、簡単に蹴散らすことが出来てしまうが、何度倒しても一向に減っている様子が無かった。

数だけが多いため、このままでは時間だけがどんどん経過していくという始末である。

「チイっ！キリがねえ……！一体どうなってやがんだ!?」

恋次が舌打ちしながら毒づき、蛇尾丸を振り回し従属官たちを退けていく。

雨竜も同じように銀嶺弧雀で敵を穿っていくが、どうにも矢の威力が減衰しているようであり、従属官をたつた一人倒すのに何発も放つ必要があった。

ザエルアポロは説明する気などないが、この部屋に仕掛けられた装置によって、二人の能力は殆ど封じられているのだった。

「さつき君は……お前の力は全て解析済みとか言っていたけれど、それは間違いだよ」「何だと……？それはどういう意味だ」

雨竜の言葉を聞いたザエルアポロは不快気に眉根を寄せた。

どうやらザエルアポロとしても自分が圧倒的に有利だと自負しているようで、雨竜の発言に対して不機嫌さを隠そうとすらしていない。

それに対して雨竜の霊圧は高まるばかりであり、ザエルアポロはその霊圧を見て忌々しげに鼻を鳴らした。

しかしその直後雨竜、

その背には羽根のようにも見える光の帯が四本現れ、その帯へと霊子が収束して行く。雨竜の完聖体は尸魂界中で使った時よりも遥かに強力になっており、その霊圧が部屋中を揺らした。

そして次の瞬間、雨竜は銀嶺弧雀から矢を連射した。そのあまりの速さに目視できた者は居らず、従属官の何人かがその直撃を受けて消滅させられてしまい、ザエルアポロは苛立ちを隠すこともせず、ギリツと歯を食い縛る。

「君には言っても無駄だとは思うけれど一応言っておくよ。滅却師完聖体……それがこの姿の名前だ」

「それが君の隠し玉と言う奴かい……？だが、何も隠し玉があるのは君達だけじゃあないんだよ」

そう言いながらザエルアポロは手を掲げた。すると至る所から従属官たちが続々と湧いて出てきており、ざっと見ただけでも優に数十体は居るだろうか。

ザエルアポロは両腕を広げて高笑いすると、従属官達は次々と姿を変えてザエルアポロと全く同じ見た目へと変化したのだ。

まるで分身の術の様であり、おぞましい程の不快感を与える光景に恋次は顔をしかめ、雨竜も厳しい表情でザエルアポロを睨み付けている。

「クソ野郎が……ッ!!こぎかしい真似してんじやねえぞ!!」

「クハハハハハッ!!この中から僕を見つけ出せるかな!?君の節穴の目で!!君達が僕の偽物を相手にしている間に、僕は君のその姿をじっくりと解析させてもらうよ」

「出来るよ……」

幾人ものものザエルアポロに囲まれてもなお、自信ありげな態度を崩さない雨竜だったが、その言葉を聞いてザエルアポロは嘲る様に笑う。

だが雨竜はそんなものは意に介さずに、静かに弓を構えて矢を連射する。数多の矢がザエルアポロ達へと襲いかかり、次々と貫かれては消滅していった。

姿はザエルアポロそのものになっても、霊力や能力まで変化したわけではないので、所詮は従属官程度の能力のままなのだ。

だが、次々と消滅していくニセのザエルアポロをまえにしても、本物のザエルアポロは全く意に介してはいなかった。

「無駄だと言っているだろう？ 君達が何体偽物を倒そうが、本体であるこの僕を倒すことは出来ないよ。ほら、もうすぐ君の能力も解析が……」

「出来るとても……？ と、そう言っただろう」

雨竜の言葉を聞いてザエルアポロには僅かな動揺が現れたが、それをすぐさま引つ返めて元の余裕そうな表情に戻る。

だが、それ以上に雨竜が矢を放つのを止めてしまったのが気になったようで、怪しむように眉間のシワを深めた。

先程まではあれほど正確に、大量の従属官を屠っていたというのに、どうして急に攻撃を止めるような事があるのか。

「お、おい雨竜……！テメエどうして攻撃を止めてんだ!?」

「まあ見ていなよ……」

「おい！ぼさつとしていっているんじゃない！さつきとアイツを片付けるんだ!!」

だがいつの間にもやら部屋の四方には複数ゼーレシユナイダーが突き立ててあり、それらが霊子の線で繋がって行き、やがて陣を描き上げる。

無数の矢を放ちながら雨竜が設置したのは、これだったようであり、ザエルアポロが気が付かぬうちに仕込みを完了させていた。

そして雨竜と恋次、遠くで見ているドンドチャツカとペツシエの周囲にも同じようにゼーレシユナイダーが突き立ててあり、容器から水を垂らすと四人の周囲に結界が張られた。

「分かりやすく、君達の言葉で言ってあげようか。終わアスタ・アキりだよ……ザエルアポロ」

「な……ッ!?!」

そしてその結界が張られた直ぐ後に、部屋全体を吹き飛ばす程の爆発が起ったのだ。た。

青い爆炎が部屋中を飲み込んでいき、全ての従属官を残さず消し去るほどの威力を持って爆発していた。

やがてその爆炎が収まった頃には既には、その部屋に居るのは雨竜達だけとなってい

た。

「またもやナルと戦う事になったのだが？」

アルトウロとの戦いを終え、再び織姫の下を指して進むバンビエッタだったが、ようやく一護に追いつけようとしている所だった。

遠くで誰かが戦っているのが見えている、よく見ればそれはネリエル・トウ・オーデルシユヴァンクとノイトラ・ジルガの二人である事に気づく。

ネリエルがノイトラに押されている所を見るに、戦いが始まってからそれなりの時間が経っていて、しかも消耗の度合いは圧倒的にネリエルの方が上であろう事が簡単に分かった。

「助けに入った方が……ッ!？」

いざ助けに入ろうとしたところで、バンビエッタの目の前に突如として何かが現れて、その行く手を阻んで来た。

それは現世でも二度交戦したナルであったが、その時よりも遥かに人の形になっていく様に思えた。

顔には口も鼻も耳も存在し、白くて長い頭髮が腰のあたりまで伸びていて、それが歩きたびに床で擦れ合ってサラリと流れる音が聞こえてくるようでもある。

目の所には相変わらず仮面があるので、目の有無は分からないが、この様子だと恐らく目も存在すると思われる。

だが、それ以上に体つきの変化にこそ驚かされるのだ。凹凸の無い人形のような体はなりを潜め、肉付きが良くなった女性らしい体に変化している。

「アンタノ……アイテ、アタシ……！」

「チツ……こんな時にあんたの相手なんてしてられないっての!!」

現れただけでかなりの威圧感を放つ、破面としての力が強まっているヌルと戦うのは厄介そうではあったが、それを避けて先に進めるとは思えない。

ならばとバンビエッタ完聖体を発動させようとしたが、それよりも早くヌルが懐まで入り込み、顔面に手のひらをかざしてくる。

その手のひらには火球が生み出されると、一気に膨れ上がり破裂する。

「ぐうっ……!? な、何なのこの速さ……!? 前よりもずっと……！」

そう、かつて戦った時とは比べ物にならないくらいに動きは速くなってもいる。

よく見れば相手の体には緑色のラインが入っており、それはバンビエッタが編み出した速血装である事が窺い知れた。

更に言えば、今ヌルが使ったのは速血装と飛廉脚を組み合わせた技であり、それもバンビエッタがよく使う技である事もすぐに気づいた。

「ふぎけんじやないわよ!? 何勝手に人の技バクリまくって……!!」
「モットミセテ……アンタノ……ワザヲ……!!」

言葉すら覚えてたのようカタコトではあったが、その声からは明確なる喜びの感情が感じられ、明らかにバンビエッタとの戦闘を楽しんでいる。

こちらも速血装と飛廉脚を使わなければ一方的にやられてしまう所であったので、仕方なく速血装を使って、その動きについていくように飛ぶ。

お互いに凄まじい速度で飛び回りながら、熱線や雷撃を放ちあいながら戦闘を続けたが、やはり左腕の無いバンビエッタに対してヌルの動きの良さが目立っていた。

腕一本でこれだけの差が出てしまう事に悔しく思いながらも、なんとか喰らいついて行く。

「アツハハハッ……!! ウデガナイ……! テカゲンシテアゲヨウカ……う?」

「ふぎけんじやないわよ……喰ったのはあんたでしょうが!!」

そんな事を言い合いながら二人は、お互いの力を全開にして戦っていたのだった。

火柱を放てば相手も同じように返ってきて、雷球をばら撒けば同じようにばら撒き、斬撃を飛ばせばその攻撃がそのまま返ってくる。

まるで鏡合わせの様な戦いであったが、バンビエッタにはハンデがある分、どうしても不利な状況であった。

それでもその状況を打破しようと思考を回転させ、どうにか打開策を見つけようとしてはいるが、なかなか突破口が見えなかった。

(このままじゃジリ貧ね……何とか隙について完聖体を発動……まさかとは思うけど完聖体までは使つてこないわよね?)

「ドウシタノ……? モウオシマイナノ……?」

「んな訳無いでしょ!? まだまだこれからだつての……!!」

ヌルは、今度は両手の炎を剣のように変化させて、それを交互に振るいながら斬りかかってくる。

バンビエツタも刀を振るつて攻撃を捌いてくが、やはり片手を失つた状態という事もあり、どうにも攻めに転じられないまま防戦一方を強いられてしまう。

ヌルが足で地面を思い切り踏みしめると、バンビエツタの足元から火柱が立ち上がりそのまま焼かれそうになるも、かろうじて回避に成功する。

しかしヌルは追撃とばかりに炎剣を降り下ろしてくるが、ギリギリの所で防御する事に成功したものの、その衝撃はあまりにも大きくてバランスを崩してしまう。

そこを狙つて再び斬撃を放つて来るが、バンビエツタはそのまま回転しつつ、足から炎剣を生やして逆に蹴り飛ばしてみせる。

更に、吹き飛んでいくヌルに対していくつもの雷撃を落として牽制し、その隙にバ

ンビエツタは完聖体を発動させる事に成功した。

(今のでくたばつてくれれば御の字なんだけど……そう甘くはないわよね)

「オモシロイ……ソレガ、アンタノホンキ？」

ヌルの周囲には結界の様なものが張られており、それによつて雷撃が無効化されていた。

まさか外殻静血装までもが使われてしまうとは思わず、バンビエツタは内心で舌打ちしながらも、さらに意識を集中させる。

どうやらそれは反膜にも似た性質を持つている様で、外部からの一切合切を遮断することが出来る様だ。

しかし、いくらヌルが外殻静血装が使えるようだが、完聖体を発動させてしまえばこちらの方が有利だと考えたバンビエツタは、すぐに次の手へと移行する。

靈子の隷属を行ない、相手の結界から靈子を奪つて自らの羽へと収束させていくと、その結界は徐々に崩壊していきヌルが顔色を変えたのが見えた。

外殻静血装よりも強固なのだろうが、反膜程万能ではないらしいのが分かり、そこでバンビエツタは一気に攻勢へ転じる事にした。

奪つた靈子そのまますべて刀へと流し込んでいき、そのまま勢いよく振り抜くと、靈子の斬撃が一直線にヌル目がけ飛び、それを見たヌルは素早く横に避けていく。

バンビエツタは何度も刀を振るって連続で霊子の斬撃を飛ばして行ったが、ヌルはその全てを回避し、その斬撃が何かに当たる度にとつてもない爆発音を響かせていたが、それが当たった箇所が悉く爆ぜていく様を見ながらヌルは笑っていた。

「イイ……！モットヤツテミセテ!!ソウジヤナキヤツ……マラナイ!!」
「気持ち悪い奴ね……！こっちはちつとも良くないつてのよ!!」

まだ完聖体は完全な物とはなっていないので、霊子の隷属にも限度がある。

そして、刀に流し込んでいた霊子が切れたと同時にヌルがいくつもの炎弾を連射してくるが、それにすぐさま対応するために自らも同じだけの数の雷球を作り出し、そのすべてを相殺して見せた。

その爆風が晴れる前にヌルは再び地面を力強く蹴って突っ込んで来ようとするが、そのタイミングに合わせてバンビエツタは後方へと飛びつつ雷球を放ち、更には火柱も追加してヌルの行動範囲を狭めて行く。

だが、凄まじい速度で回避を繰り返すヌルを捉える事は出来ず、その速度を落とす事すら出来ないまま一気に距離を詰められてしまうが、待っていたと言わんばかりに、バンビエツタはニヤリとした笑みを浮かべた。

凄まじい速度でヌルの周囲に水が集まって行く光景を見ており、このままだとまずいと感じたヌルだったが時すでに遅く、その巨大な水球の中に閉じ込められる羽目となつ

た。

「ナニコレ……？コンナノ、アタシニハ……通用シナイ」

「そんな程度で終わるわけ無いでしょ……!!」

その言葉と同時にバンビエッタの右の手のひらに小さな火球が灯され、それはどんどん大きくなってやがて野球ボール程の大きさになって止まる。

だが、小さくともとても熱量を秘めている事が感じられ、周囲の景色が歪んで見える程の強烈な陽炎を生じさせていた。

そしてその火球をバンビエッタは思いきり投げつけると、それは巨大な水球へと着弾した途端に水蒸気爆発を起こし、周囲一帯に凄まじい爆風と衝撃波が吹き荒れる。

あまりの威力だった為に、周囲の地形を変えてしまうほどで、巨大なクレーターが生み出されてしまう。

「フ……フフフ……！イタイ、トツテモイタイ！デモ、マダイキテルヨ？」

「いくら何でもしつと過ぎでしょ……今のでくたばるときなさいよ……！」

どう考えても致命傷クラスの攻撃であった筈なのに、あれだけの攻撃を受けても尚立ち上がった事に驚いたバンビエッタであったが、内心では本当に面倒な相手だと思いながら刀を構える。

あちらこちらポロポロになって身体の至る所に火傷が見られ、仮面も半分砕けて目が

露出している状態であり、赤い瞳がバンビエツタを睨んでいるのが見えた。

だが、明らかに先ほどまでの雰囲気とは違うものを感じ取った為か、油断せずに刀を握り締めるバンビエツタ。

「フクガボロボロニ……キガエテクル、ソコデマツテロ!!」

「はあ!?! あんた何言つて……」

ヌルはバンビエツタに向かってそう叫ぶなりその場から飛び去って行ってしまい、それを見たバンビエツタは慌てる事も無くただ呆然として見ていた。

まさか本当に着替える為だけに撤退したとは思えないが、何を考えているのかまったくわからない相手に戸惑いを隠せないでいる。

だが、いなくなったのならいなくなったで別に構わなし、追いかける理由も待つてやる必要も無いので、さっさとネリエルの援護に向かう事にしたのだった。

ようやく一護と合流できたんだが？

一時的にだがヌルを撃退し、ようやくネリエルの下へと辿り着いたバンビエツタが見たものは、息を切らしながら槍を杖の様に地面に突き刺しどうにか立っているネリエルの姿があった。

帰刃をしているにもかかわらず、帰刃をしていないノイトラに追い込まれて満身創痍の状態になっている事に思わず顔をしかめる。

一護の方はグリムジョーとの戦いで疲弊しており、更には織姫がノイトラの従属官であるテスラ・リンドクルツによって人質にされている為、動くに動けない状態だった。

「言っただろ!? テメエが十刃だったころとは何もかもが違うってなあ!!」

「あぐあ……ッ!!」

ノイトラに腹部を思い切り蹴りあげられ、ネリエルが苦痛の声を上げて地面をバウンドしながら吹っ飛んでいき、近くにあった瓦礫に衝突して崩れ落ちてそのまま倒れ込む。

原作ではネリエルが再びネルの姿に戻ってしまう事によって逆転されてしまう流れだったが、何故こんな事になっているのかがわからずにバンビエツタは眉をひそめた。

だが今は織姫を救出して左腕を治してもらわなければならないと思い、彼女を捕らえているテスラの背後へと一瞬にして移動する。

「ぐあ……っ!!な、何が……」

「もしかして卑怯とか言うんじゃないでしょうね？そつちは人質なんかとつてるんだから文句言える立場じゃないでしょ」

背後から炎を纏わせた刀を突き刺すと、テスラは口から血を吐きながら苦悶の表情を浮かべる。

人質にされていた織姫は彼から解放されたので、バンビエッタは刀を突き刺したまま更に火力を上昇させる。その勢いでテスラはそのまま、全身を焼き尽くされて死亡した。

本来であれば帰刃をし、無抵抗の一護を一方的に攻撃して苦しめる展開があったはずだったが、帰刃すら披露する事無く死亡する事になった。

「向こうから馬鹿デカイ霊圧のぶつかり合いは伝わってきてたが、それはテメエみたいだな」

「だったらどうだつてのよ?」

ノイトラの言葉に対してバンビエッタは睨み返して挑発する様に問いかけると、彼は舌打ちし殺気を放ちながら彼女に向かって斬りかかる。

その一撃を避ける事は容易だったものの、それを止めたのは他でもないネリエルと一護の二人であった。

二人は今にも限界に達してしまいそうな様子ではあったが、まだ戦う力は残されているという事がわかるとノイトラは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「織姫！二人が抑えてくれている内にあたしの腕を治して！」

「う、うん。わかった……！」

二人が抑えている内にバンビエツタは腕の治療をしてもらおうとお願いすると、彼女はすぐに了承して双天帰盾の力を使って彼女の左腕を回復させる。

完全に動かし問題がない事を確かめた。

その様子を見ていた一護とネリエルだったが、ネリエルは限界を迎えてネルの姿に戻ってしまい、それに気づいた一護はネルを抱えると瞬歩をつかって距離を離す。

「一護、あなたは二人を連れてきつさと逃げなさい」

「けどよ、俺はまだ戦えるぜ師匠……！」

「あなたのやる事は織姫を現世に連れ帰る事ですよ。それと……そちの奴も安全な場所まで連れて行きなさい」

ネルを抱えたまま一護がそう主張するのに対し、バンビエツタはネルを指し示しながら

ら言い聞かせる。そして最後に残ったノイトラの方へ視線を移す。

ネルは既に気絶してしまっており、今の彼女がまともに戦闘出来る状態では無い事を理解しているため、素直に従う事にしたのだった。

しかし、この場から逃げようと一歩足を動かした瞬間、ノイトラが刃を振るおうとしてくるのが見えたバンビエツタは霊子で無数の剣を形作って射ち出す。

数十本の鋭い刃がノイトラに向かって放たれ、着弾すると同時に水柱が舞い上がり周囲を濡らす。

「チィッ!!」

「そう簡単にやらせるとでも思ってたんの？」

雨のように水が降り注ぐ中、ノイトラは鎖のように連なる輪を掴んで武器を振り回し、そのまま勢いよくバンビエツタ目掛けて投擲してきた。

凄まじい速度で迫りくる巨大な武器に対して、バンビエツタはそれを容易く回避すると、それが地面へと激突すると同時に砂塵が巻き起こり視界を覆っていった。

一方で恋次と雨竜を相手にしていたザエルアポロは、ズタボロの状態になりながら自分の研究施設にまで後退を余儀なくされてしまっていた。

自らの従属官を自身と同じ姿にし、攪乱させている間に雨竜の力を解析しようとして

いたが、まさかあの大きな部屋全体を爆破する程の攻撃が来るとは思わなかったのだ。そのせいで彼の宮は崩落してしまい、忌々し気に舌打ちをしたザエルアポロであったが、彼の研究施設部分だけは一際頑丈な造りをしていたので、辛うじて残っている状態であった。

何とか難を逃れて研究室まで戻ってくると、回復薬も兼ねている従属官の一人を喰らっては傷を癒し、ボロボロになった衣服も着替えると、どうやってあの二人をグロテスクに殺すかを思考し始める。

(あの滅却師の完聖体とやらの解析も終わっているが、あの装置は破壊されてしまったしな……さて、どんな風にしてやろうか)

そして宮を崩壊させる程の攻撃を放った雨竜はと言うと、崩落して瓦礫の山になってしまった宮の中で恋次と共に佇んでいた。

結界を發動させていたので瓦礫に押しつぶされるようなことは無かったが、恋次としては雨竜がいきなり建物を崩落させる程の攻撃を放つとは思わなかったので肝を冷やしているところであった。

「デメエ何考えてやがる!?!危うく俺達まで生き埋めになる所だったじゃねえか!」

「結界を張っていたんだ、そんな事になる訳が無いだろう」

無事であったことは喜ばしいが、流石に建物の下敷きになって死ぬという結末は迎えたくはないと感じているのか、恋次は眉を寄せながら詰め寄ってくる。

すると、ドンドチャツカとペツシエが瓦礫の中から勢いよく飛び出て来て雨竜に文句を言い始めた。

彼らも結界で守られていたので瓦礫に押しつぶされるようなことは無かったが、雨竜がいきなり建物を崩落させる程の攻撃を放つとは思わなかったので肝を冷やしているのは確かである。

雨竜は全く動じる様子を見せずに即答するが、それでも文句を言い足りないのか口を開きかけたものの、瓦礫が吹き飛んできた事によってその言葉は遮られてしまう。

二人はすぐにそちらへ視線を向けると、そこには無傷どころか先程よりも余裕を感じさせる笑みを浮かべるザエルアポロの姿があった。

「酷いじゃないか……僕の宮をこんな風にしちゃうなんてね」

「デメエ……どうやってあの攻撃から生き延びてんだ!!」

「大概君もしぶとい奴だ……けれど、君の宮とやらは御覧の通り瓦礫の山だ。つまりそれは、僕の力を減衰させて阿散井恋次の正解を封じていた何かも、一緒に吹き飛んだという事なんじゃないかな？」

雨竜の言う通り、二人の能力を封じていた装置は先ほどの爆発によって吹き飛んでし

まい、何の効果も發揮しないガラクタへと変わり果ててしまっている。

だがしかし、それでもザエルアポロはそんな事を気にする様子もなく、平然とした表情のままだった。

それは負け惜しみや強がりといった類ではなく、ザエルアポロにはまだ手札が残されているからこそその自信なのだ。

「君達の様な劣等種が、僕をこれ程までに苛立たせておいて生きて帰れるとも思っているのか？」

ザエルアポロの言葉を聞いて警戒心を引き上げる雨竜であったが、二人の能力を封じる装置が破壊されて全力が出せる状態になっている為、最早ザエルアポロの方が追い詰められている状況なのは変わらない筈である。

しかし、それでも余裕の態度を崩そうとしない相手に対して、二人は嫌なものを感じずにはいられなかった。

もしかするとまだ何らかの隠し玉を隠しているのではないかという疑念が湧き上がり、油断してはならないという思いを募らせていく。

「全力で戦う事になるなんて不愉快極まりないが………フオルニカラス噉れ邪淫妃」

そう言うのと鞘から刀を引き抜き、ザエルアポロはその刀身を自らの口へと運んではそのまま飲み込んでしまう。

勢いよく喉へと突き入れていくと、彼の体は異様な程に膨れ上がっていき、同時に血のような液体が飛散していく。

そしてその血が収まって行くと、異形の姿へと変貌したザエルアポロが姿を現す。

「ハアアアアアア……お待たせしたね、これにて第二幕の開演……いや、終幕の時間だ」

そう言い放ったザエルアポロに対し雨竜は再び完聖体を、恋次は卍解を発動させて構えを取る。

相手がどんな姿に変貌しようとも、どんな能力を持っていようとも二対一という状況には変わりはなく、相手が能力を発揮させる前に倒してしまえば良いという判断からだ。

「どんな能力を持つてるか知らねえが、その前にぶっ倒しちまえば関係ねえんだよ！」

「悪いけれど容赦はするつもりは無い……今度こそ確実に倒させてもらうよ」

「それはこちらの台詞だよ……悪いけれどももう終わりだ」

お互いに臨戦態勢に入ったところで恋次は刃を、雨竜は弓を構えては先制攻撃を叩き込まんとする。

しかしその瞬間二人の背後から瓦礫をかき分けるようにして触手の様な羽根が飛び出すと、そのまま二人を包み込んでしまうのだった。

ようやく尸魂界からの援軍が到着したんだが？

ノイトラとの戦闘に入ったバンビエッタであるが、状況は膠着しておりなかなか攻め入る事が出来ずにいた。

というのも、尸魂界での戦いにおいて本来剣八が戦うはずだった東仙と狛村の二人と戦う事になった結果、その皺寄せがバンビエッタに襲いかかっていたからである。

完聖体を使えば倒せるとは思うが、その結果として再び皺寄せが来る可能性もあるのだ。迂闊な事は出来ないと思っただけだ。

「馬鹿みてえな霊圧をまき散らしたのはためえのハズだろうが!?!なんだその戦い方は!!ふざけてやがんのか!?!」

(困ったわね……尸魂界からの援軍が来てくれれば問題はなくなるんだけど)

目の前で怒りの声を上げるノイトラは武器を振るつては攻撃を仕掛けてくるが、刀に外殻静血装を付与して全て受け止める事で攻撃を防いでいた。

三日月上の刃が二つ付けられたノイトラの武器は、刃が内側についており外側は峰と言っても過言ではない形状をしている。

それでいて巨大かつ質量もあるので、鈍器としては破格の破壊力を誇る得物であつ

た。

「やる気がねえんならさっさと死ね！てめえみてえな奴が俺の前に立ちふさがってんじやねえぞ!!」

「さっすからうっさいっての！いい加減黙りなさいよ!!」

怒声を飛ばしながらも次々と振るわれる巨大な武器による連撃を、バンビエツタは受け流していた。

外殻静血装を纏わせているので、攻撃は自体は衝撃すらも感じず簡単に弾き飛ばせており、何の問題もなく捌けていたが、それでもノイトラの攻撃は止まなかった。

むしろその攻撃は更に苛烈さをましており、鎖のように連なる輪を巧みに操りながら間髪入れずに連続で武器を叩きつけて来る。

炎と雷撃を放ちつつ距離を取ると、背後から何者かが接近してくる気配を感じ取り即座に振り返る。

「よお……面白そうな事してんじやねえか」

そこには刀を肩に乗せてニヤついた笑みを浮かべる剣八の姿があり、ようやく尸魂界からの援軍が到着したようだ。

これでようやく余計な戦いをしないで済むと、バンビエツタそう思い溜息を吐き出しては気を取り直す事にした。

後は剣八にノイトラを任せればいいだけだ。ただでさえヌルやアルトウ口と言った謎の破面まで存在しているのだから、これ以上の不確定要素を抱え込みたくないと言ったビエツタは考えていたのだ。

「前に戦った時よりもかなり強くなってやがるじゃねえか。あの野郎と戦うよりもてめえと戦った方がよっぽど楽しめそうだけ……なあ？」

「あたしはアンタの相手なんざゴメンだつての。つてか、あんたは援軍としてきたんでしょ？」

「ちツ……ジイさんから念を押されちまつてるからな。仕方ねえ……こいつの相手は俺がしてやる」

「ふうん……まあそういう事なら後は任せたわ」

「余計な真似したらためえからぶつた斬るからな。さつさと引つ込んで一護の野郎のお守でもしてやがれ」

そう言うなり剣八は斬魄刀を構えて戦闘態勢に入り、バンビエツタは織姫によつて治療中の一護の方へ向かつて向かつていく。

苛立たしそうにししながらノイトラは舌打ちし、剣八が目の前に立つと忌々しそうに睨みつけるが、そんな視線を向けられようともし剣八の態度に変化は無く、それどころか好戦的なまでの表情を見せる始末である。

すると次の瞬間にはノイトラが動き、右手に持つ巨大な刃を剣八目掛けて振り下ろして来る。

「俺がその女よりも弱いって言いてえのか!? ふぎけた事ぬかしてんじやねえぞ!!」

「ああ? そう言ってるんだろ。情けねえ戦いなんざしやがったら……すぐにぶった斬っちゃうぞ!!」

尸魂界からの援軍は剣八だけでなく、他にも幾人かの隊長格が虚圏へと訪れていた。ザエルアポロと戦っていた雨竜と恋次の下にもマユリが姿を現したが、テクトロ・デ・テイテレ人形芝居をくらって血反吐を吐いて膝を突いている所であった。

だが、彼の能力は雨竜の体内に仕掛けられた監視用の菌にて全て観察済みで、その対抗策を練ってきており、実際にはマユリは無傷で済んでいたのだ。

短期間で完全に対策を打ち込んで来た事に、驚きを隠せないまま啞然として言葉を失っていた。

すると彼はネムの足元へと触手を忍ばせていき、彼女を絡め捕っては人質としてマユリに見せつけた。

「油断したね! 部下への気配りが足りてないからこんな事になるんじゃないのかな!」

「勘違いをしているようなので言いますが……私を人質にした所で何の意味もありません

んよ」

「まったく……五月蠅い奴だネ。まあいい……卍解『金色足殺地蔵』」

足殺地蔵の刀身が歪な形に変形していき、やがて人の頭部を持った芋虫の様な姿へと変貌していった。

そして次の瞬間にはその口から周囲へと毒ガスがまき散らされていき、その強烈な毒性によって周辺一帯が瞬く間に汚染されていった。

ザエルアポロも例外なく侵食されていき、皮膚が少しづつ変色して激痛を体中に走らせていく。

それだけに留まらず、トドメと言わんばかりに金色足殺地蔵の巨体が迫ってきており、まるで丸のみするかのように大きく口を開けていた。

「くそオオオオオオオ!!」

あつという間にザエルアポロは飲み込まれてしまい、為す術もなく喰われてしまった。いた。

後に残ったのはネムを縛っている触手だけであり、それ以外は金色足殺地蔵の体内へと収められてしまったようだ。

だが次の瞬間には、どういう訳かネムが苦悶の表情を浮かべ始め、叫び声を上げながら苦しみ始めた。

その様子を見ていたマユリは思わず怪し気に眉根を寄せ、一体なぜそうなってしまったのかと考え込んでいた。

「おい！見ていないで助けたらどうなんだ！」

苦しむネムを見た雨竜はマユリに向かって大声で叫ぶが、彼はそんな言葉を耳にしつとも動く様子はなく、そのまま無言のままでもネムを見つめ続けていた。

周囲に彼女の悲鳴が響き渡り、遂には腹部が膨れ上がってまるで臨月間際の妊婦のよう巨大化し始めていた。

「この僕を……殺したと思っただのか？」

ネムの臍に繋がった触手に口が出現すると、そこからは先ほど金色足殺地蔵に飲まれたハズのザエルアポロの声が発せられた。

邪淫妃の能力の一つとして、ガブリエール受胎告知と言う最重要能力があるが、これは臍から相手の体内に侵入して内臓に卵を産み付けて苗床にする能力だったのだ。

そしてその卵は母体の全てを吸収して急成長し、ザエルアポロとして再誕を遂げる。

ネムの口から這い出て来るといっておぞましい光景に二人は目を背けてしまいが、そんな中でもマユリだけは平然としており、ザエルアポロの姿を目にしても動揺してはなかった。

そしてネムは干からびて息も絶え絶えの状態で地面に倒れ伏し、そのまま微動だにし

なくなっていた。

「さて、もう一度自己紹介といこうか涅マユリ」

ザエルアポロは満面の笑み浮かべ、眼下のマユリへと語りかけていた。

そして長々と受胎告知の能力について説明をし始めたが、マユリはそれを無視してネムの下へと歩いていく。

その後ろ姿を目にしたザエルアポロは、馬鹿にするかのような態度でマユリに向けて言葉を放っていた。

「どうした？ 副官がやられて絶望しているのかい!? 随分と繊細な……」

「それで……?」

「何……?」

「それだけかと聞いているんだがネ……完璧な生命体とまで自己評価していたのだから、もっと別の能力を隠しているんだろう……勿体ぶらずに見せてみなヨ」

そう言われると、ザエルアポロは軽く指を動かしてみせた。

それだけだと言うのにも関わらず、何故か金色足殺地蔵がマユリの意志に反して勝手に動き出し、そのまま彼を飲み込むように襲い掛かっていく。

どうやらザエルアポロを食った事によってその肉体が神経と融合してしまったよう
で、駆動中枢が支配されてザエルアポロの意のままに操れるようになってしまっていた

のだ。

「正解と言えど生物の姿をしていた事が禍となつてしまい、完全に自由を奪われてなすがままにされてしまう。」

だが次の瞬間、金色足殺地蔵は膨れ上がって破裂してしまい、そのままただの斬魄刀にまで戻って行つてはマユリの手に収まった。

「ヤレヤレ……道具風情が主人にたてついてタダで済むとでも思っているのかネ？ 万が一私に楯突いたら、自滅するように改造してあるんだヨ」

「クツ……そんな事まで想定してるなんて……！」

「さて、それじゃあ君には新薬の実験台となつて貰おうかね」

その言葉に思わず身構えてるザエルアポロだったが、どうやら既にその薬とやらは投薬済みであり、今更何をして遅いのだと知った。

一体いつそんな物が投薬されたのか全く分からない為、彼は激しく動揺しながら周囲をきよろきよろと見渡していく。

一体何が自分の体に起こるのか、ザエルアポロは必死になつて考えているようであったが、それが判明するまでに大して時間は要さなかつた。

（な、何だ……これは……言葉が遅すぎて聞き取れない……）

その薬は感覚を鋭くさせる物で、時間の流れが遅く感じられてしまうようになるので

ある。

ほんの一秒が百年にも感じられるような効果があり、ザエルアポロの目にはマユリは止まって見え、言葉も遅すぎて何を言っているのか聞き取れない程であった。

だが、鋭くなったのは感覚だけなので肉体はそれに付いて行けず、とてつもなく緩慢な動作しか行えなくなってしまうている。

「この刀が君の体を貫く感覚を知るのは百年後だ。まあ、何も焦る必要はない。私の刀が百年かけて君の体を……」

そう言いかけたが、次の瞬間にはザエルアポロの霊圧が急激に高まって行つた。

爆発的に霊圧が上昇していき、霊圧が薄紫のオーラとして視認できる程の濃度にまで達してしまつてきており、マユリですら少し気圧され始めている。

一体何が起きているのかと思っていると、超人薬を投与されて何もできないハズのザエルアポロの口が動いており、普通の速さで言葉を発してみせていた。

「フォルニカラス・ロコラ狂気の邪淫妃」

そう、彼もグリムジョーと同じく帰刃を超えた帰刃を発現させていたのだ。

肌は青白く変色して下半身はまるで鳥の足のように変化し、無数の触手は桃色に染まつてより毒々しい色合いになっていた。

また、尻尾の先の穴には薄紫の球体が浮遊しており、尻尾の先からは薄紫色の霊子が

噴き出して空中へと消えていく。

「まったく、この姿まで晒す羽目になるとは想定外だよ。それじゃあ……仕切り直しと行こうじゃないか」

剣八vsノイトラ&マユリvsザエルアポロ

ノイトラとの戦闘に入った剣八はと言うと、こちらも壮絶な戦いを繰り広げ始めていた。

お互いに本気を出して斬り合い続けており、一撃一撃が地形が変わる程の威力を秘めている程だ。

だがしかし、それでもノイトラの鋼皮を斬り裂くには至らずにいて、どちらも決定打に欠ける状態で膠着状態に陥っていた。

「俺の鋼皮は歴代十刃の中でも最高硬度だ！てめえら死神如きの剣じや傷一つ付けられねえよ！」

巨大な刃と刀が幾度となくぶつかり合う度に火花を散らしていき、鏝迫り合いと化して互いに相手を弾き返す。

しかし間髪入れぬ攻防の中で再び激しい金属音が鳴り響き、剣八はノイトラをかち上げるようにして吹き飛ばす。

そしてそのまま鎖のように連なる輪を強引に引っ張ると、ノイトラの巨体が一瞬にして手元に引き寄せられてしまった。

そのまま顔面を驚掴みにしては地面に向けて勢いよく叩きつけ、そのまま顔面目掛けで突きを繰り出した。

ノイトラは咄嗟に手を弾いてはそれをかわすと、そのまま距離を離して体勢を整え直した。

「避けたな……？ 死神の剣じやキレねえとかほざいてやがったが……どうやら斬れる場所もあるみてえだな」

「ハッ！ 寝言いつてんじゃねえぞ!! 攻撃をかわすのは本能だ!! テメエの剣じや俺は斬れねえ!! それが全てだ!!」

ノイトラは雄叫びのような声を上げると、そのまま飛び掛かってくるように刃を振り下ろしてくる。

凄まじい一撃は砂塵を巻き上げて剣八の姿を覆い隠すが、その砂塵が晴れると片手でその刃を受け止めている剣八の姿が露わになった。

ノイトラはその刃を引いて再度攻撃に転じようとするのだが、まるでビクともせず逆引に引張られて体勢が崩れてしまう。

その隙を見逃さず剣八は素早く突きを繰り出すと、刃は深々とノイトラの顔面に突き刺さって行く。

だが……

「何べん言わせりや気が済むんだ……?てめえに俺は斬れねえんだよ!!」

頭部を刀が貫いているにもかかわらず、ノイトラはそう言つて劍八の胸元目掛けて手刀を繰り出してきた。

その手刀は容易に劍八の体を貫いて鮮血を吹き出させていたが、それよりも何故頭部を貫かれても動けるのが劍八にとっては理解できなかつただろう。

だがノイトラが刀を引き抜くと同時に眼帯を捲り上げると、そこには孔が有るだけであり、劍八の刀はその孔を素通りしただけとなつていたのだつた。

「これで分かつたか?てめえの攻撃は俺には無意味なんだよ」

「はッ……」

「何が可笑しいつてんだコラア!!」

劍八の漏らした嘲笑じみた笑いに怒号を上げて蹴りを繰り出すが、あつさりとその足は掴まれてしまつて動きを止められた。

だがそのまま何もせずにとだ笑みを浮かべているだけの劍八を見て更に苛立ちを募らせたが、掴まれた足を動かさうにもビクともしない。

すると、その足をなにするでもなく離してやると、劍八は不敵な表情で口を開いた。「斬れねえ上に斬れても死なねえんじやつまらねえと思つたがよ……少なくとも斬りゃあ死ぬつてわかつた。それで十分だ」

「だから斬れねえって言ってるんだろ！馬鹿が!!」

そう言うなりノイトラは即座に間合いを詰めて攻撃を仕掛け、再び激しい剣戟が繰り広げられる。

だが、先程までよりも剣八の放つ太刀筋は鋭くなっており、その力強さは増していくばかりだった。

一閃、二閃と刃を交えていく毎に段々攻撃速度は上がって行き、ノイトラは舌打ちをしながらも攻撃を受け流し続けていた。

だが遂に剣八の攻撃がノイトラの鋼皮を斬り裂いていき、そこから真っ赤な血が流れ出し始めたのだ。

「ようやくてめえの硬さに慣れて来やがったぜ……ほらどうした、反撃してこねえのか？」

「慣れただと……そんな理由で俺の鋼皮を斬ったつてのか!? ふざけんじゃねえぞ!!」

そう叫ぶと同時に虚閃を放って剣八を攻撃するが、あろう事か片手で弾かれてあらゆる方向へと打ち返してしまった。

まさか虚閃がたったの片手一本で防がれるとは予想出来ず、呆気に取られると共に戦慄してしまった。

だが、すぐさま手刀を繰り出して顔面を狙ってみるものの、それも少し顔を後ろに傾

ける程度で回避されてしまう。

それは眼帯を斬り裂く程度にしかならず、そして眼帯が外れると同時に剣八の霊圧が爆発的に上昇し始めた。

そして、次の瞬間には剣八が刀を振り下ろし、ノイトラの胸を斬り裂いてみせる。

「ああ？これは俺の霊圧を封じるための封印みてえなものだ。じつくりと戦いを楽しむためのモンだったんだが……てめえが外しやがるから手加減し損ねたじゃねえか」

「手加減……だと……!?舐めやがって……!」

その言葉を挑発と受け取ってしまったノイトラは逆上してしまい、更に強烈な攻撃を仕掛け始める。

だが、剣八はそんなノイトラを見ても動じる事は無く、全てを受け流して見せた上で攻撃に移り、反撃に移っていた。

そしてノイトラの武器を片手で受け止めると、渾身の蹴りを胴体に打ち込み、そのまま吹き飛ばしてしまう。

「まだ生きてるか……?いい加減つまらねえ戦いにうんざりしてんだがよお」

「つまらねえだと……!?クソが……!テメエ如きの剣で、俺が……俺が……俺が死んでたまるか!!祈れ!!サンタテレサ聖哭螳螂!!!」

そう叫んで巨大な武器を頭上に掲げると、その武器へと霊子が収束し始めていった。

そして凄まじい衝撃と共に砂塵が舞い上がらせ、徐々に砂煙が晴れて行くにつれてそれは姿を現していた。

砂塵の中から現れたノイトラは、頭部に三日月の様な角を生やし、腕が四本になって巨大な鎌を四本携えている。

そして何よりも、胴の傷は完全にふさがっており、剣八の付けた斬撃の痕など全く見当たらなくなっていたのだ。

一方で、帰刃のその先の姿まで解放したザエルアポロは、余裕そうな表情でマユリを挑発していた。

超人薬を投与されて感覚だけを鋭くされたハズなのに、まるで何事も無かったかのうに平然としているザエルアポロに、マユリは驚きを隠せなかった。

だがそれ以上に、どうやって超人薬の効果を打ち消したのか、いったいどんな能力を使ってくるのかという方が興味深いようだ。

「二体どんな手で超人薬の効果を打ち消したのかは知らないが……まあいい、それは君を倒した後にでもじっくりと調べるとしようじゃないか」

「随分な自信だね。何か勝算でもあるのか……それとも何も見えていない節穴なのか……どっちにしろ、その自信に満ちた笑顔が苦痛と絶望に染まるところを拝めると思う

と、ゾクゾクしてくるよ！」

そう言つてザエルアポロは再び指を鳴らして見せると、触手の先から卵のようなものを出現させてそれを地面に落とした。

するとそれが孵化するように肉塊のようなモノが次々と這い出て来て、まるで一つの生き物のようになごめき始めると、見る見るうちに巨大になっていった。

それはマユリの卍解である金色足殺地蔵と全く同じ形をしており、その口からは毒ガスが漏れ出している。

「もしかしくともそれは私の卍解かネ？だが所詮は猿真似にしか過ぎな……うぐつ!?」

「毒の配合まで同じだとしても？馬鹿かお前は。そんなもの、お前に効くように配分を変えているに決まっているだろう」

咳込むと同時に吐血して膝を突くマユリを見て、ザエルアポロは不敵に笑つてみせた。

本来ならマユリは金色足殺地蔵の毒に対する抗体を持っているのだが、毒の配合が変わつてしまったのであればそれは何の意味も成さない。

だが、マユリは瞬時に懐から複数の試験管を取り出すと、それらを一瞬にして調合しては体内へと注入して行つた。

すると瞬く間に体の状態が元に戻っていき、毒の進行速度が緩まるのを確認すると、彼は再び立ち上がった。

「なるほど、瞬時に解毒剤を調合する事が出来るのか……」

（ふむ……ただ相手の能力を複製するだけの能力なのか……それとも他にも何かがあるのか。どちらにせよ少し様子を見る必要があるがそうだな）

目の前まで迫りくる金色足殺地蔵に対し、マユリは全く焦った様子も見せないまま目を細めた。

彼を押し潰そうと手を振り下ろしたり、体当たりで吹き飛ばそうとするものの、それを避けつつ観察を続ける。

毒液をまき散らしたりし、その巨体を活かした攻撃を繰り返しているが、自分の正解にやられるほどマユリは間抜けではない。

「さて、それじゃあこういふのはどうか？」

今度は尻尾の先から始解である足殺地蔵の刀身を生やすと、それで斬りかかってきたのだ。

当然それも元はマユリが使う物なので、どういう物なのかは十分に理解できている。

ザエルアポロはまるで嘲るかのように刃を振るっており、自分が優位に立っていると確信してでもいるのか、終始余裕の表情を見せていた。

攻撃が段々と激しくなつて行き、触手でマユリの刀を弾き飛ばすと、そのまま正殺地蔵の刀身で斬りかかる。

咄嗟に身を引いて避ける事は出来たので掠る程度だが、それでも正殺地蔵の能力によつて四肢が麻痺してしまつてその場に崩れ落ちてしまつた。

「どうだい？ 自分自身の能力にやられるというのは。どんな気分なのか教えて欲しいね」

「……ツ！ そちらこそ、何の対処もしていないとでも思つてたのかねネ」

正殺地蔵は毒によつて四肢を麻痺させるのではない。四肢を動かすという脳からの信号を切断することによつて、強制的に肉体の動きを止めてしまうのだ。

それゆえザエルアポロも毒の配合を変えするなどという事も出来ずにそのまま発動してしまつているのだが、それでも四肢を麻痺させるには十分すぎるのだつた。

しかしマユリは奥歯を噛みしめると、そこに仕込んでおいた薬品を強引に嚙んで嚙下した事で、麻痺は即座に回復する事が出来た。

当然自分が何らかの要因によつて麻痺してしまつた場合の事など考慮しており、いつでもこの薬を飲めるよう準備をしていたのだ。

「へえ……ずいぶんと用意が良いみたいだね」

「何の準備もなく挑むような阿呆と一緒にしないでもらえないかね？ それで、当然私の

能力以外も使えるのだろうか？そちらの方も見せてみたまえヨ」

マユリはザエルアポロを挑発するかのようにそう言うと、不敵な笑みを浮かべて見せた。

ザエルアポロの能力は触手で包み込んだ相手の能力をコピーするというものであり、つまり少し前に包み込んだ雨竜や恋次の能力も使える事に他ならない。

だが、彼はこの姿になってからまだ日が浅いために、まだ最後に包み込んだ者の能力しか使う事が出来ておらず、マユリの能力しか扱えていないのが現状なのだ。

「成程……その様子を見るに私の能力しか使えないようだね」

「だからどうしたって言うんだ？お前は先ほど自らの卍解を破壊したハズだ。卍解も使えない状態でどう戦おうっていうのか教えてもらえないかな」

「死神の力が卍解だけだとも思っていたのかネ……？実に愚かな考えだヨ」

「何だと……？」

「あの男の後追いになるのは心底腹が立つし非常に気に食わんが……まあいい。あの男に出来て私に出来ない訳が無いのだからネ」

そう言うともユリは刀を前方に突き出す構えを見せると、霊圧を高めて行つてそれを一気に開放させていった。

すると、彼の左手の指には鋭く尖ったネイルの様な形の刃が装着され、更に背中には

足殺地蔵の顔が出現していたのだ。

その顔からは六本の不気味なアームが伸びており、足殺地蔵の刀身やらメス、注射器の針のような物が装着してあったのだった。

剣八 v s ノイトラ & マユリ v s ザエルアポロ②

無断でグリムジョーが現世へと向かった時、イールフォルト以外の破面の死体からデータを採取しており、死神の戦闘データや正解のデータはある程度解析出来ているのだ。

だが、マユリの見せたその能力は正解でもなければデータにも載っていない物であり、一体何をやったのだという疑問ばかりが浮かんでいた。

「……何だそれは？そんな力……データにはなかったぞ!!」

「当然だろう。これが出来るのはまだほんの僅かな者だけなのだからネ」

マユリの言葉と共にザエルアポロは尻尾を振るって斬りかかるが、今度は六本のアームが自在に動いて攻撃を防いでしまう。

マユリ自身は微動だにせず、アームだけが自動で攻撃を防ぐという奇妙な光景に、ザエルアポロは舌打ちをした。

だがザエルアポロも触手による攻撃を織り交ぜていき、ザエルアポロの偽足殺地蔵がマユリの胴へと突き刺さらんと襲い掛かる。

だが……

「な、何故刺さらない……!?!」

何故だかマユリの隊首羽織すら貫くことが出来ず、その強固な防御力を前にザエルアポロは愕然としていた。

よく見ると隊首羽織には青いラインが走っており、それを見た雨竜はそれが静血装である事に気が付いていった。

浦原同様にマユリも血装のシステムを解析し終えており、自らの隊首羽織にその機能を付加させる事に成功していたのだった。

「超人薬を打ち破る物だからどの程度の物かと期待していたのだがネ……もうこれ以上ないようだから終わりにさせてもらおうヨ」

六本のアームのうちの 하나가地面へと突き刺さると、その直後にザエルアポロの背後から彼の持つ触手と同じ触手が彼に襲い掛かって来た。

不意を突かれたザエルアポロはその触手に包み込まれ、しばらくすると吐き捨てられるかのように地面へと放り投げられる。

そして別のアームの先からザエルアポロの人形が出てくると、マユリはそれに視線を向けると目を細めていく。

「な、何だと……!?!それは僕の……!?!何故お前がそれを……!?!」

それは間違いなくザエルアポロの能力の一つである人形芝居であり、驚愕したザエル

アポロはすぐさまその人形を奪い取るために動き出した。

しかし、マユリは人形の中から足の腱のパーツを取り出して破壊すると、それによってザエルアポロの足の腱も破壊されて倒れ込んでしまう事になった。

それを眺めながらマユリは不敵な笑みを浮かべてみせると、今度は別のパーツを取り出しては邪悪な笑みを浮かべて見せていった。

「さつき君は、自分自身の能力にやられる気分はどうかと……そう聞いてきたネ？では今度は私が尋ねてみようじゃないか……自分の能力にやられる気分とはどう言う物なのかネ？」

「やめろ……やめろ……!!やめてくれ!!やめろおおおおおお!!」

マユリの指に摘まれていたパーツ、それは心臓のパーツで有り、それを見つめたザエルアポロは今まで以上の恐怖の色を浮かべて叫んだ。

だがマユリは一切迷うことなくパーツを砕いて見せると、同時にザエルアポロの心臓も破壊されて絶命する事になったのだった。

一方帰刃をしたノイトラと戦っていた剣八だったが、その四本に増えた腕と四本の巨大な鎌を駆使し、手数が四倍にもなっていた為に苦戦を強いられている様子であった。

だが剣八はそれに順応していくように攻撃を防ぎつつ、斬撃を加えていけるように

なっていく。

「いいいじやねえか!!このヒリつくような戦い、悪く無えぜ!来いよ、もつと俺を楽しませてみせやがれ!!」

「そうかよ……だがてめえはその前に死ぬ事になるんだよ!」

四本の腕によつて巨大な鎌が暴風のように振るわれていき、しかもそれが間髪入れずに絶え間もなく襲いかかってくるため、剣八は心躍る戦いができる事に喜んでる様子だった。

だがノイトラはその反応が気に入らないようであり、更に苛立ちを強めながら何度も鎌を振るって行き、幾度となく剣と鎌がぶつかり合う金属音が響く。

ノイトラは、自らの方が手数が多いというにも拘らず押し切れないことに焦っているのか、より乱暴かつ激しい攻勢に出るようになっていた。

だが次の瞬間……

「これで先ずは一本だ……」

「て、てめえ……!」

再び剣八の斬撃がノイトラの腕を一本切断して見せ、巨大な鎌ごと宙を舞って地面に突き刺さっていく。

またもや腕を失う羽目になった事を苦々しく感じながらも、残った片腕は健在である

ため戦う事そのものに問題は無かった。

だが剣八は、攻撃が防がれない様に全ての腕を斬り落としていくと言いだした。

「剣ちゃん、全部切っちゃったら戦えないよ?」

「それもそうか……だったら一本だけ残しておいてやる」

「一本残してやるだと……ふざけてんのか?だが、てめえの斬る腕はそれで最後の一本だ……いや正確には、テメエは腕の一本も斬り落とす事無く俺に殺されんだよ!!」

ノイトラがそう言うのと斬り落とされたハズの腕が瞬く間に再生していき、再び四本の鎌を振るつては剣八を殺さんと向かって行く。

しかし、剣八はそれすらも楽しんでるかのように笑って見せ、再びノイトラと激しい攻防を繰り広げる。

しかし、時間がたてばたつにつれて剣八の攻撃は鋭さを増して行き、それに伴って徐々にノイトラを追いこんでいくことになる。

そしてまたもや腕を斬り飛ばされてしまい、そのまま胴まで斬り裂かれようとしてしまい、ノイトラは更に腕を二本増やして奇襲を掛けた。

「おっと……奇襲とはせこい真似しやがるな」

「何……だと……!!?」

しかしそれは剣八に容易く防がれてしまい、そのまま勢いよく投げ飛ばされては柱に

激突してしまう事になる。

直ぐに体勢を立て直したノイトラだったが、剣八は間髪入れずに追撃を繰り出して来たのである。

鋭い突きがノイトラの胸元目掛けて迫っており、それを鎌を用いて何とか防御するが、そのまま凄まじい力で柱に叩きつけられてしまった。

そのあまりの衝撃に柱は粉々に砕け散り、ノイトラはそのまま地面まで吹き飛ばされ、何度か地面バウンドしながら転がっていった。

帰刃をしたと言うにもかかわらず太刀打ち出来ず、腕を六本にしての不意打ちすらも通じず、終いにはこうやって圧倒的な力にねじ伏せられている有様に、ノイトラは屈辱以外の何ものでもない感情を抱き始めていたのだ。

「なんだよ……やっぱり雑魚じゃねえか。そんな奴相手に遊んでたなんざ、無駄足も良い所だったぜ」

「俺が雑魚だと……うゝふざけんな……！ふざけんな……！！ふざけんじゃねええええええ！！」

ノイトラは激怒した様子で声を荒げると、それに呼応して彼の霊圧が爆発的に上昇していった。

その凄まじい霊圧の高まりは衝撃波となって周囲の瓦礫を吹き飛ばしていき、霊圧が

黄色いオーラとなつて彼の身体を覆うように包んでいたのである。

やがてそれは左目の孔へと収束していき、黄色く光る球体へと変化していった。

「サンタテレサ・デッセベランサ絶望の聖哭螳螂!!」

体中が黒い甲殻に覆われ始め、六本に増えていた腕も二本へと戻り、二本の角には黄色い霊子が電撃のように纏われていく。

肩や腰のあたりからは四本の黒い霊子の刃が展開していき、黄色い霊子で縁取られてギザギザとした形状に変わっていた。

更には前腕部にも鎌のような刃が二本追加され、合計で六本の刃が展開したことになる。

「何だその姿は？それにその馬鹿みてえな霊圧……なんだよ、やりやあ出来んじやねえか」

「余裕ぶっこいてんじやねえぞ……楽に死ぬると思うなよクソ野郎が!」

その姿を見た剣八は笑みを浮かべており、対するノイトラは激情した様子で吠えるように叫ぶと、響転で一気に剣八との距離を詰める。

そして四本の黒い霊子の刃を連続で振るうと、先程までよりも圧倒的に速くて重い攻撃を次々と剣八へ繰り出していき、剣八はそれを辛うじて捌いて反撃に出ようとしていた。

だが劍八の刀は片手で容易く掴まれてしまい、そのまま四本の刃で突き刺されてしま
う。

そしてそのまま勢いよく投げ捨てられて柱に激突すると、ノイトラは再び急接近して
靈子の刃を振るって斬り刻まんとしてきた。

その斬撃は劍八を斬り裂くと同時に背後の柱をバラバラに切断してしまい、劍八は鮮
血をまき散らしながら瓦礫と共に地面へと落下していく。

「雑魚なのはてめえの方だったな。死神風情が調子に乗ってんじやねえよ」

残りの死神を片付ける為にノイトラは踵を返して歩き出すと、瓦礫の中から劍八の姿
が現れた事に気が付いた。

血にまみれた状態にもかかわらず劍八は立ち上がっており、どうやら今の一撃でも完
全に殺す事は出来なかったようだ。

「どうした……？俺はまだ死んでねえぞ……」

「そうかよ……なら今度こそ死にやがれ!!ゼロ・ベレディオン破滅の虚閃!!」

黒い靈子の刃が前方に展開し、その中心に靈子が集結していき巨大な球状に変化す
る。

そして次の瞬間、そこから巨大な閃光が撃ち放たれ、瞬く間に劍八を飲み込んでいっ
た。

轟音と爆風を撒き散らし、射線上の悉くを塵に変えながら破滅の虚閃は真つ直ぐ伸びていく。

大地は抉り削れ、破壊の痕にはバチバチと電気のような霊子が走り続ける光景が広がっており、それが遙か彼方まで続いていった。

これだけの破壊力の技をまともに喰らったのであれば流石の剣八と言えども無事では済まないはずであり、もし生きていたとしても立つ事も出来ない程のダメージを負っている事だろう。

実際剣八は辛うじて生き残ったと言っても過言ではない状態で倒れており、体全体が焼け焦げてしまっていて生きているとは到底思えない状態であった。

(クソ……このままじゃ本当に死んじゃうな。嫌だなあ……死ぬのは。まだ……まだ戦い足りねえってのによお……)

もう殆ど動かなくなってしまう手をなんとか動かそうとし、刀を握る為だけに僅かに残っていた力を振り絞っていく。

しかし指先の感覚すらも無くなっていき、動かすことが出来ない。徐々に身体から力が抜けていき、瞼さえも重く感じ始めて意識が遠のいていく。

『勝ちたいですか?』

(誰だ……てめえは……)

『勝ちたいかと聞いているのです……まだ戦い続けたいのであれば、私の名を呼びなさい』

薄れゆく意識の中で誰かの声が聞こえてきたような気がしたが、そんな事を気にしている余裕など無かった。

こんな所で死ぬ訳にはいかないし、これからも心躍るような戦いに身を置きたいと願っている。だから剣八はその声に答えるように、心の奥底から湧き上がるように自然と口を開いていた。

「呑め……野晒……！」

直後、剣八の手に握られていた斬魄刀が形を変え始め、やがて身の丈を超えた巨大な戦斧のような形状に変化していく。

あまりにも武骨すぎるその形状は、斬るといふよりも叩き潰すといった表現の方が似合いそうな外見をしており、相変わらず刃こぼれしてポロポロの状態であった。

そして、死にかけだったのにも関わらず立ち上がって来た剣八を見て、ノイトラは舌

打ちをした。

「何で今ので死なねえんだ……？さっきとくたばりやがれってんだろ!」

再び滅びの光が収束していき、劍八に向かって光線が放たれていく。

迫り来る虚閃を前にしても尚、劍八は野晒を構えたまま微動だにせず、ただジツと待ち構えているだけだった。

そしてその虚閃に対して勢いよく野晒を降り下ろすと、その虚閃は真つ二つに斬れて消滅する。

「この野郎……死にぞこないの分際で粋がつてんじゃねえ!」

自身の最強の攻撃である破滅の虚閃が簡単に破られたこと、そして自分のプライドを傷つけられたこと。

それ等によってノイトラの感情はこれまでに無いほど逆上しており、もはや冷静さを保つ事は出来ずにいた。

だからこそノイトラはここで決着をつけるために即座に響転をつかって距離を詰めると、靈子の刃を一気に突き立てて劍八を殺そうとする。

だが野晒が一閃されるとその刃は粉々に砕け散っていき、ノイトラの胴も斬り裂いて鮮血を舞わせた。

「くそッ……まだ、これしきの事では負けやしねえんだよ!」

残り二本の刃、前腕部分につけられた鎌状の刃を振るって攻撃するが、それすらも野晒で砕かれてしまい、そのまま肩口から斜めに体を斬り裂かれて大量出血しながら膝を突く。

今度こそ地に倒れ伏して動けなくなるノイトラに、剣八はゆつくりと歩み寄っていった。

「愉しかったぜ……ノイトラ……」

そう告げると同時に、剣八も倒れこんでしまった。

斬魄刀は始解である野晒から元の状態へと戻り、剣八はそのまま意識を失ってしまうのであった。

ヌルとの戦いは四度目なんだが？

剣八とノイトラの戦闘を遠くから見ているバンビエツタは困惑していた。

ノイトラが見せたあの帰刃は原作には存在しない姿であり、アプリゲームオリジナルの姿であるはずなのだ。

それに加え剣八が始解するのは千年血戦になってからであり、今この時点で野晒を解放できている理由が全く分からない。

そう考えて戸惑っていたが、それよりも今は剣八の怪我の治療をすることが先決だと気づき、急いで剣八のもとへと向かった。

そして織姫の双天帰盾で治療が開始され、瞬く間に傷が癒されていく中、バンビエツタは一護に問い掛けた。

「あんたグリムジョーと戦ったんでしょ？もしかしてあいつも二回帰刃したんじゃないの」

「なんでそれを……いや、確かにアイツも二回姿を変えてたけどよ」

案の定というべきか、グリムジョーも二回の形態変化を起こしているようであり、やはりノイトラだけではなかったようだ。

しかしそうなると、他の十刃も同じように二回形態を変化させる可能性が十分に考えられる訳で、この先の戦いの行方が全く分からなくなってくる事になる。

やがて剣八の治療が終わると、彼は目を開いてゆっくりと起き上がってきた。

「おう……服まで元に戻ってやがんじゃねえか」

「剣ちゃん大丈夫？」

起き上がった剣八に慌てて駆け寄ってきたやちるは心配そうに顔を覗き込んだが、それは杞憂だったようだ。

傷は完全に塞がっており、どこにも異常があるようには感じられない。

そもそも織姫の双天帰盾によって傷自体を無かったことにされたため当然な訳だが、それでも一応は確かめたかったというのが本音である。

「てめえらは現世に帰るんだな……こっからは俺達の仕事だ」

「何言ってるんだよ……!!ここまで来たんなら俺も……!!」

「てめえは死神代行だろうが……あの町を守るのがてめえの役目だ、違うか？」

一護が虚圏に来た理由は織姫を連れ帰る事が目的であり、その織姫も奪還できた以上虚圏に残る理由などないはずである。

だがだからと言って何もせずに帰ろうだなんて思わないのだろう、最後まで一緒に戦う為に残ろうと考えていたようだが、どうやらその考えは看破されてしまったようであ

る。

「あたしは当然残るけどね。気になる事とか色々あるし……」

現状バンビエッタが一番危惧している存在はヌルであり、その異様な成長速度から、このまま放置すれば確実に脅威になると思っていたのだ。

それに、ヌルがバンビエッタのDNAを取り込んで急激な変化を遂げたのであれば、途方もない戦闘力を持つ剣八と、同じく驚異的な成長力を誇る一護のDNAを取り込んだ時にどうなるか分かったモノではない。

なので、そうなる前にヌルは打ち倒しておきたいというのがバンビエッタの本音であつた。

「分かった……俺達は現世に戻るけどよ、師匠は……」

一護がそう言いかけた時だ、織姫のすぐ隣に一人の破面が突如として姿を現したのである。

一護と剣八はすぐさまその破面へと斬りかかっていったのだが、その破面は一瞬にして織姫諸共消え去ってしまい、気付くと彼女は別の場所へと移されていた。

気付けばそこは藍染等の目の前であり、藍染等は今まさに現世へと侵攻すべく行動を開始しようとしていたところだつたようだ。

「さて、君は少しの間此処で待っていると良い。我々が空座町を滅して来る、ほんの僅か

な間だけね」

藍染が織姫を拉致した目的は崩玉を覚醒させる事などではなく、尸魂界の危機感をあおり、この虚圏へと隊長格を誘き寄せる為である。

そしてまんまとその策にはまった四人の隊長らは、黒腔が完全に閉じられた事によって虚圏に取り残されてしまったのである。

現状黒腔の解析が出来ているのは浦原一人だけであり、虚圏側の死神達からは黒腔を開ける手段がない

「空座町が……消える……!?!」

「どこに行こうってんだ一護……?てめえが動いた程度で何かが変わるとでも思ってたのかよ」

自分の故郷が消えようとしている事を聞かされ、今すぐにも飛び立とうとした一護だった。

確かに自分一人ではどうにか出来るとは思っていないが、それでもジツとしてはいられない状況である事に違いはない。

だからこそなんとかしなければならぬと思っただったが、そんな一護を止めたのは意外にも剣八であった。

「言ったハズだぜ、じいさんから浦原喜助にいくつか指令が出てるってな」

「それってどう言う事なんだ……？」

その内の一つが、護廷十三隊の隊長格が空座町での戦闘を可能にする事であった。

だが、それだけでは空座町は戦闘の余波で壊滅してしまうのはまず間違いないであろう。

なので、そうならない様に本物の空座町は町の住人ごと流魂街の外れに転送され、今現世にある空座町は只のレプリカなのである。

つまり、いくら戦闘の余波で破壊されようとも問題ない状態という事なのだ。

「師匠やっぱり俺も残るぜ……つつても、現世に戻れねえんだからそれしか手立てがねえんだけどさ」

「まあそうよね……織姫はまた連れてかれちゃったし、もう一度助けに行かないとね」
そう言う和一護とバンビエツタは、織姫が連れ去られたで在ろう塔の方へと向かって移動をしていった。

藍染が言うには第五の塔に織姫を閉じ込めているとのことで、まずそこまで移動していかない限りは助ける事も出来ないだろう。

そうしてしばらく進んでいると、前方から何か勢いよく飛んできて地面に激突したのが見えた。

「見つけた……バンビエツタ！今度こそ殺す……！」

「ヌル!?なんでこんな時につ!!つてか、なんであたしの名前を知ってるのよ……!」
まさかこんな時にヌルが目の前に現れるとは思っても見なかったようで、思わず狼狽してしまった。

しかも名乗った覚えのない本名までもが知られており、ますます謎は深まっていくばかりである。

それも気になるのが、以前よりも流暢に喋るようになっており、その様子からも更に変化を遂げている事が分かるだろう。

「師匠、バンビエッタってのは……」

「今はそんな事気にしている余裕は無いでしょ!あんたはさっさと織姫を助けに行きなさい!!」

とにかく目の前の敵は自分に任せておくように言うと、一護は織姫を助けるべく走り出して行くのだった。

残されたバンビエッタはというと、刀を取り出して臨戦態勢をとっており、それに対してヌルは熱線を連続で放っていく。

放たれた熱線を全てかわしていくと、大きく踏み込んで一気に接近して攻撃を仕掛けようとするバンビエッタであったが、頭上から霊子の剣が雨のように降り注いできたので、咄嗟に外殻静血装を発動させて防御する。

剣は着弾すると同時に爆発して雷撃を撒き散らしながら地面を抉り続け、そこかしこに巨大なクレーターを作るほどだった。

「つたく、無茶苦茶じゃない……い……こんなヤツと戦ってる暇なんて無いってのに！」
「どこヲ見てイるの？あたシは……こッち！」

外殻静血装は短時間しか発動させておけない技の為、次の瞬間には真横にヌルが移動しており、炎剣を振り下ろして来ていた。

それを刀で何とか受け止めたものの、ヌルは左手に氷剣を作り出して突き立てて来たので、咄嗟に体を反らしながら回避する事に成功する。

そしてそのまま回転しつっわき腹に蹴りを食らわせて吹き飛ばすと、距離を取って息を整えていく。

「やっぱり……こは完聖体を……ッ!？」

「遅いッテ……い……そんなじゃアたしには勝てないよオ!？」

完聖体を発動させようとした所でヌルが勢いよく突っ込んできたかと思うと、そのまま顔面を鷲掴みにされて地面へと叩きつけられてしまった。

静血装を発動しているのでもうここまでダメージはないが、このままでは一方的にやられてしまうだけだと判断して、左手に火球を作り出してヌルの腹部へと押し付けて爆破する。

二人共大爆発に飲み込まれて砂塵に覆われてしまい、辺り一帯が見えなくなつてしまつたが、その中から煙を突き破つて雷撃が放たれてきた。

「イつたいなあ……！デモこれくらいじゃ私は倒せないヨオ!!」

「本当にめんどくさい奴ね……！何度も何度もしつこいつてのよ!!」

放たれる無数の雷撃を回避しつつ、周囲に大きな壺子の剣を展開させて一斉に発射させていくバンビエツタ。

無数の剣が雷撃とぶつかり合つて弾け飛んでいき、その中をヌルは悠々と進んで行きながら更に攻撃を放つていた。

右手に炎剣を、左手に氷剣を出現させており、バンビエツタに対して連続で斬りかかっているようだ。

それに対してバンビエツタも左手に炎剣を出現させると、右手の刀に雷撃を纏わせて応戦し始める。

両者の刃が激しくぶつかつては炎や冷気をまき散らし、互いに高速で移動しつつ斬り結んでいった。

「ホラホラア！もつと楽しもうよお！本気出シてくれれないと、面白くないじゃんかア！」

「あああーもう！うるさいわね！いい加減くたばりなさいつてのよ!!」

激しい剣戟を何度も繰り返し、鏢迫り合いにまでもつれ込むと、ヌルは凄まじい力で刀を弾いて体勢を崩したバンビエッタを蹴り飛ばしてみせた。

そのまま吹き飛ばされてしまったバンビエッタは、すぐに態勢を立て直したが、ヌルはそのままの状態での追撃もしてこずにじっとこちらを見つめているのだ。

「そっちが本気を出さないなら、あたシから本気を出してあげるヨ」

そう言つて霊圧を高めて行つたかと思えば、周囲の空気がビリビリと震え出すのを感じたバンビエッタは思わず顔をしかめてしまう。

そしてヌルを光の柱が包み込むように立ち昇つていき、まるで太陽のような眩さが周囲を覆い尽くしていったのである。

それは直ぐに収束していき、柱の中から現れたヌルの背には炎のように揺らめく霊子の羽が四枚生えており、頭上には十字と円環を組み合わせたような光輪が浮かんでいた。

それは紛れもなく完聖体であり、バンビエッタは驚きのあまり目を見開いてしまつていた。

「アなたをぶつ殺せれば……あたしが本物のバンビエッタ・バスターバインだッ!!」

【Side一護】 一護 vs ウルキオラ

織姫が捕らわれているという第五の塔にたどり着いた一護だったが、今はそこで待ち受けていたウルキオラとの戦いを繰り広げている真つ最中であつた。

少し前に戦つた時は苦戦を強いられ、ほんの僅かなかすり傷程度しか付ける事が出来なかつたが、今回は互角の戦いを繰り広げられるようになっていたのだ。

「先ずは剣を抜かせるところからだと思つてただけだな……まさか最初から剣を抜いてくれるとは思わなかつたぜ」

「少なくとも、お前を破壊すべき対象としては認めているからな」

二人は睨み合いながら言葉を交わしていたのが、不意にウルキオラは手に持つていた剣を振り下ろした。

響転を使つて一気に一護の懐に飛び込んだウルキオラは、そのまま目にも留まらぬ速さで剣を振るつていったが、即座に天墜穿月で迎え撃つ。

甲高い金属音と共に激しく火花が散ると、二人とも高速の剣戟を続けながら移動を開始していた。

「僅かな時間で随分と腕を上げたな……少し前まで俺に一方的にやられていたとは思え

ん」

「そいつはどうもーだが……こっちはまだまだこんなもんじゃねえぞ!!」

そう言つて一護は更に速度を上げ、天墜穿月を弓に変えたと矢を連射し始めた。

それに対しウルキオラは自身も響転を使い、射線の先々を駆け抜けていく事で被弾を避ける戦法に出る。

矢は何かに着弾するたびに黒炎を撒き散らしながら炸裂していつているようで、徐々に爆炎が勢いを増していった。

ウルキオラの方もこのままでは近づけないと感じたのか、虚閃を放つて攻撃することにした。

その虚閃は一護の放つた矢を弾き飛ばしながら突き進んでいくが、一護は天墜穿月を刀へと変えて一閃し、そのまま虚閃を弾き飛ばして見せる。

それどころか返す刀で月牙天衝を放ってきたので、咄嗟に刀で受けたが思いの外威力が高く、そのまま吹き飛ばされていってしまう。

「どうしたウルキオラ、てめえの本気はその程度なのか?」

「言うようになったな……貴様が強くなつたのはグリムジョーを倒したからか、それもその女の為か?」

吹き飛ばされながらも空中で体勢を整え、地面すれすれの位置に着地してから再び響

転を用いて一護の元へと向かっていく。

だが一護は矢を連射しつつ瞬歩で後方へと下がり、一定の距離を保ったまま矢を放ち続けて行く。

ウルキオラは刀で全て弾き飛ばしながら前進し、時折虚閃を放つては牽制し合っている状態だった。

「……ならば俺ももう少し速度を上げるとしよう」

その言葉と同時に姿が掻き消え、次に姿を現した時には既に一護の目前まで接近されていた。

そして連続で突きを繰り出してきていたが、それ等は目で追えない程ではなく難なく防いでいくことが出来た。

そして一護はウルキオラの腕を掴んで引き寄せると、そのまま刀で一閃して斬り裂いてみせる。

肩から脇腹にかけて斬れ、鮮血をまき散らしていたが、その傷は瞬く間に再生されていった。

「俺の最たる能力は戦闘能力ではない、再生だ。強大な力と引き換えに再生能力の大半を失う破面の中で、俺だけが脳と臓器以外の全てを超速で再生できる」

「そうかよ………だったら再生できない程に攻撃を食らわせりゃいいだけだ!!」

するとウルキオラは、壁に開けられた大きな穴から外へと出て行った。

一護に「ついて来いと」言っているかのようにも思える行動だが、織姫をこのままここに置いて行く訳にもいかなかった。

だが雨竜が追いついてきたようであり、織姫の方へと駆け寄って行くのが見えた。

「石田……井上の事は頼んだぞ」

「……言われなくてもそのつもりだ」

それだけ言うで一護は外へと出て行き、ウルキオラを追って上に上がって行くのだった。

天蓋に開けられた穴から外へと出ると、三日月が浮かぶ夜空の下で静かに佇むウルキオラの姿があった。

「虚夜宮の天蓋の下で禁じられているものがいくつもある。一つは十刃の為に存在する王虚の閃光の使用。二つ目が、第四十刃以上の帰刃の使用」

更にはノイトラの破壊の虚閃も、本来なら天蓋の下での使用を禁止されているはずなのだ。

実際あの虚閃が放たれた時には空間が歪むほどの衝撃波が生じていた事もあり、何度也使われていたら本当に虚夜宮は崩壊していただろう。

そしてグリムジョーとノイトラ、ザエルアポロが見せた帰刃を超えた帰刃も、本来な

らば天蓋の下での使用は禁じられている能力であり、それにも関わらず使った三人をウルキオラは呆れた奴等だと言う。

「鎖せ、黒翼大魔」
ムルシエラゴ

そう呟いた瞬間、ウルキオラの体から黒い霊圧が噴き出し始めた。

それは雨のように辺りに降り注ぎ、同時に空気までもが重苦しくなっていくようだった。

やがて雨のような霊圧が消え去って行き、背に黒い羽根を生やしたウルキオラが佇んでいるだけとなっていた。

そして次の手に霊子の槍を作り出した次の瞬間、一護の目の前へと一瞬で距離を詰めて槍を突き出した。

辺り一面に衝撃波が迸り、それが収まる頃には地面に巨大なクレーターが出来上がっていた。

「反射的に仮面を出したか……そうでなければ貴様の首は落ちてた」

「はっ……！ そんな事させる訳がねえだろ」

咄嗟に虚化を発動していなければ、天墜穿月を砕かれてそのまま首を斬り落とされていたであろう一護。

その一撃は恐らく静血装をも破りかねない威力を秘めていたので、内心冷や汗を掻き

つつも虚化した状態で余裕の表情を見せる。

そして一護は一旦距離を取ろうとするが、ウルキオラは追い打ちをかけるようにして槍を振るっていき、鋭い斬撃を放つ事により逃げ場を失わせようとした。

一護は月牙天衝を放たずに、刀へと纏わせたまま攻撃をする事によつて一撃一撃をより重くする事にした。

そうしてなんとか捌いていくと、そのまま押し切つては弓へと変え、矢を連射しながら距離を離していく。

しかしそれも予測していたのか、ウルキオラは霊子の槍にさらに霊圧を込めて投擲して来た。

凄まじい速度で飛来するその槍は、全ての矢を弾き飛ばしながら一直線に突き進んで来る。

「月牙……天衝!!」

一際巨大な矢を放つとそれは槍とぶつかって大爆発を巻き起こし、周囲に衝撃波と黒炎を撒き散らしていた。

だが間髪入れずに黒い閃光が放たれ、またもや月牙天衝を放つて相殺していく。

「お前の放つ月牙とやらは、俺達の放つ虚閃によく似ている……まさか黒^{ゼロ}虚^{オスキュラス}閃まで相殺されるとは思わなかったが」

「俺の月牙が虚閃に……？何言ってるんだてめえは……」

煙が晴れると、そこには無傷の二人が相對していたが、特に傷を負った様子も見せていないウルキオラの姿に一護は警戒を強めていた。

しかし、同様に一護も大した傷も無い状態で立っているので、両者共に互角であると言えるのかもしれない。

ただそれでも、先程よりは互いに速度が上がっている事から戦い自体は激しさを増しているが、まだ勝負がつくには至っていない。

帰刃をしたウルキオラとしても、虚化した一護は己と同等かそれ以上の力を持つ非常に厄介な存在ではあり、確実に仕留めておきたかったのである。

「まさかここまでやるとは思わなかったが……どうやら貴様を倒すのには今のままでは不可能らしいな」

「へえ……だつたらどうするってんだ？」

「見せてやろう……絶望の姿を」

再びウルキオラは黒い霊圧を解放していき、先程とは比べ物にならない程の重圧がその場にのしかかってくるような感覚に襲われる一護。

背に生えていた黒い翼はより悪魔らしくなり、手足は黒く染まって黒い尾が生えている状態に変わっていた。

先程までとは比べ物にならない程の霊圧の高まりに、一護は弓を構え直していつでも放てる態勢に入った。

すると突然、目の前のウルキオラの姿が消えたかと思うと、一瞬にして背後に回り込まれていたのだ。

それに気付くのが少し遅れてしまい、回避行動取ろうと考えた時には既に遅く、槍が眼前に迫って来ていた。

一護は咄嗟に刀へと変えて攻撃を防いでみせたものの、そのまま吹き飛ばされて天蓋に激突してしまい、轟音と共に瓦礫の山を築き上げてしまう。

咄嗟に立て直そうとしたが、既にウルキオラは急接近しており、顔を鷲掴みにして壁へと顔をめり込ませ、壁を抉りながら一護の身体ごと引き摺っていく。

そして投げ飛ばして地面を転がり、仰向けに倒れている一護目掛けて掌を向けて黒虚閃を放っていったのだった。

「……今ので死んでいないとは。お前は一体何なんだ……！それにその姿……貴様は本当にただの死神なのか……！」

こんどの黒虚閃は弾き飛ばされてしまい、あらぬ方向へと飛んでいくだけで終わった。

刀剣解放第二階層レスレクシオン・セグンダ・エターバの状態で放った黒虚閃は、先程の物と比べると段違いに威力が上

がっているのだ。

それにもかかわらず弾き飛ばされてしまった事が信じられないのか、ウルキオラは多少顔を歪めているようであった。

「一体何の事だ……？俺は只の死神代行でしかねえぞ」

一護の仮面は半分以上が割れていたが、先程までは無かった角が右の側頭部に生えてのだ。

手足も白い甲殻に覆われており、鋭い爪が伸びているのが分かる。

明らかに今までとは違う姿をした一護だったが、それはまるで虚化が進行しているかのようだった。

バンビエッタ v s ヌル&一護 v s ウルキオラ

まさかの完聖体までも使って見せたヌルは、その四枚の翼から炎弾を雨のように降らせていく。

辺り一面に爆炎が吹き荒れる中、バンビエッタは飛廉脚と速血装を使って高速で移動し続けて回避を図ろうとしていた。

時折此方からも雷撃や熱線を放ち、相殺させたり軌道を変えたりと様々な手を使っているが、あまり効果があるようには見えなかった。

寧ろその圧倒的な破壊力で叩き潰される事を警戒し、とにかく距離を取る事で被弾する事を極力避けるべきだと考えていたようだ。

砂塵が巻き上がり視界が悪くなっている状況を利用し、バンビエッタも完聖体を発動させて反撃に転じようとする。

「あんなモ完聖体！あたシも完聖体！これで一緒になったネエ!!」

「さつきからうっさい奴ねえ……！つてか、本物のバンビエッタになるつてなによ!!本物のバンビエッタはあたしだつての!!」

爆炎と砂塵を利用し、バンビエッタは一気に近づいていく。

そして自らの周囲に靈子の劍を複數出現させ、全方位から一斉に攻撃を仕掛けていった。

ヌルも流石に避けきれないと考えたのか、自身を囲むように黒球を展開し、そこから大量の矢が放射される事で次々と靈子の劍を相殺していった。

当然劍よりも矢の方が多いため、そのままバンビエッタの方へと向かっていくが、飛廉脚による高速移動によって上手く躲していったのだ。

だが追尾機能でも搭載されているかのように次々に襲い掛かってくるので、雷球をばら撒いたり熱線を放ったりしながら迎撃していった。

しかしヌルも攻撃の手を止めず、更に追撃しようとしてくる。

「ちよこマか逃げッてんじや無いよお!!そんなんじや殺せないデしヨお!!」

「殺されてやるつもりなんか無いってのよ……!!」

そしてヌルがバンビエッタに急接近すると、靈子の鎌を作り出して斬り掛かって行った。

咄嗟に刀を盾にするように構えて斬撃を防ぐも、凄まじい重さに押されてしまい、後ろへと仰け反ってしまったのだ。

更に周囲に黒い球体が浮かび上がると、またもや矢が雨のように降り注いでいく。

体勢を崩されたままでは満足に回避も出来ないので、外殻静血装を展開させて防ごう

としたが、その結界は瞬く間に剥がされて行く。

剥がされた結界の霊子はヌルの光輪へと収束していくので、ヌルは霊子の隷属を使って結界を破壊したようだ。

「うぐあっ!？」

その大量の矢はそのままバンビエッタへと降り注ぎ、着弾しては炸裂していく。

その度に爆炎と砂塵が立ち昇り、身体を焼き焦がしていくような激痛が全身を駆け巡った。

容赦なく矢は降り注ぎ、そのまま地面へ叩き落とされるように墜落してしまった。

静血装を発動させてダメージを軽減したとは言え、完全に無効化する事は不可能だったので相当なダメージを受けてしまったようである。

(も、もう少し……もう少しで掴めそうなんだけど)

「どうしたッつてのお!?! そんなんじゃないやっつまらないじゃないのオ!!」

地面へと落下したバンビエッタを見下ろしながら挑発するように言うヌルは、笑い声をあげながら悠々と近づいて来ている。

実際今のままではヌルを倒す事は出来ないなので、先の段階に踏み込まなければ勝機はないと分かっていた。

それはまだ不完全な状態にある完聖体を完全なものとするものであり、ヌルの完聖体

を見て何かがつかめそうな気がしているのだった。

「もうそれ以上無いナラ！今度こそ死んで貰うワアッ！」

「まだ……もう少しッ！」

ふたたび熱線や雷撃が飛び交い、炎の柱が吹き上がり、雷球が爆発し、衝撃の余波が辺り一帯を破壊していく。

霊子の剣がぶつかり合い、飛廉脚と速血装を組み合わせた超速戦闘が繰り広げられ、辺りに爆風を巻き起こしていた。

しかし、やはりバンビエッタの方が押され気味のようで、少しずつではあるが攻撃を受けてしまっていたのだ。

速血装のままでは静血装は使えないが、速血装を解けば相手の速度に付いていけなくなってしまうだろう。

「ようやく……見つけたかもしれない……！」

「何を言ってるの？あんたはもう終わりな……ッ!？」

その言葉と同時に、突然バンビエッタの霊圧が跳ね上がるのを感じた。

するとバンビエッタは光の柱に包まれ始めたのである。その光の柱は赤い輝きを放ちながら天へと伸びていっていた。

やがて天を貫くように伸びていった光が収まると、柱の中から現れたバンビエッタの

背には、羽根の代わりに四芒星形の形をしたものが浮かんでいたのだ。

内側の角だけが無く、まるでひし形が三つ組み合わさったかのような物が二つ対になって浮かんでいる。

それは名づけるならば神聖星盾（ハインリッヒ・シムルト）とも呼ぶべき物なのかもしれない。

頭には星型と円環が組み合わさったような光輪も出現し、ようやく満足のいく完璧体となったと言えよう。

「今更姿を変えタ所で何が変わるって言うノヨ!!こんナ物直ぐに砕いてやるワア!!!」

「それはどうかしらね？」

最早自身の勝利しか見えていないのだろう、ヌルは再び大量の矢を周囲に展開すると、それを打ち出してきた。

すると、バンビエッタの背に浮かんでいる神聖星盾が分裂し、バンビエッタの前に三つ展開して結界を作り上げた。

それは迫りくる数多の矢を次々とかき消していき、バンビエッタは右手を前に突き出してそこに小さな霊子の球を作り出す。

すると残りの三つの神聖星盾がその前に展開していき、まるで霊子の弾丸を発射するような体勢をとったのだ。

やがて神聖星盾の結界が消えると、その霊子の玉からは極大の閃光が放たれた。

凄まじい威力の白き閃光は、射線上のものを全て飲み込んで突き進んでいき、ヌルが咄嗟に使った外殻血装をも打ち砕いて光の奔流に飲まれて行く。

それは天蓋を突き破って天高くまで登って行き、夜空を照らしながら消えていった。

「ハあ……はア……ナ、何それ……！何なのよそれは……！そんなの、知らないわ！」

「今さっき完成したんだもの、少し前の情報しかないあんたが知るわけ無いでしょ？」

空に向かって一直線に伸びていった光は消えてなくなり、辺りに静寂が訪れる。

あれだけの威力の攻撃を受けて無事でいられる筈もなく、ヌルはその身体がポロポロになりながらも佇んでおり、もはや虫の息である事は明白だった。

それでもなおバンビエッタに向かっていき、彼女を殺すべく向かって来ていたのである。

しかしバンビエッタは神聖星盾を全て刀へと集わせると、一本の巨大な刀をへと変えてヌル目掛けて振り下ろして行く。

当然ヌルは両手に剣を作り出してその一撃を止めたが、それはほんの僅かな間だけでしかなく、次の瞬間には剣は粉々に打ち砕かれていき、そのままヌルを両断する事になった。

「あ、アレ……？何であたし……何デ……？折角……手二……」

真つ二つに両断されたヌルはそのまま落下し、地面に落ちる前に粒子となって消えて

いく。

一体何故こんな事になってしまったのか、それが分からないと言った表情をしたまま、この世から消え去ってしまったのだった。

虚化が進行していつているかのような姿になった一護は、己の変化に気が付いて驚いてしまっていた。

グリムジョーの時には角は生えたが、その時は気が付かないまま戦闘を終えてしまったし、手足も白い甲殻には覆われていなかった。

何故こんな事になっているのかは分からなかったが、今はウルキオラを倒す事が先決なので考える事を中断させる。

「何だかよく分かんねえけど……やるしかねえみたいだな！」

「良いだろう……その姿が何であろうと、俺は貴様を破壊するだけだ」

先程までとは比べ物にならないくらい霊圧の高まりに、一護自身も驚きを隠せないでいた。

だがウルキオラに対抗できているならば、まだまだ余裕はあると考える事が出来る為、決してマイナス思考に陥らないように努めて冷静沈着に対応する事に務めた。

二人は同時に動き出し、一護は距離を取りながら矢を連射し始め、それに対してウル

キオラは上空に飛んで避けると、黒い霊子の弾丸を流星のように撃ち込んでいく。

だがそれを掻い潜るように高速で移動し、その弾丸を打ち落としながら肉薄した一護は、月牙天衝を纏わせた天墜穿月を一閃させていく。

それをウルキオラは霊子の槍で受け止める。一護がこの姿になる前と比べると、比ではない程の重さの一撃を受け切ったのだ。

罅迫り合いの状態のまま動かない二人だったが、一護はウルキオラの周囲に黒い矢を出現させると、そのまま一斉に放っていった。

自分だけは瞬歩で離脱すると、数多の矢はウルキオラに着弾して黒炎を撒き散らし始める。

「クッ……なんだこれは……?」

「どうしたウルキオラ……俺を破壊するんじゃないのか?」

「ならば……ランサ・デル・レインバール雷霆の槍」

先程までの霊子の槍よりも遥かに霊圧のこめられた槍は、バチバチと音を鳴らしながら稲光を放出させていた。

それ勢いよく投擲すると、凄まじい速度で一護へと迫っていく。

真面に喰らえばチリすら残らなくなるであろう強力な一撃が目前に迫っているにも関わらず、一護は全く慌てずそれを片手でつかみ取ってしまったのだ。

そしてそれをそのまま投げ返したが、それはウルキオラに当たらずはるか後方まで飛び去って行った。

それは轟音を響かせながら地面を大きく抉り取り、はるか遠くの地面に着弾したにもかかわらず、ここまで爆風が押し寄せて来た。

「何……………だと……………」

まさか雷霆の槍を投げ返されることになるとは流石のウルキオラも思っておらず、少しだけ驚いたような表情に変化したようにも見えた。

そのほんの僅かな隙を突いて距離を詰めると、一護は天墜穿月を一気に振り抜いていくが、ウルキオラは霊子の槍で受け止めた事で剣撃を防ぐことが出来た。

だがやはり一護の方が押しに来ており、このままだと競り負けてしまう可能性が出てきてしまうだろう。

体を捻り蹴り飛ばすようにして刃から逃れたウルキオラは、一度距離を取るために離れた所へと移動することにしたようだ。

「……………以前貴様を始末しておかなかつたのは間違いだったようだな。ならばその責任は俺自身の手で取るとしよう」

「何言ってやがる。グリムジョーみてえに帰刃は二回までなんだろ？なら、もう俺には……………」

「俺の刀劍解放第二階層はその帰刃とは違う。あの解放は、この姿になってから発動出来るようになるものだ。言うなれば刀劍解放第三階層か……」

「何を……言つてやがる……？」

「よく見ておけ、これが真の絶望の姿だ……虚無の黒翼大魔」

ウルキオラの霊圧が更に高まっていくとともに、緑と黒が混じったオーラのようなものに包まれて行く。

そしてそれは胸の孔へと収束していき、やがてその孔に球体が形作られて行った。

黒い翼は二対四枚になり、頭部には炎をように揺らめく霊子の角が二本生えている。

尾の先にも緑と黒が混じった霊子が揺らめき、刀劍解放第二階層以上に悪魔らしい風貌になったのだった。

【Side一護】 一護vsウルキオラ②

その霊圧はとてつもない重圧を発しており、今にも押し潰されてしまいそうなほどの威圧を感じる事が出来た。

まるで深海の奥底に沈んだかのような息苦しきすら覚え、周囲の大气そのものに圧力がかかっているようにすら錯覚してしまうだろう。

だが一護もここで退くわけにはいかず、天墜穿月を構え直すと全身全霊をかけて挑む事にしたのだった。

だがウルキオラは次の瞬間には目の前から姿を消してしまい、気が付くと背後へ回っていたようで、そのまま顔を驚掴みにして別の塔まで投げ飛ばしていつてしまう。

そのあまりの威力に成す術なく吹っ飛んでいった一護は、全身の痛みに耐えながらも何とか空中で受け身を取って見せた。

「最早これ以上長引かせるのも面倒だ、迅速に貴様を始末させてもらおうぞ」

一護が何とか体勢を立て直した時には既に眼前に迫っていたウルキオラは、容赦なくその拳を繰り出して来る。

辛うじて反応できた一護は刀で受け止めようと試みるが、そのまま押し切られて弾き

れば確実に意識を保ってはいられなくなるだろう。

その時は一護が完全に虚化した事になってしまうので、そんな事になる前に決着をつけたかった。

「そうか……だが、これで終わりだ。黒虚王の閃光」

グラン・レイ・ゼロ・オスキュラス

「なッ……!? 月牙天衝!!」

それは王虚の閃光と黒虚閃を合わせた、ウルキオラの最強技であった。

極大の黒い閃光が一護へと向けて放たれ、それにたいして一護は咄嗟に月牙天衝を放って対抗しようとする。

衝突した瞬間月牙はあつと言う間にかき消され、漆黒の閃光はそのまま一護を呑み込んで行く。

そのあまりの破壊力によって周囲空間が歪んで見え、次第に塔全体までも亀裂が入り始めて来た。

「……ッ!! はあ……はあ……! うぐッ、ぐふっ!」

「今のを喰らって形を保っていられるとはな……」

ウルキオラから放たれた強烈な一撃を受けた一護は、血反吐を吐きながら落下していく。

黒虚閃が通った場所、その場所にはぼつかりと円形状に地面が無くなっており、周囲

の塔も衝撃による影響で殆ど吹き飛んでしまっていたのだ。

ウルキオラは平然とその場に佇んでいるが、一護は最早瀕死の重傷である。そんな状態で立ち上がる事は不可能だと言えるだろう。

だが一護は決して諦めなかった。

一方で塔の中で待機していた織姫と雨竜は、その霊圧の上昇に気付いて警戒を強めていた。

雨竜の張った結界で衝撃波や爆風は防いでいるが、それでもこの莫大な霊圧を放つ存在に対する不安感は拭えないでいた。

今更向かって何の役にも立たないだろうが、それでも織姫は一護の下へと向かう事に決めると、雨竜と共に天蓋の上へと駆け上がり出したのだ。

そうして辿り着いた場所で見たのは……

「黒崎君……？」

「来たか女……よく見ておけ。お前が希望を託した男が、命を鎖す瞬間をな」

一護は首を尻尾で締め付けられ、力なく宙ぶらりんになっているのが見えた。

そしてウルキオラはその胸に指を当てると、虚閃を放って風穴を開けたのだった。

そのまま落下して行く一護を織姫は盾舜六花で受け止めたが、胸に風穴を開けられたままの一護を見て動揺せずにはいらなかった。

そして、雨竜がウルキオラの足止めをしている内に双天帰盾で一護の治療を試みたが、まるで孔が塞がるのを拒むかのように回復できないでいたのだ。

そうこうしている間も雨竜は腕を切断され、一方的に蹂躪されて行くばかりだった。その余りにも一方的な展開に、織姫は最早どうしていいのか分からなくなり、涙を流し始めた。

「助けて!!黒崎君!!」

物言わぬ一護へと助けを求める程に追い詰められ、思わずそう叫ぶ織姫であつたが、そんな事しても状況は好転しない事を一番知っているはずの彼女なのである。

だが次の瞬間、一護の体に変化を始めた。織姫が思わず振り返ったところには、そこに立っていた一護は完全に虚の姿へと変貌を遂げていたのである。

「……馬鹿な、生きているはずがない。その姿はなんだ?お前は……誰だ?」
「……」

虚として完全覚醒を遂げた一護の姿は、まさに悪鬼としか言いようが無かつたのである。

そして軽く腕を振るうと、黒い斬撃が五つウルキオラに向かって高速で発射される。瞬時に対応したウルキオラは黒虚閃を放ちこれを相殺しようとするが、逆に黒虚閃がかき消されてしまった。

それはそのままウルキオラへと向かって行ったのですぐさま回避行動に移るが、次の瞬間には一護はウルキオラの背後に回り込んでいたのだ。

そして一護はウルキオラの左腕を引き裂いていき、流石のウルキオラも一瞬焦りを見せたが、そこから即座に距離を取って左腕を超速再生させて元の状態へと修復させたのだった。

「いくら貴様の攻撃能力が高まろうと、俺には超速再生能力がある。腕の一本を斬り裂いた程度で勝てると思うなよ」

ウルキオラは右手を上にかざすと、背から黒い霊子が周囲へと広がって行き、ウルキオラを中心として巨大な竜巻を作り上げた。

どうやら自分を中心にして全方位に向けて攻撃を行うつもりらしいが、一護の角から虚閃が放たれてあつという間に消し飛ばされていってしまう。

(馬鹿な……今のは紛れもない虚閃……！それも王虚の閃光並みの威力を持っている。こんな事があり得る訳が……)

先程から信じられない出来事ばかりが起きており、幾ら冷静沈着なウルキオラでも流石に困惑しているようだ。

一方、虚化してしまった一護は何の事は無いと言った雰囲気であり、自分の調子を確かめているようだった。

それから改めてウルキオラに視線を戻すと、一瞬にして背後へと回って奇襲を仕掛けていく。

（探查神経を完全にすり抜けた……今のは瞬歩ではない、響転だ……い）

咄嗟に振り返って雷霆の槍を突きだしたウルキオラだったが、その一撃はあつさりとは片手で受け止められてしまった。

そのまま雷霆の槍は握りつぶされて消滅してしまい、一護はウルキオラの顔面を掴んでそのまま勢いよく地面へと叩きつけて行つた。

それによって天蓋の塔に大きな亀裂が入り、ウルキオラは地面に埋まって身動きが取れなくなってしまう。

そんなウルキオラに対し更に足を頭部へと振り下ろすと、天蓋を陥没させるほどの威力を持って叩き付けたのだ。

「ま、まさか……俺が虚化した人間にやられるとはな……滑稽な話だ」

「……」

そして一護は止めを刺すべく、角から虚閃を放ってウルキオラを撃ち抜いた。

それは天蓋に大きな穴をあけ、その下にある地面にまで到達して直径数キロメートルものクレーターを作り出したのである。

その虚閃をまともに喰らったウルキオラの下半身は消し飛んでおり、一護は残った一

枚の翼を掴んでは無造作に放り投げて見せた。

そして右手に黒い球体を作り出すと、完全なトドメを刺すべくゆっくりと近づいて行った。

「もういい黒崎。もう決着はついたんだ、何も死体まで吹き飛ばす必要は無いだろ」
しかしその瞬間、横から雨竜が一護の腕を掴んで止めさせようとしてきた。

それでも全く止まる様子はなく、だからこそ雨竜は少し強めの言葉を使いつつも説得を続けるが、やはり一護の反応はないようだ。

それどころか黒い球体から光線が射出され、雨竜の腹部を貫いて吹き飛ばしてしま
う。

その一撃で致命傷を受けてしまい、大量の血を噴き出しながら地に伏してしまおうが、一護はそれを気にすることなくウルキオラの下へと向かって歩いて行こうとした。

「タス……ケル……オレ……ガ、タスケル……」

完全に虚と化した一護はうわ言の様に同じ言葉を繰り返していた。

その姿を見た織姫は「自分が助けを求めさえしなければ」と、自分を責め続けていたのである。

こんな事になったのは自分のせいなのだとは何度も呟いていると、一護は雨竜の方へと黒い球体を向けている所であった。

まさか雨竜を殺そうとしているのではないかと思つた織姫は咄嗟に飛び出しそうになるが、それよりも先にウルキオラが霊子の槍を持つて一護へと奇襲を仕掛けて行つた。

その槍は一護の角一本を切断する事しか出来なかつたが、一護の体勢が崩れると同時に黒い球体は消え去り、凄まじい衝撃波を発していったのだ。

それと同時に一護の仮面は完全に砕け散り、手足も人間の物へと変わつて行き、一護はそのまま倒れこんでいった。

（今の一撃で終わつていなければ……死んでいたのは俺の方か……）

一見ウルキオラの体は再生しているように見えるが、消し飛ばされた内臓は再生されていけないのだ。

見かけだけの再生に過ぎなく、ふらつきながらも何とか立ち上がり一護を視界に捉えたが、胸に風穴が開いたままなので今度こそ死んだのかもしれないと思つた矢先である。

一護の孔が超速再生し、あつという間にふさがつてしまった。これにはウルキオラだけでなく他の全員が驚愕していた。

「お、俺はどうなつた……？ 確か……胸に風穴を開けられたはずじゃ……」

どうやら自我を取り戻した様子の一護だが、自分がやった事までは理解していないら

しく、頭を抑えて混乱しながら今の状況を把握しようとしていた。

雨竜の腹に穴をあけた事も、虚化してウルキオラの半身を消し飛ばした事も全て覚えておらず、覚えているのは風穴を開けられる直前までの事だった。

「……だったら俺の左腕と右腕を斬れ。さつきまで戦つてたのは意識を失つて虚化した俺だ、対等の条件で勝負をつけなきゃ意味がねえ」

「そうか。ならば望み通り……」

しかし、その直後にはウルキオラの翼が徐々に消滅していつていた。

最早歩く程の力すらも残されておらず、一護に自らにトドメを刺して勝敗を決するよう促したのだ。

それに驚いた表情を浮かべた一護は「こんな勝ち方があるかよ!」と言つて、不満を露わにして頑なにそれを受け入れようとはしない。

最後の最後まで思い通りにならない事に苛立つたが、最早ウルキオラにはどうしようもない状態であつた為、これ以上の言葉を掛ける事は出来ないでいた。

そして最後に、ウルキオラは織姫の方へと手を向けてこう言つた。

「……俺が怖いか女」

「……怖くないよ」

「そうか……」

その言葉を最後にウルキオラは消滅していき、消滅していく最中でウルキオラはある事を思っていた。

それは人間の心と言うものについてであり、胸を引き裂けば見えるのか、それともその頭蓋を砕けば見えるのか、心とは一体何なのかを知りたいと思ったのである。だが最後の最後にその答えが見えたような気がしたのだった。

そうか――

これがそうか――

この掌にあるものが――

心か――

幕間③

過去の一幕③

見えざる帝国にて、新たに星十字騎士団入りする者を選出する為の試験が行われてから数週間後の事である。

見事試験を突破して星十字騎士団入りが決定したバンビーズの面々ではあったが、ユーハバツハから聖文字を与えられるまでそれぞれが気ままに過ごしていたのだ。

だが、そんなバンビエッタの前にハッシュヴァルトがやって来たのである。

「以前は問題行動を起こしてばかりだったようだが……どう言う風の吹き回しだ？ 一体何を考えている」

「問題……？ ああ……あれね。まあ……ただの一般兵士とは言えどむやみに殺して兵力を減らすとか、馬鹿にも程があると思つてね」

以前のまでのバンビエッタは、ストレス解消とばかりにイケメンの一般兵士を殺して回っていたが、今はそういった事も一切行っていないようだった。

また、性格的に問題児として扱われていたバンビエッタであったがここ最近は随分大人しくなり、その様変わりぶりには周囲の人間からも怪しまれるようになっていたの

だ。

「そんな事よりも試験の方はどうにかなんないの？ 見えざる帝国は実力主義なのは知ってるけど、あれだと無意味に兵士が死んでくだけよ？」

「それは陛下がお決めになったことだ。我々が口を挟めるものではない」

「弱い兵士も使いようでしょ。星十字騎士団の中じゃアンタが一番偉いんだし、陛下に進言することくらいは出来るんじゃないの？」

「……考えておこう」

相変わらず無愛想なハツシユヴァルトではあるが、バンビエツタの言う事にも一理あると思っただのか、考え込むように顎に手を当てた。

そしてそのまま踵を返して何処かへ去って行ったので、バンビエツタもその場を後にしようとしたその時、影から誰かが見ているのがわかったので振り返った。

「あの人がケメンよね！ 嫌いじゃないわ！」

「だ、誰よアンタ……!?!」

何時の間にかそこに筋肉質な男性が立っていることに気づき驚く。

赤い短髪が特徴の男で、口調から察するにオカマのようであるが、体をくねくねさせながらハツシユヴァルトが去っていった方に目を向けている。

その様子は怪しいとしか言い表しようが無く、思わず一步下がってしまったが、それ

でも相手は近づいてきて、口元をニヤケさせながら話しかけてきた。

「アタシはクヴェレ・ヴァツサー。アナタもあのイケメンが気になるのね？わかるわ！」
「い、いやあたしはそんなんじや……」

「んもう！隠さなくつても大丈夫！別に恥ずかしがることなんてないんだから！男と女なんだから惹かれ合うのは当たり前だもの！」

「そんなんじやないって言ってるんでしようが!!アンタ人の話を聞く気があんの!!」

興奮気味にまくしたてる筋肉質の男性、もといオカマ相手に叫ぶが、クヴェレはそれに全く怯まず寧ろどんどん迫ってくる。

巨体である事も相まって圧が凄まじく、タジタジになってしまい思わず後ずさってしまいう程である。

すると、クヴェレは慌てた様子で謝ってきた。

「ちよつと熱くなり過ぎちゃったみたい！ごめんなさいねえ。嫌だわあアタシ……こういうところがダメだって何度も注意されてるのに全然治らないのよお……」

「そ、そうなのね……まあ、別に気にしてないから……」

「ところであなた名前なんていうの？ここにいてことは貴女も星十字騎士団の人って事よね？」

何故ここでいきなり自己紹介の流れになっっているか理解に苦しむところであるが、こ

ここでいきなり会話を打ち切るのも申し訳ないし、折角向こうから聞いてきたのだから答えてあげようと思い、バンビエツタは素直に名乗ることにした。

それからグエルはマシンガントークのように自分の生い立ちなどをペラペラ喋り出し、聞いてもない事をどんどん披露してくるのであった。

それが漸く終わったと思ったら今度は勝手にバンビエツタを褒めたりしてきだしたので、バンビエツタは完全に引き始めていた。

一時間以上経過したところでようやく解放され、バンビエツタは疲れ果てた様子でバンビーズの部屋へと向かう事になるのだった。

星十字騎士団に選ばれたことにより、星十字騎士団の精鋭だけが居住することを許された宮殿へと移り住める事になったバンビエツタ達。

だが、此方も相変わらず全体的に白くて簡素であり、他の建物と比較して少し大きいだけで特に変わらない内装となっていた。

その部屋の中で、バンビエツタはベッドの上に仰向けに倒れ込み、天井を見ながらぼんやりとしていた。

「思ったんだけど、バンビーズってチーム名ダサすぎない？」

「お前それ……自分でつけた名前だろうが。今更何言ってるんだ？」

「別に、今更どうでもよくない？名前がなんだろうと困るわけでもないし」
バンビエツタが何気なく口にした言葉に、リルトットとキャンデイスがそれぞれ突っ込んできた。

確かにリルトットの言う通り、バンビーズと言うチーム名は他でもないバンビエツタが自ら考えたものだ。

最初はこのメンバーも何かしらの意見を出してきたが、結局バンビエツタがゴリ押しでこのメンバーに相応しい名称として決定させた。

バンビエツタ自身も今の今まで何も感じなかったが、冷静になって考えるとあまり良い響きではなかったような気がしてきた。

「何よバンビーズって……何であたしは自分の名前を使っちゃったの？まるで自己顕示欲の塊みたいじゃない……」

「もう既に遅いと思うけどな」

「うるさいわね！そんな事言わないでもいいのよー！」

「まあまあ落ち着いてバンビちゃん……ほらこれ、食べる？」

そう言いながらミニーニヤが差し出してくれたのは、皿に乗ったケーキだった。

相変わらず何処から持ってくるのか分からないが、美味しいので気にしないことにしていたが、この日はまた違った味がしており、普段のものとは若干異なっていた。

それは甘さが控えられていて、程よい風味が楽しめるようになっており、ミニーニャは更に紅茶を入れて持って持ってきたのでそれを味わいながらティータイムを楽しむことにしたのであった。

「それで……バンビーズの代わりに名前なんだけど。誰か良い案ないの？」

「別に今のままでいいと思うんだけど……」

「……ジジ、アンタは何かないの？」

「別に？名前なんて何でもいいかなあ」

ミニーニャもジゼルも特に代案が無さそうな様子だったので、このままだと本当にこの名前のままになりそうだと懸念する。

ジゼルに至っては代案が無いと言うよりは、そもそも興味がなさそうな反応を見せていた。

バンビエッタとしては、自分の名前の一部が入っているチーム名など何とも言えない気持ちで一杯だったので、出来れば別のにしたいと考えている。

しかし、代案が浮かんでくるわけでもないのだからこれは暫く保留と言う事になるのだった。

それから数日後、今日もバンビエッタは宮殿内をうろついて回ることにした。

前々から星十字騎士団だったものもいれば、今回の試験で星十字騎士団に選ばれた者もおり、どちらにせよ精鋭の滅却師が集う場所ということもあつてか、中はかなりの広さを有していた。

様々な人物を観察するのは意外にも有意義であり、暇潰しにはちょうど良かったのだ。

既に陛下から聖文字を与えられている者もいれば、まだバンビエッタのように与えられていない者もあり、その実力差は様々のようだ。

聖文字の能力も様々であり、例えばバズビーのヒートのように炎を操るといふ分かりやすい物もあるが、ベレニケ・ガブリエリのクエスチョンのようにイマイチ効果が分からないような能力もあり、人それぞれだった。

「おい」

「ん……？あたしに何か用があるって言うの？」

「そんな所で突っ立ってられると邪魔だ。退け」

銀色の髪に赤色のメッシュの入った男が、不機嫌な様子で話しかけてきた。

見た目からしてかなり強そうな雰囲気をつけていて、何やらピリピリとした空気を発しており、バンビエッタも一瞬警戒してしまふ。

「ただでさえクヴェレの野郎に絡まれて苛ついてんだ……邪魔だから失せろ」

「クヴェレ……ああ、アンタもあのオカマに絡まれたのね」

「ああ……う？その様子だとテメエも絡まれたみたいだな。アイツは何なんだ？俺にしつこく付き纏つてきやがって……正直迷惑以外の何モンでもねえよ」

話を聞く限り、バンビエツタがクヴェレに一時間以上話を聞かされ続けたように、彼もまたしつこくクヴェレに絡まれていたようだった。

彼の名前はヴェーク・グロースと言うらしく、荒々しい口調とは裏腹に冷静で落ち着いた雰囲気を感じられた。

だが「道を開けなければ殺す」とでも言いそうな程の殺気を放っていたので、バンビエツタはそれを感じ取って咄嗟に道を空けた。

「チツ……今度会つたらぶつ殺……ああくそ！星十字騎士団同士での私闘は禁じられてるんだつたな……」

どうも彼は余程クヴェレが嫌いなようで、イラついた様子を見せている。

そのまま何処かに去って行く彼の様子を見届けた後、バンビエツタも同様にその場を後にするのであった。

転生バンビ版BLEACHの掲示板②

305：名無しの死神

新章に入って大分経ったわけやけど、ここいらでちよつとおさらいしとくか？

306：名無しの死神

まあ、そうだな……大分経ってはいるけれど、相変わらずBBちゃんは分からない事の方が多いしな。

307：名無しの死神

新章になってBBちゃんどうなるのかなと思ってたら、開幕バイトしてて草生えたわ

308：名無しの死神

って言うか……BBちゃんは浦原商店で働いてるんじゃないんか？

309：名無しの死神

>>>308

言ってもあそこは駄菓子屋だし、それじゃあお給料もたかが知れてるでしょ

310：名無しの死神

>>>309

現世にいる死神に対して霊的商品を売るのが本職なんですよ？ならそれなりに収入はあるだろうから、それで給料が無いってんならブラックとしか……

311：名無しの死神

まあ、浦原って普通に腹黒そうだし……給料少ないからうなぎ屋でバイトしてんでしょ

312：名無しの死神

浦原と言えば、ようやくBBちゃんに渡した腕輪が何なのかが判明したね

313：名無しの死神

ああ……確か血装を解析してたんだっけ？それで出来たのがあの手甲だったんだ

よね

314：名無しの死神

言うてヤミーを殴った時にヒビ入ってたけどな。夜一も「瞬間すら使わなかったら、儂の手が砕けてた」みたいな事言ってたし、顎を砕いたとは言えどんだだけ破面は硬いんだよって話ですわ。

315：名無しの死神

なんかBBちゃんも色々と作ってるよね、あの謎の杭とか……なんか丸薬みたいなものもいつの間にか作ってたし

316：名無しの死神

一護がメインのお話とはいえ、BBちゃんの描写がそんなに多くないのがなくって思いますが、もっと増やしてくれてもええんやで？

317：名無しの死神

>>>316

でも、尸魂界編の時よりは明らかに描写が増えているとは思うんだ。ヤミーとウルキオラが来た時も戦ってたし、恋次とチャドに修行を付けている所もすっかり描かれてるからなあ

それに、ヌルとかいう気持ち悪い破面とも戦ってたし

318：名無しの死神

やつぱBBちゃん強いよな。恋次が苦戦してた破面を一撃で仕留めたもんな

319：名無しの死神

そのBBちゃんの腕を斬り飛ばして喰ったのはヌルとかいうキモイ破面と言う件。

320：名無しの死神

ヌルはマジで不気味だよなあ、最初目も鼻もなんも無かったかと思ったら、次に出てきた時には突然口ができるんだ気味が悪い……

動きも最初は化け物じみてたけど、だんだんと洗練された感じの動きになってくしさあ。その上BBちゃんの技まで真似るし……マジでなんなん？

3 2 1 : 名無しの死神

>> 3 1 9

言うてその時はワンダーワイスとかいう奴との二人掛で攻撃されたからやろ。それにBBちゃんもヌルの成長速度は異常だつて言つてたし……

3 2 2 : 名無しの死神

触腕にからめとられるBBちゃん……ふむ、続けてどうぞ？

3 2 3 : 名無しの死神

>> 3 2 2

その結果として腕を斬り飛ばされたんだから、続けるもクソもあるか

3 2 5 : 名無しの死神

強いつて言えば浦原もマジで強かったよな。終始ヤミーを圧倒してたし、反膜で帰還できてなかつたらあのまま倒されてたでしょ。

つていうか、あの能力つて卍解じゃないつて言つてたけど……結局なんなの？

326：名無しの死神

>>>325

確かに気になるが、分からんとしか……現状でも浦原しか使っていないし、名称も不明のまま話が進んでるからな

327：名無しの死神

気になると言えば、皆が白一護と言っているアイツが意味深な事を言っていましたね……「俺が斬月」だとか何とか……

一体どういう意味なのでしょう……？

328：名無しの死神

一部の考察によるとあの白一護が本当の斬月であつて、斬月と名乗っているオッサンは別の何かじゃないかって噂されてるね。

そつちも気になるけど、俺としては平子が言った「教わったからって滅却師の力が使えるか！」的な台詞の方が気になるんよ

329：名無しの死神

一護の方にも気になる事増えて来たよなあ……まあ、それは追々判明してくだろうし、今は気にせんとこ

772：名無しの死神

ついに虚圏に突入したわよー

773：名無しの死神

一護だけじゃなくて雨竜とチャドも強くなってるよな、破面を瞬殺するくらいだから相当なものでしょ

774：名無しの死神

言うて、突入して最初に戦った奴は雑魚っぽかったし。後の奴等も桁落ちだかなんだかで大したこと無かったんやろ

775：名無しの死神

……で？BBちゃんは何処？

776：名無しの死神

ちよつと前に腕斬り飛ばされてたわけだし、そんな簡単に復帰してくるわけが無いでしよ。

頼みの綱の織姫だつて敵側の手中にある訳なんだし

813：名無しの死神

なんやかんやBBちゃん左腕ないまま虚圏に突入してつたな

814：名無しの死神

元に戻せる織姫が虚圏に居る訳だし、そう考えると妥当でしよ

815：名無しの死神

なんかちよつと……BBちゃんアホの子みたいになつてない？

ルヌガンガとか言う敵に「どうせ蟻地獄を作るとかく」つてイキリ散らした次の瞬間には竜巻で吹き飛ばされくし。草生えたわ

816：名無しの死神

それでも竜巻の中で、高速で吹っ飛んでくる瓦礫やらなんやらを飛廉脚で避けてくのは流石BBちゃんだと思っただ

まあ結局瓦礫にぶつかってぶっ飛ばされちゃったわけだけど

817：名無しの死神

片腕ないとバランスとるの滅茶苦茶大変なんよ。左腕以外無いワイが言うんだから間違いないぞ。

818：名無しの死神

>>817
お前それ死んどるやんけ。成仏してクレメンス

819：名無しの死神

>>818
生きとるわ。ただ左腕以外無いだけや

820：名無しの死神

>>819

こいつは何を言っているんだ？

821：名無しの死神

そんな事よりも、BBちゃんが吹き飛ばされた先に居たあの大量の破面達ってなんなん？

822：名無しの死神

それよなあ……BLEACHって色々とか明かさなまま話が進んでく傾向にあるし、あの破面達も名乗らないからなあ。

822：名無しの死神

名前とかも気になるけど、なんでBBちゃんがあの破面達を倒さないのかも気になる。その気になれば片腕なくても倒せそうじゃん？

823：名無しの死神

やっぱ未来から来た説は濃厚じゃね？多分倒しちゃうと後で困るから倒せないって事なんだろうし……

874：名無しの死神

ちよくちよく藍染側の話も書かれてるけど、ようやくヌルが藍染の手によって作られた破面って事が判明したな

しかも口以外無かったハズなのに今では鼻や耳とかまでできてるし

875：名無しの死神

ワンダーワイスもそうだったしな。ワンダーワイスは火を完全に無効化してるみただったし、ワンダーワイスが対山じい用で、ヌルが対BBちゃん用って感じがする。

876：名無しの死神

BBちゃんに対して警戒しすぎでしょwwww総隊長と同じレベルの対策して来るとか草生えるわwww

877：名無しの死神

>>876

草に草生やしてんじやねーって何度言ったら分かるんだあ!?

878：名無しの死神

まあ訳の分からん奴を警戒するってのはよく分かる。俺等からしてもBBちゃんは分からんことの方が多いしな

933：名無しの死神

恋次の卍解形変わってるし、ザエルアポロとか言う十刃を瞬殺したと思っただらそいつ偽物なの草

934：名無しの死神

研究者キャラが良く言うだろう「データと違う!」って台詞の後に瞬殺されたのは草を禁じ得なかったわ

まあ、それを言ったの偽物だったんだけど

935：名無しの死神

あいつ完全に研究者キャラだったし、そのうちマユリと戦うんじゃないかね？ つて勝手に思ってるんだわ

936：名無しの死神

一つ気になったんだけど、アルトウロなんたらって破面は結局十刃なの？

937：名無しの死神

いや、ヨン様が十刃会合を開いている時にはそいつ居なかったから十刃じゃないのは確か。

作中でも「大昔に尸魂界に攻め入って、護廷十三隊を半壊させた」って説明されてるから、滅茶苦茶強いのは確定してるんだけど……詳しく描かれてるわけじゃないから、よく分からんと言えん

969：名無しの死神

なんやかんやそのアルトウロとBBちゃんの戦闘が始まったわけなんだが……片腕ないとは言えどBBちゃんが苦戦してるし

970：名無しの死神

つまり腕が両方あつたら普通に勝つてた？

971：名無しの死神

どうやらなあ……アルトウロも本気出してないっぽいし

ってかBBちゃん技が多彩になってきてたよね。今までなんやかんやお披露目できてなかった完聖体も使ったわけだし

972：名無しの死神

思ったんだけど、BBちゃん未来から来た説違うっぽくね？なんかヌルの時と言い、アルトウロ時と言い「誰こいつ」みたいな顔してたし

973：名無しの死神

未来から来たBBちゃんが色々介入したことによって、歴史が変わったのでは？だからこそ知らん奴が出てきたりするわけで……

ほら、あの謎の破面軍団の時も後で困るから倒さなかったって説も出てるわけだし

974：名無しの死神

>>973

成程……そう考えると未来から来た説はまだまだ有り得るんか

117：名無しの死神

一護とグリムジョーの戦闘ヤバない？

118：名無しの死神

分かるわ。初めてグリムジョーと戦闘した時は苦戦してたけど、今じゃ普通に圧倒してるもんね

一護の成長速度マジでヤバいわ、流石主人公だけある

119：名無しの死神

帰刃が死神で言う卍解かと思ったら、更にその上の帰刃があるのはヤバかったわ

120：名無しの死神

それな、あのあたりの戦いはマジでワクワクしてたわ。もう絶対この戦闘アニメになつたら絶対面白いもん

121：名無しの死神

豹王の炎爪と月牙天衝のぶつかり合いは凄かったな

ってか、これだけ一護成長してていまだに技っぽい技が月牙しかないのは草。まあ、出力調整して連射したり最大火力で放つたりと色々出来るようになってるから別にいいんだけどさ

122：名無しの死神

っていうか、最後の最後で一護の頭から角が生えたけど……アレ大丈夫なん？ほら、一護ってちよくちよく体乗っ取られそうになってるし。

それに、放った矢に巻き付けられてた鎖の様なものは何なん？教えてエロイ人!!

1 2 3 : 名無しの死神

>> 1 2 2

ほら、このBLEACHってやつは色々と明かしたり説明したりしないまま話を進めるタイプの漫画だから、そんな事を言ってしまうと思うぞ

転生バンビ版BLEACHの掲示板③

229：名無しの死神

前々から思ってたんだけど、一護って相手を挑発したりすること割と多いよね

230：名無しの死神

BBちゃんも戦闘中に相手を煽ったりするからな、BBちゃん一護の師匠だし多分影響を受けてるんだろうな

231：名無しの死神

確かに、東仙と狛村の二人を相手に戦ってた時も煽ってたからね

232：名無しの死神

って言うかこのザエルアポロっていう奴さあ……いったい何なん？

前回倒されたのは偽物ってのは別にいいんだけど、恋次の卍解封じたりして散々煽り散らかしたくせに、雨竜に瞬殺されてんのアホ過ぎて草生えたわ

233：名無しの死神

そういや雨竜の完聖体ってマユリと戦った時と姿が変わってたね。

チルツチと戦った時は「使うまでも無いな」とか余裕かましてたけど、実際あの強さなら本当に使うまでもなかったな

234：名無しの死神

羽みたいな帯の数も増えてたし、姿からしても強くなっただけで事がはっきりと分かるんだよな

301：名無しの死神

またヌル出て来た訳だけども、なんだかBBちゃんに執着しすぎじゃね？

いや、藍染が対BBちゃん用に作り出したのは知ってるんだけどさ、それでも行き過ぎだと言わざるを得ない

302：名無しの死神

物凄い片言だけど喋れるようになってるし、またもや強くなってるしで滅茶苦茶面倒臭くなりそうなんだが

303：名無しの死神

確かに面倒になるでしょ。なんか姿もBBちゃんに似て来てるし……いや、目を仮面が隠してるから現実とは言いきれないが、喋り方はどことなくBBちゃんみを感じさせるわ

304：名無しの死神

>>303

バブみを感じるみてえにいつてんじゃねーよハゲ！

305：名無しの死神

でも確かにそう思うわ「服がボロボロになっちゃったじゃないの!!着替えて来るから、そこで待ってなさいよね!!」とか普通にBBちゃんも言いそうだもん

399：名無しの死神

グリムジョーに続いてノイトラとザエルアポロも二回帰刃したけど、十刃全員出来るのかな？

400：名無しの死神

>>399

出来るんじゃない？アローロニーロとゾマリはしてなかったからどうだか知らんけど

401：名無しの死神

ゾマリがした所で白哉に瞬殺される未来しか見えんし、だからやらなかったんじゃないかな？アローロニーロは……知らん

402：名無しの死神

なんかマユリも卍解じゃない解放しただけけど、あれって浦原が編み出したん？

403：名無しの死神

>>402

そうなんじゃない？「あの男の後追いになるのは癪」的な事言ってたし
それに、明らかに浦原に対してライバル心抱いてるよね

404：名無しの死神

浦原も科学的キャラっぽいし、何か因縁あんだろうね

405：名無しの死神

それにしても剣八とノイトラの戦いはド派手だったなあ、野晒も物凄い武骨でカッ
コいいし

406：名無しの死神

ノイトラの放った破滅の虚閃とか言う技ヤバすぎでしょ。あんなんポンポン使って
虚圏大丈夫なん？

あれで数字が5だってんだから、上の数字の奴等どんな技使うんだよ……

407：名無しの死神

それを野晒の一振りで消し飛ばした剣八も相当ヤバいでしょ

408：名無しの死神

って言うか、BBちゃんがノイトラの二回目の帰刃みた時の反応で、BBちゃんの謎深まったよね

409：名無しの死神

え、そうなの？なんで？

410：名無しの死神

一護にグリムジョーが2回帰刃したかどうか聞いてる場面合ったでしょ？その時点でBBちゃんは十刃が2回帰刃できる事を知ってることが確定したんよ

でもそうになると、ノイトラが2回帰刃して時に驚いたような顔するのがおかしくなってくるわけ

411：名無しの死神

成程……全然わからん

412：名無しの死神

ノイトラの2回帰刃で驚く↓本来の歴史では一回しか帰刃しない↓2回帰刃できる事を知らないの、一護に確認するわけが無い

本来の歴史でもノイトラは2回帰刃↓見ても驚かないはず……って感じかな？

413：名無しの死神

BBちゃんは一護とグリムジョーが戦っている場面を見た訳でもないのに、グリムジョーと戦ったって事を知ってる感じだったからな

414：名無しの死神

今のところ

BBちゃんは未来から来たけど、ちよつと歴史が変わって知らん奴が居たり、知らん現象が起きてるから驚いてる

BBちゃんは未来から来た訳じゃくて、どこかで未来で何が起きるかを知ってしまった。だけど知った未来とは違う事が起きているから驚いている

……という感じだね

415：名無しの死神

考察してる奴等は皆こんな解釈してるわけか。全然分からん……

416：名無しの死神

一護に確認したのつて「え、何それ知らん、こわ……もしかして他の奴等もするの？
確認しとこ」的な意味だったんじゃないの？

454：名無しの死神

【速報】BBちゃんの本名ついに判明する

455：名無しの死神

判明したのは良いんだとさ……まさかそれが、敵の口から出て来るとは思わなかった
んよ

もつとこう……無かった訳？

456：名無しの死神

W W
本名がバンビエッタ・バスターバインだからBBって……ちよつと安直すぎないかW

457：名無しの死神

本名が判明してからと言うものの、皆してバンビちゃんって呼ぶようになったよね
言いやすいから良いんだけど

458：名無しの死神

なんか……一護より先に敵に本名知られてんの草

459：名無しの死神

一護もあんな風に師匠の本名知る事になるとは思ってもみなかつただろうな

460：名無しの死神

折角新しい完聖体お披露目したのに、バンビちゃんの本名が出て来るタイミングが衝撃的過ぎたせいか、どこもかしこも完聖体の方にはあまり話題に上がらない感じになつてな

461：名無しの死神

>>460

そうか？割と「完全にファンネルやんけ！」って感想をちよくちよく見るんだが

462：名無しの死神

話を遮るようで悪いんだけど一つ質問

ヌルが最後に言った「折角……手に……」って、何を言おうとしたかの考察はどうなったの？

463：名無しの死神

>>462

それなら「折角手に入れたのに」って言おうとしたんじゃないかってなってるよ

464：名無しの死神

>>463

それってどんな理由で、そう考えられてんの

465：名無しの死神

ほら、ヌルって藍染の手によって何も持たない破面として創られたっぽいじゃん？
そんで、バンビちゃんの片腕喰ってDNA手に入れて……そこから進化してバンビちゃん
ぽくなつてった言われてるんだけど

そんで、バンビちゃんの全てを手に入れて何も無い自分自身を埋めるために何度も
襲つてただけけれど、結局それは叶わないまま消えてくことになったから、消え際に
『せっかく手に入れたのに』って言ったんじゃないかと、そう言われてるみたいよ

466：名無しの死神

うーん、正直まだ分かり辛い所もあるけど、筋は通ってるのか

467：名無しの死神

そう言う事かあ……納得つちやあ納得だな

468：名無しの死神

消えてく際に割れた仮面から見えた素顔、殆どバンビちゃんだったもんなあ

469：名無しの死神

なんか、作者はバンビちゃんも虚化できるようにしたかったけれど、それだと一護と被るからヌルって言う破面を出したって……そんな風にも言われてるらしいね

470：名無しの死神

……どこもバンビちゃんとヌルの考察だらけで、一護vsウルキオラの話がほぼ出て来ないんだが……

471：名無しの死神

いや、そりゃあ一護の半分虚化と完全虚化はカツコよかつたし、ウルキオラが第二解放どころか第三解放まであるのも驚いたよ？

それに、とんでもねえ技を放ったりで迫力あるバトルも見れたから良いんだけれど……

472：名無しの死神

バンビちゃんかなり人気あるから仕方ないよね

空座町決戦篇

空座町への侵攻が始まったんだが？

天蓋の下では帰刃したヤミーが暴れまわっており、恋次や泰虎やルキア達では太刀打ち出来る状態ではなかった。

その圧倒的な巨体の前には誰一人として敵う者が居らず、次々と蹴散らされて行くばかりで、とてもじゃないが倒すどころの話ではないのである。

最早どうする事も出来ずにいると、そこに一護が姿を現した。

「一護……！」

「よお……ちよつと見ねえ間に随分と高くなつたじゃねえか」

「黒崎一護オ!!!」

自らの体の何倍もの大きさのヤミーを見上げながら呟く一護に対し、ヤミーは虚閃を撃とうと口を大きく開けた。

だが次の瞬間には、ヤミーの顔面へと月牙天衝が放たれ、強制的に虚閃を中断させてみせた。

「……で待つてろルキア。直ぐに片づけて現世に行くぞ」

そう言つて一護が一気に飛び出していくと、ヤミーも迎撃しようと拳を振りかざしてくる。

その凄まじい巨体から繰り出される拳は、当たればひとたまりもない破壊力があり、まともに喰らえば間違ひなく即死であろう。

「ウロチヨロしてんじやねえぞクソ野郎が!!」

「うるせえ野郎だな……」

しかし、一護はその拳を受け止めて見せると、虚化して月牙天衝を放ち、その巨体を一刀のもとに叩き伏せて見せたのだ。

虚化した際に仮面が重いような違和感を感じたものの、今はヤミーを倒す方が先だと考え、今は考えない様にした。

だがそんな一護に向かってヤミーは、その巨大な顔面を近付け、一護の事を噛み殺そうとしたのである。

後方へと飛んで回避すると、足元の建造物は易々とかみ砕かれて粉々になり、ヤミーその瓦礫を口から吐き出していった。

「痛えなあ……ちよつと切つちまつたじやねえか」

(虚化状態の月牙天衝を真面に喰らつて……ちよつと切つただけだと……?!)

ヤミーに与えられた数字は10ではなく0である。

力を溜めて解放する事により、数字が10から0へと変動する十刃であり、それはつまりヤミーが最強の十刃で有ることを意味していた。

一護の霊圧が完全に回復しきっていないという事もあるが、それ以上に単純にヤミーの霊圧がとつともなく高いのである。

「他の十刃なんざ俺にとつちやゴミみたいなものなんだよ!!」

そう言いながらヤミーは虚弾を放つと、それを防御した一護は吹き飛ばされて行つてしまった。

今の一護には大したダメージにもならず、すぐに態勢を立て直したが、連続で放たれる虚弾によつて中々近づく事が出来ずにいた。

すると、何処からか何かが三つ飛んで来て、一護の前に展開して結界を作り出した。

それに虚弾が防がれていると、次の瞬間には巨大な閃光が飛んで来て、ヤミーの半身を飲み込んだのだった。

「何やってんのよ一護！ちやちやつと終わらせて現世に戻るわよ！」

「し、師匠……?!?いつの間にここに……」

いつの間にやらバンビエツタが来ており、今まで見た事のない能力を見せた彼女に驚きの表情を浮かべる一護。

しかし驚いている場合ではなく、今が戦いの最中だと理解すると戦闘に集中し始める

事にした。

だが、後ろから誰かが近づいてくる気配を感じ取って振り向くと、そこには劍八と白哉が立っていたのだった。

「兄等は下がっている……」

「ああ？ テメエこそ邪魔だからすつこんやがれ」

「クソがああ!! よくもやりやがったなあ!!」

閃光に飲まれたヤミーだが、半身が焼け焦げた状態のまま拳を振り下ろしてくる。

それを劍八は容易く受け止めて見せると、そのまま拳を斬り飛ばしてしまった。

そこに追撃の千本桜が襲い掛かり、ヤミーの足を斬り刻んで体勢を崩し、そのまま地面へと叩きつけた。

「二人共……」

「最早兄等の仕事は此処には無いはずだ、早々に現世へと戻るがいい」

「先ずはアイツを倒すのが先決だろ。それに、現世から浦原さんが黒腔を開けてくれねえと……」

「まったく……浦原浦原とやかましい事だネ」

その声が響き渡ると共にマユリが現れ、その場に居る全員を見渡していく。

その背後には荷車が待機していたが、それよりもマユリは黒腔の解析が済んでいる事

の方が重要であった。

何せその黒腔を通らなければ、現世に戻る事は出来ないのだから、もし開かなければ帰る事は出来ないのである。

そして、あつという間に準備が済み、一護は卯ノ花やバンビエツタと共に現世へと向かおうとしたが……

「逃さんぞ死神共があ!!」

遠くから破面が飛んで来たかと思えば、一護達の目の前に勢いよく着地して来た。

その衝撃により砂塵が巻き起こっていたが、やがてその姿が見える様になると、そこにいたのはアルトウロであった。

バンビエツタによって霊子の檻に閉じ込められていたが、それを破壊してここまでやって来たのであろう。

そんな彼の前に卯ノ花が立つと、ゆっくりと彼の方に振り返って口を開く。

「二つほど撤回しなければならぬことがありますね……まずは勇音、貴女が黒崎さん等と共に、黒腔を通って現世へと向かってください」

「は、はい……！分かりました！」

卯ノ花はそう指示をすると、勇音は一護らと共に黒腔へと入って行った。

それを見送った卯ノ花は、一度小さく息を吸うと、鋭い眼光で目の前の破面を睨みつ

けたのである。

その視線には確かな怒りが込められており、それを感じ取ったアルトウ口は「面白い」と呟いて不敵な笑みを浮かべた。

「此処には血を流すために来たのではないと言いましたが……その撤回が二つ目です……今ここで、私はお前を斬るのだから」

直後、凄まじい霊圧が噴き出し、それが周囲に居た者の肌をビリビリと刺激していく。

そして次の瞬間、卯ノ花とアルトウ口は目にも止まらぬ速度で衝突し合っていたのだった。

そして現世で苛烈な戦いが始まってから少し経った頃、本物の空座町をレプリカと入れ替えておくための〈転柱結界〉を維持するための柱を防衛する戦が始まったのだった。各隊の副隊長らがその場に配備され、柱を破壊するため現れた破面達を撃破することに成功。

そして遂に三人の十刃も動き出し、隊長格がそれぞれ相手取る事になり、冬獅郎は第三十刃のティア・ハリベルとの戦いを繰り広げていた。

「てめえ程の力で……まだ三番目か」

胸に書かれた三の数字を見た冬獅郎はそう呟いた。

ハリベルは強大な力を持つているが、それでも第三十刃なので残りの二人の方が強いという事だろう。

「私の力の底など……まだ貴様に見せた覚えはないぞ」

ハリベルの剣は刀身の部分が空洞になっており、そこに霊圧を流し込む事で斬撃の威力を底上げすることが出来るような作りになっているようだった。

その剣を冬獅郎目掛けて繰り出すが、先ず氷の壁を即座に張ったが、その剣は氷の壁に弾かれることなく、易々と砕いて見せた。

「チツ……!!こんな容易く砕かれるとはな……!!」

「その程度の薄氷で、私を止められると思ったのか？」

続けざまに第二撃目が撃ち込まれたが、冬獅郎は氷輪丸を正面に構えて攻撃を防ぎ切って見せる。

するとハリベルはそのまま突っ込んできて袈裟懸けに斬り付けて来たが、冬獅郎もすかさず攻撃に移り刀をぶつけ合い鏢迫り合いとなった。

だが数秒後には押され始めて、後方へと吹き飛ばされた。

（一撃が重い……!）

なんとか踏み止まって持ち直すも、既に次の攻撃が迫っている所である。

しかし瞬時に体勢を立て直し、自らの周囲に無数の氷弾を出現させると、一斉に射ち

出して迎撃した。

対してハリベルのはその悉くを剣で切り裂き、一気に間合いを詰めて上段から斬りつけてきた。

「卍解！『大紅蓮氷輪丸』!!」

咄嗟に卍解をし、上から打ち下ろされた双剣を受け止めたものの、威力を殺し切るこ
とが出来ずに大きく後退させられる事になった。

そのまま続く剣戟によつて冬獅郎は更に後ろに押し切られ、周囲に氷塊が飛び散つて
行った。

だが、ただ黙つて攻撃を受け続ける訳にもいかないために、足元から氷棘をハリベル
の足に向けて放出したのである。

オーラアズール

それを剣で破壊しながら後方へと下がっていくと、再び剣に霊圧を収束していった。

「破蒼砲」

そして収束させた霊圧を砲弾のように撃ち放ってきたが、これを冬獅郎は大きく横に
飛んで躲すことにしたのである。

着弾した霊圧の斬撃は爆発するかのよう建物一部を吹き飛ばしていき、轟音と共に砂
塵が舞い上がっていった。

しかもそれが何度も繰り返し放たれていたもので、反撃に転じることも出来ず、回避す

るしかない状態なのである。

しかし、遂には避けきれなくなつて直撃を受けてしまい、なんとか氷輪丸で受けたものの吹き飛ばされる事になり、建物を突き破つて瓦礫に埋もれる事になったのだつた。

空座町への侵攻が始まったんだが？②

やがて戦局は進んで行き、ハリベルは冬獅郎の『氷天百華葬』で氷漬けにされ、バラガンは碎蜂の正解である『雀蜂雷公鞭』の爆撃に焼かれていく。

第一十刃であるコヨーテ・スタークが帰刃をし、京楽と浮竹の二人と戦っていたが、このスタークさえ倒せば空座町に攻めてきた十刃は全て倒した事になるのだった。

だが、黒腔から出てきたワンダーワイズによって浮竹は胸を貫かれ、京楽もまたスタークの放った虚閃に飲まれて地へと落下して行ってしまう。

そればかりか氷漬けになったハリベルは復活を遂げ、爆撃されたバラガンも無傷で爆風の中から出てくるという有り様だった。

そして藍染等を覆っていた炎をもかき消されてしまい、藍染等が前線に出たことでもとうとう終わりの時が来ようとしていた。

だが……

「久しぶりやなあ……藍染」

そこに仮面の軍勢が到着した事により、共通の敵である藍染を倒すべく一時的に協力することになったのだ。

そして、ハリベルと戦っている冬獅郎の下には猿柿ひよ里と矢胴丸リサが現れ、共に戦い始めたのだった。

「潰せ『鉄獎蜻蛉』！」

「ぶった切れ『滅大蛇』！」

ひよ里とリサの二人が始解をし、巨大な槍とノコギリのような大剣を振るって同時に攻撃を仕掛ける。

そして冬獅郎も氷輪丸をてに、ハリベルへと攻撃を繰り返したが、彼女は全ての攻撃を剣で弾いてしまったのである。

流石は十刃だけあつてか、余裕を持って対応しているようにも見え、まだまだ余力が残ってそうな雰囲気があった。

「三対一か……先ほどの様に無様を見せる訳にはいかんのでな、今度は本気で行かせてもらうとしよう……」

その言葉と同時にハリベルの霊圧が急激に上がっていき、橙色のオーラが立ち昇っていくと、それは下腹部の孔へと収束していき、やがてその孔に同色の球体を作り出した。生えた尾には霊子のヒレが炎の様に揺らめき、手足のヒレはまさに水生生物と言った見た目だった。

そして手にしていた大剣も霊子の刃へと変わり、内部には鮫の歯のような物が並んで

見えるようになった。

その凄まじい霊圧の高まりに、三人は警戒しながらもすぐに対応できるように備えておく。

「こないのか？ならばこちらから行くぞ……！」

ハリベルが霊子の刃を振るうと、そこから水の刃が幾つも飛び出し三人の元へと襲い掛かった。

冬獅郎はすぐさま前へと出て、その刃を氷へと変えてしまおうとしたが、何故かその水は氷に変わることもなく三人へと向かってく。

槍や大剣を振り回して次々と放たれる水刃を迎撃する三人だったが、一発一発が重くて威力が高く、何より数が多くて反撃に出れる余裕が無かった。

「何しとんやチビ!!突っ込んだと思ったら何もできへんで返り討ちにされとるやんけ!!」

(チツ……いややはり卍解の状態じゃなければ変える事は出来ないか……！)

冬獅郎を責めたてるひよりを無視し、再び卍解をして反撃を試みようとする。

すぐさま氷の弾丸を連射してハリベルを貫こうとしたが、それは全て水に変えられ、逆に水弾として撃ち返されてしまった。

卍解の状態でないから氷へと変えられないと考えたが、卍解の状態でも無駄であった

らしい。

「どうした……私の水が氷にならないことが、そんなにも不思議か?」

(どうなってやがる……何故氷輪丸の能力が通用しない……?)

氷輪丸の水は容易く水に変えられてしまうのに対し、相手の水は卍解状態の氷輪丸をもつてしても氷に変える事ができなかった。

そんな事を考えている間にもハリベルの攻撃は止むことは無く、水刃だけではなく虚閃を織り交ぜて攻撃を繰り返してくる。

それに対してひよ里とりさも虚閃を撃ち返すが、その全てが水の渦に飲まれて霧散してしまった。

「やつかいやな……こっちの攻撃が悉く無効化されんで……!」

「だったら直接叩き潰すだけや!」

ひよりはそう言うのと鹹大蛇を地面に叩きつけ、瓦礫を巻き上げて目くらましを行いつつ、その瓦礫を蹴り飛ばしながら自身も突っ込む事にした。

一方のリサも背後を取るために素早く移動を開始しており、確実にダメージを与えるために大技を叩き込むつもりようだ。

だが、ハリベルの持つ霊子の刃が蛇腹剣の様に伸びて瓦礫を斬り刻み、大量の水柱が地面から吹き上がって二人を吹き飛ばしてしまった。

「これでは一対一と変わらん……どうした日番谷冬獅郎、お前は来ないのか？」
「……チツ！」

靈子の剣から勢いよく水が噴射されると、それはウォータージェットとなつて高速で放たれ、大紅蓮氷輪丸の氷の翼を容易く切断したのだ。

氷の壁を作りつつ回避を行う冬獅郎であつたが、そんな物はお構い無しと言わんばかりに貫通してくる。

それどころかその氷の壁さえもあつという間に水に変えられてしまい、そのまま冬獅郎目掛けて襲い掛かつてきた。

攻撃を防ぐために作った氷の壁だったが、それが悪手となつてしまったのである。

（水へと変えられる距離も伸びてやがる……どうすれば……）

そんな考えごとをしている内にも、どんどん追い詰められてしまっている冬獅郎なのであつた。

そして次の瞬間には足元から水柱が立ち昇り、それにより宙へと投げ出されてバランスを崩した冬獅郎は、背中から建物の壁へと激突してしまい、そしてさらにそこへ追撃の激流が襲い掛かつてくるのだつた。

そして、バラガンと戦っていた碎蜂と大前田の下にはハッチが到着し、援軍に加わり

共に戦うことになる。

碎蜂は以前とある滅却師に逃げ切られてしまっただけからは、己の速力を更に高めるために修練を積み重ねていたようだ。

そのお陰で、バラガンの放つ死の息からも何とか逃げ切れている状態だったが、その修練が無ければその死の息に追いつかれ、少なくとも手足の一本は朽ち果てて居た事だろう。

「……何もしてくる気配はなしか」

バラガンの目の前には、ハッチが鬼道で作り出した巨大な城門がそびえ立っていた。

そして次の一手を待ち構えていたが、一向に攻撃の気配は無かったため、その城門ごと朽ち果てさせようと考えた。

だが、次の瞬間には周囲に追加の鬼道の城門が出現していき、バラガンを完全に閉じ込めてしまったのだった。

「実に滑稽だな！この程度の鬼道で儂を封じたつもりか!? 実に下らん!!!」

「その結界ハ……アナタを封じるためのものではありません」

ハッチの言葉通り、これはバラガンを逃がさないための物ではなく、碎蜂の正解の爆風を外に出さないようにするためのものだったのだ。

そして、碎蜂は開けられた門の隙間から雀蜂雷公鞭放ち、密閉された空間の内部でと

てつもない威力の爆発を炸裂させた。

結界にヒビが入る程の大爆発が密閉空間で発生したのだから、いくら強力な技を持つバラガンといえどただで済むはずもないだろう。

「四獣塞門にヒビが入るとハ……やはり途方もない……ッ!?」

そうハッチが言いかけたその時、四獣塞門のヒビが逆再生するかのようように修復されていき、雀蜂雷公鞭の爆炎も逆再生するかのような不可解な動きをするのだった。

やがて四獣塞門はまるで発動する前に戻ったかのように消え去り、雀蜂雷公鞭も爆発する前の巨大な針へと戻ってしまっていた。

そして、そこから現れたバラガンも姿を変えており、頭部の周りには巨大な牙のような物が四本生え、胸部の辺りに紫色の球体が浮かんでいるのが見えた。

手に握られていた斧もより大きくなり、全体的に禍々しさが増した姿へと変貌していた。

「この正解、そっくりそのまま返すぞ」

「なに……っ!?!」

バラガンに向けた放った雀蜂雷公鞭が、今度はそのまま返されてしまったのである。

その威力は本人ならばよく知っている筈なので、このまま受ければ確実に死ぬことになるだろう。

だが、爆発の範囲外に逃げるだけの余裕は無く、このままではどうしようもないといった状況だった。

だが、いち早くハッチが鬼道で巨大な城門を作り出して盾とし、辛うじて直撃を避けたのだった。

「一体何をしたというのだ……!?何故爆破した雀蜂雷公鞭が返ってくる!?それにあの姿……」

「老いとは時間……時間を早めて朽ちさせることが出来るのだ、何故その逆が出来んと思ったのだ?」

「時間の逆行……!?そんな事を、いとも容易く……」

ハッチは驚愕していたものの、実際にその効果を見せつけられてしまった以上、信じられなかつたようだった。

どう言った理屈なのかは分からないが、時戻しの力を発動されてしまった時点で勝ち目が無いと言っても過言ではなかつた。

仮にバラガンに傷をつけることが出来たとしても、それを巻き戻す事で無かつたことにされてしまうのだから当然の話である。

「これで分かつたか?いくら蟻が群がろうと、虚圏の神である儂には敵わないという事が」

そう言つて嘲笑うかのように顔を歪め、その力の差をありありと見せつけてくる。そして再び死の息が周囲へと広がっていき、触れたもの全てを朽ち果てさせていった。

結界を使いながらもなんとか逃げ回る三人だったが、このままでは朽ちて死ぬ事になるのは時間の問題であつた。

「碎蜂サン……私に考えがありマス、時間を稼いでもらえマスか……？こちらの考えを悟られた時点で終わりデスが、何とか時間を稼げれば勝機はあるのデ」

「……雀蜂雷公鞭を二回も放つたのだ、もう殆ど余力はないぞ……」

「それでもお願いしマス……」

「その代わり必ず成功させろ……失敗すればここで全員朽ち果てる事となるぞ」

碎蜂は靈圧を高めていくと、左手には黄色い盾が出現し、両足にも鋭く尖つた足甲が装備された。

右腕には始解と卍解が合わさつたかのような巨大な針が現れ、背中には蜂紋華のような翅が展開された。

そして右手の針から赤い光線が放たれたが、それはバラガンへと当たる前に消滅していつてしまう。

「今更何をしようが無駄だとまだわからんようだな……」

碎蜂へと死の息が向かって行くが、それを回避しつつ赤い光線を放っていく。

それは当然バラガンへと届くことはないが、今は時間を稼ぎさえすればそれで良いのだ。

すると、死の息が碎蜂を取り囲むように立ち込め始めたが、自分の周囲にハニカム構造の結界を幾重に展開させると、強引に突破して脱出したのだった。

だが、そのまま結界を展開したままでは碎蜂にまで老いの能力が侵食しかねないため、すぐに結界を解除せざるを得なかった。

「おのれ小賢しい小蠅めが……!」

周囲を飛び回る碎蜂に苛立った様子のバラガンは、碎蜂を追いかける形で死の息を放ち続けて来たのだ。

黒いオーラが老いだとすると、灰色のオーラは回帰の能力だろう、それが交互に碎蜂へと襲いかかっていた。

そして冷静に機を見計らうハッチは、碎蜂が再び結界を出すタイミングで行動に出た。

その結界に老いの能力が侵食していった瞬間、その部分だけを空間転移で切り離したのである。

「無駄な足掻きを。時間……ツキ、貴様……ッ!? 儂に何をした……!!」

「そつくりそのまま、お返しまシタ」

バラガンは自らの体に何が起きたのか理解していなかったようだが、ようやく気がついたようだ。

そう、ハッチは碎蜂の結界の一部を、老いの力と共にバラガンの体内へと転送していたのである。

そうなれば、バラガン自身が老いの力を喰らう事になり、朽ち果てて行く事になるだろう。

「おのれ……小癩な真似を……！だが、儂には回帰させる力もあるという事を忘れているのか!？」

自ら喰らった老いの力を止めるために、逆の力をぶつけて相殺して見せたバラガンだった。

だが、それこそがハッチの狙いだったのだ。バラガンは老いの力を使っている時は回帰の力を使えず、その逆もまた然りなのである。

そして、その力が相殺しきるのはほんの一瞬だろうが、その一瞬さえあれば良かったのだ。

その一瞬だけは、両方の力が互いに相殺し合って意味を成さないからである。

「今です！碎蜂サン!!」

「分かっている……!」

すかさず碎蜂はその左手の盾をバラガン目掛けて射出すると、朽ちる事無くバラガンの体へと突き刺さり、巨大な蜂紋華がそこに出現した。

そして勢いよく突撃すると同時に、バラガンの胸元にある球体目掛けて巨大な針を突き刺した。

球体に盾の針の二撃が突き刺さった結果、二つ目の蜂紋華が出現すると同時に、赤い閃光がバラガンを覆いつくして行ったのだった。

空座町への侵攻が始まったんだが？③

第二十刃であるバラガンが死に、残りは第三十刃のハリベルと第一十刃であるスタークのみとなった。

スタークと戦っていたのは、仮面の軍勢である愛川羅武と鳳橋楼十郎の二人だが、圧倒的なまでの火力を誇るスタークに押し切られてしまっていたのだった。

だが、トドメが刺されようとしていた瞬間、京楽の奇襲によってスタークは背後から刺されることになってしまった。

「何だいその技……影の中に潜るなんて技、今まで隠してたつてのかわ……」

「影鬼……何も隠していたわけじゃないよ。花天狂骨がそういう気分じゃなかったってだけさ」

「……仕方ねえ。本当に本気を出さなきゃ、いよいよやられちまいそうだからな」

そう言った途端、それまで気だるそうな顔を保っていたスタークの雰囲気が変わった気がした。

そして急激に霊圧を上昇させ、青と黄緑の二色のオーラが全身から放ち始める。

「ロボス・ソリタリオ
孤高の狼」

そのオーラは胸部の孔と腹部へと収束していき、胸部の孔には青い球体が、そして腹部には孔が開くと同時に緑色の球体が姿を現した。

また、左目の眼帯にも青い霊子が炎の様に燃え上がっており、両手には拳銃が握られて、それぞれ銃口が二つある状態になっていた。

ゼロ・メトラン・エッター・クアドロベ
「四重無限装弾虚閃」

「そんなのつてアリアかい……ッ!?!」

スタークが銃を構えた次の瞬間には無数の虚閃が発射され、それが広範囲にわたって撃ち出されて京楽へと向かって来ていた。

それは銃が一丁だけだった時の倍、いや銃口が二つあるので四倍にも及ぶだろうか。すぐさま影鬼をつかって影の中に入り、そのままスタークの背後へと回り込んだが、それさえも読まれていたのだろう。スタークは即座に銃を後方に向けて構えていた。

「同じ手は通用しないぜ……!?!」

「だろうね……嶺鬼……!?!」

すると次の瞬間、先程まで存在していた京楽の姿が突如として消え去ってしまった。

一瞬にしてスタークの真上へと移動していた京楽は、花天狂骨を振りかぶりながら落下してくるところだった。

だが、瞬時に反応したスタークは両手の銃を構えて引き、無数の虚閃を放って迎撃し

て行く。

その虚閃に飲まれた京楽は、まるで蒸発するかのように消し飛ばされて消えてしまったように見えた。

「……手応えが無えな」

確かに京楽は消し飛んだが、まるで手ごたえと云うものが無かった。

例えるなら、幻を撃ち抜いたような感覚とでも言うべきだろうか、そこには実体というものが感じられなかったのである。

「影送り……君が見ていたのはボクじゃなくて残像だよ」

再び姿を現した京楽の姿は先ほどと変わっており、腹部には骸骨のような装飾が施され、背には桃色の帯が折り重なった様なものが翼の様に出現していた。

それ以外には変化は見られないが、明らかに何か別の力を解放している事は見て取れた。

「さつきみたいに不意を突けるとは思わねえこつたな……!」

「思つてなんかいないさ……不精独楽!」

花天狂骨を横薙ぎに振るうと、風圧と霊圧が渦を巻きながらスタークに向かって行く。それに対してスタークは銃を向けると、そこから虚閃を放ち出して迎え撃つたのだ。

た。

すると今度は横から帯が伸びて来て、それが腕に絡みついて拘束しようとするが、それも虚閃で消し飛ばしてしまう。

「小細工は通じねえって言ってるだろ……!」

「そうかい? 案外そうでも無いかも知れないよ……影鬼」

「また同じ技か……その手には乗らねえよ……!」

再び影の中へと消えていく京楽の姿を目にしたスタークは、先程と同じ要領で背後へ銃口を向けて虚閃を連射していく。

だが、その影から出てきたのは京楽ではなくて浮竹だった。

そしてその虚閃は双魚理に吸収されていき、そのまま返されてスタークを飲込んでしまった。もうのだった。

「グツ……! な、何であんたが出てくんだよ……!?!」

「あまり俺に無理をさせないでくれ……さつき体に穴を開けられたばかりなんだぞ……」

京楽が浮竹に無理をさせた理由は、京楽の卍解に備わっている能力が原因である。

その卍解は確かに強力な力を持っているが、味方をも巻き込んでしまうというものだった。

それ故、周囲に味方が多くいるこの状況では使う事が出来ないものだった為、こうして浮竹に出てもらっているのがあった。

「済まないね浮竹、だけど……こうでもしないと勝てそうにないからさ」

再び現れた浮竹の姿も変わっており、背にはしめ縄の様なものが見える。

浮竹の周りを二匹の魚が浮遊しているが、まるで影をそのまま投影したかのように黒一色となっていた。

そしてワンダーワイスの一撃によって開けられた風穴は、まるで影で塞いだかのように黒く染まっついていて見る事も出来なかつた程であった。

「済まない……卑怯と言われても仕方ないかもしれないが、勝たなければならない理由が俺達にはあるからな……」

(クソ……一人だけでも厄介だったつてのによ……!)

浮竹は双魚理を振り上げると、そこから影が地面を伝うようにして動き始め、更には無数の黒い手が這い出る様にしてスタークへと襲い掛かった。

それを虚閃で吹き飛ばして行つたが、次の瞬間には京楽が頭上から花天狂骨を振り下ろして来た。

咄嗟に躲す事が出来たのは偶然であり、紙一重でかわすことこそ出来たものの、頬を掠めて傷を作るほどのものであった。

(なんで……こんな強い奴等と戦わなきゃなんねえ……い)

心の中で吐き捨てるように言いながらも戦い続けるスタークだったが、徐々に攻撃が当たってしまい劣勢に陥っていた。

虚閃を放てば双魚理で返されてしまい、それに加えて二匹黒い魚が通った後には暫く影が残り、そこからも黒い手が現れたり斬撃が飛んで来たりと対処が難しくなってきた。来てしまっている。

その上一瞬でも京楽から目をそらせば、次の瞬間には斬撃が迫って来るのだから堪ったものではなかった。

スタークも片方の拳銃を霊子の剣と変えて応戦するも、二人の剣技に対抗するのは不可能に近く、防戦一方のまま追いつめられていったのであった。

「悪いけれど……今度こそお終いにさせて貰うよ」

「ク、クソ……ッ」

スタークの周りを桃色の帯が囲うようにして展開していくと、無数の影法師が現れて周囲を回る様に動き出す。

完全に取囲まれたしまったスタークは、周囲一帯を吹き飛ばすために虚閃を放つか選択肢は無かった。

だが、引き金を引く直前に胸元から刃が突き出てきて、背後を振り返って見ると京

楽が花天狂骨を突き刺しているのが見えた。

そしてその刃が引き抜かれると同時に血が噴出して行き、スタークはそのまま地面へと落下していくのだった。

バラガンとスタークが倒され、残る十刃はハリベルのみとなってしまう。

冬獅郎の能力も通用せず、一方的に攻撃を受けるばかりで全くと言っていいほどに太刀打ち出来ない状況であった。

だが、冬獅郎には二つほど切り札があり、そのうちの一つはまだ時間が来ていないので使用することが出来ない状態だ。

(残りの結晶が散るまでには時間があるか……なら、試した事もねえがもう一つの方をやるしかないさそうだな)

「二人共……下がっててくれ」

「ああん!? 何言つとんねんチビ助が! 一人で……」

「お前らを巻き込まない自信がねえんだ……頼む」

ひよ里とりサは互いに視線を合わせたが、冬獅郎の顔と声色で真剣さが伝わり、二人は何も言わずにその場から退避した。

二人が避難したことを確認すると、霊圧を高めていき一気に解放したのだった。

すると、二枚だった氷の羽が四枚に増えており、それと同時に氷の角が二本頭部に現れ、背後に浮かんでいる氷の結晶も赤く染まって周囲の温度も急激に下がり始めて行った。

「多少姿が変わったところで……私に勝てるとは思わない事だ」

「この状態は長く持ちそうもねえからな……すぐに決着をつけるぞ」

今現在の冬獅郎は、卍解とは異なる能力と卍解を併せた状態とも言えるだろう。

それ故体にとてつもない負担が掛かっている事は言うまでも無く、早々に決着をつけなければ危険な状態に陥ってしまう可能性もある。

「行くぞ……!」

冬獅郎は氷の翼を飛ばたかせると、自身の周囲から無数の氷柱状の氷を生成し始め、それらをハリベルに向けて飛ばしていった。

その氷柱は赤く染まってしまっており、ハリベルはそれを水へと変えてしまおうとしたが、それらは水になる事なくハリベルへと向かって来るのだった。

だが、すぐさま霊子の剣で全てを薙ぎ払ってしまうと、再び大量の氷柱を形成し始めた。

「互いの武器を自分の武器に変える事は出来なくなつたが……これで条件は同じって訳だ……」

「そうか……だが、その程度では私は倒せないぞ」

襲い掛かってくる氷柱を水刃と水弾で破壊していきながら距離を詰めていくも、冬獅郎は更に追撃を続けていった。

複数の氷槍を作りあげて射出するが、ハリベルも水槍を放って迎撃し、氷槍と水槍がぶつかり合うたびに水飛沫と氷片が飛び散っていく。

それが暫く続くも、冬獅郎はこのままでは埒が明かないと考え、距離を置きつつ次の一手を考え始めた。

しかしそれらを見ていた藍染は、何一つ表情変える事も無く冷静な口調で言うのだった。

「もういいよギン……終わりにしよう」

平子と戦っていた市丸は、その言葉を聞き取るなり戦闘を止めたので、その藍染の言葉に平子は怪訝な表情で反応を返す。

だが、そんな平子を無視してハリベルの方へと一瞬で向かって行ってしまうと、そのまま斬魄刀で一閃しようとした。

「それは何のつもりかな日番谷隊長。破面である彼女を庇うとは、一体何を考えているんだい？」

「てめえこそ何を考えてやがる。そいつはてめえの部下のはずだろうが……」

「な……………」これは一体……………!?何故……………藍染様が私を……………」

「もはや用済みだよ。苦勞して集めた十刃が……………それも更に力を与えたいうにも拘らず、私一人の足元にも及ばないとはね。その上敵である死神に庇われるとは、何とも情けないものだ」

まるで興味がないと言わんばかりの態度で答える藍染であり、その目線はハリベルを一切捉えていないようだった。

藍染にとって十刃などただの捨て駒に過ぎず、戦力として期待していたわけではなかったのは明らかだった。

藍染の強さを知っているハリベルからしてみても到底納得できるものではなく、このまま斬りかかってやりたいという気持ちはあったが、そんな事をすれば返り討ちにあつて死ぬだけだと思ひ留まったのである。

「何故……………私を庇ったのだ。あのまま私が斬られていれば、お前の利に繋がったものを……………」

「庇つたつもりはねえよ……………そんな決着は俺の望むところじゃ無かつただけだ。それよりも、戦う気が無くなつたんなら下がれ……………戦意のねえ奴を斬る程俺は落ちぶれちやいねえんだ」

「……………随分と甘い奴だ」

いきなりこんな事になって頭が混乱して思考も纏ないハリベルだったが、このまま此処にいても藍染に斬られるだけなので、仕方なく戦線から離脱する事にしたのだった。

三人の従属官の所へ向かったのだろうが、藍染は追う事もせずには佇んでいるだけであり、本当に何の興味も無いという事が伺えた。

「さあ、今度こそ始めようか。護廷十三隊の諸君……そして、不出来な破面もどき達」

白哉&劍八 v s ヤミー&卯ノ花 v s アルトウロ

一護が現世へと向かった後、虚圏では劍八と白哉がヤミーの相手をしていた。

その凄まじい巨体から繰り出される拳は重く、地面にクレーターを作り上げるほどの力を持っていた。

「馬鹿でけえ凶体しやがって、斬りごたえが有りそうな奴じゃねえか……？めー野晒ー」
そう言って劍八は始解をしようとしたが、斬魄刀に変化は見られずうんともすんとも言わなかった。

いつもの刃こぼれした斬魄刀がそこに有るだけであり、それを見た白哉が怪訝な表情で言った。

「よもやそのような虚言を吐くようになるとは……恥を知れ」

「ああん?! テメエ誰に口聞いてやがるツ?」

「なに俺を無視してやがんだクソ共があ!!」

ヤミーがそう叫ぶと同時に口から虚閃を放ち、辺り一面を薙ぎ払うように放出した。

威力自体は凄まじいが、狙いが大雑把過ぎて二人に命中することは無く、砂塵と瓦礫を巻き上げるだけに留まっていた。

「よくも始解が出来るなどと嘯けたものだ……その浅はかさには哀れみすら覚えるぞ」

「うるせエ野郎だな……この程度の野郎は始解なんざしねえでも斬れんだよ。まあ……てめえには荷が重いかもしれねえけどな」

「……面白い、荷が重いかどうか確かめてみるがいい」

「面白れえ……！テメエとは一遍やり合ってみたかつたぜ……！！」

目の前のヤミーを放つて戦いを始めてしまいうる二人だが、ヤミーの拳が降り下ろされて来るのが見えて動きを止める事となった。

そして白哉は千本桜を、剣八は斬魄刀をその拳目掛けて振るつていくと、ヤミーの右腕を吹き飛ばしてみせたのだった。

「痛えな……クソが……！！むかつく野郎共だ……！ゆるさねえ……絶対許さねええええええ！！」

そんな怒りの叫びをあげると、切断された腕が瞬時に再生していき、更にはその体格そのものが一回り大きくなったのだった。

ヤミーの帰刃は怒りを力にするものであり、それにより大幅に戦闘力が増す事になるのだ。

だが、そんな様子を傍目に見ていた白哉であったが、冷静に戦況を見極めていた。

「確かに力は増したようだな。だが的が大きくなった分攻撃しやすくなったただけだ」
「そういうこつた……いくぜえ！」

そう言うや否や、劍八は白哉の横を通り抜けるようにして飛び出して行った。

当然ヤミーは右腕を振り下ろすが、その手の上に乗って一気に駆け上がり、顔面に斬魄刀を叩きつけた。

それによって少しだけ体勢を崩したが、ヤミーはすぐさま左拳で劍八を殴り飛ばそうとした。

だがそこに千本桜が放たれて腕を弾いてしまい、そのまま劍八は真上から頭部目掛けて斬魄刀を振り下ろした。

「……随分と硬くなったじゃねえか。頭をかち割つてやるつもりで斬つたんだがなあ」
「体がデカくなっただけだとも思ってるのか？ そんな訳がねえだろうが!!」

ヤミーは山の様な巨体となった訳だが、当然大きくなっただけで終わりではない。

攻撃力は当然の事、鋼皮に關しても更に硬度を増した事で、並みの攻撃では傷一つかない身体になっていたのだった。

「んな事関係ねえ、斬れるまで斬れば良いだけの事だろうが」
「全く……単純な奴だ。兄の浅慮さには呆れ返るばかりだ」

再びヤミーは両腕を振り回して暴れまわり始め、その攻撃範囲はかなり広く、辺り一

帯が更地になってしまいそうなほどであった。

それを白哉は瞬歩を用いて回避しながら千本桜で反撃し続け、剣八は真正面からヤミーに挑んでいき斬魄刀を振るっている。

しかしその巨大な拳が剣八を弾き飛ばし、剣八は勢いよく吹き飛んで近くにあつた建物へと突っ込んでしまった。

その様子を一瞥する事もなくヤミーは暴れまわっていたが、瓦礫が幾つも飛んで来て邪魔になったので、腕を振るって叩き落とすのだった。

その瓦礫は剣八が蹴り飛ばしたものらしく、あの巨大な拳に殴り飛ばされたにもかかわらず、大したダメージを受けている様子はなかった。

「なんだそのパンチは……？ 殴るんならもっと本気でやれや」

「ふざけた事抜かしやがって……ぶっ殺してやらあ!!」

どうやら剣八からすれば大した威力ではなかったようで、平然として起き上がると挑発的な発言を行ってみせた。

その様子を見て憤慨したのか、虚閃を放って攻撃しようとしたヤミーだったが、その前に白哉が動いたのである。

「吭景・千本桜景敵」

ヤミーの頭部を千本桜の刃の花弁が覆い尽くし、全方位から一斉に襲いかかったの

だ。

それにより体は切り刻まれていくが、ヤミーは虚閃を放って刃の花弁を吹き飛ばしていった。

すると目の前に劍八の姿があつたため、咄嗟に拳を振り上げようとするが、勢いよく振り下ろされた斬魄刀によって地面へと叩きつけられたのだった。

一方で、アルトウロと対峙していた卯ノ花も激しい戦闘を繰り広げており、既に周囲には数えきれない程の斬撃による傷跡が残されていた。

そんな状況にもお構いなく二人は動き続けており、黒いエネルギーの刃と斬魄刀がぶつかり合う度に火花が飛び散っていた。

「重い一撃だな……だが、その程度では俺に傷を付ける事はできんぞ」

黒い刃から斬撃が繰り出されて行くが、卯ノ花はそれを全て弾き飛ばすか躲かしていった。

すると、アルトウロは響転で背後に移動して黒い刃を振るつたが、卯ノ花はそれを振り向くことなく斬魄刀で受け流し、体を回転させて袈裟斬りを放つ。

それに対してアルトウロは大きく跳躍することで距離を開け、その際に虚閃を放つことで卯ノ花を牽制していたのだ。

「成程、流石に隊長というだけはあるか」

「戦闘の最中にそのような事を口にするとは……余裕のつもりですか？」

その言葉通りに卯ノ花はまだまだ余裕がある様子を見せており、涼しい顔をしてその場に佇んでいた。

それに対しアルトウロは再び響転を使うと、四方から高速で斬撃を繰り出し始めたのだった。

それを確認した卯ノ花が斬魄刀を構え直し、冷静に見切っては受け止め流して捌いていた。

「成程……確かに速いですが、慣れてしまえばどうという事はありませんね」

「慣れただと……？ 貴様こそ余裕のつもりか」

そう言うと同時に更に速度を上げて攻撃を仕掛けるが、卯ノ花の反応速度も上昇しており、先ほどよりもより速く的確に防いで見せるのだった。

それどころかそのまま一閃して反撃し、アルトウロに傷を与えていた。

「死神風情が……小賢しい真似を」

ほんの僅かではあるが傷を負わされて苛立ちを覚えたのか、帯刀していた斬魄刀を引き抜くと、黒い刃との二刀流となって攻勢に転じていった。

手数が増えた事で更に動きが複雑になっていくが、それに比例するように卯ノ花の捌

きは速さを増していった。

そして次の瞬間には黒い刃を砕かれてしまい、その直後には体に斬撃を打ち込まれてしまった。

「ぐあッ……!? な、何だと……!?」

「中々に強固な刃でしたが……それにも慣れました」

「馬鹿な……ッ!? そんな理由で俺の刃は砕かれたというのか……?!」

それに加えて先程よりも深く斬られたせいか、白い衣服が血で赤く染まっていつてしまう。

アルトウ口は怒りを露にし、再び黒い刃を形成し直して地面を斬るかのように振り抜いていった。

するとそこから赤い光が立ち上っていき、次々と鋭い刃の形となって卯ノ花へと襲い掛かっていったが、それも全て砕かれて消えてしまうだけだった。

その後も連続して黒い刃を振るい、赤い刃を放っていくが、やはり卯ノ花は難なくそれらを弾き返して見せた。

「よもや刀劍解放までさせられることになるとは……還れ、不滅王……!」

斬魄刀を地面へと落下させると、その刀身が地面に触れた瞬間に炎が吹き上がってア

ルトウ口を包み込んだ。

そして炎の柱の中から出てくると、背にあった靈子の羽は赤く染まって二対四枚になつており、尾羽のような物が四本生えていたのだった。

手足は白い甲殻に覆われて鋭い爪が伸び、その甲殻の各所からは炎が吹き出していた。

「今度こそ貴様の最後だ……死ぬがいいッ！」

「成程……それが貴方の帰刃なのですね」

そう言った瞬間アルトウ口は一瞬にして間合いを詰め、鋭い爪を振り下ろしたが、それを斬魄刀で受け止めた卯ノ花はそのまま弾いた。

炎を纏った鋭い爪は何度も連続で繰り出されるが、それらを卯ノ花は悉く受け流す事に成功しているのだ。

だが、帰刃したアルトウ口の攻撃は一撃一撃が重くなつていつている上に、徐々に加速していった。

「何時まで持ちこたえられるか、見ものだな」

「ですが……これしきの事、想定範囲内です」

だが卯ノ花の方も攻撃を捌き続けるだけではなく、反撃を試みていた。

時には受け止め流しながらも隙を見つけて攻撃を行つており、その一瞬に放たれた連撃により、アルトウ口の胸から腹にかけて大きな傷がつけられていた。

だが、それは敢えて受けに行ったようにも見えた為、卯ノ花は怪訝な表情を浮かべている。

「今のはわざと受けましたね……一体何を考えているのですか？」

「なに、お前に俺の能力の一つを見せてやろうと思っただけ」

その大きな傷は瞬く間に癒えていき、元の状態に戻ってしまった。

破面は強大な力と引き換えに超再生能力を失うが、アルトウロもウルキオラ同様に超再生を有した破面だったという事である。

そして、パフォーマンズと言わんばかりに自らの腕を引き裂いて見せると、その傷も瞬く間に塞がってしまったのだった。

ようやく現世へと戻ってこれたんだが？

そして現世でワンダーワイスとの戦闘を行っている拳西は、激しい拳の応酬を繰り返していった。

不意打ちとは言え一撃で浮竹を倒したワンダーワイスの身体能力は高く、少しでも気を抜かすと一気に押し込まれてしまいそうな状態であった。

繰り返される拳を弾き返し、放たれた蹴り足を回避しつつ掌底や膝蹴りを叩きこんでいくが、全くとって良いほど有効打を与える事が出来ないでいた。

(ちっ……厄介な野郎だぜ)

内心で毒づきながら拳を突き出すと、それはあっさりと回避されてしまった上に、腕を掴んできて投げ飛ばされてしまったのだ。

空中で体勢を立て直して虚閃を放ったが、やはり虚閃は容易くかき消されてしまい、無傷のまま接近してきたのである。

「あああああああつ!!」

「ガキみてえに喚き散らしやがて！嘗めんじゃねえぞ!!」

ワンダーワイスは叫び声を上げながら殴り掛かるが、動作は単調だが速いために避け

辛さも尋常ではなかった。

だが拳西も只では捕まらず、体術を駆使して相手の動きを牽制し、相手の攻撃を掻い潜って一撃を食らわせるのだった。

「ああ………？」

「この野郎………そんな体勢でも殴ってきやがんのかよ………！」

攻撃を食らいつつも怯むことなく突っ込んでくるワンダーワイスの姿に、拳西は呆れを通り越して感心するくらいだった。

顔を殴りつけられたにもかかわらず、そのまま強引に殴り掛かってきており、その執念にも似た姿勢は不気味とさえ思えた。

なんとかカウンターの当てるものの、ただ一発一発を少しずつ与える程度しか出来ていなかった。

拳西の鐵拳断風は、刃が触れている場所に永遠と衝撃を与え続ける正解であり、殴るというよりは押し付ける事により真価を発揮するものだ。

だが、そうすんなりと決まる程ワンダーワイスは甘くはなく、その上多少のダメージはお構いなしで仕掛けて来るため、決定打を与えられない状況だった。

「ア………」

「チっ………！やり辛え野郎だな！」

一瞬動きを止めたかと思えば、大きく息を吐き出しながら首を傾ける仕草をするワンダーワイスだったが、その直後には再び殴りかかって来たのだ。

その速度は急激に上がり、力任せに突っ込んでまるで野生動物のように本能的な動きで攻撃を仕掛けてくるので、厄介としか言いようがなかった。

俊敏且つ柔軟に動き回り、的確に急所を狙ってきたり、死角からの攻撃が何度もあったりと非常に厄介な戦い方である。

拳西の動きに対応し始めており、その動きによつて生じた隙を突いて確実に攻撃を仕掛けてくる。

「そこだッ……!!」

攻撃の軌道を読み取り、腕を挿んで顔面を殴り付ける。その瞬間僅かに体制が崩れた隙に鐵拳断風を変形させた。

そしてそのままワンダーワイスの腹部へと押し付け、爆発するかのような衝撃を連続で与え続けていく。

その衝撃でワンダーワイスは建物を破壊しながら吹き飛んで行き、いくつかビルを貫通させていった後、壁にめり込んで動かなくなった。

砂埃が舞い散っている中、拳西すぐさま追撃の為に飛び出していき、渾身の力を込めた一撃を叩き込んだ。

「なに……ッ!? 受け止めやがっただと……!?」

「アハハア……」

だが、その渾身の一撃は刀剣解放をしたワンダーワイスの手によつて受け止められていた。

その手に鐵拳断風の衝撃が連続で叩きこまれていながらもかかわらず、ワンダーワイスは何事もないかのように受け止めていた。

そして力を込めて拳西の顔面へと拳を叩き込み、そのまま拳西の身体を地面に叩きつけ、蹴り飛ばしてみせたのだつた。

吹き飛ばされて行く拳西へと即座に距離を詰め、拳を振り下ろして来たので腕を掲げてガードを試みるも、そのまま地面へ叩き付けられてしまった。

「うぐおあッッ!?」この……野郎……ッ!」

地面を砕く程の凄まじい勢いで叩きつけられながらも、咄嗟に体勢を立て直し着地したが、そこにワンダーワイスが追い討ちを掛けんと迫り来ていたのである。

そして再び拳を振り上げて殴りかかり、避ける度に地面を粉碎して行くという無茶苦茶な攻めを繰り返していた。

(予備動作もねえ上に早すぎて動きが捉え切れねえ……!!)

今度は肩から触腕が飛び出して来て乱打を仕掛けてき、咄嗟の回避が間に合わずに無

数の打撃を受けてしまう。

そして最後には強烈な一撃を叩き込まれて吹き飛ばされてしまい、瓦礫の山の中へと埋まる事となったが、即座に瓦礫を吹き飛ばして脱出する。

何とか防衛はしたもののかなりのダメージを受けてしまい、ボロボロになりながらもなんとか立ち上がっていく。

(やべえな……こりゃ)

「あう……？」

一度仮面を付け直して体勢を整えたが、ワンダーワイスは追撃してくることなく明後日の方向を見て立ち止まっていた。

そして、次の瞬間には何処かへと飛び去ってしまったのだった。

そして、一護とバンビエッタは黒腔を通って現世へと戻っている途中であった。

二人は勇音による霊圧の回復治療を受けながら移動しており、藍染の鏡花水月についての説明を聞いていた。

現状鏡花水月の始解の間を見ている者で藍染に対抗できそうな人物は、一護とバンビエッタの二人しかいないのである。

また、バンビエッタは鏡花水月の完全催眠が発動する前からその刀身に触れておけ

ば、その能力から逃れられるという事も知っていた。

しかしそれを知っていたところで、すんなりと刀身に手を触れさせてくれる程藍染は甘くもないのだ。

「そろそろ現世ね……準備は良い？一護」

「わかってるさ……いつでも行けるぜ」

そして現世へと飛び出ると、藍染の背後へと出ると同時に一護は月牙天衝を放つていく。

しかし、その攻撃は『ミジョン・エスクード』と言う、百万層からなる盾で容易く防がれてしまう。

背後から首筋を狙った斬撃に対しても振り向くことなく対応し、軽々と弾いてしまったのだった。

「そんな所に何の防衛も施さずに戦いに臨むと思うかい？」

ここまでは予想通りの流れであり、続けてバンビエツタが攻撃に移ると凄まじいほどの閃光の奔流が愛染を飲み込んだ。

神聖星盾を六個全て展開しての砲撃であり、桁外れの破壊力を有しているであろう事が容易に想像できたが、それでも尚藍染は無傷で佇んでおり、相変わらず余裕の笑みを浮かべていた。

「それも予想できていたよ……彼の攻撃が私に通じなかった場合、第二撃は君が撃つてくるとね」

「……どつちも通じると思っっちゃいなかったけど、まさか傷一つ付いてないなんてね」

一護は虚化した上で月牙天衝を放っていたが、それでも結果は変わらなかったのだ。

現状の一護は原作よりも強くなっているはずなのだが、それでも盾を貫くことができなかった。

バンビエツタも此処で倒せるとは思っていなかったが、実際に目の当たりにするとその差を感じさせられてしまうのであった。

「二つ聞くが……君達は一体何のために戦っているんだい？ 井上織姫も無事に助け出せたのなら、私を憎む理由など何処にもないと思うが」

「ごちゃごちゃうっさいわねえ……アンタ、自分が空座町を消し去るって言つたの忘れてんの？」

「そうだ……テメエが俺の故郷を……皆が住む町を消し去るってんなら、俺にはテメエを倒す理由がある」

何も織姫救出のために虚圏へと向かった雨竜や泰虎だけが仲間と言う訳ではない。

学友だっているし家族だっている。そんな彼等をこの町ごと消し去るといふのだから、一護としては十分に戦うに値するだけの理由はある。

二人とも決して気を抜いてはいないが、藍染に大技が通用しなかった今、どうやって対処するか考えていたところだったのである。

そんな中、次々と死神達が集結し始めたのである。各隊長らや仮面の軍勢が駆けつけてきてくれたのだ。

とは言えど、誰一人として藍染に手も足も出ずに負けるどころか、冬獅郎に至っては鏡花水月の完全催眠によって雛森を刺してしまう事になる。

それだけは避けたいので、バンビエッタは自分も援護に向かうべきと判断したが、それよりも先に動き出した者がいた。

「要、彼女の事は任せたまよ」

「了解です、藍染様」

藍染の指示でバンビエッタの元に現れたのは、刀剣解放をした東仙であった。

しかし、その姿は原作とは全く違った姿であり、蠅のような不気味な姿ではなくなっているのだった。

そして、両手と後頸部には卍解である『清虫終式・閻魔蟋蟀』を発動させたときの円環が九個浮かんでおり、頭部には白い角が二本生えていた。

何よりも顔が死神の時のそれと全く変わっておらず、全体的に洗練された外見へと変わっていたのである。

「アンタ……何で生きてんのよ」

「おかしな事を言うな。まるで私が死んでいなければおかしいと言った口ぶりじゃないか」

それもそのはず、本来東仙は檜佐木と狛村と戦って倒され、藍染によつて殺されていなければおかしい存在であつた。

しかし何故かこうして生きており、その姿までもが変わつていたのである。

(まあ、十刃も違う姿に帰刃したんだし……今更驚く事じゃないけど)

心の中でそんな事を思いながらも、檜佐木と狛村はどうなつてしまつたのかが氣になつたため、二人の安否を確かめようとした。

よく見れば遠くの方で倒れ伏している二人の姿があり、両者血塗れのまま微動だにしていなかつたのであつた。

またもや東仙と戦う事になったんだが？

檜佐木と狛村の二人は血まみれの状態で倒れ伏してはいたが、今現在勇音が治療中であり死んではない状態であった。

それに加えてギンに真つ二つにされてしまったひよ里の治療も行っているので、凄まじい集中が必要な状況と言う訳である。

とは言えど、原作とは違ってハッチが片手を失っていないなかったので、彼も治療に参加する事が出来た。

「お前と戦うのはこれで二度目か……あの時の様に行くとは思わない事だな」
「アンタに構ってられる程暇じゃないの。さっさと終わらせて、藍染の方に向かわせてもらおうわ」

先に動き出したのは東仙であり、円環を六個同時に射出していった。

そして放たれた円環はそれぞれが意思を持っているかのように宙を舞い、バンビエッタに向かって緑色の光線を放って行った。

それに対してバンビエッタも神聖星盾を三つ展開し、その光線を防いでみせるのだった。

相手の円環も自動で動くタイプのようであり、バンビエッタの神聖星盾と同タイプの能力のようだ。

「まさかお前も同じような能力を使うとはな。だが、私の方が数は上だぞ」

「そんなの見ればわかるつてのよ。数が上だからつていい気になってたら痛い目みるわよー！」

バンビエッタは自らの周囲を飛び回る円環の攻撃を神聖星盾で防ぎつつ、反撃とばかりに熱線を連続で発射していく。

それはまさに連射力を重視した射撃であったが、東仙は飛び回りながら回避を行ってみせ、お返しと言わんばかりに斬撃を飛ばして見せたのだ。

高速で飛来する斬撃を刀で弾き飛ばしていき、今度はバンビエッタが斬撃を放って行く。

すると残り三つの円環が東仙の前に並び立ち、緑色の光輪を放って斬撃を相殺してしまつたのである。

「言つただろう……以前と同じような結果になると思うなとな」

「なら……その程度防いだくらいでいい気にならない事ね！」

「そうか。ならば……行け！」

その言葉に反応するかのよう、六つの円環は複雑な軌道を描き始め、四方八方から

光線を放って来た。

バンビエツタは避けながら雷球をばら撒いていくと、円環に当たった雷球は雷撃をまき散らして爆発したのである。

その爆発は次々と連鎖していき、相手の円環を巻き込んで幾つか破壊する事が出来たのだったが、再び東仙の周囲に円環が出現してまたもや九に戻ってしまったのであった。

「これも言ったハズだ、数が違うとな」

「だったらまた破壊してやるだけよ！」

再び攻撃を開始した東仙は九個の円環を自らの周りに展開させ、黒い霊子の弾丸を連射しながら接近してきたのだ。

それに対し、バンビエツタは三つの霊子の剣を周囲に展開し、それで迎撃を行うことにした。

次々に弾かれる黒い霊子を剣と刀で弾き、東仙の円環は神聖星盾で対応し、激しい撃ち合いが行われていた。

光線や熱線や雷撃が飛び交って行き、弾幕が幾重にも交差して行っていたのである。

すると、九個の円環が一気に爆発して碎け散り、爆炎をまき散らして視界を遮ることになった。

咄嗟に神聖星盾を戻して構え直したが、爆炎が消えるころにはバンビエッタの四方八方に円環が展開した後だった。

「これで死ぬが良い！ 怨ヌウエベ・レンコル・レシヨナル響 九 臨!!」

「やば……ッ!?!」

東仙の声と共に周囲の円環から緑色の光輪が放たれ、一斉に襲いかかってきた。

音波を伴って迫ってきた光輪に対して神聖星盾で結界を張り、なんとか直撃を避けて見せたが、神聖星盾は碎け散ってしまった。

しかし強烈な音波はそのままバンビエッタの体を打ち付けていき、耳から血を溢れさせて悶絶してしまう。

少しふらついたものの、すぐに神聖星盾を再配置して体勢を立て直す、何者かが叫び声と共に此方へ向かってくるのが見えた。

「東仙！ 儂は……儂はまだ死んではおらんぞ!!」

「狛村か……今更その死にかけの体で何をしに来た？」

先ほどまで勇音の治療を受けていたはずの狛村だったが、完治する前に強引に戦場に復帰しようとしたのだろう。

ポロポロの体に鞭打って、血を流しながらも此処に来たのだろうが、その姿はいつもと違って毛が赤く変色していた。

血で染まったような赤ではなく、まるで炎のような緋色をしており、手や肩に黒縄天譴明王の鎧が装着されていた。

そして背中には黒い縄が結び付けられて固定されており、さながら狛村自身が天譴と化したかのようだ。

「あ、あんた何考えてんの!? そんな状態で戦ったら死んじゃうわよ!」

「それは承知しておる……だが、東仙は儂が倒さねばならんだ……!」

「呆れたものだな。一度負けた身でありながらも私を倒そうなどと言うのか? 既に死に体だというのに」

流石の東仙もこれには呆れかえってしまい、明らかに馬鹿を見る目で狛村を見つめていた。

そんな目を向けられているにも関わらず、当の狛村は闘志を失ってはいなかった。それどころか、怒りすらも燃え滾っている様子すら見受けられる。

最早執念と言ってもいい程の強い意志を持った狛村に、東仙は大きく溜め息を吐いて見せるのであった。

「分かった分かった……! ただし、あたしも一緒ってのが条件よ。それ以上は譲歩できないからね」

「済まぬ……儂の我儘に付き合わせる形になってしまつて……!」

苦渋の選択ではあったが、どうしても譲れない点もあり、渋々ながらも狛村の言い分を飲む事にしたのだ。

正直言つて無理をさせたくないのが本音だったが、この状態じゃ何を言つても聞いてくれそうにもないと思い、仕方なく折れたという方が正しいのかもしれない。

(狛村の攻撃力の高さは分かつてるし……私が東仙の攻撃を防ぎながら道を拓いた方が良さそうね)

今の姿の狛村がどれほどの攻撃力を有しているのかは分からないが、少なくとも正解並みと考えておいていいだろう。

とにかく今は戦闘に集中するべきであり、東仙の円環は全て神聖星盾で対応する事にした。

先程は油断をしたバンビエッタだが、今度こそは気を引き締めると東仙の方に視線を向ける。

「さつさとかかつてきなさいよ、それとも……まさか怖じ気付いたの？」
「威勢がいいな……ならば望み通りに灰燼としてやろう」

その言葉と同時に、東仙は九つの円環を一気に射出し、それらが回転しながらも様々な角度から襲いかかるのである。

それを神聖星盾で弾き返し、霊子の剣を振るい確実に斬り裂いていき、それに加えて

熱線と雷撃を放ちながら攻撃を仕掛けた。

それに対して東仙もまた、斬撃や弾丸を乱射することで応戦してくが、狛村はそれを斬魄刀で弾き飛ばしながら距離を詰めて行った。

凄まじい剣圧は風切り音を轟かせ、更には黒縄天譴明王の巨大な手だけを召喚し、東仙目掛けて振り下ろした。

「無駄だという事が分からないのか？」 ロス・ヌウェベ、ラスベベクス
「九相輪殺」

東仙の手から鈴のような音が鳴ったと思うと、凄まじい音波が降り下ろされた腕を吹き飛ばして見せた。

だがその時には東仙の周囲を神聖星盾が展開しており、結界が張られて東仙を閉じ込めていった。

当然東仙は結界を破壊すべく攻撃を叩き込もうとしたが、その瞬間にはどういう訳か結界が解除されて無くなってしまったのだ。

そして、気が付いた時には全ての円環が破壊されており、再び円環を出そうとした時には狛村が斬魄刀を振るって来ており、咄嗟に刃先を掴んで防いだ。

しかし、凄まじい剣圧と膂力によって押し潰されそうになっていた。

「ば、馬鹿な……何だこの力は!? 先程とは……比べ物にならん……!」

「儂はもう迷わん……!! 貴公を止める為……儂は貴公を斬るぞ東仙!!」

「狛村は更に力を入れた瞬間、斬魄刀から炎のような霊圧が噴き出し、東仙をそのまま閃かせてしまう。」

胸を深く切られた東仙はそのまま落下して行き、鮮血をまき散らしながら地面へと落下したのだった。

最早東仙は戦えないであろう事を確信していたバンビエツタは、能力を解除した狛村と共に東仙へと近づいて行く。

「こ、狛村……私……は」

「喋るな東仙……言わずとも分かっている……」

「……あたしは皆の方へ行くから、別れはちゃんと済ませなさいよ？」

やがて、治療中だったはずの檜佐木までもが東仙の下に近寄ってきており、ゆっくと屈みこんで肩に触れていた。

そしてバンビエツタは他の面々が戦っている方向へと向かって行き、その場に残された三人の間を静かな時間が流れていく。

だがしかし、その後は原作通りに東仙は藍染の手によって完全なトドメをされてしまい、東仙の体が吹き飛んだのを目前に見て狛村は叫んだ。

もつともその死は、東仙自身が望んだ事だったのだが。

そろそろ終わりが見えて来たんだが？

藍染の方へと向かおうとしたバンビエツタではあったが、あの強烈な音波を伴う攻撃を喰らった際に、三半規管を痛めてしまったようだった。

何とか足を動かかそうとするが、少し平衡感覚がおかしくなっているようであり、フラフラとした足取りになってしまっていた。

そんな状態のままでは戦いにならないし、ましてやあの藍染が相手となれば尚の事なので、一旦勇音の治療を受ける事にする。

そして、治療の最中で抜け出した狛村も酷いものであり、その上東仙と戦ったのだから傷が悪化するのも当たり前だろう。

(耳が痛い……ちよつと油断しすぎたかも……)

東仙と戦い、そして治療を受けている間にも戦局は動いていたようで、総隊長がワンダーワイスを撃破しようだ。

それはつまり、総隊長も戦闘不能に追い込まれてしまっていると言うことでもあり、そろそろ決着が近いという事を示してた。

(予想してない事が起きても困るし……そろそろ行った方が良いかも……)

「あ、ちよつと！まだ治療の途中なんですけど！」

勇音の制止も聞かずに立ち上がり、そのまま勢いよく飛び上がって向かった先は藍染の方であった。

藍染は今一護と交戦中であるが、不意打ちの一撃以外は全てが通用しない状態であり、その一撃も崩玉と融合し始めた愛染にとつては些細な事では無かった。

「君が来たという事は……要は足止めに失敗したという事か」

「十分足止めされたつたのよ……知ってるくせによく言えたものね」

藍染が東仙を殺した理由は「もし死神に対する憎しみが薄れてしまった場合、その時は殺して欲しい」と頼んでいたからだ。

つまり殺したというよりは介錯に近く、長年付き従ってくれていた部下への情けと言った方が良いのかも知れない。

「やはり君は面白い……君のお陰で、彼は私の予想以上に成長してくれた」

「……な、何言ってるんだよ」

突然指をさされた一護は少し動揺してしまい、それでも刀を下ろして隙を見せないようにする。しかし、内心はそのことでもかなり焦つてもいた。

ルキアとの出会い、大虚との戦い、死神の副隊長や隊長との戦い、そして破面達との戦い。それらの経験と得てきたことの力の全てが、藍染の掌の上と言われてしまえば、

もはや何を言えいいのかすら分からなくなってしまう。

一護は藍染の探求に於ける最良の実験道具として扱われていたにすぎず、今までの勝利の全てが藍染の思惑通りでしかなかったなどと言われれば、例え事実だとしても受け入れることなど出来るはずも無かった。

「BB……いや、バンビエツタ・バスターバインだったか……君の存在は想定外だったが、それでも私にとっては些細な誤差でしかない」

「あなたの探求なんてどうでもいいってのよ、自分と同じ目線に立てる者がいなくて拗らせたポッチ野郎のクセに」

「一つ、気になる事がある。もしかして君は何らかの方法で未来を知る事ができるのではないか？それに、君も黒崎一護が特別であることを知っているように見受けられるが」

「そこまで見抜いているか、それともカマをかけただけなのかは不明だが、どちらにしても厄介な話であることに変わりはない」

「未来を知る事ができるという部分は間違っているが、これから起きる出来事を知っているとと言う点では当たっている部分もある」

「おっと……おしゃべりはそこまでだぜ藍染」

「お、親父……か？なんで……こんな所に……」

突然現れた一心に、一護は驚愕の表情のまま固まってしまった。まさかこんな所に來るとは思つても見なかつたのだろう。

何故死神の格好をしているのか、そもそもどうやってここまでやって來たのか等の疑問はあつたものの、それを口に出す前に一護は何処かに連れていかれてしまった。

「君は行かなくても良いのかな？」

「他人の家の事情に首突つ込むほど野次馬根性はないわ」

藍染には何かをする気配はなく、ただ一護を連れて行つてしまった一心を見ているだけで何もしなかつた。

勿論何かされても対処できるように身構えてはいたが、それでも何もないことが逆に不気味だった。だからこそ警戒したままジツと動かずに見つめていただけであつた。

「君は本当に色んな事を知つている……いや、知り過ぎていると言ふべきか。一体どんな秘密を持つてるのか、是非とも聞きたいところではあるが……」

「生憎と、あんたに話すような事は何も無いわ」

それきり会話が途絶えたが、しばらくすると傍觀するだけで特に何もしなかつた市丸が現れ、藍染の隣に立ち並んだ。

そして一護と一心も再びこの場に戻つてくると、再び藍染に対峙して見せ、一護は天墜穿月を構えて臨戦態勢に入つていく。

対する藍染は特に何をするわけでもなく、まるでこれから起こる戦いさえも自分の計算に入っているかのような態度であり、それだけ余裕を持っているのだろう。

「市丸はあたしが引き受けるわ……！」

完聖体を発動させると同時に市丸へと向って行き、刀を振り下ろしてたが、市丸は斬魄刀で受け止めて鏝迫り合いとなった。

そしてそのまま押し込んで飛んで行き、藍染から距離を取らせたのである。

「なんや……君がボクの相手なん？」

「まあ……そんな感じになるのかしらねっ!!」

市丸を藍染から離れた理由は倒すためではなく、寧ろ助ける為と言っても過言ではなかった。それはもちろん、この後の事も考えた上での行動だ。

藍染に殺される事になる前に、何とか阻止できないかと考えた結果なのである。

「君と戦う事になるなんて……こら本気でやらへんとあかんなあ。卍解『神殺鎗』」

その言葉と同時に凄まじい速度で刀が伸長し、周囲一帯を斬りはらうほどの勢いで襲ってきたのである。

当然バンビエツタには市丸の卍解が何なのか知っているので、既に自らの周囲に神聖星盾の結界を張っているのが容易く防御できるのだ。

確かに神殺鎗の伸縮速度は文字通り目に追えぬほどだが、知っていればこうして防げ

る訳である。

「なんや、ボクが斬りかかる前に防御するなんて……まるで知っておつたみたいやねえ……？」

「知ってるわよ……あんたが何を思つて藍染の下に居るのかもね」

「……ほんまに何者なんや。気味が悪いとは思つとつたけど、どこまで知つてんのか怖なつてきたわ」

すると、市丸は神殺鎗を胸元で構えるという独特な姿勢をとるが、あれは神殺鎗・舞踏の構えを取つたということだろう。

それは伸縮速度を最大限に活かした神速の突きを放てるというものだが、神聖星盾がある限り防ぐことは可能であろう。

「なんで攻撃してこうへんの？ やっぱり何考えてんのか分からへんわあ」

「そつちこそ、一人で抱え込んでどうするつもりなのよ？」

「……何のことやろか？」

バンビエツタの言葉に一瞬ピクリと反応したように見えたが、結局そのまま無言で見つめ合う形となつてしまい、どちらも動く事はなかった。

彼女にとつて市丸は敵と言う認識ではないので、そもそも戦うつもりがないのだから。

だが、市丸としては彼女が何をしたいのか何を考えているのかが分からず、何時までたっても攻撃してこない事に感していたのだろう。

「ま、あんたが鏡花水月の完全催眠から逃れる方法を誰にも言わないのも、何となく分かる気はするけどね」

「何でそんな事まで知つとるん……ボク以外誰も知らん事を……いや、それを知った程度で藍染隊長に勝てるでも思ってるん？」

「勝てるかどうかじゃなくて……勝つて言ってるのよ」

「アホらし……これ以上君と話しても無駄……」

「あんたが藍染の下についてる理由は、松本乱菊の為つてことぐらい分かつてるのよ」

その瞬間、市丸は完全に動きを止めてしまっており、同時にそれが凶星であることを物語っていたのだった。

そしてその動きを止めた僅かな間にバンビエツタは懐に入り込み、霊子の球を打ち出ししていた。

それはピカロやアルトウロを一時的に閉じ込めていた霊子の檻の応用であり、その霊子の球は鎖となって市丸を締め付けるかのように縛り付けていく。

霊子の檻と違って結界用の杭を使い捨てずとも発動できるが、檻程長時間の拘束は出来ないが、それでも時間を稼ぐという点においては十分効果的であった。

「あんたが死んだら松本は悲しむでしょうね、だからあんたはこのまま大人しくしてな
きゃ」

「……」

無言のまま抵抗もしなければ逃げもしない市丸を見て、バンビエツタは少し違和感を
感じた。

だが、拘束を解く素振りが一向に見えないからこれで良いのだろうと考えを改め、一
護達の所へ加勢に向かったのであった。

「どこまでお見通しなん……けど、それを信じられる程ボクは純粹や無いんよ……」

いよいよ藍染と戦うんだが？

バンビエツタが一護達の下へ向かった時には既に浦原と夜一が到着した後であり、藍染は更に崩玉との融合が進んだ姿になっていた。

既に夜一や浦原、そして一心と一護の攻撃を何度も受けているようだが、それでも平然としており、大したダメージにもなっていないかった。

「随分と早いな……君はギンと戦っていると思っただが」

「動き封じて置いてきたわよ、何か文句あるわけ？」

「まあいい……今更君一人加わったところで何一つ変わらない。さあ、早く次の手を打つがいい。私はその悉くを微に打ち砕いてみせようじゃないか」

（ああああ〜！正直こんな奴と戦いたくないわ！）

バンビエツタは内心でそんな事を思い始めていたが、それを表情に出すわけにもいかに必死に耐えるしかない。

後は放っておいても一護が無月となつて藍染を倒してくれる流れだが、万が一の可能性を考えていたら何もしないわけにはいかないだろう。

一先ず、神聖星盾を放つて様子をしばらく伺うことにしたが、神聖星盾から放たれる

神聖滅矢は全て斬られてしまい、あつという間に神聖星盾も砕かれていってしまった。

「いや……マイったつスねえ……せつかく完成させた血装鉄甲も、簡単にボロボロにされてしまいましたし」

「それはお主の作り込みが甘かったせいじゃ。儂のせいではない」

「馬鹿やってないで藍染の方に集中しなさいよ、来るわ!」

次の瞬間、今まで以上に素早い動きで迫ってきたが、夜一ですら目で追えぬほどに早い動きであった。

何とか神聖星盾を再展開し、それを夜一の前に出して受け止めたものの、神聖星盾も血装鉄甲も破壊されて破られてしまったのだった。

「大丈夫っすか……?」

「BBの盾のお陰でな……決してお主の鉄甲のお陰ではないぞ?」

「中々に丈夫な盾だったが、所詮はその程度だったという訳だ。何度も再展開できるのだろうか、果たして何度耐えられるかな?」

強力な技ならばともかく、只斬魄刀を振るっただけで打ち砕いてくるというのは、あまりにも反則じみているとしか言えなかった。

そして現在そんな藍染が警戒をしているのは二人。尸魂界に於いて随一の頭脳を持つ浦原と、彼にとって未知の存在であるバンビエッタである。

「BBサン……行けますか？」

「仕方ないわね……何時でもいいわ。一護、アンタも行けるわよね？」

「ああ、こっちは問題ねえよ」

そう言うのと、浦原は破道の三十三である『黄火閃』を放っていた。

たかだか三十番台の破道が藍染に通じるはずもなく、いとも簡単に弾き返されてしまうものの、目くらましの為に放つただけなので気にはしていない様子であった。

その目くらましを合図に、次の瞬間には藍染の背後から夜一が殴りかかっている、完全に不意打ちと言える一撃となっていた。

「瞬間」

拳が直撃して藍染は地面へと叩き付けられて土煙が舞っていくが、この程度で藍染が倒されるなどあるわけがなかった。

そこに一護が無数の矢を連射していって少しでも足止めをし、絡繰りの手を展開させていた浦原が無数の赤い糸で藍染を捕縛したのだ。

「縛り紅姫」

「この程度で私を捕まえ……」

「まだまだだつての!!」

当然捕縛して終わりのない訳もなく、バンビエッタが藍染の周囲に無数の霊子の剣を放つ

ていき、それらが地面に刺さっていく。

そして浦原が斬魄刀を赤い糸へと突き刺し『火遊紅姫・数珠繫』を放ったところで、霊子の剣と赤い糸が爆発し、辺り一面を吹き飛ばしていった。

「笑わせるな……この程度の……」

「月牙……天衝!!」

爆炎が巻き上がる中でも多少のダメージか負っていない藍染であつたが、既に一心が剡月を、一護が刀状態の天墜穿月を構えている状態になつていた。

そして二人同時に月牙天衝を放つと、巨大な霊圧の斬撃が藍染を呑み込んでいく。

そして二人はそのまま瞬歩で離脱すると、次の瞬間にはバンビエッタの神聖星盾を六枚展開させた砲撃が放たれる。

今回の弾丸は只の霊子の弾ではなく、炎と雷の属性を混ぜた複合砲撃であり、凄まじい閃光と共に放たれたものだった。

「……どうつスかねえ」

「分からん……藍染がああ姿になつてから、霊圧を感じ取れなくなつたからな」

爆炎の勢いは未だ衰えておらず、周囲は視界すらままならない状況であるが、一護とバンビエッタだけは藍染の霊圧を感じ取れており、健在であることが確認できていた。

ゆつくりと爆炎の中から出て来る藍染は、その外殻こそひび割れているが、何事もな

かったかのようにその場に立っているのである。

「良い一撃だったよ……だが、今の攻撃も理解した。そろそろ……私の力も理解してもらうとしよう」

そして、次の瞬間には全員まとめて吹き飛ばされて地面を転がってしまっており、あまりの威力に立ち上がることすらできなくなっていたのだ。

辛うじて意識を保っている状態でなんとか動こうとするが、立ち上がることも出来ずに倒れ伏すだけであった。

すると、そこに拘束していたはずの市丸が現れ、バンビエッタは内心焦ってしまふ。

（あの鎖をどうやって……こんな短時間で壊せるほど柔じゃなかったはずだけど……）

「ギンか……遅かったじゃないか。今まで何をしていた？」

「いや、彼女に鎖で捕まってしましまして、抜け出すのに手間取ってたんですわ」

「そうか……穿回門を開け。尸魂界の空座町に侵攻する」

「ま、待ちやがれ……藍染……！」

かろうじて意識を保っていた一護がそう叫ぶが、彼はそれに返事をする事もなくその場から立ち去り、市丸はバンビエッタの方を見ていたが、その表情は申し訳なさそうなものであった。

バンビエッタとしては「そんな顔をするくらいなら鎖を壊すな」と言っただけだった。

だが、最早口が動くような気力さえ残っていないなかったために何も言うことはできなかったのだった。

そして穿回門を通っていく藍染を只見送る事しか出来ず、バンビエツタはそのまま意識を手放していくのだった。

穿回門を通り、市丸と藍染は空座町へとやってきていた。

この尸魂界の外れに転送された空座町には、大勢の一般人が眠った状態で倒れているが、藍染は一護の更なる成長を促すために彼の友人らを殺そうと考えた。

そして、市丸にとって何よりも大事な存在である松本が来てしまった事が厄介でもあったのだ。

今彼女一人来たところで藍染には敵わず、彼の気まぐれで殺されかねないので、それだけは阻止しなくてはいけない。

なので市丸は強引に彼女を連れて藍染から離れて行った。

そして……

「ただいま戻りました。藍染隊長」

「戻ったか……彼女はどうした？」

「殺しました」

そんなのは当然嘘であるが、白伏で気絶させてしまえば例え霊圧を探られて生死を確認されても、霊圧が消えているので死んだように思われるからだ。

そして今現在、そんな藍染の前には一護の友人らが逃げるために必死で走っており、藍染はそんな彼らを殺すために斬魄刀を構えたのだった。

「さて、そろそろ彼等を殺し……王鍵の創生に取り掛かるうか」

「ええやないですか。あの子ら殺すんは……ボクがやります」

藍染手に握られた斬魄刀、鏡花水月に手を添えて市丸はそう言ったのだ。

鏡花水月の刀身に触れていれば完全催眠の能力からは逃れられる、後は神殺鎗の能力で藍染を殺すだけ。

神殺鎗の刃の内側には細胞を溶かしつくす猛毒が仕込まれており、神殺鎗の刃は藍染の胸を貫いた時、その刀身の欠片を体内へと残していった。

「ころせ死せ、神殺鎗」

「ギン……貴様……!」

そして市丸の解号と共に藍染の胸に巨大な孔が開き、そのまま倒れて動かなくなってしまうた。

だが、市丸が藍染を殺すには手遅れだったのか、爆発的な霊圧の高まりと共に胸に開いた穴が塞がっていくのだ。

藍染の背中には白くて不気味な翅が複数生えていき、次の瞬間には市丸は斬られて血を噴き出しながら倒れてしまった。

「ありがとう、ギン……君のお陰で私は更なる高みへと昇れた」

(ああ……結局……乱菊の取られたもん……取り返されへんかった……)

傷口から止めどなく血が溢れて止まらない中、市丸はそんな事を考えていた。そんな市丸の目に映っているのは、意識を取り戻した乱菊が彼の名を叫んでいる姿だ。

そしてもう一つ、勢いよく藍染の前へと飛来し、着地と同時に藍染を睨みつけている一護の姿だった。この短期間で何をしてきたのか不明だが、その力強い目を見て、彼ならば藍染を倒せると信じられた。

(あの子の言う事……聞いたとくんやったな……そしたらもつと……違う結果になってたんやろか……ああ、彼女が滅却師やなくて……死神で……もう少し……ボクら……の……)

市丸の意識が途絶した後、すぐに安全な場所に運ばれて治療が為される事になったが、彼が目覚める様な事は無かったという。

白哉&劍八 v s ヤミー&卯ノ花 v s アルトウロ②

劍八の一撃によって、その山のような巨体を地面へと叩きつけられたヤミーではあったが、更に怒りに火がついたようだった。

更に破壊力や硬度が上昇するだけでなく、体格自体も一回り大きくなっていた。

「イライラするぜえ……クソ野郎共がよお……ブツ殺す！絶対につぶつ殺してやる！！
メエ等は絶対につぶつ殺す！！」

「上等じゃねえか……来いよ！！」

「まるで意思の通じぬ獣が二匹いるようだな……」

白哉はそう呟くが、卍解状態の千本桜の刃を全て顔面に受けても、多少の傷しか付かないような化け物じみた肉体を持っているのである。

ただ頑丈なだけであればまだマシだったが、放つ虚閃は凄まじい破壊力を誇り、その拳一つにしても非常に危険な攻撃力を有する存在となっていた。

劍八はその攻撃をよけながら斬りつけて行くが、表面が切れる程度であり大したダメージにはなっていないようであった。

「兄は退いているがいい、巻き込まれて死なれては後味が悪いのでな」

「んだと？俺がテメエの攻撃で死ぬって言いてえのか？」

相変わらず剣八と白哉の口喧嘩が始まるが、白哉はその間も千本桜による攻撃を行い続けていた。

やがて千本桜の花びらが全て刀の形へと変える『殲景・千本桜景嚴』を発動させると、その全てをヤミーの周りに配置して行く。

「奥義・一咬千刃花」

そして、千本もの刀による一斉攻撃が容赦なく襲いかかり、ヤミーの体を切り刻んで行った。

だがそれでも余り効果はないようであり、多少傷つき出血してはいても致命傷に至るものではなかった。

それでも刀が雨の様に降り注いでくる事に変わりはなく、全身を切り刻まれながらも両腕を振るうだけで弾いてみせていたのだ。

「鬱陶しい奴等だぜ……本当にイラつくぜ……ウザってえんだよカス共がよおッ!!」

咆哮と共に周囲に大量の虚閃を放ちまくり、周囲を更地に変えて焼き払ってしまったのだ。

それによって辺りに建っていた建物などは全て吹き飛んで行き、その跡形すらも残っていないかった。

勿論劍八や白哉の方にもその被害が出ており、回避するのが一歩遅れただけでも死んでいたかもしれない程のものであった。

「つたく……うざってえことこの上ねえ技だな、オイ」

「ちよこまか動き回りやがってよお……！いい加減死ねつつうんだろうがアアツ!!」

ヤミーが激怒して雄叫びを上げると同時に、霊圧が高まって赤黒いオーラが噴き出し始めた。

それはヤミーの背後へと収束していき、赤い球体のようなものが姿を現したのだった。

頭部の角には赤黒い霊子が纏っており、背に生えている複数の棘の先からは霊子がマグマのように溢れ出ている。

体を覆う甲殻は硬質化したかのように黒く染まっており、ひび割れている部分からも霊子が噴出していった。

「よくも俺を此処まで怒らせやがったなあ……！塵も残さねえから覚悟しやがれえ！」
「はっ……！ようやく本気になったって所か？面白れえじゃねえか！」

まるで火山を彷彿させるかのような外見をしたヤミーに対し、劍八も不敵な笑みを見せつつ斬魄刀を構えた。

すると、ヤミーの背後に浮かんでいる球体から辺り一面に虚閃がばら撒かれていっ

た。

狙いを定めた物ではなく無差別な広範囲攻撃であり、雨の様に虚閃が降り注いぎ一帯を埋め尽くすほどになっていた。

(長引かせれば長引かせるほど力は増して行くばかりか……)

「どうした野晒！眠ったまんまじゃ戦いを楽しめねえだろうが!!いい加減起きやがれ!!」

「今更何をしようが無駄なんだよお!!この状態になった俺に勝てるわけがねえだろうが!!!」

降り注ぐ虚閃に剣八は斬魄刀を叩きつけるように振り下ろすと、その途端に再び野晒としての姿を解放させた。

それによりその虚閃を一瞬にしてかき消し、剣八は降り注ぐ虚閃を野晒で消し飛ばしながらヤミーの元へと向かって駆け抜けていったのだった。

そして白哉も千本桜の刃を自らへと集わせて『終景・白帝剣』を展開して構え、そこに卍解とは異なるあの能力を纏わせると、新たな技としてそれを繰り出した。

「望景・矜雅白帝剣」

姿こそ終景・白帝剣のそれと大差ないように見えるが、白哉の周りに六本の白い刀が浮かんでいるのが見えた。

ヤミーはヤミーで地面をその巨大な足で思い切り踏み、辺り一面から赤い靈子を吹き上げながらさせており、まさに最終決戦に相応しい雰囲気となっていたのである。

そして白哉は周囲に浮かんでいる六本の刀を右手の一振りへと集め、その刀で吹き上がる靈子と降り注ぐ虚閃を斬り裂きながらヤミーへと肉薄していった。

「こいつで終いにしてやるぜえ！」

「これで終わりだ……散れ」

白哉の白い刃と劍八の巨大な刃が同時にヤミーを斬り裂いていき、そこから鮮血が噴き出していた。

血飛沫が上がるほどに深い傷を負っているが、ヤミーはまだ倒れる事無く口から虚閃を吐き出して来たのだった。

だがそれは劍八の野晒によって消し飛ばされてしまい、そのままの勢いで劍八はヤミーの頭部目掛けて野晒を振り下ろした。

「ふざ……けんな……こんな……雑魚共に……お、おれ……が……」

言葉の途中で力尽きた様子で膝を突いたかと思うと、その巨体を支えきれず地面を揺らしてしまいう程に倒れ伏してしまった。

背に浮かんでいた球体も消滅していき、後には無様に倒れて動けなくなった状態のヤミーが残るのみであった。

そして、帰刃をしたアルトウ口と戦っている卯ノ花もまた、激しい攻防を続けていた。炎を纏った鋭い爪や黒い霊子の刃を振り回して猛攻を仕掛けるアルトウ口に対して、卯ノ花は冷静な動きでの確にそれらを避けたり捌いたりしながら反撃を行っていたのだ。

「確かにすさまじい炎ですが……総隊長の物と比べたら生温いですね」
「この俺の炎が生温いだと……!? 戯言を!!」

卯ノ花はアルトウ口の攻撃を避けるなり斬魄刀をぶつける事で弾き返して見せたが、その際に発した言葉に腹を立てたのか、アルトウ口の攻撃はさらに激しさが増したのだ。

虚閃や虚刃と言った遠距離攻撃と、黒い刃の二刀流による手数の方多さという面で卯ノ花を追い詰めていったのである。

時折斬撃を与えられたとしても、超再生能力ですぐに回復されてしまうので決め手に欠けてしまっている状況であった。

「無駄だと言っているのが分からのか？ 貴様では俺は殺せんぞ」

「その再生は少々厄介ですね。では……こうしましょう」

そう言うと、卯ノ花の手には斬魄刀を前に突き出して霊圧を高めていき、その霊力を

爆発的に高めていった。

身に纏っていた死覇装がまるで始解である肉雲☒と合わさったかのような形状へと変わっていき、背に浮かぶ球体は肉雲☒の目を思わせる形に変わっていた。

そして、その目から血のような液体が卯ノ花の手に注がれていくようにして集まり、やがてそれは歪な形の刀のへと変化していった。

「いくら姿が変わろうと、この俺の再生を超える事など出来るものか」

「そうですか。では……試して御覧なさい」

その言葉を挑発と受け取ったアルトウ口は、響転を使って目にも止まらぬ速さで移動して背後から斬りかかった。

だがその瞬間、足元に広がる血だまりのような液体から棘が無数に生え出して来て彼の攻撃を遮った。

咄嗟に背後へと飛び退いたが、次の瞬間には卯ノ花が赤い刀を振り下ろしてきており、それを黒い刃で何とか受け止めたのだった。

だが、左手にも赤い刀を作り上げた卯ノ花は二刀流の状態で斬りかかると、アルトウ口も黒い刃の二刀で対応してみせた。

火花を散らしながらも凄まじい速度で斬り結び合うが、足元の赤い液体から何度も棘が生え出て襲い掛かってくるため、アルトウ口は距離を取って虚閃と虚刃で応戦してい

た。

だがその悉くを赤い刀で斬り落とし、再び距離を積めて攻撃を仕掛けるのであった。

「確か……貴方の斬魄刀は斬殺した相手の霊力を全て奪うのでしたね」

「よく覚えているな……手始めに貴様を殺し、その霊力を頂いて死神共への復讐の糧とさせてもらうぞ」

激しい剣戟を繰り広げながら言葉を返したが、それでも追撃の手を緩める事は無く、両手に持った剣を幾度となく打ちつけあつて行くのだった。

卯ノ花は瞬歩を駆使して高速移動をしながら攻撃し続け、アルトウ口も同じように響転で高速移動を繰り返しつつ攻撃していた。

「貴方を斬る前に一つ尋ねますが……朱司波伊花と言う名前を覚えていますか？」

「……覚えているぞ。俺を封印するためにあの鏡を使ったあの女の事か。こうして俺の封印が解けた今、あの女は所詮無駄死にだったという訳だ」

その言葉を聞いた瞬間、今まで平静を装っていた卯ノ花の表情が一瞬だけ変わったように見えた。

その表情はまるで何かに怒りを感じているようでもあり、僅かに殺意さえ籠っているようにも思える程だった。

だがそれよりも、アルトウ口は自らの体に異変が起きていた事に気が付いたようだった。

た。

明らかに体が重く感じるようになり、少しずつではあるが動きが鈍くなっている様子が見られた。

「貴様……俺に何をした……!?!」

「ようやく気が付いたようなので説明いたしましょう。貴方が殺した相手の霊圧を奪うように、私は斬った相手の霊圧を奪うことが出来るのですよ」

「な、何ッ……!?!そんな馬鹿な事が……!」

そう言って動揺するアルトウロだったが、実際赤い刀と黒い刃がぶつかり合うたびに、少しずつだが霊圧を奪い取られていたのである。

黒い刃が霊圧によって作られた剣だったからこそ、アルトウロ自身を斬らなくともその剣から奪ってしまえたのだ。

それに伴って自分の動きが徐々に鈍り出している事に、アルトウロはようやく気がついたが、今更気が付いてどうにかなる状態ではなく、卯ノ花の斬撃を受ける度にどんどんと体から霊圧が失われて行く。

「確かに斬られても傷は回復するようですが、全ての霊圧を奪われてしまえばどうしようもないでしょう?」

「ぬううううッ……!俺はまだ死ねんのだ!死神共を皆殺しにするまではあ!」

そう叫びながら刃を振るい続けたが、最早その動きには今までのキレはなかった。

そして卯ノ花と一体化した肉雲☒の一部が、鋭く尖ってアルトウロへと突き刺さり、そこから霊圧を吸い上げ始めて行った。

急激に霊圧を吸われていく彼は必死に抵抗するものの、卯ノ花はトドメと言わんばかりに赤い刀を振りかぶって斬りかかっていた。

その刃をなんとかで躲そうとしたが、それも叶わずに首を斬り落とされてしまい、残った体は地面に膝をついてその場に倒れ伏せてしまったのだった。

最後の月牙天衝なんだが？

藍染の前に現れた一護は髪が伸びており、天墜穿月を握る右手は肩まで黒い霊圧で覆われてきていた。

だが何よりも藍染が気になったことは、この一護からは微塵も霊圧を感じないことであった。

まるで初めから持っていないとでも言うかのように消え失せており、只の一般人にでもなり下がったのかと思う程である。

「残念だよ黒崎一護……」

「藍染……場所を移そうぜ。ここでは俺は戦いたくねえ」

「無意味な提案だな。その言葉は私と戦う事が出来る物のみが口にできる言葉だ。なに、案ずる事は……」

次の瞬間、藍染の言葉を遮るように一護は藍染の顔を鷲掴みにして飛んで行き、そこからずっと離れた場所まで移動してきた。

そしてそのまま地面へと投げつけてクレーターを作り出すと、周囲に砂塵を巻き上げらせていった。

力だけで此処までの威力を出す事ができるのかと藍染は驚いたが、何故一護から靈圧を感じなくなったのかも理解ができた。

「成程……君は靈圧を捨てたのではなく、その靈圧の全てを臂力に変えたという事か。だが、それも私の前では無意味だ」

「御託はいい……さつさとかかってこいよ」

その挑発を受けても特に動きを見せずに余裕の態度を見せる藍染は一瞬にして一護の背後へと回ると、斬魄刀を振り下ろしていった。

それに対して一護も振り向きながら天墜穿月を斬り上げて弾き飛ばしたが、その瞬間刀と刀がぶつかっただけとは思えぬほどの金属音と衝撃音が響き渡っていた。

それは遠くの山一つを消し飛ばす程の威力で、それを引き起こした本人達は平然とした様子で睨み合っている。

「……よく躲した物だ。だが驚いているのだろうか？ 刀一振りで地形が変わる、これが今の私の力だと……」

「……」

だがそれでも無言で佇む一護に対し、今度は直接斬りかかるがそれを受け止める形となり、激しい金属音が響いていく。

その度に大気が震えて大地が抉れ、地震のような揺れが起きる程の戦闘が繰り広げら

れている。

だが二人の剣戟はやがて拮抗するようになり、遂には鏝迫り合いへともつれ込んでしまっていた。

「だがこの斬撃の応酬で分かった……私がその気になれば、君は一振りで消し飛ぶことになる」

そう言つて再び刀を振りかぶつて横薙ぎに一閃するが、あろう事か一護はそれを素手で容易く受け止めて見せた。

一護の背後の地面が抉れて吹き飛んでいくほどの衝撃が駆け抜けていったが、一護は平然としたまま無傷のままであり、そんな彼に対して藍染もまた驚きを露わにしていなかった。

躲したのなら理解できるが、平然と受け止めたという事が信じられなかったのである。

「どうしたんだよそんな面して……そんなに目の前で起きたことが理解できねえのか？」

「勝ち誇つたような口を利くな……今のは一瞬だけ君が私の力をわずかに上回っただけにすぎない」

そう言つて藍染は一護から距離を取ると、破道の九十である『黒棺』を詠唱をし始め

たのだ。

崩玉と融合する以前の藍染の詠唱破棄ですら、隊長格を一撃で仕留める程の威力だといふのに、今の状態の藍染が完全詠唱で黒棺を放つたらどうなるかは火を見るよりも明らかであった。

そして放たれた黒の棺桶は瞬く間に一護を取り込んでいき、あつという間に超重力の奔流に飲まれて姿を消してしまう。

しかし、今の一護はそれすらも片手で消し飛ばしてみせるほどの存在になっていた。「気が付いてねえみてえだな……今のおんたの力より、俺の力の方が上だって事によ」

藍染は自分が山を消し飛ばしたと思っていたが、本当に山を消し飛ばしたのは一護の一撃だった。

そして一護は刀から弓へと変えると、そのまま矢を放つたのだった。

それは月牙天衝でもなんでもない只の矢だったが、凄まじい閃光と共に黒い光線と なって一直線に進んでいく。

それは矢と言うには余りにも大きく、砲撃と言った方が適切かもしれない代物だった。

「今度は俺から聞こうか？何で……距離を取った」

咄嗟に躲していないかどうなっていたのか分からない程に強烈な一撃であり、現に

掠っただけでも左肩の辺りが大きく吹き飛ばされてしまっていた。

それは瞬間に修復されて行くが、藍染はそんな事よりも一護に対する怒りが抑えきれないでいた。

そして、そんな藍染の感情に答えるかのように、崩玉は藍染を更に進化させたのだ。

「そうか……人間に劣っている事が許せないか」

顔は黒く染まり三つの目が形成され、胴体には三つの穴が開ていく。背の翼には頭部のようなものが生えてゆき、手は斬魄刀と一体化していった。

そして、翼に生えた頭部から霊圧の弾が一護めがけて打ち出されて行くと、着弾した瞬間に大爆発を起こして光柱が天へと立ち昇っていったのだ。

既に周囲への余波により周囲は更地になりつつあり、このまま続ければ尸魂界にまで影響が出てしまいそうなほどに激しくなっていた。

そんな爆風の中心で一護は、左腕を多少焼いただけで済むという驚異的な耐久性を見せていた。

「こんなもんかよ……」

「こんなもの……だと？だが、その左腕はもう使い物になるまい……今度こそ終わりに……」

「そうだな……いい加減終わりにしてやるさ。最後の……月牙天衝でな」

一護の体に黒い包帯が巻付けられていき、顔が半分ほど覆われてしまう。

そして髪はさらに長くなって黒へとそまって瞳も赤色に変化し、全身から黒い霊圧が迸り始める。

その時ようやく藍染は気が付いた。一護は霊圧を捨てたのではない、自身よりも次元の高い存在になったせいで霊圧を感じ取れなくなったのだと。

「馬鹿な……そんな事があるはずがない!!ただの人間がここまでの力を有する事など!!」

「孤月」

その瞬間、凄まじいまでの黒が大地を両断していき、天をも黒に染め上げんばかりの斬撃が走り抜けていった。

その余波に触れた木々などは一瞬で塵となつて消え去り、直撃を受けた藍染は真つ二つに両断されて上空に舞い上げられていたのだ。

そのまま地面に叩き付けるように落とされたが、徐々に再生していつて元通りの状態へと戻ってしまう。

それどころかまた姿を変えはじめてしまい、先程の怪物じみた姿から人らしい状態へと変わっていった。

「まだだ……私は、全てを超越する……!」

先程同様に額には第三の目が開き、背には六つの羽が広がってゆく。

すその羽は背面は白だが前面は鏡の様に光り輝いており、下の四つの背面には目が開いているようにも見え、両腕は胴体から切り離されて浮遊している状態であった。

「終わりだ、黒崎一護。もう君に勝ち目はない」

「そうか……なら、やってみろ」

藍染の手から無数の黒い球体が射出されていき、一つ一つが強力な破壊力を持つて一護に襲い掛かっていく。

それはブラックホールの様に全てを吸い込んで消し去っていき、射線上のあらゆる物を消し飛ばしながらも勢いを止めずに進んで行った。

一護は黒い刃で一閃してその球体を消し去って見せると、こんどは一護の足元に目のような模様のある黒い花の紋章が出現していた。

そしてその目の紋章から無数の黒い腕が飛び出してきて、連続で振るわれて一護を叩き潰していったのである。

「これで終わりだ黒崎一護！所詮貴様では私には勝てない!!」

「朧月……何処を見てやがんだ、藍染」

「な、何……!!?」

気が付くと、黒い腕で叩き潰されたはずの一護はその場から消え去っており、いつの

間にか背後に回り込んでいた一護が刃を振り下ろしていた。

だが藍染の反応速度も伊達ではなく、とっさに回避行動をする事で直撃だけは避けてみせたのだ。

だがそれでも完全には避けられず、肩の辺りに一筋の大きな切り傷が出来上がり、そこから出血している。

「何故だ……貴様は間違ひなくさつきあの場に居たはずだ！」

「もういいだろ……藍染。こんどこそ終わりにしようぜ……盈月」

藍染の周囲に黒い円環が三つ出現すると、それらが回転しながら収束していき、藍染を捕らえて締め上げると拘束してしまう。

抵抗しようとしたところで無駄だとばかりに締付けは強くなって行つたが、それでも何とか破壊して逃げだすことに成功していた。

しかし、その時には一護は既にその手に黒い球体を作り出しており、それは天へと勢いよく飛んで行き雲を吹き飛ばして行く。

「無月」

そして数秒後には黒い閃光が雨のように降り注ぎ、地表の至る所で炸裂して周囲を吹き飛ばし、辺り一面を黒一色で染め上げる程に破壊し尽くしていた。

天も地も関係なく、遍くを黒で塗り潰したその光景はまるで虚無のようでもあり、今

この時だけは全ての生命が死滅してしまっただかのような静けさに満ちていた。

体の半分以上を消し飛ばされたしまった藍染は無様に地面に倒れ伏していたが、徐々に修復していつて元に戻っていった。

そしてそんな技を放った一護は、代償として死神の力が消えるという運命にある。

「終わりだ……黒崎一護。私はまだ……」

「いえ、アナタはこれでお終いですよ」

次の瞬間、浦原とバンビエッタが姿を現し、バンビエッタは無数の杭を藍染の周囲へと打ち込んで行く。

それと同時に藍染の胸元から光点が次々と溢れ出していき、それが徐々に大きくなって行くのが見えていた。

それは浦原がとあるタイミングで仕掛けた鬼道であり、藍染が弱まったことにより発動した封印術であった。

だが、自らが更なる進化を遂げていくと考えている藍染は、当然そんな物が効くはずが無いと高を括っていた。

だが……

「馬鹿な……わ、私の手にした力が……消えていく……!?!」

「どうやら崩玉は、アナタを主とは認めていないみたいッスね……」

「何故だ浦原喜助……お前ほどの頭脳がありながら何故あんなものに従っていられる!!」

「あんなもの……う？ああ……アナタも見たんですね、靈王の事を」

「バンビエツタ・バスター・バイン！お前もだ!!あれ程多くの事を知っているのなら、お前も少なからず靈王の事は知っているのだろう！」

「ええ……知ってるわよ。でも、そう言う世界で生きていくしかないのよ……あたし達は」

藍染が叫んでいる間にも封印は施されていき、藍染の体を包むようにして無数の十字架が突き刺さっていく。

九十六京火架封滅と言う封印術に完全に封じられていく藍染を見て、一護はその痛ましさに目を反らせずにはいられなかった。

藍染の口にした靈王、それは小説にて語られていたのでよく知っているし、一概に善悪で語る事は出来ないだろう。

だが、今はそれを論じる時ではない。だからバンビエツタは何も言わずにジツと藍染を見つめていたのだった。

幕間④

転生バンビ版BLEACHの掲示板④

589：名無しの死神

卯ノ花さんvsアルトウロ始まるんかと思つたら、良いところで場面変わるの草

590：名無しの死神

そもそも卯ノ花烈つて強いんか？隊長は隊長でも四番隊の隊長なんやろ？

591：名無しの死神

せやな……今んとこ戦闘描写ないし、始解も回復系っぽい戦いには向いてなさそう

592：名無しの死神

でも双極の丘でのヨン様の一件後に、剣八を無言の圧力で黙らせてたから強いのでは？
？って言う考察があるし……

593：名無しの死神

そうですね、戦闘狂の剣八が渋々とは言えいう事聞いてたから、強いつて言うのは十分あり得るよね

595：名無しの死神

普段ニコニコしててあまり怒らない人が、ブチ切れると怖いつて話は良くあるからな

595：名無しの死神

つていうか、そんな事よりもハリベルの数字が下乳にあんの草

596：名無しの死神

戦闘中にいきなりジツパー下ろすから何事かと思つたわ

597：名無しの死神

つて言うかシロちゃんも案外強いんだな

598：名無しの死神

隊長なんだから弱い訳が無いでしょ、瞬殺されたのは相手が悪すぎただけだし……

611：名無しの死神

ハリベルのもう一つの帰刃エロツ!!!!

612：名無しの死神

いやまったくをもつてけしからんな……あんなのが少年紙に載っていい良いんか？

613：名無しの死神

>>>612

あれは問題ない、編集者がそう判断した

614：名無しの死神

一個前の帰刃の時点でエロかったのに、もうほぼ乳丸出しじゃん……ハリベルさん最高です

615：名無しの死神

危うく俺の斬魄刀が卍解するところだった

616：名無しの死神

>>615

その瓠丸しまえよ

617：名無しの死神

俺の斬魄刀が噴^イ獣^ラ噴^イ獣^ラする!!

618：名無しの死神

>>617

何気に上手い事言ってるじゃねーよハゲ!!

619：名無しの死神

どうせアニメ化されたら規制されてエロくなくなる

620：名無しの死神

>>619

どうしてそんな事を書いた!! 言え!! なんでだ!!

621：名無しの死神

>>620

どうしても何も、当然の結果です

642：名無しの死神

そういえば碎蜂も当然の様に卍解じゃない方の能力使い出したけど、アレって隊長格皆使えたりするんかな？

643：名無しの死神

そうなんじゃない？この戦いの為に使えるようにしてきた感があるし

644：名無しの死神

なんか碎蜂は卍解よりもこっちの方が強いんじゃない？そりや卍解の方が破壊力はあるけど、こっちの方が速度とか圧倒的に上だし、結界で防御力もあるし

645：名無しの死神

それな、碎蜂自身も卍解が気に入らないみたいだったし

646：名無しの死神

斬魄刀の名前が雀蜂だからって碎蜂自身も蜂っぽい見た目になるの草。まあ名前にも蜂って入ってるからな

647：名無しの死神

というかこの力って卍解と同時発動できたりするんかな……

648：名無しの死神

どうだろうねえ。今のところ使ってる奴が三人しかおらんし、なんとも言えん

663：名無しの死神

っていうか、京楽さん強いね。隊長だから強いってのは勿論あるんだろうけど、ス
ターク相手に相手のやりたいことをさせないように立ち回ってるの凄

664：名無しの死神

スターク弱いわけじゃ無いんだけどな。仮面の軍勢の二人を同時相手にして圧倒し
てたし、何より帰刃がカッコいい

665：名無しの死神

>>664

それな。四重無限装弾虚閃とか言う技でアホみたいに虚閃を連射してたのもカッコ
良かった

666：名無しの死神

しかし、京楽さんと浮竹さんの二人も卍解じゃない力使ったってことは、隊長格は全
員使えたと見ていいよな

667：名無しの死神

京楽の能力が童の遊びを現実にするの幅を広げるものだとして、浮竹の能力はなんだけ？ 影を操る能力か？

668：名無しの死神

確かに。影から手を出したり斬撃をとばしたりしてるからな……

669：名無しの死神

双魚理って、相手の放出系の攻撃を吸収して跳ね返す以外の描写がねえからな……

670：名無しの死神

何か一部では、京楽さんの影鬼の力を吸収して使ってるじゃね？とか書いてあるけど、実際の所どうなんやろな

671：名無しの死神

というか、浮竹さんワンダーワイスに腹に穴開けられたばかりやろ……

672：名無しの死神

>>671

それな。それなのに酷使する京楽さん……

673：名無しの死神

いやしかし……俺がスタークでもあの二人は同時に相手したくないね

674：名無しの死神

俺は冬獅郎になってハリベルに相手されたい

675：名無しの死神

>>674

黙れ変態野郎!!!

693：名無しの死神

シロちゃん卍解のあの力同時に発動させたって事は、やっぱり両立できるって事だよ

ね

694：名無しの死神

「この状態は長く持ちそうもねえ」って言ってるから、多分相当体に負担がかかってるんだと思うよ

695：名無しの死神

っていうか、氷が真っ赤になったからマジで大紅蓮って感じがして好き

696：名無しの死神

そういうやジャンプって巻末コメントあるじゃん？作者いわく、ハリベルがもう一つの帰刃した時にひよりが「無駄にデカイ乳さらしよって!!当てつけのつもりかあ!」って台詞を言う予定だったらしい

なんかギャグ臭が半端ないって理由で止めたって言ってたけれども

697：名無しの死神

戦闘中でも唐突にギャグぶっこんで来るときあるから、今更って感じがするけどな

698：名無しの死神

しかし、ハリベルはさっきまで敵だったシロちゃんに庇われてて草なんよ

699：名無しの死神

前は藍染に瞬殺されてたのにね、凄い進歩だ

700：名無しの死神

というか、役に立たないからって即座に切り捨てに行くのは流石藍染よね

701：名無しの死神

??? 「シロちゃん……何でそんな女を庇ったの？」

702：名無しの死神

ヤンデレ雛森か。ふむ……続けてどうぞ？

703：名無しの死神

>>701 >>702
 やめーやwww

731：名無しの死神

ようやく卯ノ花vsアルトウロ始まったんだけどさ、なんかこう……卯ノ花さんって
 剣八っぽくない？

732：名無しの死神

>>731

分かる。剣八がノイトラ相手に「慣れた」で斬つてたように、卯ノ花さんも「慣れた」
 でアルトウロの黒い刃を砕いてたからね

しかもアルトウロかなり早いハズなのに、それも「慣れた」で済ませてるし……

734：名無しの死神

双極の丘で剣八を無言の圧力で黙らせたことと言い、もしかして卯ノ花隊長と剣八つ
 てなんかしらの関係があったりする？

735：名無しの死神

どうだろう……実は元々は十一番隊だったとか、昔は剣八の師匠だったとか色々言われてるけどね

736：名無しの死神

そうねえ……四番隊の隊長だからって甘く見てたけど、実際戦闘描写が描かれてから「あ、これ強いやつだ」ってなったし

737：名無しの死神

ヤミーもヤミーで強いよね、剣八と白哉の二人相手に普通に戦ってるんだもん

738：名無しの死神

十刃の数字が1〜10じゃなくて、0〜9だったのには割と驚いたけどな

739：名無しの死神

でも、言う程ヤミーが0で一番強いって感じはしないけどな。なんならスタークやバ

ラガン、ウルキオラの方が強そうに見えるし。

確かに一護の虚化状態の月牙うけて「ちよつと切れた」だけってんだから強いっちゃ強いんだろうけど……

740：名無しの死神

怒りを力にして戦闘力を増加させるとか言ってたけど、これ聞いちやうと「え、それだけ……？」ってなるし

741：名無しの死神

序列は殺戮能力の高さで決まってるのか言ってたけど、それなら第三解放したウルキオラが一番強いでしょ

741：名無しの死神

でも剣八の一撃を頭部に受けても殆ど斬れなくなってるし、吭景・千本桜景蔵が直撃しても大した傷にはなってるし、あながち一番強いっていうのは間違いじゃないのか
もね

753：名無しの死神

拳西の卍解バИБとか言われてんの草なんだが

754：名無しの死神

分からんでもないがwwwこう……もつと他にあつただろwww

755：名無しの死神

そもそも触れ続けなければ駄目って時点で拳西の戦闘スタイルとまるで噛み合っていないよな。それだったらまだ始解の方がマシやん

756：名無しの死神

一部ではクリンチしろとか言われてるけど、した所で触腕にゴコゴコにされる未来しか見えんからな

757：名無しの死神

まあ、相手が悪かったって事なんでしょ

758：名無しの死神

そんな事より久々のバンビちゃん来たあああああああ
!!!

759：名無しの死神

バンビちゃんのあの砲撃ヤバイな……それを無傷で防いだ藍染もヤバイけど

760：名無しの死神

やっぱり一護とバンビちゃんが並んで立っていると……何か良いな

761：名無しの死神

>>>760

分かる。なんだかんだ師匠と弟子だしな

763：名無しの死神

しかし藍染もやべえよな……どうやって倒すんやこんなん

764：名無しの死神

しかも冬獅郎に雛森を刺させるといふ外道の所業

765：名無しの死神

??? 「シロちゃん……何でこんな事するの？ねえ答えて……ねえ何でなの？」

766：名無しの死神

>>>766

だからヤンデレ雛森はやめーやwww

767：名無しの死神

っていうか……ワンちゃん隊長今のところ良いとこ無しだな。いや、当たれば強いんだらうけど、バンビちゃんにも東仙にも攻撃避けられまくってるし

あの卍解はやたらデカいから遅いと思われがちだけど、攻撃の速度はアホみたいに速いはずなんだが……

768：名無しの死神

>>>767

まあ、バンビちゃんは夜一と手合わせしまくって、速さが夜一基準になってるっばいからな……

それよりも東仙のアレは帰刃なの？それとも隊長たちが使ってる卍解じゃない方の能力なの？

769：名無しの死神

知らん。一部では両方の合わせ技とか言われてるけど、全く分からん

770：名無しの死神

あの輪つかみみたいなファンネルみたいに扱ってたし、バンビちゃんvs東仙でファンネル合戦見れそうだよな

転生バンビ版BLEACHの掲示板⑤

795：名無しの死神

バンビちゃんvs東仙はまた別の戦闘挟んでからかな？って思ったけど、すぐ始まったな

796：名無しの死神

>>795

別の戦闘って、他になんかあったか？

797：名無しの死神

>>796

白哉&剣八vsヤミーと卯ノ花vsアルトウロがまだ残ってんだろ

798：名無しの死神

バンビちゃんvs東仙、マジでファンネル合戦してて草。ガンダムかと思ったわww

799：名無しの死神

しかもお互いに破壊されても再展開できるから、下手したら無限に続くだろアレ

800：名無しの死神

東仙が九個でバンビちゃんが六個だから、バンビちゃん不利じゃね？と思ってたら、バンビちゃんは剣も展開できるのね

801：名無しの死神

しかしバンビちゃんが狛村と一緒に戦う事になるとはねえ、前はバンビちゃんvs狛村&東仙だったのに、今回はバンビちゃん&狛村vs東仙だ

802：名無しの死神

ワンちゃん治療完了してないのに、体ズタボロのまま出てくるのヤバすぎ

803：名無しの死神

狛村も卍解じゃない方の能力使い出したけどさ、いい加減その能力の名前出してくれませんかね？

804：名無しの死神

>>803

わかるわ。最初に浦原が使ってから大分経ってなのに、今だ名前が出てこないから何かによる

805：名無しの死神

卍解の鎧の一部が手と肩についてるって事は、卍解の力をコンパクトにした感じなのかな？

威力は劣るけどその分小回りが利くようになった感じで

806：名無しの死神

バンビちゃんの結界防御だけじゃなくて、相手を閉じ込めることも出来るから結構応用が利きそう

>>805

威力は劣るけど、って言ってるけど、東仙「何だこの力は!？」とか言ってるから、本当に攻撃力落ちてんのかって思うわ

807：名無しの死神

>>>806

粕村の「儂はもう迷わん……!!」って台詞から察するに、あの時は全力で攻撃出来てなかっただけじゃない？

821：名無しの死神

なんかバンビちゃん、藍染に当たり強くない？

822：名無しの死神

>>>821

そりゃ名乗っても無いのに本名知つてるとかキモイとしか言いようがねえだろうよ

823：名無しの死神

「というか、その少し前の一護に対する「君が生まれる前から私は君のことを知っている」も相当気持ち悪いぞwww

824：名無しの死神

そりや弟子にそんなきめえ事言うような奴には当たり前強くなっても仕方ないわ

825：名無しの死神

しかし、ヨン様はバンビちゃんが未来を知る方法があると考えてるんかね？

826：名無しの死神

「どうだろうねえ……藍染の事だから色々な可能性を考えてるんだろうし、カマかけて真実を引き出そうとしてるじゃね？」

827：名無しの死神

藍染「君は本当に色んな事を知っている……いや、知り過ぎていると言うべきか」
はい、それに関しては俺達も同意です

828：名無しの死神

とかいうかさあ、バンビちゃん市丸どつか連れてつちやったけど、その後すぐに一護と一心の方に場面切り替わったから、なんで市丸をいきなり連れてかれたのかさっぱりのだが

829：名無しの死神

バンビちゃんって裏でいろいろしてるっぽいけど、その色々ってのを詳しく描写してくれないからね……

830：名無しの死神

>>>829

未来に係わる重要な話とか、そう言うのをしてるって言われてるけど、ワイトもそう思います

831：名無しの死神

いや、ちよつと前の巻末コメントでバンビちゃんの裏でやってることは、ネタバレになっちゃうから今は描けないけど、描ける時期になったら描きます……ってあったか

ら、もう少しで公開されるんじゃない？

832：名無しの死神

マジかよ、期待大だな。巻末コメントとか興味ねえから知らなかったわ……

859：名無しの死神

バンビちゃん、浦原と夜一との連携良いなあ。長年組んでるだけの事はあるわ

860：名無しの死神

最近じゃ忘れられがちだけれど、バンビちゃん浦原商店で働いてるだけじゃなくって、浦原商店に住んでるんだよな

861：名無しの死神

バンビちゃんのとんでも砲撃直撃したり、親子月牙直撃したりで割とヤバイ攻撃喰らってんのにピンピンしてる藍染ホントなんなの？

862：名無しの死神

一護の月牙の方が一心の月牙よりデカくて範囲が広いの草

863：名無しの死神

しかし浦原も元とは言え隊長なんだから、卍解すりやいいのに何でしないんだろ

864：名無しの死神

前にスターク戦で京楽が卍解しようとした時、浮竹に「こんな所で使うな」的な事言われたじゃん？アレって、敵味方の問わずに巻き込むからではって考察が上がってんだよね

多分浦原も同様に敵味方問わずに巻き込む卍解だから、迂闊に使う事が出来ないんじゃないかって

865：名無しの死神

そういうヤパンビちゃんちよつと前に市丸を藍染から引き離してどつか連れてつた場面があったけど、アレってやつば市丸が殺されたりしないようにするためなのかね？

866：名無しの死神

>>>865

多分そうなんじゃない？まだ描かれてないから断言できないけど、多分バンビちゃん市丸が藍染に殺されるの知ってたんだろうし、きつと説得するためにやったんだと思う

867：名無しの死神

市丸も「あの子の言う事……聞いてくんやつたな……」とか言ってるし、説得はされてるはず

894：名無しの死神

白哉&剣八vsヤミーと卯ノ花vsアルトウロが再び始まったから、これ終わり次第藍染との決着かな？

895：名無しの死神

ヤミーも散々ばら「こいつマジで0なの？」とか言われてたけど、隊長二人掛でちよつとしかダメージ入れられないから「やっぱ0かも」って評されてて笑った

896：名無しの死神

辺り一面に高火力の虚閃をばら撒いたり、地面から赤い霊子をマグマみたいに噴き上げながらせまくったりして、これ空座町でやってたら一瞬で壊滅するでしょwww

900：名無しの死神

絶対ヤバイ技だろう白哉の「奥義・一咬千刃花」が直撃しても、ちよつと切れただけってのマジでヤベエよな

901：名無しの死神

って言うかその技、一護と戦ってた時に使われてたら一護ヤバかったんじや……

902：名無しの死神

そうか？虚に乗っ取られてた一護は全方位に矢をばら撒けてただろうし、普通に対応できそうな気がするが……

904：名無しの死神

しかし野晒は強いな、普通にヤミーの放った虚閃消し飛ばしてるし。そもそもノイトラの破滅の虚閃を消し飛ばしてる時点で弱い訳がなかったんだが

905：名無しの死神

卍解と例の力の同時発動ってやっぱ強いんだね。今まで斬れなかったのに、それを発動させた状態の技「望景・矜雅白帝剣」だと普通に斬れてたもん

906：名無しの死神

そーいや気になったんだけど……結局アルトウ口の強さってどの程度のもんなの？

907：名無しの死神

>>906

大昔に尸魂界に攻め込んで護廷十三隊を半壊させたって説明があったから、相当強いハズ

908：名無しの死神

つまりそんな奴と互角に渡り合ってる卯ノ花さんも相当強い……って事？

909：名無しの死神

そうなるんじゃない？知らんけど

910：名無しの死神

ってというか、卯ノ花さんが言ってた「朱司波伊花」って誰なん？教えてエロイ人

911：名無しの死神

>>910

分からん、今んとこアルトウロの「俺を封印するためにあの鏡を使ったあの女」と「所詮無駄死にだった」と言う台詞から、既に死んでいるという事くらいしか分からん

912：名無しの死神

それについて作者は何と？

913：名無しの死神

コメントではしばらくしたら分かるって言ってたよ

914：名無しの死神

しかし卯ノ花さんの例の能力はアルトウロに対する当て付けみたいな能力だな

アルトウロの能力が「斬殺した相手の霊力を全て奪う」に対して、卯ノ花さんは「斬った相手の霊圧を奪う」だもん

915：名無しの死神

しかも霊圧から作られた武器とぶつかり合った場合でも奪えるってんだからエゲつねえよな

951：名無しの死神

遂に藍染との決戦始まったけど、最後の月牙状態の一護カツコいいな

952：名無しの死神

>>952

それな。右腕が黒い霊圧に覆われてて完全には見えなかったけど、腕全体に黒い色の

血装が奔つてるっばいし。めちやくちやカッコいい

しかもあの黒棺も片手で消し飛ばしてたし、相当やばいと思うんだけど。しかも完全詠唱の黒棺をだぞ？

953：名無しの死神

それって何血装なの？教えてバンビちゃん!!

954：名無しの死神

>>>953

教えても何も、その場にバンビちゃんおらんから答えようもないやろ

955：名無しの死神

藍染も更に形態変わってるけど、一護に全く攻撃効いてなさげなの草生えるわ

957：名無しの死神

レベルが違い過ぎると霊圧を感じ取れなくなるって言ってたけど、めちやつよ藍染が一護の霊圧感じ取れないってんだから相当じゃない？

958：名無しの死神

一護真つ黒い状態になってから、孤月とか朧月とか無月とか言う技使い出したけど、あの状態の一護なんていうん？

一個前の形態と同じ最後の月牙でいいの？

959：名無しの死神

無月って技が一番強いっぽいから、今んとこ無月一護って呼ばれてる

960：名無しの死神

そういうや藍染霊王がどうのって言ったけど、今まででそんな名前出てたっけ？

961：名無しの死神

破面編の最初の方でちよつとだけ出てる。ただ、霊王って名前しか出てないからなんも分からんけど

962：名無しの死神

バンビちゃんも霊王知ってるっぽいし、その上「そう言う世界で生きていくしかない」とか言うし、マジでバンビちゃん何者なんだろうなあ

963：名無しの死神

マジで気になる事が多いヒロインだよな、バンビちゃんは……

一護と恋次の再戦なんだが？

藍染が地下監獄の最下層、第八監獄の『無間』で一万八千年という懲役刑を課せられてから七カ月以上が経過していた。

その間にあった事といえば、XCUTIONとの一件で一護が無事に失った死神の力を取り戻したことだろう。本来ならその「死神代行消失篇」は、藍染との一件に決着をつけてから十七ヶ月後に起きる出来事であったが、かなりの前倒しとなる形で起きた。

他にも、あの痣城双也と会う事になり、危うく「Spirits are forever with you」の話に巻き込まれそうになった事くらいであろうか。

その際「一切関与しないから、勝手にやっつけていろ」と「そつちの斬魄刀の弱点は知っている」の二つを言うと、思いのほかすんなり引き下がってくれたのだが。

彼の斬魄刀「雨露柘榴」の特性上、霊子を吸収したりする攻撃に極端に弱いので、滅却師であるバンビエッタとの敵対は避けたかったのだろう。

そんなこんなで今は、一護と共に尸魂界へと来ている最中である。

「師匠まで来る必要なかったんじゃないかねえのか？ 銀城の奴の遺体を現世に持ち帰るだけなんだぜ？」

「別にいいじゃない、暇してたんだし……」

「暇って……そんな理由で付いて来たのかよ」

そうこう言っている内に一番隊の隊舎までやって来た二人だったが、隊長格がほぼ此処に揃っていたのであった。

少しだけ悶着は会ったものの、銀城は現世で埋葬してもよい事となり、一護達は再び現世へと戻ろうとしていたが、突然と恋次が現れて話があると云われたために二人は立ち止まった。

「……なんだよ話って？」

「前にした約束、忘れた訳じゃねえだろうな」

「約束……そんなんあつたか……？」

「前に再戦するって約束しただろうが！まさか、言つてねえとかそう言うアレじゃねえよな！」

「あ、あたしはちゃんと一護に伝えたわよ！ただ、コイツが聞いてなかったただけなんじゃないかしらねえ……！」

明らかに挙動不審になるバンビエツタに不信感を募らせる恋次であったが、兎にも角にも戦える場所に移動する事にした。

とは言つても、二人が全力で戦えばとてつもない被害が周囲に出るため、それなりに

開けた場所で行う事になった。

「最初っから全力で行くぜ……卍解!! 『双王蛇尾丸』!!」

「お前と戦うのはあの時以来か……卍解!! 『天墜穿月』!!!」

双方とも最初から卍解の状態となると、互いに斬魄刀をぶつけ合い火花を散らし合う。

一護の卍解は死神の力を取り戻してから形状が変わっており、黒い刀を二本合わせたような形状の弓へと変化させている。

それに伴って霊子ではなく実体となり、刀から弓へと変化させる事なく斬撃と射撃の両方を行えるようになっていたのだ。

また、衣装も死覇装寄の見た目から黒いコートのようになっており、裾やら襟やらに白いラインが入っていて、原作にもあった完現術の要素も手や首元に現れていた。

「あれから結構修行してんだ、簡単に負けるわけにはいかねえな!!」

「そうかよ……ならこっちも手加減なしで行かせてもらうぜ」

そう言うのと、一護は矢を放ちながら後方へ退きつつ恋次の周囲を回り始め、そして恋次はその矢を狛狒王で防ぎつつも距離を詰めて行った。

そのまま狛狒王の腕を伸ばして攻撃を仕掛けようとすると、一護はそれを斬り払って更に後ろへ下がり距離を取る。

「蛇牙連弾！」

オロチ王を構えてそこから靈圧の弾丸を連射して行くが、一護は全ての弾丸を矢の連射で撃ち落としてみせた。

恋次はそのまま弾丸を連射しつつ、再び狒狒王の腕を伸ばして一護を掴もうとする
と、一護は左腕から無数の黒い鎖を放出し、恋次に巻き付けて拘束し始めた。

そして、そのまま勢いよく引つ張られてしまうが、恋次は逆にその力を利用して一護の元へ近づいていく。

「狒拳破鋼！」

狒狒王の腕が鉄のように鈍く変色すると、次の瞬間にはその腕に巻き付いていた鎖が弾け飛び、そのままその腕を鞭のようにしならせるようにして一護へと叩き込んだ。

それが一護に当たる事はなかったが、地面を砕いて周囲に破片を巻き散らせ、衝撃によつて土煙が舞い上がった。

「随分とやるようになったじゃねえか……恋次!!」

「当たり前だろうが！ テメエこそもつと本気を出しやがれ！ 一護!!」

恋次は距離を取られる前にオロチ王の刃で斬りかかるが、一護はそのまま天墜穿月で受け止めてしまった。

そこから斬撃の応酬が続き、二人は鏝迫り合いになると互いを押しつぶさんばかりに

力を入れ始めたが、一護は霊圧を込めて月牙天衝を放って吹き飛ばして見せた。

吹き飛ばされた恋次は直ぐに体勢を立て直して反撃に出ようとしたが、そこに一護の姿は既になく、代わりに上空から矢を放とうとしてくる姿を視界に捉えたのだった。

恋次は咄嗟にその場から離れる事で攻撃を回避したが、その矢は地面へと突き刺さる度に十字状に衝撃を放ち、次々と地面に傷跡を残していく。

回避しつつも霊圧の弾丸を放って行くと、一護はその弾丸を全て撃ち落としてみせた。

「前に戦った時よりも格段に強くなりやがって……一体何処まで強くなっていきや気が済むんだよ！」

「さあな……自分でも分からねえよ……けど、守りてえもんがある以上、強くなれなきゃいけないって思ってるからな」

それからしばらく一護と恋次の戦いは続いたが、結局一護の勝利という形で幕を下ろしたのであった。

とはいえ、お互いに大きな怪我もなく終わりを迎えていったために、特に心配するようなものでもなかったが。

すると、一護が突然バンビエッタにこんな問いかけを投げかけた。

「そーういや聞きそびれたんだけどよ……師匠は何で月島のが効かなかったんだよ」

「そんな事あたしが知りたくらいよ……」

月島の完現術である『ブック・オブ・ジ・エンド』の能力は、斬った対象の過去を改変するという能力である。

相手の認識を改変するとかそういうレベルではなく、対象の経てきた事象を書き換えることが出来るとんでもない力であった。

当然バンビエッタはそれを知っていたので対処のしようもあつたが、対処以前にまるで効かなかつたために、自身でも驚いていたくらいだった。

「そんな事よりも、済んだのなら帰るわよ。銀城の埋葬もしてやらないとなんだからね」
「それもそうだな……」

それから数日して、今度は護廷十三隊の隊長が集められた隊首会が開かれた。

当然ながら議題となつたのは見えざる帝国への対処法であり、その為にも今後の動きに関して話し合う必要があつたのである。

「バンビエッタ・バスターバイン。まずは侵攻の日時を詳しく教えてもらおう」

「五月の初めに宣戦布告しに来て、その時にドリスコール・ベルチつて星十字騎士団の一人が来るわ」

ドリスコールの持っている聖文字は大量虐殺は、他者を殺せば殺すほど強くなる能力

であり、その対象も選ばないという恐ろしいものだった。

また、雀部が卍解を奪われた後に殺害されることになるが、奪われさえしなければ総隊長の額に傷をつけた程の男が倒される事はないだろう。

「卍解を奪うつてのは、既に対処法は出来ていたね。それで、他にも用心すべき能力を持った敵はいるのかい？」

「そうね、先ず聖文字つてAからZがあるんだけれど……」

京楽の問いに対し、バンビエツタは事実をそのまま口にする。

用心すべき能力を持つているというのは星十字騎士団の全員がそうだろうが、特にユーハバツハの『親衛隊』シユツツシユタツフエルに選ばれるものは、知っていたとしても対処のしようが無いのがほとんどである。

「だが、奴らはどうやって瀨霊廷に侵入してくるのだ？ 遮魂膜がある以上、滅却師であっても簡単に侵入することは出来ないだろう」

「ああ……なるほど。以前貴女が何故地面の影を指さしたのか、ようやく分かりました。滅却師達は既に遮魂膜の内側に居るのですね？」

碎蜂の問いかけに対してバンビエツタが答えようとしたが、それよりも先に卯ノ花が納得したかの様に呟いたのだ。

そして卯ノ花のつぶやき通り、見えざる帝国は既に遮魂膜の内側、瀨霊廷の影に靈子

の世界を作つて潜んでいるのである。

「なるほどなあ……通りでこの部屋はピツカピカで影が出来へんようになってる訳や」

平子は部屋を見渡してから呟くと、彼の言葉通りこの部屋は影が出来ない様にマユリと浦原が設計した特殊な造りとなつていたのでした。

見えざる帝国は影を通してこちらの情報を得ている為、こうして会議するためには影の無い部屋が必要となつた結果なのだ。

「ふむ……ならばこちらから攻め入る事は出来るのか？ 奴等の居場所がハッキリしているのならば、こちらの方から乗り込んでいくという方法も取れるだろう」

「無理だと思つたよ？ 相手の居城に乗り込むにしても、色々と必要な物があるし」

そう言ったのは狛村であったが、そう簡単に事が運ぶ訳ではなかった。

影を利用するのは滅却師の能力の一つであり、バンビエツタはその能力を使えなくなつていたのである。

銀架城や帝国の至るところに配置されている『太陽の門』から侵攻する事も、可能性の一つとしてはありなのだろうが、それには『太陽の鍵』が必要になつてしまふし、その鍵も通行証と共に見えざる帝国に置いてきたままだ。

「敵の本拠地に赴くというのは同意しかねる。むぎむぎ地の利を失つてまで攻め入る必要などあるまい」

「そうなるよ、やはり防衛戦に徹するしかないという事か……」

その後も様々な意見が出たものの、結局のところは瀋靈廷で待ち構える以外に方法がないという結論に至っていた。

だが、見えざる帝国の侵攻開始までは時間がある。それまでに出来る限りの策を練る事、それが今すべき事に他ならないのだった。

千年血戦に向けて準備をするんだが？

藍染の一件以降、瀨靈廷には新に作られた修行用の施設が作られており、全ての隊士が利用できるという大規模な物となっていた。

日夜様々な隊士達が修行に励み、そしてそれぞれが目標とする高みを目指して切磋琢磨しているのだが、そんな修行場にバンビエッタの姿があり、目の前には二人の死神の姿が在った。

「さてと……体調の方はどうなの？アレ以来寝たきりだったんだから鈍ってるんじゃないの？」

「どうやらなあ……ちゃんと戦えるくらいには回復したとは思うんやけど……」

「あまり無理しないでギン……彼女の言う通り、ずっと寝たきりだったんだから」

片方はあの市丸であり、もう片方は乱菊であった。

市丸はあの戦いのときに藍染に深く体を斬られ、片腕も挽がれた事でかなりの負傷をしていたのだが、早急に治療を行う事が出来たので命を落とす事にはならず済んだのだ。

ただ、藍染が更なる進化をする際の強烈な霊圧に中てられたのか、しばらくは寝た切

りの状態が続いていたのだ。

藍染の隙をついて確実に倒すために彼の部下となっていたのが真実とは言えど、色々やらかした事もまだ事実であり、彼は只の平隊士扱いにされている状態であった。

「こうやって隊士に戻れただけでも十分やろ。もつと重い処分を下されても仕方ない立場やったんやから」

本来ならそれなりの刑罰が下されても文句は言えないのだが、今後の戦いに備えての戦力が減る事を良しとしなかった者の考えや、市丸が時間を稼いでくれなければ空座町は消滅していたという屁理屈をこじつけて刑を軽くしてもらったのである。

とは言えど、常に監視が付けられるような状態ではあるので、完全に自由の身になつたとは言えないのであるが。

「まあとにかく、一先ず乱菊に見てもらいながら鍛錬するって事で……あたしは他の所行つて来るから好きにやりなさい」

そう言つてバンビエツタは二人を置いてその場を離れると、今度はルキアの方へと足を運んだ。

彼女の前には冬獅郎が立っており、どうやら二人で組み手をして修行を行っている様だった。

ルキアの『袖白雪』も、冬獅郎の氷輪丸と同じ冰雪系の能力を持った斬魄刀であり、互

いに手合わせする事で得られる物もあるのだろう。

「ありがとうございます日番谷隊長。わざわざ私に稽古をつけてくださるとは……」

「別に構わねえさ。俺も氷輪丸をもっと扱えるようにならねえといけねえからな」

ルキアの袖白雪は、冰雪系とは言えど氷輪丸とは違った能力であり、それは刀に触れた者の体温を零度以下まで低下させるといふものである。

かなり強力な力を有している斬魄刀ではあるが、ルキア自身にもその力が及ぶというデメリットが存在するため、そのデメリットをいかに克服するかが課題になっていた。

こればかりは流石に一朝一夕でどうにかなるものではないため、ゆっくりと時間をかけて学んで行く必要があるだろう。

出来る事ならこの時点で、正解である『白霞罰』の会得まで進めておきたかったが、現時点では難しいと言わざるをえなかった。

「バンビエツタか。あんたもここで修行していくのか？」

「あーそうね……まあ、そんな感じかしらね。そっちはどんな感じなのよ」

「朽木の奴の斬魄刀は確かに強力だ。だが……デメリットが強すぎるからな。今はひたすら力を制御できるように修業するしかねえって感じだな」

「う、うむ……もう少しコツの様なものがあればいいと思うのだが、中々うまくいかなくてな……」

ルキアの言う様に、彼女は確かに力の制御が出来ていない部分があった。

とはいえども、制御できればその分強力な力になることは間違いないため、より強大な敵が現れた時に有利に働くのは間違いないだろう。

しばらくして、二人の所から移動したバンビエツタはそのままあちらこちら見て回つてみる事にしたが、そんな所に碎蜂が現れ彼女に声を掛けて来た。

彼女はルキア救出の際にとある一件があつて以降、何かと縁がある相手でもあつた。

「見つけたぞ……バンビエツタ!! 今日こそ貴様を倒す!」

「ええ……もういい加減にして欲しいんだけど」

「これが貴様を倒すために編み出した技だ! 瞬間・ふ——」

「やれやれ碎蜂……お主はまたやっておるのか」

するとそこへ夜一が姿を現わした為、碎蜂は慌てて弁明をした。

もつとも、以前にも始解した状態でバンビエツタを追いかけ回した前科があるため、いくら誤魔化そうとした所で無駄だったのかもしれないが。

「し、しかし……何故夜一様が此処に……?」

「なに、儂も次の戦いに備えて鍛え直しておこうかと思つての。ほれ……早く準備をせよ、それはまさか私と……? はい! 喜んで!!」

「なにか、碎蜂」

先ほどまでの怒りはどこへ行ったのかと思うくらいに嬉しそうな顔をしている碎蜂に対して、バンビエツタはかなり冷ややかな目を向けていた。

ここ最近には浦原同様に夜一も尸魂界へと戻って来ており、それは当然今後の戦いを見据えた行動ではあるが、碎蜂にしてみれば自分が敬愛する師匠と一緒に居られる時間が増えたという事でもあるのだ。

(さっさと次行きましょ……)

「なんじゃ……もう行ってしまうのか?」

「色々と見て回っておきたいのよ。今後の為にも」

バンビエツタがこうして施設内を見回っている理由は、今現在の護廷十三隊の戦闘能力がどれほどのものになっているのかを見る為だ。

既に剣八が始解をしていたり、『纏威』^{てんい}という浦原が考案した能力が浸透していたりと、大きな変化が見られているのは確かだろう。

とは言えど、それで見えざる帝国の軍勢相手に十分な戦いが出来るのかどうかはまた別の話なのだが。

それからしばらくして、バンビエツタは今後の行動について浦原と話し合っていた。

先日の隊首会でも話したように、今まで以上に準備をしておかなければならないとい

うのが彼女の考えだったのである。

「で……準備の程はどうなのよ」

「まあぼちぼちですかね。少なくとも、アレは大体完成していますし後は微調整を重ねるだけですから」

「そう……でも、あたしの話を聞いただけで良く作れるわね」

「到達地点さえ分かってくれば、それに近づくように創ればいいだけの話ですんで、然程難しくはなかったつスよ」

そう言うと、浦原は机の上に小袋を置いた。

中身は丸薬のような物が幾つも入っており、名前を「侵影薬」と言つて、死神の卍解を一時的に虚化させる為の道具だった。

他にも色々々と備えておかなければならない事はあるが、それは此処ではなく尸魂界でやらなければならない事だ。

「平子達が護廷十三隊に復帰できたんだから、あんたも尸魂界に戻れるようになってんでしょ？ほら、早く支度しなさい」

「人使いが荒いつスねえ……」

「そういえば、アレってそのままなの？」

「アレ……つスか？アレならそのままにしますけど」

「……そう。まあいいわ、さっさと行きましょ」

そんな二人が向かった先は、尸魂界にある技術開発局と呼ばれる場所だった。

この場所へ訪れる理由など一つしかなく、勿論今後の戦いに備えるためであり、その進捗を尋ねるためである。

「どうつスカねマユリさん、そちらの準備は進んでいますか？」

「わざわざそんな事を聞くために此処に来たというのかネ？ まったく、ご苦勞な事だヨ」
「それで、進捗はどうなのよ」

「ふん、あの四十六室の無能共がそうたやすく首を縦に振るとでも思っているのか？ 所詮面子の事しか考えられん奴らだ、下らん言い訳を重ねられて全く進んでいない状態だヨ」

見えざる帝国が尸魂界に侵攻する状況において、一番重要となるのは影なのは会議でも話に上がった通りである。

そして遮魂膜の内部に既に侵入と言うのは既に話しているが、問題なのは瀨靈廷と言う重要な拠点を丸ごと相手の拠点で塗りつぶされてしまうとと言う点だ。

そうなれば当然地の利というものを完全に失い、護廷十三隊が組織としての機能を失う事になるだろう。

「完全立ち入り禁止区域なんかもありますからねえ……」

「まあいいさ……この技術開発局さえ残っていれば、後がどうなろうと知った事ではないヨ」

侵攻が始まるまでにどの程度の対策が施せるか分からないが、少なくとも技術開発局だけは死守しなければならぬ。

重要拠点の一つである此処が奪われてしまえば、一気に状況が不利になってしまうのだから。

出来る事ならば他の区域にも対策を施したいが、マユリの言う通り四十六室の面々は頭が固すぎるくらいがあるため、説得は難しいだろうと考えられる。

「それよりも、私としては君が影を利用する能力を失っている事の方が気になるがネ」
「そんな事言われてもね……」

千年血戦が始まるまではあと数日しかない。

それまでにいったいどれほどの準備が出来るのか、そして自分はゾンビ化させられずに生き残る事が出来るのか。

バンビエツタは改めて不安に襲われる事になったのだった。

過去の一幕④

見えざる帝国の宮殿には、驚くほど何も無いと言つていいだろう。

必要最低限の物以外は置かれておらず、ある意味ではとても無機質な空間であると言つてもよかつたかもしれない。

そんな部屋の中に置かれているソファアの上にバンビエツタは寝転がっていたのだが、ミニーニヤが部屋に入って来た事でようやく起き上つたのである。

「バンビちゃん、ちよつと来て欲しいんだけど……いいかな？」

「別にいいけど……一体何の用事よ」

特に何もする事がなく暇であつたバンビエツタは、呼び出しに応じるとすぐに部屋を出た。

呼び出されたのはある部屋の前であり、中に入るとそこには簡易的なキッチンが用意されている部屋だつた

「ミニー……アンタいつの間にかこんな物を用意してたのよ」

「だって、何もする事なくて暇だつたんだもの」

「そういう事じゃなくて、なんでこんなものを用意したのつて事なんだけど……」

「なんでって……皆で食べるスイーツを作ろうとしてただけよ？」

ちなみに言うのと、この場所は元々は何も無かった部屋だった。

そこにいつの間にか色々な機材を運び込んで簡単な調理が出来るスペースを用意していたようで、それが最近になって完成したようだった。

最初はただお菓子作りをする為に作ったものだったのかもしれないが、今ではこの部屋自体が快適な生活を過ごす為の場所へと変化している。

「それで、あたしはいつたい何をすればいいのよ」

「味をチェックして貰おうと思っただけで、良いかな？」

「別にいいけど……そんなんリルにでもやらせておけばいいんじゃないの？」

「リルちゃんだと全部食べちゃうから……味のチェックどころじゃないのよ」

「ああ……なるほどね」

そう言われてしまったら仕方がないかと諦めて、バンビエツタはミニニヤの作る菓子類の試食係として働く事にした。

試食品として作られて色々な物が出て来るものの、どれもが美味しいので文句の一つも無いような程であった。

それから数日後、バンビエツタは再びあの部屋に訪れていた。

しかし今回呼び出された訳ではなく、何となく来てみただけであり、部屋の中にある物を見て回る程度に留まっている。

色々な機材が運び込まれた以外にも、冷蔵庫には様々な食材が詰め込まれている状態となっていた。

(ふうん……何か作ってみようかしらね)

バンビエッタは冷蔵庫の中身を確認していき、ある事を閃くと早速調理を始めたのである。

約一時間後、色々な料理を作り上げた彼女は、思いの外沢山作ってしまったそれらをどうするべきか迷ってしまった。

だが、バンビーズの皆で食べれば良いだけの事なので気にする事もないだろうと結論付け、とりあえず何時もの部屋まで運んで行く事にしたのだった。

「へえ、バンビちゃんの手料理ねえ」

「何だバンビ……お前料理できたのか？」

「見た目は悪くないけど、味はどうなのさ」

次々と並べられる料理を目にし、皆が一斉にそんな事を言い放っていた。

確かにバンビエッタが料理をするだなんて夢にも思っていなかったのか、意外そうな顔をしている者も少なくはなかった。

「美味しそうねえ。それじゃ……いただきます」

まず最初に箸を付けたのはミニーニャであり、そんな彼女の反応を見ながら他のメンバーも続いていく。

一体どのような感想を述べるのか期待に胸を膨らませていたバンビエッタだったが、その口から出て来た言葉は意外な事に大絶賛だった。

「うま……ッ！おい、これ本当にお前が作ったのか？」

「まあ、そうだけど……」

「嘘でしょ……いや、マジで美味しいんだけどさあ」

正直言つてここまでの評価を得られるとは思ひもしなかったし、初めて作った料理だから不安要素も多かった。

だからそこまで美味いと言われても半信半疑になってしまう部分があり、どうしても信じきれない部分が出て来てしまう。

（初めて……？なんか……そんな感じはしないんだけど……なんで？）

「どうしたのバンビちゃん？難しい顔して……」

「何でもないわよ、そんな事よりおかわりあるからね」

「マジかよ……！もつとくれ！」

「おいりル！あたしの分まで食べておいてなに言つてんだよ!？」

キャンデイスの言う事などまるで聞いていないリルトットに対して、やれやれといった表情をしながらも新たな料理を皿に盛っていく。

それを受け取った彼女は、また口の中へと運んで行きながら食事集中にいった。「すっごく美味しいねえ。これなら毎日でも食べたいくらい」

ジゼルの言った事はどうやら冗談ではなかったらしく、全員が満足している様子だったが、そこで一つ疑問に思った事があつたのだ。

それは、何故で自分がこんなに上手に料理出来たのかという事だが、いくら考えても答えは出ずにまた暫く時間が経過する事となつた。

とある日の事、バンビエツタは一人で宮殿の廊下を歩いている。別に何をやる訳でもないのだが、ただ時間を潰す為に歩いていただけだつた。

そんな中、突然頭痛を感じて頭を抱え込む事となつた。

今までも何度か頭痛が起きてはいたが、ここ最近は無かつたので久しぶりの事であつた。

「くうっ……い・痛い……い・なん……なのよ……い」

痛みに耐えながらも廊下に座り込み、痛みが収まるまでじつと我慢する事にしたバンビエツタだったが、次第に頭が痛くなくなつていった。

どうやら痛みは完全に引いたらしいのだが、何故かモヤモヤとした何かの心の中で渦巻いていたのである。

「ここは……どこ？あれ……こんな声してたっけか」

ふと聞こえてきた声は自分の声ではなく、聞いた事があるようなないような微妙な感覚に襲われる。

間違はなく自分の声であるという感覚と、自分の声ではないという違和感を同時に抱く結果となってしまう。

一体何が起こったのか理解できないままに立ち上がると、周りを見渡してみる事にした。

「じいもかしいも白い……」

その宮殿は元々白く、それ自体はバンビエッタも知っているはずの事だったのだが、今の彼女は何故か全く違うもののように見えてならなかったのだ。

そんな場所に居続けるのは少し落ち着かないと思いつながら歩き始めようとした時、不意にガラスに映る自分の姿を見る事になった。

「この体って……バンビエッタ・バスターバイン……!?それじゃあここはBLEACHの世界なの？」

鏡に映し出された姿を見てようやく事態を理解した瞬間であった。

前世で読んでいてお気に入りでもあったBLEACHの世界に転生してしまったのだと理解し、同時に混乱し始めたのだ。

まさか自分が漫画の世界に生きている等と思ひもしないだろうし、よりにもよってあの星十字騎士団の一人となつているとは予想出来るはずもなかっただろう。

「という事は……このままだとゾンビ化まっしぐらつて……事!?嫌なんだけどそんな未来!!」

前世の記憶が完全に戻つたという訳では無いが、今現在自分が置かれている状況を把握して慌てふためいてしまう。

このままここに居ては駄目なのだど本能が悟つたのか、バンビエツタは慌てて駆け出して行く。

そして、まだ他の誰にも知られないように隠れながら移動を開始した。

「どうしたのバンビちゃん……そんなところでこそこそして」

「ジゼ……!?!ジ、ジジ……何でこんな所に……!?!」

「別にいい?なんとなく歩いてただけだよ?」

「そ、そうなのね……それじゃあ……えっと、あたしはもう行くから!」

バンビエツタをゾンビ化させる張本人のジゼルに遭遇する事となり、思わず後退りながらそう告げる。

どうにかして此処から逃げださないと、いずれゾンビとなってしまふ事に間違ないからである。

(逃げ出すって言つても……太陽の門か……後は通行証。どっちもバレそうだよねえ)

そうなると、見えざる帝国の滅却師特有の影を使った能力で逃げだすのが一番無難であらうと考える。

ならば、早く人目につかないところまで行つて準備をしまおうとするが、そう簡単に事は上手く進んでくれなかつた。

「バンビ、お前こんなところで何してんだ？」

「リル……ちよ、ちよつと外の空気が吸いたくなつたのよ！」

「なんだそれ……まあいい。そんな事よりまた料理作つてくれよ、いいだろ？」

「あ、ああ……その内ねーその内……」

今は少しでもこの場を離れなければと考えて、適当な理由を付けてなんとか話を逸らす事に成功したバンビエツタは、そのまま逃げるように離れて行く。

その後を追ってくる事は無いだろうと高を括り、今度こそ建物の外へと脱出した彼女は一先ず物陰まで移動する事にした。

そこでふと、とある時からバンビエツタの性格に影響が出始めた時の事を思い出した。前世の精神とバンビエツタの精神が混じつたからなのか、それとも前世の記憶を思

い出しかけていたからなのか、理由は不明ではあるが兎に角影響が出てきていたのだ。その影響を受けていたからこそバンビーズの面々への態度も変わり、彼女らのバンビエツタに対する態度も変わっていったのだろう。

そうなれば、あるいはゾンビを回避できる可能性も出てきてもおかしくないだろうと
考えてしまったのである。

(それでも……こっちにいるよりは逃げた方がましかなあ)

だとしても、この見えざる帝国に居るよりは遥かにマシかもしれないと考え、そのまま影の中へと入り込んだのだった。

千年血戦篇

千年血戦が幕を明けるんだが？

そして遂に、千年血戦が幕を明けた。

現世では一護がアズギアロと戦っている最中、尸魂界では雷鳴が轟いていた。

それは雀部の卍解である『黄煌厳霊離宮』により鳴り響いているもので、冬獅郎の氷輪丸と同じく天相従臨の能力を持ち、周辺の天候にまで影響を齎す強力な力を秘めていた。

「ク、クソが……なんで卍解を奪えねえ！一体どうなつてやがるんだ!!」

「別に大した事ではない。事前に情報を得ていただけの事に過ぎない」

「事前に……だと!?まさかテメエ!この裏切りモンが……!!いや、こいつが作られたのはテメエが逃げ出した後!ならどうやってこいつの存在を……」

「それを簡単に言う程あたしは馬鹿じゃないっての。とにかく、これであんたはお終いつて事よ。辛れえわねえ?」

「お前に与えられた聖文字とやらの情報も既に把握している。確か……大量虐殺だったか。他者を殺せば殺すほど強くなる能力で、殺す対象に敵味方問わないという事だが

……その前に此処で倒させてもらおう」

今この場でドリスコールの相手をしている者は、雀部とバンビエッタの二人だけであった。

只の隊士を連れた所で大量虐殺の糧になるだけであり、大勢で動いて見えざる帝国にこちらの動きを知られたくはないという考えもあつたからだ。

ドリスコールが靈子の槍を投擲するのだが、それはバンビエッタの神聖星盾によつて阻まれて無効化された。

更にそこに雀部が放つた数多の雷が降り注ぐ為、その身は次第にダメージを負つて行くが、彼は静血装で軽減しつつ雷に打たれながらも突進を始めようとしたのだ。

「舐めやがって……！俺はその程度じゃ止まらねえんだよ！」

「しぶとい奴ね……大人しくやられなさいよ！」

「此処は私が……」

雀部は合計十二条の雷の帯を全て斬魄刀に纏わせると、雷鳴の如き神速の一閃を繰り出していき、凄まじい雷撃が炸裂して吹き飛ばして見せた。

少し遅れてドリスコールが吹き飛んで行った場所が何処だか理解すると、すぐさま二人も其処へと向かつて駆け出した。

その場所は私室とも呼ぶべき執務室であり、総隊長は複数の滅却師と対峙していた

が、突然吹き飛ばされてきたドリスコールに驚いてしまっていた。

「ば、馬鹿な……!! いや、それでも五日後には、尸魂界は見えざる帝国によって殲滅させられるという事には変わりはない！我々の目的は果たされるのだ！」

「申し訳ありません元柳斎殿！執務室を吹き飛ばす事になってしまい……」

「こ奴が敵の幹部と言ったところか？良い、執務室など後で直せば済むことだ」

「なんと寛大なお言葉……」

幹部である滅却師が倒されて吹き飛ばされてきたことに、滅却師達は驚きを隠せない様子だった。

顔にマスクをしているので表情は分からないが、明らかな動揺が見受けられたので間違いないのだろう。

「逃がさんぞ!!」

「待てい!!」

雷撃と爆炎が同時に聖兵達へと放たれたが、それよりも早く彼等は影に潜り込むことによつて難を逃れたようである。

二人によつて倒されたドリスコールも回収されて行ったが、バンビエツタが既に彼らを持っていた通行証を奪った後だった。

そして、その通行証は直ぐに技術開発局の解析班によつて調べられたのだが、その通

行証は特殊な細工が施されているようであり、解析が出来ない状態になっていたらしい。

現状判明している事は、この通行証は滅却師にしか扱う事が出来ず、その為バンビエツタしか使うことが出来ないとの事だった。

そして、現世では流れ通り一護がアズギアロを完膚なきまでに叩きのめしていたが、バンビエツタは一つだけ思い違いをしていた事があった。

虚圏に攻め入る見えざる帝国の部隊を、キルゲが率いる狩猟部隊だと勘違いしていたのである。

実際はその狩猟部隊は虚圏が蹂躪された後に送られ、虚と破面から使える者を選別しているだけに過ぎず、虚圏を壊滅させたのは別の滅却師達なのだ。

ともかく、一護が虚圏へと向かいキルゲと戦っている最中に侵攻が始まる事に変わりはないため、バンビエツタもやるべき事をやる事にしたのである。

「今のところ彼女の言った通りに事が進んでいるヨ。黒崎一護が虚圏で滅却師との戦闘に入ったと浦原から連絡が来たからネ」

「ふむ……ならばそろそろ奴らが侵略に来るといふ訳か。全隊長に命ず……これより総力を以て敵を迎え討つ!!」

総隊長の号令の下、全ての隊が瀨霊廷の各所へと配備されて行ゆく、それぞれの役割を全うすべく各々の動きを見せ始めるのだった。

そして、青い火柱が上がり瀨霊廷のあちらこちらで確認され始め、ついに見えざる帝国の侵略が始まったのだった。

六番隊隊舎付近では、恋次はマスク・ド・マスキュリンと、白哉はエス・ノトと対峙をしていた。

この二人の聖文字も事前に情報が与えられてはいるが、それを差し引いても高い戦闘力を有してる事に違いがないので油断は禁物だろう。

「恋次、お前はそちらの大男を対処しろ。私はこちらの長髪の男を仕留める」

「分かりました隊長！」

「なんだ、ワガハイの相手は副隊長なのか。悪党は悪党らしく二人掛でもいいんだぞ？」

「あまり俺を舐めねえ方が良いぞ……！ 卍解!!」

「なに!! 副隊長は卍解を使えないのでは……まあよい！使えたなら使えたで奪うのみだ!!」

そう言うなりマスキュリンはメダリオンを取り出し、恋次の方へと向けて光を放つた。

すると恋次の卍解はそのメダリオンへと吸い込まれていき、次の瞬間にはマスキュリ

ンの手に渡る……と思いきや。

「うごっ……!? な、何なのだコレは……な、何故正解が奴の手に戻っていくのだ!」

「なんだ? 予想外の事が起きて困惑しているようだな」

「才前ハ陛下カラノ情報ヲ読ミ直セ……奴等ハメダリオンヲ無効化スル方法ヲ持ツテキルンダよ」

また、十番隊の隊舎付近では冬獅郎と蒼都が戦闘を開始していた。

氷輪丸と鉤爪がぶつかり合う激しい音と火花が飛び散り、一歩間違えれば死ぬであろう戦いが展開されて行き、周りの建物などにも大きな被害が出て行っていた。

そして、冬獅郎の氷輪丸が蒼都の胴を斬り裂いた……と思いきや、まるで鋼鉄を斬ったかのような感触を覚え、蹴り飛ばされて距離を取らされてしまった。

「情報通りの硬さだな……」

「能力が分かったところで僕を斬れないんじや意味がない」

「そうか……だが、てめえの腕は封じたぜ」

蒼都は自分の右腕が氷漬けになって動かせなくなっている事に気付いたが、そんな事はお構いなしに突っ込んで来た冬獅郎に対し、鉤爪による一撃を与えた。

凍っているにもかかわらず、まるで何の変哲もないかのような攻撃を繰り返してお

り、何度も斬撃の応酬が繰り広げられていた。

「やはり一筋縄じゃ行かねえか……なら、卍解！ 『大紅蓮氷輪丸』!!」

そして、二番隊の隊舎付近では碎蜂とBG9の戦いが行われていた。

BG9の体からは鋼鉄製の触腕が伸びて来ており、それらを掻い潜ったり捌いたりしながら接近した碎蜂は、雀蜂をその体に向けて突き刺した。

「なに……?!?雀蜂が……通らないだ?!?」

しかし、その体に雀蜂は突き刺さる事なく弾かれてしまい、これでは二撃決殺が決まらない。

それに加え、BG9の触腕はかなりの速さで蠢いており、時折碎蜂の体を掠めて傷を付け始めていた。

『お前の始解の情報は既に得ている。二撃決殺とは確かに強力だが、その刃が通らなければ意味がない』

「その通りだが……始解の情報を得ているという事は。他能力についても把握しているのだろうか?」

『勿論だ。お前の卍解の威力は既に知りえている。だが、どれだけの破壊力を有しているように、それも当たらなければ意味がない』

そう言った直後、BG9はコートの下からガトリング砲のような武器を出すと、一瞬で大量の弾丸を撃ち込んで来たのであった。

そして、ようやくバンビエッタも戦場へと到着するのだが、彼女はいつものラフな私服とは違う格好をしていたのだ。

それは、逃げ出す際に着ていた白い軍服を黒く染めただけの服であり、しまつてあったのをわざわざ引つ張り出して染めたのであった。

そして、今バンビエッタが向かっているのは粕村の方であり、その理由としては彼が本来闘うのはバンビエッタだったからだ。

そんな彼女は転生者であり、死神サイドへと加わっている為「本来とは違う誰かと戦っているのでは？」と、考えているからこそその行動である。

そして本来の聖文字のEの能力は爆撃だが、与えられた人物が違うのなら能力も違う物になっていると考えるのが普通であろう。

「てめえは……はっ！出たな裏切りもんがよ！」

「アンタは……確かヴェーク・グロース！」

「気を付けろ……こ奴、かなり強いぞ！」

粕村の攻撃を容易く防ぎながら余裕の表情を見せるその男は、只のナイフで斬魄刀を

受け止めると、そのまま蹴りを入れて狛村の巨体を吹き飛ばしたのだ。

更に追撃をかけるように駆け出して行くその姿はまさしく獣のようでもあり、バンビエツタは直ぐに完聖体を発動させ、神聖星盾をヴェーク目掛けて放った。

「遅えなあ！その程度の攻撃じゃあ俺には勝てねえよ!!」

すると、バンビエツタの神聖星盾を次々とナイフ一本で斬り裂いて行くので、靈子の剣を出現させて迎え撃った。

それに加えて地面から火柱を幾つも立たせて攻撃を仕掛けていき、物量で押し切る作戦に出ているのだ。

だが、次の瞬間にはバンビエツタ目掛けて雷撃が放たれてきたので、彼女は神聖星盾を再展開して受け止めた。

「バンビ……てめえ良くもまあこのこと顔出せたもんだよなあ……!」

「クソビッチが……裏切るとか何考えてやがんだよ」

「裏切りとか……そう言うのはよくないと思うの」

「ふうん……バンビちゃん、その服は何なの？わざわざ黒く染めちゃってさあ」

「アンタ達は……」

そこに現れたのは紛れもなくバンビーズの面々であり、しかも全員怒りの形相を見せていたのである。

いつもリーダー面をしていたくせに、いつの間にか逃げ出して死神側にいたとなれば、彼女らにとっては信じがたい出来事と言えるだろう。

千年血戦が幕を明けたんだが？

そして、数ヶ月の間寝たきりだった市丸も、再修行で戦闘可能なほどに回復したので参戦する事となった。

彼の目の前ではバズビーが指から火を熱線のように飛ばしており、市丸はそれを全て瞬歩を駆使して避けてみせていた。

「てめえ平隊士じゃねえな……いや、その銀髪……元三番隊隊長の市丸ギンか」

「よお知つとるね……まあこつちも、君が使う聖文字……やったっけ？灼熱の事はよく知ってるんよ」

「市丸……隊長……」

市丸の後ろには腕を焼かれた吉良イツルの姿があり、彼は腕を抑えたまま苦しそうに地面に横たわっていた。

イツルを逃がすにしても、先ずバズビーをどうにかしなければならぬのだが、そうやすやすと逃がしてもらえない程甘くはない様だ。

「イツル……ボクはもう隊長やないんやから、畏まった呼び方せんでもええって言うてるのに」

「おいおい、よそ見をしてる暇があるのか？」

「もつと下がるとき……巻き込まれても知らへんよ？」

市丸はそれだけ言うとバズビーの方を振り返り、神槍を構えて応戦を始めた。

放たれる熱線を避けつつ神槍を伸縮させてバズビーへぶつけていたが、そんな簡単に倒せる様な相手ではなく、なかなか決定打になるような攻撃を受けていなかった。

正解をしても良かったのだが、あれは範囲が広すぎて周囲に被害が及ぶ可能性があるので、迂闊に解放出来なかった。

それから戦況は拮抗したまま続き、時間だけが過ぎて行つた。

ユーハバツハとハツシユヴァルトの前に剣八が到着した時には、剣八は既に三人の星十字騎士団を倒していた。

だが、既に野晒を解放した剣八とは言えど、ユーハバツハには勝てなかったようで、無造作に地面へと転がされた状態になっていた。

「特記戦力とは言えどこの程度か……我々の情報を数多に有しているのならば、どれ程のものかと思つたが……買いかぶり過ぎていたようだな」

そして剣八にトドメが刺されようとしたところで、上空に凄まじい霊圧が出現した事と、もう一つ凄まじい霊圧がこの場に向かつてきている事に気が付いた。

上空の霊圧は一護のようであるが、本来ならまだキルゲと交戦中のハズで、その後キルゲの監獄の能力で足止めされることになるはずである。

だが原作以上に力を有し、既に滅却師としての力も開花させている今の彼を監獄で足止めできるはずが無い。

「黒崎一護か。随分と……いや、これも想定外の範囲内ではない……」

二人の周囲に無数の矢が降り注いで行くにもかかわらず、ユーハバツハはその場から動くことなく平然と立っていたが、その矢は当たる直前に消滅してしまった。

そして、凄まじい炎熱を纏いながら総隊長がこの場に現れたのだった。彼は一番隊の隊舎に居たのだが、ユーハバツハが戦場に出たのならば自らも出るしかあるまいと考え、急ぎ現場へ向かったのである。

「千年ぶりにゃな……ユーハバツハ。今度こそお主の息の根を絶つてやるわ」

「山本重國か……ハッシュユヴァルト、お前は黒崎一護の元へ向かえ」

「了解致しました」

ユーハバツハの命に従い、ハッシュユヴァルトはこの場へと向かってくる一護を迎え撃つべく動き出した。

一護は矢を放つて攻撃して行くが、ハッシュユヴァルトは剣を振るい難なく迎撃してしまい、そのまま一護へと斬りかかった。

天墜穿月で受け止め、そのまま斬撃の応酬が行われるも、一護は迂闊に攻め込んで行く事が出来ずにいた。

何しろ相手の聖文字「世界調和」ザ・バランスの力は、彼を中心に一定範囲内で起こる不運を、幸運な者に与える事が出来るのだ。

それ故、一護が幸運にもハツシユヴァルトへ攻撃を与えることが出来たら、それと同等の不運に見舞われる事になるので、必然的に一護は攻め込むことが出来ないでいたのだ。

「その様子を見るに、私の能力も知っているようだな……だが、その程度で私を倒せるとは到底思わない事だ」

「んな事はてめえに言われねえでも分かっただよ……！」

その頃、バンビエツタはバンビーズの四人を相手に戦闘を繰り広げており、一対四という圧倒的不利な状況に陥っている状況であった。

それでも善戦出来ている理由は、バンビエツタの実力が大幅に増したというのもそうなのだが、彼女が自身の能力を把握しているというのと、彼女らが一切連携を取れていないという事も理由の一つである。

「なんであたしと同じ能力を使っただよ……！」

「キャンディの能力だけじゃねえ、こいつバズビーの能力まで使ってやがる……」

キャンディスの聖文字である雷霆と、バズビーの聖文字である灼熱の能力を使ってくるバンビエツタに困惑していた。

その隙と、連携の取れていない彼女らを神聖星盾でうまく分断しながら戦う事で、優位に立ち回れているというのが現状だ。

ミニーニヤの『力』^{ザ・パワー}は、その名の通り凄まじい怪力を発現させる能力ではあるが、近づかれなければそこまでの効力は無いと言えるだろう。

ジゼルの『死者』^{ザ・ゾンビ}は、ジゼルの血液を被ったものをゾンビにすることができるとい能力であるが、滅却師に対しては死んでいなければゾンビに出来ないので、今のバンビエツタにはまだ無意味と言っている能力とも言える。

「バンビちゃん、何で裏切りなんかしちゃったの……？」

「そんな事説明したって……理解できないわよ」

「そしたらボクのゾンビにしてえ……良いよねえ？」

リルトットの『食いしんぼう』^{ザ・グランド}は、何でも喰らいつくすことができる捕食能力であり、それが消化されるまでの間喰った相手の能力を使用できるといものだ。

神聖星盾が食われたらその能力を使われる可能性があるが、喰われない様に注意すれば問題はない。

現状で注意すべきはキャンデイスとリルトットの二人なのだが、だからと言って残りの二人が弱いという訳では無いのだが。

すると……

「四の舞、白鯨！」

巨大な氷球が突如として現れたと思つたら、勢いよくはじけ飛んで辺り一面に降り注いでいき、それとともに冷気が周囲を包み込み始めていった。

その技を放つたのは他でもないルキアであり、彼女の斬魄刀である袖白雪の能力により生成された氷の像だったようだ。

本来ならルキアはミニーニヤの不意打ちによつて倒されているのだが、それよりも先にバンビエッタの方に来た為に無事だったようだ。

「無事か、バンビエッタ殿！」

「そつちこそ無事みたいね。それより、ちゃんと聖文字の能力は頭に入ってる？」

「分かつておる、あの者の血に触れなければ良いのだろう？」

「ちつ……やっぱりこつちの能力は全部筒抜けつてわけかよ」

「はっ！今更副隊長が一人増えた位でどうこうなる訳でもねえだろ!!」

そこから少し離れた場所では、狛村とヴェークが激しい攻防を続けていた。

ヴェークのナイフからは蒼い炎が霊子の刃となって飛ばされて行き、その炎に触れた物は全てが燃えていく様を見せつけられる事になった。

しかもその炎は消える事無く延々と燃え盛り続け、その場に居た者は次々と火達磨になっただけだったのだ。

(元柳斎殿の炎とは比べるまでもない火力しかないのだが……延々と燃え続けるのは厄介だな)

「どうした犬つころ？ さつきまで威勢が良かった割に大したことねえじゃねえか……尻尾巻いて逃げてもいいんだぜ」

「敵を前に逃亡するわけが無からう!! 卍解!! 『黒縄天譴明王』!!」

「何をするのかと思えば卍解か。ただ的がデカくなっただけじゃねえか」

「それだけで終わると思ってるのか？ まだ終わりではないぞ!」

その言葉と共に狛村の霊圧が急激に増大し始めていき、それと同時に黒縄天譴明王が消滅してしまっただけだった。

只消滅しているのではなく、それらの鎧は全て狛村自身へと装着されて行くと同時に赤く染まっただけで、遂には全身真っ赤な見た目になったのである。

鎧の隙間からは赤い霊圧が炎のように噴き出して行き、まさに地獄の赤鬼と言っても遜色ないほどの姿となっている。

これは卍解と纏威を併せた状態であり、絶大な力を発揮するが体への負担が凄まじく大きい諸刃の剣でもある。

「ほお、中々おもしろい事ができるんだな」

「この力は使い勝手が難しいのであまり使いたくないのだが、この状況では仕方あるまい」

狛村の今の状態は、卍解である黒縄天譴明王の力を鎧としてその身に全て纏う事で、圧倒的な破壊力を有したまま弱点であった小回りが利かないという問題を克服したものである。

そこにヴェークは高速で移動しつつナイフで斬りかかっていくのだが、それに対して狛村は防御姿勢を取ってそれを受け止めた後に反撃に移る。

狛村の一撃は容易く地を粉碎する程の威力を誇るのだが、それら全てをヴェークは避け続けていた。

（この者の聖文字は情報がない……先ずはどのような能力を持っているのか探らなければなるまい）

「おいおい防御してばかりかよーこれじゃ面白くねえだろ!!」

ナイフから青い炎の斬撃を連続で飛ばし始めたが、それを狛村は斬魄刀で斬り払って対処していた。

一振りするたびに凄まじい剣圧が発生しているが、それほどの風圧を受けても青い炎は消える事無く燃え盛っているのだった。

蒼都と戦闘をしていた冬獅郎もまた、熾烈な戦いを繰り広げている真つ最中である。現在は激しい攻防が続いており、徐々に冬獅郎が押しつけてきている状況であった。

「その正解……やはり情報通り、いや情報以上の強さだ。ならば僕も本気を出さねばならないようだ」

「なるほど、それがてめえの完聖体って奴か……」

完聖体を発動させた蒼都の姿は、一言で言うのならば鋼鉄の龍と言っても差し支えない様相となっている。

背には鋼の翼が二枚生えており、両手は鋼鉄の鱗に覆われて鋭い爪が生え、頭部には角のようなものが生えていた。

そして、先程とは比べ物にならないほどに速く動き始めており、まるで弾丸のような速度で冬獅郎に向かって一直線に突き進んで来ていた。

咄嗟に氷輪丸でその攻撃を受け止めたのだが、あまりの衝撃に押された拳句に後方へ吹き飛ばされてしまった。

「チッ………何て重さしてやがる！」

「今のを受けてよく無事でいられたね。流石は隊長格と言ったところかな」

今の一瞬で冬獅郎は蒼都の両腕を凍らせていたが、それはあつと言う間に砕かれてしまい、何の役にも立たなかつた。

そのまま爪による連撃を繰り返してきたので、氷輪丸を使って次々に捌いていき、地面から氷棘を作り出して刺し貫こうとする。

が、その氷棘は蒼都の体に当たった瞬間に砕け散ってしまい、まるで効果が無いと言つてもいい状態であつた。

「言つただろう、君では僕の体には傷をつける事はできないと」

「ああ……確かにそうだな。だが、これならどうかかな」

そう言つた冬獅郎は自らの霊圧高め始めて行き、とある十刃と戦つた時同様に卍解の状態から更に纏威を發動させた。

しかし、前に發動させた時よりも若干姿が変わつており、背の翼は六枚に増えてよりスマートになり、両手両足も氷の甲殻に包まれているようだった。

そして、以前は背後に浮かぶ氷の結晶だけが赤かつたのに対し、今では全ての氷が赤く染まつており、まさに「大紅蓮」と呼べる姿へと変化していたのだ。

「氷が赤く……？ けれど勝つのは僕だよ……蛇^{シエツンラフオ}勁爪!!」

そう言つて両手を合わせて突き出すと、そこから靈子が蛇のような形となつて冬獅郎

へ向かっていった。

それに対して冬獅郎は氷の壁を作り出してその攻撃を防ぐと、その氷の壁は無数の氷柱となつて蒼都へ襲いかかつて行った。

対する蒼都はそれらを砕いて防いでいくのだが、その間には既に冬獅郎は次の攻撃の準備に移っていたようである。

「氷竜葬列！」

「くっ……龍^{ロシシラアオ}勁爪!!」

冬獅郎の氷輪丸から氷の竜が放たれると、蒼都はそれを霊子の竜にて迎え撃つたが、その霊子の竜は瞬く間に噛み砕かれてしまっていた。

そしてそのまま蒼都へと噛みついていき、次の瞬間には彼を完全に凍てつかせたのであった。

千年血戦が幕を明けたんだが？②

B G 9 のガトリングから打ち出され続ける大量の銃弾を避けながら距離を詰めようと試みたが、今度は触腕が伸びてきて妨害を始めたのである。

碎蜂はその触腕を掴み取って投げ飛ばしてそのまま地面へと叩き付けたが、B G 9 はすぐに起き上がって再び攻撃をしてくる。

今度は大量のミサイルを撃ち放って来たのを見て咄嗟に回避行動をとったものの、追尾性能を持っているミサイル群を全て避けることができず、爆炎に飲まれてしまった。

「瞬間・風神戦形！」

『その形態は情報にはないが……対応が変わるわけでもない。命令通り——』

「遅い！何処を見ている!!」

爆炎が吹き飛んで視界が明瞭になると、そこには風神の羽衣のような物を背に顕現させた碎蜂の姿があった。

そして一瞬にして間合いを詰めて強烈な一撃を叩こむと、それと同時に凄まじい暴風がさく裂してB G 9 を吹き飛ばしていった。

吹き飛ばしと同時に碎蜂は更に追撃をかけて吹き飛ばし、体勢を立て直す間も与えず何度も空中で乱打を叩きこみ、トドメの一撃で地面へと叩き落として大きなクレーターを作りだした。

纏っていた鎧のような物はあちこちにヒビが入っており、かなりのダメージが入っているようだった。

「まだ息があるのか……化け物め」

『もとより……息などありはしない』

「機械人形か……涅の喜びそうな話だ」

『よもやこれを使わされる事になるとは思わなかったが……こちらの情報があるのならば知っているのだろうか?これが完聖体だ』

その直後、背には機械の羽が四枚生えていき、両手にはガトリングは四つになり、両肩にレーザー発射口が出現していた。

その姿はまさしく殺戮マシンとでも言った方がいいような風貌となり、BG9はガトリングを碎蜂へ向けて一齐に放ち始めた。

単純に先ほどの四倍の弾幕が襲って来る上にレーザーまでもが放たれており、着弾するたびに壺子の爆発が起こっている。

「チツ……!とんだ殺戮兵器を送り込んで来たものだな!」

『陛下より皆殺しにしろとの命令を承っているのな……早々にお前を殺し、他の者共を殺しに行かせてもらう』

その言葉に答えるように、更に射撃速度を上げてきたことで回避スペースがなくなっていくが、辛うじて致命傷だけは躲しながら攻撃に転じようとしたその瞬間だった。

いつの間にか足に触腕が巻き付いており、一気に体を持ち上げられて振り回される事になったのである。

幾つもの建物に激突し続けながら回され続けたが、纏威を何とか発動させて触腕を吹き飛ばすことに成功した。

「くっ……瞬間と纏威を両立させるのは流石にキツイが……」

『正解……ではないようだが、今更何をしようと思駄だ』

そして再び無数のガトリングによる弾幕が展開されて行く中、碎蜂は自らの周囲に结界を張り巡らせて行く。

ガトリングとミサイルを赤い光線で相殺していき、レーザーを避けながら距離を積めて行くが、多すぎる弾幕は徐々に结界を削り取っていった、

そして今度は無数の触腕が碎蜂へ殺到していくが、それを両足の刃で次々と斬り払っていき、同時に左腕の盾をBG9目掛けた射出していた。

勢いよく飛び出した盾は弾幕によって破壊されたが、その時には既に碎蜂はBG9の

背後へと移動しており、両足の刃で瞬時に数え切れぬほどの斬撃を繰り出した。

『ば、馬鹿な……これ程の力を持つているなど……情報には……!』

「二体いつの情報の事を言っているのかは知らんが、これでトドメだ!」

相手が機械であれば命など無く、二撃決殺も意味がないだろうが、それでもバラバラになる程に斬り刻んでしまえば良いだけの事。

そして、トドメの一撃と言わんばかりに左手に霊圧を集束させ、そのまま頭部を殴り潰すつもりで思いつき突き出した。

その瞬間に凄まじい暴風がさく裂していき、BG9は粉々に砕け散ってしまったのだった。

恋次の正解を奪えない事に対して少し戸惑うマスクュリンだったが、そんな事はお構いなしと攻撃を繰り出していった。

パワーとスピードのある拳や蹴りを連続的に放つ攻撃を連続で仕掛けてくるが、その攻撃を難なく躲したり流したりしている。

そして、恋次は一瞬の隙を突いて狒狒王の拳を叩きこんで吹き飛ばしていた。

「ぐおっ!?!ば、馬鹿な……!だが、ワガハイは声援がある限り負けん!!」

マスクュリンは付き人のジェイムズの声援を受けると、傷が治ったりパワーアップし

たりするという能力を有しているようで、その力を使えば簡単に再生が可能となっていた。

ジエイムズの方は戦闘能力は皆無だが、こちらもマスキュリンの声に応じて復活してしまうという厄介な代物だったのである。

「聞いちゃいたが、マジで厄介な野郎だな……!!」

「喰らえ!! スター・フラッシュ!!」

瞬間、マスキュリンの額から星型の光線が放たれたので即座に回避すると、連続して星型の光線が放出されていった。

それを避けたりオロチ王の刃で弾き飛ばしていくと、光線を放つのを止めて勢いよく突撃してきたので、それに対して狒狒王で掴みかかり、そのまま地面へと叩き落した。

しかし、やはりマスキュリンは声援によって復活したので、すぐさま起き上がってきて打撃戦を仕掛けてくる。

「効かん効かん効かん!! 悪党の攻撃など効かんぞおおおっ!!」

そう言いながら猛ラッシュをかけてくるマスキュリンだが、それに対して恋次は冷静に攻撃を防ぎ続けている。

復活するたびにパワーアップをしているため、徐々に威力や速度が増してきており、少しずつ攻撃をガードしきれなくなっていくた。

そしてマスキュリンの左ストレートが炸裂し、ついに恋次は吹き飛ばされ建物の壁に直撃してしまった。

「くそ……一撃で決めねえとやべえな、こりやあ」

「まだ息があるのか悪党め！良いだろう……吾輩の正義のパワーを見せてやるぞ！さあジエイムズ！吾輩にありったけの声援を!!」

ジエイムズのありったけの声援を受けると、マスキュリンは完聖体を発動させて筋肉が隆起していき体格は一回り大きくなっていく。

着用していた衣服は破けてなくなり、いかにもレスラーと言う風貌に変わっていった。

「スーパースター……ラリアットオ!!!」

掛け声と共にラリアットを放つと凄まじい風圧と衝撃波が放たれていき、直撃していないにもかかわらず恋次を吹き飛ばしたただけでなく、周りにあった建物の悉くを半壊させてしまった。

そして更に追い打ちを掛けるように突進してきて掌底を放ってくるが、何とかその一撃をギリギリで回避した。

だが、その一撃の余波だけでもかなりの威力があり、ともに受けてしまえば今度こそ終わりだろう。

「どうした悪党めが！真の力を發揮した正義の……」

「てめえこそ、油断しすぎなんじゃねえか？」

恋次の狒狒王の手にはいつの間にかジェイムズの手が握られており、それに気を取られた一瞬のスキをついてマスキュリンへとオロチ王の刃を突き刺したのだ。

そしてそのまま両者ともに上空へと飛ばすと、恋次は狒狒王の腕をオロチ王の顎に添え、霊圧を一気に高めてオロチ王の切っ先に霊圧の球体を作り上げた。

「双王獣撃砲!!」

「ば、馬鹿な!?ワガハイが……悪党なんぞにいいいいいいいい!!」

そして放たれた巨大な光線は二人を飲み込み、マスキュリンは断末魔の叫びを上げ、ジェイムズはそんな彼に助けを請うかのように悲鳴を上げた。

巨大な光が収まった時には二人の姿は跡形もなく消え去っており、恋次は一息ついた後次の敵を倒すためにその場から走り去っていった。

見えざる帝国の侵攻が開始されてから数十分が経過したが、総隊長である山本元柳齋重國はやはり本物のユーハバッハには勝つことが出来ず、その身を両断されて死亡してしまっただ。

そしてユーハバッハの命で星十字騎士団は影から聖兵を次々と送り込み、数で尸魂界

を潰してしまうつもりだろう。

「そろそろ零番隊が出るころか……その前に引くぞ、引いて奴らがそろろうのを待つ」

「待てよ……! 何処に行くつてんだ!? てめえ等の方から攻めてきておいて、そのまま帰れると思つてんのか!」

「黒崎一護、やはり……」

「良い……奴は私が潰す」

そして一護は矢を連射すると同時に背後へと回り込み、月牙天衝を放つたのだが、それ等をユーハバツハは剣で容易く弾き飛ばしてしまった。

そしてそのまま一護へと斬り掛かりと、一護はそれを月牙天衝を纏わせた天墜穿月で受け止めた。

それにより発生した衝撃波により二人が戦っていた一帯は崩壊して行き、双方共に高速で移動しつつ斬撃の応酬が繰り返されていく。

一護が吹き飛ばされると無数の矢が一護へと向かって放たれていき、一護も矢を連射して相殺させていっていたが、次の瞬間には既にユーハバツハは一護の目の前まで迫っており、手に持っている剣を振り下ろしていた。

その一撃を受け止めたが勢いよく地面へと叩き付けられ、その衝撃で周囲の瓦礫などが吹き飛んでいくと、そのままユーハバツハはゆっくりと地面へと降り立ってきた。

一方の一護は立ち上がり態勢を整えつつ左手に霊子の剣を作り出すと、そのまま砂埃の中から飛び出し、ユーハバツハへ向かって一気に突き進んで行った。

「よもやそこまで力を使いこなしているとはな……」

「何の事だよ……!!」

霊子の剣と天墜穿月の二刀流による連続攻撃を仕掛ける一護に対し、それらを片手で持った剣一本だけで受け止めていくユーハバツハ。

幾度となく斬撃の応酬が続いたが、次の瞬間には霊子の剣が砕かれてしまい、そのままま首へと剣を突きつけられてしまった。

「やはり静血装か……それもこれ程までの硬度を持たせるとはな」

すると一護の体から凄まじい霊圧が吹き荒れていき、それは爆発するかのような勢いで周囲に広がっていった。

その影響によってユーハバツハは一護から距離を取らされる事になり、その隙に一護は再び霊子の剣を生成し、矢として天墜穿月へとつがえていった。

「月牙……熾天衝!!」

そしてその霊子の剣をユーハバツハに向けて放つていくと、その剣は矢となつて霊圧が螺旋を形作りながら回転し始め、真つ直ぐにユーハバツハに向かって飛んでいった。

だが剣の一振りでも上空へと弾き飛ばされてしまい、遙か遠く空で大爆発が起こった。

「凄まじい力だ……連れ帰ってゆつくりと再教育してやるつもりだったが、そう悠長にもしていられんらしいな」

「くっ……！そんな簡単に……言う事を聞くとでも思ってたのか……!?!」

とは言えど、現状の一護では先程放った月牙熾天衝が一番威力が高い攻撃なので、それを容易く弾き飛ばされた事でかなりの動揺を隠せずに居た。

ユーハバツハは剣を構えて一護へと歩いて行くが、次の瞬間には影がユーハバツハの体に纏わりついて行くのが確認出来た。

「影の領域シャッテン・ペライヒ圏外での活動限界です……見えざる帝国へお戻りください」

「馬鹿な、まだ時間では……そうか、藍染惣右介……奴の小細工か」

ユーハバツハはそう言うのと剣を収めたまま踵を返し、歩き去って行くこうとしていた。

しかし一護も黙って見ているわけにはいかないため、すぐさま天墜穿月を構えて矢を放とうとしたのだが、それよりも前にハツシユヴァルトが間に入って立ちふさがったのだった。

そして、ユーハバツハとの戦いから生存したという幸運に合わせるかのように、世界調和の能力で天墜穿月を折られるという不運に見舞われるのだった。

一時侵攻が終わったんだが？

見えざる帝国からの第一次侵攻を何とか退けることは出来たものの、死神側はそれなりの被害を被ったと言わざるを得ないだろう。

しかし、それでも原作よりは遥かに小さい物だったので、バンビエツタは一先ず胸を撫で下ろしているのだった。

特に聖兵達がなだれ込むと同時に平子へと合図が送られ、彼の正解である『逆様邪八宝塞』が発動した事も大きかったといえるだろう。

逆様邪八宝塞の能力は、敵と味方の認識を入れ替えるというものであり、それによって敵の聖兵同士を相打ちさせたのだ。

(まあ、それでも一時侵攻は何とかなったって感じね……)

しかし問題なのが、楼十郎と拳西の二人が重傷を負った事であり、それもお互いの正解で攻撃し合ったかのような奇妙な怪我だったのである。

当然平子から距離は離れていたのに逆様邪八宝塞に巻き込まれたわけではないので、恐らくペペ・ワキャブラーダの聖文字「愛」の能力によるものだろう。

また、狛村もヴェークによって倒されてたらしく、命に別状はないものの重傷を負っ

て治療中との事だ。

「正解と纏威を併用した狛村を倒したとなると、かなり高い戦闘力を持っていると言えるだろう。

（まさか一時侵攻でこの三人がやられるとは思わなかったけど、二次侵攻までには治るわよね？）

そして、バンビーズの四人を相手にしていたバンビエツタとルキアもそれなりの傷を負っていたが、ルキアの方は原作とは違って重症ではない為すぐに治療されたようだ。

一先ず、現状で流れが違う部分を整理しようとバンビエツタは考え始めた。

まず、現時点で星十字騎士団は恋次がマスキュリン、碎蜂がBG9、そして冬獅郎が蒼都を撃破しているという事が挙げられるだろうか。

エス・ノトは撃破に到らなかったが、それでも白哉が死ぬ寸前の重傷を負うことなく戦闘を終える事ができている。

だが、ドリスコールを倒した事により生き延びた雀部も、結局はユーハバツハの手によって殺害されて死んでしまったらしい。

「師匠……！無事だったみてえだな……」

「一護……あんたこそ大丈夫そうね、結構怪我してるけど」

四番隊の隊舎にて治療を受けたバンビエツタは、次々と運ばれてくる怪我人を眺めな

がら一護に話しかけていた。

一護の卍解である天墜穿月もへし折られているので、これも流れ通り打ち直すために零番隊の居る霊王宮へと向かう事になるだろう。

「一護……いやはお主は無事であつたか……！」

「なんだよルキア……そつちこそ無事みてえじやねえか」

「てめえの事だからそう簡単にくたばるとは思つてなかつたがよ……無事ならそれに越したことねえからな」

「恋次……お前も来てたのか、まあお互い無事で何よりつてとこか？」

恋次も本来なら重傷を負っていたのだが、ルキアと同様に軽傷で済んでいたため、比較的早めに回復している様子だった。

そしてその後、流れ通り一護達は霊王宮と向かう事になったのだが、バンビエツタは何故重傷を負っていない白哉とルキア、恋次まで連れて行かれることになるのか疑問だった。

重症だからこそその傷を治すために連れて行かれるのだが、別にそれほど重傷ではなかつた三人を連れて行かなくてもよいのではないだろうかと思つたからだ。

すると、兵主部一兵衛がバンビエツタの方を見て口を開いた。

「そうそう、おんしも連れて行くからのう」

「連れて行かれる理由は……十分あるわね……」

「積もる話は上についてからだな」

確かに、詳しい話は霊王宮に行つてからだろうと考え直し、とりあえずは黙つて霊王宮へと向かうことにした。

霊王宮へと打ち上げられてからは先ず麒麟殿に向かい、そこで湯治をして負傷を癒すのである。

身体から血と霊圧を絞り出す能力を持っている『白骨地獄』と血と霊圧を補充する能力を持っている『血の池地獄』という温泉に交互につかれば、尸魂界で治療不可能だった重症者も完治させる事が可能だとされているのだ。

「よし……てめえは先に行つてろ。後の奴らはまだ時間がかかるからな」

「はあ……う？なんであたしだけ」

だが、どういう訳かバンビエツタは入らなくても良いと言われてしまったのだ。

確かに彼女の傷は尸魂界でも治療可能な程度だったが、それを言うなら他の四人も同じなので、一体どういう事なんだろうかと思つてしまう。

「いいから先に行きやがれつてんだ！」

麒麟寺天示郎にそう言われたバンビエツタは仕方がなく一人で先に行つている事にした。次に向かう所は臥豚殿であり、そこでは料理を食べる事になっている。

しかし当然それは只の料理ではなく義魂の神髄が込められた、自らとは全く別の霊圧を体内に取り入れる事により、自らの力の階層を上げると言う効果があるのだ。

「よくきたねえ！ さあ、おもてなしするよお！」

（知ってはいたけれど……滅茶苦茶あるわね、これ）

ほんの僅かな時間で大量の料理を作り上げた曳舟桐生に対して若干引いている様子ながらも、取り敢えず席に着いて食事を取り始めるのだった。

味もさることながら、やはり力の総量が上がったことによりより高レベルの戦いに挑む事ができるようになった事に、喜ぶべきか悩むべきなのかバンビエツタは難しい表情になってしまったのだった。

「そう言えばあんた、現世に居た時は義魂の真似事をしてたみたいだねえ」

「ああ……そういえばそんなこともしてたっけ」

完全に忘れていたわけでは無いにしろ、今ではあまり気にしては居なかつた事だった。だが、やはりこの神髄を再現することはバンビエツタでは無理な事なのだろう。

実際は力を上げる事を目的とせず、単に虚に対する抵抗を手に入れるために作つた丸薬だったが、やはり本物には及ばないといったところなのだろうか。

そして次は鳳凰殿に向かうという流れになるのだろうが、そもそもバンビエツタは滅却師であり斬魄刀を持っていないので、そこには用はない。

そうしてそのまま兵主部一兵衛の元へと向かう事になり、そこでようやく話が始まる事となった。

「さて……先ずは何から話すとするか。先ずおんしも知りたいと思つている事じやろうが……その体には二つの魂が入つておる」

「ま、まあそれは大体想像がついてたわよ……」

その二つの魂は完全に同化してしまつている状態らしいのだが、そもそも何故こんな状態になつたのかは不明なのだそう。

そもそも、バンビエツタではない方の魂が別世界から来ていること自体がおかしい事であり、それが原因で何らかの不都合が発生しているのかと言えば、それも不明との事だ。

「二つ魂があるという事は、おんしには二つ名前があるという事になるな」

「それで？バンビエツタの方は良いとして、もう一つの方は分かるの？」

「それは……教えられん！」

「はあ……!?何でよ！教えてくれても良いじゃない!!」

「今の言い方はちと語弊があつたな……正しく言うくと、教えたくとも教えられんのじゃ」

もう一つの魂は外から来たためか、この世界の物ではないモノは彼でも名前を知る事ができないのだそう。

今更前世の名前を知ったところで何だと言うのかとも思っていたのだが、何となく気になっていたのも事実であり、聞けないというのなら仕方がないだろうと割り切れる程度のものだ。

しかし、今のところ此処に呼び出された理由が何一つ分かっていなかった。どうして自分がこの世界に連れてこられたのか、その理由が全く分からないのだ。

「あたしがここに呼ばれた理由ってのは何なのよ、教えてもらえるんでしょうね」

「ふむ……では聞くが、おんしは何処まで知っておる？」

「それは……どういう意味なの？」

「この世界の事……霊王様の事……そして未来。一体どこまで知っているのかと聞いとるんじゃ」

「全部って訳にはいかないけど、それなりの事は知っているつもりよ。この戦いの結末とかもね」

実を言うと、彼女は兵主部一兵衛があまり好きではないのだ。

今の世界を存続させるには多少の犠牲はやむを得ないと割り切っていて、ユーハバツハに一護が倒された場合は一護を新たな霊王として人柱にするつもりだからだ。

というよりは、そもそも倒されることを前提にして一護を送り出しており、元より勝てるなどとは思っていなかったのだろう。

誰かの犠牲の上に成り立っている世界はどうかと思うが、そうしなければ存続できない世界なのは確かであり、簡単に善悪をつけるべきではない事なのだが。

そして「霊王の意思は大局を動かす緩やかな流れ」という、霊王の意志で物事の大まかな流れが決まってしまうというのも考えものだろう。

「それで……一体何のために行動しておるのだ？」

「……別に何も？ただ、あたしの知る結末以外にならない様にしたいと思ってるだけよ」
少なくとも、原作ではキチンと一護がユーハバツハを倒して勝利を収めているのだから、この世界もその方向に進めていきたいというのが彼女の思いなのだ。

兵主部一兵衛の思い描いている一護を犠牲にした未来など御免こうむるし、仮に世界が崩壊するような事態になっても困るのは自分なのだから。

「本当ならなんであたしがこの世界に来ちゃったのか知りたかったんだけど……まあ、分からないなら仕方ないわねえ」

「他に聞きたいことがあるら答えるが……どうじゃ？」

「そうね……だったたら、白哉と恋次……それにルキアを霊王宮に連れてきた理由は？別に尸魂界でも治せる程度の怪我だったでしょ」

「それは霊王様のご意志じゃな、詳しい事は分からんが」

結局、分かったことは自分の前世の名前が彼にも分からないという事くらいであり、

大した情報は得られなかった。

それから一先ずは体を休めるようにと言われた為、言われた通り少し休んでから第二次侵攻に備えての修行をすることにしたのだった。

二次侵攻に向けて準備をするんだが？

その一方で、尸魂界の四番隊隊舎では今も怪我人の治療の為に慌ただしい時間が過ぎている最中だったのだが、その中に市丸の姿も見受けられた。

彼はバズビーの足止めをしていたのだが、市丸から攻撃に転じる事はなく、あくまで足止めに徹していたので軽傷ですんでいたのだ。

「乱菊……？そんな見んでも大丈夫やって、大した怪我やないんやし」

「そうは言っても、貴方一人で足止めしていたんでしよう？無茶しすぎだわ。せつかく拾った命なんだから、無駄にするような事は止めてちょうだい」

「分かっているって。ちよつと過保護すぎへん？心配してくれるのは嬉しいんやけどな」
そう言つて笑つて見せた市丸は、すぐに表情を変えて真剣な顔で言葉を続けた。

実際問題、彼もそこまで酷い怪我をしたわけでもなく、特に体に障害が残ったわけでもないのだ。強いて言うのなら、体のあちらこちらに火傷をおつたくらいで、既に治療を終えていて後は治るのを待つだけなのだ。

それでも今回の戦闘で負ったダメージは決して少なくはなく、乱菊としては一度市丸が死にかけているのを目前にしているので、どうしても不安になってしまふのだとい

う。

「ボクばかりに構ってられへんやろ？ 怪我人が多すぎて、人手足りてないから乱菊だつて働いてるんちゃうん？」

「そ、それはそうなだけで……」

実際、四番隊の隊舎に運ばれてくる怪我人の数が多すぎて、四番隊だけでは到底手が回っていない状況となっている。

その為、他の隊の者も手を貸して何とか対応しているところであつた。

だが、問題はそれだけでは無い。

総隊長である山本元柳齋重國の死後、総隊長は京楽春水に任される事になったのだが、彼はある事に頭を悩まされている様子だつた。

というのも、バンビエッタによつて見えざる帝国の情報をもたらされ、それによつて相手が使う聖文字の能力は知ることが出来たものの、知つていようが対処のしよりの無い能力が数多く存在しているのだ。

そうになると、やはり更木剣八の力を完全に覚醒させる必要が出て来るだろうが、それができるのは初代剣八である卯ノ花烈こと卯ノ花八千流ただ一人。

(けれど、そうなるとどちらかは死ぬことになる……)

劍八が生き残った場合は完全に力を覚醒させたという事であり、卯ノ花が生き残った場合は更木劍八を超えたという事である。

つまり、どちらが生き残っても強大な戦力を得る事が出来るわけだが、敵の情報がこちらの手にある今、そこまでする必要が果たしてあるのかと思う部分もあった。

そして、場所は変わって『尸魂界・中央地下大監獄 最下層・無間』では、二人の劍八が対峙していた。

片や千年前にユーハバツハ等を撃退した殺伐とした殺し屋集団の一人、初代劍八である卯ノ花八千流。

片やそんな彼女を少年時代に追い詰めた程の実力を持つ、現最強とも言える死神である更木劍八。

周囲には何もなく暗闇だけが周りを包み込んでいるだけだが、その二人が放つ凄まじい霊圧の所為で空間全体が歪んでいるようにすら見える程だ。

何故二人がそんな場所にいるのかというと、新たな総隊長となった京楽の指示を受けたからである。

この無限に等しき広さを持つ空間であれば、二人が全力で戦っても被害は殆ど出る事はないだろうと判断されたためだ。

「御託は良い……さっさと始めようぜ。勝てば隊長、負ければ罪人……単純な方が俺に

は分かり易くていい」

「そうですね、それでは……殺し合いを始めるとしましょうか」

剣八が野晒を解放し、卯ノ花が纏威を発動させると、次の瞬間には戦いの幕が上がることになったのだった。

その頃の一護はと言うと、鳳凰殿にて斬魄刀の打ち直しをするハズだったが、とある事情により現世へと送り返されていた。

その理由は自らのルーツを知るためであり、父親である一心の話を聞くことになったのであった。

「……前に言われたことがあんだ。「死神が滅却師の力を教わったくらいで使える訳が無い」ってよ」

「そうか……なら自分がどういう存在なのか……大体見当がついてんじやねえか？」

「俺が死神の力を使えるのは親父が死神だったからだろうし……なら、俺が滅却師の力を使えるのは……」

「そうだ、お前のかあさんは滅却師だったんだよ。それもかなり腕の立つヤツだ」

それから一心は、過去に何が起きたのかを話して行つた。

一護の中に虚の力が封じられていること、そして9年前に黒崎真咲が死ぬことになつ

た理由などを語り、またそれがどういった原因で起きたのかも説明していく。

それを聞いた一護は再び霊王宮へと戻る事になり、今度こそ斬魄刀の打ち直しを行う事になったが、一護はいつの間にか自分の精神世界にいたのだ。

そして、再び斬月を目にした時、一護は考えないようになっている事をはつきりと理解する事になる。

「どう言う事だよ斬月!!」

「聞いた通りだ……そして、私は斬月ではない」

そう告げた瞬間、一護の精神世界の空間に亀裂が入ると共に一気に崩壊を始めてしまう。

今ままで斬月を名乗っていた者は一護の滅却師としての力であり、ユーハバツハでありユーハバツハではない者であるからだ。

「なら……今までの全部嘘だったのかよ!?!」

「嘘ではない……私が最初に名乗った名以外はな」

彼が一護に斬魄刀の扱いを教える時も、斬魄刀の力を扱いきれなくなった時も、そして命の危機に瀕した時も、一護を本当に救っていたのは彼ではなく、虚の力だったのだ。

そして本当なら一護を死神にさせたくなど無く、だからこそ一護の力を抑える事のみ集中していたのである。

「お前を死神にしてはならぬ。死神となれば殺さねばならぬ」

「あんたは俺の滅却師の力なんだろ……？ そんなに俺を戦いから遠ざけたかったんなら、何でその力を貸したんだよ」

唯一の誤算は、そんな一護の元へとバンビエツタが訪れてしまい、死神としての力だけでなく滅却師としての力も発現してしまったことだろうか。

本来ならば抑えてしまうつもりであったが、死神としての道を進む一護を見守つていく内に、彼にも変化が起きたのだろう。

一護を本当に想うのなら、彼の意思を尊重して助けとなるべきだと、そう考えたからこそ結果的に彼に力を与えてしまったのだ。

「そして私は今こうして……身を引ける事に、喜びさえ感じている」

一護が強くなった事、その成長をずっと傍らで見守る事が出来た事は幸せであったと語る。

一護は斬月に急いで駆け寄るが、その時には斬月は殆ど消えており、彼の残した剣だけが残されていたのだった。

その剣は今まで抑えていた本当の力であり、真の斬魄刀『斬月』であった。

「それと、最後にコレを渡しておこう。私は最早只の残滓に過ぎんが……それでもお前に与える事が出来る」

一護は自分の中に力が流れてくるのを感じ、その能力が何なのかは本能で理解が出来た。

そして、一護は目の前の真の斬月へと手の伸ばしていく。

(斬月……俺はあんたが誰だっつかまわねえ。あんたは違うって言うかもしれないけど、あんたも……あいつも、どっちも斬月だったんだ)

そして一護の意識は現世へと戻り、目の前の斬魄刀を握り締めた。

その瞬間、周囲にあった大量の水がその熱と霊圧で干上がっていき、あつという間に全てを蒸発させて消し飛ばしてしまった。

一護の手には二振りの斬月が握られていたのだが、片方が白くて片方が黒くなっていったのだ。

柄も鏝も無いのは相変わらずだが、両方とも同じ形をしており、浅打のようなシンプルな見た目となっているのだ。

(俺は、俺自身で戦う……ありがとう、斬月。あんたは俺だ……)

それからしばらくして、そろそろ第二次侵攻が始まるであろう時間が迫ってきた頃。一護以外の者が集まり、再び尸魂界へと戻る準備をしていた。

何故一護が居ないのかというの、己の斬魄刀の真の能力を解放するために、兵主部一

兵衛の元に残つてとある修行を行っているからである。

そして、白哉やルキア等は本来よりも遥かに軽傷だったため、本来の療養期間を修行の時間に割り当てる事が出来たので、原作よりも早く戻れる可能性も高いのだ。

(唯一の心配なのは……二次侵攻を早められた場合かしら)

一時侵攻でユーハバツハが尸魂界に対する認識を改めていたら、下手をすれば既に始まっている可能性もあったのだから。

だが、今それを考えた所で意味などないと判断し、バンビエツタは先行して尸魂界へと戻る事にしたのだった。

見えざる帝国の本拠地である場所では、バンビーズが会議をしている所であった。

彼女達は以前よりバンビエツタが此処からいなくなっていた事を知っていたのだが、この目で確かめるまでは信じられないと考えていた。

死神側に居ると聞いた時も信じられなかったし、真実を確かめたかったが、搜索に行く事すら禁じられていたので確かめようもなかったのだ。

「なんなんだよ……クソツ!! アイツ本当に裏切つてやがんじやねえか……!」

「今までのは何だったんだ……あいつ……オレ達をだましてやがったのか?」

キャンデイスとリルトットからは怒りの声が上がリ、ミニーニヤも同じ心境のようで

齒痒そうな表情をしていた。

自己中心的で我儘しか言わなかった時のバンビエツタはどうでも良かったのだが、まるで人が変わったかのようにバンビーズの面々を大切に扱うようになる、不思議と心を許すようになっていたのである。

バンビエツタの作る料理は美味しかったし、そんな日々が全て嘘だったと考えると悔しさが込み上げてくるようだ。

「信じたくはなかったけど、バンビちゃんは私達の事を何とも思ってたのよ」

そんなミニニーニヤの眩きを聞いた二人は途端に押し黙り、何とも言えない気持ちに苛まれる事になってしまった。

少なくとも今まで仲良くやっていたと思っていたのは間違いなかったのだが、いざ真実を突きつけられると複雑な気分になるのも無理はない話だろう。

そんな沈黙が訪れてから数秒後だろうか、そこでようやくジゼルが居なくなっている事に気が付いたのだった。

第二次侵攻が始まるんだが？

バンビエッタの予想通り、第二次侵攻は予想よりも早く開始されてしまっていたようで、瀨靈廷が見えざる帝国に侵食されて行っている様子も確認出来た。

前もって対策を施していたとはいえず、それは万全とは言えなかったため、残されている場所と言えば技術開発局と四番の隊舎くらいなものだろうか。

そうなると、見えざる帝国はそこを重点的に攻めて来るに違いないので、その二つの防備を堅めておく必要があるだろう。

そして、四番の隊舎から少し離れた場所では、楼十郎と拳西と狛村の三人がヴェークと戦っていた。

だが、隊長格が三人だということにもかかわらず、未だに優勢なのは彼らではなくヴェークの方であり、彼の異様なまでの戦闘力の高さに、三人は焦りを感じていたのだ。

「何故だ……何故ボクの金沙羅舞踏団の音楽が……通用しないんだ」

「音楽奏でるだけなら引っ込んでやがれ!!うるせえんだよクソ野郎が!!」

楼十郎の金沙羅舞踏団は、音楽を操り幻覚を見せる事であり、その幻覚は実際にダメージを負わせてしまうものだ。

その能力は間違いなく発動してヴェークにダメージを与えているはずなのだが、火に焼かれようが雷に打たれようがお構いなしに動き続け、平然と襲い掛かっているのである。

そしてそのまま楼十郎の腹部へとナイフを突き刺し、顔面を殴り飛ばして他の二人へと向かって行った。

「てめえ……良くもやりやがったな!!」

「温い拳だな……それが本当にパンチのつもりなのか？」

「な、何だと……!?!」

「パンチつてのはな……こうやるんだよ!!」

拳西の鐵拳断風による衝撃を左手に受け続けているにもかかわらず、それに構わず殴り返した瞬間には拳西は顔面に拳を叩き込まれてしまう。

何度も何度も拳を叩き込まれていき、最後には腹を殴られて吹き飛ばされて壁に叩き付けられたのだ。

「後はテメエだけだな……犬っころ」

（まるで更木剣八を相手にしているかのようなようだ……敵にこのような強者が居るとは……!!）

既に一度敗北している狛村だが、明らかに第一次侵攻の時よりも強さが増しているよ

うに思えていた。

あの時は本気を出していなかったのか、それともあの時以上の力を持っているのか不明だが、どちらにせよこのままでは勝てないのはまず間違いないだろう。

狛村も前回同様に卍解と纏威を併用しているが、やはりまったく言っていないほどに歯が立たない状態だ。

「いくら馬鹿見てえに攻撃力があってもな……当たらなきや意味がねえよなあ!!」

「ぐぬう!」

狛村はどうかして防御に徹するも徐々に防ぎ切れなくなっており、このままなら押し切られるのも時間の問題であろう。

今はまだ身に纏っている明王の鎧があるので何とか持ちこたえてはいるが、それが無ければすぐにでもズタボロにされいたはずだ。

そうこうしていると、狛村の纏う甲冑から軋むような音が聞こえて来たので、もうすぐ壊れるのは間違いない。

「終わりだ犬っころ!!」

止めと言わんばかりに顔面へと拳が叩き込まれ、鎧を砕いて顔を覆う仮面が砕け散ってしまふ。

更に何度も追撃を受け続けてしまい、最後に強烈な拳をくらって吹き飛ばされてしまっ

た。

また別の戦場では奇妙な現象が起こっているようだった。

一度倒したハズのBG9が何故か復活しており、再び碎蜂と交戦状態に入ったのである。

そして冬獅郎の元にも倒したハズの蒼都が姿を現しており、バズビーと共に襲い掛かって来たのである。

「てめえは俺に一度倒されたハズ……何で生きてやがるんだ？」

「……」

「なんだ？一度倒したハズのヤローが生きていて驚いてやがんのかよ」

蒼都は無言のまま攻撃を繰り返して行き、その背後からバズビーが炎を噴出して攻撃を行っている。

その炎は氷の壁を容易く溶かしつくしてしまう程の威力があり、喰らってしまえばそれだけで致命傷になりかねない代物だったのだ。

「オイオイオイ!!逃げてばかりじゃねーか!それでも隊長か!」

相手が一人ならまだしも、星十字騎士団を二人も同時に相手をするのは非常に厳しいものがあつたのだ。

それに加え冬獅郎の水輪丸は水であり、バズビーの聖文字の能力は火である為に、相性としては良く無いと言えるだろう。

ともかく今は回避に徹しながら、わずかな隙について攻撃するのが現状取れる最良の選択だろうと考えていたのだった。

「そんな攻撃、届かねえって言ってるんだろ!!」

その氷柱も全て炎で燃やし尽くされてしまう為、蒼都のせいで接近する事さえも出来ずにいる状態だ。

しかし、二人は連携が全く取れておらず、むしろお互い邪魔にさえなっているように見えるので、付け入るスキは確かにあるかもしれないと考えている時だった。

「いい加減面倒臭えな……バーナーフィンガー2!」

「こいつ、仲間諸共やるつもりなのか……!?!」

バズビーの人差し指と中指に炎が集中して鉤爪の様に振りかぶり始め、そのまま蒼都諸共に冬獅郎を両断しようとして迫って来たのである。

だが、次の瞬間にはバズビーの頭上から水の刃が数多に降り注ぎ、彼はその水の刃を打ち消さざるをえなくなる。

「助けは必要か? 日番谷冬獅郎」

「お前は……ティア・ハリベル! どうしてここに居るんだ……!?!」

「……私は一度敗れて捕らわれとなった身だが、バンビエツタに救出されてな。一言で言うのならば、恩を返すためだけでも言うっておこうか」

見えざる帝国の第一次侵攻が始まった際、既に尸魂界に居たバンビエツタが何故戦場に遅れてやって来たのか。

それは、ユーハバツハが銀架城から出るのを見計らい、ハリベルを救出しに行ったからであった。

四番隊舎の付近では、どういう訳か死神達が見境なく暴れまわっている光景が繰り広げられていた。

その中心にクヴェレ・ヴァツサーの姿があり、時折斬りかかって来る死神を殴り飛ばしながらほくそ笑んでいる。

「ガツガツ来る男は嫌われるわよ？ って、もう聞こえてないかしら」

そんな彼の周囲では、本来倒すべき滅却師を目の前にしても、狂ったように暴れまわるだけで全く手をつけられない状態になっている隊士たちの姿があった。

一体どう言う能力を使っているのかは不明だが、間違いなくクヴェレの聖文字である事だけは間違いないようだ。

イツルも既にクヴェレによって戦闘不能状態に追い込まれてしまっており、手足をへ

し折られた状態で倒れている状態だ。

「なんや……情報にない聖文字みたいやけど、これは厄介な能力かもしれへんなあ」

「あら良い男……そう、私の聖文字は、ってイツけなーい！危うくバラしちゃうところだったわー!!」

「アンタ見てると……ある破面の事思い出すわ」

そう言う市丸の視線の先には、破面のシャルロッテ・クールホーンと似たような感じを受ける男の姿がそこにある。

彼自身は攻めてこないのだが、何らかの能力によつて暴れまわっている隊士達が襲い掛かって来るために、そちらの対処に追われている状態だ。

藍染を騙すという建前がある時ならば容赦なく隊士達を斬り捨てていただろうが、今はそうもいかないのでなるべく峰打ちを心がけながら攻撃を捌いているのである。

同様に乱菊も戦っており、同様に襲い掛かってくる隊士達を無力化している状況であった。

「迂闊には近づけへんし……どうしたもんやろなあ」

「まだ私達が無事なところを考えると、範囲が限定されているのか、それとも人数が限定されているのか……どちらにしても面倒な相手であることに変わり無いわね」

「嫌だわ……アタシってあんたみたいな女嫌いなよ。だから……貴方は狂っていて

ちようだい？」

クヴェレが指を鳴らした瞬間、乱菊は横にいた市丸へと襲い掛かって来たのだ。

どうやら彼女もクヴェレの聖文字によって精神に異常を来してしまい、正気を失ってしまったらしい。

市丸に対して斬魄刀を振り下ろして攻撃を加える乱菊であったが、その一撃を受け止めている市丸は冷静に見えるが、内心は激怒しているのが手に取る様に分かった。

「……あかん、このままじゃアカンわ。周りの被害とか、そんな悠長な事言つてられへんわ。卍解『神殺鎗』」

普段の飄々とした態度からは想像出来ない程に怒気を露わにする彼は、その神殺鎗の切っ先をクヴェレへと向けた。

そしてすさまじい速度で伸縮させて突きを繰り出すが、クヴェレはその突きを避けて見せる。

初見ではまず避けられない程の速度ではあるが、死神側の情報も敵側にある以上、避ける事が出来るのも当然と言えよう。

「あら、あたしばかりに構っていいのかしら？彼女を助けなくても良いの？」

「……ッ！」

理性があるときの乱菊ならば並みの隊士に遅れを取ることは無いだろうと断言出来

るが、今の彼女は普通ではない。

正常な思考も判断も出来ない状態の彼女が、隊士の群れに突っ込んで行ったらどうなるのかは考えるまでもない話であった。

市丸は咄嗟に乱菊の方へと向かおうとしたが、それよりも早くクヴェレの放った蹴りにより吹き飛ばされてしまった。

「いいわねえ……その表情！そそるわあ！気分が良いからアタシの能力教えてあげちゃうー！」

クヴェレに与えられた聖文字は「狂^{ザ・ルナティック}人」であり、彼の能力の対象になった者は誰でもあろうと狂いだすというものだ。

それを受けたものは自身が傷つこうとも、死ぬことになろうとも、ただひたすらに暴れまわるだけの狂戦士となってしまうのである。

「あらあらどうしましよおー！このままだとあの女死んじゃうかもよおー」
「そんな事……させるわけあらへんやろ……！」

神殺鎗の槍を伸縮させようにも、クヴェレは乱菊が射線に入る様に立ち回るため、下手に動くことが出来ない。

その間にも次々と襲いかかってくる隊士達を相手にせねばならず、時折クヴェレ自身も攻撃してくるせいでなかなか打開策が見えてこない状況が続いている。

すると何者かが勢いよく乱菊とイヅルの下へと飛び込んで行くと、乱菊の意識を奪つてそのまま二人を抱え上げて市丸の下へと着地した。

「何でこんな事になつてんだかわからないけど……危なかつたわね」

「あら、貴女は裏切り者じゃない。それにそつちのは……何で貴方までそつちにいるの？」

「別にいい？バンビちゃんの方に居た方が楽しいかな？つて……そう思つただけだよ？」

乱菊を助け出したのはバンビエッタなのだが、その隣にはどういふ訳かジゼルまでいるのだつた

一方、修行を続けている一護はというと、ただ真つ直ぐ前に向かって進んでいるだけだつた。

今彼が居る場所は霊王の許可なしでは立ち入ることが出来ない神聖な場所であり、一護はここで死神を超える器かどうかを確かめられているのであつた。

鳥居と紙垂が幾つも並ぶ空間を、ただ真つ直ぐと進んで行く。一歩進むだけで凄まじい疲労感が襲い掛かり、汗が全身から溢れてくる。

一歩進むたびに肺は酸素を求めて悲鳴をあげ、意識は遠のきそうになる。それでも一護がここで立ち止まる理由にはならないために、必死で前へ前へと進んで行くのだつ

た。

そして、進むたびに妙な記憶を見事になるのだが、それがなんなのかは今も分からない。

ただ一つ言えることは、自身の記憶には存在しない何かという事だけであった。

第二次侵攻が始まったんだが？

それはバンビエッタがソウル尸魂界へと戻ってきてすぐの事で、これからどうしようか考えていた時の出来事だった。

既に第二次侵攻は開始されており、あちらこちらで戦闘がおこなわれているのがわかるのだが、そんな時にバンビエッタの元に何者かが近寄ってきた。

「待ってたよバンビちゃん」

「ジジ……!? アンタ、まさかあたしをゾンビにするつもりで……!?」

「んく……それも良いんだけど、バンビちゃんの方に付いた方が楽しそうかあ……つて」
「は………?」

突然現れたジゼルに驚く間も無く話しかけられたと思つたら、突拍子のないことを言われてしまう。

今の状態になる前の記憶を思い返してみても、いつも何を考えているのか分からないような人物だったが、少なくとも嘘をついている雰囲気は感じられなかった。

何故こちらに来たのか疑問に思つたのだが、本人は面白そうだからと思つていただけに説明も何もあつたものではない。

「ま、まあいいわ……それより、他の三人はどうしたのよ」

「さあ？でも、そのうち来るんじゃないかなあ〜」

「それと、そつちの聖兵達は何なの……？なんか、ゾンビっぽいけど」

「これ？その辺に倒れてたのをゾンビにしてきたんだよ」

いつの間にそんな事をしてたのだろうかと思うのだが、彼女がそういう事が出来ることは知っているの、特に驚くことはない。

そもそも何故一人だけで此処ににいるのか不明だが、今は見えざる帝国との戦いに集中すべきだろうと気持ちを切り替えて行動を開始する事にした。

それがほんの少し前の出来事であり、今はこうしてクヴェレの前に立っているのだった。

「助かったのはいいんやけど……その子、敵やなかったん？」

「あたしにもよく分かんないんだけど、なんか……味方になってくれるっぽいとか……」

市丸からすれば意味の分からない状況だろうが、それよりもクヴェレをどうにかしなければ死者が増えていく一方だろう。

現に先ほど吹き飛ばした隊士達は気絶しているだけだが、再び起き上がって暴れ始め

ているのだから厄介極まりないものである。

「どうやら気絶させたくらいでは狂人の効果は切れないらしく、未だに狂乱状態のまま
で暴れまわっているのだ。」

「ジゼルだったかしら。何でそっちに居るのか分からないけど、バンビエツタ同様に裏
切ったのなら殺さないといけないわね」

「何言っちゃってんの？……オカマ野郎のクセに」

「あんたこそ男のくせに、女々しすぎてキモイのよ」

「は……？」

二人の間に火花が飛び散っている幻覚が見えるような気がしてしまうほどピリつい
た空気が漂っているが、ジゼル自体の戦闘力は皆無である

その血を使って誰かをゾンビにし、自分の代わりに戦わせるというのが基本戦術なの
で仕方ない話だが、それを差し引いても二人の相性は非常に悪そうである。

「その能力はさあ、他人を強制的に狂わせるみたいだけど……もう死んでる人には効か
ないよねえ」

「チツ、けどそのゾンビ達は所詮只の雑魚。その程度でアタシをどうにかできるとは思
わない事ね！」

クヴェレに向かって次々とゾンビ化させた聖兵が押し寄せていくと、それを彼は次々

と吹き飛ばしていく。

吹き飛ばされる度にゾンビは起き上がって襲い掛かっていくが、それをものともせず
に殴り倒していくのであった。

「悪いけど、こんな所で時間食ってられないのよね……！」

バンビエツタは神聖星盾を全てクヴェレ目掛けて飛ばしていき、あらゆる角度から攻
撃を開始させていく。

ゾンビの対処もしなければならぬのに、それに加えて四方八方からの射撃が襲いか
かってくる。

「しつこいわね……！こうなったらアタシも完聖体つかっちゃうわよ……！」

クヴェレがそう言った直後、まるで白いテープを直接地肌に貼り付けたかのような、
衣服とは呼べそうもない何かを着た姿になり、両手には霊子の鞭が握られた。

ムキムキの筋肉を見せつけるかのようなその姿だが、次の瞬間には彼から赤いオーラ
のような物が噴出すると、辺り一面にまき散らされていく。

バンビエツタは咄嗟にジゼルを抱えて市丸の元へと下がると、周囲に神聖星盾を展開
して結界を張り巡らせる。

「良い判断ね。アタシの発したオーラに触れてたら、今頃大変なことになってたわ」

そのオーラに触れた者が狂乱状態に陥るのは当然のことなのだが、完聖体の状態の狂

人は更に凶悪なものへと変貌する。

それは狂化した者は強制的に脳のリミッターがハズレてしまうと云う物で、本来出せる筈のない力を引き出させてしまう事になる。

更に付け加えるのならば、クヴェレが敵と認識した物にのみ攻撃を加える狂戦士のよ
うな状態になってしまふのだった。

粕村は鎧を砕かれて満身創痕となつてしまい、楼十郎と拳西も満身創痕で戦闘不能状態となつてしまった。

そこに悠然と立っているヴェークは余裕綽々といった表情であり、もはや勝敗は決したようなものであった。

もうこれまでかと思われたその時、突如として巨大な霊圧を感じ取つたヴェークが背後を見ると、卯ノ花が立っていた。

「誰だてめえは……？」

「四番隊隊長卯ノ花烈……いえ、初代剣八……卯ノ花八千流。今はそう名乗りましょう」
「はっ……！ 雑魚の相手は飽き飽きしてたところだ、相手してもらうぜ……！」

まるで二匹の化け物が相対しているような霊圧が周囲へと拡散され、お互いに睨みあいながら殺気を放っている。

先に攻撃を仕掛けたのはヴェークの方で、その手に握るナイフを振るったかと思うと、炎の斬撃が複数発飛んでいく。

それを斬魄刀で全て消し飛ばしていくと、その炎の向こう側向こう側からヴェークが迫って来ていた。

振り下ろされたナイフを斬魄刀で受け止めると、そのまま吹き飛ばしては追撃を与えるために斬魄刀を振るう。

「良いぜえ！ やっぱり戦いつてのはこうじゃなくちゃ面白くねえ!!」

「よく吼える……はたして何時まで保つ事やら」

すると、ヴェークの手足が白い手甲と足甲に包まれていき、そこから蒼い炎が吹き上がっていった。

そして、一瞬の間に卯ノ花の懐まで潜り込んで強烈な一撃を与えようとする。

それを斬魄刀で受け止めたのだが、凄まじい衝撃と蒼炎が襲いかかり、そのまま後方へと吹き飛ばされてしまったのだった。

地面に着地した卯ノ花はすぐに立ち上がって反撃しようとするのだが、その時には既に眼前に迫っており、顔面に向けて蹴りが繰り出される。

だが卯ノ花は脚を掴んで止めてしまうと、そのまま地面へと叩き付けて更に斬魄刀を振り下ろした。

それをヴェークは受け止め、空いている手で下から殴り上げると、凄まじい勢いで蒼炎が吹き上がって卯ノ花を呑み込んだのだ。

「どうした!? こんなんでくたばる程柔なヤツじゃないよなあ!」

「貴方こそ……その程度の炎で殺せるとでも思っていたのですか?」

蒼炎から出てきた卯ノ花は纏威を使っており、その手には赤くて歪な形の刀が握り締められていた。

その刀を地面へと突き刺すと、足元から次々と赤い棘が突き出してヴェークに向かって伸びていく。

それに対してナイフへと蒼炎を纏わせると、地面を斬り裂いて蒼炎の壁を作り出し、迫る無数の棘を次々と焼き尽くしていった。

しかしそれで終わる筈もなく、いつの間にかヴェークの真上へ跳躍していた卯ノ花が上から襲ってくる。

その刃を受けて止めて握りつぶしたが、すぐさま逆の手に赤い刃が作り出されて首元を狙っていた。

ヴェークは後方に飛んで回避しながら、蒼炎による斬撃を飛ばして襲うが、卯ノ花は両手に赤い刃を作り出すとその攻撃を相殺させて行く。

だが、赤い刃が蒼炎によって焼かれ始めたので、すぐさま刃を消す事にした。

（蒼炎は消えずに燃え盛っている……不可解ですね）

「どうした？ 炎が消えない事がそんなに不思議か。なら、冥途の土産に教えてやるよ。俺に与えられた聖文字は『永^{ジ・エターナル}遠』様々な物に永遠を付与する事ができる能力だ」

そう言いながらヴェークは更に蒼炎を燃え上がらせていき、自らの全身へと行き渡らせると、ナイフへと纏わせていた蒼炎も更に燃え上がり、一振りの刃の様に変化させた。

そして次の瞬間、卯ノ花とヴェークは目にも止まらぬ速度で衝突し、激しい斬撃の応酬を続けて行った。

しかし、その度に蒼炎が卯ノ花を焼いて行き、少しずつではあるものの着実にダメーシが蓄積されていった。

「そんなもんかよ……だったら期待外れも甚だしいぜ！ もつと本気で殺し合いたいんだよお!!」

「勝手にこの程度と思つては困りますね……正解『皆尽』」

卯ノ花がそう呟くと同時に、背後に浮かんでいた肉雫^クの目から血のように赤い液体が大量に降り注いでいく。

それは見る間に卯ノ花が着ている肉雫^クと融合した死覇装の色が赤く変化していつており、辺り一面が血だまりの様に広がっていく。

「これで終わりです……」

「はっーそりゃあこっちの台詞だー！」

卯ノ花は赤い液体を斬撃として飛ばして攻撃を行うのだが、ヴェークはその斬撃に合わせて自分の放った蒼炎を飛ばすと、両者の間で激しくぶつかり合った。

辺り一面に赤い液体と蒼炎が飛び散っていく中、二人は凄まじい剣戟を繰り広げていく。

先程同様に蒼炎が卯ノ花を焼いて行くのだが、次の瞬間には治って傷痕すら残さずに回復するという状態が続いていた。

「はははーてめえマジでバケモンか！回復が速すぎるぜ……！だが、それ以上の速さで斬り刻んでやればいい話だろうがよ!!」

「やれるものならやってみなさい」

凄まじい速度で連撃を叩き込むヴェークに対し、同じく高速の剣舞で対抗する卯ノ花。

二人の刃がぶつかるたびに凄まじい火花と衝撃波が生まれたが、斬撃の応酬を繰り返す度に卯ノ花の一撃は重さを増して行っていった。

そして、ついに蒼炎を纏ったナイフが卯ノ花の刃によって打ち砕かれたその時、胴を一閃して切り裂いたのだった。

「ぐ、まだ……くたばってねえぞ……!!」

「しづとい男ですね、本当に」

ヴェークは斬られながらも拳を突き出したのだが、卯ノ花はその腕を斬り飛ばして更に胴へともう一閃振り下ろした。

そしてそのまま崩れ落ちるように倒れ込んでしまい、動かなくなってしまった。

「貴方の聖文字は永遠と言いましたね？ 確かあらゆるものに永遠を付与できるとか……ならば何故自らの命に付与しなかったのですか？」

「戦いつてのは……死ぬか……生きるかだ……そんなくだらねえ……戦いなんざ……できるか……よ」

そのままヴェークは完全に絶命してしまうと、卯ノ花は静かにため息を吐き捨てて卍解と纏威を解除する。

そして辺り一帯を焼いていた蒼炎も消え去っていくと、卯ノ花は急いで三人の治療を始めるのであった。

やがて一護の目に異変が起きる。本来ならば一つしか無いハズの瞳、その周りに四つの瞳が浮かび上がる。やがてそれは消えて行くが、進むたびに謎の記憶を垣間見る現象はまだ起こる。何が起きているのか一護も理解出来ないが、確実に何らかの影響を受けているのは明白だった。しかしそれでも、この先に進み続けなければならない。

やがて一護はの足が止まる。止まると同時に彼の体に膨大な力の本流が流し込まれ、それが全身を駆け巡りる感覚に一護は目を見開き叫び声を響かせる。

「が……ああ……ぐああああああああ!!」

体の中を駆け巡るその力は一護自身を飲み込まんとするかのように暴れ回り、ついにはその体を侵食して行く。異常なまでの力の奔流に一護の体は悲鳴をあげ、大きく仰け反って行く。

やがてその奔流は収まっていき、一護は元の状態に戻っていく。荒くなつた呼吸を整えつつ、再び前に向かって進み始める。

そして遂にその場所を通り抜け終わると、一護は次の修行へと移っていくのだった。

第二次侵攻が始まったんだが？②

冬獅郎の元へと現れたハリベルは既に帰刃のその先を解放した状態であり、ハリベルの持つ靈子の刃が蛇腹劍の様に伸びて地面を斬り裂いていった。

その度に無数の水柱が地面から吹き上がっていったが、バズビーの炎で瞬く間に蒸発してしまつたのである。

「日番谷冬獅郎の氷を一瞬で溶かすだけの事はあるな……一筋縄では行かないか」

「何で此処にいるのか知らねえが……俺達の味方をするって事でいいんだな？」

「オイオイオイ……誰かと思つたら、一度俺達にやられた負け犬の破面じゃねえかよ。またやられに来たつてか？笑わせてくれるぜ!!」

確かにハリベルは一度やられているが、その時はネル達を逃がさねばならなかつた上に、ユーハバツハやら何人もの星十字騎士団が攻めてきたからである。

だが、今はそんな事よりも目の前の脅威を何とかしなければと考え、水槍を複数飛ばして攻撃を仕掛ける事にした。

冬獅郎も同じように水槍を飛ばして追撃を行うが、それは全てバズビーの炎で消し飛ばされると、その後ろから蒼都が飛び出してきて冬獅郎を攻撃する。

その爪を氷輪丸で防ぐと、ハリベルの霊子の刃が蒼都に巻付いて行き、そのまま地面へと叩き付けて行つた。

カスケード
「断瀑」

そして、地面へと叩き付けられた蒼都に高水圧の激流が襲い掛かかり、蒼都は為す術も無く呑み込まれていく。

それを横目で見ながら冬獅郎は卍解の状態から纏威を発動させ、バズビーへと無数の氷柱を飛ばすと、それに対し熱線を飛ばして溶かそうとし始めた。

しかし、赤い氷は表面が少し溶けた位であり、そのままバズビーに向かって突き進んで行く。

「チツパーバーナーフィンガー4」

右手から刀剣のような形状の炎を発生させながら振るうと、赤い氷柱を全て斬り裂いていくと同時に凄まじい爆炎を生み出した。

すると、先程激流に飲まれた蒼都がハリベル目掛けて襲いかかって来たので、虚閃を放ち迎撃する事にする。

それは蒼都の鋼鉄によって弾かれてしまったので、今度は彼自身を水球の中に閉じ込め、更に冬獅郎がその水球を完全に氷結させて封じ込めた。

「動きが単調すぎる……やはりこいつは本物じゃねえな」

「しかし……仲間がやられているのに助けないとはな」

「仲間だ……？別に同じ組織の人間ってだけで、仲間のつもりはねえよ」

そう言いながらもバズビーは完聖体を発動させると、熱線を連射し二人を攻撃し始める。

頭に光輪が浮かび、背中には火がブースターの様に噴射されているだけというシンプルな見た目だが、先程よりも段違いの強さになっているのは明らかだった。

冬獅郎はすぐさま氷壁を創り出して攻撃を防ぐと、ハリベルはバズビーの頭上に水槍を数多に出現させる。

そしてそれ等が一気にバズビーに向かって降り注いだのだが、その全てをバズビーは避けようとする様子が見られなかった。

「バーナーフィンガー2・ツヴァイト！」

次の瞬間、両手の人差し指と中指に炎が集中して鉤爪の様に振り払われたのと同時に、全ての水槍を蒸発させた。

その炎は離れた場所にいる二人にまで飛び移る程の勢いだったが、ハリベルが膨大な水を瞬時に作り出し、冬獅郎がそれを瞬時に凍らせて氷壁を生成して防いでいく。

しかし、かなりの速度で溶かされて行つたので二人はその場を離れると、今まで立っていた場所が真っ赤になって溶けていた。

「厄介だな、あれほどの火力を持ちながらも機動力も高いとは」

「ああ……だが、別にあの野郎を倒す必要はねえ。今は足止めしてくれりやそれで十分だ」

「オイオイ、悠長におしゃべりしてる暇があると思ってる……」

そこで突如として凄まじい衝撃音が聞こえたので全員が上空を見上げると、遮魂膜を突き破って落下してくる巨大な隕石が目についたのである。

途方もない大きさのそれが落ちてしまえば、瀟々たるどころか尸魂界が破壊しつくされてれてしまうだろう。

「何だ……アレは……」

「おいおいおい……笑えねえぞ……グレミイの野郎なにをしゃがったんだ!」

その隕石は今現在剣八と戦っているグレミイ・トウミューの聖文字「ザ・ウェイジョナリイ夢想家」の能力で作りに出されたものだった。

しかし次の瞬間には、その隕石は剣八の野晒によって粉々に砕かれて四方に飛び散ってしまう。

飛び散っていった欠片は他の死神で破壊していき、少しでも被害を少なくする為に奮闘していた。

そして、それからほんのわずかな時間が経ったところでグレミイは倒され、それに

伴って蒼都とBG9も消滅して消えていったのであった。

そして、未だにクヴェレの放つ狂人のオーラに翻弄され続けているバンビエツタ達は、徐々に追い詰められていきながら戦い続けていた。

バンビエツタ一人だけならどうにでもなっただろうが、戦闘不能の乱菊とイツルを抱えながら戦うのは非常に困難である。

(神聖星盾と外殻静血装の二重結界で防ぎきれれると思っていたけど……早くどうにかしないと面倒ねえ)

狂人のオーラ以外にも、そのオーラによって狂戦士と化した隊士達が結界を破壊せんと攻撃を続けている事も大きな問題だった。

幾ら結界が破壊されないとは言えど、無理矢理力を引き出されている隊士の体は限界を迎えてしまい、もう既に何人も倒れてしまっているのだ。

結界を張り続けなければならぬ以上、この場から離れられない状況だが、上空から何かが降下して来る様子を感じ取った。

「特記戦力の黒崎一護……！あんたをぶつ殺せばどんな褒美が出るかしらね!!」

「皆が暴れまわってんのはためえの仕業か……?」

「そうよ！さあ、私の能力で……」

「わりいけど、速攻で終わらせるぜ」

そう言つて一護はクヴェレの方に右手をかざすと、彼が放出していた赤いオーラが消え去つて狂戦士と化した隊士達が次々と気を失つて行く。

どう言う理屈か不明だが、クヴェレの能力を無効化して隊士達の狂化状態を解いてしまったらしい。

「な、なんでアタシの能力が……けど、アタシの強さはそれだけじゃないのよー」

クヴェレは両手の鞭を縦横無尽に振るうのだが、一護は軽く斬月を振るつてあつさりとしてそれを両断し、そして一瞬のうちに彼の懐に潜り込みんで一閃を放つ。

あまりの速さに防御する事が出来ず、そのまま胴をを大きく斬り裂かれて鮮血を撒き散らした。

「ち、ちよつと……強すぎ……でしょ」

「少し遅くなつちまったな……大丈夫か? 師匠」

「ししよう……バンビちゃん、こいつバンビちゃんの何なの?」

「いや、別に只の弟子つてだけで……」

ジゼルが怪訝な表情を浮かべるのに対し、当の本人のバンビエツタは困った顔をしながらも事実を言う。

しかし、今はクヴェレの能力の被害者や乱菊とイツルの治療が先なので、皆は四番隊

の隊舎で治療を受ける事になった。

だが次の瞬間、バンビエツタ目掛けて雷撃が放たれたので反射的に彼女も雷撃を放って相殺する。

「ジジ……いなくなつてたと思つたら、てめえまで裏切るうつてのわ！」

「だつてえ……バンビちゃんがないとつまらないもん。それに、こつちの方が楽しそうだったし？」

「普段から何考えてるか分かんねえ奴だとは思つてたが……」

バンビーズの残りの三人もそれぞれが武器を構え、バンビエツタとジゼルもそれぞれの武器を構えた。

そして一護も再び斬月を構えると、三人が一斉に襲い掛かってくる。

まず最初にキャンデイスが雷撃を複数叩き込んでくるので、バンビエツタも同様に雷撃を数多生み出してそれを防ぐ。

しかし、その直後に背後からミニーニヤが拳を繰り出してくるが、一護がそれを受け止めて投げ飛ばして地面へと激突きさせる。

するとリルトットが食いしん坊の能力で喰らい付いて来たので、神聖星盾の結界を張り巡らせて攻撃を阻む。

「この……調子に乗ってんじゃねえぞ！ ガルヴァアノジャベリン」

「月牙天衝」

キャンディスは雷槍を放ったのだが、それに対して一護は斬月を軽く振るって月牙天衝を飛ばす事で反撃した。

軽く振るっただけにも拘らず、今までのよりも威力の高い月牙天衝を受け、キャンディスの放った雷槍は消し飛んでしまう。

すると今度は、三人は神聖滅矢を連射してこちらを攻撃して来るのだが、一護等はその全てを難なく弾き飛ばして行つた。

「そーいや……こいつら師匠の昔の仲間だとか言つてたよな。だつたらあんまり手荒にしねえほうがいいのか?」

「野郎……あんだだけぶち込んだ神聖滅矢を全部弾いておいて手加減だと……? 舐めてやがんな」

「ムカつきますねえ……」

「つてかジジ! あんたさつきから何もしてないじゃない! ちよつとくらい手伝つても良んじゃないの!」

「しようがないにやあゝバンビちゃんは……」

そう言つてジゼルが気絶していたクヴェレにトドメを刺し、そして自らの血を掛けてゾンビとして蘇らせる。

そして、三人へと狂人の能力を掛けて発狂させようとするのだが、その能力は靈圧の高さによって効くかどうか変わって来る。

一般隊士や聖兵、副隊長程度なら簡単に狂うが、隊長や星十字騎士団になると効果が薄れて来るのだ。

だが、それでも動きを阻害するには十分だと言えよう。

「このままほつとく訳にも行かないし、とりあえず拘束……」

「なんだ……あの光は……？」

一護がそう言うと、遠くの方で光の柱が立ったのが見え、それと同時にユーハバツハの声が響いた。

ユーハバツハが靈王宮へと攻め入るのは流れ通りだが、二次侵攻開始が少し前倒しになったせいか、これも前倒しにされてしまった。

バンビエッタとしては思いもよらぬ事だったが、それでも多少の誤差なのでまだ問題はなないだろうと思っていた。

「その前に……不要な者共は切り捨てて行かねばな」

その直後、バンビエッタを除くバンビーズの面々に聖別の光が降り注ぐ。

どうやらこの場に居るバンビーズの面々だけではなく、他の場所で戦っている星十字騎士団の面々にもそれは及んでいるようだ。

た。まさか聖別すらも前倒しして来るとは思わず、バンビエツタは焦りを見せるのだった。

霊王宮への侵攻が始まったんだが？

「アンタ達！一か所に集まって！早く!!」

バンビエツタが叫ぶとジゼル以外は一瞬ためらったものの、この光を浴び続けるとマズいと悟ったのか言われた通りに彼女の近くへと集まる。

再び神聖星盾と外殻血装の二重結界を発動させてその光を遮断していくが、それでも力を奪われて行くのは完全に防ぐことは出来ない。

「何なんだよこれは……おいバンビ！一体どうなってるんだ！」

「見れば分かんでしょう……ユーハバツハ、陛下に力を持ってかれてんのよ……!」

「な、何でそんな事に……私達は一体何をされてるの……?」

バンビエツタの言葉を聞いて、戸惑いを隠せないバンビーズのはたただ狼狽するだけだった。

そもそもユーハバツハにとって星十字騎士団など捨て駒に出来る程度のものでしかなく、全て彼の為に存在するもの。

それ故、聖別で死んだとしてもその力はユーハバツハの糧になるのだから何の問題も無かった。

「なんだよそれ……あたし達は只の使い捨てだつてのか……?」

「バンビ……お前知つてたな。こうなるつて分かつてたから逃げたんだな?」

「まあ……そうだけど、アンタ達いきなりそんな事言われても信じられなかつたでしょ?」

確かに、バンビエツタがまだ見えざる帝国に居た時にそんな事を言われても、信じようとはしなかつただろう。

しかし、既に今起きているこの現象が全てを物語っており、それがバンビエツタの言っている事が本当なのだという証明になっている。

だが一護にとつては何よりも、ユーハバツハの隣に雨竜がいる事が問題だった。

「石田……なんででめえがそっちに居るんだよ……!?!」

「帰れ黒崎……命を無駄にしないうちにな」

「答えになつてねえぞ!なんでそっちに居るのかつて聞いてんだよ!」

一護の問いかけに対して、雨竜は矢を雨の様に放つて来るが、一護の前に織姫の三天結盾が出現してそれらは全て防がれていく。

次の瞬間には瀨霊廷に凄まじい衝撃波が響き渡つたので、ユーハバツハ等が靈王宮へと侵攻を開始したらしい。

そうになると、現時点で地上に残っている星十字騎士団は恐らく六人。今ここにいるバ

ンビーズの四人は確定として、恐らくバズビーとナナナ・ナジャークープも生き残っているだろう。

「一足遅かったつスカねえ……霊王宮への旅行券、手配しましょうか?」

「浦原……いや、予想より早いわよ」

「おい、その旅行券とやらはオレ達も使えんのか?」

「おや、そちらの方々は……ああ、成程」

浦原はそう言うのと、何かに気付いたように顎に手を当てて納得した様子を見せる。

当然浦原にも情報は入っているので、彼女らがバンビエッタが見えざる帝国に居た時の仲間だという事は理解していた。

この後流れとしては、一護達は霊王宮向かってユーハバツハと戦う事になるのだが、それに便乗しようという事だろうか。

「四人追加となると……ちよつと厳しいっスねえ。定員オーバーしちゃいますから」

「まだ方法はあるんでしょ?別にそっちの奴でもいいわよ」

「流石はバンビエッタさん、お見通しって訳っスか」

現状霊王宮へと向かう方法は二つあり、一つが砲台で打ち上げるやり方で、もう一つが門を作るやり方だ。

砲台の場合は一回しか使えない上に人数に限界があるので、全員で向かうならば門を

使う必要がある。

とはいえ門を作るには多少時間を要するので、その間に手遅れにならない様に先行してユーハバツハの元に向かうのが一護等の役目となるだろう。

そして先行する一護たちを見送った後は、現在瀟靈廷に居る戦闘可能な者達が技術開発局へと集う。

既に何人かの隊長格が到着している様だが、京楽の姿は無かったので今頃藍染を無間から一時的に出す手続きを踏んでいるのかもしれない。

「破面に敵だった滅却師までおるやんけ……どないなつとんねんホンマ……」

「助けてもらった恩を返す……只それだけの事だ」

「勘違いすんじゃないぞ。あたし等はユーハバツハの野郎をぶつ殺しに行くだけだ。あんたらの仲間になったつもりはねえよ」

「だから我々に協力すると？それを信じろというのかネ」

「信じろとはいってねえ。あくまでユーハバツハをぶち殺すために、一時的に協力するだけだ」

死神だけではなく、破面であるハリベルや敵だったバンビーズの面々にバズビーまでもがおり、かなりの数になっている。

ナナナがないところを見るに、既にバズビーにやられたのか、それともそれ以前に死神の誰かに倒されたのかは分からないが、居ないなら居ないで問題もないので特に気にする程の事でも無いだろう。

ともかく、幾人かの隊長格は重傷を負って未だ治療中ではあるが、それでもかなりの戦力がそろっていると言っていいたいだろう。

「球を配ります。皆サン円の内側に立って、その球に霊圧を込めてください」

浦原が球を配り終わると、現世にいた仮面の軍勢の四人が扉から姿を現した。

彼等は世界の歪みに発生していた物質の収集と精製を行なっていたようで、その液体の様な何かを円の内側に放出して行く。

後はこの液体の様な何かとそれぞれの霊圧を融合させていき、その状態で球に霊圧を込めれば門が完成するらしい。

だが、次の瞬間微かな地震が尸魂界全土を襲った。それは微弱な振動でしかなかったのだが、それにもかかわらず建物が崩れて地面が割れ始める。

「な、何だ……!? 敵襲か!」

「これは……霊王が死んだのか……!」

霊王が死ぬことはバンビエッタは知っていたし、流れ通りの出来事ではない。

確かに彼女は見えざる帝国の情報を護廷十三隊に伝えてはいたが、具体的に未来がど

うなるかということは一切語っていないのだ。

それを話してしまった結果、流れから大きく逸れてしまう可能性が高くなってしまっただけである。

「二護達は間に合わなかったみたいね……」

「やはり貴女は……いや、今はそんな事を話している場合じゃないっすね。このままだと、尸魂界も虚圏も現世も消滅してしまうんですから」

「どうすりゃいいんだ!?何か……やれる事はねえのかよ!」
すると、浮竹が前に出て斬魄刀を構える。

浮竹は彼の肺に巢食った「ミミハギさま」と呼ばれている「霊王の右腕」を、全身の臓腑に広げる「神掛」という名の儀式を行っていた。

それ故今の浮竹は霊王の右腕そのものと言っても過言ではなく、彼の体から黒い何かの手の形となって現れた。

霊王の右腕は停止を司ると言われており、その力を持って崩壊を食い止めるつもりなのだ。

一方霊王宮では、その黒い手が斬り裂かれた霊王へと伸びていく。

そしてそのまま纏わりつくようにして手を広げ、霊王の体を覆って行くと振動が止

み、世界の崩壊も止まった。

そしてユーハバツハはその黒い手を消し飛ばそうと自分の腕を振るうが、その前に一護が動き出した。

「何故お前は私を止める……お前に私を止める理由など無いだろう」

「俺は……あんたを止めにここに来たんだ。あんたを止めて、全部を守るために来た」

「全てを守るだと？ 傲慢だな……自分以外にはそれが出来ないとも思っているのか？」

「俺以外の誰かが出来たとしても、俺が逃げていい理由にはなんねえんだよ……」

そう言つて月牙天衝を放つたのだが、案の定ユーハバツハにそれが効いているような様子は無く、傷一つついていないように見える。

すると雨竜がユーハバツハの前に出て来て、一護に対して弓を構え始めた。

「石田……てめえ何のマネだ……!?!」

「黒崎……お前こそ何を考えている？ 帰れと言つたのが聞こえなかったか」

「そんな事言われたくらいで俺が素直に帰るでも思つてたのか？ 俺はてめえをぶん殴つても連れ帰るぞ」

一護はそう言うなり瞬歩で間合いを詰めると、勢いに任せて一護は雨竜に向かって斬月を振り下ろした。

直ぐに反応した雨竜は矢を放ちながら後ろに後退するが、一護はそれを斬月で弾き飛ばしながら尚も雨竜に迫る。

しかし、雨竜は飛廉脚を使い、一護の斬撃を避け続けながら矢を連続して放ち続ける。

「石田、テメエ知らねえのか!?! そいつを止めねえと世界が終わっちゃうんだぞ!」

「それを知らずに此処にいると本気で思っていたのか?」

そう言つて雨竜が完聖体を発動させると、その背には翼のようにも見える光の帯が四本現れた。

その根元には鎧のような装甲が形成されており、それは片や手や腰の部分にも現れていた。

そして次の瞬間彼は無数の矢を連射し始めた。今までの比にならない速度と量であり、一護は斬月で弾いたり避けたりしながら前に出る。

すると今度は光の帯の先が一護の方へと向けられ、そこから無数の矢が射出された。

「知つてたのかよ……俺達が戦う理由を知つて……なんでてめえはそつちに居られんだよ!!」

「分かり切つた事を聞くな……それは僕が滅却師だからだ。元々死神と滅却師は敵同士、僕と君が仲間みたいに戦っていた事の方がおかしかつたんだよ」

凄まじい量の矢が降り注ぐ中で、一護は月牙天衝を放つて消し飛ばしてみせる。

だが、雨竜は既に次の矢を放つために弓に靈力を溜め込んでおり、その矢を放つて一護の足場を破壊した。

それによつて粉々になつた足場から落下してしまい、一護は靈王宮から落とされる事になつてしまったのだつた。

霊王宮への侵攻が始まったんだが?②

一護達が霊王宮から落とされた後、ユーハバツハが霊王の右腕を取り込んでしまい、その力は今まで以上に膨れ上がっていた。

そしてそのまま霊王の全てを取り込もうと動き出したところ、尸魂界ではさらに異変が起こり始める。

「バンビちゃん?どこ行くの」

「外に出てどうする気なんだよ」

バンビエツタがどこかへ移動しようとするのを見て、ジゼルとキャンデイスが声を掛ける。

空が夜の様に暗くなっているという事は、そろそろ霊王の力の奔流が落ちてくる頃なので、念のためにそちらの対応に向かうことにしたのだ。

外に出ると、どうやら四人ともついて来たようで、特に断る理由も無いのでこのまま付いて来させることに決める。

「なんでこんなに暗くなったんだ。陛下……ユーハバツハの野郎がなにかしたって事なのか?」

ふと、バンビエツタとはある事を思い返してみた。それは聖別の事であり、何故自分が聖別されないのかがどうしても解らなかつたのだ。

見えざる帝国から逃げ出した当初は、取るに足らない事だからと見逃されていたのかもしれないが、最早見逃す理由など何処にもない筈なのだ。

あるいは雨竜の様に何かしらの理由があつて聖別の対象にならないのか、あるいは一護のように後々全て奪うつもりでいるのか、いずれにせよ何らかの思惑があると考える方が自然だろう。

「……ねえ。ちよつと聞きたいんだけど、怒つてるわよね……？」

「そりゃな。何も言わないで消えた馬鹿に、少しくらいは仕返ししたい気持ちはある」

「バンビちゃん、いきなり居なくなっちゃうんだもの……あたし達は結構心配したのよお」

確かに勝手に見えざる帝国から逃げた事に關しては悪いと感じていたが、その時はゾンビにはなりたくないという事しか頭に無かつたのである。

バンビエタの知識の中には彼女を邪険に扱うバンビーズの面々の姿があつた為、多少なりとも心配事に何とも不思議な感覚を覚えていた状態だ。

「だからと言つて許した訳じゃないから。あくまで一時的に協力するだけだから」

「キャンデイちゃんは捨かれてるねえ……バンビちゃんが居なくなつたときに取り乱し

てたくせに」

「ジ、ジジ!?! 余計な事は言うな!!」

そんな事を話していると、空から大量に何かが降ってくるのが見えた。

それは小さくて単眼の黒い人型のナニカで、これこそが霊王の力の奔流であり、それが滝の様に流れ込んでいる光景が視界に入り込む。

「気持ち悪いです……何なんですかあれは?」

「門を作る邪魔になるわ。とりあえずかたつぱしから潰してくわよ」

バンビエッタは霊子の槍を出現させて構え、流れ落ちて来るそれらに向かって投擲を行う。

するとその槍は着弾した瞬間に大爆発を起こして吹き飛ばしてしまうのだが、それでも際限なくそれらは落ちてくる。

皆一様に攻撃しては吹き飛ばしていくのだが、バンビエッタとしてはそれをリルトットが食いしん坊の能力で食っている事が気がかりであった。

「リル、そんなもの食べて大丈夫なの?」

「何の味もしねえし、腹の足しにもなんねえな」

「そう言う事を聞いているんじゃないんだけど……」

そう言っただけで次々と食べていくが、特に何の問題もなさそうなので気にしないことにし

て更に殲滅を続けて行く。

だが次の瞬間凄まじい霊圧が近づいて来るのを感じて視線を向けると、そこには藍染惣右介がいたのだ。

「滑稽だな……何をちまちまと片づけている。一息に霊圧で押しつぶしてしまえばいいものを」

「あんたはいちいち揚げ足を取らないと気が済まないわけ？」

藍染が無間から一時的にでも出された事に関しては、それぞれ言いたいことがあるようだったが、京楽の「面子で世界は護れない」との言葉で黙るしか無くなっていた。

すると藍染はあろう事か黒棺を放とうとしたので、地下の研究室へと避難する事になったのだ。

放たれた黒棺は辺り一帯を更地にしてしまう程であり、それどころか天蓋にすらヒビを入れられるほどの威力を誇っていた。

その威力は一護との決戦をした時のそれを上回っているようにも感じられ、やはり藍染は恐るべき人物であると認識させられる。

「ともあれ、あの目玉の化け物が消えた内に天蓋を……」

「その必要はない。あとは私の霊圧で衝撃を与えてやれば、自壊するだろう」

「やめろ藍染……！門の為に集めた霊圧が飛散する……!!」

「門だと……? 靈王宮にようがあるのなら、私が撃ち落としてやろう」

その静止も聞かずに藍染は靈圧を最大にまで高めようとしたのだが、拘束具によってその靈圧をその場に留められてしまう。

更にバンビエツタは幾重にも鎖を巻き付けていき、加えて神聖星盾の結界を発動させ、門を作る間だけでも邪魔をさせないようにした。

「随分と手の込んだ拘束だな……」

「そのまま大人しくしてなさいよね」

それからしばらくして、作られた門を通って皆が靈王宮へと移動したところ、一護達もまた靈王宮へと再び戻っていた。

その頃には靈王宮はユーハバツハの手によって作り替えられた後であり『新世界城』と名前を変えた後である。

「街の形が変わったせいで多少移動地点がズレたが、どうにか銀架城の近くには出られたな」

「予定とはちよつと違うけど、まあ……敵さんの本拠点の近くにこれたのならよしとしようか」

リルトットの言う通り、少し離れた場所には銀架城が存在しているのが見える。

原作とは違い護廷十三隊の面々も此処に居るが、何もこのままユーハバツハに戦いを

挑むわけではない。まだ四人の親衛隊とハツシユヴァルトが残っているからだ。

特にジェラルド・ヴァルキリーとハツシユヴァルトに関しては倒しようがないので、後一度行われるハズの聖別まで足止めをする必要もある。

ともかく、何時までも此処で立ち止まっているわけにもいかないのです、バンビエッタから事前に得た情報に基づいて動き出すのだった。

「ハーツハツハツハ!! 侵入者どもよ、よくぞここまで辿り着いたものだ!!」

「ジェラルド・ヴァルキリー……! 厄介な奴が出てきやがったな」

「む……? その恰好は我等と同じ星十字騎士団の……! おのれ裏切り者共が……陛下に楯突こうとは愚かなり!」

「うるせえぞ! そもそも先にあたし達を切り捨てたのはユーハバツハだろうが!」

笑い声と共に飛んできたのは聖文字『奇跡』ザ・ミラクルを持つジェラルドであった。

奇跡の能力はダメージを負うたびに巨大化し、尚且つその度に受けたダメージを全快にする回復能力を備えている。

受けたダメージの大きさに比例して巨大化するのだが、その能力の効果は肉体だけでなく、剣や盾といった装備へも適用される。

「貴様らは我が手で確実に始末してやるわ!!」

「そう簡単にやられてやるとでも思ってたのかよ……!」

間髪入れずに振り下ろされた剣だったが、それは冬獅郎の氷輪丸によって受け止められた。放たれた氷はジェラルドの腕を凍りつかせただけでなく、その場に固定することで完全に動きを止めている。

だがしかし、それを気にすることなくジェラルドは瞬く間に氷を粉碎してみせ、そのまま剣を振るいはじめた。

「ハーツハツハツハアツ!!この程度の氷で我を止められるとでも思っていたのか!!」

「チっ!なんて馬鹿力してやがる……!」

力任せに氷を砕いたジェラルドは、冬獅郎の作り出す氷壁の悉くを粉碎しながら突進して来ていた。まるで重戦車を思わせるほどの威圧感と勢いに、冬獅郎は思わず舌打ちをしてしまう。

今度は白哉が千本桜を展開させて妨害し、刃の花弁が次々と襲い掛かっていくのだが、ジェラルドはそれをも剣で斬りはらいながら直進してきていた。

「親衛隊とやらが一人ではないのなら、誰かがこの場に残り、誰かが先へと進むが道理であろう。日番谷隊長、兄も先へ行け」

「……ああ、分かっているさ。此処は任せたぞ」

「では、私も此処に残りましょう。ふふ、攻撃を受ければ受ける程強大になっていく……一体どれほどのものか、確かめてみたいものですからね」

「ハーツハツハツハツハ！愚か者共めが！貴様らでは如何なる奇跡が起きても我を倒す事は不可能なのだ！」

他にも仮面の軍勢の面々等々がこの場に残り、他の面々は先に向かう事になった。

そして先に進んだ面々を、親衛隊の一人であるリジエ・バロはスコープ越しに見ていたのだ。

護廷十三隊の面々の面々が見えざる帝国の情報を持っているという事は当然彼も知ってはいたが、妙な違和感を感じていた。

京楽以外の面々は建物を遮蔽物にしながら移動をし、狙撃を警戒してなるべく身を隠せる場所を選んでいた。

それを見れば当然何かがあると考えるのだが、そうだとってもそれごと打ち砕いてしまえばいいだけの話だ。

「何にせよ……全員殺せばそれで終わりなんだ。何の問題もない」
そう言つて京楽に狙いを絞ると、トリガーを引く。

彼に与えられた聖文字は『万物貫通』ジ・グランドサックスそれは、霊子兵装である巨大なライフル『デアグラム』の射線上にあるものを全てを貫通させる能力を持つ。

それは弾丸を放つているという訳では無く、銃口の先の物体を貫通するという概念的

なものであり、防御は実質不可能。それが京楽の胸を貫通し、血を噴き出しながら絶命した——筈だった。

だが、どこからともなく「だるまささんがころんだ」と聞こえてきた次の瞬間、背後に現れた京楽が刀を抜いてそのまま袈裟切りを仕掛けた。

（何が起きた……?あの距離からここまで、僕に気が付かせずにどうやって移動した?）
「そちらさんの能力の情報はこつちにあつたからね……まあ、こうも思惑通りに乗ってきてくれるなんて思わなかつたけど」

「お前の斬魄刀は子供の遊びを現実にするものだったな。今のもその力なんだろうが……まさか、たった一人で僕の相手をする気か?」

リジエの問い掛けに対し、京楽はただ肩をすくめてみせるだけであった。

霊王宮が新世界城にされたんだが？

ようやくアスキンに追いついた一護は、彼を撃破すべく斬月を振るって攻撃を仕掛けたが、アスキンはそれを避けては逃げに徹して見せた。逃げながら聖文字である「致死量」を発動させ、触れただけで死に至る毒の玉をばら撒くことで一護からの攻撃を寄せ付けない。

より正確に言うのなら、相手の致死量を操作することが出来るのだ。これは1000kg摂取しなければ死に至らないような物質だとしても、1mg摂取しただけで死んでしまう様に出来るといふ能力である。

そして、その毒の玉に一護の手が触れてしまったその瞬間……

「ちよいちよいちよいちよい!!何で平然としてるんだお前!俺の能力が効いてねえのか!？」

「わざわざ答えてやる必要はねえだろ?それと、逃げてばつかで良いのかよ……そんなんじゃない俺を倒せないぜ」

そう一護が答えるや否や、アスキンは再び逃げ出した。「どんな時でも余裕のある男でいたい」と言うのが彼の信条のような物だが、そんな彼でもさすがにこの状況には焦

りを隠しきれないでいるようだった。

アスキンは自身の能力を嫌っている節があるが、性能自体には自信があった。それが通用しなとなれば、逃げる以外に選択肢は無いからだ。

（どう言う理屈で無効化してんだ？それが分からねえ限り、真面にやり合うのは致命的だな……）

アスキンも馬鹿な男ではないので、一護が一体どうやって聖文字を無効化しているのかを観察しながら逃げ回っていた。

一護が斬月から受け取った能力は不完全ながらも聖文字であり、その名も「白」^{ブリーチ}であった。それは相手の聖文字を無効化するというもので、たとえ誰の聖文字だろうと問答無用で無力化することが出来るのである。

しかし、この能力は不完全であるがゆえに発動時間も短く、一度使用するとしばらくは使用できないという欠点があった。それに加えて相手の能力を理解していなければ無効化できないという弱点も抱えており、使いどころが難しい技でもあったりするのだが、バンビエツタから聖文字の情報を教えられていた為その点に関しては問題ないと言えるだろう。

そんな事を知る由もないアスキンからすると、トップクラスに厄介な相手だと認識せざるを得ず、冷や汗を流していた。

「そろそろ終わりにしようぜ、こつちはテメエだけを相手にしてられる程暇じゃねえんでな……卍——」

「おつと黒崎さん。ここはアタシ達にに任せて、黒崎さんは早くユーハバツハの所に向かつてください」

「まさか貴様と肩を並べる事になるなんてネ……足を引つ張るよう事だけはするんじゃないヨ」

「これは手厳しいっスねえ……昔馴染みなんだからもう少し優しくしてくれても良いじゃないっスか」

「そんな記憶は存在しないんだがネ……まったく、次にふざけた事を言ったらその口を縫い合わすヨ」

一護が卍解をしようとしたところで浦原とマユリが割って入り、アスキンを足止めする役目を買って出たのだ。

死神一同の最終的な目的はユーハバツハの撃破であり、彼以外の滅却師、特に親衛隊の四人は撃破しなくても足止めが出来ればそれで十分だという判断だった。

何故ならば最終的に彼等もユーハバツハから不要と判断され、聖別によつて命を落とす事になるのだから。

一護がこの場を去って行くのを確認すると、二人はそれぞれ斬魄刀を構えてアスキンを

へと向き直る。

「さて、それじゃ始めましょうか。逃げられるとは思わないでくださいよ？この日の為に……死なない様に死ぬほど準備してきたんですから」

「ふん……癪ではあるが、今ばかりは協力することを許可してやろうじゃないか」

「ハハッ……こりや致命的過ぎんだろ……」

「君の聖文字とやらの能力は「致死量」を操るんだったネ。ならば、薬の一つや二つを投薬されたところで死にはしないだろう？試してみたい薬はごまんとあるんだ、遠慮なぞせずに喜んで被検体となってくれたまえヨ」

完全に想定外の状況に陥ってしまったアスキンは、もはや笑うしかなかった。当然アスキンも死神達の情報を持っているわけだが、その中でも戦いたくない相手の上位に居る死神が二人も同時に現れたのだ。

浦原に至っては未知数の『手段』を保有しているとして特記戦力の一人に数えられており、マユリも特記戦力にはならなかったものの、念のために警戒しておくべき人物としてマークされている。

そんな二人を同時に相手にしなければならいとなれば、いかにアスキンといえど分が悪いとしか言いようがないだろう。

親衛隊最大の難関とも言えるジェラルドに多くの死神が足止めとして残る最中、他の死神達はユーハバッハを目指して進んで行った。足止めを受けていけない親衛隊はペルニダだけであるが、まだハツシユヴァルトも健在である以上油断はできない状況だ。

既にバズビーが単独でハツシユヴァルトの元へと向って行ってしまったが、このまま原作通りに進めば彼は敗北して死ぬ事に成るはずだ。バンビエッタはそんな事を考えながらも進んで行くと、やがてペルニダが待ち構えているのが見えてきた。

「ヘイカ、ウラギッタ……ペルニダ、ユルサナイ」

「チツ……！ 親衛隊ってのはどいつもこいつも話が通じねえ奴ばかりかよ」
「こんな所で時間を無駄にしている暇はないんです……」

ペルニダの能力の性質上、彼に触れたらその時点で聖文字の能力を喰らってしまうことになる。それ故に迂闊に近づく事が出来ない為、遠距離からの攻撃で撃破するのが望ましい。

だが、今ここにいる滅却師のバンビーズは誰もがさっさとユーハバッハの元へと向かい、落とし前をつけさせたいと思っており、ペルニダ相手に無駄な時間を使っていられないと考えていた。

「アイツの相手は俺がする……バンビエッタ、お前はそいつらを連れて先に行け」

「はっ？ 何このチビ助……なんでバンビちゃんを呼び捨てに——」

「はいはい、ジジは少し黙ってなさいよね。それじゃお言葉に甘えて、アタシ達は先に行かせてもらおうわ」

冬獅郎の氷輪丸であるならば、相手に直接触れる事無く攻撃が出来ると考えたバンビエツタはその提案に乗る事にした。彼女としても早々にこの戦いに決着をつけるつもりでいたため、冬獅郎の申し出は非常にありがたかったのだ。

そして彼女等が走り去るのを確認した後冬獅郎は再び斬魄刀に手をかけて構えを取ると、その横にハリベルも並び立って臨戦態勢に入った。

「ならば私も共に残ろう、私の能力ならば奴に触れる事無く倒すことが出来るはずだからな」

「ありがてえ話だが、別にお前まで付き合う必要はねえんだぞ？」

「言っただろう、助けられた恩を返すだけだと。それに……こちらとしても虚圏に攻め込まれた以上、関係のない話ではないのでな」

「随分と律儀な奴だな……まあ、そう言う事なら好きにしな」

真世界城中に凄まじい衝撃が響き渡ると同時に、激しい揺れが周囲を襲った。まるで地震でも起きたかのようなその振動の正体は、巨大化したジェラルドが振るった剣が床に突き刺さり、その余波で発生した物だった。

まるで破壊の嵐を思わせる程の攻撃を繰り出しながら進む彼の姿は、まさしく鬼神の如き姿であったことだろう。

「ウハハハハハ！無力！！無力！！その程度の力では、この我を倒すという奇跡は起こせぬう！！」

「はッ！！言うじゃねえかデカブツがよお！！その頭もう一度砕いてやらあ！！」

「斬つても斬つても再生する……ふふふつ、何と斬り甲斐のある相手なんでしょうー！」

既にジェラルドは頭を砕かれたり四肢を斬り落とされたりと何度か死んではいるが、その度に強大になつて復活を続けており、その姿は最早化け物という言葉以外に表現する事が出来なかつた。

だが、それが面白いとばかりに卯ノ花と剣八は嬉々として向かつて行き、二人がかりで何度も彼を斬り刻んでいく。殺す度に強大になるので、足止めをするだけで十分だったのだが、二人はそんな事は知つた事では無いと言わんばかりに攻撃の手を休める事は無かつた。

二人共一切足止めの事など考えておらず、ただ単純に目の敵との戦いを楽しみたいだけなのだ。だからこそ彼等は一切手を抜かず、全力で殺し合いを楽しんでいるのである。

「ハーッハッハッハッハ！！まだ理解できぬか！貴様等のような有象無象が幾ら束になつ

た所で我には勝てぬという事をツ！愚か、余りにも愚か!!」

「くだらねえ事抜かしてんじゃねえぞ!! デケエだけしか取り柄がねえ癖に調子のつてんじゃねえぞ!!」

「その再生……何時まで続くのか見ものですね……ふふつ、なんと面白い」

剣八と卯ノ花のはまさに阿修羅の如く苛烈であり、相手が巨大だろうが何だろうが関係なしに切り刻み続けていた。卯ノ花の過去を知らぬ人物からすれば、彼女がおかしくなったと見えてしまう程に圧倒的な力を見せつけていただろう。

だが初代剣八であつた彼女からすれば、これこそが本来あるべき姿と言つても過言ではない。

「無駄に傷を負わせ、無駄に強化させるとは愚かといか言いが……」

白哉はそう言いながらも冷静に戦況を分析しており、このままでは埒が明かないと判断したようだ。最早この戦いについて行けるのは後は彼ぐらいなものであり、ルキアと恋次は付いていけない状態である。

二人共卍解を有し、尚且つ星十字騎士団の聖章騎士を撃破出来るほどの実力を持つている。だが、その時の戦いとは次元が違うと言つて良いほどの戦闘が繰り広げられているのだから、無理もないだろう。

「兄等も先に行け、最早この状況では少しでも先に進んだものが多い方が有利だ」

「し、しかし兄様……っ！」

「ルキア、恋次、早く行けと言っている……もはやここにお前達の力は必要無い」

二人は白哉の言葉に感謝の言葉を述べると共に、その場を任せて先へと向かう事にした。白哉その言葉が気遣からくる言葉であると分かっているから、二人は何も反論せずに従う事にしたのだ。

そんな二人を人を見送った後、白哉は再び戦いへと身を投じて行くのであった。

靈王宮が新世界城にされたんだが?②

一方で、京樂と戦っていたリジエ・パロは、伊勢家の宝剣である「神劍・八鏡劍」によつて自らの攻撃をそのままそっくり返されてしまい、そのまま散つて行くのだった。

無数の羽根となったそれらは瀨靈廷へと落ちていき、その一枚一枚が形を変えて不気味な鳥のようなへと変化した。

「天から堕ちて光輪を失うなんて……まるで僕が罪深いかのようなじゃないか」

それらはリジエの力の残滓、所謂分裂体にしか過ぎないが、それでも一体一体が隊長格に匹敵する力を有している。そして単純に数が多いというのは、それだけで脅威になり得るのだ。

やがてそれらは怒りの声を上げながら周囲に光弾をばら撒いていき、瀨靈廷内を破壊し、死神達を惨殺しながら進んでいく。当然死神達だつて黙つて見ている訳ではないのだが、光弾一つ一つが強力な為、思うように攻撃に転じる事が出来ない状況だった。

「これがアイツの言つていた懸念の一つか……確かに、この数を屠るには骨が折れるな」
碎蜂は数が多い事に辟易としながらも、次々とそれらをつては薙ぎ払つていく。相手はやたらめつたらに光弾を放つだけで、知性は低いようだ。物量に任せられた行動というの

は非常に厄介だが、纏威による結界で身を守って光弾を防ぐ事は容易に行える。

赤い光線を放つたり、左腕の盾を飛ばしたり、足に取り付けられた刃で斬りつけたりして、碎蜂は迅速に分裂体を葬って行く。

「確かに、こゝも数が多いと流石に骨が折れるなあ」

この事態に対処するために碎蜂以外にも市丸が瀦靈廷に残っており、彼も神鎗を振るって周囲の分裂体を手当たり次第に薙ぎ払っていた。だが、それでも数が多いせいで対応が追い付かない状況が続いていた。

一体始末するたびに「ギイギイ」とうるさく鳴き喚くか「殺したな！殺したな！」と悲鳴をあげているかのような仕草を見せるその様は、まるで知能の低さを露呈しているかのようなだった。

容易く両断できるところを見るに防御面は皆無と言った所だろうが、光弾の威力はかなりのものらしく、碎蜂は張った結界頼りでは無くてきちんと避けて対処している。

「……ようやく物になったわ」

市丸がそうつぶやくと同時に霊圧を高めてそれを解放した。すると、両肩には白い蛇を思わせるような帯が張り付き、首周りには灰色のファーがついた。そして狐のような灰色の尻尾がゆらゆらと揺れている。

彼もようやく纏威を解放できるようになったようで、蛇のような帯が縦横無尽に伸び

て分裂体へと襲い掛かって行った。

「もうちよつと早く出来るようになっても良かったと思わへん? そうすれば……あん時もあんな思いさえへんですんだのになあ」

「ぶつくさ文句を言っていないで手を動かせ! まだ戦いは終わっていないんだぞ!!」

自身の斬魄刀を見ながらそうつぶやく市丸に対し、碎蜂が叱責しながら周囲の分裂体に赤い光線打ち込んで黙らせて行く。市丸も愚痴を零しながらも神鎗と白い帯で確実に分裂体を減らして行く。

く。

二人の活躍によって瀨霊廷は徐々に分裂体は減って行ったが、それでも未だに数が多く、殲滅するにはまだまだ時間がかかりそうだった。

「碎蜂隊長、ちいとばかり離れたい欲しいわあ。他の皆も早お頼むわ」

「何をするつもりかは知らんが、策があるなら早くやれ!」

「卍解『神殺鎗』」

纏威と卍解の同時発動はかなりの負担がある。纏威を習得したばかりの市丸ならば猶更の事だが、そんな事を気にしていられるほどの余裕がある様な状況ではない。

そして市丸が軽く神殺鎗を振るうと、刀身が細かな欠片となって宙に舞い始めた。それが分裂体にあたると、当たった個所が消し飛んでしまう。腕を振るってその数多の欠

片を群がる分裂体へと飛ばし、その悉くを消し飛ばしていった。

神殺鎗の刀身の内部には対象物を細胞レベルで破壊する毒が仕込まれている。つまり、今宙を舞っている欠片一つ一つが猛毒の刃であると言えた。

「もうちよつとうまく扱わんと、味方まで巻き込んでしまうから気を付けんとなあ」

その猛毒は敵味方の対象を選ぶことはできない。つまり、味方の位置取りに気を付けなければならず、誤爆なども十分に考えられる。

周囲に敵しかいない状況ならば何も気にする必要はないのだが、今は他の死神達も居る。味方を巻き込むような事だけは避けたかったからこそ、前もって離れる様にと伝えたのだった。

そして。何も味方をも巻き込みかねない能力を持っているのは市丸だけではない。第一次侵攻の終わりに見せた平子の逆様邪八宝塞も、味方がそばに居るような状況では安易に使える代物ではない。

それ故彼の周りには味方は一人もおらず、周囲にはリジエの力の残滓が集まって来て今にも襲い掛からんとしている。先程まで同行していた雛森も此処におらず、平子は完全に援護してくれる味方を失い孤立状態となっていた。

「なるほどなあ……こりや確かに瀨霊廷に残れつちゆう訳や」

「ギイイイッ！ たった一人で何ができる！ 何ができるというんだッ！」

「多勢に無勢、降伏せえ……なんて思てへんやろな？」

分裂体にそのような問いかけをされた平子は、靈圧を高めて纏威を發動させた。

彼の手足は虚化したかのように変化し、本来なら顔を覆う仮面も左側のみにしか付いていない状態だ。そして頭髮も左半分が過去にでも戻ったかのように長髪へと変わっている。

肩に付いた白い鎧のような物と、腕部分にある円環からは赤黒い靈圧が噴き出しており不気味さと力強さを感じさせた。

「ギギギッ!! だから何だ！ だから何だというんだ!! 所詮一人!! 死ね!!」

その言葉と共に分裂体は平子へと向かって光弾をばら撒いていく。かと思いきや、周囲にいた分裂体は平子とは真逆の方向を向いてしまい、あらぬ方向へと散弾を放つ始末だ。

見当違いの方向へと放たれたそれらは、大半が分裂体へと向かって行き、幾体かはそのまま消滅してしまった。何が起こったのか、何をされたのか理解が追いつかなかつた分裂体達。

「何をした!?!」と、自らの行動が意図せずとも同じ方向に放つた事に対する戸惑いからか、怒りから来るのか、または単純に理解できないまま呆然としたのかはわからないが、

分裂体達は声を荒げて行った。

「俺は此処やで、何処に向かって打ち込んでるんやお前ら」

「ギイツ！なんだ!? なんなんだお前は！」

「まあしゃあないか……右足を動かそうとすれば左足が動く、前に移動しようとするれば後ろに移動する、上に飛ぼうとすればしゃがんでまう。自分の体が思った通りに動かんちゅうのは、どんな気分や？」

平子の能力は基本的に逆さにする能力だ。始解が相手の認識を逆さにする能力ならば、纏威は相手の動きを逆さにする能力と言った所だろう。当然この纏威も卍解同様に味方にも影響を及ぼしてしまうため、使い所が難しい能力だ。

分裂体になる前の完全な状態のリジエだったならば、この能力を即座に理解して対応して来ただろうが、今日の前に居る分裂体は所詮力の残滓であり知性は無いに等しい。その証左として今起きた事を理解できずにいるようで、慌ただしくおろおろと動く姿は非常に滑稽なものと言えよう。

「おもしろいやろ？ なんぼ頭捻ろうが、何をしてもゼーんぶ逆さになる。せやけどあんま時間かけても仕方ないし、さっさと終わらせなななあ」

「ギイイイイツ!! 死神風情があッ!!」

「お前らの常識もこの状況も、みんなまとめてひっくり返したるわ。卍解『逆様邪八宝

靈王宮が新世界城にされたんだが？③

靈王宮の一画では、冬獅郎とハリベルがペルニダを相手に激戦を繰り広げていた。

空中に生成された大量の氷柱と、凄まじい量の水槍が勢いよくペルニダに向かって襲い掛かっていく。ペルニダはそれらを神聖滅矢で次々と打ち落としていき、そのまま二人に向けて神聖滅矢を放っていった。

五本の指から次々と放たれる神聖滅矢に対して冬獅郎とハリベルは回避をするか、氷柱と水槍で相殺していく。相殺しきれなかった神聖滅矢が二人に襲い掛かるが、冬獅郎が氷の壁を出現させてそれを防ぐ。

しかし、矢が突き刺さったところから神経が侵食していき、氷の壁はペルニダのような巨大な手が変わって二人を押しつぶそうと襲い掛かる。

「チっ……！聞いていたが厄介な能力だな」

「手だけが動いているとは……不気味なものだな」

「ブキミ……ソレツテ、ワルグチ？ペルニダ、ユルサナイー！」

ハリベルが襲い掛かってくる氷の手を灼海流で水へと変えようと、そのままその水を全てペルニダへと向けて収束させていき、巨大な水球がペルニダを包み込んだ。

その瞬間を狙って冬獅郎がその水球を一気に凍結させて行き、巨大な氷塊へと変えて行った。だが、ペルニダはそんな氷塊に神経を浸食させていき、バキバキと音を立てながら氷を砕いて行く。

砕かれた氷はペルニダの神経によって次々とつなぎ留められていき、最終的には氷の巨人となって動き始めた。

「オマエたち、ココデ、コロス!!」

「一瞬で芯まで凍らせねえと無駄って事か……おいハリベル、少し時間を稼げるか? その間に準備を整える」

「分かった、時間稼ぎならば任せてもらおう」

ハリベルは冬獅郎にそう答えると、刃から高速で水の刃を何回も放っていく。ウオーターカッターの様に放たれたそれは、凄まじい速度でペルニダを覆っている氷の巨人を斬り裂いて行く。

だが氷の巨人の指、その十本の指全てから神聖滅矢が放たれ、それらはハリベルの水刃を容易く撃ち落としてしまった。それでもハリベルは絶え間なく水刃や水槍を並べて放ち、氷の巨人を少しずつではあるが削っていった。

まさか氷の指からも神聖滅矢を放てるとは思っても居なかったハリベルは、認識を改めると同時に再び灼海流でその氷を水へと変えていく。

「下がれ、ハリベル!! 氷天百華葬!!」

冬獅郎の掛け声と同時に、ハリベルは灼海流で氷の巨人を溶かしつくしながら後方へと飛んで行った。そして、空中に放り出されたペルニダへと白い雪が空から降り注ぐ。

それがペルニダ体表に触れた瞬間に、そこから氷の華が咲き始める。大輪の氷の華が次々と咲いて行き、一瞬でペルニダの神経をも凍てつかせていった。

数多の氷の華に覆われて完全に凍りついたペルニダは、まるでオブジェの様にその場に佇んでいた。だがよく見れば、指が一本欠けているのに気が付く。

バンビエツタが言うにはペルニダは靈王の左腕そのものであり、そう簡単に倒せるほど甘くない。嫌な予感が脳裏に過った冬獅郎は、氷輪丸でその指を凍らせようとする。

「あの状態から再生しやがるだど……!? つくづく化け物じみた野郎だな……!」

「言ってる場合か! 来るぞ!!」

「ツブレロツ!!」

切り離された指が瞬く間に再生していき、そのままペルニダへと戻って行く。たった一本の指が時間を巻き戻したかの様に戻って行くその様子に、二人も軽く冷や汗を掻いていた。

それと同時にペルニダは地面へと神経を蝕ませるように侵食させていき、そのまま二人に向かってその神経を延ばしていく。その神経に触れられたら終わりなので、二人は

すぐさまそれを回避する。

次々と襲い掛かってくる神経を躲していると、あちらこちらから何か割れるような音が響いた。それはペルニダの神経が侵食した地面や建物が破壊される音であり、その瓦礫は繋ぎ合わされていき巨人の様に巨大になっていく。

そしてその巨大な腕を使い、二人を叩き潰さんと振り下ろしたてくる。それを冬獅郎は巨大な氷柱で防いだが、こんどはその氷柱に神経が侵食していき、それも巨人の一部に変えようと動き始めた。

それはハリベルが灼海流で阻止するのだが、巨人は両手を二人に向けると、十本の指から一斉に神聖滅矢を放つ。

「くそッ……数が多すぎて反撃どころの騒ぎじゃねえぞ!!」

「芳しくない状況だが、どうしたものか……!」

「ドウシタノ? アキラメテ、ココデシヌ?」

十本の指から次々と放たれる神聖滅矢を、二人は全力で回避していく。当然神聖滅矢にもペルニダの神経が侵食しているので、掠っただけでも終わりなのだ。

その間にもペルニダは周囲の建物を侵食しては巨人の一部へと変えていき、その背から更に二本の腕を生やして攻撃の手を一層強めていく。

合計で二十の指から繰り出される神聖滅矢の嵐を躲していくが、ついに躲しきれずに

掠ってしまった。冬獅郎は右足から、ハリベルは左腕から侵食されていくが、その前に斬り落として対処する。

傷口を氷で凍結させて出血を止めたが、このままではジリ貧で二人ともやられてしまう。何か打開策を見つけなければと思っていた時、何処からともなく薄紫の霊子の奔流がペルニダ目がけて押し寄せ、その背から生えた二本の腕を消し飛ばしていった。

「大丈夫？ハリベル……って、あまり大丈夫じゃなさそうね」

「お前は……ネリエルか！それにその姿は、いつの間に第二解放を……」

「皆が出来てるんだもの、私だけ出来ない訳にもいかないでしょ？」

第二解放をしたネリエルは、以前にもまして強力になつていた。手にしている馬上槍は霊子に包まれており、それが高速で回転していた。

彼女は捕らえられたハリベルを救出するために乗り込んで来たのだが、バンビエツタによつて既に救出されてその恩返しとして戦っている事を知り、こうして援護にやつて来たのだ。

「ヒトリフエタ、ダカラナニ？ミンナコロスダケ！」

「先に言っておくが、あいつの放つ矢には絶対触れるなよ……触れただけで奴の神経が侵食して来て、死ぬことになるからな」

「随分と物騒な能力ね……でも、そう言う事なら……！」

ネリエルは馬上槍を構えると、ペルニダに向けて靈子の弾丸を連射していく。放たれた靈子の弾丸も高速で回転しており、放たれる神聖滅矢とぶつかり合つて次々と消失していく。

だが、それを超える量の矢が放たれるので、冬獅郎も氷柱を放ち、ハリベルは水刃と水槍で応戦していた。凄まじい量の矢や弾丸が飛び交い、そこはまるで戦争地になったかのような状況になっていた。

しかし、ペルニダは更に瓦礫をつなげて腕を増やして行き、さらに攻撃を激しくさせる。

「ダカライツタ、ヒトリフエタ——」

「残念だけど、援軍に来たのは私一人だけじゃないの」

そう言うのと、ペルニダに向かって靈子の斬撃が五つほど放たれる。それらは瓦礫の巨大ごとペルニダを斬り裂いて行つた。衝撃と共に靈子の斬撃を喰らつたペルニダは、真つ二つに分断されて倒れ伏した。

斬撃が飛んできたその方向に視線を向けると、そこにはグリムジョーが不機嫌な顔で立っていた。

「チツ……！俺は黒崎の野郎をぶちのめす——」

「私にも勝てなかつたくせに何を言っているの？そんなんで一護を倒そうだなんて、よ

く言えるわね」

「ああつ?!一度俺に勝ったくらいでいい気になってんじゃねえぞ!!」

グリムジョーとネリエルが言い争っていたその時、分断されたペルニダは瞬く間に再生して二体のペルニダへと増えた。一本の指からでも再生できるのだから、真つ二つにされた程度でどうにかなるような訳がない。

そして、二体のペルニダは再び瓦礫を繋ぎ合わせて巨人を作り出して行く。四本の腕を持った巨人が二体になった事で、合計で四十の指から神聖滅矢が放たれる事になる。

そんな事になれば回避するので精一杯となり、攻撃に回ることが難しくなる。仮に反撃に転じられたても、生半可な一撃では何の意味も無いだろう。

「ナンドデモイウ、オマエタチハ、ココデコロ——」

「いや、此処で終わるのはお前だ……『インフィニタ・オーラ』!!」

ハリベルが右手の剣を振り上げると、上空には水の塊が作り上げられていた。天を覆い尽くさんばかりのそれは、戦闘が始まった直後からハリベルが少しずつ蓄積させていったものだった。

ペルニダの猛攻によって一時的に蓄積が停止していたのだが、ネリエルたちの加勢によってようやく出来上がったのだ。

そして、剣を振り下ろすとその塊から水の弾丸が豪雨のように降り注ぎ、瓦礫の巨人

はあつと言う間に削り取られてペルニダの全身を何度も穿っていく。再生しようにも凄まじい速度で破壊されているので追いつかず、その豪雨から抜け出すことも出来ぬ程に一方的な攻撃を喰らっていた。

やがて弾丸の豪雨が治まると、そこには巨大なクレーターが残されているだけで、ペルニダは姿形もなく消滅していた。

靈王宮が新世界城にされたんだが？④

ジェラルドの振るう剣はまるで暴風の如く吹き荒れており、剣圧によって巻き起こった突風だけで周囲を吹き飛ばしてしまう程であった。その一撃を受けるだけでも致命傷になり得るだけの威力を秘めている為、卯ノ花も剣八もその刃の全てを躲し続けた。

卯ノ花の纏威には相手の霊圧を奪う能力が備わっているのだが、いくら斬りつけてもジェラルドの霊圧が衰えていく様子は見られない。

「フハハハハハハハハハッ!! 雑魚が私の力を吸収したところで、この我を超える事はできぬう!!!」

「吸収されて尚、霊圧の上昇が続くとは……本当に厄介な相手ですね」

恐らくジェラルドの聖文字は自身の霊圧にも作用しており、奪われる以上の霊圧をその身に蓄えている。そしてそれは加速度的に増加しているのは間違いない、むやみやたらに攻撃しても相手が強くなる一方だという事だ。

だがそれが分かっていて二人の剣八が攻撃を止めるはずもなく、ただひたすらに斬って斬って斬り続けていく。たとえ攻撃が通用しなくとも、そのような物で戦い

を止めるほど甘い考えは持つていない為だろう。

そして次の瞬間には勢いよく剣八目掛けて剣が降り下ろされて来るのだが、それを野晒で受け止めてみせた。あまりの衝撃に地面が粉碎されていき、辺り一面に瓦礫が飛び散って行く。

だがこの程度で怯むことなど有り得ず、剣八は勢いよくその剣を弾き返して次の一手に転じる。

「馬鹿め!! 希望ホープスングが刃こぼれしたぞ!!」

「……なんだこりゃあ? どう言うことだ」

ジェラルドの剣を弾き返した直後、斬られていないハズの剣八の腹部が裂けて血が噴き出る。剣は弾き返したにもかかわらず、何故出血しているのか不思議でならなかった。

この不可解な現象はジェラルドの剣の特性によるもので、刀身を傷付けると傷付けた相手にも傷付けた分と同等のダメージを与える効果を持つという、非常に厄介な武器だ。

「なるほどなあ……要は剣を折らずにためえだけぶった斬れば良いってだけの話だろうが!」

「わざわざ解決策を教えるとは、随分と甘いですね……」

「有り余る力の差を思い知らせてやるために教えてやったのだ！それすらも分からんとは甘い奴らよ!!」

傷口を強引に塞いだ剣八が勢いよく踏み込むと、ジェラルドは振り下ろしかけていた剣を振り下ろしながら迎え撃つ。

だが、その剣の上を走る様に踏み込むと、勢いのまま一刀両断するように野晒を振り下ろす。しかし、次の瞬間にはジェラルドの巨大な拳が右から迫って来ており、そのまま殴り飛ばされて瓦礫の山へと吹き飛ばされてしまった。

そしてそこへ剣が突きたてられようとしたが、白哉の千本桜の刃のがジェラルドの顔面へと降り注いでいった。だがそれはいともたやすく払いのけられてしまったが、注意を逸らす事には成功しており、次の瞬間には卯ノ花が攻撃を繰り返した。

「見えているぞ!!その程度の攻撃が避けられぬと思っているのかあ!」

「かはっ……!?!」

しかしその攻撃すらも軽々弾かれてしまい、お返しと言わんとばかりに拳が卯ノ花を吹き飛ばしていった。その巨体からは想像もできない速度と力によつて放たれたその一撃は、卯ノ花の体中を軋ませるには十分過ぎるほどだった。

リーチやパワーは向上する上スピードや瞬発力の劣化が一切発生しておらず、驚異的と言う言葉では表せないほどの戦闘能力を誇っていた。

「見た目の割にすばしっこい野郎じゃねえか!!だが……こいつはどうかな!」

瓦礫の山から抜け出した剣八が地面に突き刺さっている野晒を引き抜くと、爆発的に霊圧を上昇させて纏威を発動させた。

すると右手には獣のような毛が生えていき、左手は骨のような外殻に包まれ、鈍のよ
うな刃と骨のような刀剣の二刀流へと姿を変えていった。それはまるでやちるが『三步
剣獣』で呼び出す前獣と後獣を身に纏ったかのようなであった。

「ほう、獣じみた男であったが、より獣じみた姿になったな。だが!!いくら姿が変わろう
と我には敵わぬのだ!!」

「はっ!・化け物じみた野郎が良くほざきやがる!・ごちやごちや抜かしてねえでかかって
きやがれ!!」

「我が化け物……?・違うな!・我は最大、最強、最速の滅却師だあ!!」

卯ノ花が足元の赤い液体からトゲを伸ばしていくと、それと同時に剣八が舌打ちしな
がらも距離をつめていく。

そして赤い液体は徐々にトゲが細長く形成されていき、先端部分は槍のように鋭くな
るとジェラルドに向かって目にも留まらぬ速度で迫っていった。

だがその全てを意に介さず、全て踏み砕きながら押し潰すように迫って行く。卯ノ花
は同時に何本もの赤いトゲを生やすが、ジェラルドはそれを粉碎し、まるで軽く塵を片

付けるかの如く前進していった。

「刀二本つてのには慣れねえが、こいつは何だかしつくり来やがるぜ!!」

劍八も二刀を全力で振るい、そこから靈圧の斬撃が放たれる。そしてその二つが交差するように放たれていくのだが、ジェラルドは盾で軽く払って消し飛ばしてしまった。

そしてそのまま剣を振るって振り下ろしてくるが、劍八は二刀でそれを受け止めて見せた。何度も剣戟を重ねていき、その度に劍八の体が傷を負っていく。

「どうした!? 剣の威力が落ちていぞ!! まあ当然か。我が希望を刃こぼれさせずに戦うなど到底無理な事!!」

「ぬかせ……!!」

「不屈!! 素晴らしい精神だ!!」

激しい猛攻と打ち合いの連続で二人は既に体中ボロボロだが、それでもなお退くこと無く戦い続けていた。しかし、相手は傷を負っても再生し、その度に強くなっていく。

大して劍八等は相手の剣を刃こぼれさせる事すらマイナスになる為、無駄に斬り合うことは出来ない。もしあの剣を両断したら、両断した者も真つ二つにされてしまう事になるだろう。

故に圧倒的に不利を強いられる事になっているのだ。だが、相手がどれだけ強くとも、戦いを止めるなどと言う考えは欠片も存在しない。

「だが、それだけでは我を倒せぬ事は身をもって知つただろう!!」

次の瞬間には巨大な盾で殴り飛ばされてしまい、宙を舞う剣八。そして追撃するかのように剣が振るわれ、そのまま建物に激突しながら吹き飛ばされて行った。

だが、既に卯ノ花は無数の棘を生やしてジェラルドに向けて攻撃を始めており、更に赤い液体を斬撃の様に飛ばして斬りかかって行った。しかしそれは全て盾で防がれてしまい、反撃と言わんばかりに巨大な塔を投げつけて攻撃する。

卯ノ花は何とかそれを避ける事が出来たが、既にジェラルドの剣が迫ってくる所だった。それを赤い刃で何とか防ごうとする卯ノ花だが、そのまま弾き飛ばされて瓦礫の中へと突っ込んで行ってしまふ。

トドメを指すべく動き出すジェラルドだったが、そこへ千本桜の刃が横から次々と迫っていく。しかし、白哉の千本桜ではかすり傷すら付けることが出来ない程になっていた。

「目障りだ!! 貴様などが相手になるわけが無かろう!!」

そして千本桜をあつさり弾き返したジェラルドは、まるで白哉など眼中に無いかのようにならぬ程の力であり、最強と自負するだけの力を持っていた。

だが白哉にはまだ一つだけ手があるのだ。それは――

「絶技・矜雅白帝一刃」

自らの周りに浮かぶ六本の千本桜の刃、そして自らに纏わせた刃の羽根を全て一刀にする、更にそこへ全霊を込める。溢れ出る霊圧がまるで桜の花弁の様に散っていき、白哉自身もその力を抑え切れずにいた。

そして次の瞬間には白哉の姿が消えると、既にジェラルドの眼前で背を向ける白哉の姿があった。それはほんの一瞬の出来事であり、先程まで背後にいたハズの白哉が何故目の前にいるのか、ジェラルドには理解できなかつた。

「素早いな……だがその程度で我に——」
「私を侮るな……滅却師よ」

ジェラルドがそう言つて一歩進み出るのだが、次の瞬間には体がバラバラに崩れ落ちる。余りにも一瞬過ぎる出来事であり、ジェラルド自身も何が起こつたのかを理解する事が出来なかつた。

そして、白哉は血反吐を吐きながら膝をつく。その表情は苦しみに耐えるかのように歪められており、纏う白い羽織が赤く染まっていくな。

この技は放とうと思えばいつでも放てる技だが、体にかかる負担が多すぎる故、この一刀で完全に決着がつかなければ、無駄に終わるだけになってしまう。

頭部を破壊されても再生するジェラルドだったが、流石にバラバラにされたら終わる

だろうと白哉は予想していた。

「無駄だ……我は『神の権能』^{アシユトニク}死して尚も神の為に力を振るうものなり」

しかし、バラバラにされたジェラルドの体は光に包まれながら再生していき、あつという間に五体満足の状態に戻ってしまう。

体には謎の紋様が浮かび上がり、背には翼が生えて更に巨体になる。丸い形状だった盾には星を象つた意匠が施され、ジェラルドは更なる力を身に付けていた。

「我は高潔なる神の戦士!!我が力の奔流に飲まれて消え去るが良い!!」

そして次の瞬間には全身が輝き出し、四方八方へと光弾をまき散らして破壊の限りを尽くしていった。瓦礫が吹き飛び、地面は抉れ、大気すらも震えるほどの攻撃の数々だ。広範囲にわたって破壊が広がり続けており、逃げ場などないと思えるような状況だった。

すると――

『なにしてんの……剣ちゃん』

「やちるか……お前エ、今まで何処に……?」

破壊の衝撃と轟音の中、まるでそこだけ世界から切り離されたかのように感じさせる静謐な声が聞こえた。そこにはグレミイとの戦い以降行方知れずになっていたやちるが佇んでいる。

劍八の手を取り、早く続きをしようかと急かすやちるはこの状況を打破する策を持つているようだった。

『劍ちゃんがちゃんとあたしを使えば、斬れないものなんて無いんだから』

「なんだ……この力は。お前エ……一体何をした？」

やちるに握られた手から力が流れ込んで来るようで、体中に靈圧が漲ってくるのを劍八は感じていた。先程まで意識が朦朧としていた事が嘘の様にスッキリとし、力がみなぎって来る感覚すらある。

まるで一瞬で治癒したかの様に怪我が完治しており、それどころか体の内側からは信じられない程の靈圧が溢れ出てくる。

『その力は卍解だよ？力の方はあたしがどうかにかしてあげるから……劍ちゃんは好きなだけ暴れていいよ』

やちるのその一言で、劍八は己の中に眠るもう一つの力を理解していた。既に自らの一部となっているとも言えるそれを覚醒させる事で、更なる力を手に入れることが出来る。

そして劍八はその名を呼ぶ。己の為にこの力を使い、目の前の敵を殺す為だけにその力を奮う。

「卍解……『野散』!!」

霊王宮が新世界城にされたんだが？⑤

浦原とマユリの二人を同時に相手にしなければならなくなったアスキンのとつた行動は、逃げの一点だった。

（黒崎一護が俺の致死量を無効化したのは、こいつ等が一枚噛んでやがるのか……？）

情報が漏れている時点で致命的だというのに、更に対抗策まで持ち出すという周到ぶりを見せ付けられ、アスキンは全速力で逃げ出していた。

彼の致死量を無効化したのが一護が持つ聖文字だという事を知らない彼からしたら、この二人が絡んでいるのではないかと考える他なかったからだ。

「いい加減君の致死量とやらの能力を見せて欲しんだがネ……毒や薬だけでなく、水や酸素と言ったありきたりな物、更には個人の霊圧にまで適用する能力なんだろう？」

（どうする……ただ逃げ回ってるだけじゃ千日手だ、何か手を考えねえと……）

逃げ惑いつつも思考を巡らせるアスキンだったが、現状は劣勢に立たされていると言わざるを得ない。マユリの使って来る薬品の悉くを無効化しているのは良いものの、相手がどういいう理屈で聖文字を無効化したか分かっていない以上、むやみに致死量を使うのは早計だと考えている。

それに、確かにその能力は強力だが弱点がない訳でもない。相手の霊圧を取り込んだところで、その身体能力に物を言わせた攻撃まで無効か出来る訳ではないのだ。斬られたり撃たれたりすれば普通に死ぬので、剣八などの肉弾戦特化した物は天敵とも呼べる存在だった。

（この二人がそう言う手合いじゃないってのは幸いだが……だからって対処法が分かるわけじゃねえ）

「そろそろ飽きて来たヨ。君には是非とも被検体となつて欲しいから、出来る限り綺麗な体のまま死んで欲しいのだがネ」

「流石マユリさん……えげつない事を言いますねえ〜」

「じゃあねえ……弓使つてドンパチなんてのは性に合わねえんだがな……」

遂に観念したかの様に神聖弓を展開し、次々と矢を引き撃ち放して行つた。神聖滅矢の一発や二発で倒れるとは思っていないが、数打てば当たるとも言う。それでも、余りにも簡単に矢を斬り落としていく二人に背筋が凍るような思いを抱くのであった。

迫りくる無数の矢を斬り落として行く浦原とマユリだったが、アスキンは矢継ぎ早に弓を射ることで接近を許さない。

「マジかよ……こんな簡単に弾かれる程柔な攻撃はしてねえぞ!!」

「こう見てもアタシは元護廷十三隊の隊長なんスよ……?この程度の事なら朝飯前つス

よ」

「私の足殺地蔵にはセンサーが埋め込んであってね、私の周囲二尺以内に侵入した矢を自動で弾く仕組みになっているのさ」

浦原の周りに浮かぶ五本の絡繰りの指、その指先に仕込まれた刃で矢を弾いたり、赤い光線を射出して矢を消滅させて神聖弓による攻撃を寄せ付けない。あの五本の指と足殺地蔵のセンサーをどうかしない限りは、まともに矢を当てる事は出来ないだろう。

（仕方ねえ……こんな博打みてえな事したくなかったんだが、どう言う理屈で致死量を無効化するのか分からねえ以上はやるしかねえ……）

アスキンは弓を放ちながら、その中に毒入りボールキフト・ボールを織り交ぜて攻撃する。すると、それらは絡繰りの指から放たれる光線に焼かれて消滅していった。

二人は一護が見せた「致死量を無効化できる」というアドバンテージをこれ以上無いほどに生かしていた。そして、その無効化が自分たちの与えた策ではないという事が、見抜かれないよう立ち回つてもいる。

だが、アスキンが致死量使つて様子見をし始めた以上、それがバレるのも時間の問題だろう。

「そうなるか……やっぱり逃げるしかねえよなあ!!」

「やれやれ……いい加減くだらない見戯に付き合うのも飽きてきたんだがネ」

アスキンは再び矢を引き撃ちして攻撃を始めるのだが、浦原とマユリは飛んできた矢を余裕で斬り落とした。だがこの程度は作戦の内と言う様に、矢を主に浦原に集中させている。

ついでに大量の毒入りボールを放つていき、明らかに浦原を狙って打ち続けている。そして、完全に罠を仕掛けてきていると理解した上で、マユリはそのままアスキンへと接近した。

すると、浦原とマユリとの距離がある程度離れた所で、アスキンは次の手を打つことにした。

「ほお……これはこれは」

『ギフト・バル・デラックス極上毒入りボール』俺が作れる最大の毒入りボールさ……それとも、この見た目の方が気になるか?こいつは『ハスハイ神の毒見』ってんだ。冴えねえ名前だろ?」

アスキンは仕向けた極上毒入りボールは、周囲一帯を猛毒の空間で汚染していた。この空間内に入れば問答無用で致死量に蝕まれる事になる。現にアスキンの酸素を設定したことにより、マユリは酸素を取り込めば取り込むほど死に近づくことになった。

だがこれで終わりではないと、アスキンは更に一手打った。

「更に『フト・ペライヒ猛毒領域』俺は常に余裕のある男でいたいからな、キツイ言葉を使うのは好きじゃないんだが……この猛毒領域からは絶対に脱出不可能だ」

「絶対に脱出不可能とは……随分と大きく出たものじゃないか」

「更に付け加えておくと、誰も入ってこれない様にさせてもらったよ。あんたと浦原の二人を同時に相手にするなんざ、死んでもゴメンなんだ」

そう言うやいなや、アスキンはマユリ目掛けて矢を射出する。当然それはセンサーが反応して弾かれるのだが、それはマユリが万全の状態である場合に限った話だ。

現に今のマユリは致死量によって徐々に動きが鈍くなつて来ている。つまり、正殺地蔵のセンサーが自動で迎撃しようとしても、本人の動きが追いついていないので対応が遅れているのだ。

「それにしてもしてやられたよ。黒崎一護が俺の致死量を無効化した事にアンタ等は何の関係もなかったんだろ？無駄にビビって損したぜ」

アスキンはマユリの周囲をゆっくりと回りながら矢を間断なく撃ち続け、やがて着弾したところで一気に近づいていき、マユリの体から流れ出た血を取り込んで行く。

これによりマユリは自身の血液すらも毒と化すことになり、更に死へと近づいていった。

「ふはあ……なるほどなあ。血の中にアンタ自身の血液由来の薬がたんまりと仕込まれ

てやがる……だが、そんな物神の毒見には意味はねえ」

「ふん、想定範囲内と言ったところが……随分と説明したような顔をしているネ。そのご高説をありがたく聞いてやるから、精々感謝しながら説明したまえヨ」

「この状況で随分と余裕そうだな……まあいいさ。賢いアンタの事だ、簡単な説明でも分かるだろうから単刀直入に言うぜ。俺の完聖体は毒の変質に適応する」

アスキンの致死量による免疫生成速度は尋常では無い速度であり、仮に一秒間に48回霊圧が変化する者の攻撃を受けたとしても、その一秒間さえ耐えてしまえばもうその人物はアスキンを殺す事は出来なくなる。

そして毒の表層が幾ら変化しようが、どんなに複雑な連鎖反応しようが、その毒の土台が変わらなければ通用しなくなるのだ。

「らしくねえな……用意周到なアンタなら、見え見えの罠になんぞ引つかからないと思っただんだがな」

「なんのなんの!こちらこそあの浦原と分断してくれたことに感謝しているヨ!!それで、慎重に慎重を重ねる君こそ不用心に私に近づいて来てもよかったのかネ?」

「……ッ!」

「足殺地蔵……恐度四」

アスキンが驚く中、マユリは足殺地蔵の赤子の顔をのような顰め、その閉じられた目

の中へと指を入れ込んだ。

すると次の瞬間、けたたましい赤子の鳴き声が木霊し、アスキンは咄嗟に飛びのこうとしたが、既に体がいふ事を聞かない事に気がついた。

そして、マユリは懐から薬剤の入った注射器を取り出してそれを自らの首に打ち込む。それは免疫強化剤であり、一時的ながらも致死量の効果を緩和させる代物だ。

その効果は十分程度しかないが、動けなくなったアスキンを仕留める程度なら充分過ぎる時間だった。

「な、なんだよそりやあ……そんなの情報にはねえぞ……い！」

「意識が落ちない全身麻酔を受けた気分はどうかね？さて、先程も行ったが君には感謝しているんだヨ。あの浦原とか言う邪魔者が居なくなった今、君をゆつくりと……思う存分に研究できるのだからネ！」

そう言つてマユリが纏威を発動させると、背中には足殺地蔵の顔が出現し、その顔からは六本の不気味なアームが伸びて来る。

そのアームの先には足殺地蔵の刀身やメス、注射器の針のような物が装着してあり、ありとあらゆる器具が仕込まれているかのように見えた。

その様子に思わず怯みかけたアスキンだったが、全身が麻痺して動けないせいで逃げることが敵わない。そしてマユリはアスキンにゆつくりと近づいて行き、ゆつくりとそ

のアームを近づけ始めた。

「は………！そいつは………死んでもゴメンだね！」

しかし、次の瞬間にはアスキンが動き出し、マユリの顔面目掛けて矢を発射する。正殺地蔵の能力で全身麻痺していたにもかかわらず、何故動く事ができたのか。

予想外の出来事で僅かに反応が遅れてしまったが、纏威の状態でもセンサーはキチンと動作しているので自動でアームが矢を迎撃する。

「なるほど………それがあの乱装天傀とか言う奴か………」

「なんだよ………存じならそうと言ってくれよ………」

突然動けた理由をマユリは瞬時に理解した。その乱装天傀という技は、束ねた霊子の糸を動かさない箇所に接続し、自分の霊力で自分の身体を操り人形のように強制的に動かす技だ。

滅却師を研究していたマユリもその技自体は知っていたのだが、何せ情報が少なすぎたせいで理解が少なかったのだ。それ故用心が足りていなかったのも仕方ない事であろう。

「さて、どうする？アンタの正解はたしか………金色正殺地蔵だったか？確か毎回毒の配合が変わるんだろうが、それは俺と相性が悪い。始解の方がよっぽど怖かったが、それももう関係ない」

金色正殺地蔵の毒は、マユリ自身の血と霊圧から生成されている。そして、それは正解を解放する度毒の組成が変化する故、通常ならば免疫が意味を為さない。

だが、それはあくまでも通常の免疫ならばの話である。アスキンの致死量の前ではそんな物は無意味なため、彼とは致命的に相性が悪い。

「致命的だな。これでもう勝ち目は万に一つもねえぜ？俺としてはさっさと諦めて——

——」
「本当にそう思っているのかネ？」

「ああん？そりやいった……うぐあつ！」

瞬間、アスキンの胸から刃が飛び出して鮮血が噴出した。どうやら背後から貫かれたようであり、アスキンはゆっくりと首を後ろに向けるとそこには浦原が居た。そして、彼の背後に聖母を思わせるような巨大な女神が佇んでいるのも見える。

だが、浦原は猛毒領域によつて絶対にこの空間には入つて来る事ができない。にも関わらずどうして入つて来る事が出来たのか、アスキンはまるで理解ができなかった。

「ア、アンタ……どうやって……此処に……？」

「いやあ、随分と強力な技でちよつとばかし手こぎっちゃいましたよ。けど、アタシの正解『観音開紅姫改メ』で、アナタ以外の誰もが自由に出入りできるように造り変えさせてもらいました」

「は、ははっ……なんだよ……そりゃあ」

余りにも規格外過ぎる能力に苦笑しか浮かばなかった。この極上毒入りボールはアスキンが死ぬと無意識化でかけていたロックが外れ、その威力が増大するという代物だった。

だが、猛毒領域を浦原によつてアスキン以外が自由に出入りできるように造り変えてしまった為、それも何の意味も為さなくなってしまったのだ。

「ふう……さつさとこんな所からはおさらばしましょうか。あ、お礼なら別に——」

「ふざけるなよ浦原喜助……！ 貴様が奴以外の出入りが自由というように造り変えてくれたおかげで、貴重な研究材料を持ち帰れないではないか!! どうしてくれるんだネ!」

浦原がマユリに謝ろうとすると、マユリが鬼気迫る表情で浦原の方へと詰め寄つて来た。そんなマユリの様子を見た浦原は平謝りをする。

だが、浦原の言う通りこんな猛毒空間にいつまでも居ればいずれ死んでしまふだろう。なのでマユリも渋々、浦原に恨み言を呟きながら外へと出て行くのだった。

いよいよ最後の戦いが始まるんだが？

親衛隊であるペルニダ、リジエ、アスキンが倒されたことにより、残る親衛隊は二人。そんな状況下で、一護はユーハバツハの下へと足を進めていた。他の者達が親衛隊の足止めをしている間に、一護が直接ユーハバツハとの決戦に望む為だ。

だが、その途上で雨竜と出くわしてしまい、一護は咄嗟に二刀の斬月を構え直す。

「黒崎……!?!君は一体何を考えているんだ、帰れと言ったのが聞こえなかったのか!」「うるせえよ……お前が滅却師側に着いた理由と、俺等と戦おうとする理由をまだ聞いてねえんだよ」

「……それを聞いてどうするつもりだ?お前には関係ないだろう」

一護は雨竜の口から全てを聞きだしたかった。何一護達と共に戦ってきた彼が、なぜ離反してしまったのか。どうして敵になってしまったのか、その全てをである。

しかし雨竜は素っ気ない態度を崩そうとはしなかった。自分の言葉に耳を傾けようとしないうちに、一護は苛立ちを募らせていく。

「そうかよ……やっぱり力づくで聞き出すしかねえみたいだな」

「なら僕は、力づくでも君を帰らせるまでだ」

一護は斬月を強く握り締め雨竜へ斬りかかると、それに対して雨竜は矢を連射して一護の足を止めようとする。だが、そんな攻撃では今の一護を止めることなど出来るはずもなく、雨竜の放った矢は全て弾かれて行く。

そして一護は雨竜の目の前にまで接近すると、斬月を振り下ろして攻撃を仕掛ける。だが雨竜はその一撃を飛廉脚で回避すると、距離を取りながら矢を連射した。

そして一護は軽く刃を振るって月牙を飛ばしたのだが、それは全ての矢をかき消して尚も雨竜に向かって突き進んでいく。

「いい加減納得のいく理由を聞かせろよ、石田!!」

「本当にしつこい奴だな……君は!!」

すると雨竜は完聖体を発動させると霊子の剣で月牙を斬り裂いて行き、そのまま六本の光の帯の先を一護に向けてそこから矢を連射した。

凄まじい量の矢が降り注ぐ中、一護は素早く移動して避けていき、月牙を放って相殺するとそのまま雨竜へと向かって行く。そして一護が斬月を振り下ろせば、雨竜はそれを霊子の剣で受け止め、二人は鏝迫り合いの状態となった。

「どうした石田……滅却師ってのは弓しか使わねえんじゃないのかよ」

「そうだ、だからこれも剣じゃない……矢だ」

その言葉と同時に雨竜は一護を押し返し、素早く距離を取ってその霊子の剣を弓へと

つがえて矢を射る。放たれたそれは一瞬にして一護へと迫ったが、咄嗟に斬月構えて盾とすると、それは斬月と衝突し甲高い音を鳴り響かせる。

しかし、一護はそのまま吹き飛ばされて後ろの建物へと激突し、それと同時に剣が爆発を起して蒼炎を撒き散らす。

「……つてえな。てめえが本気でやるつてんなら、俺も本気を出させてもらうぜ……卍解!!」

そう言うで一護は始解の状態でも凄まじかった霊圧を、更に上昇させて行く。そのあまりの出力に地面がひび割れを起こし、建物の一部は崩れてしまう程だ。やがて一護を覆っていた黒い霊圧が薄れていくと、弓を手にした一護の姿がそこにはあった。

その弓は相変わらず黒い刀を二本合わせたような形状だったが、矢をつがえる場所が鋭く尖った卍型の形に変わっている。そして、死覇装の上から白いジャケットのような物を羽織っており、腰部分には白い布を巻いている。

二人はにらみ合っており、辺りには先程とまでとは比べ物にならない程の緊張感が漂っていた。そして、次の瞬間には同時に動き出し、お互いに矢を連射し始める。

一護は瞬歩を使って素早く動きながら矢を撃ち出し、雨竜もまた迫りくる矢に対して光の帯からも矢をを射出して相殺していく。二人は高速で移動しながら互いの攻撃を躲し続け、お互いの隙を狙い合っていた。

そしてしばらくの間は膠着状態が続き、二人の周囲では攻撃の余波によって荒れ果てた建物や地形が広がっていた。だがそんな中でも二人の戦いは止まる事を知らないどころか苛烈になり、辺り一帯に矢が雨の様に降り注いでいた。

「石田……てめえいい加減にしやがれよ！ さっさと俺達に何があつたか説明しろや！」
「君こそいい加減にしてくれないか、黒崎！ これ続けると言うのなら、僕は君を倒してでもこの場から退かせるぞ！」

一護は素早く雨竜の頭上を取ると、目にも留まらぬ速度で矢を放った。雨竜はそれを避けて矢を放とうとしたが、一護の放った矢が地面へと着弾した瞬間に十字状に広がる爆発が起きた。

一護は爆風で雨竜の視界を防ぎ、それと同時に瞬歩を使って一瞬で移動し、死角からの攻撃を開始する。しかし雨竜もまた一護の攻撃を紙一重で躲して矢を放ち続け、そこから二人は目にも留まらぬ速度で矢を撃ち合っている。もはや周囲の地形は完全に崩壊しており、まるで戦場跡の様な有様だった。

そして雨竜は霊子の剣を再び弓につがえると、そのまま一護に目掛けて矢を放った。それに対して一護は天墜穿月を振るうと、そこから黒い卍型の月牙が複数出現し、雨竜の放った剣と衝突して大爆発を起こして蒼炎と黒炎を撒き散らしていく。

「上等じゃねえか……俺の方こそ、てめえをぶちのめしてでも連れ帰って——」

「黒崎君!! 石田君!!」

「おーおー、これはまた随分とはでにやっておるのう」

二人が戦闘を続けようとするのと遠くから織姫の声が聞こえ、さらにその後ろには夜一と泰虎の二人が向かってきていた。しかし、どうやらここに来たのはその三人だけではなく、雨竜側の背後からも何者かが近づいて来ていた。

それはハッシュヴァルトであり、その手には白いチップのような物を複数枚持っている。

「役者は揃っているようだな……もつとも、石田雨竜。お前が何と答えるかは既に見えているが」

「何だよあの目……まるでユーハバツハと同じじゃねえか」

ハッシュヴァルトの手に持っている物は、雨竜がこの真世界城の各所に仕掛けた一種の爆弾のような物であり、それを起動させればこの真世界城を崩壊させられる事が可能であった。

それは雨竜の霊圧でしか起動できない物だったが、こうしてハッシュヴァルトに回収されてしまったのではどうしようもない。元よりユーハバツハを止める為に始めた事ではあるが、その一手を封じられてしまった以上はどうしようもなかった。

「現世へとつながる太陽の門も既に破壊してある。ここで終わらせるぞ、石田雨竜……」

陛下がお目覚めになる前に」

「……どうやらやるしかねえみてえだな、石田」

「……いや、待て黒崎」

太陽の門を使って一護達を現世に送り返そうとしたが、それも最早不可能となった。こうなってしまうえば、あとはもう戦うしかないのだろうと一護は判断し、天墜穿月を構えるが雨竜はそれを止めた。

すると雨竜は「ユーハバツハは眠っている間だけ、ハッシュヴァルトと力が入れ替わる」といった旨の言葉を一護に聞かせた。つまりは今現在ユーハバツハには「全知全能」はなく、倒すとしたら今しかない。

「……お前は此処に残るのかよ」

「ごちやごちや喋ってないでさっさと行け！別に、最後の言葉でもないんだ」

すると一護はそれ以上何も言うことなく、雨竜に背を向けた。そしてその後には織姫達も続いてその場から去っていくと、雨竜はハッシュヴァルトの方に向き直った。

だが、ハッシュヴァルトは一護達を追うそぶりも見せず、雨竜と向き合い、淡々と口を開いた。

「追わなくても良いのか……そう言いたいのだろうか？」

「……」

「追う必要などない、何故なら奴等は死ぬのだからな」

そう言い放つと、ハツシユヴァルトは手にした白いチップを粉々に砕き、剣を引き抜いて雨竜へと斬りかかる。そして、雨竜も弓を構えてそれに応戦していくのだった。

それから、一護達はユーハバツハの居る新世界城の最上部へと向かっていた。階段をのぼりながら、一護は倒すべき相手の事を考えている。

ユーハバツハの能力である『全知全能』は、只未来を見通すだけでなく未来を改変する事さえできる。そうバンビエツタから教えられおり、そんな奴を相手にどうやって勝てば良いのかと頭を悩ませているのだ。

だが、一護には与えられた聖文字である『白』がある。それを上手く使うことが出来れば勝てる筈だと、そう自分に言い聞かせていた。

「む……一護、アレを見ろ！」

「なんだ……ありやあ……！」

突然泰虎が上空を指さし、釣られて上を見た一護は驚愕した。何故なら空高へと黒い何かが噴き出しているのが視認出来たからだ。

それらは新世界白のあちらこちらへと雨の様に降り注いでいる様で、粘着質な音を響かせながら地面へと落ちて行く。だが、次の瞬間にはその粘着質な音を立てる黒い何か

は粘土のように形を変えていき、やがて体中に目がある人型に何かへと変貌を遂げた。

全身から眼球の様な物を生やした異様な化け物へと変貌を遂げたそれらは、一護達の姿を見て襲いかかってきた。それに対して一護達も迎撃を開始して殲滅していくが、数が数だけに苦戦を強いられていた。

「ここは農らに任せて先に行け!!ここ奴等は農らに任せよ!!」

「そうだ一護……ここは俺達に任せて先に行け」

「ああ……分かった」

そして一護と織姫は、泰虎と夜一を残して先に進むことにした。後方からは爆発音と地響きが響いてくるのだが、それを一切無視して二人は更に上へと進んで行く。

この黒い何かは死神達を足止めするかのようにあちらこちらに出現しており、親衛隊を倒して先に進もうとする者らや、一護との合流を果たそうとしている恋次とルキアの前にも現れていた。

だがそれだけには止まらず、その黒い何かは瀨霊廷にも降り注いでいき、各地で死神達が対処に追われることになる。

そうしているうちに、一護と織姫は遂に最上階へと辿り着く。巨大な扉の奥からは凄まじい力の奔流が感じられ、間違いなくこの奥にユーハバツハが居るのだろうと確信した。

「この扉の向こうか……よし、行くぞ井上！ 防御は任せた!!」
「……………うん！」

一護が扉を開けると、その先には凄まじい戦闘の痕が広がっていた。壁や床には爆撃されたかのような破壊痕があり、あちらこちらには瓦礫が転がっている。そして部屋の一番奥には砕けた玉座が転がり、その残骸に腰を下ろすユーハバツハが一護達を見つめていた。

まるで眠っているかのように目を閉じているその姿からでも凄まじい圧を感じる事が出来るが、それ以上に一護の気を引いたのは、師であるバンビエツタを含むバンビーズの面々が、全員血まみれで床に倒れ伏している光景だった。

いよいよ最後の戦いが始まるんだが?②

それは一護と織姫が最上階へとたどり着く前の事。

「おいバンビ、オレ達は一体いつまで待つてりやいいんだ?」

「最低でも一護が来るまでは待つてほしいんだけど……」

「そんな悠長な事言つてられるかよ!あたし等は早くユーハバツハの野郎に落とし前を付けさせなきゃなんねーんだ!!」

キャンデイスは苛立ちを隠そうともせず、近くの壁を蹴り飛ばした。リルトットも冷静なように見えるが、内心はこの状況を作り出したユーハバツハに対し怒りを抱いているようだ。

ジゼルとミニニーニヤはいつも通りのように見えるが、やはりユーハバツハに対する苛立ちは隠せていないようだ。いや、ジゼルに関しては何も考えていないだけなのかもしれない。

そして、そんな光景をバンビエツタはハラハラしながら見つめていた。その内最上階へと勝手に向かってしまうのでは、という心配が彼女の心を蝕む。

「チツ……これ以上待つてられるか!オレ達は先に行くからな!!」

「ちよ、ちよつと！待ちなさいよりル!!」

「十分待ったもの、これ以上は待てないわ」

「ミニーまで……!?!」

このままでは本当に勝手に行きかねないので、バンビエツタは慌てて四人を止めようとした。だが、それでも四人は止まらない。それどころか早く先に行こうと急かす始末だ。

その後も何とか止めようと説得を続けるが、まったく聞く耳を持たないようであり、そのまま階段を駆け上がって行ってしまった。

「早くしないと置いてちやうよ？バンビちゃん」

「ああもう……分かった！分かったわよ!!もうどうにでもなれツ!!」

これ以上説得を続けても無駄だと感じたバンビエツタは、諦めたかのように四人を追って走り出した。そしてそのまま、最上階へと辿り着く。

そこには玉座に座りながらこちらを見下ろすユーハバツハの姿があった。その姿は一見するとただ静かに座っているように見えるが、その威圧感バンビエツタ達に息を？ませるには十分すぎるほどだった。

「お前達が来ることは既に視えていた……だが、お前は一体なんだ？」

そう言ってユーハバツハが指さしたのは他でもないバンビエツタであり、それに対し

てバンビエツタは何も答えずに黙ってしまふ。

正確に言うならば、何故ユーハバツハにそのような事を聞かれたのか分からず、何も答える事が出来なかったというのが正しいだろうか。

「どう言う事……?」

「お前は只の滅却師にしか過ぎないハズ……にも拘らず、お前は何故この目に映らない」
ユーハバツハの言葉にバンビエツタは息をうんだ。おそらくユーハバツハのこの目とは、全知全能の未来視の事を言うのだろう。だが、その目に映らないとは一体どういう事なのか、バンビエツタにはさっぱり理解できなかった。

未来視に映らないという事は、恐らく未来視で見た映像の中にバンビエツタは映っていないという事であり、それ即ちバンビエツタの存在自体が未来視の干渉を受けないという事でもある。

(どういう事かよく分からないけれど……それならやりようはある)

「もう良いかユーハバツハ……オレ達にした事の落とし前、キツチリと付けて貰うぞ!!」
「くたばりやがれ!!ユーハバツハ!!」

リルトットとキャンデイスの二人がそう叫ぶと、四人は弓を番え一斉に射掛けた。そこへバンビエツタも素早く完聖体を発動させると、一斉に神聖星盾を飛ばして四方八方からの射撃を行っていく。

しかし、それらの攻撃は全て外殻静血装によって防がれてしまい、ユーハバツハには傷一つ付ける事が出来なかった。

すると、今度はバンビーズの周囲に光の柱が複数出現し、それらから同時に神聖滅矢が放たれた。バンビエツタは直ぐに神聖星盾の結界と外殻静血装を同時展開する。

凄まじい勢いで数多の矢がその結界に突き刺さり、神聖滅矢の威力に押されていくが、どうにかその全てを防ぐ事に成功する。壁や床には亀裂が入り、爆発の余波で吹き飛んだ瓦礫が粉塵を巻き起こす。

「ガルヴァノブラスト!!」

舞い上がった粉塵の中からキャンデイスがユーハバツハへと向けて、五ギガジュールの電撃を持つ神聖滅矢を放った。よく見るとキャンデイスの全身には赤い動血装のラインが奔っており、それは地面を伝わってバンビエツタまで伸びて来ていた。

それはバンビエツタの外殻動血装であり、それによってキャンデイスの力を一時的に底上げしているのだ。

やがて、キャンデイスの放ったガルヴァノブラストはユーハバツハの持つ剣に防がれてしまうが、その瞬間にはすさまじい電撃が迸ってユーハバツハの体を包み込んだ。

しかし、それすらもユーハバツハには全くダメージを与える事が出来なかったようだ。しかし、既にミニーニヤがユーハバツハの直ぐ傍にまで迫ってきていた。

そして右手を握り締めると、ユーハバツハの頭部に向けて全力で拳を叩きつけようと振り下ろす。だが、容易くその拳は受け止められてしまい、そのまま投げ飛ばされて壁に叩きつけられてしまう。

「ミニニー!?この……………」

「クソ野郎が……………てめえだけはマジで許さねえ!!」

「愚かな……………」

次の瞬間にはミニニーニヤに向かって神聖滅矢が放たれるのだが、咄嗟にバンビエツタが神聖星盾でその攻撃を防いだ。そしてそのまま六つ全てを前方に展開し、炎と雷撃の複合砲撃を放っていく。

その攻撃にユーハバツハは再び外殻静血装を展開し、その攻撃を防ぎきってみせた。しかし次の瞬間には既にリルトットが彼へと迫り、彼女の影が形を変えユーハバツハへと噛みつきこうする。

その原作や小説でも見せた事のない攻撃方法にバンビエツタは驚いたが、すぐに神聖星盾を全て霊子の剣と集わせると『七ズイベン・シユヴェアト星 剣』へと変化させてユーハバツハに斬りかかった。

「これなら……………どう!?!」

「さっさとくたばりやがれてんだ……………このクソ野郎が!」

「いつまで無駄な事を続けるつもりだ……お前程度の攻撃は私には届かん」

ユーハバツハがそう呟いた直後、彼の周囲から影のような物が伸びて二人へと襲い掛かった。それらを七星剣で斬り払っていくが、ユーハバツハの攻撃は止まる気配がない。

次々に伸びて来る影に二人も徐々に追い込まれて行き、やがて攻撃を防ぎ切れなくなってしまうと直撃を受けて吹き飛んでしまった。そのまま壁へと激突し、瓦礫と共に地面に倒れ込む。

キャンデイスとジゼルが再び矢を連射してユーハバツハへと攻撃を仕掛けるが、黒い影に阻まれてまともにダメージを与える事は出来なかった。

「ううくん、ボクのゾンビが全滅しちゃったのは痛いなあ〜」

「雑魚のゾンビが何体いようが、そんなモン役に立たねえよ!!」

ジゼルのゾンビは聖別の時に全滅してしまっていたが、キャンデイスの言う通り雑魚のゾンビではこの戦いに何の役にも立たないだろう。現に星十字騎士団も聖章騎士である四人と、バンビエッタの矢を雨の様に浴びせているというのに、ユーハバツハには傷一つ付ける事が出来ていない。

すると、ユーハバツハは右手を天に掲げ、上空に無数の大聖弓を発現させて彼女等へと狙いを定めた。それらから放たれる矢はまるで流星のように凄まじい勢いで降り

注ぎ始めると、辺り一帯を爆撃していった。

流石のバンビエッタ達もその矢を捌ききれず、全身を撃ち抜かれていく。全員が全身傷だらけで血塗れになり、最早立っているのもやつとという状況である。

「はあ、はあ……この……！まだ……！終わらないわよ……！」

「バ、バンビ……ちゃん……」

「く、クソ……こんな……事が……」

全身から血を流し、苦しそうな表情をしながらどうにか立ち上がろうとするが、もはやその足は震えており満身創痍といった状態だ。

そして、バンビエッタは後の力を振り絞って七星剣を振り上げると、ユーハバツハの周囲に無数の霊子の剣を出現させて一斉掃射を行った。何十何百という数の霊子の刃がユーハバツハに向かって迫っていく。

「なるほど……だがその刃、既に全て碎けているぞ」

だが、その剣は全てユーハバツハに当たる直前に碎けてしまい、七星剣も粉々に碎けてしまった。確かにバンビエッタは彼の未来視には映らない、だがバンビエッタの起こした事象までは映像から消えていなかった。

例えば、ユーハバツハの放った矢をバンビエッタが剣で斬り落としたたししよう。確かにそこにバンビエッタは映っていないが、剣で斬り落とした矢まで消えることは無

い。

そして、未来視に映らないと言えども改変の能力まで受け付けない訳では無い。故に、バンビエッタの放った刃は全て碎かれて消え去ってしまった。

「肩慣らしにはちょうど良かったが、そろそろ終わりとしよう」

そう言うと、ユーハバツハはバンビーズの面々目掛けて影を伸ばした。まるで津波の様に迫る影に対し、バンビエッタは咄嗟に神聖星盾を展開して防ごうとするが、それでも間に合わずに全員吹き飛ばされてしまう。

全身を傷だらけにし、血に塗れながら地面を転がっていくバンビーズの面々。立ち上がる事も出来ずその場に倒れ伏すしか無く、最早戦いを続けて行くのは不可能であろう。

そんな様子を確認したユーハバツハはバンビエッタの方へとゆっくり歩むと、彼女の前で立ち止まった。

「お前は一体何者だ？その正体を見せてみる……」

そう言つてバンビエッタの首を掴み持ち上げるユーハバツハは、バンビエッタへと血装を通して力を奪い取ろうとする。だが、そこで突如弾かれるかのように手を放してバンビエッタから距離を取った。

間違いなく彼女に意識は失っているはずだが、今確かにユーハバツハの力に対抗しよ

うとしたのだ。

「お前は……！……そうか………そういう事だったのか」

ユーハバツハが何かに納得したような素振りを見せると、身をひるがえして砕け散った玉座の残骸へと戻っていく。そしてそこに腰掛けると静かに目を閉ざすのであった。

いよいよ最後の戦いが始まるんだが？③

横たわる友の亡骸、辺り一面には死神達の無惨な死体が散乱しており、凄惨な状況だ。

そしてそんな中、一人の死神は少女の亡骸を抱いて叫んでいた――

「……………っあ?! い、今のは……………って、織姫……………? あんた……………」

「大丈夫ですか、バンビエツタさん」

「なるほど……………ようやく一護が来たってワケね」

バンビエツタは自らの体を見る、傷は全て織姫の盾舜六花で癒され傷一つない体となっていた。残りの四人は未だ目覚めていないが、それでも傷はバンビエツタ同様に完治している。

既に一護とユーハバツハの戦いは始まっており、バンビエツタもその戦いへと参戦するために走り出した。先程妙な夢を見た気がするが、今はそれを気にしている余裕はない。

少しだけ時は遡り、バンビエツタが目覚める少し前の事――

「よく来た……………待ちわびたぞ我が闇の子よ」

ユーハバツハの前に立つ一護は、二刀の斬月も抜かず歩いて行く。まるで無防備に

も見えるが、迸る霊圧が形となつて見えそうな程強力な霊力が彼の身体から滲み出していた。

そう、これが一護本来の力だ。一護が発する強大な霊圧に周囲の瓦礫や塵が吹き飛ばされて宙に舞い上がっている。ユーハバツハも目を細めながら、まるで歓喜に打ち震えるかのような声で呟くように話しかけた。

「さあ、何処からでもかかつて来るがいい。お前の持てる力、その全てを私に見せてみる!!」

「……井上、倒れている師匠たちを頼む」

「あ、黒崎くん……うん、分かった」

井上が声をかける前に既に一護の姿はそこには無かった。消えたかと思う程の速度で移動しユーハバツハの目の前にまで迫り、二刀の斬月を振るった。

「月牙十字衝!!」

霊圧の込められた斬撃は巨大な十字状の衝撃波となつてユーハバツハに襲い掛かる。だが、それでも彼の余裕の態度は崩れない。即座に膨大な影を前に展開し、月牙十字衝を完全に防いで見せた。

そしてその影はそのまま一護へと伸びて行くが、一護はそれを二刀で斬り裂きながら高速で移動し再びユーハバツハとの距離を詰めて斬撃を放つて行く。

だが、その攻撃は全てユーハバツハに届く前に全て影によって防がれてしまっていた。「怒りに満ちているな……お前の母を殺した事への怒りか？それとも、そこに無様に倒れている師を——」

「うるせえってんだよ……俺はてめえと問答するためにここにきたんじゃねえ……!!」

更に速度を上げ、斬撃のスピードも上がるがそれでもユーハバツハには届かない。次々と押し寄せる影が行く手を阻み、彼の攻撃を防ぐと同時に反撃の手まで繰り出してきた。

その反撃によって一護は吹き飛ばされていき、地面を転がりながら着地するとすぐさま次の攻撃に移っていく。だが、既に影が目の前にまで迫って来ていた。

それは織姫の盾舜六花にとって防がれ、その隙に一護が距離を詰める。そして再び斬撃を叩き込んで行くのだが、その悉くを防がれてしまう。

「無謀な突撃だな……何のためにその女を連れて来た？憎しみで我を忘れたか」

ユーハバツハは一步も動く事なく、影を操るだけで一護の攻撃を防ぎ続けていた。更に地面や壁から槍のように伸び一護へと迫っていく。だがそれでも構わずに突撃していくと、遂にはユーハバツハの目前まで迫る事に成功する。

何度も影と斬月がぶつかり合い、激しい火花を散らしていく。影だということにも拘らず、まるで硬質な金属と打ち合っているかのような衝撃が伝わってくる。

「黒崎君……!」

「俺は大丈夫だ井上……それよりもそつちを頼む」

「解せんな……何故そう死に急ぐ必要がある? それでいいのか、一護。お前が死ねば現世も尸魂界も終わりだ」

ユーハバツハの言葉に耳を傾ける事なく、一護はひたすらに攻撃を繰り返す。だがそれでも届かない、あと少しのところまでどうしても攻撃が弾かれてしまうのだ。それ程までに力の差があるという事をまざまざと見せ付けられているような気分だった。

だが、一件無謀とも思える突撃には一護なりの理由があった。一護の手のする二刀の斬月、右手に持つそれは彼の内に居る虚であるホワイトと同じく、白一色に染められている。

だが、それでも虚の力は完全に目覚めているとはいえず、半分以上が斬月を打ち直して以降眠ったままになっている。もし、内に眠る虚を完全覚醒させた場合、本当の意味で一護本来の力が目覚める事となるだろう。

「ようやくか……おせえよ……!」

一護へと膨大な影が襲い掛かるが、次の瞬間には一護の体から凄まじい霊圧が噴出していた。それは押し寄せた影を吹き飛ばして吹き飛ばしていく。

同時に左の側頭部から角が生え、右目が黒く染まっていき、顔に黒いラインが入って

くる。その黒いラインは胸へと続き、まるで破面の穴の様に円を描いていた。

「俺の力と溶け合ってたんだから自由に出せりや良かったんだけどな……まだ全然つかいこなせちやいねえから、あんたの力を使わせてもらった」

「ほお……それがお前の狙いだったか」

「井上、少し広くするから俺の霊圧から六花で全員守ってくれるか？流石に俺も加減できそうにねえからよ」

一護がそう言うと、井上はその言葉に従って盾舜六花で倒れたバンビーズの面々を守る為に範囲を広げていく。

そして次の瞬間、再び一護の体から霊圧が噴き出し、最上階の壁を全て吹き飛ばしてしまった。それを見たユーハバツハは「素晴らしい力だ」と歓喜の声を漏らし、愉快そうに笑いながら拍手していた。

だがそれでも余裕の態度は崩さない、それどころか更に喜びに満ち溢れたような表情さえ見せている。

そして――

「……っあ?!い、今のは……って、織姫……?あんだ……」

「大丈夫ですか、バンビエツタさん」

「なるほど……ようやく一護が来たってワケね」

どうやらようやくバンビエツタが目覚めたようであり、己の体に傷がない事を確認すると、すぐさま立ち上がって一護の方に顔を向けた。そしてそのまま一護の隣へと移動すると、右手で刀を握り、左手に霊子の剣を出現させ、更に完聖体を発動させる。

そんなバンビエツタを見て安心したのか、一護は一つ息を吐くと斬月を構え直して口を開いた。

「何だよ師匠、もうちつとぐらい休んでても良かったんだぜ?」

「言うようになったわね一護……まあ、そんな軽口を言えるくらいなら大丈夫でしょ」

それだけ言うと、バンビエツタと一護は一気に加速してユーハバツハへと斬りかかっていく。それを見たユーハバツハも応戦するように剣を前に構え、二人を迎え撃とうとした。

一方で卍解を発動させた剣八は、明らかに先程とは比べ物にならない力を感じさせていた。その姿はまさに血に飢えた獣そのものであり、暴れたくてうずうずしている事を隠し切れていない様子であった。

「よもや多少赤くなっただけが卍解と言う訳でもあるまい。剣も多少大きくなっただけだが、つまらん。その程度では希望の剣を振るうのも惜しい!!」

ジェラルドはそう言うと、剣八へ向かって拳を振り下ろす。すると、次の瞬間には

ジェラルドの右腕が斬り飛ばされて上空に舞っていく。

その右腕はすぐに再生されて元通りになったが、その頃には既に劍八はジェラルドの眼前まで迫っており、二刀を振り下ろしていた。それを盾で防ごうとしたが、盾ごと腕を両断されてしまい、そのまま蹴りを喰らわされて吹き飛んで行く。

そしてそのまま新世界城から落下して行きそうに思えたのだが、ジェラルドは翼を羽ばたかせて空中で体勢を立て直すと、そのまま劍八へ向かって飛んで行く。

「馬鹿な！馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な！！死神が我を追い詰めるなど……そんな事があつてたまる——」

「馬鹿馬鹿うるせえんだよ！！黙ってくだばりやがれ！！」

劍八の二刀があっさりとジェラルドの体を両断し、真つ二つになった体をさらに幾度となく斬撃を飛ばしてバラバラに斬り刻んでいく。

そしてトドメの一撃と言わんばかりに二刀へと全霊を込めていき、その圧倒的な力を注ぎ込んだ一撃を放つ。その霊圧の斬撃は着弾した瞬間に凄まじい爆発を起こし、ジェラルドの上半身を完全に消し飛ばしていった。

「今のが……彼の卍解」

その光景を見ていた卯ノ花がポツリと呟く。圧倒的な力で敵を蹴散らし、完膚無きままに叩きのめすその姿はまさに鬼神と呼ぶに相応しいものだった。

しかし、やはりと言うべきかジェラルドはまだ終わっていないかった。上半身が消し飛ばされたジェラルドだったが、周囲の霊子が集っていき肉体を形成していく。

「まだ……終わらぬというのか……?!」

「へっ……良いじゃねえか!! 本当にくたばるまで斬り刻んでやるぜ!!」

まるで光の巨人を思わせる姿に変貌を遂げたジェラルドは、指先からまるでビームの様に霊子を撃ち出していく。

そしてジェラルドの攻撃を躲し続けながら段々と距離を詰めていき、斬撃を繰り出していく。その一撃一撃は非常に重く、同時に疾く鋭いモノであった。

『剣ちゃん、これ以上力を出しちゃうと剣ちゃんの体が——』

「構わねえ、いいからもつと力を寄越せ! やちる!!」

やちるの言葉を遮るように剣八が叫ぶと、その言葉に応えるかのように更に力が増して行く。それに対応するかの如く剣八の体も赤く染まっっていく、攻撃の威力も速度も増して行く。

そして、そしてそのままジェラルドの両腕を両断して斬り落とすと、そのまま胴を両断しに掛かる。

しかし、その途端に剣八の腕がへし折れてしまい、血が噴き出して腕が変な方向に曲がってしまう。そして次の瞬間には口から血反吐を吐き出しながら、倒れ伏してしまっ

た。

『剣ちゃんの体の方が……耐えられなかったみたい』

意識が朦朧とし、血を流しながら倒れる剣八を見てやちるは悲しみの表情を浮かべている。そして、倒れ伏す剣八の体へとジェラルドの剣が降り下ろされ、その右腕を切断してしまう。

だが、次の瞬間には卯ノ花の操る血の様に赤い液体が剣八の右腕を一瞬で再生してしまう。そしてそのまま剣八は立ち上がり、右腕の感覚を確かめるように手を握ったり開いたりして調子を確かめた後、剣を拾い直してジェラルドへと斬りかかっていった。

いよいよ最後の戦いが始まるんだが?④

一護が駆け出すと同時にバンビエッタは無数の霊子の剣を展開し、六つの神聖星盾を全てユーハバツハ目掛けて射出していく。

その盾から矢が数多に射出されていき、ユーハバツハへと襲い掛かる。だが、それらの攻撃はことごとく弾かれてしまい防がれてしまう。その隙に一護がユーハバツハへと肉薄し、斬撃を叩き込んでいく。

「よかろう……私も剣を抜いて相手をするとしよう」

ユーハバツハが霊子の剣を出現させて一護へと斬りかかろうとしたが、一護はそれよりも早く霊子の剣を握った手を抑え込み、斬月でユーハバツハへと斬りかかっていく。

だが、それをユーハバツハは片手で防ぐと、そのまま霊子の剣を横薙ぎに振るって一護を弾き飛ばそうとする。それ一護はそれを飛びのいて避けるのだが、その時には既にユーハバツハの上空にバンビエッタの霊子の剣が展開しており、雨のように降り注いでいった。

ユーハバツハは手を頭上に掲げると、全ての霊子の剣の影で打ち砕いて打ち消して見せ、その隙を突いて斬りかかってきた一護を迎え撃とうとする。

「月牙天衝か……！何度放とうと同じ事だ！そんなものが——」

だが、その一撃はただの月牙天衝ではない。それは刀剣解放第三階層の状態のウルキオラが放った技、黒虚王の閃光が混じった月牙天衝であった。

漆黒の斬撃が三日月のような形となってユーハバツハへと迫るのだが、それでもユーハバツハの体を斬り裂くには至らず弾かれてしまう。だが、既にバンビエツタが神聖星盾での砲撃準備を終えており、極大の閃光がユーハバツハを飲み込んでいった。

「暖い……暖いと言ったはずだ!! 奴は自分達を舐めている。故に自らの能力を使わず、故に虚と融合した自分の底力も知らぬ！」

「分かっちゃいたけど、ここままでして無傷つてのは流石にこたえるわねえ……」

「今しかないよ、そう思っているのだろう！ 奴が自分達を舐めている、今この瞬間しかと！ だが……それも今終わった」

次の瞬間、ユーハバツハの体を覆っていた影に無数の目が浮かび上がる。それと同時に一護は二刀を構えて、ユーハバツハへと斬りかかっていく。

バンビエツタも同様に霊子の剣と刀の二刀で、まるで挟み撃ちにするような形で攻撃を仕掛けていったのだが、ユーハバツハも霊子の剣を二刀に作り出し、二人の攻撃を防いでみせる。

二人掛で攻めているというにも拘わらず、その斬撃を全て防がれてしまい、神聖星盾

による射撃をも影で防いで見せてしまったのだ。

そして次の瞬間には爆発するかのように影が膨れ上がり、まるで津波の様に二人へと襲い掛かって来た。それを受けて二人は吹き飛ばされてしまい、それぞれ地面に倒れ込んでしまった。

そして、体勢を立て直そうとする一護に向かって、ユーハバツハが霊子の剣を振り下ろしてきた。何とかそれは神聖星盾によって防ぐと、一護は飛びのいて距離を置いた。(おかしいわね……そろそろユーハバツハが未来改変の能力を使い出しても良い頃だと思っただけで、その素振りが無い? 一体何を考えているのよ……)

一護はバンビエッタの隣まで後退すると、そのまま一度斬月を構え直した。その様子を見たユーハバツハは余裕に満ちた表情で笑うと、二人に剣を向けたまま悠然と歩き出す。そしてゆっくりと歩を進めて行くのだが、一向に何か行動を起こす素振りはなかった。

「どうした一護。お前はこのまま力を出し切らず、師と共に死ぬつもりか? それも良いだろう。ならばそこで動かずに——」

ユーハバツハの言葉を遮ると、一護は二刀の斬月を交差させて卍解をした。その弓は相変わらず黒い刀を二本合わせたような形状だったが、その刃の部分が白い鞘のような物に覆われて覆われていた。

その姿を見て、ユーハバツハゆっくりと右手を一護の方へと伸ばす。すると、どう言う訳かそのまま一瞬だけ動きが止まってしまった。

「ほお……やはり私の能力も既に知っていたか」

「知ってたさ。未来を見通すだけじゃなくて、未来を改変する事が出来るって事はな。だからこうして——」

「だが、無意味だ」

ユーハバツハがそう言った瞬間、突然一護の天墜穿月牙真つ二つにへし折れてしまった。ユーハバツハと一護の間にはまだ距離があり、ユーハバツハがその場から動いたような素振りは一切なかった。

ユーハバツハの改変の能力を一護の白で打ち消す、そのタイミングは間違はなく外してはいなかったはずなのにと、二人は戸惑いの表情を浮かべている。

「一護。お前が幾ら私の能力を打ち消すことが出来ようと、未来で改変されてしまえば意味はない」

「なん……だど?」

「絶望してくれるなよ一護。絶望した子を殺すことほど、親にとって辛いものはないだから」

次の瞬間、ユーハバツハが一護の目の前へと現れた。そして剣を一護に向かって振り

下ろしていく。今度は織姫の盾舜六花がそれを防いだのだが、突然一護の胸元が斬り裂かれて鮮血が噴き出した。

ユーハバツハと一護の間には間違いなく織姫の盾舜六花が存在するはずなのに、一護の体に斬撃が届いてしまった。幾ら一護が相手の聖文字を打ち消せようと、ユーハバツハの全知全能はそれを上回って改変する事が出来るのだ。

「くっ……一護!!」

バンビエツタが無数の霊子の剣を射出してユーハバツハへと攻撃を仕掛けていくが、その全てが瞬く間に砕かれて消滅していく。だが、それでもかまわず膨大な炎を放射して攻撃を続けたのだが、それもユーハバツハの影で防がれてしまった。

しかし、その炎は只の目くらましにしか過ぎず、バンビエツタは既にユーハバツハの背後に回り込んでおり、七星剣振り下ろしていた。

だが――

「確かにお前は私の目には映らない様だ……だが、改変の影響まで無効化できるわけではあるまい」

「が……はあッ!?!」

背後からのバンビエツタの攻撃に対して、ユーハバツハは霊子の剣でそれを防いだ。すると、次の瞬間には一護の時と同様に突然胴体が斬り裂かれて血が噴き出す。更に追

撃として腹部に強烈な一撃を叩き込まれてしまい、吹き飛ばされて床へと叩き付けられてしまった。

圧倒的なまでの力の差を前に立っている事ができず、バンビエツタはその場で倒れ込んでしまう。

それでも何とか立ち上がるうとするのだが、腹部を斬り裂かれたせいで立ち上がる事が出来ずそのまま膝をついた。その際にユーハバツハはゆっくりと一護へと近付き、頭部を掴んで持ち上げる。

「もう諦めたのか？お前らしくもないな」

（俺の剣も……井上の盾も通じねえ。師匠ですら敵わねえ……………）

ユーハバツハの圧倒的なまでの強さを前に、一護はどうすれば良いのか分からずじまつた。そして、そんな彼の脳裏には「終わりだ……」と言う言葉が浮かび上がってくる。

正解を一瞬でへし折られ、白すら通じない相手に今の自分が勝つ事は出来はしないと。

ユーハバツハに頭を掴まれたまま藻掻いていた一護だったが、ユーハバツハはそんな彼の力を奪うべく、一護の体に血装を通していく。

（消える……俺の中の滅却師のちからが。それと混じりあっていた虚の力も。消える……全部消えていく……まっしろに……）

そして、一護の力を奪い取ったユーハバツハは彼を無造作に投げ捨てると、笑い声を上げた。ユーハバツハの笑い声が木霊する中、一護は虚ろな表情のままその場に倒れ込んでいる。

その様子を見たバンビエツタは、必死に体を起こそうとするのだが、腹部から流れる血のせいで上手く力を入れる事が出来なかった。

卍解による過剰なまでの力の上昇は、剣八自身の体を破壊し始めたが、それを卯ノ花が瞬時に再生させる。

剣八の体は破壊と再生が同時に起こっているという異質な状態となつてはいたが、剣八自身は痛みを感じていないのか特に気にする様子はなかった。

寧ろ、その異質な状態が更に剣八の闘志を燃やしているようにも見え、まるで光の巨人の様なジェラルドを相手にしても全く怯む様子を見せなかった。

「良いぜ……面白えじゃねえか。もつとだ……もつと俺を楽しませろ!!」

肉が裂け、血が噴き出し、それが次の瞬間には再生し、そしてまた再び肉が裂け、血が噴き出し……そんな破壊と再生を繰り返しながら剣八は戦い続けていた。

辺り一面に破壊をもたらすジェラルドの攻撃を紙一重で躲して近づき、剣を叩き込んでいく。その一撃一撃は凄まじい破壊力を誇るが、ジェラルドの凄まじい巨体はものと

もしない様子で、剣八の攻撃を防いでいく。

それだけでなく、逆に圧倒的な巨体から繰り出される打撃を剣八に叩き込み、彼の体を吹き飛ばしてしまった。更にそこへ光線を撃ち出して、剣八を追い詰める。

だが、それは上空へと弾き飛ばされていき、遙か上空で大爆発を発生させた。

「オアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

そう叫ぶ剣八の体は赤く染まり、頭部には角のような物が生えてきていた。その赤く染まった剣八の姿は、まるで鬼を思わせる風貌へと変わっている。

理性を感じさせぬ咆哮を上げ、剣八は再びジェラルドへと突撃していく。そして猛スピードで近づくと、両手の二刀でラツシユを繰り出して行く。その一撃は容赦なく巨人の体を斬り刻んでいくが、それでもジェラルドを殺しきるには至らなかつた。

「これ以上は……いけない。彼自身の崩壊に、再生が追い付かなくなってきた」
「ガアアアアアアアアアアア!!!」

卯ノ花の言葉も聞こえていないのか、剣八は獣のような咆哮を上げてそのまま攻撃を続ける。その姿に最早理性は感じられず、ただ目の前の敵を斬る事が全てと言っているかのようであつた。

破壊と再生の均衡が崩れ始めているのか、剣八の全身の皮膚が裂けて血が噴き出し始める。だがそれでも攻撃の手は一切緩めず、そのままジェラルドの体を斬り刻んでい

く。

だが、最早骨すらも砕け、まともな体勢を維持できない剣八はバランスを崩して倒れてしまう。そこへジェラルドの拳が降り下ろされようとしており、最早絶体絶命の状況かと思われた。

「あれは……そうか、最後の戦いが始まったという事か……」

次の瞬間にはジェラルドの体から光が剥がされていき、それは全て頂上の黒い塊へと吸い込まれていく。

そして、それと同時にジェラルドは骨と化してバラバラになって落下し、地面へと衝突してしまうのであった。

最後の戦いが終わるんだが？

ユーバツハが一護の力を奪い、更に聖別を発動させる少し前の事である。

雨竜はハッシュヴァルトの足止めをする為に戦い続けていたが、流石に一人で相手をするには少々厳しい状況だった。

雨竜に与えられた聖文字「完全反立」は、指定した二点間で既に起きた出来事を逆転させるという力である。例えば自分が傷を負っていて相手が無傷の時、その傷を逆転させる事で負わされた傷を相手に移すという事が可能なのだ。

だが、それもハッシュヴァルトの完全調和とは相性が悪く、更に身代わりの盾の効果によつて逆転させた以上のダメージを雨竜は負ってしまう事になった。

「勝ち目は無いと……そう言ったはずだ石田雨竜……諦める」

「くっ……はあ……はあ……」

単純な火力では完聖体を使った雨竜の方が上だろうが、それでも身代わりの盾を手にしたハッシュヴァルトの、その完全調和の前には傷一つ付ける事すら叶わなかった。

いや、傷をつける事ができても全て返されて無効化されてしまう。つまり、雨竜が勝つにはハッシュヴァルトに勝ち得るには、一護の白のように相手の聖文字を無効化する

なり無力化する力が必要になるのだ。

だが、そんな都合の良い力は雨竜は持つておらず、一護にそれが出来ると知っていても、彼はこの場に残つて一護をユーハバツハの元へと向かわせただろう。

「まだ動けるのか……存外しぶといな」

「はあ……はあ……天秤は、選択だと言つたな……」

「それがどうした？ 奴等とともにいる事が、お前の利になるとは思えない。お前が取るべき選択は、お前が命を懸けるべきは陛下以外の何物でもないハズだ」

「僕は、その選択で……彼らと共にいる事を選んだ。そこには利害も、正解も不正解も無い……ただ、友達だから選んだ。それだけだ……」

雨竜の答えに、ハツシユヴァルトは顔を歪ませて舌打ちをする。そして、攻撃の手を止めてしまう程の怒りを浮かべた視線を雨竜に向けた。

だが、ゆっくりと手に携えた剣を振り上げていくと、雨竜の命を絶つべく降り下ろそうとした。

しかし、次の瞬間にはハツシユヴァルトへと光の柱が降り注いできていた。その攻撃は雨竜のものではなく、ユーハバツハの聖別によるものであり、ハツシユヴァルトの力を全て奪いつくしてしまふ。

だがそれでも、ハツシユヴァルトは自らが陛下の役に立てることを、埃に塗れて死ぬ

事すら喜ばしいと感じており、全く苦しそうな様子は見せていなかった。

「石田雨竜……お前の傷を、私に移していけ……傷があるうとなかろうと、私はじきに死ぬ」

「いきなり何を言っているんだ……？」

「何を迷う……？ 全てを秤にかけろと言ったはずだ。秤にかけることも出来ず……迷い、後悔をするくらいなら……それも秤にかけろ。お前は……友を助けに行くべきだ」
そして雨竜はハツシユヴアルトへと己の傷を移すと、一護達の後を追う為に走り出した。

そして、ユーハバツハの前に為す術もなく倒された一護とバンビエツタは、床に倒れ伏して動けずにいた。織姫も床に倒れ伏しており、二人を治療するために立ち上がろうとしたが、彼女もまた動く事ができない。

そして、既にユーハバツハは瀧霊廷へと繋がる門を開いており、今まさに尸魂界を破壊すべくその門を通らんとしているところだった。

「さくらばだ一護……もはや私には、お前も星十字騎士団も不要だ。そして……お前が何を思つてその選択をしたのかは知らぬが、全て無意味に終わってしまったな」

倒れ伏すバンビエツタの方を一瞥した後、そのまま門の中へと足を踏み入れて姿を消

してしまふ。二人はそれを止めることも出来ず、ただ見送る事しか出来なかった。

だが、そこに恋次とルキアが追い付き、倒れている三人を訝しげに眺める。

「分かつてはいたが……これ程までとはな……」

当然ユーハバツハの未来改変の事も、一同は周知していた。未来で改変されてへし折られた天墜穿月が、織姫の拒絶で元に戻らないという事も。

だが、それでもまだ完全に終わつた訳では無い。バンビエツタはもうすぐ来るであろう二人の事を、天を見上げて待っていた。

そして、ようやくその二人の到来をバンビエツタは見る事ができた。

「ようやく来たのね……もうちよつと早く来てもよかつたんじゃないの？」

「やっぱり君は……いや、それよりも僕のブック・オブ・ジ・エンドで、折られなかった過去を挟んでおいたよ。織姫、今なら君の拒絶で元に戻せるはずだ」

「月島……銀城」

「これで義理を果たした……つて事でいいよな？」

一護の天墜穿月が元に戻ると、それを握りしめてゆつくりと立ち上がった。そして、恋次とバンビエツタと共に、ユーハバツハの消えていった門へと入っていく。

ユーハバツハの消えた門に入ってしまったら、その先には藍染と対峙するユーハバツハの姿が見えてきて、三人は背後から奇襲をしかけた。

「一護、恋次……そしてバンビエッタ。随分と早い到着だ。だが、見えていたぞ……お前達が来ることは」

その言葉と同時に三人目掛けて膨大な影が押し寄せて来ると、一護はそれ目掛けて月牙を放ち、恋次も卍解をすると同時に双王獣撃砲を放つてその影を相殺しようと試みる。

だが、その二つの攻撃はあっさりと打ち破られてしまい、そのまま三人へと襲い掛かろうとする。

バンビエッタは急いで神聖星盾の結界と、外殻静血装の二重防御を展開した。一護と恋次もその結界に守られながら、バンビエッタの展開する防護膜の内側に閉じこもって必死に攻撃を凌ごうとしていた。

「見るに堪えんな……何故井上織姫に傷を治させてこなかった？ 奴自身も瀕死だったからか……それとも、治してからでは遅いと思ったからか？」

二重の防御はあっさりと砕かれてしまったが、その攻撃は何とか耐えしのぐことが成功していた。そして、その間にバンビエッタは無数の霊子の剣をユーハバツハの周囲に展開し、そのまま攻撃しようとする。

またもやそれらはあっさりと砕かれて行くが、それと同時に恋次がユーハバツハに攻撃を仕掛けていた。

「拂拳破鋼ー！」

「お前もだ阿散井恋次!!まだ理解できんか……卍解など役には立たん。全ての卍解は、既に未来で砕かれているのだからな」

恋次の右腕が斬り飛ばされて、更にユーハバツハの追撃が恋次へと振り下ろされる。すると、どう言う訳か藍染が間に入り、ユーハバツハへと斬撃を繰り出す。

しかし、それすらも見えていたユーハバツハは即座に回避し、そのまま影を使つて藍染を弾き飛ばした。

そしてそのまま追撃を仕掛けようとしたが、既に藍染は追撃の準備を整えており、破道の発動は目前だった。

「破道の九十九『五龍転滅』」

大地から巨大な五龍を複数出現し、ユーハバツハを？み込もうと襲い掛かるが、それすらもユーハバツハは影を放つて無力化してしまう。

しかし、今度はバンビエツタの砲撃が地面を抉り飛ばしながらユーハバツハへと襲い掛かった。当然そんな攻撃は通用せず、影によって防がれてしまうのだが、再び藍染の破道がユーハバツハを襲う。

「破道の九十『黒棺』」

「無駄だと言っている。それも既に見えていたぞ」

ユーハバツハを重力の奔流が囲い込んで押し潰しそうとしたが、それすらも一瞬で打ち砕いて行き、瞬く間に藍染の眼前へと迫っていた。

そしてそのまま影で藍染を吹き飛ばしていき、そのまま流れるようにバンビエツタをも影で覆いつくす。バンビエツタはかろうじて神聖星盾で防ごうとしたが、影はそのままバンビエツタの体ごと？み込んでいつてしまった。

次に一護へと向き直ると、既に黒い卍型の月牙が複数形成されており、それらが一齐にユーハバツハへと向かっていった。しかし、それは全て瞬く間に迎撃されていき、黒炎をまき散らしながら消滅していく。

「月牙……熾天衝!!」

「無駄だと……そう言っているのだ、一護!」

一護は既に靈子の剣を弓へとつがえており、それをユーハバツハに向けて放つ。するとその剣は矢となって靈圧が螺旋を巻くように軌跡を描き、そのままユーハバツハを貫かんと襲い掛かった。

だがそれすらも影に飲み込まれていき、あっさりと消失してしまふ。

「戦況を見て瞬時に藍染惣右介と共闘したのは上出来だ。だが鏡花水月も我が力には及ばぬ。お前達が幾ら策を巡らそうと……何一つとして意味を為さん。全て視えている」

その言葉と同時に一護の体を右腕で貫いて見せると、一護は血を吐きながらもユーハ

バツハの腕を掴んで抵抗しようとする。

だが、そのまま持ち上げられてしまい、そのままトドメを刺されそうになった。

「そうか……黒崎一護に見えているか」

「……！」

ユーハバツハの右腕が貫いていた者は一護ではなくて藍染で、次の瞬間にはユーハバツハの体へと無数の霊子の剣が突き刺さっていった。

その無数の霊子の剣は、ほんの一瞬のスキを突いてバンビエッタが放ったものであり、更には一護が既に赤い矢を天へと放っていた。

その矢は赤い鎖となつて一護の元へと戻っていき、藍染がユーハバツハから素早く離れると同時にその鎖を引き寄せていく。

すると、天から膨大な量の赤い矢がユーハバツハ目掛けて降り注いでいき、その矢は着弾と同時に爆発を引き起こす。そして、ユーハバツハがいた場所から巨大な爆炎を立ち上らせた。

暫くして爆炎が晴れていくと、そこには地面に倒れ伏したユーハバツハの姿が在った。

「まずまずだ……よく私の鏡花水月に対応できたものだな」

「こつちに来る途中から違和感を感じてた……あんたが皆に鏡花水月をかけた時の感覚

だ」

「まあ、分かってりゃ対応の仕方はあるわよ……」

「そうか……」

ユーハバツハの全知全能の未来視は、彼自身の認識が必要という特徴からか、藍染の鏡花水月の影響を受けてしまう。

藍染を一護と錯覚したが故にフェイントに動揺してしまい、その結果こうして隙を晒す事になったのだらう。

それに加え、一護とバンビエッタの二人に鏡花水月の解放を見せていないという事も、いい方向に働いてくれた。

だが――

「……ッ!? 藍染!! 師匠!!」

次の瞬間にはユーハバツハの体から膨大な影が勢いよく噴き出す。その影は空を覆いつくさんばかりであり、辺り一面を瞬く間に黒く染め上げて行く。

無数の霊子の剣で体を貫かれ、そして膨大な数の矢による爆撃を受けて確かに死んでいてもおかしくないユーハバツハなのだが、その姿は影で完全に黒く染まって無数の目が蠢いていた。

「鏡花水月が解けたな……限界か慢心か。なあ……一護……あんなもので私に死を与え

られるとしても思ったか？私は、私の死した未来すら書き換えてやろう!!」

そしてユーハバツハの影から無数の影の腕が伸び始めると、一護達に襲い掛かった。一護は何とか攻撃を避けようと躲し続けるが、攻撃範囲が桁違いすぎるためか、どれだけ避けようとしても限界があった。

そして遂に手にした天墜穿月を弾き飛ばされてしまい、一護は素早く回収をしようとして手を伸ばすが、それよりも早く影が一護の体へと纏わりついて来た。

「終わりだ!!現世も尸魂界も、我が前に形を失い一つになる!!」

その影は留まる事を知らず、辺り一面の悉くを飲み込んで行き、空を覆いつくす程の影に覆われ、辺り一面が影の中に閉ざされていった。

全てを塗りつぶすように広がり続ける影になす術もなく、一護達も徐々に飲み込まれようとしている。

だが、次の瞬間にはユーハバツハの体を一本の矢が貫いた。

「なんだ……これは？」

それは雨竜が放った矢であり、聖別を受けた者の心臓に出来た銀の血栓を使って作られた代物だった。

聖別を行った者の血と混じり合う事で、その者が持つ能力を全てを一瞬だけ無にする事が可能であり、それをユーハバツハに放ったのだ。

そして、ユーハバツハがそれを理解した時には、矢によつて貫かれた部分から影が引きはがされていくと、それと同時に一護達も影から解放されて行つた。

「一瞬……私の力を止めたからなんだと言うのだ!!」

ほんの一瞬。それあまりにも短く、再び影がユーハバツハの元へと戻つて行く。

しかしその時には既に、天墜穿月を手にした一護が最後の一撃を放つ準備を終えていた。よく見れば体中に広がる赤いライン、動血装はバンビエツタから繋がっており、それはそのまま天墜穿月へと流れ込んで行つた。

やがて刃の部分を覆っていた白い鞘のような物にヒビが入つて行き、砕けて消えていく。だが、それを気にすることなく一護は刃を振るい、全力を持って攻撃を繰り返した。

「行けえ!! 一護オ!!」

「月牙……天衝!!」

一護が放つたその月牙天衝は、炎の如く真っ赤な色に染まつており、凄まじい閃光を放ちながらユーハバツハを斬り裂いて行くのだった。

千年血戦の後なんだが？

見えざる帝国と尸魂界の戦い「霊王護神大戦」と呼ばれる戦いから十年の年月が経った。

多くの建物が破壊され、多くの死神が命を散らしたこの戦い、その傷跡もほぼ元通りと言つてよいまで修復され、瀟霊廷は活気に満ち溢れていた。

「つたくよお……なんであたし等がこんな雑用みたいなことしなきゃなんねんだ!!」
「くつちやべつてないで手を動かさなさいよキャンディ! まだまだ運ぶものはいっぱいあるんだからね!」

「だりい。クソがよ……なんでオレ等がこんな目に……」

星十字騎士団の聖章騎士として尸魂界へと攻め込んで来たリルトット、ミニーニャ、キャンデイス、ジゼルは、本来なら処刑されても文句を言えない立場にいた。

だが、ちよつとした事情があつて瀟霊廷の雑用として働いている。それもこれもかの大戦でバンビエッタが著しい貢献をしたからであるが、当然問題を起こせば即処刑である。

「これがおわつたらあ、皆でスイーツでも食べましょうねえ」

「ボク疲れちゃったなあ……バンビちゃん、代わりに運んでよ」「自分でやれつての!」

そんな彼女たちは聖章騎士としての衣服ではなく、皆死覇装を着て働いていた。総隊長である京楽春水からは、郷に入つては郷に従えとの言葉を受け、渋々従っているのだ。当然、仕事は専ら雑用であり、書類を各隊に届けたり、瀟靈廷の復興を手伝つたりと、今まで好き放題生きていた彼女達にとつて、非常に退屈な日々が続く事となつていた。するとそこに一人の死神が近づいて行き、バンビエツタに声を掛ける。

「バンビエツタさん、そろそろお時間ですので一番隊舎までいらしてください」

「もうそんな時間?分かつたわ。あんた達、あたしが居ないからつてサボつたりしないですよ!」

バンビエツタはその死神に付いて行き、一番隊舎まで出向く。すると扉の前碎蜂が待ち構えており、バンビエツタを睨みつけて来た。

よく見れば剣八も今着た所であり、バンビエツタ同様に碎蜂に睨まれているようだった。

「遅い!今まで何をしていた!」

「ああ?瀟靈廷を一周して来たんだ、逆に早えぐらいだろ」

「こっちは瀟靈廷のあつちこつちで雑用やらされてんのよ?ちよつと遅れたぐらい、大

目に見なさいよ」

「き、貴様等……！」

碎蜂はバンビエッタと剣八の態度に怒り心頭と言った様子ではあったが、場も場であるために必死に感情を抑え込んでいるようだった。

するとそこに卯ノ花が笑顔を作りながら近づいてくると、無言の圧で三人を威圧して見せた。その隣には勇音もおり、冷や汗をかいている。

「さあ、こんな所にいつまでも居ないで、そろそろ中へと入りましょうか」

卯ノ花の言葉に皆が従い、隊舎の中へと入っていく。中には各隊の隊長らが揃っており、総隊長である京楽は一番奥で欠伸をしながら眠そうにしていた。

それを七緒に咎められながらも京楽は話を本題へと移行させると、いよいよ新隊長就任の義が執り行われる事となった。

「新隊長は中へ。十三番隊隊長、朽木ルキア」

「はいー！」

十三番隊隊長になったルキアは凜とした表情をしているが、何処か緊張した様子でもあった。

かつては十三番隊の平隊員だったルキアであったが、やがて副隊長となり、今では十三番隊の隊長にまで上り詰めている。

因みにであるが、ほぼ部外者であるバンビエツタが新隊長就任の儀に呼ばれている理由は、ルキアが呼んでほしいと頼んだからだそうだ。

新隊長就任の儀からしばらくして、バンビエツタは恋次とルキアと共に現世へとやって来ていた。

一護とは数年程顔を合わせておらず、それもバンビエツタがバンビーズと共に瀨霊廷での雑用続きで忙しかったのもあるが、一護の方も何かと忙しそうにしているため機会が無かったのである。

「おう……久しぶりだな、師匠」

「師匠って……もうあんたの方が強いんだから、いつまでも師匠呼びはやめてよ」
「つってもなあ……師匠はなんかこう、師匠って感じだしよ」

そう言つて頭を掻く一護に、バンビエツタはため息を吐かずにはいられなかった。

バンビエツタに続き恋次とルキアも挨拶を済ますと、一護は三人を中へと入るように促した。

「相変わらずガラガラではないか、流行つておらんか」

「病院がガラガラなのはいい事だろうが。ごちゃごちゃいつてねえでさつさと入れ」

中へと入り一護に案内されるがままに進んで行くと、リビングへと通された。

そこには既に一護達の友人も集まっており、これから始まる茶渡のタイトルマッチをテレビ越しで観ようとしているところだった。

ボクシング会場からの生中継であるために、観客の歓声や地鳴りのような歓声が聞こえてくる。

「織姫、始まるぞ」

「今行くー」

「それにしても、チャドの奴も随分と有名になったもんだよな」

そんなこんなで茶渡のタイトルマッチも終わりを向かえ、解散という流れになる。恋次とルキアも尸魂界へと戻るといふことなので、バンビエッタも同様に帰ろうとしていた。

だが、その前に一つだけやっておきたい事があったので、一護へと声を掛けた。

「一護、あんた暇？」

「ああ？別に何もねえけどよ」

「じゃあちよつと付き合いなさいよ。これから浦原の所の勉強部屋に行くから」

浦原商店に到着すると、早々に地下の勉強部屋へと入り込み、バンビエッタと一護から距離を取って対峙している。

これから一体何をするつもりなのか、一護はさっぱり分からないと言った様子でバン

ビエツタを眺めていた。

しかし、バンビエツタがそんなことなど構うこともなく、いきなり完聖体を発動させて戦闘態勢を取る。

「早く構えなさい」

「話が見えねえって。何がしてえんだよ」

「決まってるじゃない、手合わせよ」

一護はバンビエツタの言葉を聞くと、深いため息を吐き出しながらも卍解を発動させて天墜穿月を構えた。何故手合わせをしたがっているのかは理解不能だが、ここで拒否する方が面倒くさそうだと判断したのだろう。

そして、バンビエツタが上空へとコインを弾き、それが床に落ちると同時に二人の戦いが始まった。

バンビエツタが神聖星盾を周囲に展開させると、それらから矢を放って行く。それと同時に無数の霊子も展開していき、それらも一護目掛けて射出されていった。

それを一護は矢を連射して迎撃すると、次々と爆発が起こって行く。爆発が起こるたびに地面が抉れて行き、砂塵や爆炎で視界が覆われていく。

その爆発の中、バンビエツタは真っ直ぐに一護の下へと向かっていたのだが、そこに一護の姿はなく、爆炎だけがその周囲を覆っていた。

「上か!？」

「遅えよ!!」

上空へと飛んだ一護は、バンビエッタ目掛けて矢を連射していく。それを高速で移動して回避していくのだが、その矢は地面へと着弾した瞬間に十字状に広がる爆発を発生させていった。

それらを全て回避しながら神聖星盾を操作していき、それらから熱線を薙ぎ払うようにして一護へと放つ。

しかし、それをそれを瞬時に回避していくと、今度は卍型の月牙を複数放つて行く。それに対してバンビエッタは雷球を幾つもばら撒いて行き、それをぶつけて相殺して行った。

雷撃と黒炎が混じり合い、激しい爆発と共に周囲に飛散して行く。

すると、その黒炎を縫うようにしてバンビエッタは一護へと近づいて行き、刀を勢いよく振り下ろす。

「貫った!」

「させるわけねえだろうが!」

一護の手には既に霊子の剣が握られており、それがバンビエッタの刀と激しくぶつかり合った。幾度となく斬撃の応酬が繰り返され、その度に激しい火花が舞い散つてい

く。

両者一步も譲らない攻防が続く中、バンビエツタは勢いよく地面を踏みしめて、辺り一面に火柱を立ち上らせた。

その熱波に巻き込まれながら、一護は瞬歩で移動し距離を取るが、そこに追撃として霊子の剣が無数に展開されていく。一斉に撃ち出されたそれは、四方八方から一護を目掛けて襲い掛かる。それを矢で迎撃していき、同時に赤い矢を上空へと射ち上げていった。

そして、赤い鎖が一護の下へと来ると同時に、それを引き寄せていった。すると天から膨大な量の赤い矢が降り注ぎ、バンビエツタの火柱を消し去りながら襲い掛かって行く。

それらは全て地面に着弾すると同時に爆炎を生成し、バンビエツタはそれらに巻き込まれないように高速で移動しながら回避していった。

だが――

「んな……!?!」

「やつと捕まえたぜ」

あつと言う間に追いつかれてしまうと、そのまま一護は霊子の剣を振るって攻撃を加えていく。それを瞬時に神聖星盾の結界と外殻静血装の二重防御壁で防ごうとするが、

その結界は瞬く間に破壊されてしまう。

それに対してすかさず反撃を繰り返そうとするバンビエッタだったが、それよりも早く一護の刃が喉元に突き付けられていた。

「俺の勝ちだぜ、師匠」

「やっぱ強くなったわね、あんた。ってか、師匠呼びはもうやめろっての」

バンビエッタは両手を上げながらそう言うと、一護もそれを聞いて静かに笑いだす。

こうして手合わせが終わったバンビエッタは、今度こそ尸魂界へと戻る準備を整えた。やがて門が開いていき、後はそれを通れば尸魂界へ戻れる。

「今度はいつ頃こっちに来るんだよ」

「まあ、その内……かしらね？」

曖昧に答えたバンビエッタは「またね」と言い残し、現世から去って行く。

その様子を見送る一護達であったが、相変わらずマイペースなバンビエッタに呆れ、苦笑いを浮かべるのだった。

C a n ☒ t F e a r Y o u r O w n W o r l d

大戦直後の話なんだが？

時は十年ほどさかのぼり、かの大戦の直後へと戻る。

バンビエツタはユーハバツハとの戦いの直後に意識を失ってしまい、四番隊の隊舎で数日程眠ったままだった。

苛烈な戦いに身を投じた彼女のボロボロの体は織姫が直したのだが、彼女の双天帰盾は失われた霊圧の回復には向いていない。なので、そこから先は四番隊が治療をしたのだが、失った霊圧が膨大だったため、回復までに時間がかかったのだ。

「あら、目が覚めましたか？気分はいかがです」

「よくは無いいけど、悪くもないわね」

四番隊長長の卯ノ花は彼女の傷を確認しながらそう尋ねると、バンビエツタは気怠そうにしながらも自らの状態を正直に答えた。

あれだけの深手だったというのに、今の彼女の体にはその傷跡は何一つ残っていない。やはり四番隊の治療は一流であると、改めて認識させられる程だ。

「目覚めて早々に悪いのですが、起きたら一番隊の隊舎に共に来るようにと……総隊長

からの言伝を承っております」

「一番隊の隊舎に……？まあいいわ。すぐ行く」

そう言つてバンビエツタはゆっくりと体を起こして立ち上がると、卯ノ花と共に一番隊の隊舎まで向かう事にした。

大戦直後というのもあつてか、瀟霊廷はほぼ壊滅状態と化している。あちこちで未だ煙が立ち上つており、瓦礫の山が各所に広がっていた。

多くの死神が瓦礫の撤去や負傷者の治療に追われ、慌ただしく走り回っている。そんな中を歩いて行きながら一番隊の隊舎へとたどり着くと、そこには京楽と藍染がいた。「なるほど、総隊長様と呼んだというよりは、藍染の奴が呼んだのね？来たくなかつたけれど、わざわざ出向いてやったわよ？感謝しなさい」

「相変わらず私には当たりが強いな、バンビエツタ・バスターバイン……」

「はいはい、無駄話はその位にしてもらえるかな。時間は有限なんだ、早く本題に入つてもらいたいね」

藍染が自分に何か用があるというが、それが一体どんな用なのかは想像もつかない。あまり良い予感がしないという事だけは確かである為、バンビエツタは苛立ちを隠そうともしなかつた。

小説で京楽が言っていた「藍染にとつて価値があるという事は、相手にとつて不幸な

事」という言葉通り、関わり合いたくない藍染に興味を持たれている事は、バンビエッタにとつては間違いなく不幸な事と言えるだろう。

そもそも、京楽は藍染が何かを言い残す事すら危険だと考えている。それにも関わらず藍染の要望通りにバンビエッタをここに呼んだのには、周囲に散会している隊長と同じく藍染を無間へと再収監する際の有事に備えとしてだろう。

だが、恐らくではあるが、それ以上に京楽からしてもバンビエッタが何者なのかを探ろうという思惑もあつたはずだ。

「君には幾つか聞いておきたい事があるが……そうだな。先ず、君はこの戦いの結末を知っていたな？」

「……」

「今現在迎えている結末、そして零番隊の兵主部一兵衛の考えていた結末……その両方を知っていると、私はそう考えているよ」

「……さあ？ 知っていたかもしれないし、知らなかったかもしれない。どっちでしょうね」

とほけてみせるバンビエッタに対して藍染は苛立った様子も無く、静かに笑っているだけだった。

しかし、京楽にとつてはそれが事実だとすると余り好ましい事柄では無い。今現在迎

えている結末だけならばまだしも、兵主部一兵衛の考えていた結末を知っているのは、彼自身と京楽だけのはずだ。

本来であるならば一護はユーハバツハには勝てない、むしろ負けて一護が新たな霊王として封印される結末を迎えるはずだった。

「もういいかい？これ以上無駄な時間は使いたくないんだ」

「やけに急かすじゃないか京楽春水。それとも、私との会話が死神達に変節を及ぼすことを恐れているのか？東仙要のように」

京楽が静かに苛立っているのが、周囲の死神にもひしひしと伝わってくる。その空気が伝染するようにして、場の雰囲気は最悪なものとなっていく。怒りに満ちた声を周囲に響かせる。

すると、一人の死神が藍染の元まで歩いていき、怒りに満ちた声を周囲に響かせる。

「巫山戯るな！」

その怒声を上げたのは、他ならぬ檜佐木修兵だった。

体中に包帯が巻かれており、満身創痍という出で立ちではありながら、息を切らせてここまで駆けつけたと見える。

そんな体でありながら、無理をしてまで何故ここに駆けつけて来たのか。それは彼が動けない拳西の代わりを務めるというのもあるだろうが、元上司である東仙を手にかけて敵である男を許せないという、無意識の怒りがそうさせていたのかもしれない。

「東仙隊長が……お前の言葉なんかで信念を曲げたって、そう言いたいのかよ……」
「妙な物言いをするな、檜佐木修兵……そんなに知りたいのなら、バンビエツタ・バスター・バインに尋ねてみると言い。私が東仙要を手にかけたの事のそれが、慈悲だったという事も知っているだろう」

「なんでそこであたしに振るのよ。マジでウザったらしいわね……」

バンビエツタが大きなため息を吐くと、苛立った様子で頭を搔く。その顔は本当に心底嫌そうな表情を浮かべており、藍染の言葉を肯定も否定もしなかった。

それ故に周囲の死神達は一瞬ざわつき、彼女が藍染の言葉の裏付けを取ってしまったのかと動揺する。

だが、彼女は知っていたただけだ、ただ知っているだけだったのだ。全ては把握しているが、だからと言ってその全てを変えられる程万能ではない。

確かに強大な力を有してはいるが、藍染のように超越している訳でもなければ、ユー・ハバツハのように未来を改変できる訳でもない。

「慈悲だと……!? テメエ、どこまで東仙を虚仮にすれば——」

「その怒りは正当なものだよ。でも、済まない。今は抑えちゃくれないか」

檜佐木が怒りの声を上げようとした所で、京楽は彼を制してそのまま下がらせた。

藍染の慈悲だったという言葉に檜佐木は冷静さを欠いてしまっているが、バンビエツ

夕の反応からするにその言葉が真実である可能性は高いと、そう彼は判断したのだ。

京楽は藍染は一瞥すると、次にバンビエツタへと目を向けるが彼女は藍染を侮蔑のこもった目で一瞥するだけで、口は閉ざしたままである。

「東仙要があのまま生き残れば、更なる絶望で己の心を壊す事になるだろう。あれ程美しい覚悟を持った者が、絶望に絡め殺されるのは忍びないと、そう思ったからね。そして、バンビエツタ・バスターバイン。君は東仙要に絶望を与える者の事も知っているだろう」

「……そこまでにしようか。君にしては口数が多い」

「いずれ知る時が来るだろう。この尸魂界が……死神達がどれ程危うい幻想で形作られているかという事を」

この場に居るほぼ全ての死神が、藍染の言っている事を理解できていないだろう。だが、それと同時に彼が適当な言い訳を言っただけで済ませている訳ではないという事も、理解できてはいた。

バンビエツタの情報を得たいところではあるが、それ以上に藍染に何かを喋らせるのも危険すぎると判断した京楽は、刑軍に指示を出して彼を無間の入口まで連行するように指示を出す。

それを無言で見つめている檜佐木ではあったが、正直に言えばまだ藍染には聞きたい

ことが山ほどあった。

しかし、それは彼の口から聞くことが出来ない事も、彼が言うであろうことが理解できない事も、既に解っている。それ故に、口を閉ざしてただ見る事しかできなかった。

その無力さを実感しつつ、檜佐木は拳を握りしめる。

「最後に一つ問おう。バンビエッタ・バスターバイン。君が未来を知る方法……それは、この世界の事柄を知識として、何者かから与えられたのではないか？ 私はそう推察したのだが、それについての返答を聞かせてもらえないだろうか？」

「答える必要性を感じないわね。自分で勝手に考えてなさい」

「まあ、いいだろう……私はこれから長い時間を退屈に過ごす事になるのだからね。私のささやかな言葉が、僅かでも尸魂界に影響を与えるのか。それと……君の知識の元を推察して楽しむとするよ」

「マジで趣味が悪いわね……」

彼が無間へと再収監されていく僅かな間、藍染は最初と何ら変わらぬ静かな声で話した。そして、刑軍に連れられて行く間際にそう告げる。

彼の言った言葉の数々は、多くの死神達にとつては不遜な負け惜しみであるを取られるだろうが、一部の隊長格は『藍染は無意味な事を言う奴ではないと』知っている為、彼の言葉を心の片隅に留めておくのだった。

時は少しだけ遡る。それは霊王宮本殿の霊王大内裏でのことだった。

かつて霊王が鎮座していたそこで、霊王宮の神兵たちがせわしなく動いている。そんな中で、その中央にあるモノの前で、兵主部と京楽が何かを話している最中であつた。

「なにより、一護クンが和尚たちに斬られないで良かった」

そんな事を口走つた京楽に対し、兵主部は笑いながら自らの坊主頭をさする。

京楽の言つた言葉を、否定するでもなく肯定するでもなく、ただ静かに頷きながら聞いていた。

「わしはユーハバツハのように未来が見える訳ではないからのお。いやあ、本来ならば黒崎一護は奴には勝てん。むしろ負けてもらわなければならなかつたんじゃが」

「和尚……」

「じゃが、坊主にとっては幸運な事に、ユーハバツハは完全に霊王の力を手に入れよつたからな。それもあるが、あのバンビエツタという娘の存在が大きくかわつているのは間違いない」

そんな事を言い、兵主部はいつものように大笑いしながら豪快に笑っているが、京楽の表情はいつになく険しいものだった。

すると、兵主部は大内裏の中央に置かれたソレに向かつて、勢い良く手を合わせて音

を鳴らす。大きな音が大内裏中に響くと同時に、兵主部は目を閉じてゆつくりと息を吐いた。

「彼女の存在が……」

「そうじゃな……あの娘は戦いの結末を知っていると云つておつた。それどころかわしの「一護には負けてもらわなければならん」という考えも知つておるはず。いや、間違ひなく知つておるだろうな」

京楽は兵主部の言葉を聞きながら、目を伏せて考えてしまふ。

バンビエッタとは何者なのか。ルキアの処刑の際に一護と共に尸魂界に現れ、そして藍染の離反の際には護廷十三隊と共に行動をしていた。そして、かの大戦でも多大な貢献をし、彼女の存在が無ければ、今の被害以上になつていた事は間違ひないだろう。

だが、知っているのはそれだけだ。彼女は生き残るといふ原理を前提に動いてはいたが、それ以外の事が何一つ解らないままなのだ。

唯一分かっている事は、彼女が尸魂界の味方ではなく、一護個人の味方であるという事だ。それはつまり、一護が負けて霊王として封印される結末を迎えていたならば、彼女が尸魂界へと牙をむく可能性があつたという事だ。

バンビエッタは多くの事を知っている。いや、知り過ぎている。その知識があれば、一人で尸魂界を壊滅させる事も可能かもしれない。

少なくとも、今現在は敵でない事だけは間違いないだろう。だが、それが楽観視していい事にはならないと、京楽は理解していた。

(やれやれ……：ようやく難が去ってくれたというのに、考えないといけない事が山積みだなんて……：総隊長は辛いねえ)

隊長格や副隊長核の面々のみならず、多くの死神達が戦後処理や後始末の為、忙殺されてる中である。

それは京楽も例外では無い、面倒くさそうな表情を浮かべたまま、胸の内でそう呟いたのであった。

大戦直後の話なんだが？②

藍染が無間へと再収監された後、バンビエツタは京楽に連れられて一番隊隊舎の廊下を歩いていた。

この隊舎もユーハバツハの襲撃を受けているので、相当な被害を受けていたのだが、多くの死神達が修繕作業を始めていた為、隊舎の中は元に戻りつつあった。

そして隊長の執務室へと着くと、部屋の中へと通されたバンビエツタは、そこで見知った四人の姿を発見する。

「なんであんたらがこんな所に居るのよ」

「知るか。オレ達の方が聞きたいくらいだ」

執務室に居たのはバンビエツタの面々であり、バンビエツタは眉間にシワを寄せながら尋ねたが、バンビエツタの面々は誰もこの場に連れて来られた理由が分からない様子である。

十中八九この四人の事に対する何らかの話があるのだろうと察したバンビエツタは、だまって京楽の言葉を待つ事にした。

「あんな事の直ぐ後なのに、すまないねバンビエツタちゃん。早速で悪いんだけど、

ちよつと重要な話をさせてもらおうよ……」

「良い話、ではないんだろうけれど……まあどうせ断れないでしょう」

「先ずはこの四人についてなんだけれど、この尸魂界に甚大な被害を与えた組織の一員として、此方としては処刑を望む声もあるんだ。特に貴族の方々がうるさくつてねえ」

「まあ、ボクは殺されても死なないけどねえ」

「ジジ！今は黙ってやがれ!!」

京楽がわざとらしく悩まし気な表情でそう言うのと、ジゼルが皮肉交じりにそう言う。それを聞いたキャンデイスが声を張り上げて注意すると、京楽はやれやれと言った様子で両手を上げていた。

確かに不死性故に普通に殺そうとしても死ぬことは無い、だからと言って殺せないかと聞かれたら、恐らくそれは否である。

マユリが研究をすれば確実に殺す方法は得られるだろうし、それ以外にもこの尸魂界にはジゼルのような物を殺す方法が眠っている可能性が十分に考えられる。

「それで……総隊長としての意見は？」

「総隊長としては大いに賛成。けれどね、僕個人としては……あの戦いに貢献してくれたバンビエツタちゃんの友人を殺すのは忍びないと思ってるってわけ」

「なるほどね……それで、まだ続きがあるんでしょ？」

京楽が茶目つ気たっぷりにそう言うのと、バンビエツタは納得したように頷きながらそう返した。彼が単に四人の処遇を話すためだけに、わざわざ呼びだすような真似はしない。

となれば何か頼みたい事でもあるのだろうと予測を立てたバンビエツタであつたが、どうやら当たっていたようだ。

「君達には各地に出没する謎の黒い影を討伐してもらいたいんだ」

「黒い影……？」

「人の形をした黒い影さ……恐らくユーハバッハの力の残滓かなんかだと思っただけで、それが尸魂界や虚圏に出没するんだ」

バンビエツタは見えていないが、あの大戦の終局付近でユーハバッハは尸魂界中に人の形をした黒い影をばら撒いている。それらは並みの死神よりも強いが、副隊長格くらいの実力があれば難なく仕留められるくらいの相手だった。

あの戦いの直後から仕留め続けてはいるようだが、それでもまだ全ては終わっていない。京楽に説明を受けたバンビエツタの表情は、面倒臭そうに歪んでいた。

「それじゃあ頑張つてね。あ、そうそう。任務に行く前に技術開発局に寄ってもらつていいかな」

そう言うのと京楽はどこかへと消えて行き、残されたバンビエツタ達は仕方なしに技術開発局へと赴く事にした。

四番隊を出て技術開発局へと赴くと、既に話は通っているのかすぐに目的の場所へと通される。

そこには相変わらず何を考えているのか分からない表情をしている涅マユリがおり、バンビエツタ達はすぐに近くへ寄って行った。

「ふん……まったく新総隊長は甘い事この上ないヨ。攻め込んで来た賊共に情けを掛けるなんてネ」

「あー、はいはい。それで、あたし等は何のために此処に来るように言われたのかしら？」

相変わらずのマユリの態度に慣れているバンビエツタは、適当に相槌を打ちながら此処に来た目的を聞き出そうとする。

それを聞いたマユリは四つの輪っかを繋げた形をした機械を取り出すと、それをバンビエツタ達へと手渡して行った。

渡された四つの輪っかを見つめる四人であったが、どうやらそれを首に装着しろとの事らしい。

「あんまり可愛い物じゃないわねえ……付けたいとは思わないわあ」

「ふざけた事を……君達のような輩に拒否権があるとしても思っているのかね？グダグダ言っていないでさっさと付けたまえヨ」

「チツ……！分かったよ、付けりや良いんだろうが！」

とは言えこの機械のどういう物なのかよく分からない以上、安易に装着することに抵抗を覚えるのだが、この四人はそんな事を言える立場になかった。

四人は渋々ながら首に機械を装着すると、マリが何やらパネルを操作して機械を起動させる。

「いい加減この説明をして欲しいんだけど？」

「そうだね……馬鹿にでもわかるように簡潔に説明すると、君達が尸魂界に対して不利益になる行動をすると爆発するという代物さ」

「はっ」

マリリの説明を聞いた四人は、思わずそんな言葉を漏らしていたが「即刻処刑されない事を泣いて喜びたまえ」とマリリが言い放つと、四人は大きいため息を吐き出した。

結局の所、彼女らに拒否権など最初から無かったのだ。抵抗しようとするれば爆発するだけの事であり、つまりは自分達の行動次第というわけである。

「さあ、さっさと行きたまえヨ。こちらにはやらなければならぬ事が沢山あるのだからね。まあ、もしも何らかの手違いで死んでしまっても、君らの死体は有効的に活用さ

せてもらうから安心したまえ」

「そのどこが安心できるってんだ……クソが」

「仕方ないわね。リル、あんまり文句言つてマユリの機嫌を損ねても良くないわ。さつさと行きましょう」

これ以上ここに居てもマユリの機嫌を損ねるだけであり、特に他にやる事は無いのだからと四人は技術開発局を後にして任務へと向かう事にした。

最初に彼女らがやって来たのは流魂街の方である、やはり流魂街方面へも被害が出ているのか、あちらこちらに壊れた建物が転がっていた。

周辺を見渡していたバンビエッタだったが、突然背後にある廃墟から瓦礫が崩れる音が聞こえてきたかと思うと、その中から人影が飛び出して来た。

「早速出たわね……これが総隊長の言つてた黒い影って奴かしら」

「確かにそれっぽい力は感じるわねえ〜」

「どうでもいい。さつさとヤツちまおうぜ」

バンビエッタが後ろを振り返ると、そこには確かに人の形をした黒い影が複数佇んでいたが、それらはユーハバツハと違って目のような物はない。

どういった攻撃手段を持っているかは不明だったが、先手必勝と言わんばかりにキャンデイスが雷撃をお見舞いすると、黒い影はあつと言う間に消し飛んでしまった。

「話に聞いてた通り雑魚だな」

「でも数だけが多いねえ」

「ほら、ジジも文句言つてないで矢ぐらい撃ちなさいよ」

ジジもバンビエツタに催促されると、渋々ながら矢を放つて敵の数を減らしていく。それでもまだ敵の数は多く、バンビエツタ達四人を四方から取り囲むように移動していた。

そんな中、リルトットは自らの影を形を変えていくと、それが次々と敵に噛みついて攻撃する。ミニーニヤも次々と敵を吹き飛ばして周囲の敵を一掃していき、徐々に数を減らそうと奮戦していた。

「前に見た時から思ってたんだけど、あんたいつの間になんかそんな事出来るようになったわけ？」

「知らねえ。気が付いたら出来るようになってた」

「ああー！もう面倒くせえな！まとめて消し飛びやがれ！ガルヴァノブラスト!!」

キャンデイスがそんな事を言いながら放つた雷撃は、どういう訳か黒色と化しており、着弾した瞬間に凄まじい音を立てながら爆発を引き起こす。

辺り一面に電撃が迸つて黒い影を瞬く間に焼き払っていき、その様子から以前はなつた時よりも格段に威力が上がっているように感じられる。

その事実を目の当たりにして、バンビエツタとリルは驚いたようにキャンデイスの方へと視線を向けたが、当の本人も驚いているようだった。

「おいおい、何なんだよ今のって……」

「放った本人が驚いてんじゃねえよ」

「でも、これでずつと楽になりそうね」

ミニーニヤの言う通り、あの威力であれば容易に敵を全滅させることが出来そうである。とは言えど、こちらが被害を広げてしまえば首輪が爆発しかねないので、安易に放つわけにはいかないだろう。

その後も四人は次々と黒い影を撃退し続けていき、この一帯の黒い影を撃退し終えると、次の区画を目指して移動するのであった。

大戦直後の話なんだが？③

結局あれから様々な地区を回る事になり、その度に黒い影を倒して回る事になったのだが、バンビエツタ達が思っていた以上に大戦の傷跡は深かった。

一時侵攻と二次侵攻の被害より、ユーハバツハが一護から力を奪い、再び瀨霊廷へと戻って来た後の攻撃の方が甚大な被害をもたらしていたと言つても過言では無い。

そして今、彼女等は一番隊隊舎の近くに建てられた小屋に居るのだが、何故こんな小屋に居るのかというと、総隊長命令でそこに住む事になるからだつた。

「ああ……なんか変な夢見たわ……」

バンビエツタは布団の上に横になりながら、今朝方見た夢の事を思い出しながらそう呟いた。

思出せる限りでは、ユーハバツハと戦つて敗北した事、そして零番隊を見下ろしていた事。只の夢と片付けるには意味深すぎるものだったが、深く考えても分からない物に分からないので、彼女はこれ以上考えない事にした。

布団から出て辺りを見回してみると、他の四人は既に起きており、何かを話し合っているようだった。

「マジでこの首輪どうにかなんねえのか? あたしが電氣流せば意外とぶっ壊れたりするかもしれないぜ?」

「死にたいなら一人でやってろ。あの涅マユリが用意した物なんだ、そんなことしたら即爆発してオレらはあの世行きだ」

「ふうん……あの変態科学者が作ったものじゃ、流石にボクも死んじやいそうだしなあ」
「どうやらリルトット達は首輪をどうにかする為に色々と画策しているようだが、流石に一筋縄ではないかない。そんな彼女等のやりとりのために息をついていると、ミニーニャがお茶を運んで来た。」

バンビエツタはそのお茶をすすりながら、これからどうしたものかと考える。何か忘れていたような気もするが、思い出せないのなら大したことじゃないだろうと考え、深くは考えなかった。

すると、玄関の扉からノックの音が響き渡り、バンビエツタが扉を開くとそこには七尾が立っており、彼女はバンビエツタへと死覇装を手渡して来た。

「なにこれ」

「今日からはそれを着て生活をするようにと、総隊長からの伝言です。あと、今日も任務をするようにと」

「あー、はいはい。総隊長様からの命令なら仕方ないわねえ……」

それだけを言うのと七尾はさつきと帰って行き、バンビエツタは七尾から受け取った死覇装を四人に見せる。全員嫌そうな表情を浮かべていたが、総隊長の通達とあらば素直に聞くしかないだろう。

ふと、バンビエツタは過去に女性の死神から勝手に拝借した死覇装を、浦原商店に置きっぱなしという事を思い出した。許可も得ずに持っていった物なので、そのうち返さなければとバンビエツタは考えた。

「何であたしらがこんなもん着なくちやなんねえんだ？」

「オレらは滅却師で、死神は敵だった。そんな奴等の装束なんか着られるか……と、そう言いたいところだが、着なかつたら涅マユリにいちやもんつけられて、首輪を爆破されても困る」

「意外と着心地良いわよ？…これ」

キャンデイスが文句を言っているが、リルトットの言う通りである。流石に着なかつただけで不利益な行動とは判断されないだろうが、マユリの事なので何が何でも首輪を爆破してきそいな感じはする。

というか、既にミニーニャは死覇装を着ており、ジジも文句を言いながらも着始めている。それを見て後の二人も諦めて死覇装に袖を通した。

「さて、任務に行く前にご飯食べちゃいませうか」

「バンビの飯はひきしぶりだな」

「バンビちゃん、早く何か作って?」

何故か当然の如くバンビエツタが作る事になっており、彼女は呆れながらも料理をすることにした。とは言っても、今のところ材料は必要最低限しかないので、大したものは作れそうにないのだが。

簡単に作れる物で済ませてしまうと、四人は早々に朝食を済ませて死神代行としての任務へと向かう事にした。

「あ、ちよつと先に行つてて。一つだけやつておきたい事が有るのよね」

「なんだよ、忘れもんか?」

バンビエツタがそう言うと、キャンデイスが不満そうな表情を浮かべて聞いた。他の三人も気になっているようで、彼女へと視線を向けた。

しかし、バンビエツタは何も言わずに頷いて見せ、他の四人も渋々ながら小屋から出て行く。

バンビエツタは全員が小屋から出て行った事を確認すると、彼女は通信端末を起動してとある場所に連絡をすることにした。

「もしもし浦原、聞こえてる」

『はいはい、いきなり連絡を寄越すなんて何の用っスか?』

「私が前に作ったあれ、丸薬の事なんだけれど……多分まだ余りがあつたと思うから、こつちを持ってきてほしいのよね」

バンビエツタがそう言うのと、浦原は面倒くさそうな声音で彼女に返して来る。だが、そんな浦原の訳の分からない実験に、彼女が何度も付き合っているのも事実だし、断つて後からネチネチと責め立てられるのも面倒なので、仕方なく応じることにした。

浦原は不満そうであつたが了承をしてくれたので、バンビエツタはそれを承諾すると通信を切斷する。

「さてと……ただ待つてるのもあれだし、あたしも任務に行かなくちゃね。そもそもあの四人も待たせちゃつてる訳だけど……」

バンビエツタは死覇装に着替えると、小屋から出て与えられた任務へと向かう事に。それから数日間は任務続きであり、黒い影が出現する日もあれば、何も出現しない日も有つた。そんな日は他の雑用やら何やらを頼まれる事になつたが、バンビエツタ以外の四人は文句を言いながらも仕事をしていた。

因みにであるが、浦原に頼んだ丸薬はその日のうちに届けられ、四人全員がそれを飲んだことで、一応虚への耐性を得ることが出来ている。

そして、彼女等が流魂街のとある場所の見回りをしていた時の事、偶然にもとある人

物達と出くわすこととなつてしまふ。

それは檜佐木とXCUTIONの三人、銀城空吾と月島秀九郎、そして沓澤ギリコであつた。バンビエッタが何故こいつらがこんな所に一瞬疑問に思ったものの、思い返してみればこの三人は志波家に居候しているという事になつていたハズだ。

「あー、あんたらは先に帰つてて、ちよつとあいつ等に用事があるから」

「あいつ等がなんなのかどうでもいいが、早く帰つて来いよ。オレは腹が減つてんだ」「ボクもお腹空いたんだけど。バンビちゃん、早く帰つてきてよ?」

バンビエッタは自分を除いた四人がさつきと帰つて行くのを確認すると、改めて彼等に向き直る。

XCUTIONの面々とは一応レベルではあるが、一護が力を失つていた時期に会っている。戦つたりなどはしていないが、月島にはブック・オブ・ジ・エンドで過去を挟み込まれそうになつた事がある。

だが、どういう訳かその能力はバンビエッタにはまるで通じていなかった。彼女自身にも効かなかつた理由は不明であり、月島自身も「何故だ……」と若干動揺していた程なので、彼にも理由は分からないのだろう。

だが、それでも月島と会話する事によつて、何か新たな事が判明すればなどと、そうバンビエッタは考えていた。

「てめえは……確か、バンビエッタとか言ったか？」

「あの時はどうも。よくも私の弟子に手エ出してくれたわね」

「わざわざそんな嫌味を言う為だけに僕達に話しかけたのかい？何か用が有るように見えるけれど」

檜佐木がこの三人とともにいるという事は、恐らく檜佐木が初代死神代行だった銀城に対し、死神への裏切り行為を何故したのか聞き出している最中なのだろう。

檜佐木がこの三人と共に居るといふ事は、恐らく檜佐木が初代死神代行だった銀城に対し、死神への裏切り行為を何故したのか聞き出している最中なのだろう。

その話に割ってまで自分の要件を話すべきかどうか考えたが、すぐに済む事なので、バンビエッタはそのまま話を進めることにした。

「申し訳ないんだけど。先にこっちの要件を済ませていいかしら、檜佐木。すぐに済むから」

「あ、ああ……別に構わねえけど」

突然のバンビエッタの申し出に檜佐木は少し驚いたような表情を見せたが、バンビエッタは構わずに要件を済ませる事にした。

「月島、あんたブック・オブ・ジ・エンドをあたしに使った時、一切過去を挟むことが出来なかったでしょ。それってなんでなのかしら？」

「さあ? 何しろ初めての事だったからね、むしろ僕の方が聞きたいくらいだよ」

「じゃあ、何か変わったことは無かった?」

「変わった事? そうだね……僕のブック・オブ・ジ・エンドは、挟み込んだ相手の情報を得ることが出来るんだけど、君の場合はそれすらも出来なかった」

それを聞くとバンビエッタは考え込む。思い返してみれば兵主部との会話で、二つの魂が完全に同化しているバンビエッタの、片方の魂はこの世界の外から来ていると言っていた。

それが原因で、兵主部ですらもう彼女の一つの名前を知る事が出来なかったのなら、世界の外から来た魂が月島の能力を無効化した事に関係しているのではないかと、彼女はそう考えた。

「それだけ聞ければ十分よ。悪かったわね割り込んじゃって……続きをどうぞ?」

バンビエッタはそう告げながらさっさとその場を立ち去ろうとしたが、その前に檜佐木が彼女を呼び止めた。

「待ってくれ! 確か、藍染の奴が言ってたよな。貴女はこの世界の事を知識として知ってるって。それが本当なら……こいつが裏切った理由とかも知ってるんじゃないか?」

「なんだと……一体何の話をしてやがる……?」

檜佐木の発言に、銀城がやや険しい表情を浮かべて食って掛かる。しかし、檜佐木は

真剣な表情で彼女に質問をしていると、銀城は暫く考え込んだ後で小さくため息をついた。

銀城らには藍染という死神の事は分からないし、バンビエッタの事も詳しくは知らない。なので、檜佐木の言っている事を鵜呑みにする事は出来ないのだが、仮に真実だとしたら聞いてみる価値はあるだろう。

そう判断した銀城はバンビエッタの方へと視線を向けて、彼女の言葉を待つのであった。

番外編

カカオソサエティなんだが？

それは、特に何もない日のなんて事の無い昼下がりの出来事だった。

バンビエツタがいつもの様に地下の勉強部屋で修行していると、そこへ浦原が突如現れた。

「バンビエツタサン、ちよくとばかり付き合って欲しい事があるんですけど……良いっすかねえ」

「なによそのニヤケ面……アンタがそういう顔する時は大抵口クな事考えて無いのよねえ」

「まあまあそう言わずにく。アタシの新しい発明品のテストに付き合って欲しいんですよ」

「それが胡散臭いつてのよ。それにテストって言うけどね、そもそもあたしの力なんて必要じゃないでしょうが……」

浦原はまるで話を聞こうとしないバンビエツタに対し、ニヤニヤとした表情のまま押し問答を続けていた。二人はそれから数分程話を続けるも、浦原の企みを看破できない

バンビエツタは頭を抱える。

やがて根負けする形でバンビエツタは溜息を吐くと一先ずは聞くだけ聞いてやる、といった感じで腕組みをしながら返事をする。すると、浦原は相変わらずのニヤケた口調のまま地下へと降りて行ったので、バンビエツタも後に続いた。

やがて二人が辿り着いた場所にあつたのは、やや大きめの電子筐体の機械であつた。

「何これ……?」

「所謂シミュレーションポッドつすよ。ちよつとばかし特殊なAIが組み込んであつて、これ入り込めば好きな設定で再現された仮想世界を体験出来るっていうシロモノですが……まあ物は試してヤツです」

「本当に大丈夫な代物なんでしょうね……方が一に何かあつたら承知しないわよ?」

疑念の表情を浮かべながら、バンビエツタは浦原の事を睨みつける。だが浦原は相変わらずのニヤケ面を浮かべたまま話を聞き流し、早く入ってくれと促すだけだつた。

結局根負けする形でバンビエツタは筐体の中へと入って行き、シートに体を預ける。やがて蓋が閉まると、浦原は機材を操作しながら機械の動作確認を始めた。

「最初つから擬つた設定をしてもアレなんで、ランダムで始めさせていただきますね? ではポチつとな」

浦原が手元の装置でパネルを操作すると、バンビエツタの足元から幾何学模様の光が

広がって行く。やがてその輝きが増すに連れて、徐々に彼女の意識は薄れていった。

目を覚ますとバンビエツタは見知らぬ空間にいた。先程まで筐体のシートで寝転がっていたのだが、いつの間にか巨大な城が見える平原に立ち尽くしていたのだ。

当たりを見回してみると、遠くに山々が聳え立っているのが確認できる。更には鬱蒼とした森が遠くに見えたりと、大自然を感じさせる光景が広がっていた。

「へえ、えらく手が込んでるじゃない。で、どうやったらクリア……？というか終わるわけ？」

バンビエツタは戸惑うように眩やくと、目の前に半透明なウィンドウが突然開いた。そして表示された文字を見ると『メインミッションを全てクリアしてください』とだけ記されている。

まるでゲームの様な内容に呆れ顔を浮かべたが、メインミッションを全てクリアしてくださいとだけ言われても、具体出来な内容が何一つ分からない以上どうしようもない。

溜息を吐きつつもウィンドウに触れてみると、今度は『まずは城下町へ向かってみましょう』と新たな文が表示された。

「浦原が作っただけあってか、かなり胡散臭を感じるけど……とりあえず行ってみるか」恐らく城下町と言うのはあの遠くに見える城の事を指しているのだろう、という結論

に至ったバンビエッタは早速目的地に向かって歩き出す。数分程かけて巨大な城下町入り口の大扉に着くと、そこで立ち止まった。

門の前には兵士が複数人立っており、更には人や馬車が列をなして並んでいる。バンビエッタは何気なく最後尾に並ぶと、数分程待っているうちに列が動いた。

「チョコレート・グランプリの参加者の方ですか？ でしたら参加証をご提示下さい」

「いや、別に参加者では無いんですけど……」

「ふむ、では危険物がないかの確認が取れ次第お通ししますので、少々お待ち下さい」

そう言うバンビエッタの足元に魔法陣が出現し、そこから光が放たれて行く。それが全身をスキャンする物だと理解した彼女は、抵抗する事無くされるがままになった。

やがて光が収まり魔法陣が消えると、兵士は笑顔でバンビエッタの事を中へと通す。そのまま城下町に入ると大きな通り沿いに数多くの出店や店が並び、楽しそうな声や商品が客の目を引いていた。

「さて、城下町に着いたけれど……お次は如何すれば良いわけ？」

すると再びウィンドウが出現し『どうかしてチョコレート・グランプリの参加証を手に入れてください』と言った内容の文が表示される。

バンビエッタは『チョコレート・グランプリ』がメインミッションの一つだという事は理解したものの、参加証と言われても手に入れる手段が不明なために頭を抱えてしま

う。

とはいえ、ここまで来たのだから行動を起こさないとどうにもならないと開き直り、とりあえず歩き回って情報を収集してみる事にした。

すると――

「おいそこのお前え……！お前もしかしてチョコレート・グランプリの参加者じゃねえだろ？うなあ？」

「アンタは……！えつと……その、おお……おおまえ……なんたらちよ……？」

「俺様はマレチヨ！マレチヨ・ニツコウタロウエモン・ヨシアヤメノス――」

「長い!!そんなん覚えきれるか!!」

マレチヨと名乗る男は、どうみても大前田希千代にしか見えない外見だったが、死覇装ではなくド派手で趣味の悪い服を纏っていた。

元の大前田も金持ちのボンボンで、首や指には金色の悪趣味なネックレスや指輪を付けていたが、このマレチヨはその数かなり多くなっており、見るからに悪趣味な成金野郎といった風体だった。

更にサングラスまで掛けており、チンピラのようなファッションに磨きがかけられている。

「良いか良く聞け、お前みたいな奴に参加されたらなあ……俺様が優勝する確率が減つ

ちまうじやあねえか!!痛い目を見たくなきや、大人しく家に帰ってママの乳でも吸ってな!!」

「ハアツ!!さつきから何なのよアンタ!あたしの何が気に食わないってんのよ!このデブ!!ファッションセンスゼロ野郎!!」

「何イ!?!お前……俺様はデブじゃねえ!!ふくよかつて言うんだ!!それにファッションセンスも抜群に良いだろうが!!」

バンビエツタの発言に遂に怒りを抑え切れなくなったマレチヨは、顔を真っ赤にしながら怒鳴り散らした。どうやら本人はお世辞にもふくよかでは収まらない体型を気にしているらしく、それをバカにされると怒り狂う癖があったのだ。

実際マレチヨの体は贅肉だらけであり、どうみてもデブとしか形容できない体型ではあったのだが、次の瞬間には金色に輝く趣味の悪い剣をどこからともなく取り出し、次の瞬間にはバンビエツタの目の前まで迫っていた。

「なんだあ?この見た目から鈍足だつて判断でもしたのか!?!俺様は動きだつて超——」

「遅い」

「でぶぽおっ」

剣を振り下ろすよりも速く、バンビエツタの蹴りがマレチヨ肥えて太った腹を打ち抜

く。まるで大砲の弾丸の様な勢いで飛んだ彼は、そのまま壁に激突して地面に倒れ伏し、意識を失ってしまふ。

どうやらこっちのマレチヨも見た目以上に動けるようだが、それでもバンビエッタの足元にも及ばない速度だった。

「どれどれ、こいつもチョココレート・グランプリ参加者だつてんなら、参加証持つてるわよね」

そう言つてバンビエッタは、倒れたマレチヨに手を伸ばして懐を探つたが、何処にも参加証らしきものは見当たらなかつた。そもそも参加証がどういうものかは分からないうが、ウインドウがうんともすんとも言わないという事は持つていないのだろう。

持つていないにも拘わらず何故他の参加者への妨害行為を行つていたのか疑問に思つたが、直接聞いても分かる事はないと判断したバンビエッタはその場を後にする。

（相変わらずウインドウは『どうかしてチョココレート・グランプリの参加証を手に入れてください』としか表示しないし……そもそもチョココレート・グランプリつて何なのよ）
心の中で文句を言うバンビエッタは再びウインドウを開いて適当に操作し始めると、やがてウインドウの表示が変わりログアウト画面が表示される。

つまりシミュレーションを終了には、このログアウトをすれば良いらしい。そう思つたバンビエッタはウインドウのログアウト項目に触れて、一旦終了させようとする。

だが、次の瞬間には別のウィンドウが表示され、そこに表示された文字に目を見張った。

『メインミッションを全てクリアするまでは終了できません』

「あんのクソ浦原あー！余計な事してくれてんじやねえわよーっ！！戻ったら二度とニヤケ面できないようにしてやるわ!!!」

バンビエツタはそう叫ぶと、ログアウトを諦めウィンドウを消し、城下町で情報収集を始める事にする。とは言えど、むやみやたらに歩き回っても情報収集できるとは思えない。

こういう時は酒場で聞き込みをするのが定番なので、早速酒場へと向かう事にしたのだった。

カカオソサエティなんだが?②

酒場の場所が分からない為、適当な兵士に声をかけると案内を受ける事が出来た。

そうして辿り付いた酒場の扉を押し開けると、内装は酒場と言うよりはお洒落なバーとでも言った方がしっくり来る。そんな雰囲気を出していた。

酒場の中に居たのはバーテンダーと思われる男性一人きりだったが、それはXCUT IONの杓澤ギリコそのものであり、バンビエツタは思わず頭をか抱えたくなくなった。

(はあ……大前田がいたからもしかしてとは思ったけど、案の定なのね)

「ここは夜からの開店となっておりますが、何か御用ですか?」

「ええ、ちよつと聞きたいことがあってね。チョコレ——」

「よおじいさん! いい加減この店を手放す覚悟はできたかあ!?! ああん?」

バンビエツタの言葉を遮るようにして、二人の男が店に入ってくる。しかもその二人もバンビエツタの知っている人物と全く同じ顔をしており、思わず言葉を止めてしまった。

片方の男は班目一角であり、片方の男は獅子河原萌笑であった。何故本編で戦った者同士が一緒に居るのかと思っただが、浦原が「設定はランダム」と言っていたのでそうい

う事もあると割り切り、深く考えない事にした。

その二人はいかにもチンピラと言った衣服を身に着けており、殺気立ちながら酒場のマスターであるギリコに詰め寄って行く。

「いい加減この店を手放しちまえよ、誰も来ねえ店をいつまで守る意味もねえだろ？今までやってこれたのは誰のおかげと思ってるんだあ？ツキシマさんのおかげだろうが!!」

「はて、そのような方は存じ上げませんが。それよりも早くお引き取りください、何を言われようがこの店を手放す気はありませんよ」

「じいさんよお……どうやら痛い目にあわされねえと分からねえみてえだなあ！やっちまうぞシシガワラア!!」

まるで地上げ屋のような台詞を吐いたイツカクは、シシガワラと共にギリコに殴りかかろうと足に力を込める。バンビエツタはその様子をしばし静観していたが、ウインドウが開いて『ギリコ・クツザワの経営するバーを守ってください』との文字が表示されたのを見て、見過ごすわけにはいかなくなった。

彼女は勢いよく二人の頭を驚掴みにすると、そのままバーのカウンターに叩き付けて黙らせる。

「いつてえなクソが!!何なんだてめえは!?!俺達の邪魔をしやがって、ただで帰れると思うなよ!!ぶっ殺すぞコラアツ!!」

「はいはい、あたしが何処の誰かなんてどうでもいいでしょ?それよりも、そっちこそぶつ殺されたくなかつたらさっさとその馬鹿を連れて帰りなさいよ……このハゲ!!」

「ば、馬鹿……!?!兄貴!!こんな調子に乗った女ばぶべえ!?!」

「うっさい黙れボケナス!!」

激昂するシシガワラを一喝したバンビエツタは、そのまま顔面に拳を叩き込んで殴り飛ばす。更に続けてイツカクの腹に強烈な蹴りを入れると、体をくの字に曲げて悶絶した。

そして胸ぐらをつかんで無理やり起き上がらせると、強烈なピンタを何度も繰り出して吹き飛ばしてしまう。二人のチンピラに痛めつけた事で溜飲が下がったバンビエツタは、先程浦原にキレていた時に比べると、多少ではあるが表情が穏やかになっていた。

「ったく……シミュレーションとは言え流石に大人気なさすぎたかしら」

「こ、この……覚えてやがれよコラアツ!その面覚えたからな!!」

「あ、待つてくれよ兄貴く!!」

情けなく逃げ帰る二人の姿を見て鼻で笑ったバンビエツタは、改めてギリコへと視線を向ける。まさかあの二人のチンピラを退けてしまうとは思ひもなかったのか、目を丸くして驚いているように見えたが、すぐに冷静さを取り戻すと彼は静かに頭を下げた。

「ありがとうございます。あの二人のチンピラには困り果ててましてね、事あるごとにこの店を潰そうとしてくるのですよ」

「ふうん……それよりも、ちよつと聞きたいことがあるんだけど。チョコレート・グランプリってなんなのよ」

「それはこのカカオ城の女王様であるハリベル様が企画したイベントであり、参加者は己の全身全霊を持ってチョコレートを作り、グランプリを勝ち上がってハリベル様に認められれば褒美を与えられる……と言う物です」

「どうやらこのシミュレーションに登場する人物は、バンビエッタの知る人物からランダムに選ばれて登場しているようだ。それならハリベルが存在していても不思議ではないが、ランダムとは言え女王役なのは納得しかない。」

「バンビエッタはそんな事を考えながらウィンドウを開いたが、未だに『ギリコ・クツザワの経営するバーを守ってください』のままである。どうやら先ほどのチンピラ二人を追い返した程度ではダメらしく、そうなる何をするればクリアなのが分からず困ってしまう。」

「ねえ、さっきの二人って何処かの組織の人間だったり、誰かに雇われたとかそういう感じなの？」

「あの二人は確か……オオマエダ商会の雇われだった筈です」

オオマエダ商会とは、少し前に出会ったマレチヨがトップを務めている商会らしく、なんでもこの店を含むここ等一带を買収する事で、新たなオオマエダ商会の店を此処に建てつもりなのだそうだ。

そんな商会のトップがなぜグランプリ参加者の妨害なんかしていたのは不明だが、その商会をどうにかしない限り『バーを守る』というミッションはクリアにはならないのだろう。

「そのオオマエダ商会の本部……的な建物はどこにあるのかしら」

「東第二地区の商業地帯にありますよ。悪趣味な見た目をしておりますので、すぐに分かるかと」

そう説明を受けたバンビエツタは、ギリコに見せてもらった地図を頼りにしてオオマエダ商会の本部へと歩を進める。目的地がある東第二地区の商業地帯の大通りには、色とりどりの絵が描かれた看板をぶら下げた店が幾つも存在しており、とても賑々しくも怪し気な空気を漂わせている場所だった。

街並みは中世のファンタジー系の舞台になっているようで、レンガ造りや石造りの街並みに心躍らされるものの、ランダム設定になっている為か所々にミスマッチな看板や建物が存在しているのはご愛嬌だろう。

そんな通りを歩きながら、バンビエツタは目的の建物を探していたのだが、そんな彼

女に対して声が投げかけられる。

「アンタか、オオマエダ商会のトップをぶっ飛ばした女ってのは」

「……それが何だつてのよ」

バンビエッタはその声に反応して振り返ると、そこに立っていたのは銀城空吾だった。この世界風に言うのなら彼はクウゴ・ギンジョウとなるだろう。

そんな彼は黒色の如何にもナイトと言った格好をしており、背中に巨大な剣を背負う姿はまるでファンタジー世界の騎士そのものだ。そんな銀城はゆっくりと歩きながらバンビエッタへと歩み寄り、呆れた顔をしながら彼女を見下ろした。

「あんたに恨みはねえが、これも仕事なんで……恨むんなら自分の不幸を恨めよ」

「はいそうですか……なんて大人しく言う事を聞くと思ってたんの？」

バンビエッタが嘲笑すると、ギンジョウは背中に背負った大剣を抜こうとして彼女に襲いかかる。どうやら彼は銀城の戦闘能力をそのまま反映させている様で、凄まじい速度と力強さを兼ね備えた一撃を繰り出してきた。

だが、バンビエッタはその動きを見切り身を翻すと、強烈な蹴りを打ち込んだ。しかしギンジョウもその蹴りを避けると、突き抜けるような速さで大剣を振り上げて来る。

「ぐっ！」

ギンジョウの放った渾身の斬撃を、バンビエッタは片腕で受け止める。しかし剣圧に

耐え切れず腕が切り裂かれてしまい、血が噴き出してしまった。思わず苦痛に顔を歪めるが、すかさず隙が出来たギンジョウの横つ面を蹴り飛ばす。

(そういえば、このシミュレーションってあたし自身の本来の力って使えるの? ランダム設定だからって、使えないなんて事はないわよね……)

それを考えた時、バンビエツタはすぐに思考を切り替えて血装を発動させてみる事にする。どやら問題なく発動が出来たようで、速血装を発動すると一瞬のうちにギンジョウの背後へと回り、霊子の剣を叩きつける。

しかし、やはりギンジョウはそれを大剣で受け止めると、凄まじい勢いで押し返して来る。だが、バンビエツタは直ぐに動血装へと切り替えると、逆に押し返して行く。

「へえ、面白い能力使うじゃねえか」

「めんどくさいわね……こっちはアンタの相手をしてやれるほど暇じゃないってのに！」

そう叫ぶと同時に、バンビエツタはギンジョウへと熱線を放って動きを牽制する。しかしそれは上空へと弾き飛ばされて消えてしまい、返す刃で大剣が振りかぶられる。

バンビエツタは静血装へと切り替えると、その大剣を手で受け止め、もう片方の手で顔を殴りつける。そして腹に蹴りを入れて吹き飛ばすと、彼は建物の壁を粉碎してその瓦礫に埋もれてしまうのだった。

カカオソサエテイなんだが？③

ギンジョウは瓦礫を蹴り飛ばしながらゆっくりと起き上がり、衣服についた砂埃を払い落とす。その様子を見て、バンビエツタは思わず舌打ちしてしまった。

対するギンジョウも、思っていた以上にバンビエツタが強かった事に驚きつつも、見た目で判断してしまった事を反省しながら改めて構えなおす。

今この場に居るのは、実力のある二人だった。バンビエツタもギンジョウも本気でやればこの一帯を吹き飛ばすだけの力を持っている為、互いの出方を探りながら睨み合っている。

(所詮シミュレーションだから此処に居る人間はNPC……だけど、巻き込んだ場合のメインミッションへ影響は？クリアに差支えがあるなら、極力被害は出さない方が得策よね)

このシミュレーションはメインミッションのクリアだけでなく、ゲームオーバーとなっても終了するのは分かっている。

だが、もしゲームオーバーで終了した場合、浦原が「あれえ？バンビエツタさん、この程度のシミュレーションもクリアできなかつたんスか？」と煽られそうなので、どう

せならクリアしてから浦原の顔面に拳をぶち込んでやりたかった。

そう考えたバンビエツタは、ギンジヨウをなるべく街や人に被害が出ないように倒してしまおうと考えを改める。

「まったく……あのバーの問題を早く解決したいつてのに、こんな所で時間食ってられないつてのに」

「おい、お前……もしかしてそのバーつてのは、ギリコのおっさんがやつてるバーの事じゃねえだろな」

「そうだけど、だから何だつてのよ」

するとギンジヨウは何かを考えだす様にして黙り込むと、頭を掻いたり溜息を吐き出したりしてしばらく悩むと、何かを決めたような顔つきへと変わった。

そして「話を聞かせろ」とギンジヨウが言い出したので、バンビエツタとりあえずバーでの出来事を彼へと話し出す。一通りの話を聞いたギンジヨウは何か納得すると、大剣を背中に担ぎなおした。

「まったく……あのオオマエダの豚野郎、あのバーにまで手をだそうとしてやがったのか。成金野郎がふざけやがって……!」

「えつと……?」

「ああ……あのバーは俺の行きつけでな、そんな場所を潰されたんじやたまったもん

じゃねえ」

どうやら彼はカカオ城のカカオ騎士団の一員であり、オオマエダがバンビエツタから暴行を受けたと情報を受けて彼女の前に現れたらしい。

實際腹に蹴りを入れたので文句は言えないが、ギンジョウからするとそんな事よりもバーを潰される事の方が重大なようだ。

「ふうん……ああそれと、あの豚野郎はどうにもグランプリ参加者の妨害もしてるっぽいわよ？」

「なんだと……？ルール上他の参加者への妨害行為は禁止されてる筈だが……しやあねえ、バーの件を問い質すついでにそっちも調べねえとな」

ギンジョウは頭を抱えながら言うと、大剣を担ぐとバンビエツタと共にオオマエダ商会の本部へと歩を向けた。

彼の案内についていくと、しばらくして目的地の建物へと到着する。その建物は非常に派手な色合いをしており、何とも悪趣味な装飾品で飾り付けられている。

門の前にはチンピラのような風体の者達がたむろしており、ギンジョウとバンビエツタを睨みつけている。

「なんだあ……テーマエ……」

「カカオ騎士団の騎士様がこんな所に何の用なんですかあ……？ああん!」

「お前等みたいな雑魚に用はねえよ。選びな、道を空けるかくたばるか」

ギンジョウは大剣を地面に突き刺すと、挑発するような口調でチンピラ達に喧嘩を売りに始めた。その言葉を聞いたチンピラ達は青筋を立てると、二人を取り囲む用に立ちはだかる。どうやら大人しく道を空けるような輩ではないようだ。

なのでギンジョウは深くため息を吐くと、次の瞬間には一人のチンピラの腹に深々と蹴りがめり込んでいた。他のチンピラ達を巻き込みながら吹き飛んで行き、壁に叩きつけられると床に伏した。

「退かねえって事はくたばりたいって事だよな?なら望み通りにしてやるよ!!」

「ああ……もう!……こんなチンピラ共が大人しく道を空けるわけないでしょうが!!」

バンビエツタは手から雷撃を迸らせると、それをチンピラの一人へと目がけて繰り出す。直撃したチンピラは全身を帯電させ、その周囲のチンピラ達に次々と電流が移って行く。

ギンジョウも大剣でチンピラ共を薙ぎ払って行き、チンピラ共が宙を舞って行く。その光景に怯えつつ逃げだそうとしても、ギンジョウによって次々と気絶させられてしまい、瞬く間に全滅させてしまうのだった。

これで邪魔者はいなくなつた事を確認すると、ギンジョウは大剣で門を叩き壊し、門番達を牽制して道を空けさせると悠々と中に入る。バンビエツタも仕方なくそれに続

き建物の中へと入って行く。

「多分、この建物の中にもチンピラ共がうじゃうじゃしてやがるだろうな」
「めんどくさいわねえ……まあ、片っ端からぶちのめしてけばいいでしょ」

二人はオオマエダ商会の本部の建物に入ると、中をぐるりと見渡してみる。床には真つ赤な絨毯が敷き詰められており、壁には煌びやかな装飾品が施されている。その悪趣味な雰囲気はバンビエッタには非常に不愉快で、正直長居したくはない場所だった。

そして案の定内部にもチンピラ共がたむろしていたようで、ギンジョウとバンビエッタの姿を目の当たりにして、一斉に襲い掛かってきた。だが、ギンジョウは剣を素早く振り下ろすと一瞬にしてチンピラ共を蹴散らした。

「鬱陶しい!! 邪魔すんじゃねえ!!」

「ぎやあああああああ!!」

「まるでチンピラのバーゲンセールね……うざったい事この上ないわ!」

大剣を振るうギンジョウに対して、チンピラ達は銃を撃つのだが、バンビエッタの放った雷撃に全て相殺されてしまい効果はない。それを見たチンピラ達は慌てて逃げ出す者も現れるが、容赦なくぶちのめされると積み重なって行くだけだった。

しかしバンビエッタにとってはいくら蹴散らそうと、次から次へと出て来るチンピラ共は片付けてもキリが無く、次第に苛立つてきてきていた。

「ザッケンナコラー!」

「本当にウザいわね、一体どんだけいるってのよ……」

「スツゾコラー!」

「上等じゃねえか……まとめて吹き飛びやがれ!!」

ギンジョウはそう言いながら大剣を振り回すと、霊圧が刃のように迸りチンピラ共を吹き飛ばして行く。それでも逃げ出さなかった一部のチンピラ達は、バンビエッタの雷撃で吹き飛んでいった。

そうしてしばらく戦って行くと、徐々に勢いが衰え始めたのかチンピラ共は数を減らしていく。どうやらギンジョウとバンビエッタに恐れをなして逃げ出したようだ。

「何逃げようとしてんだテメエ等!!逃げようとした奴は俺がぶつ殺すぞ!!」

「そ、そんな事言ってもイツカクさん!!アイツ等異常ですよ!」

「よお……またあつたな女。バーの時は油断したけど、今度はそうは行かねえからな!!」
「何熱くなつてんのよ、鬱陶しいわね……」

バーの時に対峙したイツカクとシシガワラが再び現れたようで、二人の手にはメリケンサックが装備されている。ギンジョウはそんな二人を睨みつけながら、大剣を構える。

そしてイツカクとシシガワラが同時に襲い掛かって来ると、ギンジョウは大剣を横に

振り払って攻撃を弾く。そこへバンビエッタが水槍を放つのだが、二人はそれを回避しギンジョウへと再び殴りかかって行く。

「只のチンピラにしてはなかなかやるじゃねえか……!」

「そういうテメエはどうだあ!?! カカオ騎士団つてのはその程度のもんかよ!?!」

「おらあ!! よそ見してんじや——」

「あんたの相手はあたしだつての!!」

バンビエッタはそう言いながらシシガワラ目掛けて大量の矢を連射する。それは壁や床に着弾し、爆発を起こしていくのだが、シシガワラは素早い動きで隣の部屋に逃げ込んで行く。その後を追う様にしてバンビエッタが移動し、奥の部屋へと入って行く。

だが、シシガワラは待ち伏せしていたようでバンビエッタに攻撃を仕掛けるが、その一発を受け止めて電撃を迸らせる。

「あばばばばばばばばば!?!」

「あつぶな……完現術まで再現されてたら、普通にあたしの方がぶつ飛んでたかもしれないわね」

すると、壁を粉々に粉砕しながらイツカクが吹き飛んで来た。どうやらギンジョウが吹き飛ばしたようだ。彼は大剣を肩に担ぎ、余裕の表情を浮かべている。

イツカクは鼻血を垂らしながら起き上がると、再びバンビエッタへと殴りかかるのだ

が、氷の矢を連射して足を凍らせて動きを封じる。

「守つたら負ける……攻めろ!! シシガワラ!!」

「あ、兄貴……! そんな事言われても動けないっすよ!？」

「時間が惜しいからさっさと済ませるわよ」

バンビエツタはそう言いながら片手を前に突き出すと、二人目掛けて雷撃を迸らせる。すると二人は全身を痙攣させながら倒れ込んでしまったので、完全に気絶してしまつたようだ。

二人が気絶したのを確認すると、再び上の階へと目指して行くのだった。やがて他の扉より一段と豪華な扉を発見すると、それをギンジョウが蹴り飛ばして中へと入って行く。

中には優雅にワインを飲むオオマエダが居たのだが、扉が蹴り破られた音に驚いてグラスを落とし、二人の事を見て青褪めた顔を浮かべるのだった。

カカオソサエテイなんだが？④

ギンジョウが大剣を振り下ろし床に叩き付けると大きな亀裂が走り、オオマエダは椅子から転げ落ちてしまう。そんな彼の事を見下しながらギンジョウは鼻で笑いつつ、剣先を喉元へと突きつける。

「おい、豚野郎……ギリコのおっさんのバーを潰すってのはどういう見だ？」

「な、なななな……何だ？この野郎！俺様を誰だと思ってるやがる！！俺様はマレチ——」

「ふざけた事ばかりごちゃごちゃとぬかして……斬り落とすぞ」

「そうよこの豚野郎！！ふざけた事ばかり言ってる……磨り潰すわよ？」

ギンジョウとバンビエツタの言葉を受けたオオマエダは怯えきった表情を浮かべながら後ずさり、尚も弁明を続けようとする。どうやらまだ自分の置かれた立場が分かっていない様だ。

そんな様子に二人は呆れかえりながらため息を吐くのだが、彼は勘違いをしたよう自分で圧倒的優位の立ち位置に居ると信じ切っている様子だった。

「良いかお前等！！俺様はこの界限を仕切るマレチヨ様だ！この俺様の機嫌を損ねてタダ

で済むと思うなよ!」

「ああん? お前自分の立場つてのが分かってねえみてえだな」

「立場だとお!! この俺様がお前等如きに屈するわけねえだろうが!! 冗談はその面だけにしとくんだな!!」

どうやらオオマエダは自分がこの一帯を仕切る程力のある存在だと思っっているようで、二人に威勢よく啖呵を切ると身を屈めた。確かにこの一帯の商業はオオマエダ商會が取り仕切っており、彼が強い権力を持っているのは事実だった。

だが、それは女王の統治があつてこそのもので、彼個人では特段優れているという物ではなかった。だが、彼は自らの力を過信しているせいか、自分が絶対的優位に立っていると勘違いしている様だ。

「そうだそうだ! おい女!! お前は二度とチョコレート・グランプリに出場できないよう、俺様が主催者側に話をつけてやる!!」

「うっげえ……マジで最悪のボンボンっぷりだわ。冗談はその醜く太りきつた豚腹だけにしときなさいよ……」

「いやお前……女王様がそんな話聞くと思つてんのかよ、マジで頭大丈夫か?」

完全に頭がイカれているのか女王の権力を舐め切っており、あまつさえ大会の主催者側に圧力をかけようとまで言ってくる始末。二人はそんな彼対して冷ややかな視線を

向けるのだが、彼のニヤケ面には変化が無かった。

「どうやら本当に自分の意見が通らないとは思っていないようだ。二人がそんな様子に呆れていると、誰かが部屋に入って来る気配がしたので警戒し、そちらに視線を向ける。」

「そうだ！お前等土下座しろ！！土下座して許しを乞えば、俺様の気が変わるかも——」
「止めてくださいお兄様！マレヨはそんな事でグランプリに勝っても嬉しくはありません！」

「ま、マレヨ!?お、お前なんで此処に……!?」

部屋に入って来た少女はオオマエダに抱き着くと、涙をボロボロ流しながら彼を説得し始める。どうやらこの少女がマレチヨの妹であり、一連の事件の原因となったオオマエダの妹だったようだ。

なんでも出場者に圧力をかけまくっていたのは、妹であるマレヨが勝ち残れるようにするためであり、ただの兄馬鹿の所業だったようだ。

まさかこんな事になるとは思っていなかったのか、ギンジヨウとバンビエツタは唾然とした様子で固まっているが、すぐに状況を把握すると深いため息を吐いた。

「ふーん……そんな事ばかりするお兄様は嫌いです!!」

「お、おま……マ、マレヨ……?」

「嫌われるのが嫌だったら、参加者に嫌がらせをするのを止めてください! あ、それとあのバーを取り壊すのも無しですよ? あの一体に住む人たちを追い出して、どうするおつもりなんですか!」

「い、いやあ……その、それは……えっとお……」

マレチヨの言葉にオオマエダは言葉を詰まらせ、顔色を真っ青にしながら冷や汗を流している。まさか妹にこんな形で止められるとは思ってもみなかったのだろう。そしてそんなマレチヨはギンジョウとバンビエッタの方へと視線を向けて来るのだが、二人は何も言わずに肩をすくめるだけだった。

結局オオマエダ商会のトップであるマレチヨは、妹に嫌われるのが嫌で圧力をかける事もバーを取り壊す事も出来なくなり、ギリコのバーも存続が決定した。

「まあ、なんにせよ……これで無事解決って事か? ったく、妹の為にだけにあそこまでするのは……人騒がせな話だぜ」

「ほんと、自分勝手な奴よね……もうちょつと周りへの迷惑を考えなさいよ」

「おっと、そういうアంతはグランプリに出場をするんだったな。ほらよ、参加証だ」

ギンジョウはそう言いながらバンビエッタにバッジを渡し、バンビエッタはそれを受け取るとマジマジと見つめる。参加証には小さくではあるがカカオの絵が描かれており、デザインも中々に洒落ている。

そのバッジを良く見るとところに付けておくのが参加者としての証明になるようで、バンビエツタは胸元にそれを付けた。

そんなこんなでオオマエダ商会での問題を解決した後、バンビエツタはギンジョウと別れてカカオ城へと向かって歩き出した。というのも、ウインドウに『カカオ城へと向かってください』というメッセージが表示されていたからだ。

一体どういう事なのだろうかと思いつながら、バンビエツタは指示通りにカカオ城へと足を向ける。すると、暫くしてからカカオ城の入り口らしき場所へと辿り着いた。

「チヨコレート・グランプリの参加者の方ですね？どうぞこのまま進んで行き、会場へお入りください」

入り口で見張りをしていた兵士に促されるままに、バンビエツタは城内へと入って行く。城内には大量の人が行き交っており、あちらこちらにグランプリの参加者の姿が見受けられた。

カカオ城に来たのは参加者だけではなく、豪華絢爛な服装に身を包んだ貴族達も来ているようだ。どうやら参加者でなくてもこのグランプリを見学する事は出来る様で、一般人と思しき人物も何人か混じっている。

「参加される皆様はコチラで受付をお願いします！」

「まもなく受付が終了します！受付がまだの方はお急ぎください！」

受付と思しき場所の傍にはスタツフと思われる衣装を着た女性達が待機しており、参加の手續きを済ませる事が出来るようだ。バンビエツタも受付を済ませるためにその場所へ向かうと、そこでは参加賞やグランプリの概要について説明を受けていた。

このカカオ城で行われるグランプリはグループごとに競われるようで、予選では上位数名だけが勝ち上がる事が許される。そしてその上位数名のみが決勝へ進み、最後に行われる女王のジャッヅでグランプリで優勝を決めるといふ仕組みになっている。

「では、こちらの服に御着替えになってから会場へと移動してください」

説明を終えると参加者達は更衣室へと案内され、そこでグランプリ用の衣装に着替えるように指示をされる。バンビエツタは言われるがままに更衣室へ入って行くと、用意されていた衣装へと袖を通す。

それはパテシエが着る服のというよりは、カフェの女性店員が着るような可愛い感じの衣装であり、どこことなくチョコレートを思わせるような色合いを基調としている。バンビエツタはその服を身に纏うと、鏡で自分の姿を改めて確認をする。

スカートにはフリルがあしらわれており、赤色をメインとした靴は先が丸まった可愛いらしいデザインだ。足首の辺りにハート形のワンポイントが施されており、二の腕には

シユシユが付けられている。だが、肩と脇が出ているのでスースーして少々落ち着かない。

そうして着替え終えたバンビエツタは髪を後ろで纏めてポニーテールにすると、更衣室を出て会場へと向かい、参加者が集う大ホールへと入って行った。

（ふうん……参加者って全員女性なのね。つて、何であたし以外の参加者は普通の恰好をしているの!?)

会場に入るとバンビエツタ以外の参加者は皆、白色のシンプルなパテシエが着る服を身に纏っており、バンビエツタだけが違う衣装を身に纏っていた。だが、特に何かを言われる事も無いし、変だとも思われていないようなのでこのままでいる事にした。

すると、二階の方から女王であるハリベルが姿を現すのが見えた。肩周りには黒いファーが付いており、ブラウン色のドレスを身に纏っている。そのドレスにはハートの様にも見える紋様が描かれており、腕には網目のオペラグローブをしているようだ。

そのドレスは特に左サイドががら空きであり、口元を隠すフェイスベールが妖艶な雰囲気を醸し出していた。

「よく集まってくれた、チョココレート・グランプリに参加する乙女達よ。これより第108回チョココレート・グランプリの開始を宣言する!」

女王は良く通る声で参加者達にそう告げると、可愛らしい笑顔を浮かべて話し続け

る。だがその言葉から察するに彼女は毎年このグランプリに参加しているという事なのだろうか。

そんな事をバンビエッタが考えていると、更にハリベルの三人の従属官が前に出る。どうやらこの世界ではハリベルの近衛騎士のようであり、皆女騎士という出で立ちだった。

すると、その内の一人であるアパッチが口を開く。

「良いか、良く聞けよお前等！ 予選で最初にやってもらおう事は、カカオを持つてくる事だ！ 手段は問わねえから、精々良いのを持つて来いよ！」

そして更にスンスンが口を挟んだ。

「一定時間内に持つてこれなかつたらその時点で脱落……さあ、合図とともにスタートだから、精々頑張つて頂戴」

そして最後にミラ・ローズがスタートの号令を掛けると、参加者達が一齐に会場から駆け出していく。このグランプリに優勝すれば女王様から直々に褒賞を賜れるというのだから、彼女達からすれば是が非でも優勝したい所だろう。

そして、その背中を見送ったハリベルは玉座に座ると、肘掛けに頬杖をついて楽しそうに笑うのであった。

カカオソサエテイなんだが？⑤

こうして、ついにカカオ城でのチョココレート・グランプリが始まった。参加者たちは思い思いの場所へと赴くと、早速カカオを調達すべく行動を開始した。

アパッチが言っていたように手段を問わないとするのであれば、店で買っても良いし自生しているのを採取しても良いという事になる。参加者は城下町のあちらこちらでカカオを手に入れようと奔走していた。

(お店から買うにしてもお金が……お金？あたしお金もって……ない!?)

バンビエツタは自分がこの世界の通貨を持っていない事に気が付き、途方に暮れてしまふ。ウインドウをあちこち弄ってみても、何処にも金銭に関する情報が載っていないのだ。

今からお金を稼ぐとしてもそんな時間など何処にも有りはしないし、他の参加者から奪うのは妨害行為になるので失格になるだろう。

何か良い手は無いかと考えていると、一つのアイデアが頭に浮かんだ。

「一先ずギリコのバーに行ってみるか……もしかしたら置いてあるかも知れないし」
バンビエツタはギリコのバーに向かうと、店内に入るとすぐさまカウンターにいる彼

に事情を話し、カカオを置いてないか訊ねる事にした。だが「余っておりません」と、あつけなく断られてしまった。

やはり都合よくはいかないかと落胆していると、ギリコは店の奥から何かを持ち出して来た。それはこのカカオ城周辺の地図であり、ギリコはバンビエツタにそれを差し出すと説明を始めた。

「此処から南に下つて行くと、広大な森林地帯になっております。その森の中には特別なカカオの生息地がありますので、そちらに行つてみては如何でしょう? 此処からかなり距離がありますので、時間内には戻つてこれないかもしれませんが」

確かにギリコの言う通り、この城下町からカカオの生息地まではかなりの距離があり、今から向かつたとしても大会が始まるまでに戻つて来れる保証はない。だがそれでもバンビエツタは可能性があるので承諾し、すぐさま森林地帯へと向かう事にした。

そうしてバンビエツタは、先ず速血装を発動させて移動速度を上昇させると、そのまま完聖体を発動させて勢いよく飛んで行つた。まさかこんな事に完聖体を使う事になるとは思つてもみなかつたが、メインミッションを全てクリアするためなのだから致し方ないだろう。

バンビエツタは森林地帯の上空を飛んで行くと、あつという間に目的地に辿り着い

た。そこには人の手が加わっていないようで木々が生い茂り、奥に行くにつれて光があまり届かないので薄暗い雰囲気を感じ出している。

バンビエツタは森の中に足を踏み入れると、早速カカオを探すために探索を開始する事にした。周囲を見回しながら奥へ奥へと進んで行くが、それらしいカカオを見つけない事が出来ない。

どうしようかと悩んでいると突然背後から襲われ、バンビエツタは咄嗟に霊子の剣を構えて振り返る。するとそこにはリリネットが立つており、彼女は警戒する様にバンビエツタの事を睨んでいた。

「何だお前ー!!人間がこんな所になんの用だー!!」

「いや、別に……カカオを採りに来たんだけだけど……」

「はあ!?!そんなウソで騙されぬぞ!人間は悪い奴!!ぶっ壊してやる!!」

リリネットはそう言いながら口を大きく開けると、虚閃をバンビエツタに向けて撃ち放った。だがそれを霊子の剣で弾き飛ばしてやると、虚閃は遠くの方で炸裂して眩い光を放っていた。

それに対して驚いた表情を見せたりリリネットであったが、すぐに正気に戻るとバンビエツタを睨み付ける。すると更に虚閃を連射するのだが、バンビエツタは冷静にそれを全て切り払っていく。

そして霊子の剣を構え直すと、そのまま一気にリリネットの目の前まで距離を詰める
と、勢いをそのままに彼女に向かって斬撃とうとする。

「ひえ……!?!」

「……」

頭を抱えて蹲るリリネットに、バンビエツタは思わずため息をこぼしながら霊子の剣
を消していく。すると、いつまで経つても霊子の剣が迫つてこない事に違和感を感じた
のか、リリネットは恐る恐る顔を上げる。

そしてどういう訳かドヤ顔し始めたので、バンビエツタは思わず拳を振り上げた。す
ると彼女は再び頭を抱えてその場に蹲り、それを見たバンビエツタは再びため息をこぼ
して言う。

「何なのよアンタ、この程度でビビるくせに何で虚閃とか撃つて来たの……?」

「ビビってねーし!!あたしがビビった証拠でもあんのかよ!!」

「めんどくさい奴ねえ……こっちはカカオ探さなきゃいけないのに、アンタに構つ
てる暇は無いの」

「な、なんだよお前……なんでカカオなんか探してんだ」

リリネットはそう言うのと、怪訝そうな顔でバンビエツタを見る。その視線を鬱陶しく
思いながらも頷くと、彼女は更に胡散臭そうに目を細めるのであった。だが此処でウダ

ウダやっついても埒が明かないので、バンビエツタは再びカカオを探し始める事にした。

バンビエツタは呆れた様に言うと、リリネットに背を向けて歩き出した。だがそれを見た彼女は再び虚閃を撃ち放つて来たので、またしても同じ様に弾くと飛廉脚を使つて一気に距離を縮める。

そしてそのまま脳天目掛けて拳を振り下ろすと、リリネットは殴られた箇所を押さえて痛みに悶え始める。ただ殴つただけではなく、動血装も使つて殴つたので相当痛いのであろう。

「アンタ……もしかしてカカオが何処にあるか知ってるんじゃないの？」

「知らねーし！もし知つても……誰がお前なんか……！」

痛みで目に涙を浮かべながらも虚勢を張るリリネットに対し、バンビエツタはため息を吐いて頭を掻いた。そして徐に霊子の剣を出すと、それをチラつかせて言う。

「ほらほら、案内しないと……ね？」

「わ、分かつたよ……！案内すりゃいいんだろ！」

圧倒的な実力差を見せ付けられたリリネットは、バンビエツタにそう答えると森の奥へと進んで行く。そんな情けない彼女の後に続き、バンビエツタも森の奥地へと進んで行った。

そして暫く進むとリリネットが案内してくれたのだろう、カカオの生息地であろう場所に到着した。だがそこにあったのはあまりにも巨大すぎる大樹であり、天を衝く様に広がるその幹には空を覆う程伸びた枝葉が茂っていた。

そして、その幹にはやはり巨大なカカオが実っており、その数は恐らく千は有に超えているであろう。その大きさと量を目にしたバンビエツタは思わず感嘆の声を漏らす程だった。

「さて……チンタラしてられる程時間は無いし、ちやつちやと採取しないとね」

そう言つてバンビエツタはカカオに向かつて飛んで行き、手近な物から採取し始める。だが、あまりにも巨大すぎるカカオをどうやって持ち帰ろうか頭を悩ませた。

一先ずウインドウを開いて操作していくと、アイテムのインベントリ欄に巨大なカカオが格納されていく。これでカカオは手に入ったので、このままカカオ城まで戻るだけだ。

バンビエツタは再び速血装を使い、完聖体を発動させると全速力でカカオ城に向かつて飛んで行った。そしてものの数分で城下町まで戻つて来ると、そのまま城内に飛び込み会場まで戻つて行く。

「へえ……今回は結構戻つて来てるわね」

近衛騎士の一人であるミラ・ローズが会場内を歩き回りながらそんな事を呟く。そし

て、参加者たちが持つて来たカカオを回収していくのだが、バンビエツタが持つて来た巨大なカカオを見て驚愕する。

この城からその巨大カカオが有る場所まではかなりの距離がある筈だが、それを短時間で持つて帰ってきた事が非常に驚きであるようだ。

やがて回収されたカカオは城にある特殊な倉庫へと運ばれていき、大切に保管される事になった。

「はい、時間切れですわ。今この場に居ない方は失格ですの……スタツフさん？ そのように通達を」

スンスンがスタツフへと指示を飛ばすと、その兵士は早速参加者達に向けて通達を送る。制限時間内にカカオを持ち帰る事が出来なかった者たちは、失格と定められていたので仕方のない事だろう。

それからしばらくすると、残った参加者の元へと焙煎されたカカオが次々と運ばれて来た。いきなり生のカカオを集めさせてどうするつもりだと思つたが、それらは全て別の用途に使用されるらしい。

流石にグランプリに使用する物は既に発酵も焙煎も済んでいる物であり、今度こそチョコレート作りがスタートする事になった。

「こつちも当然制限時間アリだからな、時間切れにならねえように気を付けて作れよ！」

「あなた達みたいなた素人には期待してませんが……精々頑張ってくださいね」

アパッチとスンスンにそう言われると、参加者たちは一斉に用意された機材へと群がって行く。皆は予選を通過できるチョコレートを作る事が出来るのだろうかと不安がっている様だが、バンビエツタはそんな事を一切考えず、ひたすらカカオの皮を?いて行くのだった。

カカオソサエテイなんだが？⑥

皮をむき終えたバンビエツタは、見た事も無い謎の機材を使ってカカオを磨り潰して行く。その謎の機材がカカオを磨り潰す速度は凄まじく早く、それを使いこなせるかが勝利の決め手になりそうだ。

だがその謎の機材はどうやら霊圧によって動くらしく、しかも丁度いい霊圧でなければ作動しなかったり暴走したりする代物のようだ。

「きゃあ!!飛び散っちゃった!!」

「動け!!動けってんだよこのポンコツ!!」

案の定暴走させて磨り潰したカカオを飛び散らせてしまう者がいたり、なんとか起動させようするも上手くいかない者もいた。バンビエツタは危なげなく作動させているが、周囲の参加者達はそうでは無く四苦八苦している。

しかし、あちこちから悲鳴が上がったり愚痴がこぼれたりし、阿鼻叫喚の有様になっている会場内で、バンビエツタはただ一人冷静に黙々と作業を進めていく。

「この道具凄いわね、磨り潰す速度が段違いよ……ちよつと扱いづらいけれど」

そんな事を呟きながら、バンビエツタはひたすらカカオを磨り潰している。よく見る

とバンビエツタと同じように機材をうまく扱えている参加者もいる様で、その内の一人は雛森とまったく同じ姿をしていた。

そのヒナモリは何かを呟きながら、真剣な表情で作業に没頭している。それはまるで何かに憑りつかれたかのようにでもあり、不気味な雰囲気を漂わせていた。

「待つててねシロちゃん……うふ、うふふふ……!」

ヒナモリは独り言を呟きながら、ひたすらカカオを磨り潰している。その異様な光景に、周囲に居た参加者達はドン引きしていた。

それから暫くしてバンビエツタはカカオをある程度磨り潰した後、ペースト状になったそれにココアバターや砂糖を混ぜて馴染ませて行く。そこから更に別の機械を使って、磨り潰す様に混ぜ合わせて行くのだが、どうやらその機材も霊圧を籠めなければ上手く作動しないようだ。

参加者の中には未だにコツを掴めずに悪戦苦闘する者や、諦めて脱落する者もいた。だがそんな中でもバンビエツタは至って冷静で、黙々と作業を進めていくのであった。すると……

「おいテメエ!! 一体何を混ぜてんだあ!! そんなもん提供した材料の中には無かっただろうが!!」

「ち、違います!! これはその……! とにかく違うんです!!」

「何が違うと言うんだ!!お前は失格とする!!」

どう言う訳かヒナモリは用意されたものではない謎の粉を混ぜ込んでいたようであり、それがアパッチとミラ・ローズに見つかって失格を言い渡される。彼女は最後まで無実を訴え続け、結局聞き入れてもらえずに会場の外へと連れ出されて行った。

一体何を混ぜ込んでいたのだろうかと疑問だが、そんな事よりも今は自身のチョコレートを完成させる方が先決であろう。バンビエッタはヒナモリを一瞥すると、すぐに作業に戻った。

すると……

「ふふふ……コレを混ぜればヨルイチ様も……!」

「あらあら……貴女もですか? 一体貴女たちは何のためにグランプリに参加したんですのよ……」

どうやら他の参加者にも先ほどのヒナモリと同様の不屈き者がいたようだ。しかも、その者は碎蜂と同じ姿をしており、ヒナモリ同様に失格を言い渡されて不満そうな表情をしている。

そのまま会場の外へと連れて行かれるのだが、そんな彼女は「放せ!!私はフォン・シャオリンだぞ!!」と言って暴れていた。だが、そんな彼女の叫びは誰にも聞き届けられない事は無かった。

(うわあ……いくらランダムだからってアレは無いわあ……)

シミュレーションのランダム設定からああいう風になってしまったのだろうか、流石にバンビエツタもドン引きしてしまった。思わず苦い顔をしてしまうが、それでも自分の作業に集中する事にした。

ようやくいい感じの滑らかさに仕上がったため、バンビエツタは一息吐くと次の作業へと移って行く。次の機材は冷やす用だったが、それを使うよりも自らの力で冷気を放出した方が早いと判断したバンビエツタは、型に流し込んだチョコレートに冷気を放出させた。

すると、みるみる内にチョコレートが固まっていき、あっという間に完成してしまつた。

「よし、とりあえずはこんなもんかしらね」

完成したチョコレートを見て満足げに頷くバンビエツタ。後は終了時間まで待つのだが、完成した参加者達は皆自信ありげに微笑んでいる。

そして開始から3時間が経ち、終了を告げる鐘の音が鳴り響いた。作られたチョコレートは次々と回収されていき、厳正な審査をした上でグランプリの決勝に進む者が決定する。

「ふむ……これはどうなんだ?」

「駄目ですわね……配分が全然ダメです」

「お………これなんかいいんじゃないかねえか？」

と、三人の近衛騎士と大勢のスタツフが参加者達から集められたチョコレートを審査していた。全員が厳しい顔つきで食べ比べており、かなり真剣に吟味しているようだ。その様子を見ている参加者たちは、自分のチョコレートは大丈夫なのか不安に思いながら見守っている。

そして一通り審査が済んだのか、審査していたスタツフ達が結果を発表していき、上位に入った数名が決勝への切符を手に入れる事となった。当然その中にはバンビエツタも含まれており、これでメインミツシヨンのクリアに一步近づいた事になる。

「休憩を挟んだのちに決勝戦を始める。各々きちんと体を休めておくように」

それから数時間後、休憩を終えた参加者たちは再び会場集合していた。いよいよグラプリの決勝が始まるようで、会場内はすっかり盛り上がっている。

そんな中で決勝の内容が発表されるのだが、その内容は至ってシンプルであり、制限時間内にチョコレートを使用したスイーツを一品仕上げる事だった。味は当然の事ながら見た目も審査対象になるので、如何に見た目良く綺麗に仕上げられるかも重要になるだろう。

すると、またもや二階にハリベルが姿を現し、参加者たちに激励の言葉を送った。

「皆、予選では良く頑張ってくれた。決勝は審査員もより厳しくなるが、各々自らの持つ技術を遺憾なく発揮し、最高の一品を作って欲しい」

そしていよいよ決勝戦開始の合図が鳴らされると、参加者達は一齐に調理スペースへと駆け出した。制限時間は予選と同じく三時間であり、それまでに最高のスイーツを作り上げる必要が有る。

決勝に進めた者は僅か十名であり、皆それぞれに緊張の面持ちで調理の準備を進めていく。大量の材料が並べられたスペースで、参加者は材料を手に取りながら何を作ろうか考えていた。

だが、ここで悩んで無駄に時間を使う訳にもいかなないので、バンビエツタはチョコレートケーキを作る事にした。

「材料はこれとこれ……後これを……」

1つ1つの材料を確認しながら、バンビエツタは手際良く必要な分量を量り取り調理用の容器に入れて行く。その動作には一切の無駄が無く、傍から見ていると彼女の周りだけ時間の流れが違うのではないかと錯覚するほどだった。

そしてオーブンを予熱し終わると、すぐさま作業に取り掛かった。まずはスポンジを作るために必要な才良を、手際よく入れていき混ぜ合わせる。それを型に入れたらすぐさまオーブンの中へ入れて焼き上げた。

それを35分ほど焼い分ほど焼い終えると、型から取り出して冷やす。そして次はチョコレートクリームを作っていく。

「何ていう手際なの……!?!」

「私だつて負けるもんですか!!」

「何としても優勝するんだから!!」

参加者たちはバンビエッタの手際を見て奮起したのか、自分も負けていられないとばかりに手際よく作業をしていく。ある者はケーキを焼き、またある者はパフェを作っている。中にはタルトなどを作る者もいるようだ。

バンビエッタはチョコレートクリームを作ると、並行して作っていた苺のピューレと合わせてケーキを仕上げる。

「よし!!出来たわ!!」

バンビエッタは自分が作り上げたチョコスイーツを見て満足そうに微笑む。スポンジは三層に分かれており、一番下がプレーン、真ん中がココア、一番上がチョコレートとなっている。

当然の如くチョコレートクリームで綺麗にコーティングされているのだが、実はその層の境目には苺のピューレが挟まっている。

そして一番上はホイップクリームで縁どられており、苺がふんだんに乗せられて苺の

ピューレが掛けられている。

「そこまで!!時間切れだ!!」

そうこうしているうちに終了の時間が訪れたが、どうやらバンビエッタを含む住人の参加者全員が完成させる事が出来たようで、どれもこれもが素晴らしい出来栄のスイーツばかりである。

そしていよいよ女王であるハリベルの厳正な審査がスタートし、参加者達は固唾を飲んで彼女の言葉を待つ。

「ふむ、最初のはコレか……見た目は悪くないが、どれ」

ハリベルはそう言って最初のスイーツを口に入れると、暫く味わう様に舌の上で転がしていた。そして味わい終わったのか、静かに咀嚼して飲み込んでいく。それを十人分も繰り返すと、ハリベルは満足そうに微笑む。

それから暫く考え込む様にして瞑目していたハリベルだが、徐に目を開けて審査結果を発表した。

「うむ、優勝者はバンビエッタとする!!非常に素晴らしいチョコレートケーキだった。他の者も素晴らしいスイーツではあったのだが、彼女の作ったスイーツには及ばなかったな」

ハリベルはそう言うのと優勝者であるバンビエッタに拍手を送り、参加者達もそれに

做って盛大な拍手を彼女に送る。そして会場内からも歓声が上がリ、優勝したバンビエツタに祝福の言葉が飛び交う。

そしてそのまま優勝賞品の授与へと移る事となった。

「見事優勝した其方には、この誉れある崩玉が授けよう。心して受け取るが良い」

「ほ、ほうぎよ……!?はあ、ありがとうございます……」

まさかシミュレーションとは言え崩玉が出て来るとは思わず、バンビエツタは間の抜けた声を上げてしまった。そしてその崩玉を受け取ると『メインミツションをすべてクリアしました、おめでとうございます』と表示されたウインドウが出て来る。

すると、次の瞬間には視界が暗転していき、再び現実世界へと意識が戻って行く。

「お疲れ様でしたバンビエツタさん。どうでしたか?アタシの作ったシミュレーションポッドは……」

ポッドの蓋が開くと、浦原が笑みを浮かべながら声を掛けて来る。それに対してバンビエツタは、間髪入れずに顔面へと拳を叩きつけようとしたのだが、流石と言うべきかあつさりと躲されてしまった。

怒りから思わず舌打ちしてしまうバンビエツタであったが、カプセルから出ると再び浦原へと殴り掛かる。

「あんたのせいで大変な目に合ったわよ!!絶対にぶっ飛ばしてやるから覚悟しなさい

!!

「ぼ、暴力反対!!暴力はよくないっスよバンビエッタさん!!」

こうして、浦原の作った訳の分からないシミュレーションポッドによる謎の実験は、先ず終わり、バンビエッタは苦労しただけで特に何も得る事無く終わった。

その後もバンビエッタは定期的に浦原の作った謎すぎるシミュレーションポッドに放り込まれる事になるのだが、それはまた別のお話である。